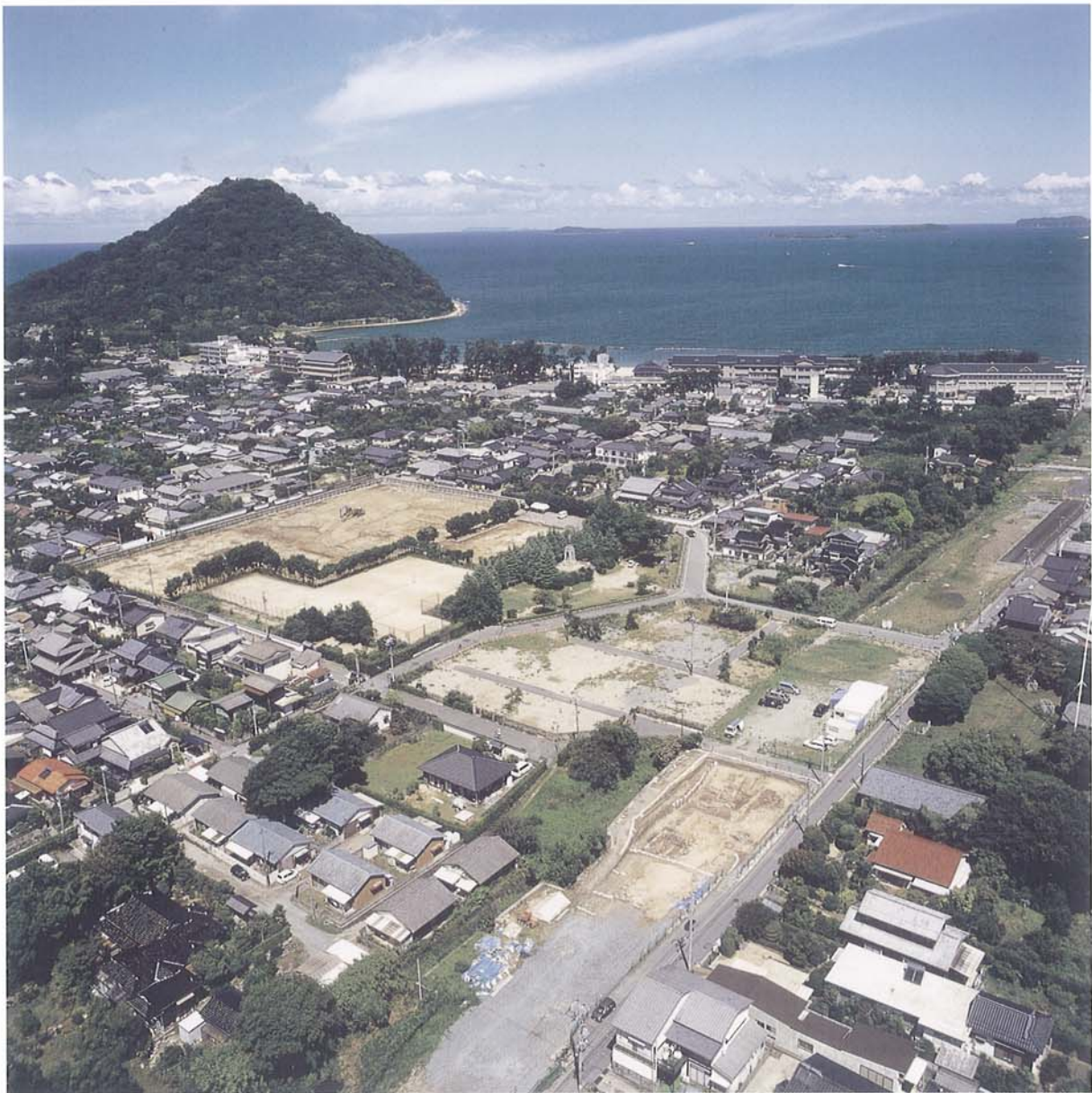


萩^{はぎ}城^{じょう}跡^{せき} (外^{そと}堀^{ほり}地^ち区^く) I

2002

財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター

巻頭カラー



調査区上空より堀内を望む

序

本書は、山口県の委託を受けて財団法人山口県教育財団が実施した、都市計画街路今魚店金谷線緊急地方道路整備工事に伴う萩城跡（外堀地区）の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する萩市は毛利の城下町として、また明治維新発祥の地として全国的にも知られ、市内には往時のようすを今に伝える史跡や建造物が数多く残っています。このような歴史豊かな町並の中で行われた発掘調査では、萩城外堀とその堀端につくられた町屋跡が掘り出され、陶磁器をはじめ人々の暮らしぶりをしめす数多くの生活道具が出土しました。県内における江戸時代遺跡の本格的な調査であり、毛利の城下町の歴史に新たな1ページを書き加えるものとして注目されます。

このような調査記録を収録した本書が、学術研究のみでなく、文化財への理解や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

最後に、調査の実施にあたってご協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年 3月

財団法人山口県教育財団
理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、山口県萩市北片河町、南片河町に所在する萩城跡（外堀地区）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は都市計画街路今魚店金谷線緊急地方道路整備工事に伴い、財団法人山口県教育財団が山口県の委託を受け、実施したものである。
- 3 本書は平成9年度から12年度までのうち1～3地区の調査についてまとめた報告書である。なお遺物については土坑出土の遺物を中心に掲載し、焼土層、整地層から出土した遺物については次報告に掲載する予定である。
- 4 調査組織は次のとおりである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当

平成9年度 指導主事 谷口哲一 林信行 井川隆司 吉野祥子

平成10年度 指導主事 谷口哲一 鈴木卓 井川隆司 藤川貴和 村崎賢一 福本和久
吉本裕文

平成11年度 指導主事 谷口哲一 井川隆司 網本徳文 吉武裕文 内山雅司
調査研究員 小南裕一

平成12年度 指導主事 井川隆司 上田俊宏 内富徳哉 松浦孝和 谷口哲一
調査研究員 小南裕一
調査員 小林善也

報告書作成担当

平成13年度 指導主事 谷口哲一 井川隆司 内富徳哉

資料整理担当 長沼昭乃 則近和佳代 新谷量子 渡辺裕美 田村美子 岸野祐子 吉本敦子
(平成9年～13年度)
服部仁江 海永友乃 柳井真理子 中村ちはる 弘中陽子 石津智恵
軒万利子 末富佳子 福田圭菜枝

- 5 調査に当たっては、山口県教育委員会、山口県萩土木建築事務所、萩市教育委員会並びに地元関係各位の協力、援助を得た。
- 6 本書の第1、2、228図は萩市提供の地図を複製使用したものである。
- 7 本書に掲載した絵図は次のとおりである。また掲載した絵図の写真は萩市郷土博物館提供のものを使用した。

第2図 「慶安5年絵図」 山口県文書館蔵

第227図 「慶安5年絵図」(部分) 山口県文書館蔵

「天和元、2年絵図」(部分) 羽仁家蔵

「寛保2年～延享4年絵図」(部分) 萩市郷土博物館蔵

- 8 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）で示し、標高は海拔標高（m）である。
- 9 本書に使用した土色、遺物の色調は下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』 1997

- 10 図版中の遺物番号は実測図の遺物番号と対応する。

11 本書に使用した遺構略号は次のとおりである。

SK：土坑 SD：溝状遺構 SF：石囲い遺構・石積み遺構

SX：不明遺構・地下室など SE：井戸

12 出土人骨については、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム館長 松下孝幸氏に鑑定を依頼し、その成果を付編として掲載した。

13 出土遺物については下記の方々や機関から御教示、御指導を得た。記して謝意を表します。

(敬称略)

- ・墨書木製品の解説 八木 充 (京都学園大学) 吉積久年 (山口県教育庁)
樋口尚樹 (萩市郷土博物館) 山口県文書館
- ・陶磁器 大橋康二 (佐賀県立九州陶磁文化館)
上田秀夫 (山口県立萩美術館・浦上記念館)
- ・下駄 市田京子 (日本はきもの博物館)
- ・石材鑑定 (表面観察) 亀谷 敦 (山口県立博物館)
- ・焼塩壺 渡辺誠 (名古屋大学) 小川 望 (小平市教育委員会)
- ・化粧道具 村田孝子 (ポーラ文化研究所)

14 本書に掲載した遺構図面・写真、遺物実測図は調査担当者が分担し、遺物写真は井川、内富が撮影した。本書の編集は谷口が行い、Ⅲ-1-(4)を井川、内富が、他は谷口が執筆した。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
	1 位置と環境	1
	2 萩城外堀の歴史	4
II	調査の経緯と概要	5
III	調査の成果	9
	1 遺構	9
	(1) 平成9年度の調査	9
	(2) 平成10年度の調査	25
	(3) 平成11年度の調査	53
	(4) 平成12年度の調査	67
	2 遺物	89
	(1) 土器・陶磁器・土製品	89
	(2) 石製品	232
	(3) 木製品	236
	(4) 金属製品	267
	(5) 骨角製品	276
	(6) ガラス製品	277
	(7) 自然遺物	278
IV	まとめ	279
	1 遺構について	279
	2 遺物について	282
付編	山口県萩市萩城跡（外堀地区）出土の近世人骨	287

図 版 目 次

巻頭カラー図版 調査区上空から堀内を望む

- 図版 1 上、下：1-A～I区空中写真
図版 2 上：1-A～I区全景 下：1-E～H区
図版 3 1地区1面 1-F区1面 排水溝60 1-A・B区2・3面 1-C区2・3面
1-D区2・3面 1-B～D区2・3面 1-B区2・3面
図版 4 1-C区3面礎石群と石段 石垣43 1-C区2面石列56 1-C区石垣40 石垣28
1-H区礎石160 1-G区石垣52
図版 5 集石107 石列159 石垣130東半 石垣130西半 1-H・I区4面石列 1-G区4面石列
1-F区4面礎石 1-F・G区礎石列
図版 6 SK111 SK68 SK149 SK149土層断面 SK49 SK109・111 SK123 SK128・139
図版 7 SK92 SK80 SK80木製品出土状況 1-C区礎石群とST114 ST114 1-H区鯨骨出土状況
図版 8 埋甕3 埋甕82 埋甕98 埋甕96 埋甕15 埋甕110 埋甕8 埋甕124
図版 9 埋甕79 埋甕12 SF16 SF103 SF42 SF69 瓦列54 瓦溜61
図版 10 SE18 SE38 SE23 SE19 SE24 SE25
図版 11 上：1-J～Q区空中写真 下：1-J～Q区全景
図版 12 1-J～L区2・3面 1-L～N区2・3面 1-M～O区2・3面 1-J～Q区2・3面
1-K区石垣52 石垣305 SK293 石列307
図版 13 SX292 SX292瓦積状況 SX314 1-N区石垣305・309 1-J～L区4面 1-J・K区4面
1-M区石垣327 1-L区石垣328
図版 14 SF253 SF273 SF304 SK278 1-J・K区2面 SK277 SK281 SK306
図版 15 SK280 SK278・296、SX292 SK293遺物出土状況①② SE200 SE201 SE202 SE203
図版 16 SE204 SE205 SE229 SE209 埋甕205 埋甕210 埋甕206 埋甕248
図版 17 埋甕252 埋甕208 埋甕320 埋鉢224 1-O区外堀傾斜面 現道トレンチ土層断面
図版 18 上：2地区空中写真 下：2地区全景
図版 19 2地区1面 2-C区1面集石遺構 2-A・B区1面排水溝14 2-H・I区2面
2-F・G区2面 2-C・D区2面 2-E・F区2面 2-A～C区2面
図版 20 SX46 SX47 2-A区石垣13 2-A区3面 2-A・B区3面 2-A・B区 かまど67
図版 21 2-A～D区3面 2-A・B区3面 2-C区3面 石垣58・65、SK79 石垣66・63
SK79 2-B区第1焼土層下織部向付
図版 22 SK25 SK70・72・73 2-B区トレンチ土層断面 2-A区焼土層堆積状況
2-F区焼土層堆積状況 2-G区焼土層堆積状況 2-H区焼土層堆積状況 2-I区焼土層堆積状況
図版 23 SE1 SE6 SE4 SE57 SE53 SE53底面 SE76 SE81
図版 24 埋甕80 埋甕40 埋甕16 埋甕5 埋甕3 埋甕48 埋甕12 胞衣埋納遺構2
図版 25 上：1-X～A区 下：1-X～A区
図版 26 1-X～A区1面 1面石列505 1-Z・A区2面 1-Y～A区2面
1-Z・A区2・3面 1-X～A区2面 1-Z・A区3面 1-X～Z区4面
図版 27 石垣507と外堀傾斜面 1-X区外堀傾斜面 1-X・Y区 石垣507 石垣500
1-X区石段 1-A区石垣535・石段536
図版 28 かまど510～512 かまど510～512・517・518 かまど510 かまど511・512 かまど517
かまど518 SK521 SK516
図版 29 SK544 SK549 SK532 SK556 SK555 SK555木製品出土状況
1-A区石製播鉢出土状況 埋甕514
図版 30 SE504 SE502・503 SE501 埋甕522 埋甕515
図版 31 調査前 1・2面 3面 3面下 SK402 埋甕404 SK401 調査後
図版 32 上：3地区全景(空中写真) 下：3地区全景(空中写真)
図版 33 上：3-D・E区1・2面 下：3-A～E区2面
図版 34 上：3-A～E区3面以下 下：3-A～L区3面以下全景
図版 35 石垣15東半・石段 3-A区2面 3-F区2面 建物基礎154 建物基礎155 建物基礎156
3-A区3面 3-B区3面
図版 36 3-D区3面と焼土層の広がり 石垣7(3-A区) 石垣7(3-B区) 石垣60 石垣65
石垣148 石垣7と石段(3-B区) 3-B区石垣7以東焼土層堆積状況
図版 37 3-B区石垣7裏込焼土層堆積状況 3-C区石垣7直下炭化部材出土状況 石垣41・54
3-B区3面以下 石垣166・167 石垣164・165 石列141 石垣147
図版 38 3-A区外堀傾斜面 石垣55北半 3-G区2面 石垣59 3-I区2・3面 3-K区3面以下
石垣142 石垣143
図版 39 SK136 SK131 SK91 SK92と瓦列 SX96 SX138 SX149 SE163(SK131下部)
図版 40 SE6 SE45 SE29 SE36 SE62 SE107 SE122埋土堆積状況 SE122
図版 41 埋甕1 埋甕22 埋甕32 埋甕40 埋甕46・47 埋甕97 埋甕103 埋甕108
図版 42 埋甕117 埋甕134 SX160(木枠) SX161(木桶) SX162(木桶) SX93
SX157(粘土土坑) SX42
図版 43 胞衣埋納遺構3 26 34 48 50 51 52 58
図版 44 胞衣埋納遺構85 95 115 118 119・120 121 118～121 120下部
図版 45 かまど33 かまど84 かまど158 かまど84・158 かまど43 かまど67 かまど71 かまど72
図版 46 かまど43・44・67・72 かまど64 かまど73 かまど81 かまど83 かまど81・83 かまど100

图版 47 1-SK49①
 图版 48 1-SK49② 1-SK80①
 图版 49 1-SK80② 1-SK92①
 图版 50 1-SK92②
 图版 51 1-SK92③
 图版 52 1-SK92④
 图版 53 1-SK92⑤
 图版 54 1-SK92⑥ 1-SK109①
 图版 55 1-SK109②
 图版 56 1-SK109③
 图版 57 1-SK109④ 1-SK111①
 图版 58 1-SK111②
 图版 59 1-SK111③
 图版 60 1-SK111④ 1-SK128
 图版 61 1-SK139①
 图版 62 1-SK139②
 图版 63 1-SK139③
 图版 64 1-SK139④
 图版 65 1-SK139⑤
 图版 66 1-SK139⑥
 图版 67 1-SK142①
 图版 68 1-SK142②
 图版 69 1-SK142③ 1-SK143①
 图版 70 1-SK143② 1-SK145①
 图版 71 1-SK145②
 图版 72 1-SK152①
 图版 73 1-SK152②
 图版 74 1-SK149①
 图版 75 1-SK149②
 图版 76 1-SK149③ SK68 1-H区鲸骨包含层①
 图版 77 1-H区鲸骨包含层② 1-C区石段整地层①
 图版 78 1-C区石段整地层②
 图版 79 1-SX314 1-SK276①
 图版 80 1-SK276②
 图版 81 1-SK276③
 图版 82 1-SK276④
 图版 83 1-SK276⑤ 1-SK277①
 图版 84 1-SK277②
 图版 85 1-SK277③
 图版 86 1-SK277④
 图版 87 1-SK277⑤
 图版 88 1-SK277⑥
 图版 89 1-SK277⑦
 图版 90 1-SK277⑧
 图版 91 1-SK277⑨
 图版 92 1-SK277⑩
 图版 93 1-SK278①
 图版 94 1-SK278②
 图版 95 1-SK280
 图版 96 1-SK281①
 图版 97 1-SK281②
 图版 98 1-SK281③ 1-SK293①
 图版 99 1-SK293②
 图版 100 1-SK293③
 图版 101 1-SK293④
 图版 102 1-SK293⑤
 图版 103 1-SK293⑥
 图版 104 1-SK293⑦
 图版 105 1-SK293⑧
 图版 106 1-SK293⑨
 图版 107 1-SK293⑩
 图版 108 1-SK293⑪
 图版 109 1-SK306①
 图版 110 1-SK306②
 图版 111 1-SK306③ 1-SX292
 图版 112 1-SK555①

図版 113 1-SK555②
 図版 114 1-SK555③
 図版 115 1-SK555④ 埋甕・かまど内出土遺物
 図版 116 1-SK516①
 図版 117 1-SK516② 1-SK532①
 図版 118 1-SK532②
 図版 119 1-SK532③
 図版 120 1-SK532④
 図版 121 1-SK532⑤
 図版 122 1-SK534①
 図版 123 1-SK534② 1-SK556①
 図版 124 1-SK556②
 図版 125 1-SK556③ 1地区北端区①
 図版 126 1地区北端区②
 図版 127 1地区北端区③
 図版 128 2-SK25 2-SX46①
 図版 129 2-SX46②
 図版 130 2-SX46③
 図版 131 2-SX46④ 2-SX47①
 図版 132 2-SX47② 2-SK72
 図版 133 2-SK79
 図版 134 3-SK136①
 図版 135 3-SK136②
 図版 136 3-SK136③
 図版 137 3-SK136④ 3-SX96①
 図版 138 3-SX96② 3-かまど33 3-かまど84
 図版 139 埋甕①
 図版 140 埋甕②
 図版 141 埋甕③
 図版 142 埋甕④
 図版 143 埋甕⑤
 図版 144 胞衣埋納容器
 図版 145 石製品①
 図版 146 石製品②
 図版 147 木製品①
 図版 148 木製品②
 図版 149 木製品③
 図版 150 木製品④
 図版 151 木製品⑤
 図版 152 木製品⑥
 図版 153 木製品⑦
 図版 154 木製品⑧
 図版 155 木製品⑨
 図版 156 木製品⑩
 図版 157 木製品⑪
 図版 158 木製品⑫
 図版 159 木製品⑬
 図版 160 木製品⑭
 図版 161 木製品⑮
 図版 162 木製品⑯
 図版 163 木製品⑰
 図版 164 木製品⑱
 図版 165 金属製品①
 図版 166 金属製品②
 図版 167 金属製品③
 図版 168 金属製品④ 骨角製品 ガラス製品 基石
 図版 169 出土銭①
 図版 170 出土銭②

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第 2 図	慶安 5 年絵図（山口県文書館蔵）	3
第 3 図	調査範囲図	6
第 4 図	1-A～I 区遺構配置図①	11・12
第 5 図	1-A～I 区遺構配置図②	11・12
第 6 図	1-A～I 区遺構配置図③	13・14
第 7 図	1-B～H 区断面模式図	13・14
第 8 図	1 地区石垣立面実測図①	15・16
第 9 図	1 地区石垣立面実測図②	17
第 10 図	1 地区 SF 実測図①	18
第 11 図	1 地区 SK 実測図①	19
第 12 図	1 地区 SK 実測図②	20
第 13 図	1 地区 SE 実測図①	21
第 14 図	1 地区埋甕実測図①	22
第 15 図	1 地区埋甕実測図②	23
第 16 図	1-ST114 実測図	24
第 17 図	1 地区土層断面図	26
第 18 図	1-J～Q 区遺構配置図①	27・28
第 19 図	1-J～Q 区遺構配置図②	27・28
第 20 図	1-J～Q 区遺構配置図③	29・30
第 21 図	1-J～Q 区断面模式図	29・30
第 22 図	1 地区石垣立面実測図③	31・32
第 23 図	1-SX314 実測図	33
第 24 図	1-SX292 実測図	34
第 25 図	1 地区 SF 実測図②	34
第 26 図	1 地区 SK 実測図③	35
第 27 図	1 地区 SK 実測図④	36
第 28 図	1 地区 SE 実測図②	37
第 29 図	1 地区埋甕・埋鉢実測図③	39
第 30 図	現道トレンチ実測図	40
第 31 図	2 地区断面模式図	41
第 32 図	2-かまど67 実測図	42
第 33 図	2-胞衣埋納遺構 2 実測図	42
第 34 図	2 地区遺構配置図①	43・44
第 35 図	2 地区遺構配置図②	43・44
第 36 図	2 地区遺構配置図③	45・46
第 37 図	2 地区土層断面図	45・46
第 38 図	2 地区石垣立面実測図	47・48
第 39 図	2 地区 SK 実測図	49
第 40 図	2-SE81 実測図	49
第 41 図	2 地区 SE 実測図①	50
第 42 図	2 地区 SE 実測図②	51
第 43 図	2 地区埋甕実測図	52
第 44 図	1-X 区土層断面図	54
第 45 図	1-X～A 区断面模式図	54
第 46 図	1-X～A 区遺構配置図①	55
第 47 図	1-X～A 区遺構配置図②	56
第 48 図	1-A 区実測図	57
第 49 図	1-石垣507 実測図	57
第 50 図	1 地区かまど実測図	58
第 51 図	1 地区 SK 実測図⑤	59
第 52 図	1 地区 SK 実測図⑥	60
第 53 図	1 地区 SE 実測図③	61
第 54 図	1 地区 SE 実測図④	62
第 55 図	1 地区 SE 実測図⑤	63
第 56 図	1 地区埋甕実測図④	63
第 57 図	1 地区北端区断面模式図	64

第 58 図	1 地区北端区遺構配置図	65
第 59 図	1 地区北端区石列・SK・埋堯実測図	66
第 60 図	3 地区土層断面図①	71
第 61 図	3 地区遺構配置図①	73・74
第 62 図	3 地区遺構配置図②	73・74
第 63 図	3 地区遺構配置図③	75・76
第 64 図	3 地区東西断面模式図①	75・76
第 65 図	3 地区東西断面模式図②	75・76
第 66 図	3 地区東西断面模式図③	75・76
第 67 図	3 地区土層断面図②	75・76
第 68 図	3 地区石垣立面実測図①	77・78
第 69 図	3 地区石垣立面実測図②	79
第 70 図	3 地区建物基礎実測図	80
第 71 図	3 地区かまど実測図①	81
第 72 図	3 地区かまど実測図②	82
第 73 図	3 地区胞衣埋納遺構実測図①	83
第 74 図	3 地区胞衣埋納遺構実測図②	83
第 75 図	3 地区 SK 実測図	84
第 76 図	3-SX96実測図	84
第 77 図	3-SX157・93実測図	85
第 78 図	3 地区 SE 実測図①	86
第 79 図	3 地区 SE 実測図②	87
第 80 図	3 地区埋堯実測図	88
第 81 図	1-SK49出土遺物①	90
第 82 図	1-SK49出土遺物②	91
第 83 図	1-SK80出土遺物	92
第 84 図	1-SK92出土遺物①	93
第 85 図	1-SK92出土遺物②	94
第 86 図	1-SK92出土遺物③	95
第 87 図	1-SK92出土遺物④	96
第 88 図	1-SK92出土遺物⑤	97
第 89 図	1-SK109出土遺物①	99
第 90 図	1-SK109出土遺物②	100
第 91 図	1-SK111出土遺物①	101
第 92 図	1-SK111出土遺物②	102
第 93 図	1-SK128出土遺物	103
第 94 図	1-SK139出土遺物①	104
第 95 図	1-SK139出土遺物②	105
第 96 図	1-SK139出土遺物③	106
第 97 図	1-SK139出土遺物④	107
第 98 図	1-SK139出土遺物⑤	108
第 99 図	1-SK149出土遺物①	110
第 100 図	1-SK149出土遺物②	111
第 101 図	1-SK142出土遺物①	112
第 102 図	1-SK142出土遺物②	113
第 103 図	1-SK142出土遺物③	114
第 104 図	1-SK143出土遺物	115
第 105 図	1-SK145出土遺物①	116
第 106 図	1-SK145出土遺物②	117
第 107 図	1-SK68出土遺物	117
第 108 図	1-SK152出土遺物①	118
第 109 図	1-SK152出土遺物②	119
第 110 図	1-H 区鯨骨包含層出土遺物	120
第 111 図	1-C 区石段整地層出土遺物①	121
第 112 図	1-C 区石段整地層出土遺物②	122
第 113 図	1-SX314出土遺物	123
第 114 図	1-SK276出土遺物①	124
第 115 図	1-SK276出土遺物②	125
第 116 図	1-SK276出土遺物③	126

第 117 図	1-SK276出土遺物④	127
第 118 図	1-SK276出土遺物⑤	128
第 119 図	1-SK280出土遺物	130
第 120 図	1-SK281出土遺物①	131
第 121 図	1-SK281出土遺物②	132
第 122 図	1-SK281出土遺物③	133
第 123 図	1-SK306出土遺物①	135
第 124 図	1-SK306出土遺物②	136
第 125 図	1-SK278出土遺物①	137
第 126 図	1-SK278出土遺物②	138
第 127 図	1-SK277出土遺物①	139
第 128 図	1-SK277出土遺物②	140
第 129 図	1-SK277出土遺物③	141
第 130 図	1-SK277出土遺物④	142
第 131 図	1-SK277出土遺物⑤	143
第 132 図	1-SK277出土遺物⑥	144
第 133 図	1-SK277出土遺物⑦	145
第 134 図	1-SK277出土遺物⑧	146
第 135 図	1-SK277出土遺物⑨	147
第 136 図	1-SK277出土遺物⑩	148
第 137 図	1-SK293出土遺物①	150
第 138 図	1-SK293出土遺物②	151
第 139 図	1-SK293出土遺物③	152
第 140 図	1-SK293出土遺物④	153
第 141 図	1-SK293出土遺物⑤	154
第 142 図	1-SK293出土遺物⑥	155
第 143 図	1-SK293出土遺物⑦	156
第 144 図	1-SK293出土遺物⑧	157
第 145 図	1-SK293出土遺物⑨	158
第 146 図	1-SK293出土遺物⑩	159
第 147 図	1-SK293出土遺物⑪	160
第 148 図	1-SK293出土遺物⑫	161
第 149 図	1-SK293出土遺物⑬	162
第 150 図	1-SX292出土遺物	163
第 151 図	1地区埋甕・かまど内出土遺物①	164
第 152 図	1地区埋甕・かまど内出土遺物②	165
第 153 図	1-SK516出土遺物①	166
第 154 図	1-SK516出土遺物②	167
第 155 図	1-SK555出土遺物①	168
第 156 図	1-SK555出土遺物②	169
第 157 図	1-SK555出土遺物③	170
第 158 図	1-SK555出土遺物④	171
第 159 図	1-SK534出土遺物①	173
第 160 図	1-SK534出土遺物②	174
第 161 図	1-SK556出土遺物①	175
第 162 図	1-SK556出土遺物②	176
第 163 図	1-SK556出土遺物③	177
第 164 図	1-SK532出土遺物①	178
第 165 図	1-SK532出土遺物②	179
第 166 図	1-SK532出土遺物③	180
第 167 図	1-SK532出土遺物④	181
第 168 図	1-SK532出土遺物⑤	182
第 169 図	1地区北端区出土遺物①	183
第 170 図	1地区北端区出土遺物②	184
第 171 図	2-SK25出土遺物	206
第 172 図	2-SX46出土遺物①	207
第 173 図	2-SX46出土遺物②	208
第 174 図	2-SX46出土遺物③	209
第 175 図	2-SX47出土遺物	211

第 176 図	2-SK72出土遺物	212
第 177 図	2-SK79出土遺物	213
第 178 図	3-SK136出土遺物①	217
第 179 図	3-SK136出土遺物②	218
第 180 図	3-SK136出土遺物③	219
第 181 図	3-SX96出土遺物	220
第 182 図	3-かまど84出土遺物	221
第 183 図	3-かまど33出土遺物	221
第 184 図	埋甕①	224
第 185 図	埋甕②	225
第 186 図	埋甕③	226
第 187 図	埋甕④	227
第 188 図	胞衣埋納容器①	229
第 189 図	胞衣埋納容器②	230
第 190 図	胞衣埋納容器③	231
第 191 図	硯①	233
第 192 図	硯②	234
第 193 図	砥石・石鉢	234
第 194 図	基石	235
第 195 図	1-SK80出土木製品①	237
第 196 図	1-SK80出土木製品②	238
第 197 図	1-SK92出土木製品①	239
第 198 図	1-SK92出土木製品②	240
第 199 図	1-SK92出土木製品③	241
第 200 図	2地区出土木製品	241
第 201 図	1-SK277出土木製品①	242
第 202 図	1-SK277出土木製品②	243
第 203 図	1-SK277出土木製品③	244
第 204 図	1-SK293出土木製品①	245
第 205 図	1-SK293出土木製品②	246
第 206 図	1-SK293出土木製品③	247
第 207 図	1-SK532出土木製品①	249
第 208 図	1-SK532出土木製品②	250
第 209 図	1-SK532③・550出土木製品	251
第 210 図	1-SK555出土木製品①	252
第 211 図	1-SK555出土木製品②	253
第 212 図	1-SK555出土木製品③	254
第 213 図	1-SK555出土木製品④	255
第 214 図	1-SK549出土木製品	256
第 215 図	3地区出土木製品	256
第 216 図	墨書木製品①	261
第 217 図	墨書木製品②	262
第 218 図	墨書木製品③	263
第 219 図	墨書木製品④	264
第 220 図	煙管	267
第 221 図	金属製品①	269
第 222 図	金属製品②	270
第 223 図	金属製品③	270
第 224 図	出土銭グラフ	272
第 225 図	骨角製品	276
第 226 図	ガラス製品	277
第 227 図	絵図に見る外堀の変遷	280
第 228 図	町割推定図	283・284

I 遺跡の位置と環境

1 位置と環境

萩市は山口県の北中央部に位置する。北を日本海に面し、他の三方を標高400m級の山々が連なる中、県下第2の河川である阿武川が河口付近で松本川、橋本川に分流しながら日本海に注ぐ。市の中心はこの松本川と橋本川にはさまれて広がる萩三角州であり、萩低地とも呼ばれ、面積は約15k㎡である。低地の平均高度2m。三角州の北半は幅0.7km、東西の長さ4.5kmに及ぶ広大な砂堆が広がり、寺院が多い古萩と呼ばれる地区が最も高く標高5～8mである。低地内で最も早く開発が為された地域とみられる。

萩低地は濁淵、沖原、土原、無田ヶ原といった地名が示すように湿潤で荒地がひろがる低地であり、未発達な三角州特有の度重なる河川の氾濫があったとみられる。そのため古来人々が居住する土地としては適切でなく、それを示すように原始古代の遺跡は低地を取り囲む山麓の緩斜面にのみ分布している。これらの遺跡は中津江、沖原周辺に集中しているが、考古学的調査がなされていないため、時期や遺跡の性格は不明である。その中でも霧口遺跡から採集された弥生時代中期の壺形土器は、今のところ当地における人々の生活の開始と、弥生時代の生活拠点丘陵上にあったことを示すものである。ところが11年度の外堀地区発掘調査からも弥生時代中期土器が出土したことにより、同時代にはすでに萩低地にも活動範囲が広がっていることがわかり、大いに注目された。

弥生時代の農耕文化の進展は古墳時代に地域の支配者を出現させ、前小畑の長添山古墳の被葬者がこれにあるとみられる。古代では「延喜式」に古代の駅として椿東の中津江に比定される垣田の駅名がみられることから、古代の中心が中津江から前小畑であることがうかがえる。

入り江状を呈していた河口は次第に土石の堆積により三角州を形成していった。そこでは平安期から牛牧が行われ、中央有力者に牛牧荘として寄進されることになる。また「河島庄」の記録より土地開発が行われたことを示している。さらに阿武川上流の川上村は良木の産地として知られ、鎌倉時代には東大寺再建にかかわり木材の搬出がさかんとなった。このように南北朝期ころまでには阿武川河口は河川氾濫という不安定な自然環境と対しながら、徐々に村落として発展していったとみられる。

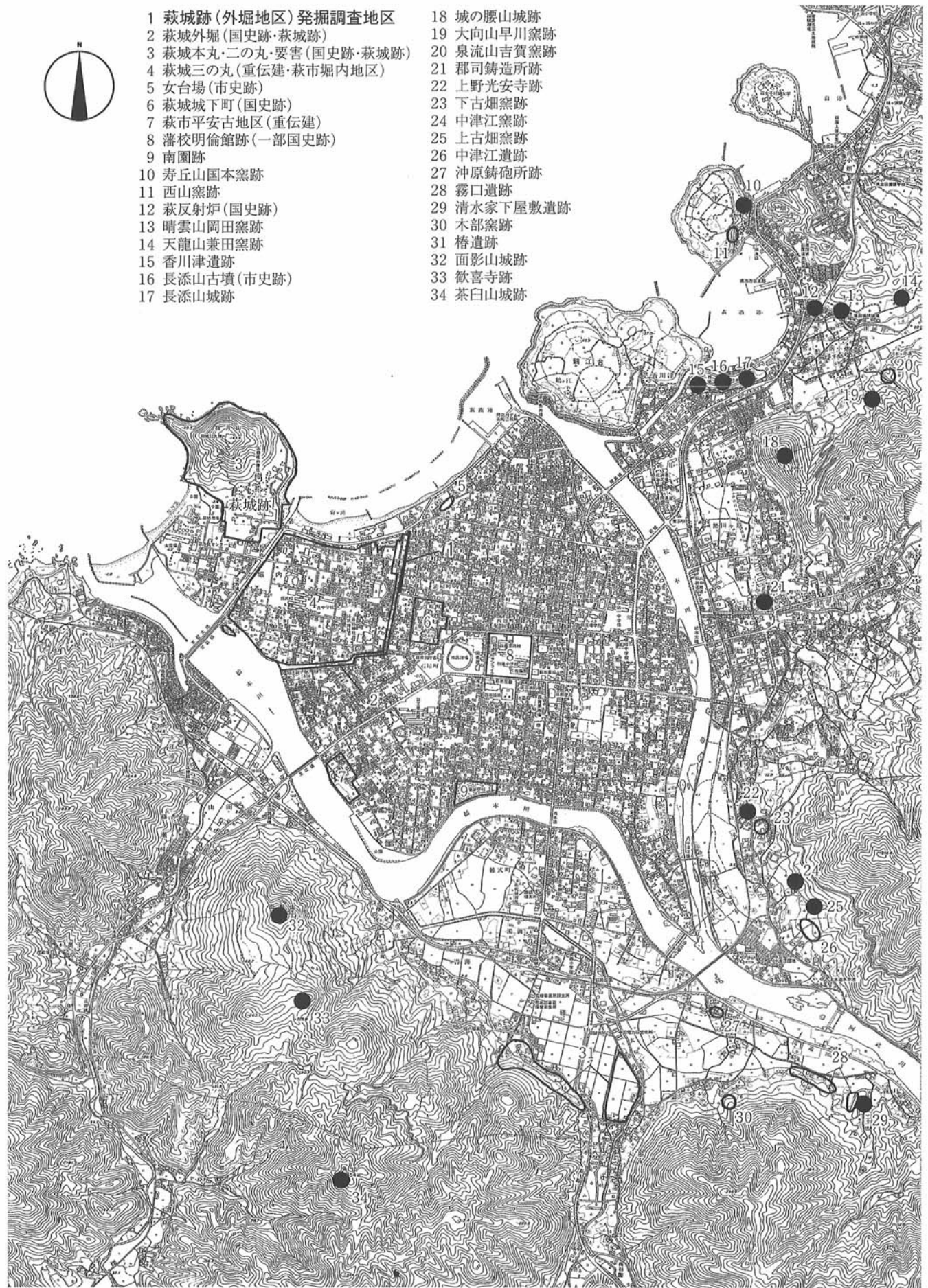
一方で萩地方は、1358年大内氏が厚東氏を滅ぼした後長門守護となったことで、大内氏所領となった。大内氏支配のもとにこの地を治めたのは益田氏と吉見氏である。大内氏滅亡後は、配下の吉見正頼が毛利氏とともに阿武郡を攻略し、その功で吉見氏所領となった。低地周辺の山頂にある山城はこのころの戦乱を物語るものである。

中世末にかけて河川の氾濫によって牛牧荘は消滅し河島荘のみとなったが、三角州の中央部は砂堆の形成によって高燥の地となったことから、吉見氏支配の時代の頃からいち早く開発が進み、寺院や集落が営まれたとみられる。それをうかがわせる遺構として11年度調査では成人人骨を伴う中世土壙墓が検出され、新たな発見となった。中世末までには三角州の形成が終わり、毛利氏による城下町建設によって三角州全域を萩と呼ぶようになった。

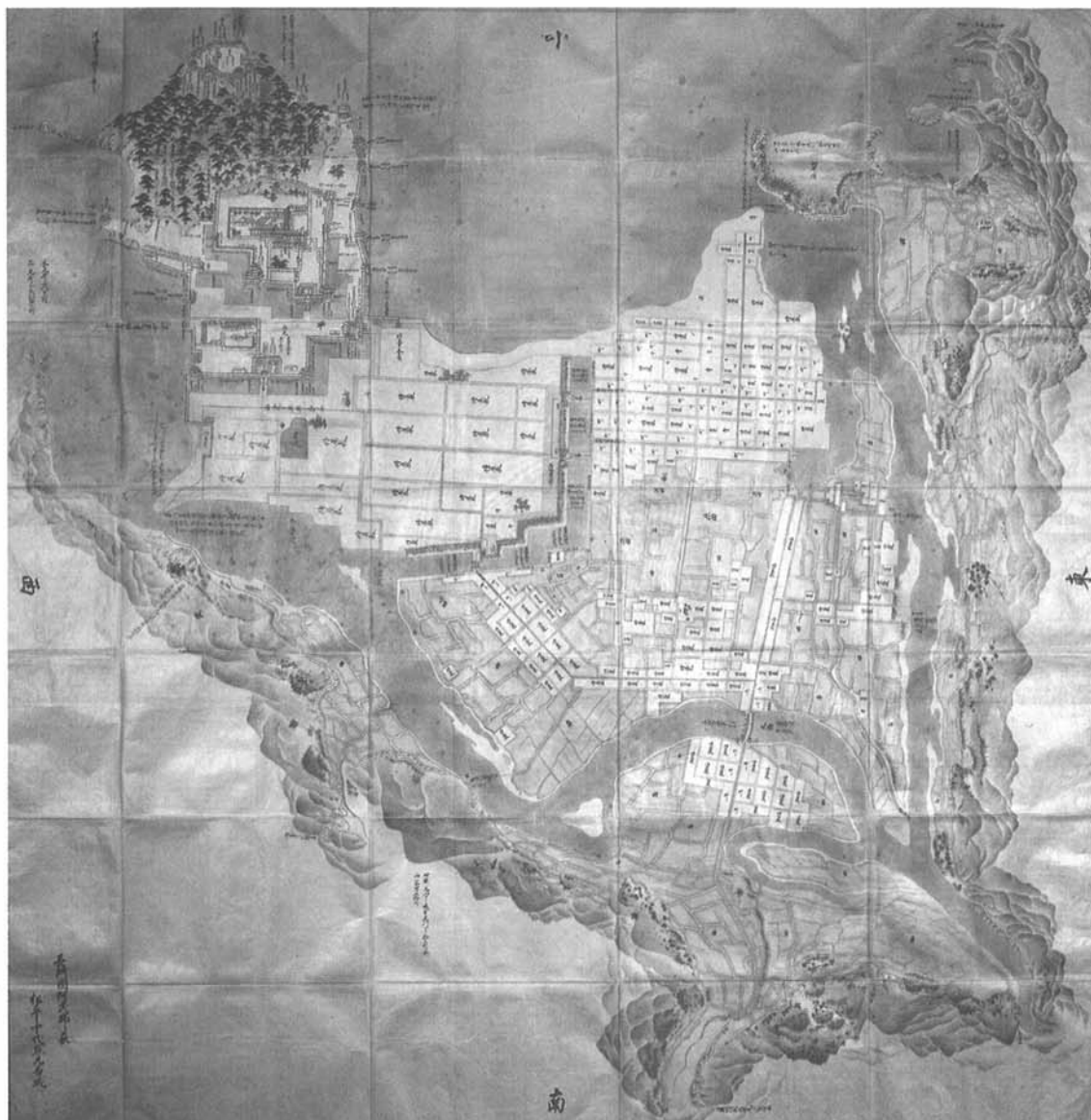
関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏は周防・長門の二カ国に移封後、それまで日本海の寒村であった萩の地に居城である萩城とその城下町を建設することになる。慶長9年(1604)毛利輝元萩入部後、萩城建設が始まり、4年後の慶長13年(1608)に完成する。萩城は指月山の麓の平城と山頂部の山城から



- | | |
|------------------------|-------------|
| 1 萩城跡(外堀地区)発掘調査地区 | 18 城の腰山城跡 |
| 2 萩城外堀(国史跡・萩城跡) | 19 大向山早川窯跡 |
| 3 萩城本丸・二の丸・要害(国史跡・萩城跡) | 20 泉流山吉賀窯跡 |
| 4 萩城三の丸(重伝建・萩市堀内地区) | 21 郡司鑄造所跡 |
| 5 女台場(市史跡) | 22 上野光安寺跡 |
| 6 萩城城下町(国史跡) | 23 下古畑窯跡 |
| 7 萩市平安古地区(重伝建) | 24 中津江窯跡 |
| 8 藩校明倫館跡(一部国史跡) | 25 上古畑窯跡 |
| 9 南園跡 | 26 中津江遺跡 |
| 10 寿丘山国本窯跡 | 27 沖原鑄砲所跡 |
| 11 西山窯跡 | 28 霧口遺跡 |
| 12 萩反射炉(国史跡) | 29 清水家下屋敷遺跡 |
| 13 晴雲山岡田窯跡 | 30 木部窯跡 |
| 14 天龍山兼田窯跡 | 31 椿遺跡 |
| 15 香川津遺跡 | 32 面影山城跡 |
| 16 長添山古墳(市史跡) | 33 欲喜寺跡 |
| 17 長添山城跡 | 34 茶白山城跡 |



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1/30,000)



第2図 慶安5年(1652)絵図(山口県文書館蔵)

なる平山城とよばれる型式である。麓の本丸(藩主の居館や政庁)と二の丸の間には内堀があり、その外に中堀、そして広大な三の丸が位置する。三の丸と城下町の間を外堀が区切り、城下町への行き来は北から「北の惣門」、「中の惣門」、「平安古の惣門」^{ひやんこ}を通して行われた。外堀内の三の丸は重臣の邸宅が立ち並んで「堀内」と呼ばれている。

萩城築城と並行して城下町建設が行われた。その当初の姿は築城半世紀たった慶安5年(1652)絵図(第2図)によって見ることができる。この時期は外堀外にも武家屋敷が多く、町人たちの居住区域は被覆砂堆上の比較的高地であることがみてとれる。その後、人口増加に伴う町屋の増加や、湿地の宅地化によって享保年間にはほぼ城下町が完成し、30町に増加していった。このような城下町の発展は一方で洪水との戦いであったと言える。開発は進んだとはいえ、依然として阿武川の氾濫が続いており、それに伴い何度となく城下町が没し多大な被害が生じた。そのため藩は洪水対策や河川改修

に非常に腐心することになる。

2 萩城外堀の歴史

ここでは樋口尚樹「萩城跡外堀文献調査報告」（『萩城跡外堀調査報告書』萩市教育委員会 昭和63年。）から文献や絵図をもとに外堀の変遷を辿っていきたい。

「橋本川、片川堀立、元和八年」（『長門金匱』）などから萩城築城後、外堀は遅れて元和8年（1622）に完成したといわれる。『慶安5年（1652）絵図』（山口県文書館蔵）によると外堀の規模は幅20間、深さ1丈5尺、水深は東側で3尺、南側で6～7尺であった。絵図には外堀の三の丸側には外堀掘削時の土砂によって高さ3間の土塁が築かれている。この時外堀は完成当初の様子をそのままとどめてみるとみられ、堀端の町屋は認められない。ところが、「片側御堀幅拾四間有之、堀の端家無之、元和八家出来」（烏田智庵『萩古実未定之覚』）、「元和八年、片河懸作初り町ニ成ル」「柿並年表」（毛利家文庫）の記述から、文献では元和八年（1622）にはすでに町屋が存在していたことになる。これからすると絵図と文献では矛盾が生じるが、「懸作」という建築工法から堀幅を著しく狭めることがなかったと解釈される。「懸作」とは堀内に柱を立てて床を堀側に張りだした家屋とみられる。

さらに先の『萩古実未定之覚』では「片側御堀幅拾四間有之、堀の端家無之、元和八家出来、其後元文四年山内縫殿当職之時、堀を埋八間にして石垣出来」の記述がある。これからすると元文四年（1739）に堀幅が8間となる石垣を築き、それ以前は堀幅14間の時期があったことになる。絵図では『天和元、2年（1681、2）絵図』ではじめて外堀内に町屋の範囲を示す描写がなされ、「北かた河町」「南かた河町」の町名が記されてある。

元来防御施設である外堀端に町屋が作られ始めるのは、町屋の進出と土砂の堆積があったためとみられる。外堀は海岸が近いとため、基盤層である砂層を掘削してつくられている。三角州という不安定な地盤と洪水、さらに城下町の拡大による生活排水の流入など、完成直後から外堀に土砂が堆積しやすい状況であった。そのため外堀は堀底があがり、大雨のたびに城下が洪水の被害を被ったり、舟の通行が困難となってきた。そこで藩は堀の機能を回復するため、堀の浚渫を実施し、その土砂で町屋ができ始めた外堀東端を埋め戻し石垣を築く。これにより堀幅は8間となり、埋め戻されたところに町屋が拡張された。さらに北の惣門、中の惣門周辺の町屋を解体し、新たに塀を築き柵形に構築することで軍事施設として惣門周りを補強する。また堀の浚渫だけでなく、外堀を日本海に貫通させるとともにその周辺に石垣を築くなど、18世紀中頃に大規模な外堀整備事業を展開することになる。これによって軍事的機能に加え、治水、排水処理、舟による物資運搬や水上交通など城下町の都市機能の充実、拡大がなされた。

このようにみても、外堀の堀幅は20間、14間、8間へと推移していき、それに伴い構造や機能も変化していった。発掘調査はこのような外堀と町屋構造の変遷を明らかにすることが大きな課題であり、城下町の形成と発展に新たな資料を付け加えるものになるであろう。

外堀は18世紀中頃の整備事業によってその様子を大きく変えるが、以後幕末までにその景観が変わることは無かったことが江戸後期の絵図でみてとれる。明治時代以後は周辺の宅地化などによってさらに堀幅は狭められて、現在の景観を呈するに至っている。

参考文献 『萩市史』 萩市 1983年。

『角川日本地名大辞典 35 山口県』角川書店 1988。

Ⅱ 調査の経緯と概要

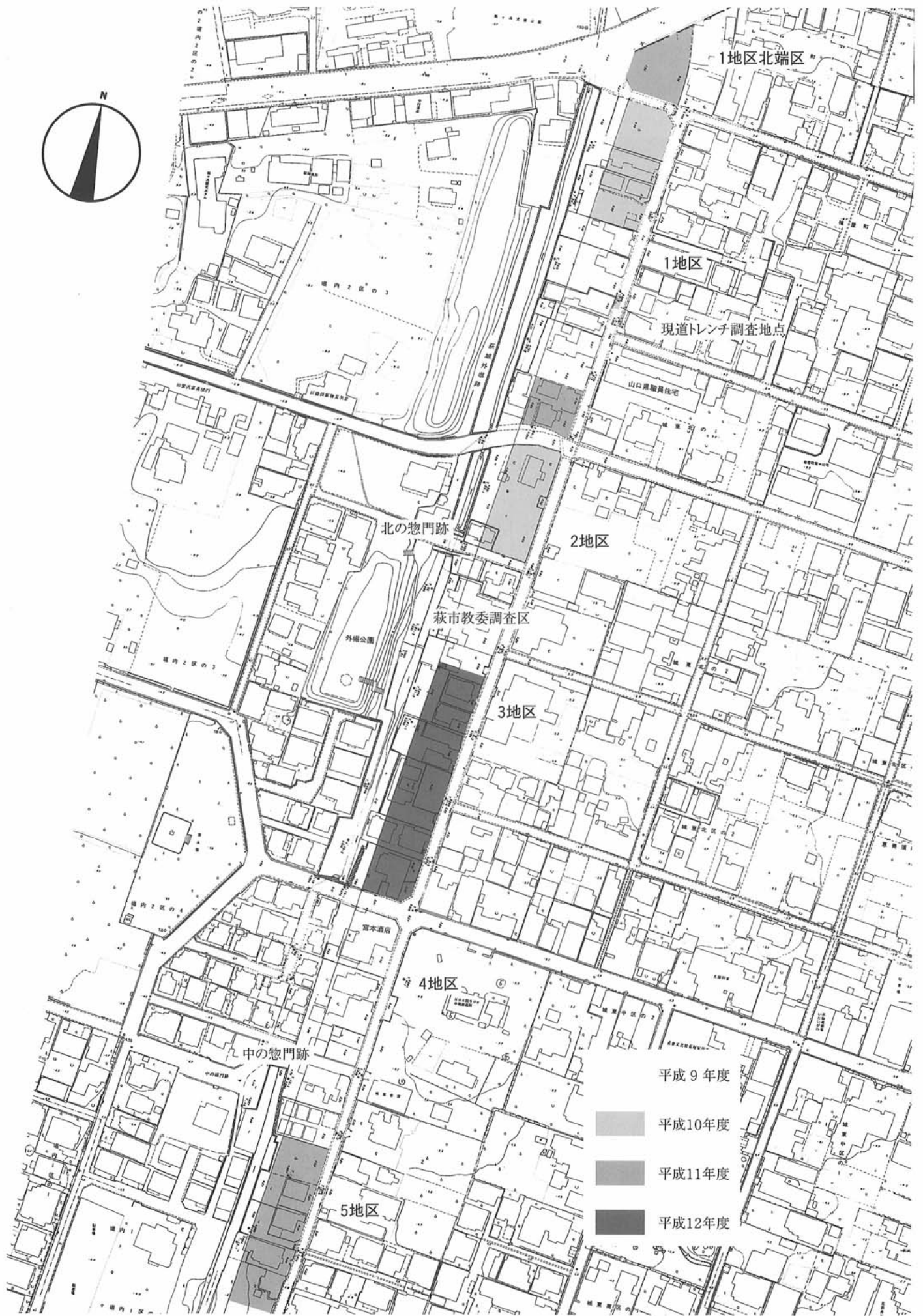
昭和45年、調査区の東側にそって走る市道片河線が都市計画道路事業に伴い路線拡張が決定された。その後昭和58年歴史的地区環境整備街路事業の発足により、都市計画街路今魚店金谷線整備計画は昭和60年、事業計画の検討によって、「歴史的町並みと調和した道路舗装」など外堀一带を取り込み歴史的景観を生かした街路整備が提起された。ところで外堀は江戸時代に堀幅が20間から14間、そして8間へと推移したといわれていたがその詳細は不明であった。そこでこの外堀の変遷や構造を明らかにすることが整備事業にとって重要であるとの見解が示され、昭和61、62年に萩市教育委員会が当該地区の発掘調査を、昭和62年には関連文献調査を実施し、その成果を昭和63年『萩城跡外堀地区調査報告書』（萩市教育委員会）としてまとめている。このような調査成果をもとに建設省と文化庁との協議に基づいて、外堀変遷の最終段階である堀幅8間時の景観を反映した道路および外堀の整備事業が実施されることとなった。これによって街路と史跡萩城外堀との境界線が、堀幅8間時の石垣が埋存している推定線から裏込めとして1～2mの幅を持たした位置として設定された。以後街路側を建設省、外堀側を文化庁によって用地取得し事業展開がなされてきた。平成元年にはこの境界線より堀側の地域を「史跡萩城跡」として追加指定されている。

用地取得が予定地の北側から進められ土地公有化がなされる中、具体的な整備事業計画が進展していった。それに伴い部分的なトレンチ調査であった昭和61、62年発掘調査の成果だけでなく、遺跡の詳細なデータの必要性が高まってきた。そこで遺跡の時期や構造を明らかにする目的で、萩市教育委員会は平成7年から発掘調査を開始した。調査地点は8間石垣を含めた史跡地内と街路部分である。平成8年度はさらに街路部分の内、北の惣門跡より南側の地区を実施した。これにより外堀内に町屋跡の遺構が良好に埋存していることが明らかとなった。そこで平成8年より歴史的地区環境整備街路事業の事業主体となった山口県、萩市等の関係機関が今後の事業計画を協議した結果、街路部分は事前の発掘調査による記録保存が必要であり、発掘調査を山口県教育財団山口県埋蔵文化財センターに委託することとなった。また史跡地内については萩市教育委員会が継続して実施することとなった。これにより平成9年度より山口県埋蔵文化財センターによる街路部分の発掘調査が開始された。

調査対象地区が南北に700mと細長く、北片河町、南片河町の2つの町内にわたっていることから、調査地の地区名を設定した。便宜上、調査区を東西に走る道路（北の惣門、中の惣門の通りと近代に取り付けられた道路）によって区分し、北から1地区、2地区と呼称した（第3図）。つまり榊屋町筋からの小道から北の惣門までのうち、途中春若町筋の道路によって分断されるがこれを境として北側を1地区とした。南側は北の惣門通りまでを2地区とした。また北の惣門から中の惣門の範囲では「素水園」につながる道路を基準としてこれより北側を3地区、中の惣門通りまでの南側を4地区とした。中の惣門から南側を5地区と設定した。

調査は工事計画の関係から事業予定地の北片河町の北側から進めることとなったが、円滑に調査を実施するために用地取得が終了して調査範囲が広く確保できる部分から着手していくこととなった。

9年度調査は1地区の1,400㎡から着手した。まず機械によって表土を除去し遺構の検出につとめた。さらにトレンチによって下層の遺構の状況および遺構面の数を確認しながら調査を進めた。その結果、江戸時代末期からの町屋跡遺構が予想外に残存状況が良好であり、江戸時代前期にかけて4面の遺構



第3図 調査範囲図(1/2,000)

面があることが判明した。そのため調査は当初の予定を変更して1地区の中央部分1,400㎡を対象に調査を実施することとなった。また町屋敷の区画が検出されたので、それぞれの区画ごとに区名を設定した。すなわち1地区A区からI区である。遺構は石垣、石列、礎石、埋甕、廃棄土坑、井戸など多岐にわたり、遺物も近世陶磁器をはじめ金属製品、木製品などが大量に出土した。

なお遺構が構築される基底面および遺跡の基盤層は砂層または砂質土層である。軟弱な基盤であるため、調査途中で石垣が崩落したこともあった。また検出された遺構は街路整備計画の中で復元保存する可能性もあるため、比較的残存状況の良い石垣等は除去せずに下層の掘り込みを行った。そのため3面以下の町屋形成当初の遺構に関しては部分的なトレンチによって確認するにとどまった。このような経過から狭い範囲を深く掘り下げる箇所については安全性を確保しながら実施した。そのため石組井戸は底面まで掘り下げていない。調査期間は5月19日から翌年1月23日までである。

10年度は9年度調査の北側である1地区J区～Q区と2地区の合計1,900㎡が調査対象となった。1地区では前年同様4面の遺構面が確認され、新たに地下室（穴蔵）状の石室も検出され多様な町屋遺構の様相がうかがえた。また外堀の北端ラインと傾斜面が検出されたことから、外堀の範囲や構造、さらに町屋構築の基盤層が明らかとなった。またそれまで未調査であった道路部分の調査を実施し、江戸時代の道路の可能性を示す遺構が確認された。2地区は北の惣門通りに面する地区である。遺構面は3面確認され、1地区とは異なる町屋遺構や敷地利用が認められた。特に惣門通りに面する一画は絵図によって唯一武家宅地と推定できる敷地であり、ここからは、17世紀前半から中頃の焼土層が検出され、織部・志野の陶器片が出土するなど、外堀と町屋形成の過程を考える上で鍵層となる層が確認された。そのためこの部分については上層の遺構を除去して最下層近くまで面的な調査を行った。調査期間は5月11日から翌年3月3日までである。

11年度は1地区の残り部分（X～A区）と、5地区A～H区の合計1,700㎡である。また前年調査で確認された外堀北端線より北側の状況を把握するために、樽屋町から続く小道の北側地区を1地区北端区と呼称して調査対象とした。面積が狭いためトレンチ調査で遺構の有無を確認したところ、町屋遺構の一部が検出された。この地区は絵図によって町屋が進出した時期が判断できる資料となった。1地区は9年度調査の延長部分として3つの屋敷地が認められた。これまではすべて北片河町の調査であったのが、5地区調査によって南片河町の様相が明らかとなってきた。調査地では町屋形成の過程で建物部分と裏庭の高低差をそのまま残す構築がなされていることや、大型の石材を使用した建物石垣が検出され、他地区との相違が指摘された。さらに基盤層である砂層中から人骨を伴う中世墓や弥生時代中期土器が出土し大きな成果となった。これにより城下町建設以前の萩低地内の歴史に新たな資料が得られたこととなった。調査期間は5月7日から翌年2月15日までである。

12年度は3地区の1,800㎡を対象とした。北片河町と南片河町の境を含む地域であり、大型の礎石建物や、土蔵とも判断できる建物基礎、さらに町屋構築に伴う焼土層の存在が指摘されるなどの成果があった。調査期間は5月10日から翌年3月21日までである。

以上平成9年度から12年度の期間で、1地区から3地区にかけてと5地区の一部の調査が実施され、予定調査地の約半分が終了したことになる。この間遺跡の調査報告は平成9年度末刊行の概要報告¹⁾と山口県埋蔵文化財センター所報「陶埴」に各年度の調査報告を掲載したのみであった。これらは調

査が各年度とも長期間であり、膨大な出土遺物に対して十分な資料整理期間が得られなかったため、遺構を中心とした概要報告となった。そこで平成13年度は発掘調査と並行して資料整理を進めながら報告書作成を行うこととなった。報告対象とする地区は1地区北端区を含めて1地区から3地区までとし、遺物については本報告では土坑出土のものを中心に掲載し、その他の整地層、焼土層等の出土遺物については、次報告に掲載することとした。

調査の方法と報告書での表記

ここでは調査における方法と、それに関連して本報告書における表記方法を以下に示す。

・各地区で検出された遺構面はそれぞれ上面から1面、2面と設定した。なお各地区で検出した遺構面の時期が異なる場合があり、他地区と遺構面名が同じでも時期が同一とは限らない。

・検出された町屋敷地の区画を小区名として設定した。小区はアルファベット大文字を使用し、先に設定した大地区名とあわせて、1地区A区、1地区B区（以後1-A区、1-B区と表記）と呼称する。なお各区の遺構に伴わない遺物（整地層内出土など）はこの小区と出土面を基準に取り上げをしている。また1地区SK49は1-SK49と略して表記する。

・敷地区画の全体像が判明するのは基本的に2面以降である。そのため区画名は2面検出時に設定したものである。ただ上層の1面と敷地範囲が変わらない例がほとんどであることや1面の遺構説明に区画名があったほうがより明確に記述できるなどから、2面の区画名をそのまま1面でも踏襲して記述することとする。

・検出された遺構の番号は、調査地区に、SK 1、石垣 2、井戸 3 といったようにすべての遺構に対して連番号を用いる。また同一地区で調査年度が異なる場合は、開始する番号を変更している。たとえば、1地区のうち平成9年度は1～、平成10年度は200～、平成11年度のうち北端部は400～、X-A区は500～とした。

・検出された遺構に「石垣」、「石列」という遺構種別名を用いている。ここでいう「石垣」とは石材を2、3段以上積み上げて構築したもので、土留めや建物の基礎として機能したものをいうこととする。これに対して「石列」は基本的には石材を1段ほど直線的に石の面を一定方向にあわせて置いたもので、敷地内や境の区画、礎石や基礎などに用いられたものである。ただ厳密に複数段以上積み上げたものすべてを石垣と明瞭に区別はしておらず、石材の大きさ、遺構の配置や機能を考慮して各年度の調査担当者が呼称を決めている。

注

1) 『掘る みる わかる 城下町 -萩城跡(外堀地区)発掘調査報告I-』 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター 1998。

Ⅲ 調査の成果

1 遺 構

(1) 平成9年度の調査

A 1地区 (第4～16図 図版1～10)

調査前の地表面は現道路とほぼ同一の高さで、堀側に向かい緩やかに傾斜している。調査区には萩市教育委員会が事前調査としてトレンチ（南から1トレンチ、2トレンチと呼称）を設置しており、このトレンチの土層断面観察と検出された遺構群の構築順位などから遺構面の設定と検出を行った。土層では近現代の整地層が表土として約50cm堆積しており、その下層に江戸時代遺構面が4面あることが判明した。なおA区で一部遺構を壊すように掘削された攪乱坑は、昭和61年調査のAトレンチであるとみられる。以下各遺構面の概略を述べる。

1面 (第4図 図版3)

表土や近現代家屋の基礎などを除去した時点で検出された遺構面を1面とした。時期的には広東碗、端反碗が出土することから、19世紀を中心とし、一部明治時代に属する遺構もあるとみられる。検出された遺構は石垣、礎石、石列、土坑、埋甕、石囲い遺構・石積み遺構、井戸、排水溝である。この面では2・3面で構築される土留め石垣の天端レベルで遺構面が形成される時期である。石垣43、44、28、52が生活面の高上げによって天端付近まで埋められ、2面石垣の天端だけが地表に覗いた状態で、建物の基礎として機能していたと考えられる。なお2面以降明らかとなる町屋敷地の範囲は、近代の攪乱も相まって明瞭ではない。

A～D区で確認された敷地は、排水溝39を境とするが、B～D区の間では敷地境として確実な石列が指摘できない。これは翻ってこの区間が一つの敷地である可能性を示している。仮にそうすると石列41、40、47が建物部分の位置とみることができ。敷地奥には井戸であるSE18、埋甕3、洗い場とみられるSF16、排水溝7などの遺構群があり、これらは水回りの遺構として上部が削平されず良好な状態で残存していた。

E区は石列43、44にはさまれた間口7.5mの敷地で、南北3.5～3.7m、東西約2mの間隔で礎石が検出された。

F～I区では石垣28、52で区画された一画が建物部分とみられる。28の範囲であるF・G区は幅18.2m、52は調査区外に延びているが、今年度検出部分ではH・I区の幅は16.5mである。推定される建物範囲にいくつかの礎石状の石を検出するが、明確な建物礎石や柱穴の配列が認められないことから、上部の削平を受けているといえよう。またF・G区、H・I区ともその中を区切る遺構がないので、両区ともその幅の長さを持つ長屋状の建物であった可能性がある。埋甕はこの区画だけで10基検出されており、作り替えや近代に属するものもあるとみられる。土坑は小型の土坑が中心である。

H区はSE25の上面やその周辺の石材に玄武岩の切石が使用されており、新しい様相を示す。I区は近代以降の攪乱によって、残存する遺構はSE156のみである。このSE156の周辺からは円形に取り巻く石列が認められた。なおI区の石垣52より西側では調査作業の安全を確保するため、1面より下層には掘り込みを行っていない。

2・3面 (第5図 図版3)

町屋の中心時期であり、町屋敷地の区画が明確に検出された。なお区画によっては2面下に遺構が検出されたので、これを3面とした。出土遺物には広東碗は含まないことから遺構面の時期は18世紀前～中頃を中心とし、一部3面は17世紀末まで遡るとみられる。検出された遺構は石垣、石列で区画された町屋敷跡、石段、礎石立ち建物、土坑、井戸、瓦列、排水溝、埋甕、埋葬遺構である。

E区は石列44下の石垣130と石垣43に挟まれた敷地で間口9.8mである。130と43は石垣の面を敷地の外側に向けて構築され、残存する高さは130が0.7m、43が1.2m。内部には基盤層と同様な黄灰色砂層が厚く堆積しており、砂を入れながら一斉に石垣を構築したことがうかがえる。なおこの面に属する礎石は検出されなかった。石垣の構築順位からすると、この130、43の後石垣47、28が構築されることから、まずE区が作られ、それから南北の敷地が形成されたとみられる。E区は位置的に春若町筋から外堀側に直面する箇所であり、南辺が通路路肩の延長上にあることから町屋形成の起点のひとつになっていることが指摘できる。なお石垣43の西端で石垣の基底面の確認を行ったところ、D区の2・3面のレベルよりさらに1.2m下まで石垣が検出された。この石垣を観察すると2・3面のレベルで目地がとおり、積み方の違いが指摘できる。おそらく石垣43はまず1.2mの高さで構築され、その後A～D区の2・3面の町屋が形成される中でさらに上部に積み増しされたとみられる。

D区は石垣40と石垣43の間で間口は6.3m。高さ1.1mの石垣47で土留めをした部分が建物であったとみられる。47の西側には堀側の敷地に降りるための石段が認められる。石段を降りると平坦な面が広がり、敷地中央に廃棄土坑とみられるSK80、92が重複して検出された。土坑の範囲を示すような瓦列70や石列があり、他にSF69や埋甕98がある。

C区は東側に石段があり、その基底面に礎石があることから礎石立ち建物の存在が指摘できる。ここでは検出された遺構レベルの高低差で2、3面を区別した。3面に所属する遺構は礎石間が東西1.8～2.0m、南北1.5mの礎石群と、その間にあるイヌの埋葬遺構ST114である。2面ではこの礎石上に石列56が重複し、石列56、157が基礎となる建物が認められることから、2・3面で建物の建て替えが行われたとみられる。西端には廃棄土坑であるSK109、111があり、SK111からは1708～9年に使用された宝永通宝が出土していることから時期決定のひとつの基準となる。

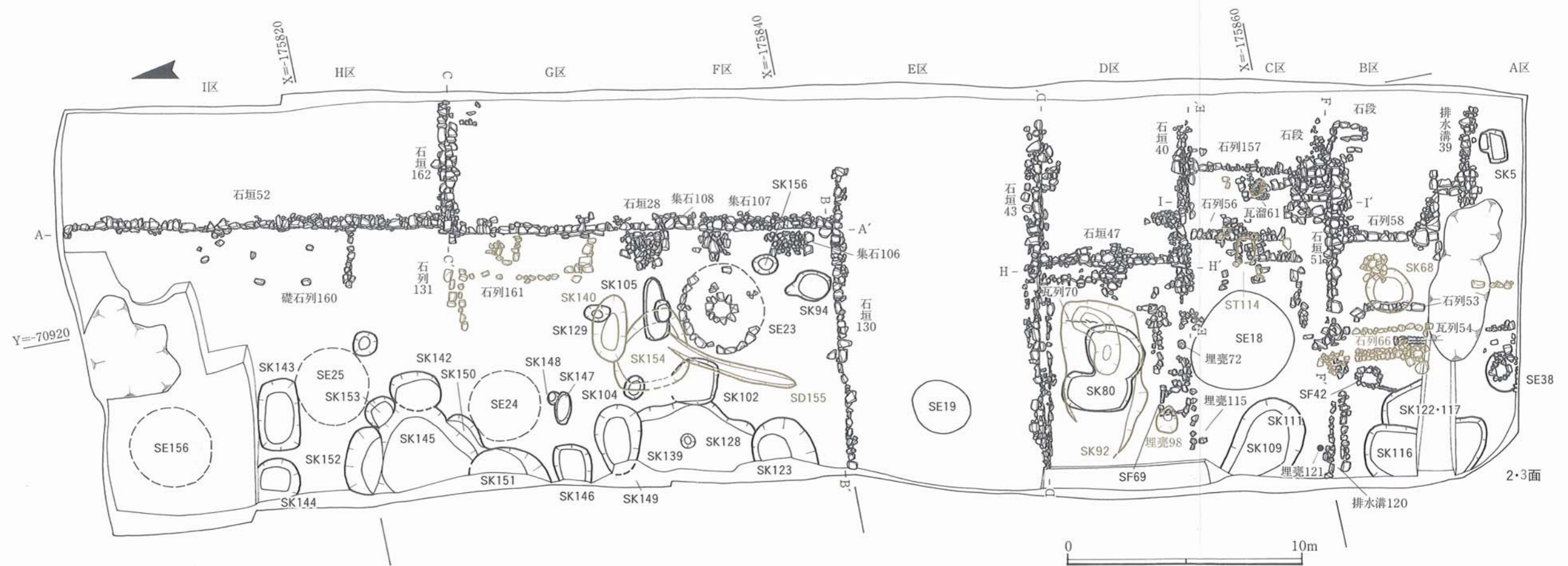
B区では石列58とそれより西側に石列53からなり、この石列の検出レベルにより2、3面の区別を行った。2面では瓦列54やSF42は屋外の遺構の可能性があるので、石列53までが建物敷地と考えられる。対して3面は新たに検出された石列66までとすると、家屋の拡張があったことが考えられる。SK68は浅い土坑で、屋内とみられる場所に位置する。

F～I区は石垣28、52が構築された範囲に長屋のような建物があり、この石垣の高さは1.0～1.2mである。石垣より西側は石垣の基底面が遺構面となる。ここでも遺構検出によって2面設定でき、上面から2面、3面となる。2面は石垣28、52の基底面よりやや高い位置に検出された。

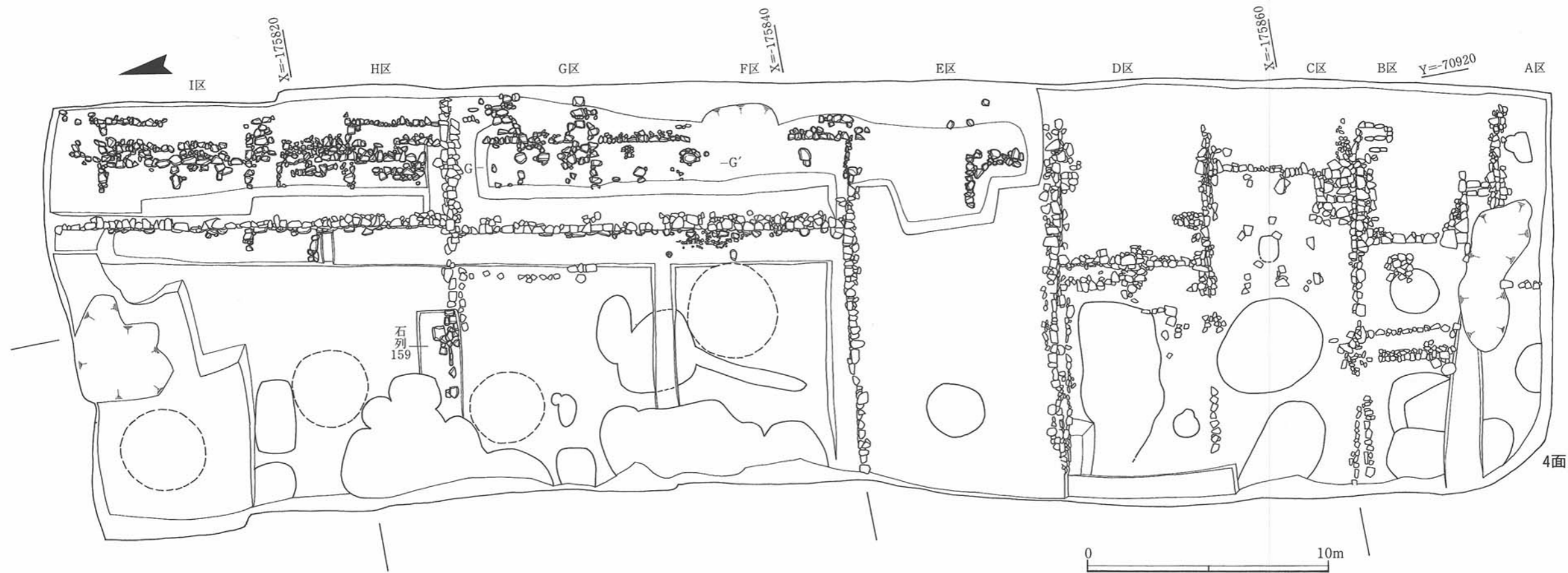
F区の集石106～108は崩れてはいるが階段状に積み上げており、家屋から石垣の下段に降りるための施設であろう。また礎石列160、石列161より、母屋からの棟続きで張り出した家屋を想定できる。160は南北方向の礎石間1.9～2.0m、東西幅は約2.5m。161は南北の礎石間が約2.0mと3.0m。東西幅が約1.8m。井戸として2面に使用されたのはSE23である。この井戸は2面において井戸の周りを巡る列石があり、この面でも使用されていたことがうかがえる。土坑は24基が検出された。1面とは



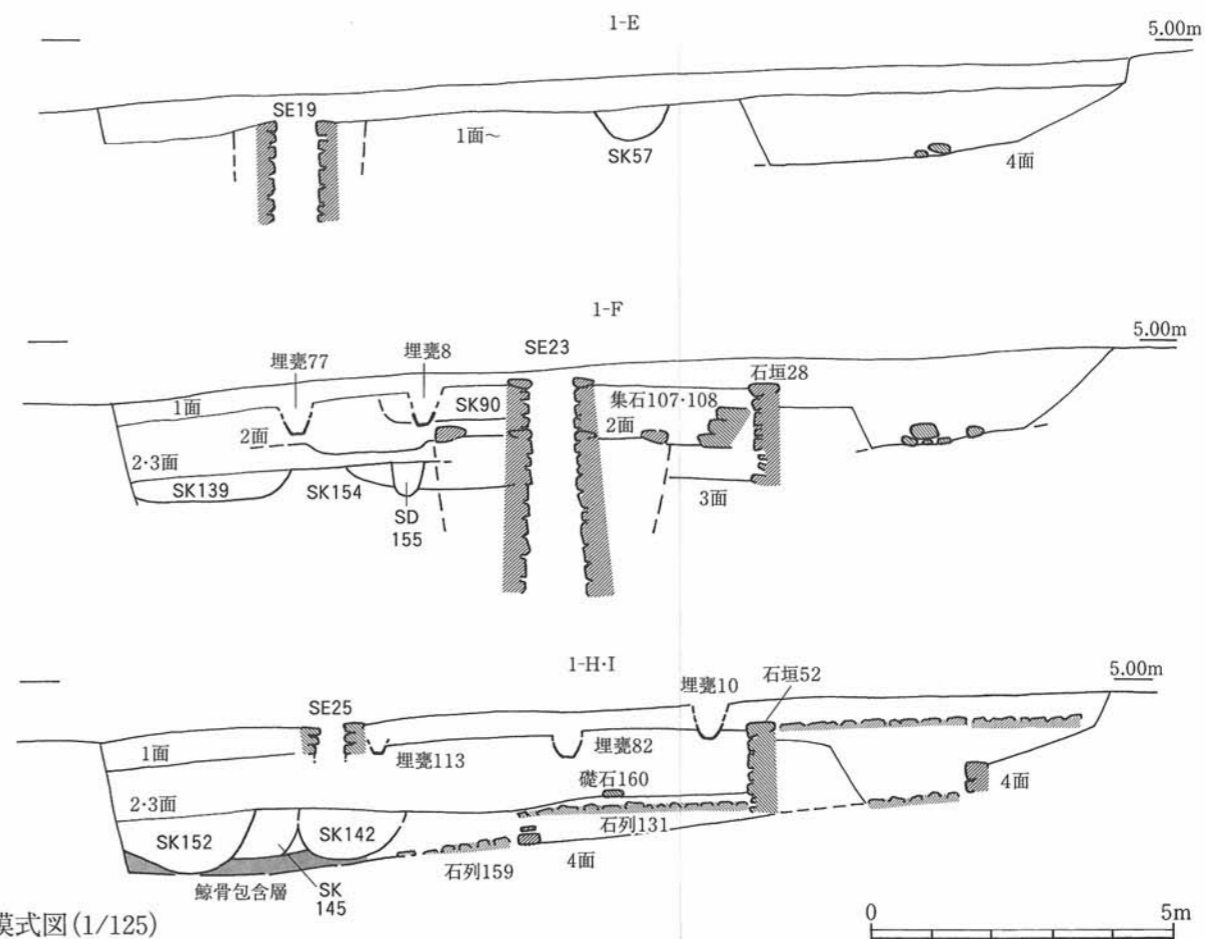
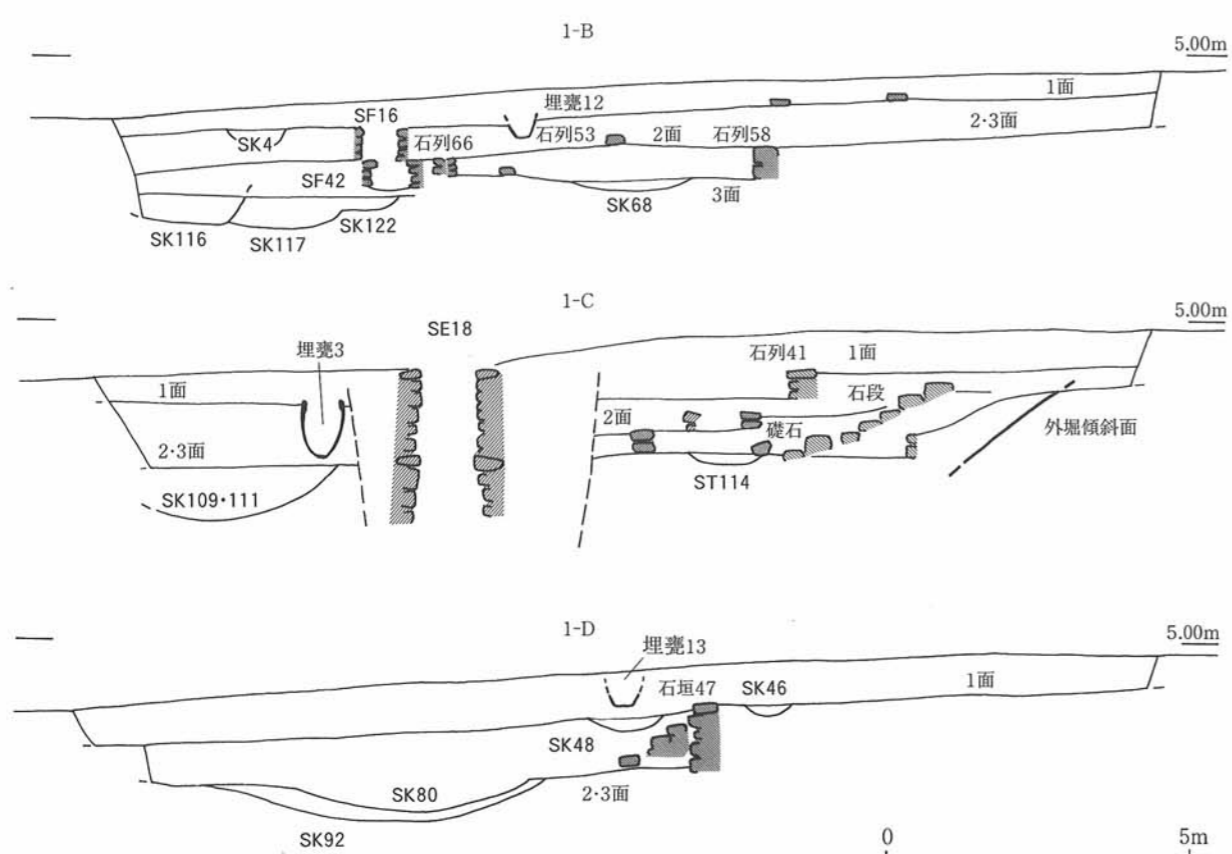
第4図 1-A~I区遺構配置図①(1/200)



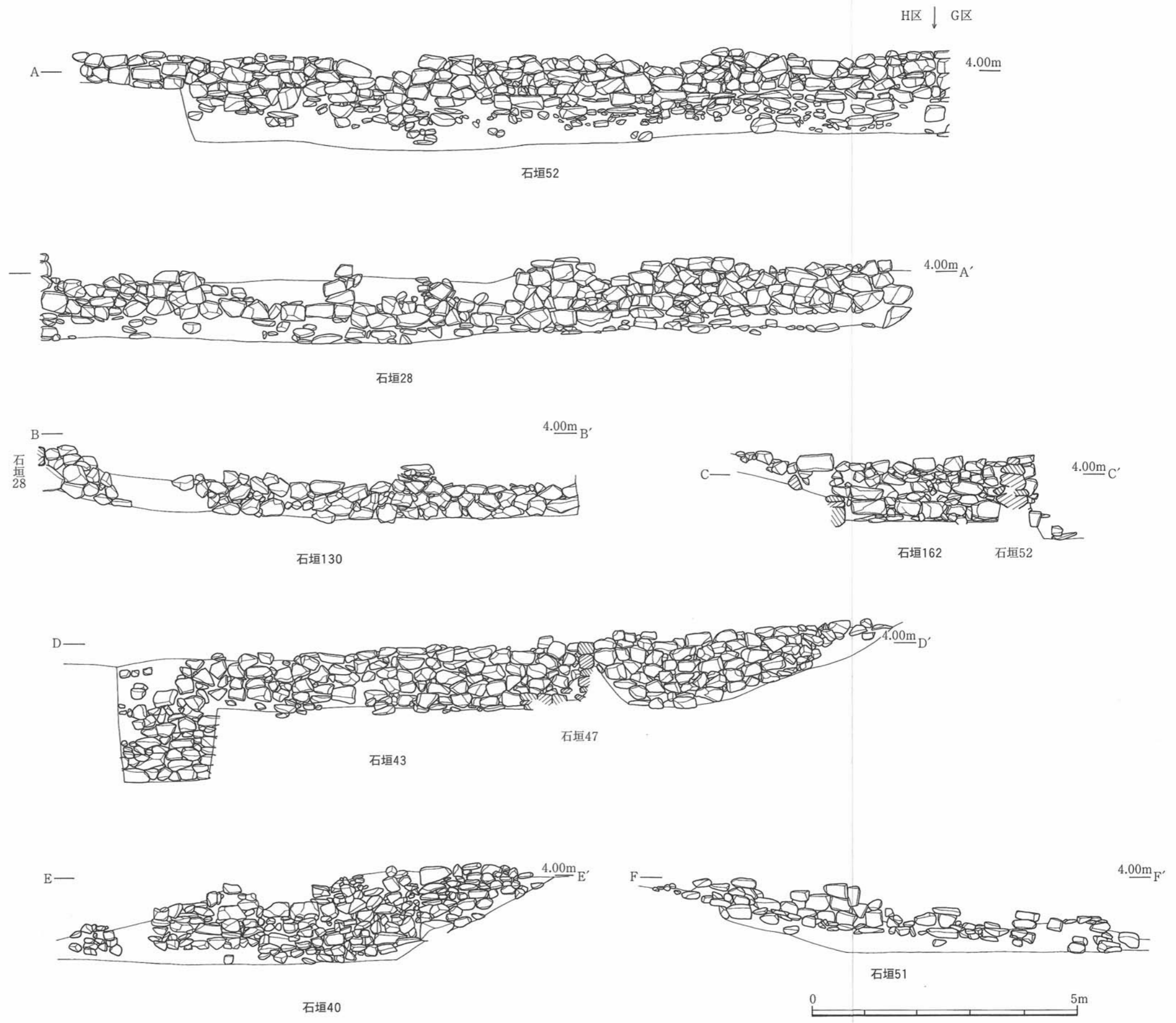
第5図 1-A~I区遺構配置図②(1/200)



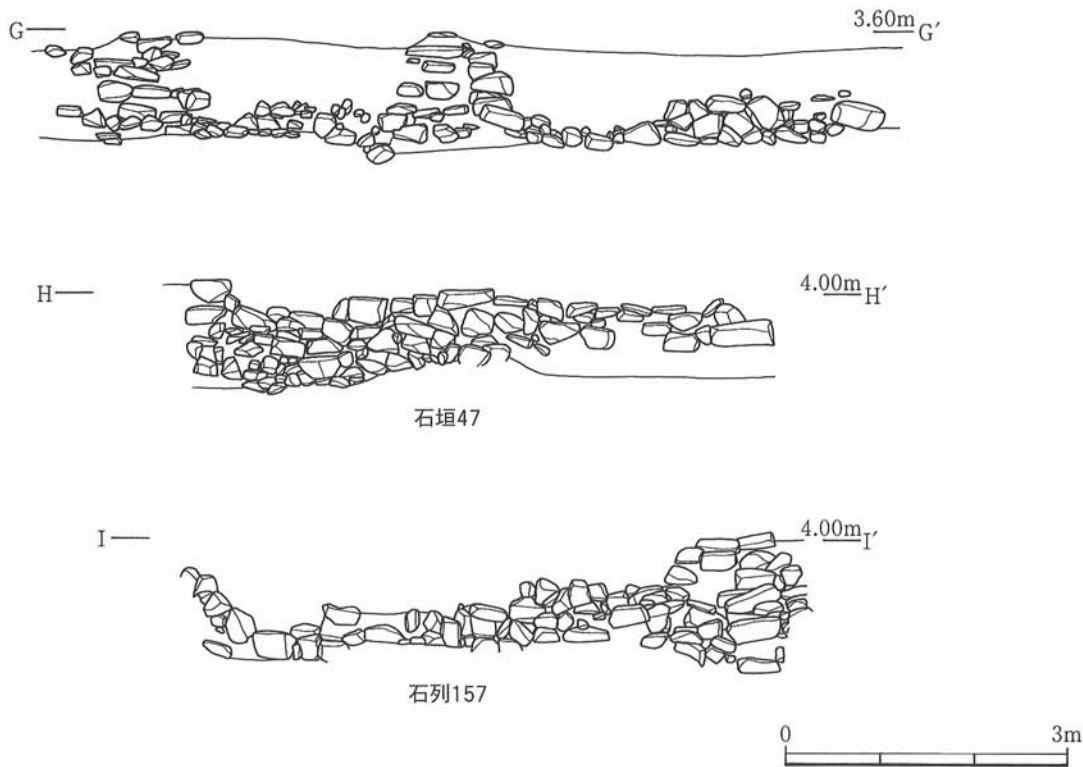
第6图 1-A~I区遺構配置图③(1/200)



第7图 1-B~H区断面模式图(1/125)



第8图 1地区石垣立面实测图①(1/80)



第9図 1地区石垣立面実測図②(1/80)

異なり大型の土坑が多く西側に集中する傾向がある。

4面(第6図 図版5)

石垣28、52構築以前の遺構で、E～I区の東端、およびG～H区境の石列131下で検出された。時期は17世紀後半の時期を中心とする。石垣28、52以東の遺構は東西、南北の石列から構成され、その配置から2・3面で認められた屋敷地と異なった町割りを示す。推定される敷地規模はE区では5.5m、F・G区では南半が10.5m、北半は北側が未検出であるが推定5.6mである。H・I区では南から4.2m、4.2m、6.2mである。これらの石列は外堀傾斜面とみられる基盤層上に直接構築されたものもあることから、外堀掘削後時期を経ていないことがわかる。さらに傾斜面にそった数段の石積は、使用される石材が2・3面以降では玄武岩がほとんどであるのに対して、花崗岩が一定の割合を占めることが特徴的である。さらにF区では根固め石を敷いて、その上に径約50cmほどの河原石を置き礎石としている。この礎石は文献上初期町屋の建物構造である「懸作り」にかかわる遺構とみてよいだろう。検出されたのは1列の礎石列であるが、間2.4～2.5mである。

またG～H区境の石列131下に石垣52構築以前の層序を確認するためトレンチをあけた。ここでは石列159が検出され、これによって3面より古い時期にも区画があったことが明らかとなった。52を残したままの調査であることから土層の連続性が確認されていないが、52より東側で検出した遺構群と一連のものである可能性が高い。また159の基底面である暗灰色砂層は堀側に緩やかに傾斜していき、調査区西端で鯨骨が集中して出土する層となる。鯨骨は脊椎、肋骨がまとまって出土した(図版7)がクジラ骨格の原型をとどめるのではなく、一部の鯨骨には解体痕が認められることから、寄鯨が解体処理された後破棄されたものとみられる。層序から4面の町屋と同時期のものだろう。

D区では前述したように石垣43の下部が検出され、これが4面相当になるとみられる。この時期の町屋遺構が堀側へどこまで張り出していたかが推定できる資料であろう。以下遺構別にその概要を述べる。

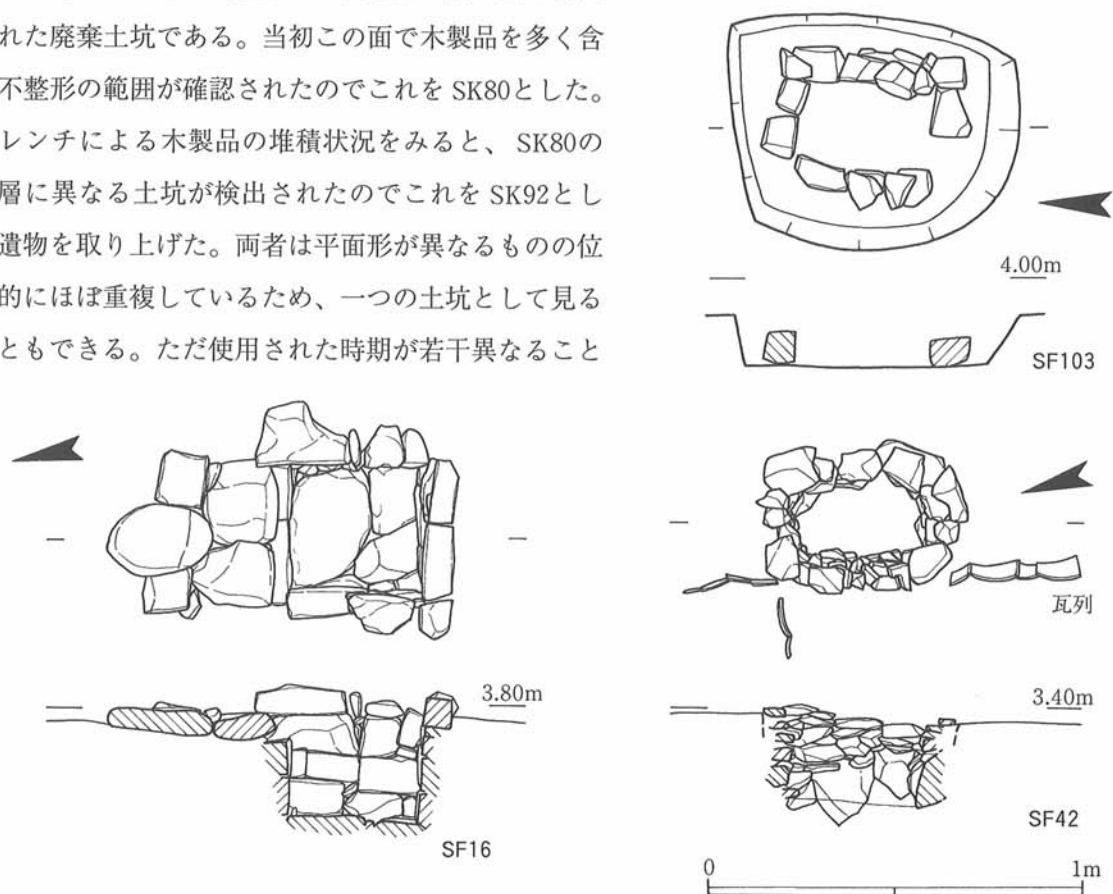
石囲い遺構・石積み遺構（第10図 図版9）

石材を1段並べて方形に囲む石囲い遺構や、土坑の中に石材を積み上げて小石室状としている石積み遺構をここではまとめてSFとした。SF103は長軸160cm、短軸128cm、深さ26cmの土坑の中に、石材を方形に1段囲んでいる。石囲いの内径は68cm×46cm、高さは24cm。SF16は1面で検出。方形の切石も用いて3または4段に正方形に積み上げる。内法71cm×65cm、深さ67cm。底に平石を敷き、石組の北側にも敷石が付設される。周辺に井戸、排水溝とともに検出され、底に石を敷くことから井戸周りの水溜、洗い場のような施設と考えられる。1面であり幕末から近代にかけての時期とみられる。SF42は基部に石材を立てその上に平積みにして構築している。石積の平面形は長方形で、内法76cm×42cm、深さ51cm。底面の敷石は無い。この他SF69は一段の方形石列であるが、上層から埋甕の底部が出土したことから、埋甕を設置する際の基礎の役割を果たしている可能性がある。

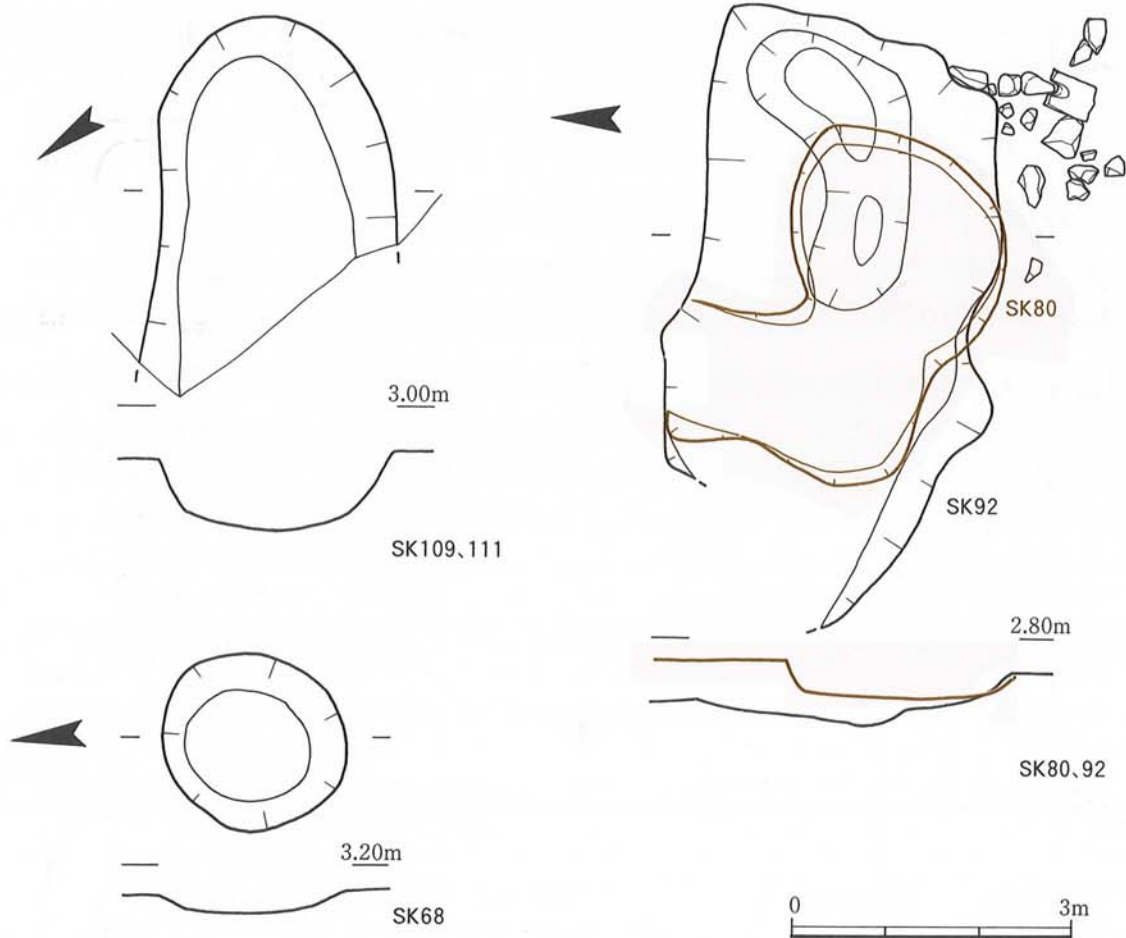
土坑（第11、12図 図版6、7）

土坑は51基が確認された。このうち平面形は円形、長円形、不整形円形に分けられる。建物の近くには少なく、SK48のように1m以下で浅い場合が多い。これに対して町屋の敷地の堀側（西側）に位置する土坑は大型で深い。東西に細長い長円形のタイプが多いのは、敷地が東西に細長いものであることに起因している可能性がある。

SK80、92はD区で石垣47より西側の低い面で検出された廃棄土坑である。当初この面で木製品を多く含む不整形の範囲が確認されたのでこれをSK80とした。トレンチによる木製品の堆積状況を見ると、SK80の下層に異なる土坑が検出されたのでこれをSK92として遺物を取り上げた。両者は平面形が異なるものの位置的にはほぼ重複しているため、一つの土坑として見ることもできる。ただ使用された時期が若干異なること



第10図 1地区 SF 実測図①(1/20)

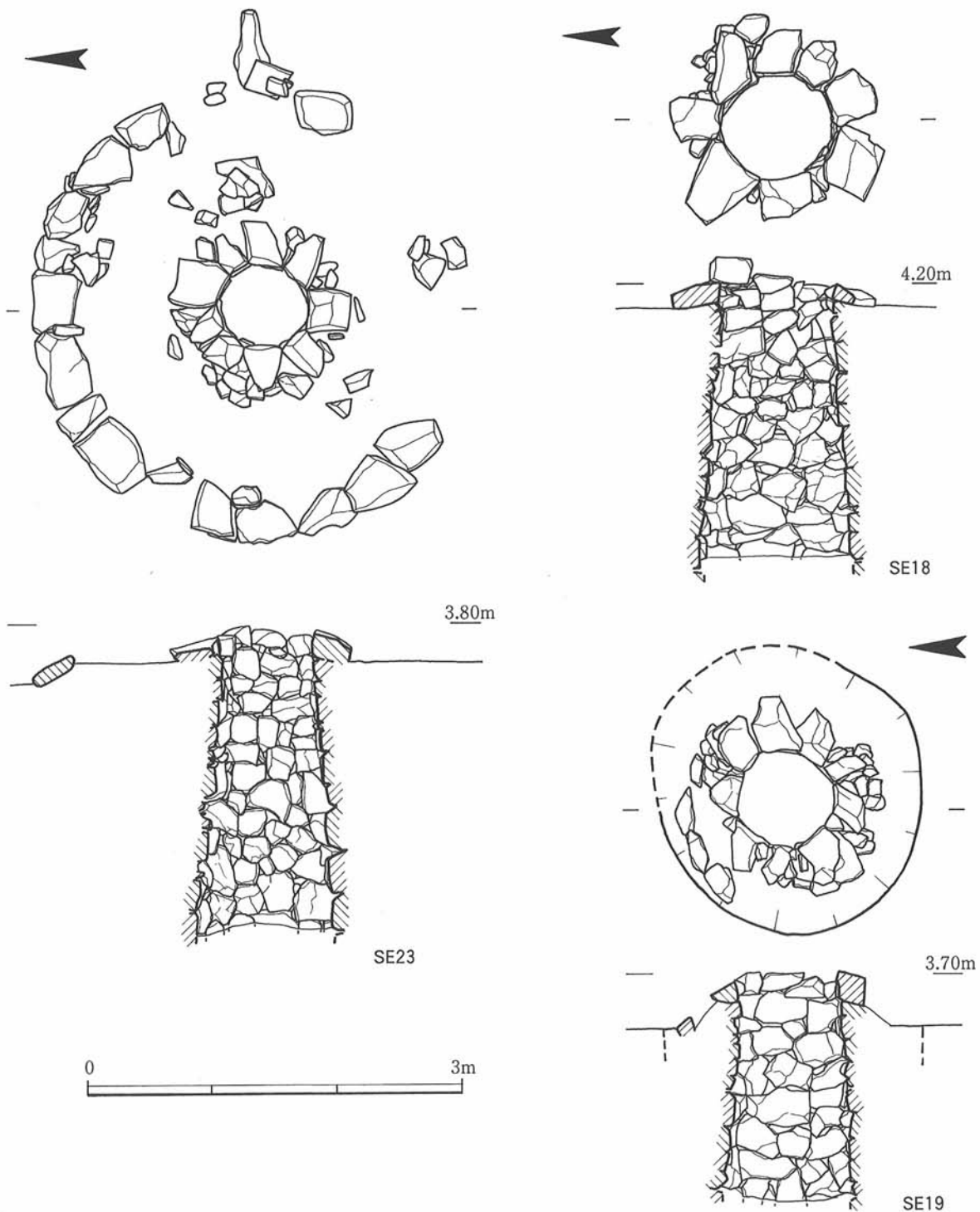


第12図 1地区SK実測図②(1/80)

第1表 1地区土坑一覧①

地区	区	遺構番号	平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備考	遺構面
1	A	SK 1	円形	100	90	25		
1	A	SK 2	円形	115	111	27		1面
1	B	SK 4	長円形	98	88	20		2面
1	A	SK 5	隅丸長方形	138	78	39	銭貨	1面
1	G	SK 27	長円形	116	90	30		2面
1	D	SK 46	長円形	98	82	15	銭貨	1面
1	D	SK 48	長円形	170	138	16	銭貨	1面
1	F	SK 49	長円形	(210)	(140)	(20)		1面
1	E	SK 57	長円形	172	115	50		1面
1	B	SK 68	円形	190	184	56		1面
1	D	SK 80	不整形	365	245	33	木製品 銭貨	3面
1	F	SK 89	長円形	86	68	16	銭貨	2面
1	F	SK 90	長円形	374	226	25		2面
1	D	SK 92	不整形	630	358	60	木製品 金属製品 骨角製品 ガラス製品 銭貨 ハクチョウ ウシ 魚類	1面
1	G	SK 101	円形	86	65	29		3面
1	F	SK 102	隅丸方形	*196	175	13	金属製品 スラグ	1面
1	F	SK 104	長円形	82	82	44	金属製品	2面
1	F	SK 105	長円形	284	104	9		2面
1	C	SK 109	不整形	*110	*110	105	銭貨	2面
1	C	SK 111	不整形	360	*322	88	銭貨 (宝水通宝)	2面
1	B	SK 116	不整形	*280	220	40		2面
1	B	SK 117	長円形	315	200	49	銭貨	2面
1	B	SK 122	不整形	310	*190	25		2面
1	F	SK 123	長円形	*168	270	68		2面
1	F	SK 125	長円形	*80	96	-		1面
1	A	SK 126	長円形	200	*135	50	金属製品	2面
1	F	SK 127	長円形	-	60	92	金属製品	1面
1	F	SK 128	不整形	*490	*294	57	スラグ 金属製品	2面
1	F-G	SK 129	円形	78	72	41		2面
1	F	SK 139	不整形	*490	*294	57	金属製品 銭貨 骨角製品 カモ マダイ	2面
1	F	SK 140	長円形	270	142	106	銭貨 金属製品	3面
1	H	SK 142	長円形	224	140	52	銭貨 ウミガメ	2面
1	H	SK 143	隅丸長方形	310	172	29	ニホンジカ	2面
1	H	SK 144	円形	180	164	38		2面
1	H	SK 145	不整形	*480	260	88		2面
1	G	SK 146	長円形	*120	150	36		2面
1	G	SK 147	長円形	134	66	17		2面
1	G	SK 148	円形	48	46	12		2面
1	F-G	SK 149	長円形	*232	184	91	銭貨 スラグ 輪羽口	2面
1	G	SK 150	長円形	*230	*160	65		2面
1	G	SK 151	長円形?	*240	*110	33		2面
1	H	SK 152	長円形	*300	180	116	金属製品 銭貨	2面
1	H	SK 153	円形	126	120	56		2面
1	F	SK 154	隅丸方形	320	316	56		3面
1	F	SK 156	円形	61	55	21	粘土土坑	2面

*: 残存値 (): 推定値 スラグについては大量出土の土坑のみ記載



第13図 1地区 SE 実測図①(1/50)

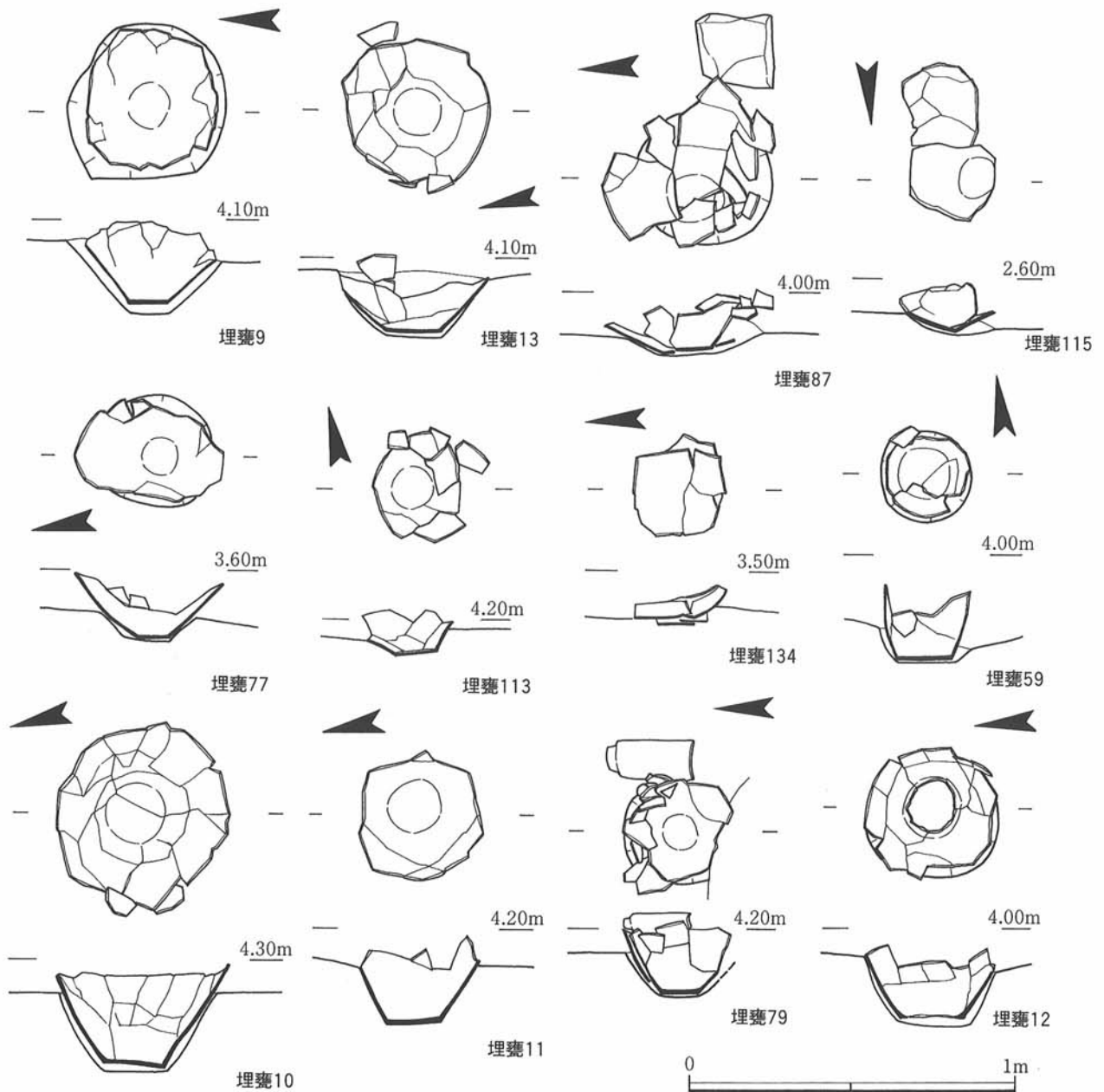
や、遺物の堆積状況が上下で区別されることから、2つの土坑と判断した。内部には多量の木製品や陶磁器が廃棄されていた。SK68はB区で石列58より西側の3面整地面に掘られた浅い土坑。位置的に建物内部とみられるが用途は不明。SK109、111はC区の西端で検出された不整形な廃棄土坑。宝永通宝が出土していることから18世紀初頭ごろの時期が考えられる。SK48はD区の石垣47天端と同レベルにある1面整地層上で検出された土坑。広東碗などの出土遺物から18世紀末から19世紀にかけてのものとみられる。この時期の遺物がまとまって出土する土坑は他にSK46、49、90と少なく、遺

物の組成を考える上で良好な資料である。SK140はG区の中央で検出された長円形の深い土坑である。SK123、128、139、142～146、149～153はF～H区にわたって掘側に集中し検出された土坑群で、石垣52が構築された基底面である2面から掘り込まれている。内部からは大量の陶磁器、スラグ、輔羽口、金属製品が出土し、廃棄土坑であったことがうかがえる。これらは短期間の内に相次いで掘られ、廃棄の場として使用されたとみられる。

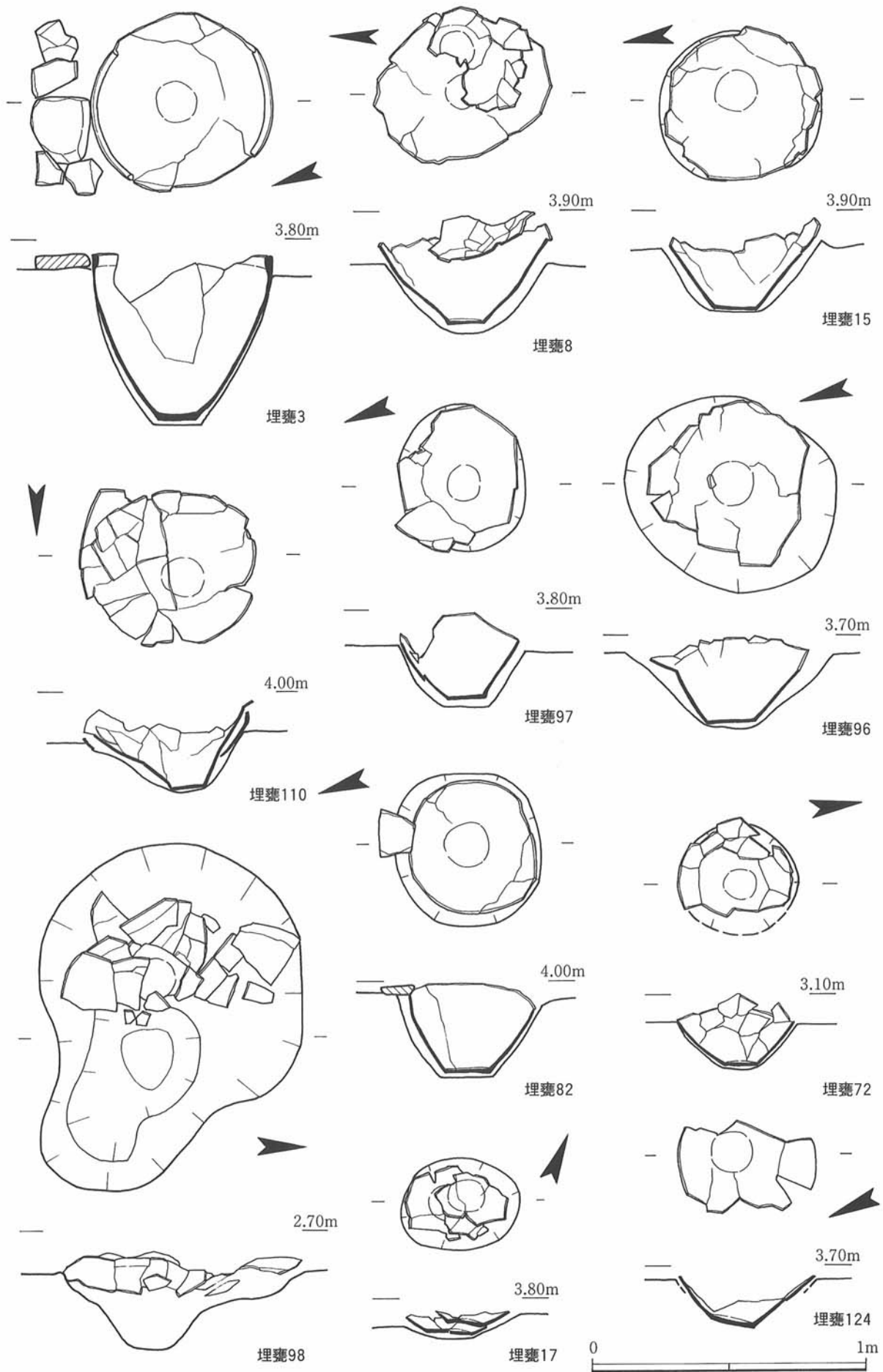
井戸（第13図 図版10）

調査では7基の井戸が確認された。このうち2面検出のSE38を除く他の6基は1面で確認されたものである。いずれも覆屋をしめす周辺の柱穴、礎石はみあたらない。

SE23は1面ですでに井戸上面が検出されていたが、この時点での井戸の掘り形は未検出である。

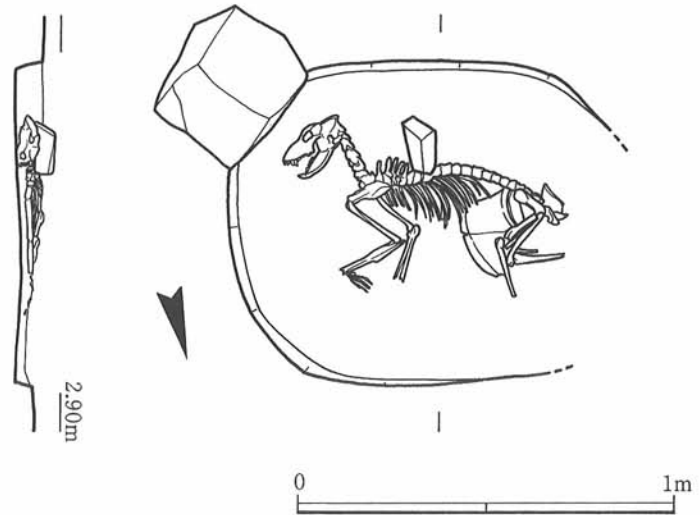


第14図 1地区埋壙実測図①(1/20)



第15图 1地区埋葬实测图②(1/20)

2面まで掘り下げると井戸周辺に石列が円形に巡ることが判明した。おそらく掘り形はこの石列下とみられる。つまり当初のSE23は2面に構築され、その後生活面の嵩上げに伴い1面まで積み増しされたとみられる。なお第13図には2面での実測図を掲載した。石列の径約3.6m。井戸内径0.65~1.15m。井戸最下面までは未掘である。SE18は1面で検出。この面では掘り形は検出されていないが、先述のSE23同様積み増



第16図 1-ST114実測図(1/20)

しであるかは不明である。掘り形は長円形で4.1~4.55m。井戸はやや北側に寄って構築される。井戸内径は上面で1.0~1.1mであるが、底に下がるにつれて径が広がる。最下面には玉砂利を敷き詰め中央に木製の桶が井戸筒として設置してあったが、東側からの湧水が著しいため、図化はしていない。SE19は1面に構築された。内径は72~75cm。掘り形は円形で2.1~2.2mを測る。掘り形にそって壁面の強化のため橙色粘土が厚く塗られていた。また輪郭に沿って平瓦をたてて埋め込んだ瓦列が認められた。最下面までは未掘である。SE25、156は1面で検出。両者とも天端の石が切石であることから近代まで使用された井戸とみられる。またSE38は内径40~50cmと他の井戸と比べて小型の井戸である。2面で検出したが、他の例から小規模の井戸は古い傾向があるので、帰属する面でも時期が遡る可能性がある。

埋甕 (第14、15図 図版8)

地中に土師器または陶器の甕を埋めた遺構で、調査では1ないし2面から25基が確認された。ほとんどが攪乱や上部の整地などによって甕の上半部を欠損している。検出される位置は建物部分から離れた敷地の西側が多い。建物付近にみられるのは土師質の大甕ではなく陶器の甕を埋める傾向にある(埋甕59、79)。遺構のほとんどが単独で発見されるが、中には9、97のように2基を並べておいたものもある。また埋甕はある部分に集中して検出される場合や、8、17のように底部が2個体出土し、重ねて置いたとみられる例もある。これは埋甕を何度も作り直したことによるものと考えられる。埋甕の構築方法は、土坑を掘りその中に甕を設置する方法と、生活面の嵩上げに伴い甕の周囲に客土して整地面を構築する方法の2種類があるとみられる。後者は平面および断面観察で埋甕を設置する土坑の輪郭が検出できないことから判断される。土坑中に埋める甕は埋甕3の例から口縁肥厚帯より口縁部にかけて地表面に露出させたとみられる。柱穴や支柱を支える礎石などの付帯施設が明確な例はない。ただ石囲い遺構であるSF69と埋甕98は隣接して検出されたことから、関連施設の可能性がある。内部からの出土遺物はほとんどないが、埋甕124からは埋甕の底面に銭貨20枚が出土した。用途は内面に白色のカルシウムまたは石灰分が付着していることから、便槽に使用された可能性が高い。

ST114 (第16図 図版7)

C区建物礎石群のほぼ中央に検出されたイヌの埋葬遺構である。他の礎石の基部とレベルが一致することや礎石の配列との関係から、建物の軒下に位置する。墓壙は長径105cm、短径86cm、深さは東端で7cmと浅い。イヌの骨は指骨の一部が欠落するが、ほぼ完全な形で残存していた。埋葬姿勢は側臥で頭位は東となり、墓壙の主軸は建物の棟方向に平行している。イヌは骨鑑定によれば、雄の成犬で、老齢、中型犬であり、足には骨折痕が認められる。副葬品は無いが腰骨下には陶器灰釉鉢(須佐唐津か)の破片が出土した。なお検出地点が建物の軒下とみられることから行き倒れの自然死とも考えられるが、僅かながら墓壙や盛土の確認ができたことや骨格が荒らされずほぼ完全な形で残存していたので、埋葬遺構と判断した。

瓦溜遺構 (図版9)

瓦溜61はC区の2～3面、石列157の西側に隣接し検出され、礎石群とほぼ同時期とみられる。長軸1.7m、短軸1.2mの長さで平石と丸瓦で2辺を囲み、その中に棧瓦片、巴文軒丸瓦片などが約50点ほど出土した。用途については不明。調査では他に瓦片がまとまって出土する例はない。

瓦列 (図版9)

瓦列とは平瓦や丸瓦を転用して地中に埋め込んだものである。用途として敷地内の区画や、花壇などの囲い、排水溝の側溝壁などが認められる。検出例としてはB区瓦列54、D区瓦列70やE区SE19の周囲を取り囲む瓦列などがある。

排水溝 (図版3)

雨や生活排水を流出させるために石組の排水溝が検出された。いずれも堀側へ排出するため西側へ傾斜していく。B～C区排水溝7は井戸などの水まわり施設に付随して構築されているが、A区排水溝39、F区排水溝60は敷地境と並列またはその位置に構築されることから敷地境の機能も有しているとみられる。構造的には幅30cm程度で石を1段積みにし、底面に敷石を有するもの(39、7)とないもの(60)とがある。また3面のSD155は素掘りの溝状遺構で、壁面に橙色粘土を薄く貼っていた。上記の排水溝とは流路の方向や構造が異なり、生活排水路とは異なった施設が考えられる。

(2) 平成10年度の調査

調査は平成9年度の継続である1-J区からQ区と、2地区の2カ所について実施した。

A 1地区 (第17～30図 図版11～17)

4つの遺構面を検出。平成9年度調査区の北側にあたり、9年度調査の遺構面とほぼおなじ4つの面設定を行った。

1面 (第18図)

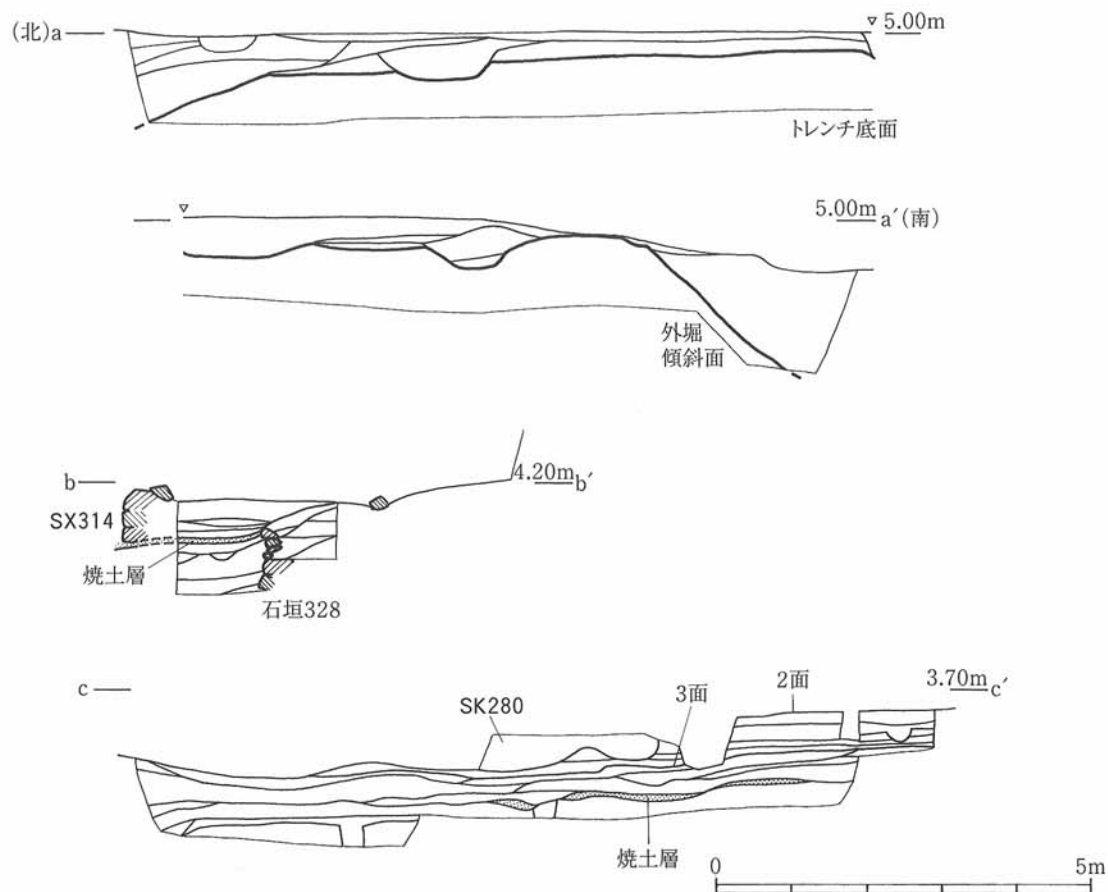
広東碗出現以降、すなわち18世紀末から19世紀を中心とする時期で、一部近代に継続される遺構もある。確認された敷地はJ区、K区、N区でいずれも石垣の天端のみが検出された。L、M区では建物跡を想定させる遺構は検出されていない。石組の地下室であるSX314は遺構のレベルからすると1面に帰属するが、他の石垣との構築関係からこの施設の主たる時期は2面とみられる。この区ではL区との境に排水溝207があり、井戸2基、土坑16基、埋甕3基が区の北半に集中する。L、N区は区の西側で土坑5基や石列、埋鉢などが集中して検出されたように遺構が密である部分と、そうでない

部分が明瞭に分かれる。おそらく遺構が粗である部分が建物部分とみることができよう。N区以北ではSE203、204、209が調査区北西角にまとまって検出された以外、石列、石垣など建物を想定する遺構は検出されていない。明治初期の土地利用図によれば宅地から畑地に転用されている場所があり、畑地化によって建物の基礎施設が残存していない可能性がある。

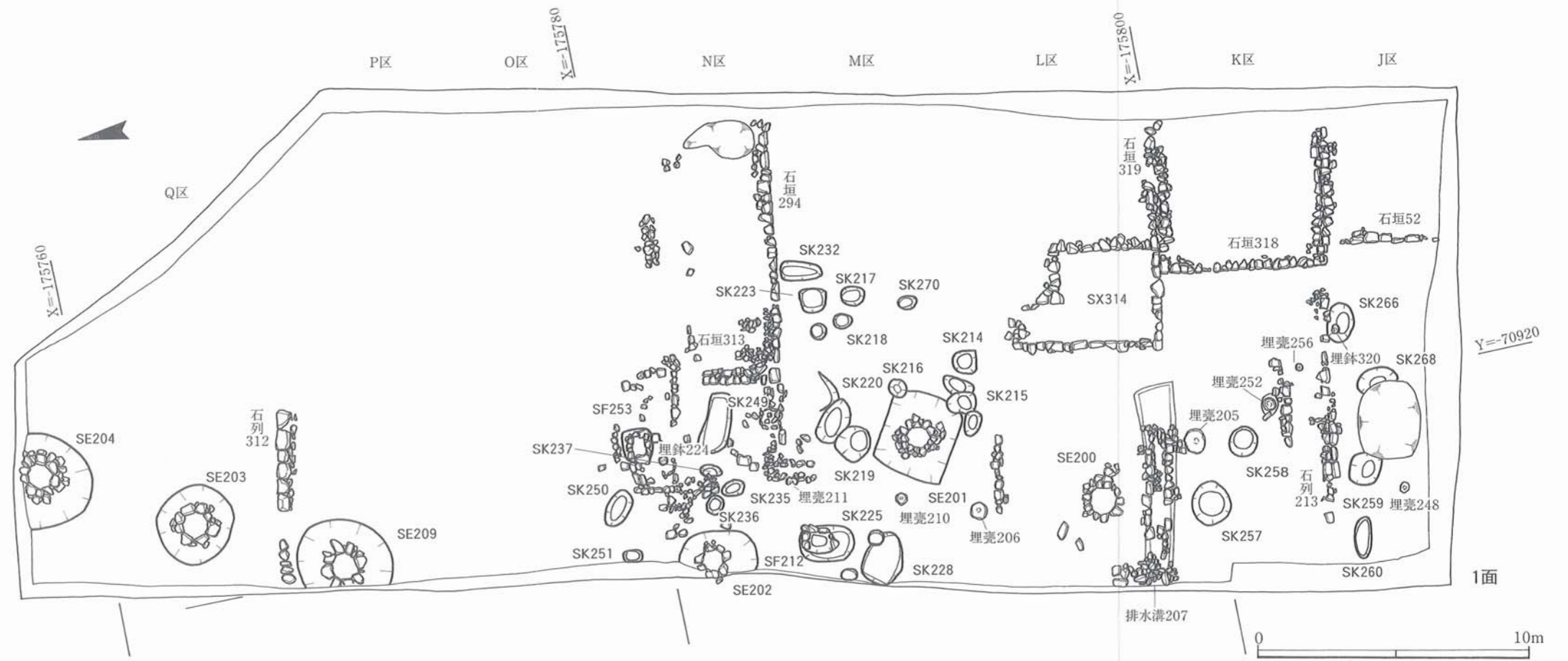
2・3面（第19図 図版12）

石垣52をはじめとする建物部分の石垣が構築された時期である。出土遺物から17世紀末から18世紀中頃までとみられる。

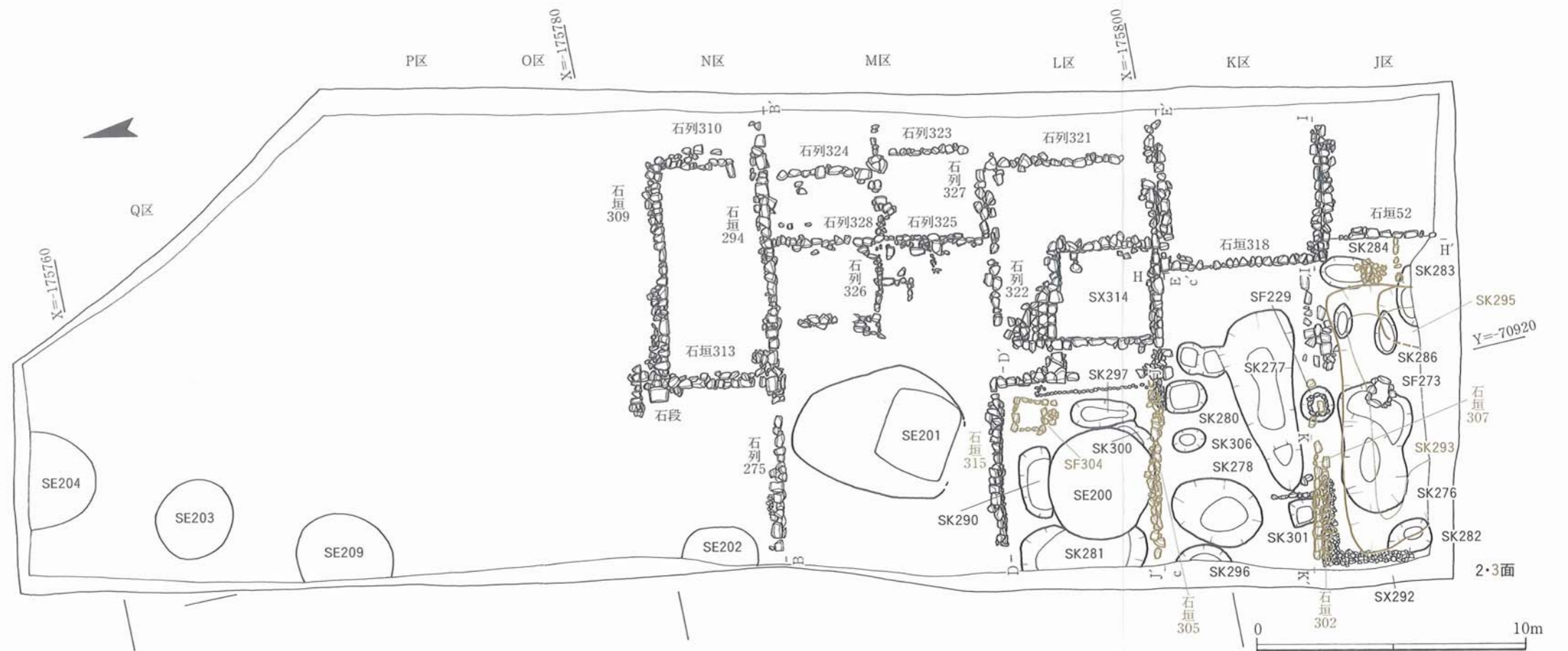
J区では9年度調査で検出された石垣52の続きが認められた。これによって石垣52は1-H~J区にかけて20.7mの長さで構築されていることがわかった。石垣52以西ではK区の境として3面で石垣307が築かれ、この上面が遺構面となる。この面では調査でもっとも大型の廃棄土坑であるSK293が位置する。2面では石垣307上に瓦片を積み重ねた区画施設であるSX292が位置し、SK276などが検出された。K区は石垣318によってコの字形に石垣が構築されて建物部分となっている。間口は6.1m。石垣より以西にはSK293に続いて大型の廃棄土坑SK277など土坑が密集する。L区はSX314を中心とする遺構で、間口は5.8m。SX314は石組の地下室であることからこの上部に覆う建物が構築されたとみられる。なおSX314の入り口である石段方向にはM区との境を示す石列がない。これだけを見るとL区、M区はひとつの敷地内にあると考えることができるが、両区の敷地境が石列322と327で両側から石列が組まれていることから、異なった敷地と判断した。SX314より西にはSE200があり、この周辺に土坑が検出された。SE200はほぼL区の中央であることから、L区の井戸として使用されたと



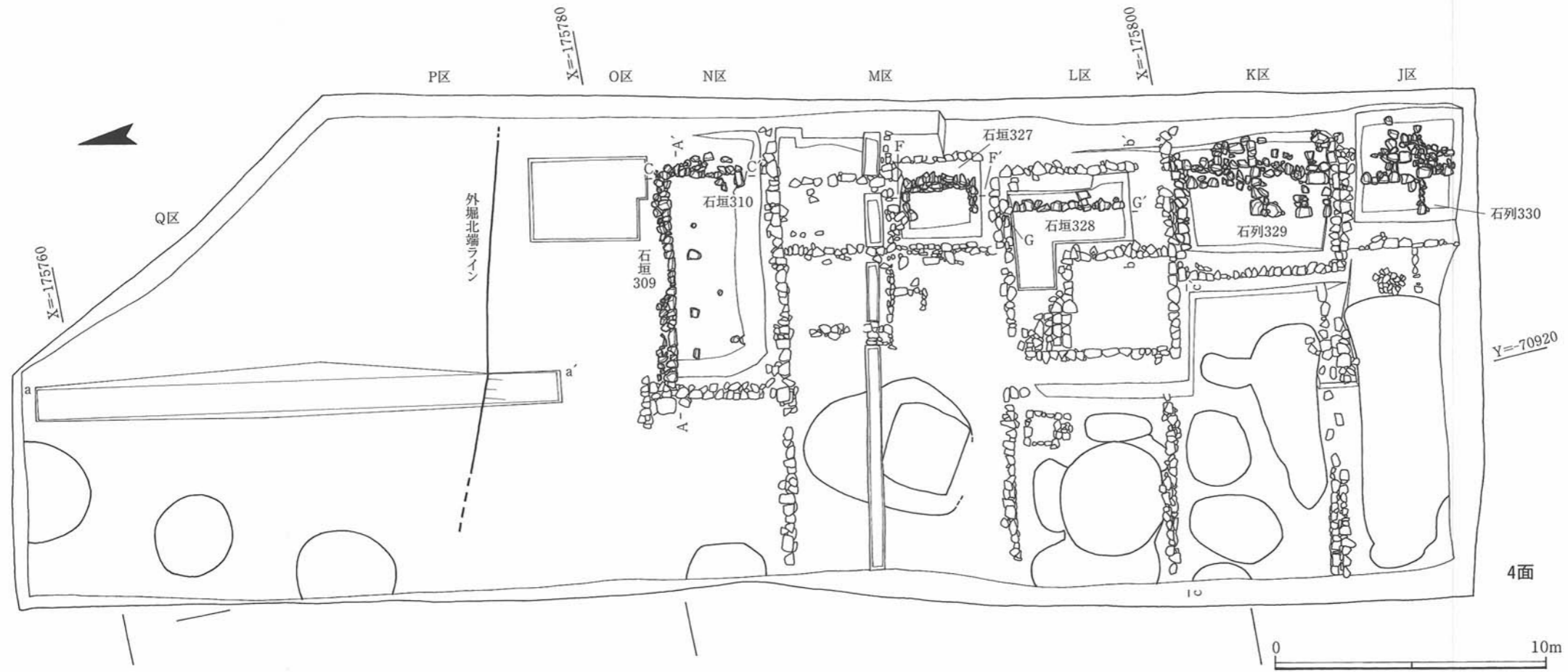
第17図 1地区土層断面図(1/100)



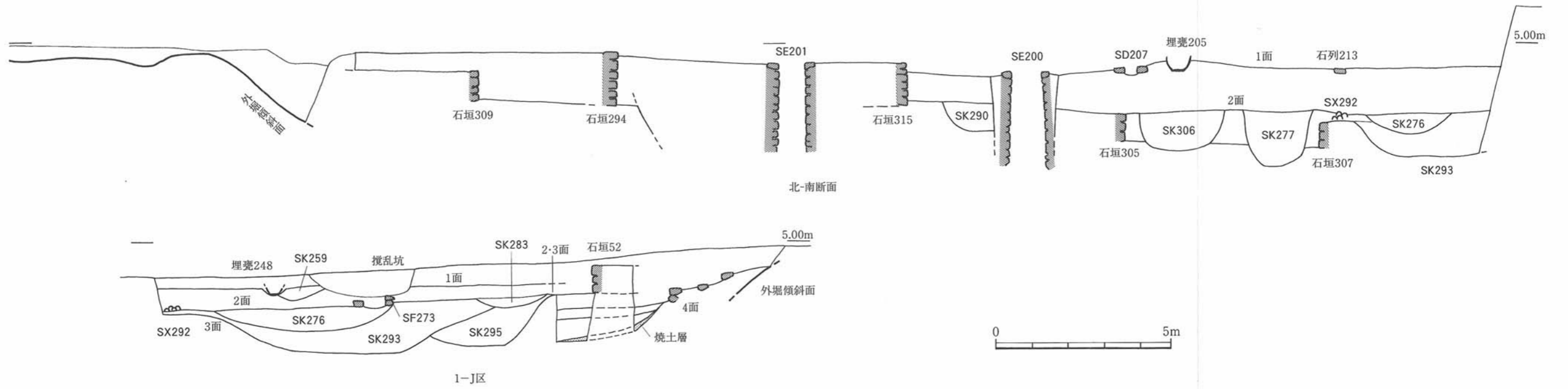
第18图 1-J~Q区遺構配置図①(1/200)



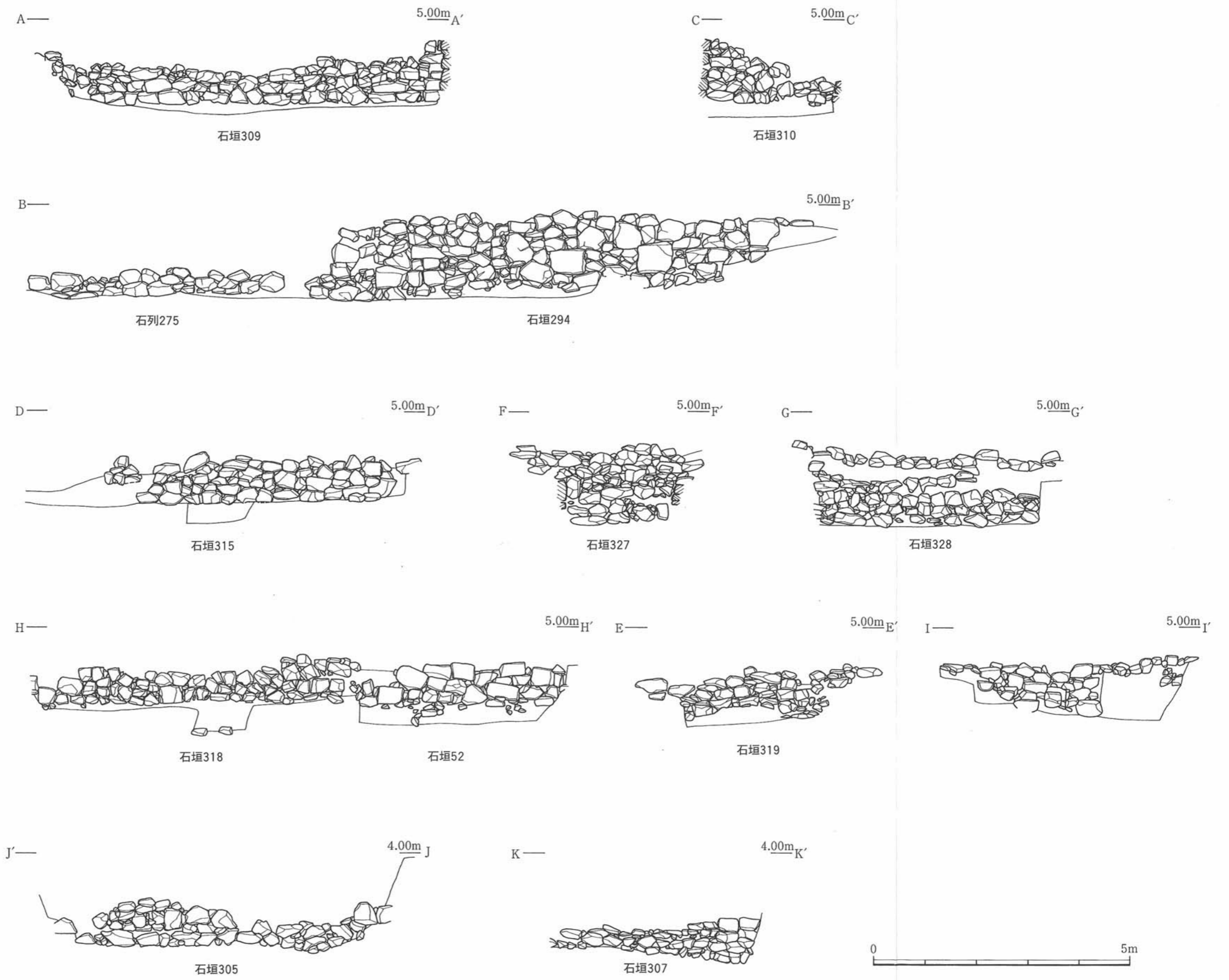
第19图 1-J~Q区遺構配置図②(1/200)



第20図 1-J~Q区遺構配置図③(1/200)



第21図 1-J~Q区断面模式図(1/125)



第22图 1地区石垣立面实测图③(1/80)

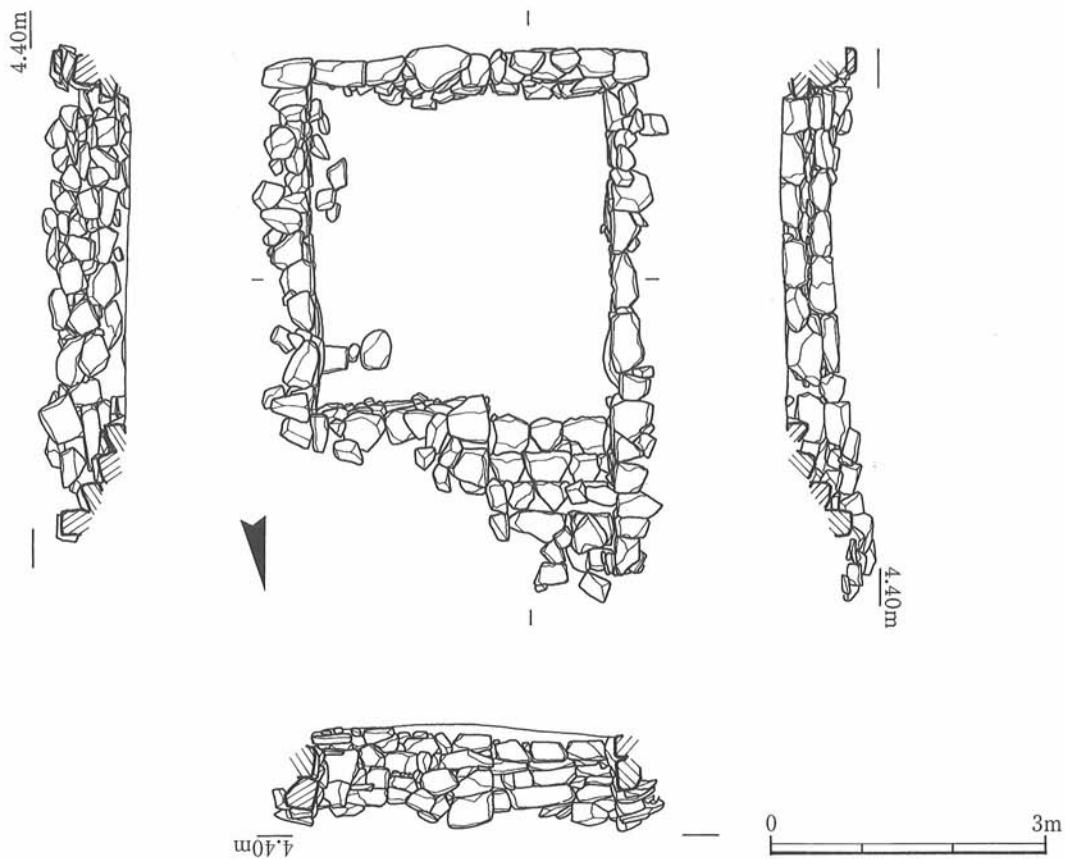
みられる。M区は間口7.8m。石列326に南北の石列323、324、325、328が配置される。N区は石垣294から石垣309までとした。石垣294、313は高さ約1.6mで、他の石垣に比べ基石となる石材が大型であるのが特徴である。

4面（第20図 図版13）

2・3面遺構より古い時期の遺構を部分的にトレンチ調査によって確認したものである。9年度調査と同様石垣52、318が構築された以前の遺構で、調査区東端に検出された。部分的な調査であるため、4面の時期の町屋敷地範囲を指摘できるほどの資料はないものの、外堀傾斜面にあわせて並べられる石列や土留めの役割を果たす石垣327は9年度調査同様古相を示す。またN区では石垣309に伴う礎石も検出された。これらは初期町屋建物の基礎となる遺構であり、時期は17世紀後半頃までのものと考えられる。また東西トレンチによる土層観察では2・3面の形成に焼土層が客土として用いられていることがわかった（第17図）。さらにO～Q区の南北トレンチによって当初の外堀傾斜面を確認することができた。この傾斜面上には薄く橙色粘土が貼られていたのが特徴である。平面範囲はほぼ南北へ直線的にのびていることから、外堀の北端線にあたると考えられる。傾斜角度は30～40°。外堀内の埋土は暗黄灰色砂で地山である黄灰色砂層とさほど質的に変化がなく、分層も難しいことから外堀掘削後、自然の流入砂も含めて短期間で埋まったとみられる。以下遺構別にその概要を述べる。

SX314（第23図 図版13）

L区に検出された石積みによって構築された地下室である。内法は南北3.3m、東西3.3m、高さ96cm。北側には床面に降りる4段の石段を設ける。南壁面は石室の外へ面を向け、それ以外の壁面は内側に

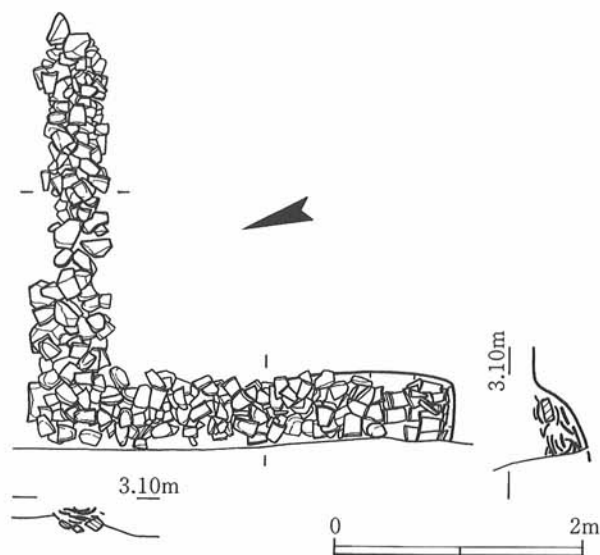


第23図 1-SX314実測図(1/80)

面を向けている。つまりまず敷地境の石垣がつくられ、その後に直交する東・西壁面を積んで構築した状況がみてとれる。石積みは西壁で2段、石段のある北壁は4段、東面壁は3～4段で、西壁がもっとも丁寧な積み方をしている。床面は平坦でやや堅くしまっている。埋土は単一層で一斉に埋められた状況を示している。構築順位や遺物の時期より2面から1面まで使用されていたと考えられる。なお基底面には薄い焼土の堆積が認められた。

SX292 (第24図 図版13)

J区とK区敷地境の、調査区端で検出された。遺構面は2面。遺構は多くの瓦片と礫からなり、長さ東西3.5m、南北3.4m、幅56cm、J区を取り囲むように折れ曲がっている。礫を基底面に不規則に並べ、その上に瓦片を高さ約20cmほど積み上げています。基本的には整地面に直接置くが、南端部分は幅56cm、長さ1.6mほど溝状に掘り込んで、その中に瓦を集積している。使用される瓦は、輪違いなどの棟込瓦を使用し、平瓦、軒平瓦はほとんどない。輪違いは完形のものが多くそれを丁寧に積み重ねることで基壇状にしているところもある。

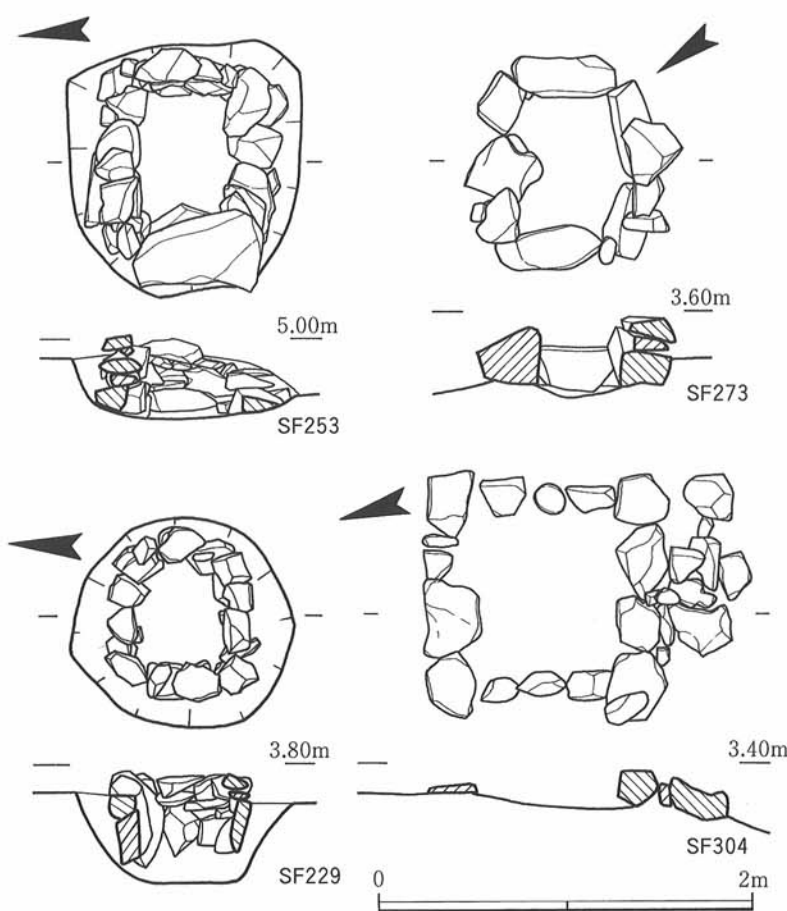


第24図 1-SX292(1/60)

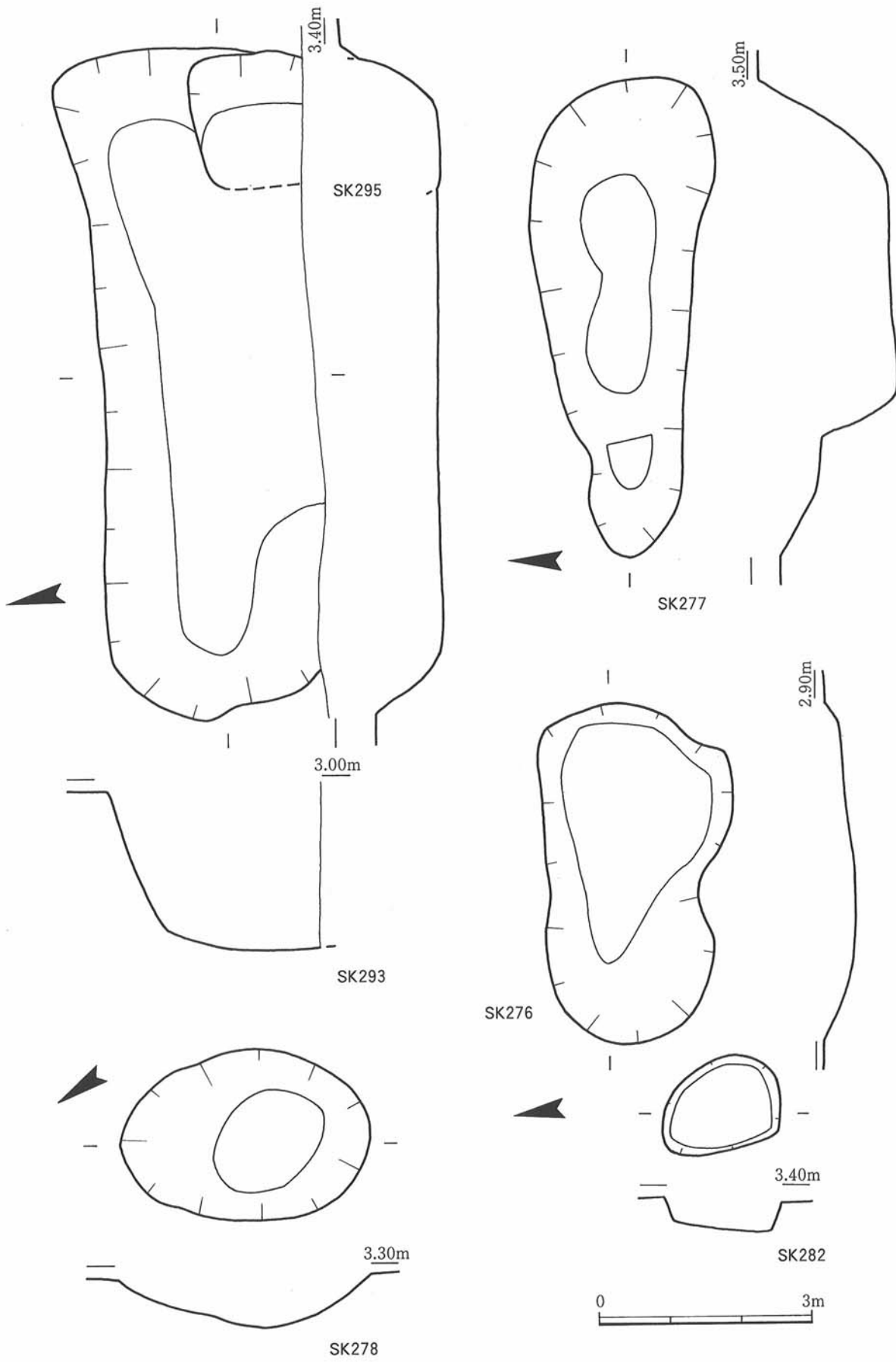
下層に検出された石垣302とほぼ平面位置が一致することから、2～3面にかけての時期に敷地境として作られたものであろう。なお敷地境の施設としては部分的で、下層の石垣302、石垣307もほぼ同じように途中で途切れている。この空白部分は明瞭な上部からの攪乱跡が見あたらないことから、隣の敷地への出入口口であった可能性もある。

石囲い遺構・石積み遺構 (第25図 図版14)

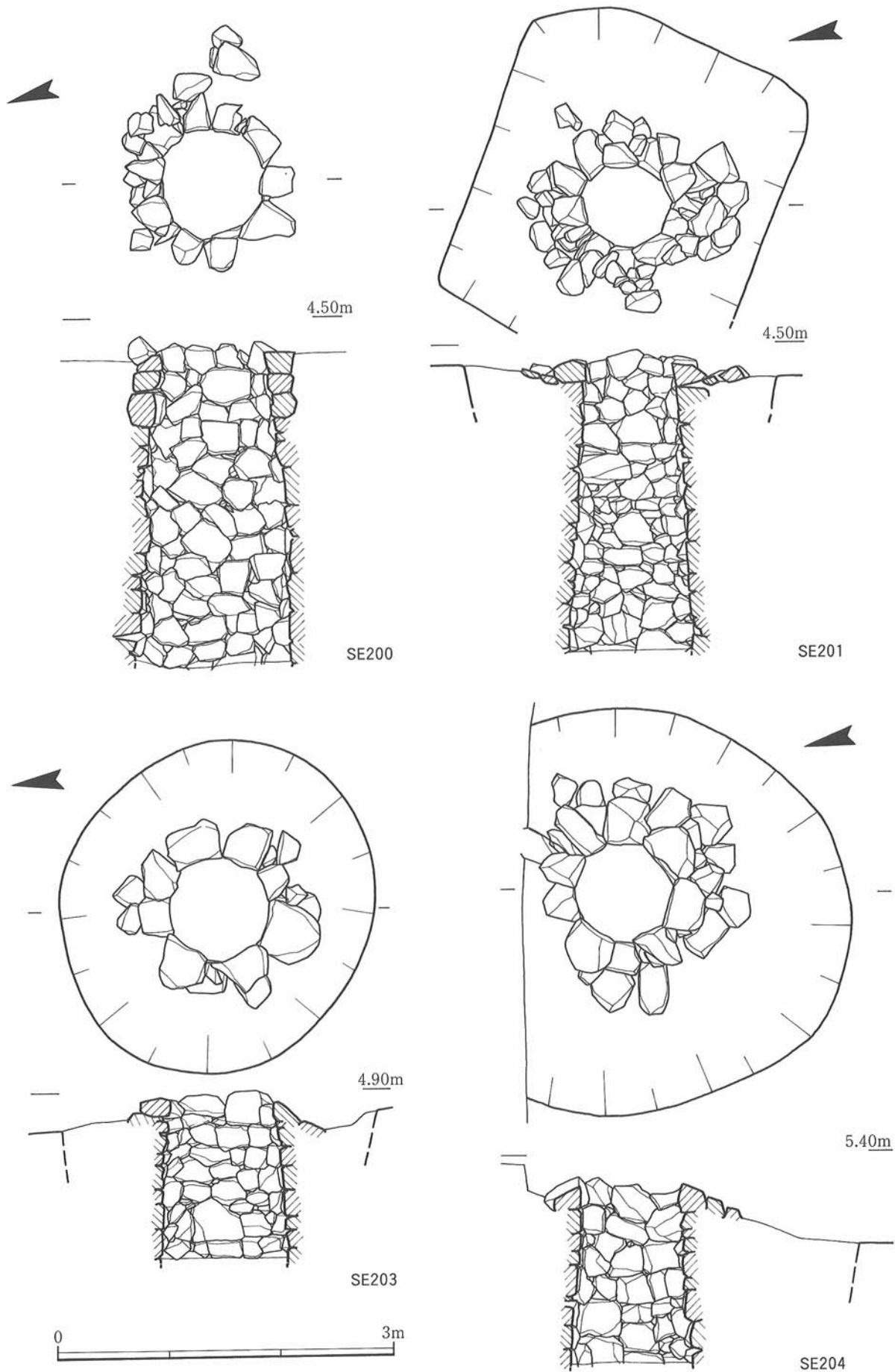
6基検出され、このうち、石囲い遺構のSF273、304、石積み遺構のSF253、229について述べる。SF253はN区で検出。1面。内法の長軸75cm、短軸45cm、残存する高さ40cm。長径1.36m、短径1.24m



第25図 1地区 SF 実測図②(1/40)



第26图 1地区 SK 实测图③(1/80)



第28图 1地区 SE 实测图②(1/50)

土坑（第26、27図 図版14、15）

49基の土坑を検出した。土坑は規模形態から2種類に分けられる。ひとつは大型の土坑で、1mを超える深さを有するもので、平面形は町屋敷地の方向に沿うように東西に長細く、2～3面に多く検出された。他方の小型土坑は1面から掘りこまれた例が多い。

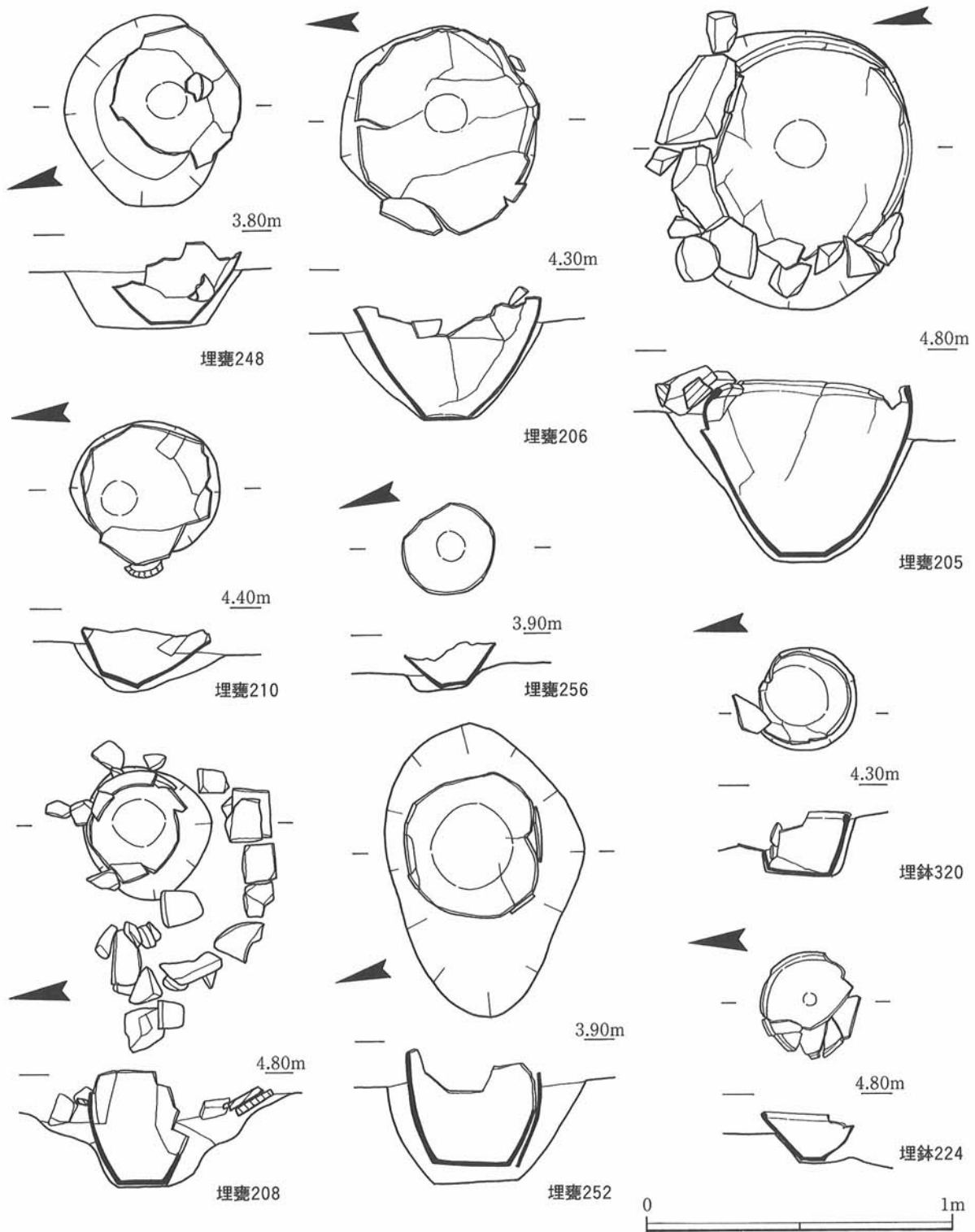
大型の土坑としては以下のものがある。SK293は検出された土坑の中で最も大型のもの。隅丸長方形で、長軸8.38m、深さは1.22m。南半部分が調査区外であり未掘であるが、おそらくSK293が帰属する敷地幅いっぱいまでひろがる可能性がある。東端でSK295と重複し、SK293が時期的に新しい。床面は平坦。遺物土状態は底面近くで多くの遺物を含む層があり、その後遺物をあまり含まない堆積層があって、中位から上面にかけて再び多くの遺物を含む層が確認された。この上下2層からは大量の陶磁器や木製品、金属製品、スラグが出土し、他にイヌ、ウシ、クジラ、ニホンジカなどの獣骨も発見された。少なくとも二回にわたり廃棄土坑として機能していたことがうかがえる。また規模や形態、出土量の多さから一敷地のものというよりも共同の廃棄土坑の可能性もある。SK277はK区2面から3面。長軸6.6m、短軸2.8mの細長い長円形で深さ2.17mを測る。土坑内の西端にテラス状のたかまりがある。床面はほぼ平坦。SK293と同様に大量の陶磁器と木製品が出土し、共同の廃棄土坑の可能性もある。SK278はK区2面。長円形で長軸3.4m、短軸2.36m、深さ94cm。SK276はJ区の2面で検出。不整形で、長軸4.8m、短軸2.7m、深さ40cm。位置的にSK293の上部にあたるが、SK293の上層とは区別された。SK282はJ区2面。長円形で長軸1.86m、短軸1.2m、深さ35cm。SK306はK区の2面で検出。不整形で長軸2.78m、短軸2.3m、深さ1.01mである。SK280はK区2面。長方形で長軸1.64m、短軸1.28m、深さ46cm。

井戸（第28図 図版15、16）

6基を検出しこのうちの4基について報告する。6基の井戸はいずれも1面で使用されていたが、SE200、SE201については2・3面からの継続使用が考えられる。SE200はL区。内径90～98cm。1面での検出時は掘り形が未確認であったが、2・3面で径3.0～3.8mであることが明らかとなった。SE201はM区。内径70～74cm。1面では方形の2.6～3.0mであったが、2・3面では長径6.2m、短径4.8mの大型の掘り形が検出された。作業用の場所を確保するためか石組の位置が掘り形の南側に偏っている。上下面でのプランの違いは、2・3面から1面に生活面の嵩上げが行われた際に周囲の盛土をし、その後再度掘り込んで井戸石組の積み増しを行ったためとみられる。SE203はQ区。内径92cm、掘り形2.82～3.0m。204は内径85cm、掘り形3.65mである。なおいずれの井戸も最下面までは掘り下げていない。

埋甕・埋鉢（第29図 図版16、17）

10基の埋甕、埋鉢を検出した。このうち320は土師器の鉢を、224は陶器灰釉鉢を地中に埋めたものである。埋鉢とした。陶器甕を使用した例は埋甕252のみである。埋甕は上部が削平され残存していないものがほとんどであるが、埋甕205はほぼ完全な形で検出され、埋置の状況がよく分かる例である。これをみると大甕は口縁部の肥厚部分を地中に露出させており、他例でも大甕の体部にそれをしめず器壁の色調の違いが認められる。



第29図 1地区埋甕・埋鉢実測図③(1/20)

B 現道トレンチ調査 (第30図 図版17)

調査区の東に隣接して南北にはしる今魚店金谷線道路は、江戸時代絵図にも描写され、江戸時代から継承された道路である。平成10年度調査では旧宅地部分だけでなく、この現道も一部調査対象として発掘調査を実施した。調査は埋設された下水道、上水道による攪乱を比較的受けていない部分、す

なわち道路西端のコンクリート側溝をはさんで、幅2m、長さ4.2mの規模でトレンチを設定した。

トレンチの北および南面の土層観察によれば以下のことが明らかとなった。トレンチの東側（道路中央側）にかけて下水道埋設坑があり、側溝埋設坑も深さ約50cmを測る。そのため道路部分で江戸時代の旧状を残す部分は側溝あたりから西側で、このうち側溝埋設坑の攪乱を受けていない部分であることが判明した。地表面より約40cmは近代以降の盛土であり、その下面に調査区で確認されたのと同様な基盤層（砂層）が検出された。この上面には橙色粘土が薄く5mm以下の厚さで貼ってあり、平面的にはトレンチ南側で部分的に確認された。おそらく全面的に貼ってあった可能性がある。さらにこの面より幅85cm、深さ25cmの落ち込みが検出された。平面的には橙色粘土の残る部分でしか検出できなかったが土層断面でも観察されたことから、南北に走る溝状遺構であるとみられる。現側溝と重複する位置にあり、埋土から19世紀の萩焼碗片が出土していることから、江戸時代の道路側溝の可能性が高い。ただ部分的な調査であることから、道路遺構であることを確定するには、今後の調査資料の増加が望まれる。

C 2地区（第31～43図 図版18～24）

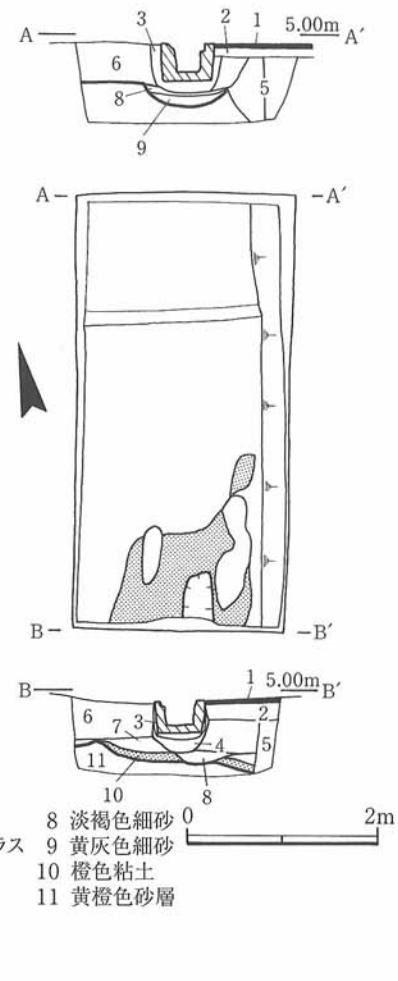
2地区は北の惣門通りの北側にあたる地区である。ここでは遺構面を3面検出した。また遺構検出に際して第1焼土層と第2焼土層の2つの焼土層を検出した（第31、37図）。第1焼土層は主に2面遺構の構築に伴うもので、第2焼土層は外堀傾斜面の直上で検出されたことから町屋構築以前の堆積と判断される堆積土である。この2層の焼土層は当地区における町屋構築と遺構面の設定を行うにあたっての重要な鍵層となるものであり、2・3面遺構調査の重要な資料となった。

なお天和元、2年絵図の描写によると当地区のA区が「品川玄良」の屋敷地にあたる。

1面（第34図 図版19）

明治初期には北半部が宅地、南半部が畑地として利用されていた地区である。敷地範囲はA・B区で石垣13による逆L字型の区画、C・D区、E区が可能性としてあげられる。検出された遺構は石列、排水溝、集石遺構、埋甕5基、胞衣埋納遺構1基である。時期は1面整地層からの出土遺物に広東碗を含むことから18世紀後半から19世紀前半とみることができる。なおA区で確認された攪乱坑は昭和61年度調査のB地点トレンチとみられる。

A、B区の逆L字の敷地は、北辺が道路まで推定約5.5m、東辺の北の惣門通りまでの距離推定約12mであり、石列上に径50cmの礎石が並ぶ。B区西端からD区までの敷地は、東側間口



第30図 現道トレンチ実測図(1/80)

幅が8.5m、南北最大幅が13.2m。東端には長軸6.1m、短軸4.5mの範囲で集石遺構が認められた。この遺構は大小さまざまな石材がまとまって検出されたもので、廃棄や整地、建物基礎の根固め等の性格が考えられるが、詳細な性格は不明である。排水溝14は長さ8.6mで、2列が並んで検出された。

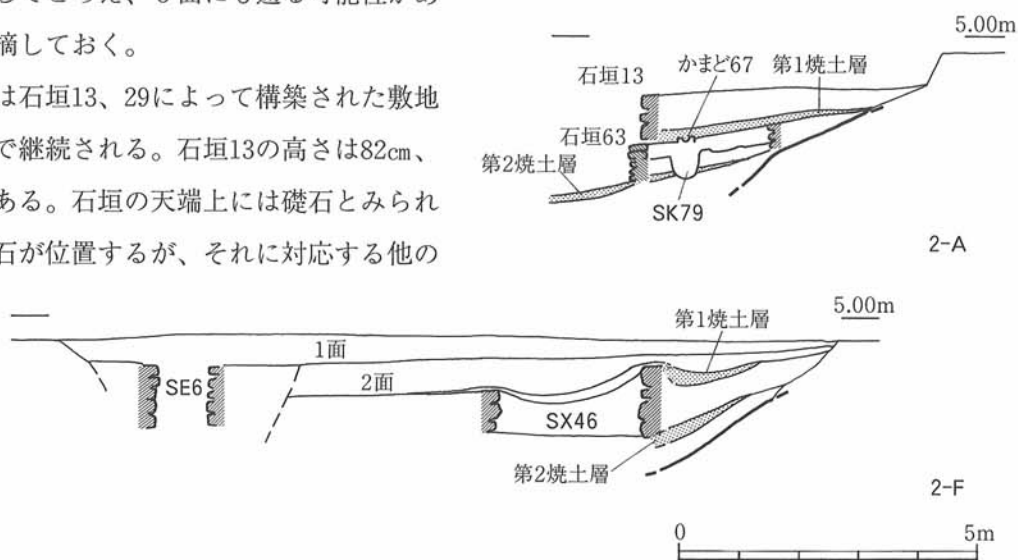
E区は間口約4.0mと細長い敷地である。F区より北側は明瞭な敷地境を示す石垣、石列がみあたらないが、2・3面から継続してあるならば石列34あたりが境となる可能性がある。そうした場合F・G区の間口は9.7mを測る。H、I区は調査区内で北側の境が検出されていないため、間口幅は不明である。

2面（第35図 図版19）

2面は1面で敷地境と想定される石列、石垣およびその付帯施設や構築上関連のある遺構を残しつつ、確実に1面に帰属する集石遺構や排水溝14などを除去して掘り下げ、敷地境を明確にした遺構面である。1面へ連続して使用される石垣天端もあり、基本的な敷地の区画は江戸時代を通じて継承された事を示している。遺構面の時期下限は広東碗が出土しないことから18世紀中頃となる。

さらにA区、B区、D区、G区で確認された第1焼土層は、内部に焼土塊や炭を多く含むが、陶磁器などの遺物は少ない。焼土層の下面は熱を受けていないので火災にともなう焼土の可能性も低いとみられる。また堆積状況は調査地区全体に分布するのではなく、道路側トレンチで確認され、いずれも厚さ10~20cmで均一な幅で堆積を示すことが多い。石垣、石列の裏込部分で検出される傾向にあることから、建物構築時に石列や石垣の築造、前代の施設の埋め戻しや整地土として人為的に用いられたものとみられる。この第1焼土層は石垣13、29やSX46の裏込で確認されたことから、これらの遺構は焼土層の時期とほぼ同時期に構築されたとみることができる。ところでG・H区でも焼土層が2層確認されたが、その上部の焼土層はH区のSX47を被覆するように堆積していた。今まで述べたように第1焼土層の堆積以後が2面の基準の一つであり、3面に属する遺構と考えることができる。これにはH区の焼土層が他区の第1焼土層と同一層であるかが問題となるが、調査では確認できなかった。ただ遺構構築順序や遺構面のレベルからは2面に属するとみられるので、ここでは2面を中心とする時期としてとらえ、3面にも遡る可能性があることを指摘しておく。

A、B区は石垣13、29によって構築された敷地で、1面まで継続される。石垣13の高さは82cm、29は64cmである。石垣の天端上には礎石とみられる大型の平石が位置するが、それに対応する他の



第31図 2地区断面模式図(1/125)

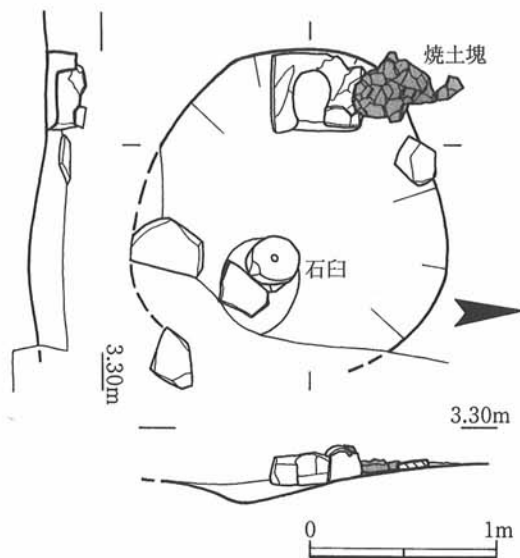
礎石は検出されなかった。B～D区も1面に継続した敷地である。内部の建物石列は一部1面にも検出されていることから、2面から1面のある時期まで継続していたことがうかがえる。石列48、36、31、32などが建物の範囲を想定できる石列で、囲まれた中に東西2列の礎石とみられる大型の平石が位置する。礎石間は南北方向で約1.8m。SE53はこれを囲むように石列が折れ曲がるため、石列の範囲が建物とすると屋内の井戸である可能性がある。なおこの敷地のB区となる部分には、石列30とその南側に1.8～2.2mの距離で礎石列が位置する。この遺構が位置的にC、D区の建物に付随する施設であるのか、A区建物の懸作り工法による張り出し部分であるのかについては今回の調査では明確にはできなかった。E区は石列62、45によってコの字状に囲まれ、石列33から52にかけての幅を敷地とする。間口幅は4.3mである。F区はSX46を中心とする区画で、間口は4.0m。SX46は地下室状の貯蔵施設とみられ、この上部に覆屋となる建物が構築されたとみられる。G区は石垣37、石列34に挟まれた地区とした。中央の集石42とその北側に礎石状の石材が認められるが、明確な建物の範囲を示すまでの資料は得られなかった。H区は石列35と34に挟まれた敷地で間口5.0m。石段があることから床面が一段降りる構造の建物とみられる。石段を有するこの施設をSX47とした。I区は東西方向の石列が検出されたが敷地の範囲を示す北側の遺構が調査区外であるため、敷地の規模は不明である。

なお、2面の時期は17世紀後半から18世紀中頃とみられる。

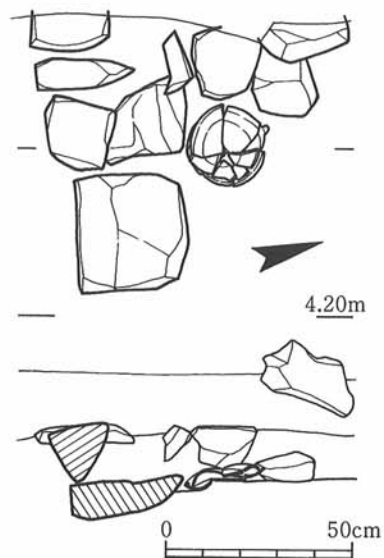
3面（第36図 図版20、21）

2面より以下はトレンチによって下層に遺構の存在が確認されているA～D区について掘り下げを行った。第1焼土層下に検出された遺構またはそれに関連すると考えられる遺構からなる。掘側は上層からの井戸などで調査が難しいため、現道側で主に検出されたが、遺構面の広がりがこの部分にとどまるかどうかは不明である。

土層観察と遺構の前後関係から次のような過程で町屋が構築されたとみられる。当初の外堀縄張りは北の惣門通りを土橋として残して掘削しているのが明らかとなった。これに対して惣門通り側では傾斜面にそって最下層付近で焼土層が堆積している。これを2面の焼土層と区別して第2焼土層とする。第2焼土層内には焼土塊、炭を多く含み、包含された遺物は熱を受けた痕跡のものがある。堆積



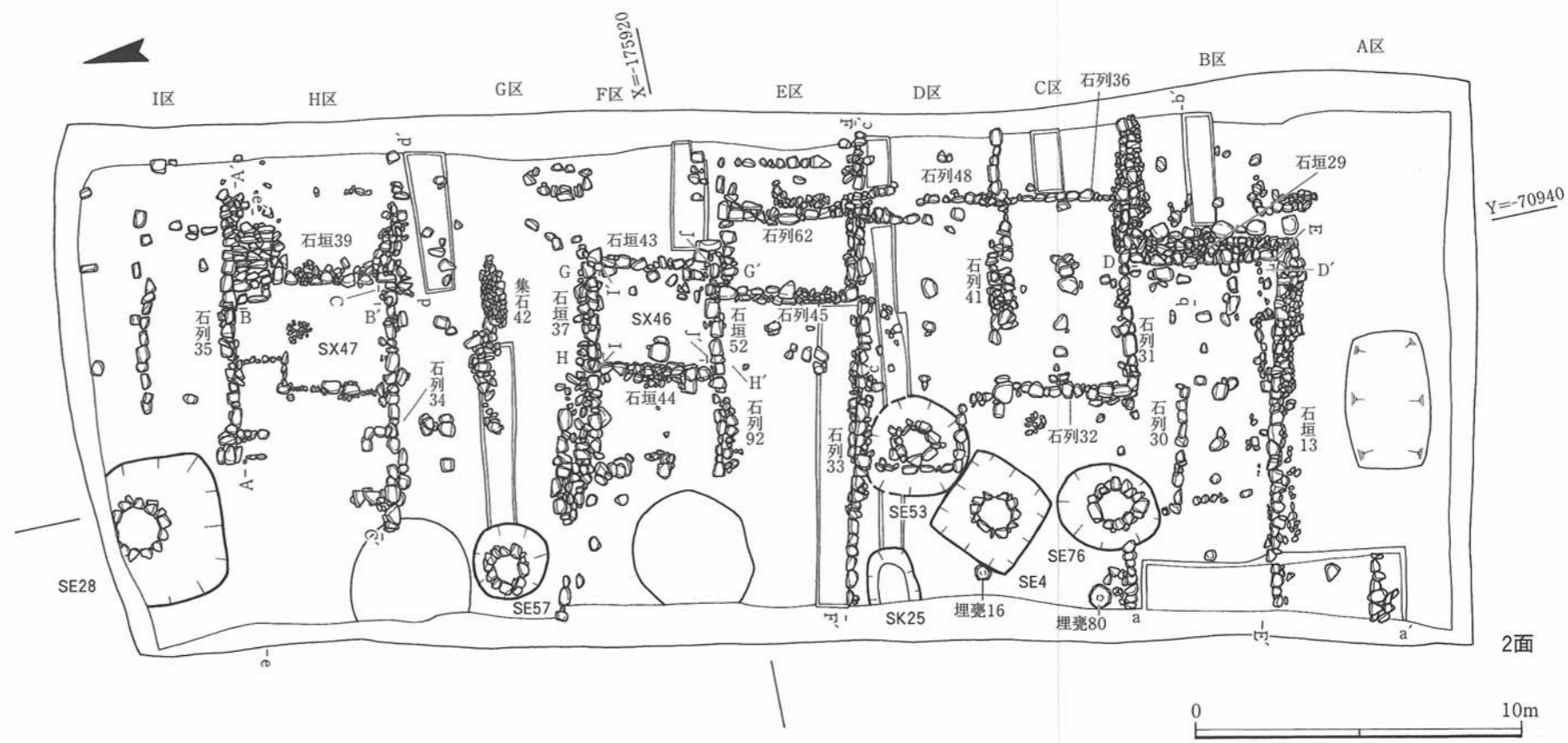
第32図 2-かまど67実測図(1/40)



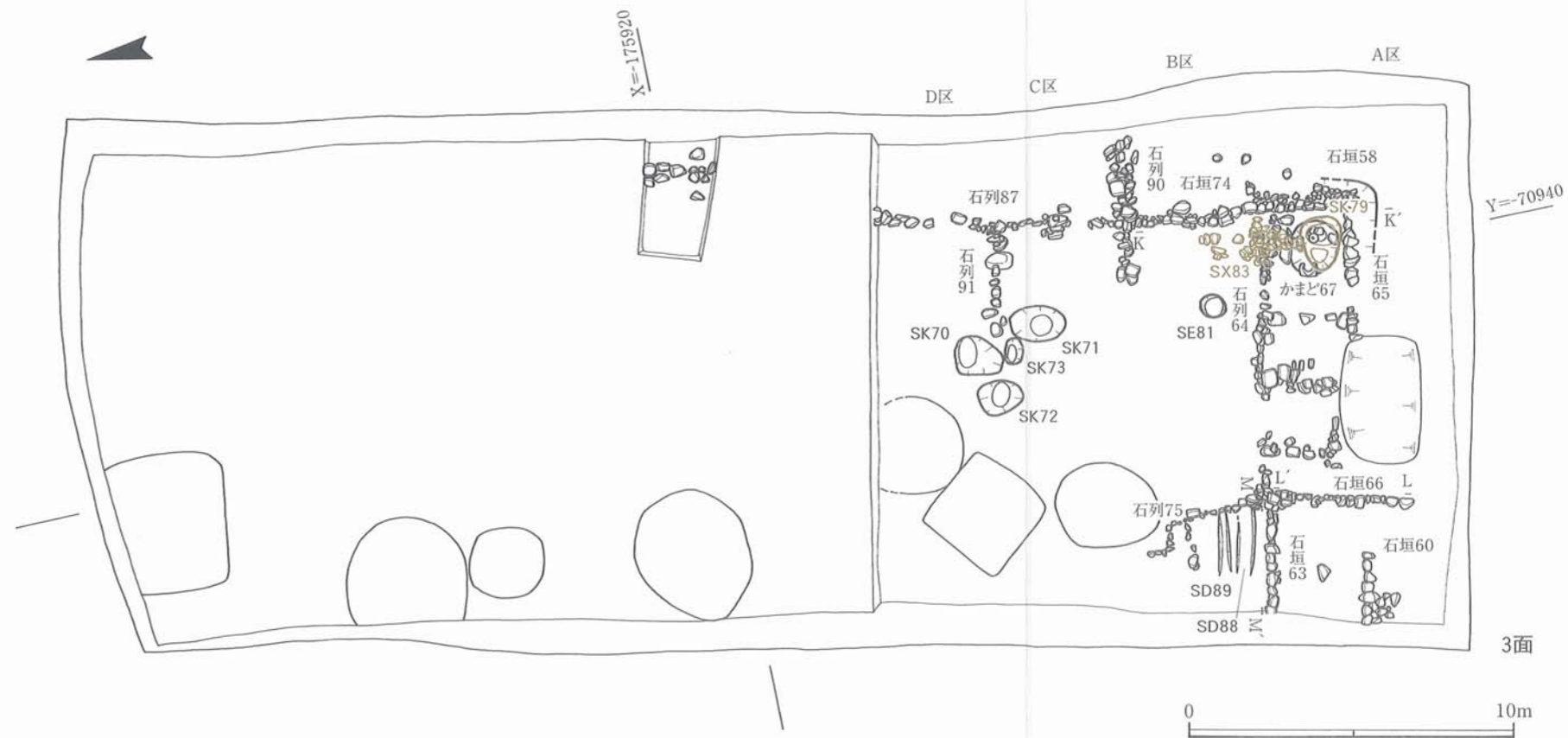
第33図 2-胞衣埋納遺構2実測図(1/20)



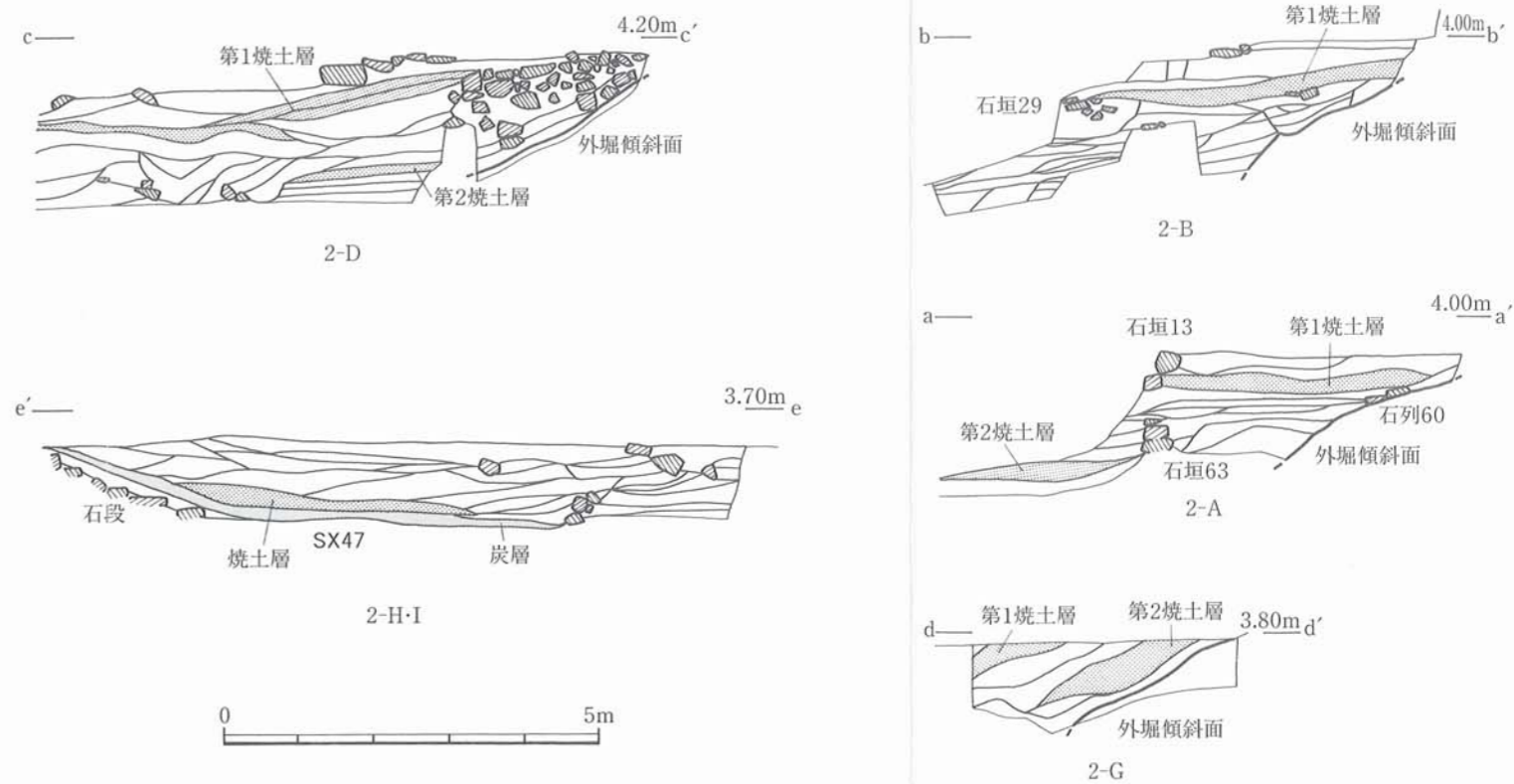
第34图 2地区遺構配置図①(1/200)



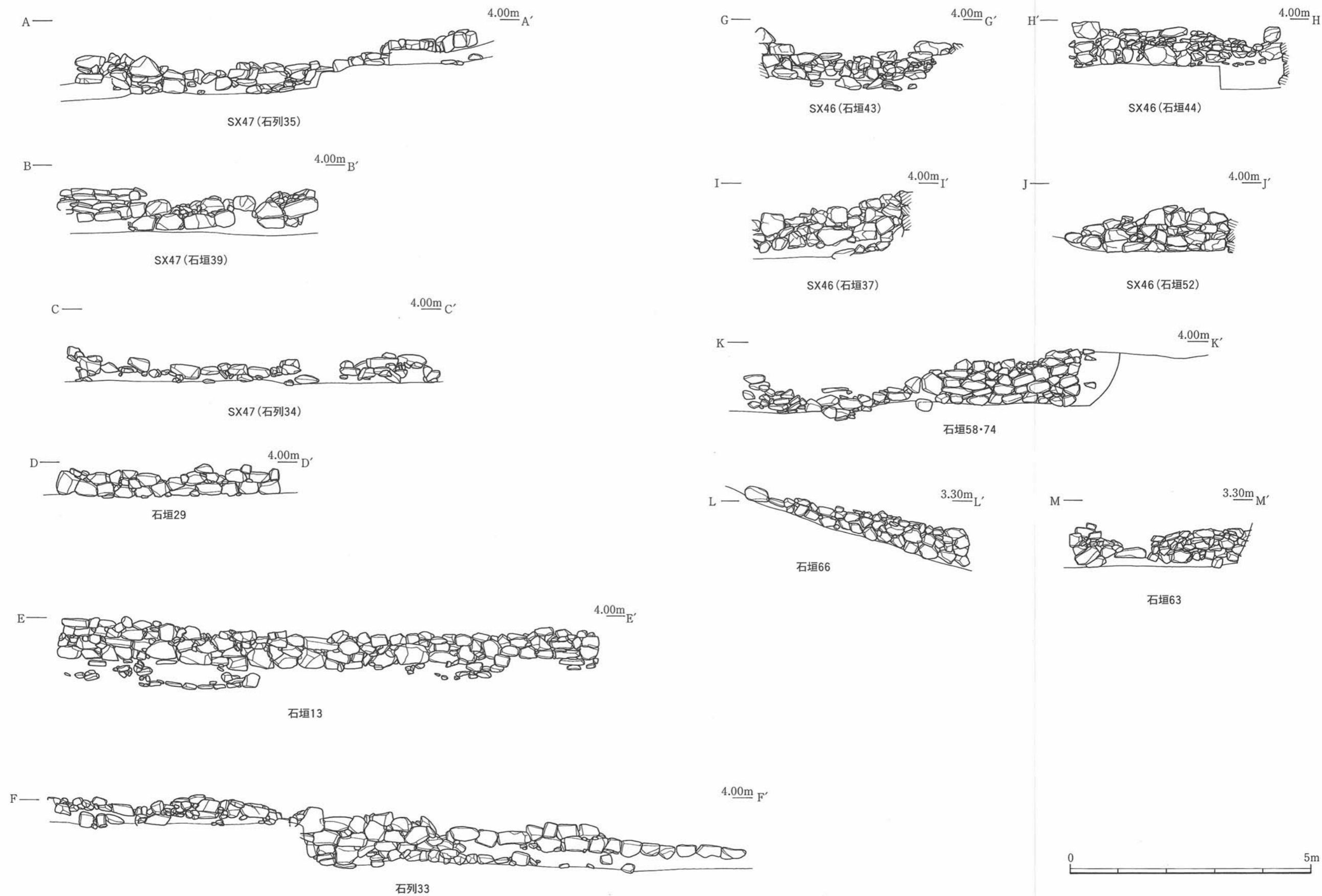
第35图 2地区遺構配置図②(1/200)



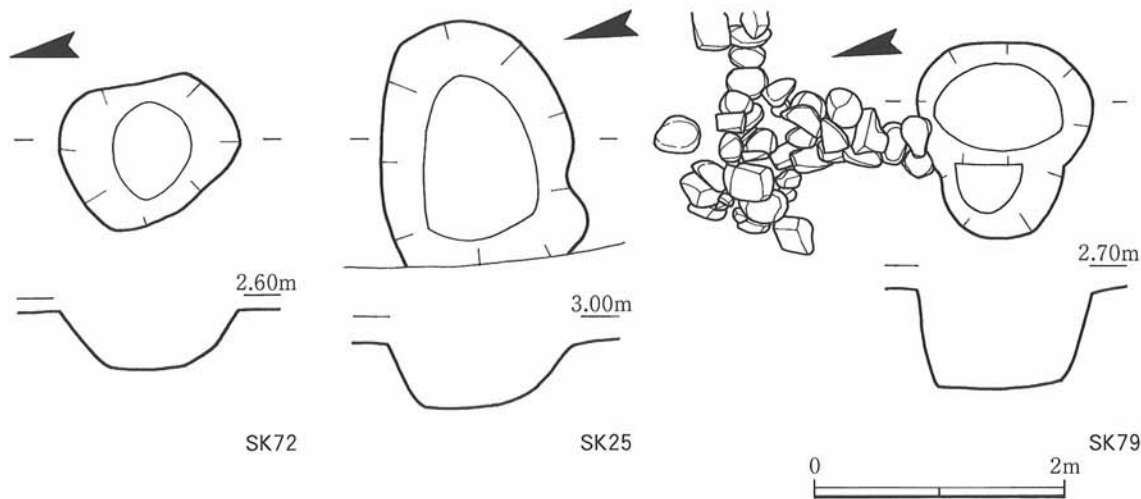
第36図 2地区遺構配置図③(1/200)



第37図 2地区土層断面図(1/100)



第38图 2地区石垣立面实测图(1/80)



第39図 2地区SK実測図(1/60)

下面は焼土化していないことから火災処理土が外堀内に堆積したものと考えられる。遺物は砂目段階の唐津や初期伊万里を含んでおり17世紀前半から中頃にかけての時期が想定される。この焼土層の上に構築されたのが石垣66、63、60、石列75である。これらによって区画された敷地は、惣門側に間口をもつ建物とみられる。これより東側の石垣58、65、石列64などで構成される敷地も惣門側に間口を持ち、長さ8.8m。東西にならぶ石垣65、石列64は幅2.5mで、その間に3列の礎石列がみられる。この石列天端面でかまど67が検出された。なお同一の場所が2面ではA、B区にまたがる逆L字の敷地であり、3面でも同様な範囲が考えられるが、石垣58と65、石列64は構築の前後関係が認められるので、ここでは先に述べた範囲とする。A、B区の石垣58は高さ1.2m。砂層の傾斜面をL字にカットしてテラスを作りそこに5段に積み上げて構築する。C、D区は石列87とそれに直交する石列91があり、礎石状の石が乗る。長さ3.3m。西側にはSK70～73が位置する。かまど67下に確認されたSK79と集石(SX)83は第2焼土層より上の遺構として3面に属する遺構と考える。

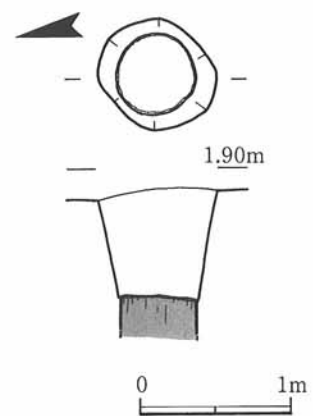
なお3面の時期は外堀掘削後、初期町屋が形成された17世紀後半までとみられる。また天和元、2年(1681、2)絵図による「品川玄良」宅は、年代的にも3面の時期と符号することから、石垣60、65、66、63、石列64などの遺構が、これにあたと推定される。以下遺構別にその概要を述べる。

袍衣埋納遺構(第33図 図版24)

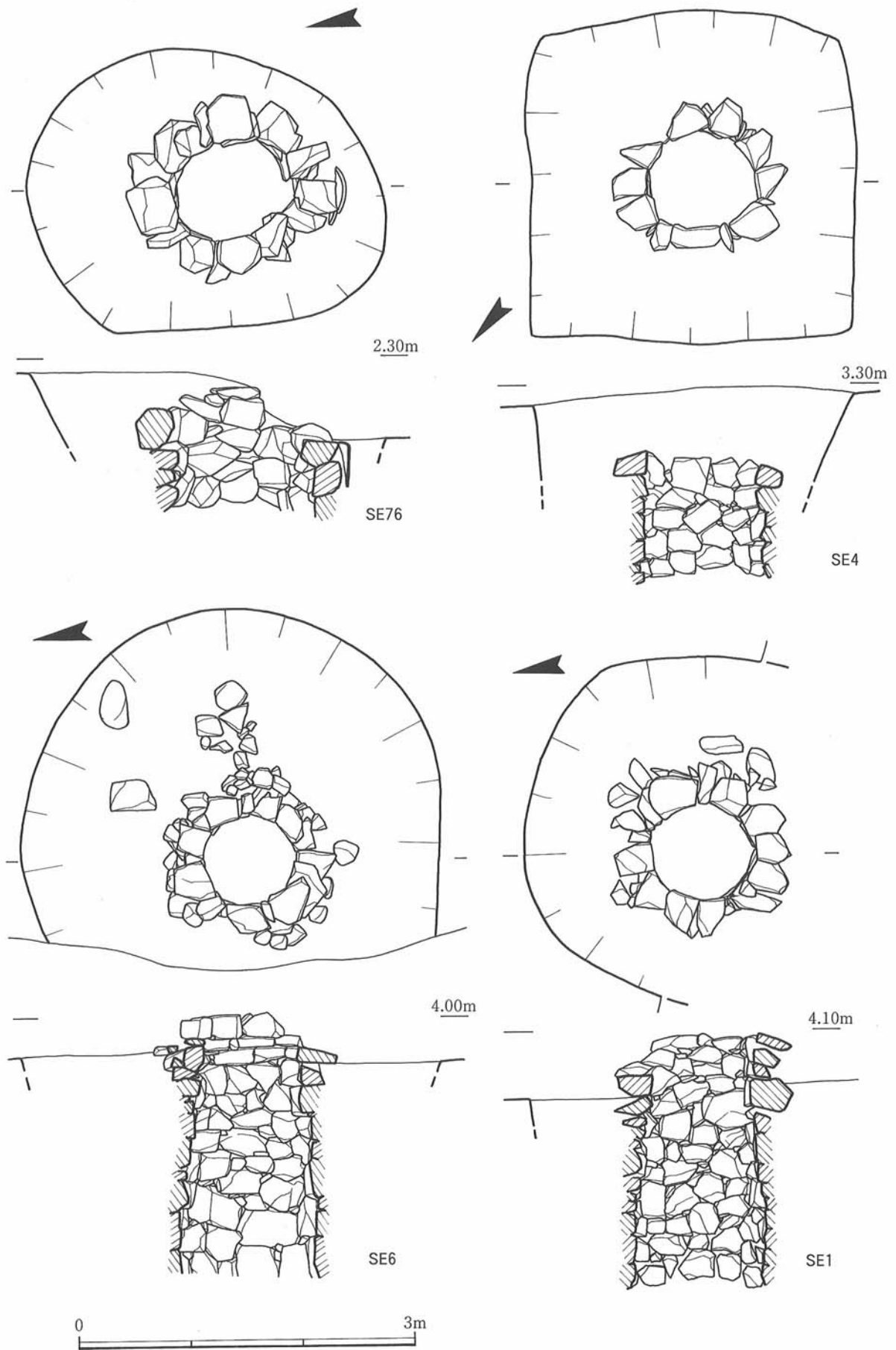
F区1面の調査区西端、SE1の西側で敷地境の石列に隣接するように出土した。埋納坑は検出されていない。袍衣埋納容器は短い把手のついた焙烙を上下合わせ口として容器としている。内容物は出土しなかった。

SX46(第35図 図版20)

F区の2面で検出。構築状況から、石垣52、石垣37を築き、その内に石垣43、44を内側に面を向けて積み上げて地下室状の石室を作り上げる。石室の規模南北3.3m、東西2.9m。壁面は3段ないし4段積み上げ、高さは90cmから120cmを測る。床面は土間で平坦。床面におりる石段などの施設はみあたらない。なお第2焼土層が基底面に検出され、裏込には第1焼



第40図 2-SE81実測図(1/50)

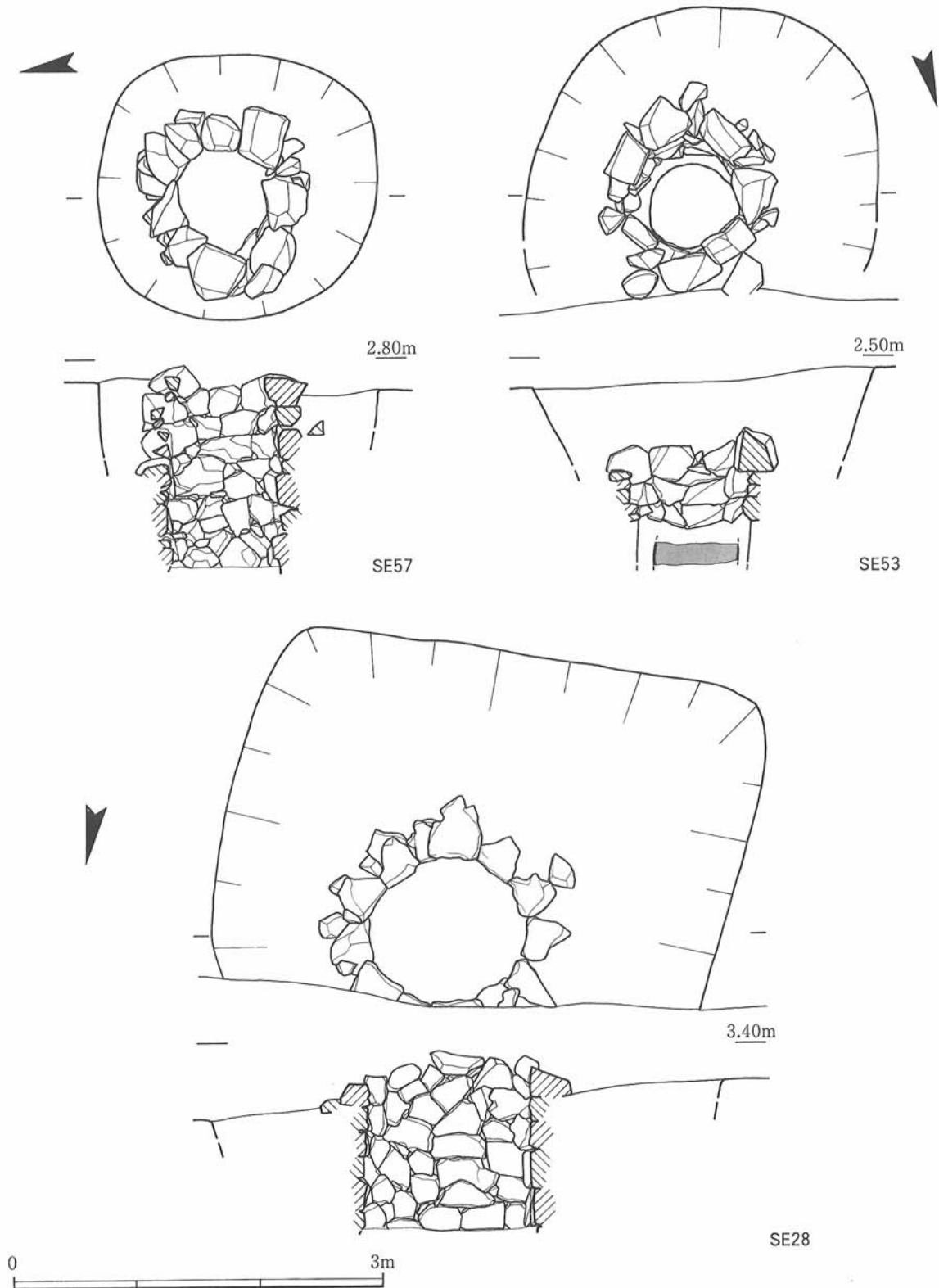


第41图 2地区 SE 实测图①(1/50)

土層が客土として認められた。

SX47 (第35図 図版20)

H区の2面で検出した石段を有する地下室状の遺構。SX46は四つの壁面を石積みし石室状にするのに対して、SX47は西側が開口し、取り囲む壁面も2段で高さ約60~70cmと低いという特徴がある。内法幅4.6m、奥行き推定6.4mである。床面は平坦で比較的良好に締まっている。取り囲む石列の上に

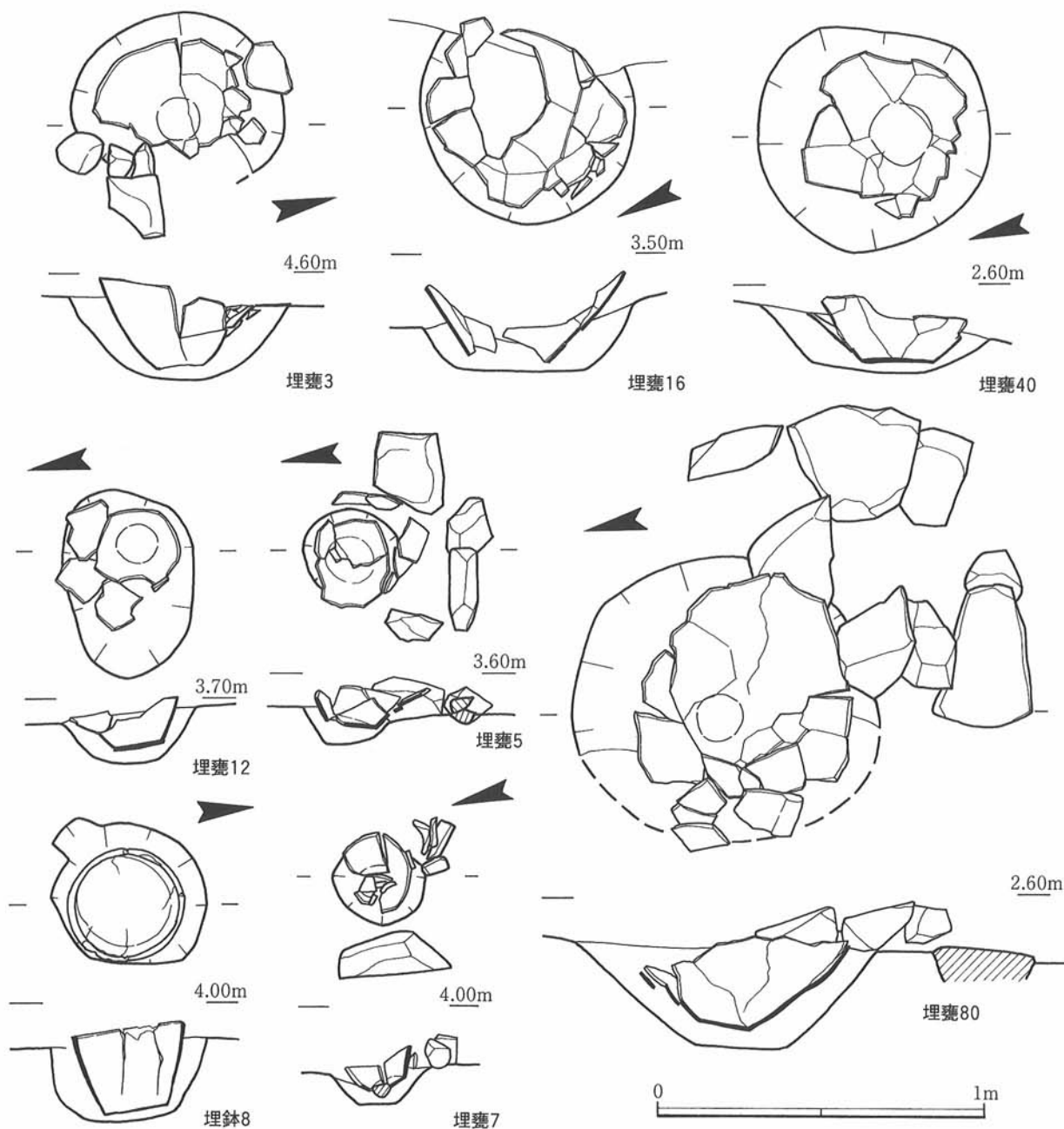


第42図 2地区 SE 実測図②(1/50)

建物が構築された場合、床から堀側へ一段降りた場所で土間として利用されていたと推定される。なおこのSX47は炭および焼土層で覆われていた。焼土層は集石42まで広がっていたが、石列が熱を受けた痕跡がないことから火災によるものではないとみられる。廃棄または建て直しの際に建物の基礎部分への盛土、整地が行われ、その客土として火災処理土を利用した可能性がある。

かまど67 (第32図 図版20)

A区の3面で、第1焼土層の上面にあたる。かまどは燃焼室である基部とその北側にかまど壁の一部とみられる焼土塊が出土した。煉瓦状に焼けしまった基部は奥行き42cm、幅50cm、高さ18cmで中央がくぼんでいる。基部およびその周辺は熱を受け赤色に変色し炭の堆積がみられた。この基部はおそ



第43図 2地区埋壚実測図(1/20)

らく原位置を保っているとみられ、焚き口は東側と考えられる。かまどの基底面は焚き口側で浅く皿状にくぼみ、そこからは石臼が出土した。

土坑（第39図 図版21、22）

13基の土坑が検出された。SK25はD区の2面に属し、平面は長円形で長径1.92m、短径1.52m、深さ42cmである。陶磁器の他ツノザメなどの魚類骨が出土した。SK72はD区の3面で検出。不整形で長軸1.4m、短軸1.08m、深さ28cm。イノシシ骨が出土した。SK79はA区の3面に属し、かまど67直下より検出された。SK79を埋めてその上面にかまど67が構築されたとみられる。不整形で長軸1.52m、短軸1.34m、深さ81cm。

井戸（第40～42図 図版23）

2地区では5基の井戸が検出された。SE1、6が1面、81が3面、他は2面に属する。

SE81はB区で検出。長径79cm、短径74cm、深さ88cm。上面から72cmのところの木桶が壁面と隙間なく埋め込まれているのが確認された。木桶は外面の木質のみが残存し、径は52cm。底部は未確認であるため器高は不明である。木桶を水溜とした井戸とみられるが、他の井戸がすべて石組井戸であるため、他の遺構の可能性も視野に入れて今後検討する必要がある。SE76はC区で検出。井戸の内径は長径1.01m、短径81cm。掘り形は長円形で、長径3.23m、短径2.58m。SE4はD区で検出。一辺2.88～2.96mの方形の掘り形を持つ井戸で、内径は長径95cm、短径86cm。石組の上部は抜き取られていた。SE6はG～H区で検出。径3.75mの掘り形の中に、上面での内径は長径82cm、短径76cm、下部では径が1.2mまで広がる石組井戸である。SE1はF区で検出。内径の長径85cm、短径81cm、掘り形の径3.12mである。SE57はG区で検出。径2.18～2.22mと他の井戸と比して掘り形が小さい。井戸の内径は長径81cm、短径69cm。SE53はD区で検出。掘り形は長径3.04m、短径2.34mである。内径は長径80cm、短径73cm。石組上部は抜き取られていた。底面には水溜として木桶の一部が残存していた。木質の残存状況はあまり良くないが、桶の径は約70cmと推定される。SE28はI区で検出。一辺4.2mの方形掘り形を有する。井戸内径は長径1.23m、短径1.17m。なおこれらの井戸はSE53を除いて最下面は未検出である。

埋甕・埋鉢（第43図 図版24）

8基の埋甕、埋鉢を検出。このうち埋甕7が陶器甕を使用しているが、他は土師器の大甕または鉢（埋鉢）を使用している。8を除いて上半部が削平により欠損している。検出された遺構面は3、5、7、8、12、40が1面、16、80が2面である。いずれもそれぞれの甕の大きさに合わせて土坑を掘り、その中に埋置している。16は土師器大甕の底部が欠失した状態で出土した。おそらく底部を意図的に割って使用した可能性がある。8は土師質の鉢がほぼ完形で出土した。7、8は土師器大甕に対して容量が少ないことから、便槽とは別の用途を考慮する必要があるだろう。

（3）平成11年度の調査

A 1地区（第44～56図 図版25～30）

調査前の状況は現道路と同じ高さの平地で、試掘の結果、江戸時代の遺構面まで現・近代の整地が約50cm堆積しており、近代においては一時畑地として利用されていたとみられる。調査の結果おおまかに4つの遺構面が検出された。調査区は平成9年調査のA区南半部からX区までである。

1面 (第46図 図版26)

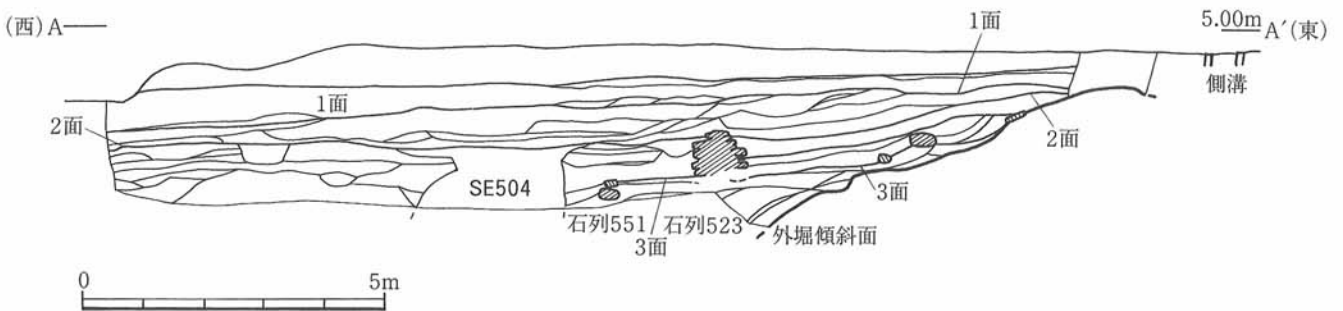
検出された町屋の遺構は石列500、SE501、502、504、石列505などである。この時期の町屋の区画は東西方向の石列500のみで、その上面には建物の礎石が置かれてあった。9年度調査でも同一面で礎石が検出されているので、それらと対応するものとみられる。石列505は比して大型の石材を使用した遺構で建物に関する施設とみられるが、周囲に関連する石列、礎石等の遺構が検出されていない。当地区は明治以降畑地として利用されていたようで、開墾に伴い撤去された可能性がある。遺構面の時期は出土遺物から19世紀から幕末、一部明治時代にはいるとみられる。

2面 (第46図 図版26)

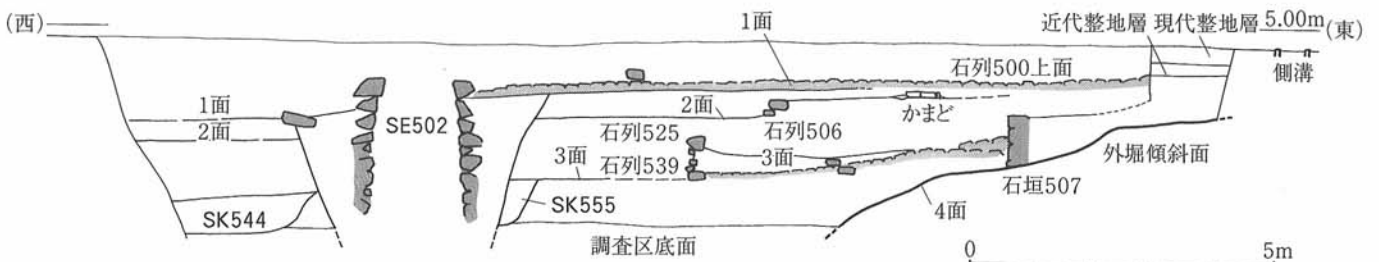
町屋の中心的時期のひとつ。東西の石列によって敷地の区画が明らかとなり、北から4つの区画(A区、Z区、Y区、X区)に分けた。このうちX～Y区、Z～A区の境の2列の石列が面をあわせて構築されていることから、敷地境を示しているとみられる。またY区とZ区は石列557によって区切られる。両区では明確な礎石を指摘できないため建物構造は不明であるが、Z区で検出されたかまど群の位置が道路側に近く、単独の敷地と見ると敷地幅に対してかまど群が占める面積が広い。このことからY、Z区が単独の敷地であるよりも両区でひとつの敷地と見るほうが妥当であるとみられる。以上のことから当地区ではX区、Y・Z区、A区の3区が町屋敷地であると推定される。この面の時期はSK516から広東碗が出土したことから18世紀後半とみられる。

A区は東側に階段状のステップが認められ、建物の範囲を示すとみられる石列557がある。これより西には瓦を地中に埋め込んだ瓦列559や肥前の甕を使用した埋甕514が位置する。A区とZ区をわける石列500はA区側とZ区側からそれぞれ石を積んで構築している。A区の間口幅は9年度調査を合わせて約6.2mである。

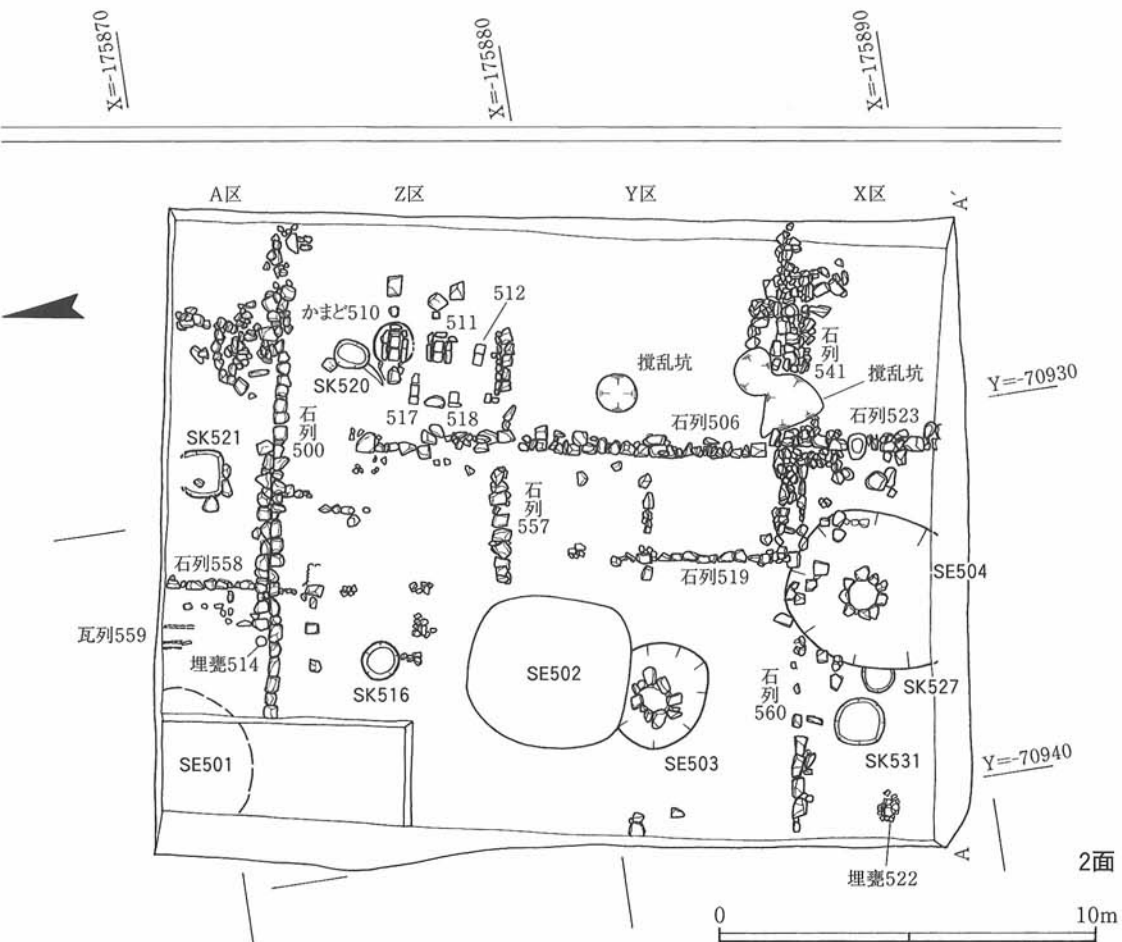
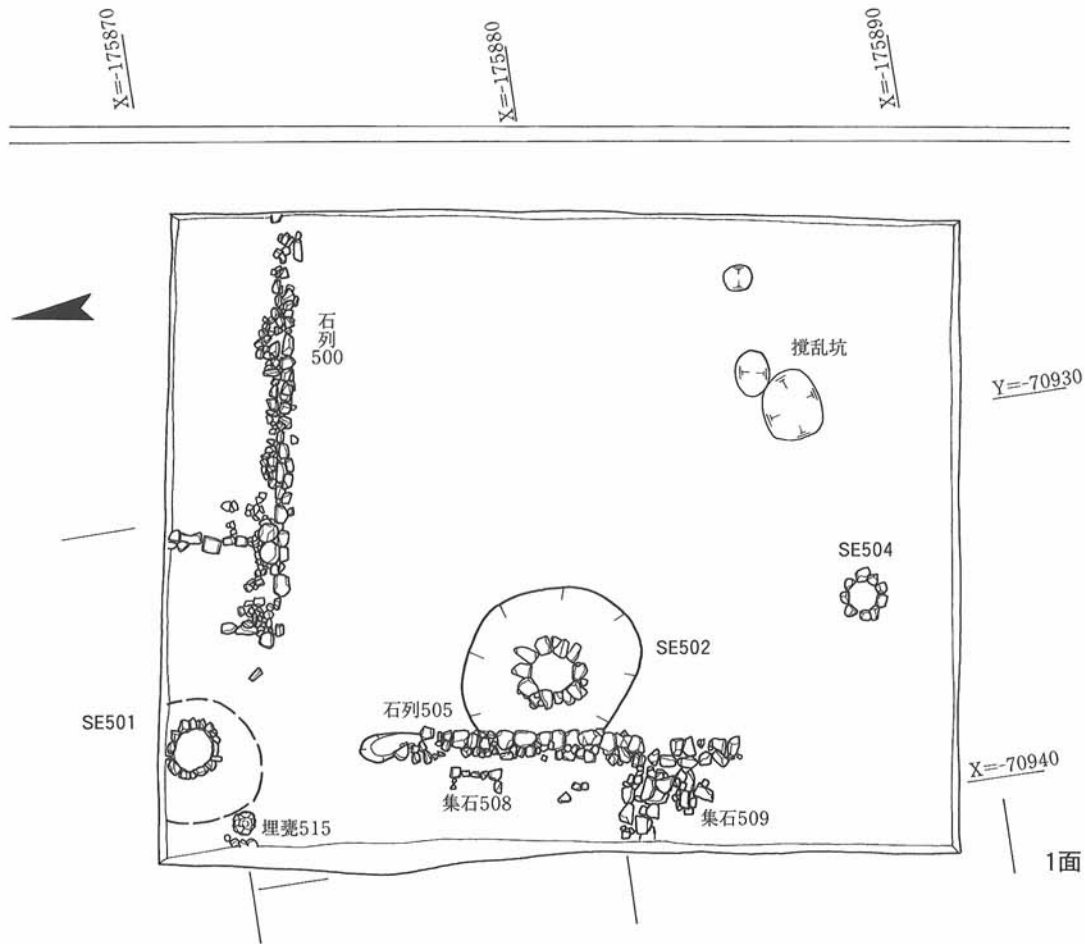
Y・Z区の間口は約13.9m。Y区幅は8.0m、Z区幅は5.9mである。この区の2面は石列506の2、



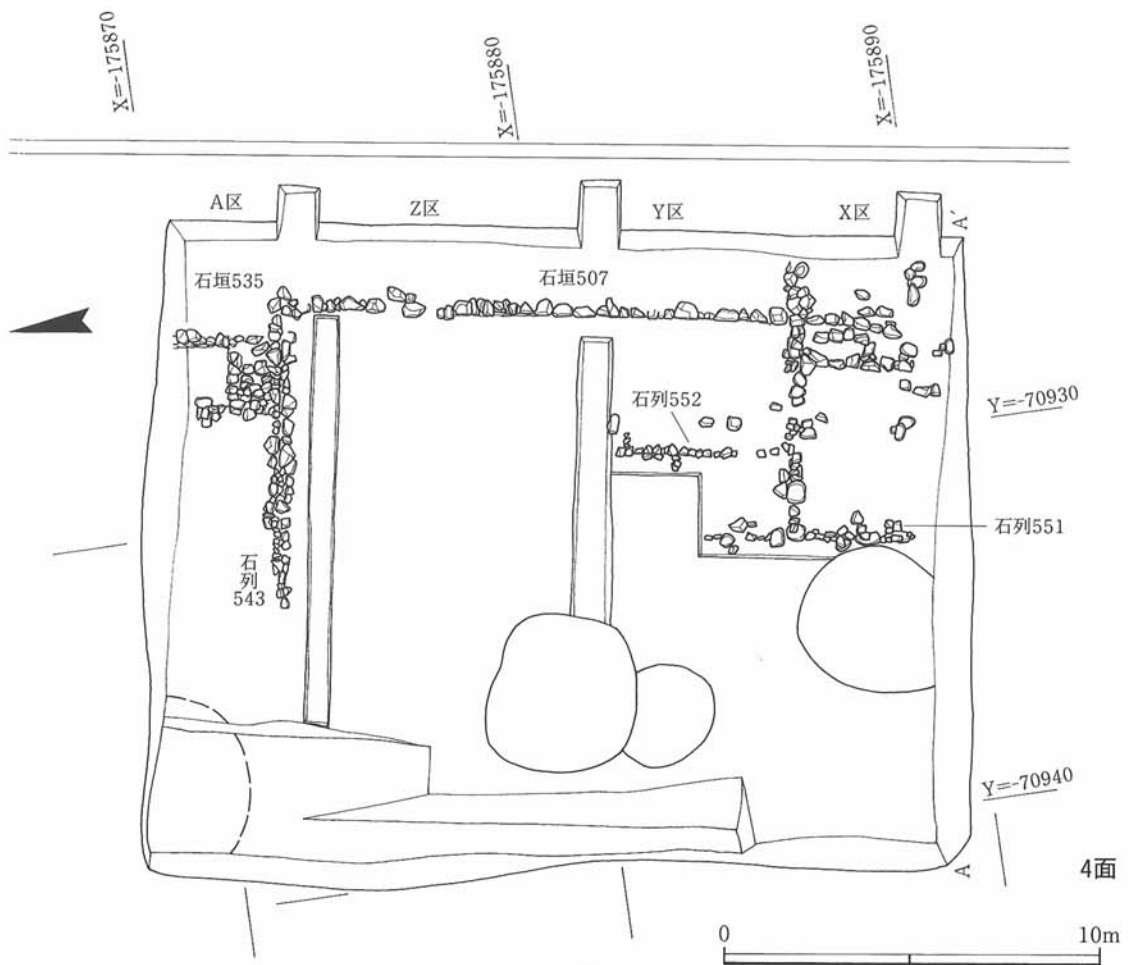
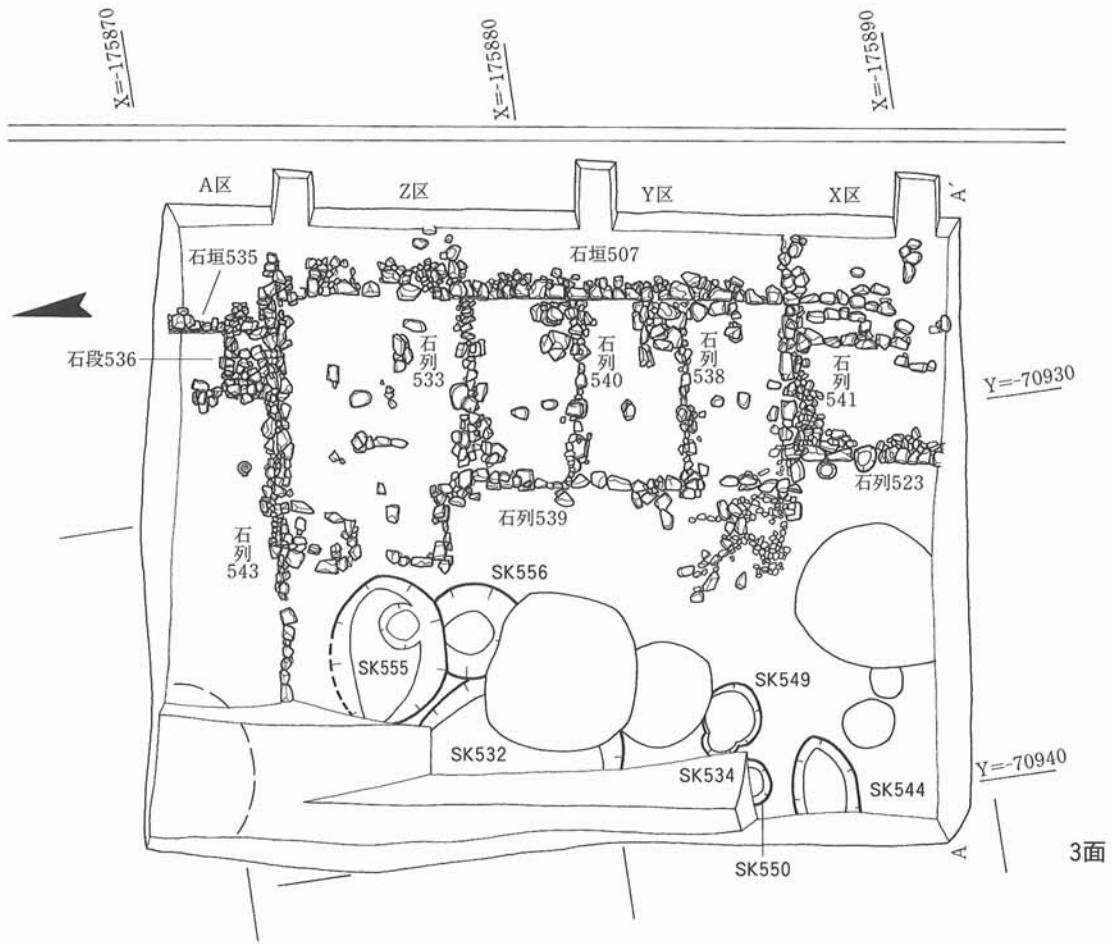
第44図 1 - X区土層断面図(1/125)



第45図 1-X～A区断面模式図(1/125)



第46図 1 - X ~ A 区遺構配置図①(1/200)



第47图 1 - X ~ A 区遺構配置図②(1/200)

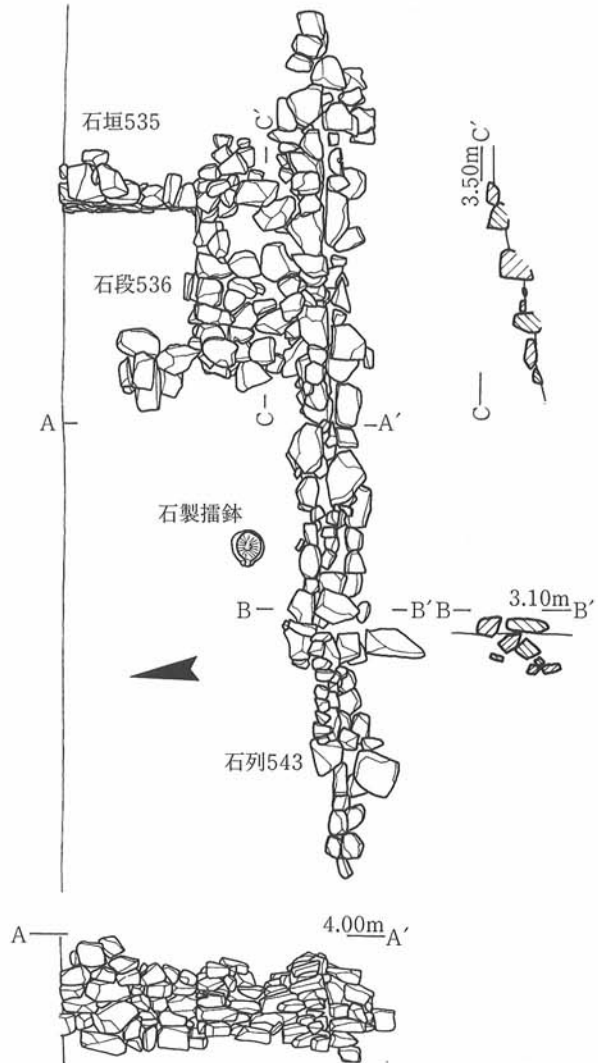
3段の石積みによって土留めされた整地土面およびそれに相当する層から検出された遺構である。かまど群は510～512と517、518の2つのグループに分けられる。517、518が廃棄後、510～512が上層に盛土をして構築される。敷地の堀側にはSE503やSK516が位置する。SK516周辺には小礎石群があることから付属棟の存在も考慮される。

X区とY区は両側から積まれる石列541によって区画される。敷地西半ではX区側の石列560が一部残存していた。石列523は南北に石を2、3段平積みにし、傾斜面を土留めして平坦面をつくり出している。またSE504は掘り形が検出されたことからこの面で最初に構築され、生活面の嵩上げに伴って周囲の盛土にあわせて積み増しされたことが明らかになった。

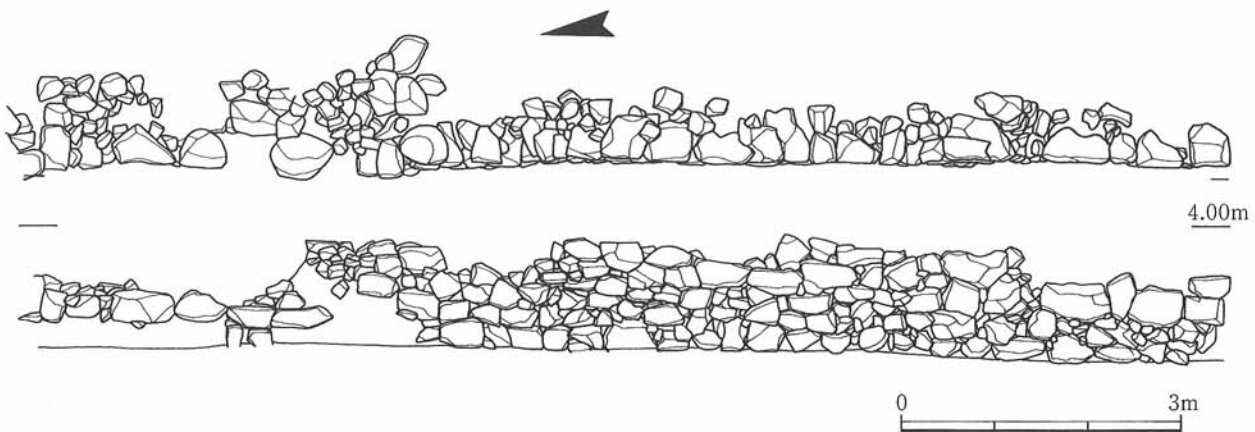
3面（第47図 図版26）

町屋の遺構が最も多く検出された時期。区画割りの位置は2面と変化はなく、下層に新たな石列が検出された。堀側には「ゴミ穴」とみられる廃棄土坑が集中する。時期は土坑出土遺物から17世紀後半から18世紀前半とみられる。

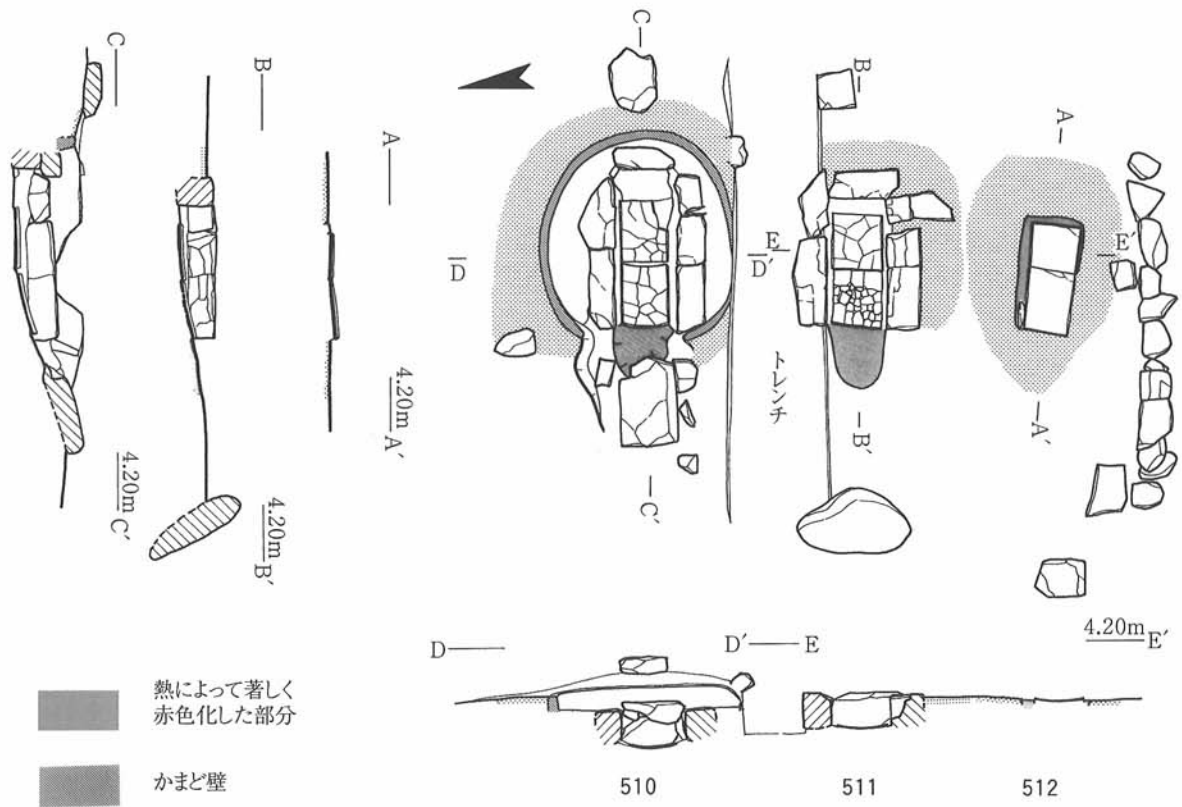
A区は石列500下に古い石列543があり、これに付属する石段536、石垣535が機能していた面である。これより東が家屋の主たる基底面で、石段536を降りると土間のように締まった地表面となる。ここからは石製播鉢が出土した。なお石列543は途中で途切れているが、この辺りまでが建物の範囲であったであろう。






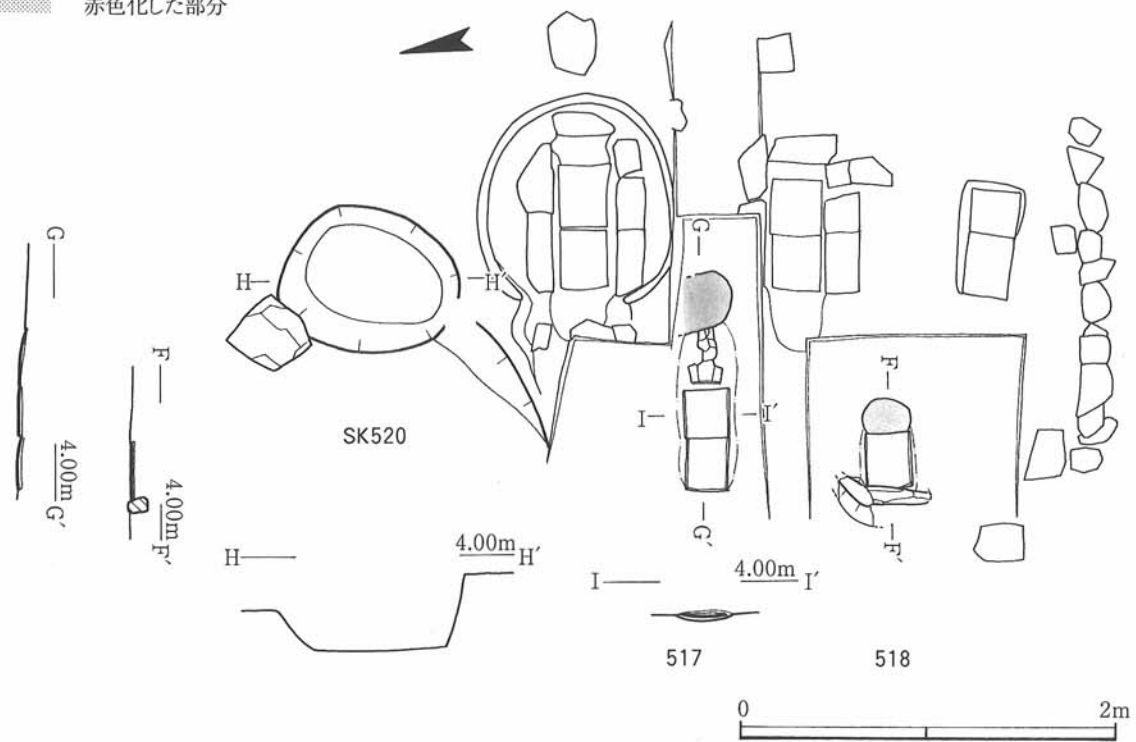
第48図 1-A区実測図(1/80)



第49図 1-石垣507実測図(1/80)



-  熱によって著しく赤色化した部分
-  かまど壁
-  熱によって赤色化した部分



第50図 1地区かまど実測図(1/40)

Z、Y区は石垣507と東西の礎石を含む石列533、538、540、539によって建物を想定することができる。543～533間4.8m、533～540間3.1m、540～538間2.9m、538～541間2.9mである。507～539間は5.0mである。この建物の堀側に大型の廃棄土坑が集中しており、陶磁器の他木製品が多く出土した。

X区は緩やかに傾斜する黄灰色砂層を石列523、541で留めて構築した平坦面が3面となる。

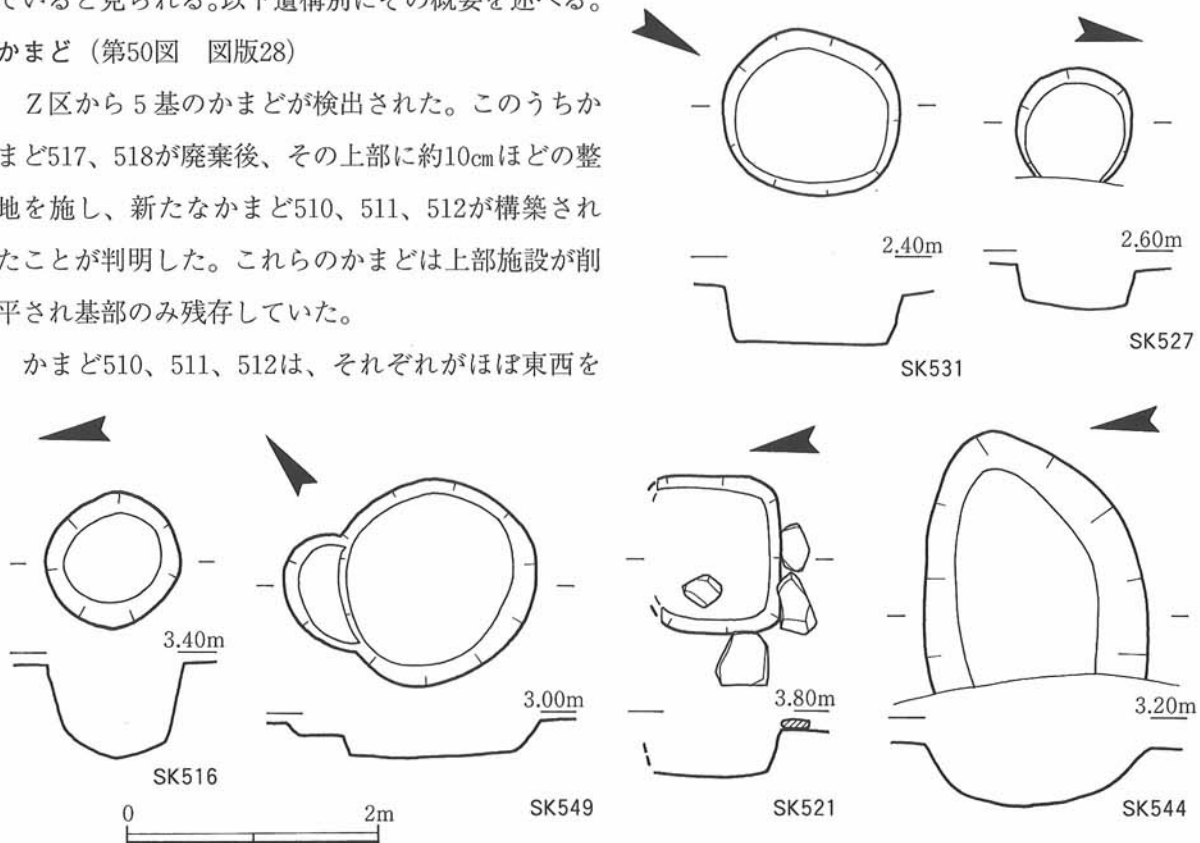
4面 (第47図 図版26)

この遺構面は3面から調査範囲を絞って部分的に遺構検出を行った。この面に相当する遺構は、外堀掘削後にはじめて形成された町屋の施設及び3面遺構下に検出された遺構である。3面の石列下に検出された石列552とそれに関連する遺構は、3面石列とはレベル差があり平面的にも異なる位置にあるので、3面の石列とは同一遺構ではないと判断し、さらにこれ以下には遺構が検出されなかったことから、初期の町屋遺構と考えて4面の遺構とした。これらの遺構は507の基底面と同じ面にあるので同時期となる。つまり507、さらにこれに連動して構築された535は、4面で構築され、3面でも建物の構造が変わっても基礎の一部として継続していたことがうかがえる。時期は17世紀代後半とみられる。X区の遺構面はゆるやかに堀側に傾斜しており、この上に3～4列の石列が位置する。傾斜面は当初の外堀のそれに近いものとみられる。それに対してA区、Z区、Y区は外堀の傾斜面をカットし石垣507、535を築いている。石垣507は長さ13.3m、天端の石は一部崩落しているが、4～5段積み上げ、上半部に比較的大ぶりの石を使用している。石垣535は4～5段積み重ねて高さは112cm。なお535の北半は9年度調査では攪乱坑によって未検出であったが、本来は排水溝39の壁面まで続いていると見られる。以下遺構別にその概要を述べる。

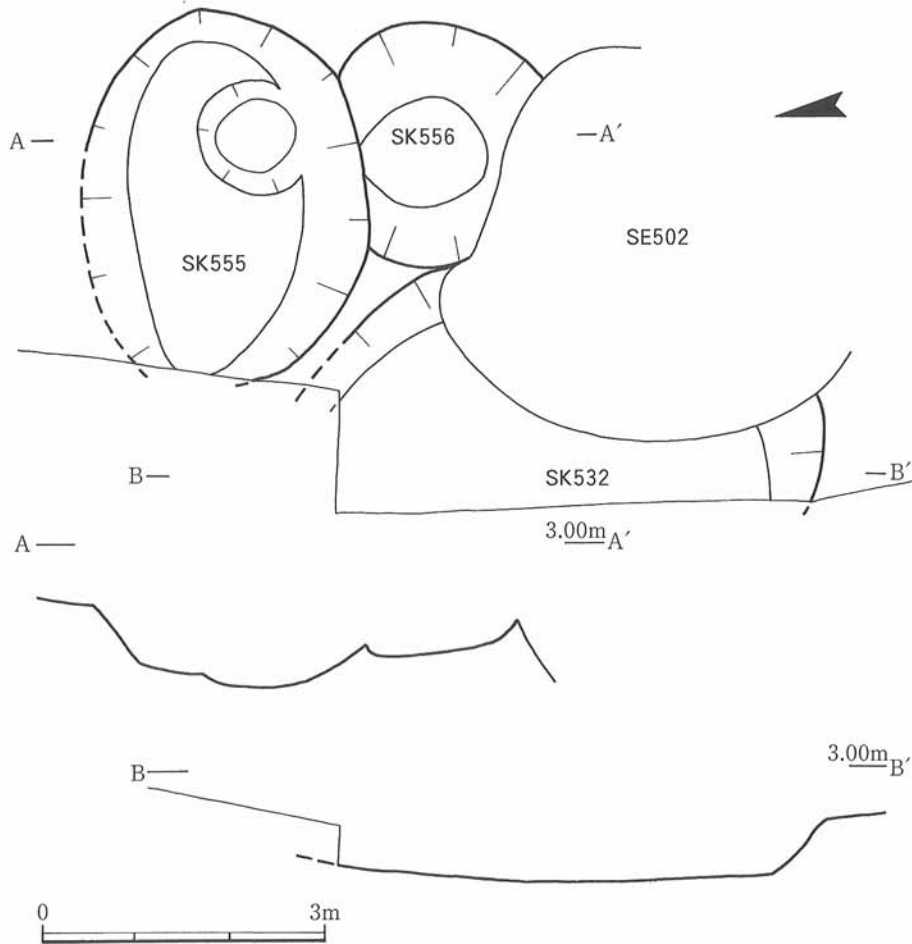
かまど (第50図 図版28)

Z区から5基のかまどが検出された。このうちかまど517、518が廃棄後、その上部に約10cmほどの整地を施し、新たなかまど510、511、512が構築されたことが判明した。これらのかまどは上部施設が削平され基部のみ残存していた。

かまど510、511、512は、それぞれがほぼ東西を



第51図 1地区 SK 実測図⑤(1/60)

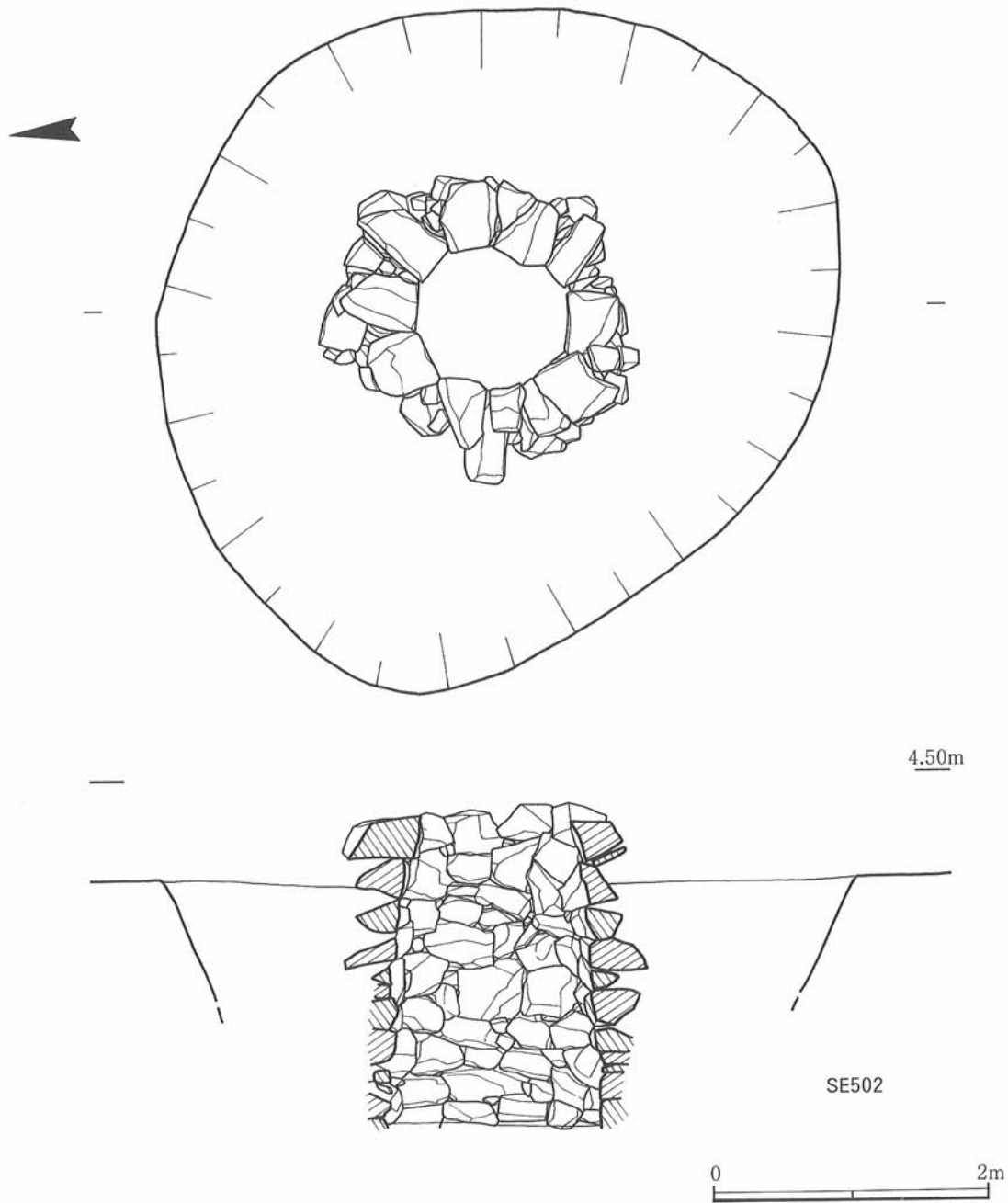


第52図 1地区 SK 実測図⑥(1/80)

向き焚き口が西であること、3基が南北に線上に並ぶこと、軸線間で測る距離が1.0~1.1mと等間隔であることなどから、別個のものではなく三連の焚き口を持つひとつの大型のかまどであると考えられる。

510は最も規模が大きいかまどである。焚き口部分は高温によって赤色化している。燃烧室は長軸86cm、短軸32cmで、「コ」の字形に長方形の石材で囲みを組み、床面には3枚の平瓦を敷いている。平瓦は熱により変色し細かな亀裂が入っているものもある。床面は焚き口に向けてゆるく傾斜して立ち上がる。平瓦と石組の隙間には粗砂混じり粘質土をつめて固定している。石囲いの側壁は左が2、右が3つの石材を置き、奥壁は石を2段に組んでいる。このまわりに径約1mで一段高くなったところで固く焼け締まった壁面が残存しており、これが燃烧室壁の一部と見られる。燃烧室外にも幅30cmにわたって熱を受けて地表面が赤橙色化していた。511は「コ」の字の石囲い燃烧室だけが検出された。焚き口は強く赤色化し、燃烧室は長軸70cm、短軸32cmで、構造は510と同様の石囲いをし、床面には平瓦が2枚敷いてある。周辺の地面は幅20cmで赤橙色化。512は床面に平板の石材2枚のみが検出された。周辺には強く被熱して赤化した部分と幅20cmで赤橙色化した面がある。他に比べ主軸がやや南にずれている。

517、518は焚き口と見られる強く赤色化した面が東側であることから、上層のかまどとは向きが反対方向であるとみられる。517は燃烧室の石組はなく、床面の平瓦3枚が残存していた。瓦のうち、

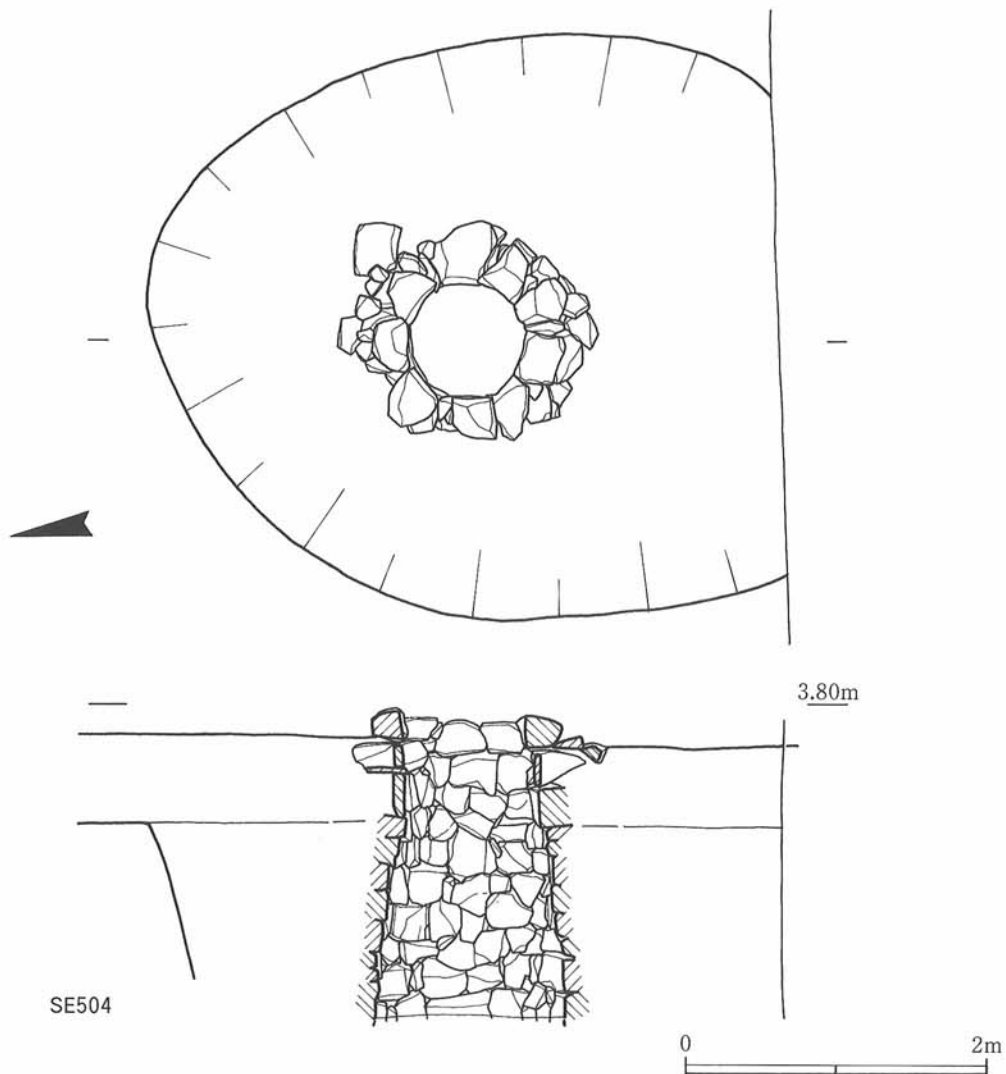


第53図 1地区 SE 実測図③(1/50)

焚き口側の1枚は1/2しか残存していない。517の南側1mのところに518を検出した。床面には平瓦が1枚置かれ、40cmの石材を横に据えて奥壁としている。また燃焼室壁と見られる粘質土の盛土が一部認められた。これらの下層のかまどは上層が3連であるのに対して、2基で構造も小型であり、焚き口方向も正反対という相違点がある。なおこの2つのかまどと同時期と見られるSK520が北側に存在する。内部には炭や焼土片が堆積していた。長径92cm、短径76cm、深さ38cm。

このような新旧におけるかまどの形態の違いは、かまど構造の大型化や焚き口の変更が伴った土間の改築が行われたと考えられる。なおこれらのかまどは2時期に分けられるが、Z区全体として分層が難しいため、両者とも2面に属する遺構としておく。

土坑 (第51、52図 図版28、29)



第54図 1地区 SE 実測図④(1/50)

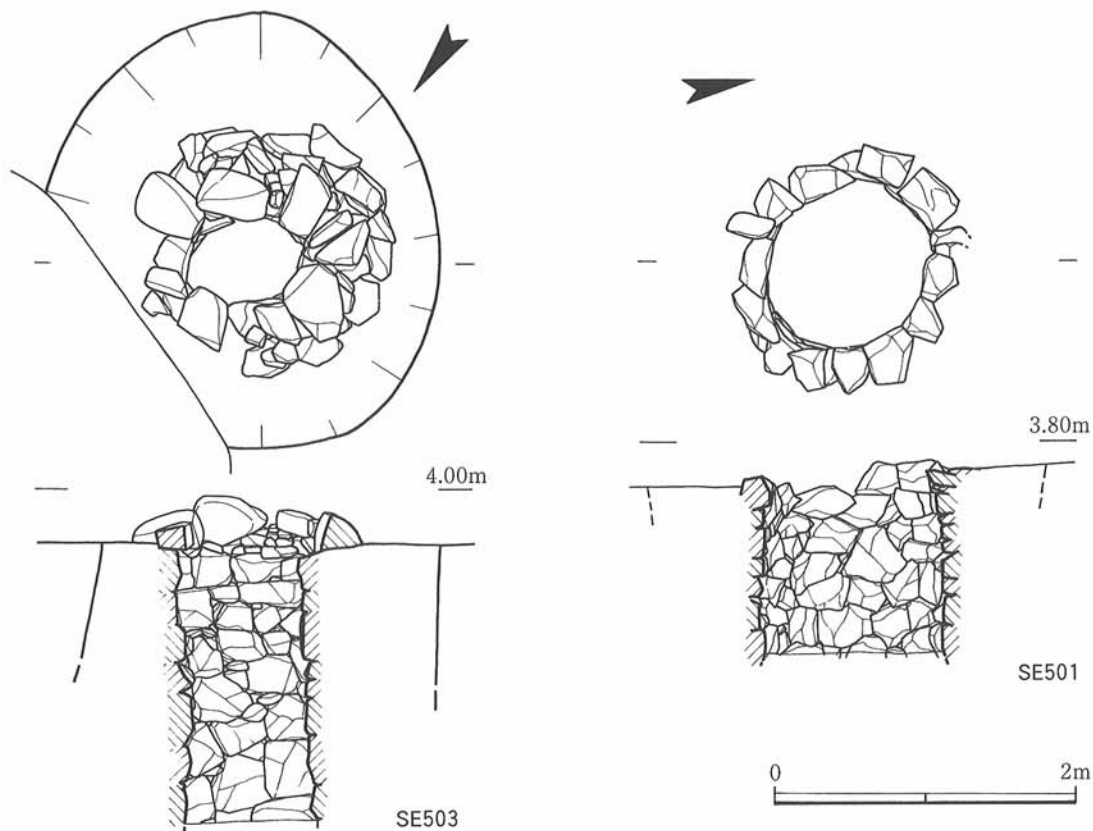
15基の土坑を検出したが、このうちの多くは調査区西側、つまり町屋の敷地奥に位置し、いわゆる「ゴミ穴」と考えられる廃棄土坑である。

SK532、555、556は、検出された土坑のうちでも大型の土坑である。532は確認された長径が約5m、深さ52cm。555は長径約4m、短径3m、深さ70～95cm。556は径2.6m、深さ69cm。これらの土坑は前後関係が明確でないが、相次いで掘り込まれ、廃棄土坑として使用されたと見られる。内部からは多量の陶磁器とともに下駄、漆椀、荷札、箸などの木製品や植物種子が出土した。544は長円形の土坑で西半部のみを検出。短径は1.7m、深さ58cm。

これらの大型の土坑に対して、SK516、521、527、531、549は径1～2mの小型の土坑で、深さも浅い。516はZ区の2面で検出。円形の土坑で、径1.07m、深さ77cmの小型の廃棄土坑。広東碗を含むことから18世紀末から19世紀初めにかけての時期とみられる。

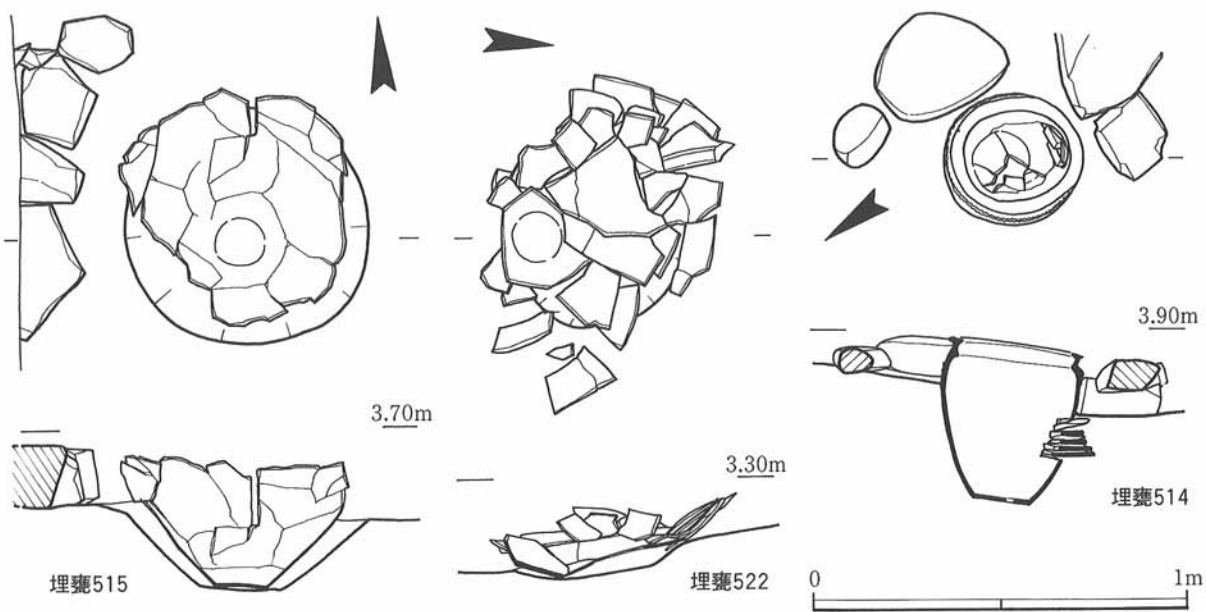
井戸 (第53～55図 図版30)

井戸は4基を検出した。いずれも石組の井戸で、SE501、502、504は1面まで使用されていた。小型のSE503は前後関係から2面に属する井戸とみられる。なお井戸はいずれも最下面は未調査であるため、深さは不明。SE504は内径74cm。検出面は1面であるが、調査の結果2面に構築され、その後



第55図 1地区 SE 実測図⑤(1/50)

整地層の嵩上げによって井戸も石組を積み上げることで継続使用されていることが明らかとなった。これは1面において井戸の掘り形が検出されなかったこと、積み上げた部分の石材が異なることなどの点から判断した。当初の掘り形は残存長径4.2m、短径3.9mで、その中に内径90cmの石組井戸を構築している。井戸の内径は下方になるにつれ広がる特徴がある。SE502は1面で検出された。石



第56図 1地区埋壺実測図④(1/20)

組の内径1.1m。掘り形は長径5.14m、短径4.6mの大型の井戸である。

埋甕（第56図 図版30）

埋甕は4基検出。廃棄土坑と同じく、町屋の裏手側に位置し、埋甕514を除いて他は土師器の大甕である。用途は土師器大甕については、いままでの調査成果より便槽の可能性が高い。

埋甕515は1面で検出された土師質の大甕を使用した埋甕。下半部のみ残存。522はX区の2面で検出。掘り形は不明である。埋甕514はA区の2面で検出された、肥前産の陶器甕を使用した埋甕である。底部や胴部の一部が破損しており、そこに礫や瓦片を充填して使用している。用途は土師器大甕とは異なるものかもしれない。

B 1地区北端区（第57～59図 図版31）

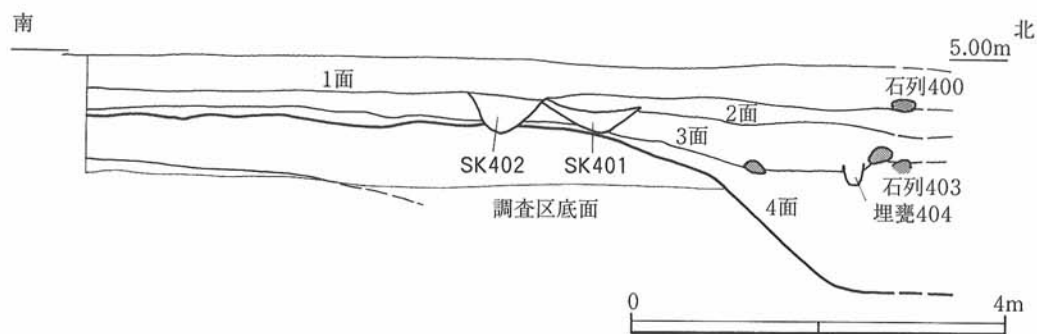
1地区北端区は1-Q区の北側に小道路を挟んで位置する地区である。調査は対象地が狭いため中央にトレンチを設定し、遺構面の確認を行った。調査面積は約75㎡。調査の結果、地表から40cmまでは近現代の整地や家屋の基礎、攪乱土坑が認められた。それより下層に江戸時代の遺構面が4面検出された。

1面は南北にほぼ平坦な面で、SK402や石列400が検出された。2面はトレンチ北半でSK401が検出されたが、これより南側は1面と2面の分層が困難となる。2面は本来薄く南半にも整地層として堆積していた可能性があり、両層の時期差はあまりないとみられる。石列400はトレンチのほぼ中央で、東西に走る。残存する長さは1.9m。東半部は近代攪乱によって欠失している。石列は北側に面を揃えており、平らな玄武岩を2～3段積み上げている。SK402、401はいずれもトレンチ土層断面によって確認された土坑。SK402は円形で、径35cm、深さ14cm。SK401は長円形で、長径73cm、深さ29cm。

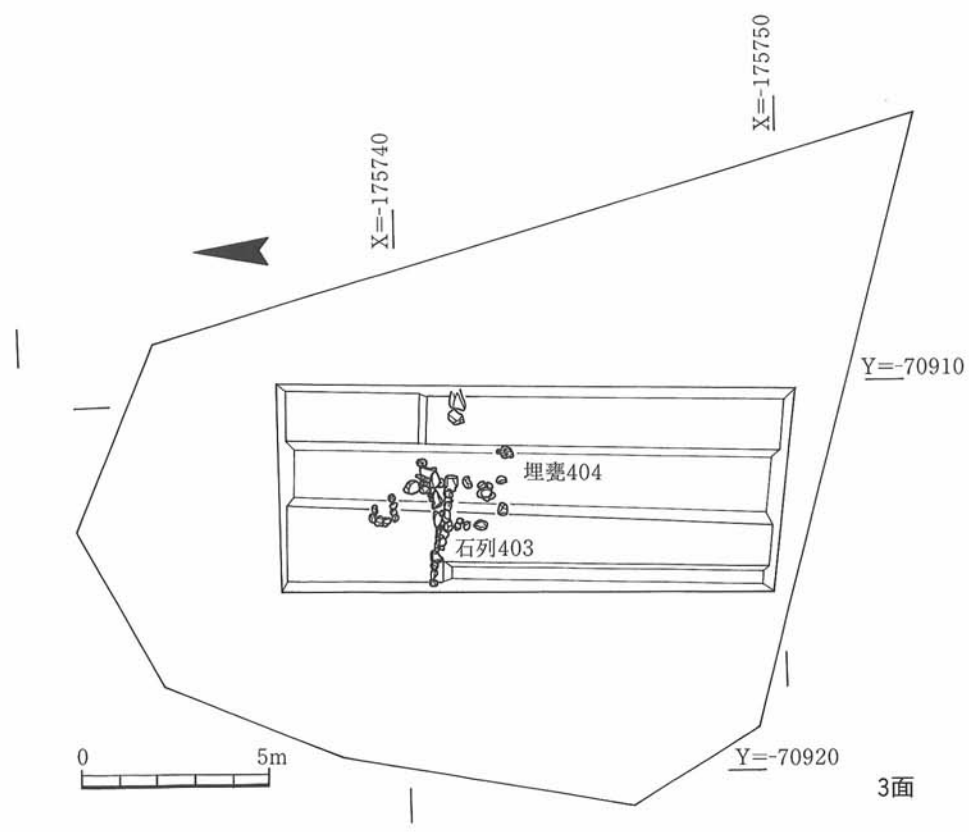
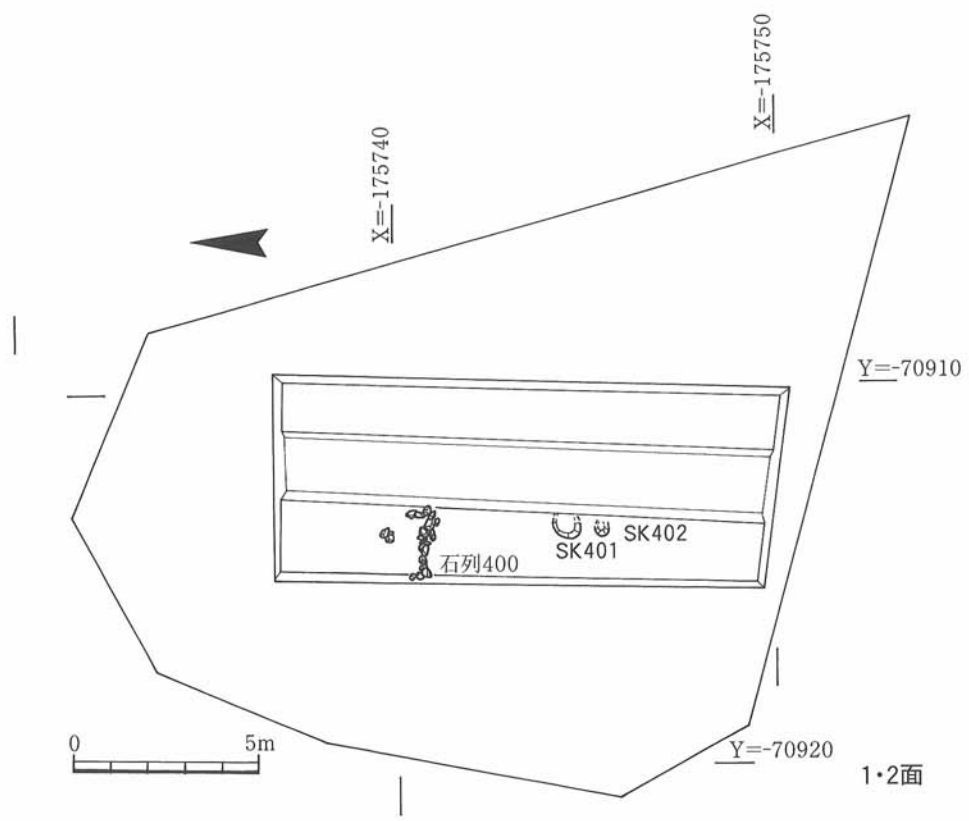
3面は2面が20～40cm堆積した下層に検出された整地層で、南半は平坦をなし、途中ゆるやかに傾斜して北側でまた平坦となる。この3面で確認された遺構は石列403、埋甕404がある。石列403は2面の石列400とほぼ同じところに位置し、東西に走る石列である。石列400と同じく玄武岩の自然石を1～2段に積み、北側に面を揃えている。周囲には南北にも連なる石列の一部や石囲い遺構のような石の配置が認められるが、トレンチ内であるため詳細は不明である。埋甕404は石列403の南側で検出された。推定径50cmの土坑に瓦質土器甕を埋置したものである。口縁部が僅かにのぞく程度まで埋めており、内部には使用後の廃棄とみられる石が確認された。

3面の時期は3面から4面間の堆積層中の遺物から17世紀後半から18世紀とみられる。

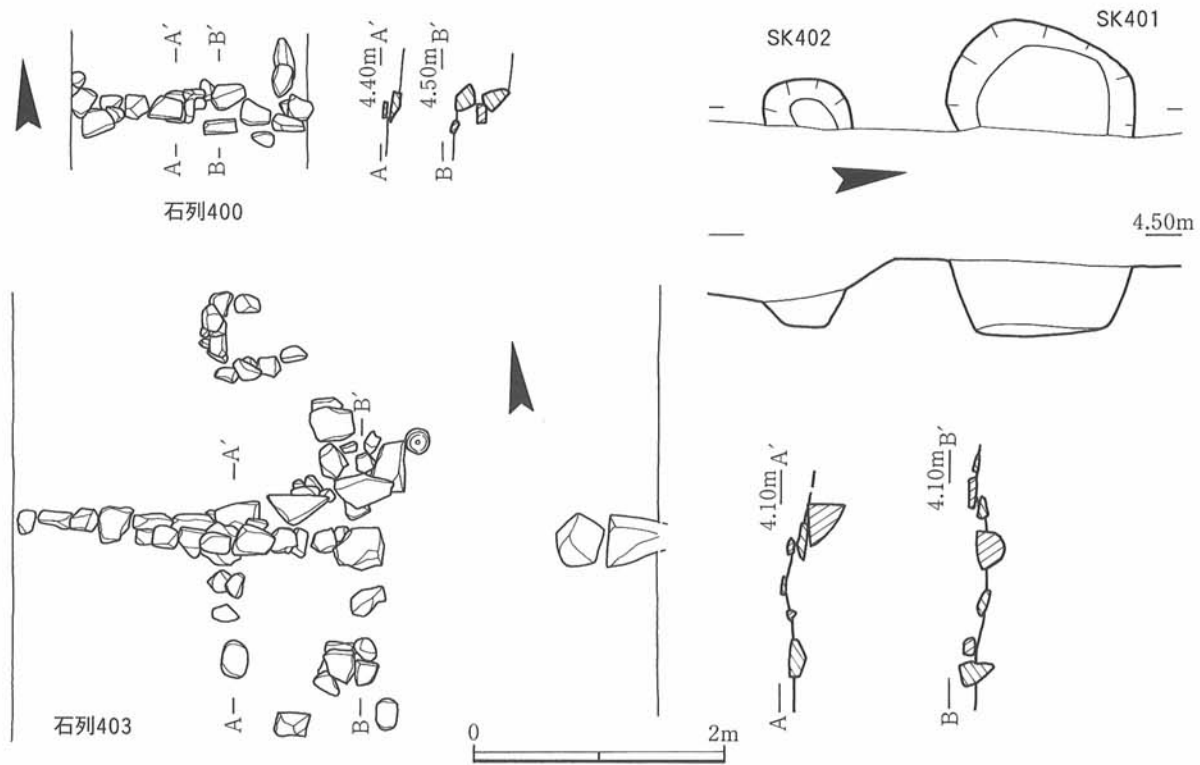
4面は3面下10cm程度で表れる黄灰色砂層で、平坦な面からトレンチ中央あたりで北へ（海岸へ）



第57図 1地区北端区断面模式図(1/80)



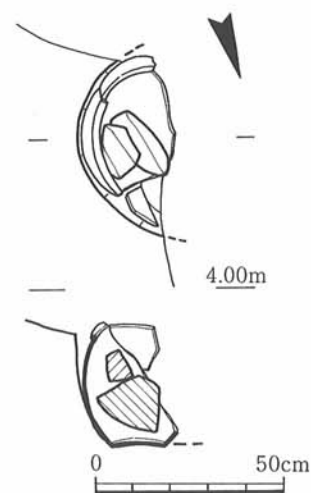
第58図 1地区北端区遺構配置図(1/200)



第59図 1地区北端区石列・SK・埋甕実測図(1/60)

大きく傾斜し、トレンチ端では再び平坦な面となる。この砂層上では石列などの遺構は検出されなかった。なお、4面傾斜面の上に堆積し3面を形成している灰褐色細砂層中には多くの陶磁器が包含されていたことから、この傾斜面を埋めて整地し3面を形成したとみられる。ところで前年までの調査成果と比較すると、1-O~Q区で検出された当初の外堀を掘削した基盤層と、4面とした黄灰色砂層は同一層であると考えられる。そのため4面とした層は外堀掘削時またはそれ以前の旧地形面とみて大過ないであろう。また現海岸線が近いことを考慮すると旧砂堆の一部である可能性が高いとみられる。

当地区で検出された町屋遺構を絵図との比較でみる。慶安5年(1652)の絵図では外堀の北端より北側、すなわち当地区にあたる場所には町屋の描写は認められない。後の絵図にある海岸に沿った道もないことから、当地区における人為的な地形の改変は少ないとみられる。このことから前述の4面傾斜面は自然傾斜の可能性が高くなるであろう。また当地区はこの後寛文10年(1670)絵図や天和元、2年(1681、82)絵図では、樽屋町の一部が張り出し町屋の存在を示す描写へ変わっていく。つまり17世紀後半ごろには町屋が形成されたことを示している。今回の調査で最も古い町屋遺構は3面に伴うものであり、3面形成に伴う堆積層中遺物の時期と絵図からみた町屋形成の時期は大差ないと考えられる。



埋甕404(1/20)

(4) 平成12年度の調査

A 3地区 (第60～80図 図版32～46)

3地区は、北の惣門通りの南にあたり、調査区のほぼ中央で北片河町と南片河町に町名が分かれる地区である。調査前の地表面は、A～I区では現道路とほぼ同一の高さで、堀側に向かい緩やかに傾斜している。近代以降何回かに分けて堀側の石垣の積み増し改変がなされ、高さ上げされながら現在に至っている。J～M区は、南北方向に石垣55があり、この石垣以東は現道路とほぼ同じ高さで、石垣以西は石垣の基底面の高さで堀へ続く。近代以降もこの段差を利用してきたが、近年厚くコンクリート基礎を施し道路面まで高さ上げされ宅地化された。遺構面は調査区全体にわたって4面検出した。以下各遺構面の概略を述べる。

1面 (第61図 図版33)

表土や近現代家屋の基礎などを除去した時点で検出された遺構面を1面とした。整地層に含まれる遺物から判断して、時期は幕末から明治期と判断した。検出された遺構は、石垣、石列、礎石、埋甕、井戸である。

A区の石垣7以西は、2面相当の礎石や石列を覆い隠して黒褐色粘質土の層があり、また、建物基礎154、SE6上面は近代の遺物を伴う砂で覆われていた。1面の時期には1段低いまま放置されていたとみられる。

B～D区はこの区画で一つの敷地をなす(間口19.8m)。すなわち、石垣15(第68図)、石垣8、石垣13によって1段高く区画される範囲である。石垣15と8が東西方向を区切り、石垣7による東西方向の高低差は高さ上げされている。石垣8はそのまま堀へは延びず、石垣13によって逆「コ」の字にくびれ、「コ」の字の内側は低くなっている。高低差にして約1.5mあり、石垣10とした石段状の降り口がつく。現道路側には礎石が残るが一部しか検出できず、敷地全体の様子は定かでない。なお、現道路側にB、C、D区を区切る東西方向の石垣の上面が検出されているが、この面で堀側には続かず、2面の石垣の上端を1面建物の基礎に流用していたと考えられる。

E区は、石垣15、23に区切られる敷地(間口6.1m)である。この敷地区画は2～3面から踏襲されている。現道路側溝から西4m付近で約1mの高低差があるが石垣は検出されず、石垣23の上端沿いに緩やかに傾斜している。

F区は、石垣23、25、35に区切られる敷地(間口5.9m)である。石垣24によって約0.5mの高低差が生じている。24以東の高い部分では礎石が検出され、以西では生活遺構は検出されていない。従って高い部分が住居部分であると考えられるが、全体ははっきりしない。石垣24の構築時期は2面相当時期と考えられるが、1面でも継承され、上部が露出していたと考えられる。

G～J区にかけては近代以降の攪乱によって大きく壊されているため、1面に伴う明確な区画の判断ができない。

J区以北は、南北方向に約30.8m延びる石垣55によって東西を区画され、その高低差は平均して約1.5mある。2面以降この高低差のついたまま近代に至っていると思われるが、コンクリート基礎で大きく攪乱され、検出できた遺構は井戸2基、埋甕1基のみである。埋甕1(図版41)は、J区の石垣55直下で検出した遺構で、検出レベルが石垣25の下端レベルと重なることからこの面を1面と比定

した。東西方向の石列はほとんど検出できず、この時期の敷地設定は不可能である。

2面（第62図 図版33）

3地区の町屋区画が明確に検出された。この区画割りには3面以下についてもほぼ同一区画である。江戸時代を通じて間口はほぼ一定のまま、東西の高低差を石垣や石列、盛土などで処理し、堀へ向けて増改築を繰り返した様子が見て取れる。区界を示す石列や石垣は、面を相対させて2列続く例が多いことから家屋は密接して並んでいたと思われる。

時期決定する資料に乏しいが、検出面出土遺物から広東碗出現期をはさんで、18世紀中頃～19世紀前半の構築面と思われる。遺構は、石垣、石列、礎石、石段、土坑、井戸、排水溝、埋甕、かまど跡遺構、胞衣埋納遺構、建物の基礎とみられる基壇状遺構が検出された。

A区（図版35）は、石垣7以西の低い部分が黒褐色粘質土によって覆われていた部分で、この層を掘り下げると家屋の基礎部分をなす礎石や石列が良好な状態で検出された。北は石垣60（第69図）、B区の石垣7に貼り付く石段、石列87によって境をなし、南は石列19によって区画される。石列19は短辺30cm、長辺60cmの長方形に仕上げた玄武岩の切石を南に面をそろえて据えていることから、南側面の地覆石と思われること、石垣7に石列19ラインで垂直方向に目地が通ることなどから石列19以南については区画が異なると判断した。東西方向の規模については、石垣7以東に礎石が検出できていないので推定するしかないが、B区界の東西方向の礎石列が約2m間隔で並び、軸が通ること、石垣7の上端に礎石を乗せていることなどから棟続きであると考えられる。石垣7直下に検出した礎石は、東西方向約2m、南北方向約3.6mの間隔で方形に並ぶ。中央部を東西に通る礎石列は、長軸1mを測るような大きな自然石が据えられており棟柱礎石と思われる。一方、石列19の西端部に据わる礎石は、玄武岩の野面石で南、西面が面だしされている。おそらく家屋の西南隅の柱礎石であろう。これらのことから、少なくとも石垣7以西部分の家屋は棟方向を東西にとり、間口約8.1m奥行き15.3mの棟続きの大きな家屋が想定できる。

B区は、石垣60、65（第69図）、石列20で区切られる敷地（間口8.0m）である。A区同様石垣7によって約2.0mの高低差が付き、A区界に作りのしっかりした石段状の降り口が付く（図版36）。B区の石垣7（図版36）は、基底部から1.0m程度を残すのみで、それより上の石は抜き取られて転用されている。検出された礎石列のうち、中央部を東西に通る礎石列は、現道路側に残る礎石と堀側の低い部分の礎石で軸が通るのでA区同様棟続きと考えられる。家屋部分の外にあたる堀側に不明遺構（SX42）（図版42）がある。平瓦と丸瓦を逆凸字型に木端立てして、周囲を粘土で固めてある。内側に熱による赤変を認めることからかまど跡の可能性が高い。石段を下りた地点から西に石列86、87によって張り出し部分が作られ、埋甕（図版41）がある。この埋甕は2連の便槽と思われる。

C区は、石垣65、石列20と石垣148（第69図 図版36）、石列21で区切られる敷地（間口6.0m）である。A、B区同様石垣7によって約2.0mの高低差が付き、B区界に貼り付かせて石段状の降り口がつく。石垣7は基底部から2、3段程度残すのみで、上部の石はやはり転用されている。石垣7に平行して石列171が走り、間を1段高く整地している。整地土には赤橙色の壁土状のブロックを多く含む焼土が使われ、間口幅のほぼ中央の位置に礎石が据わる。これより西約4.0mの位置に1.5m間隔で南北に礎石が並ぶ他は礎石がないのでC区のこの部分は土間であった可能性がある。

石垣7は、A、B、C区を南北に貫く長さ約25.1m、高さ約2.0mの石垣であることがわかった。(第68図) それぞれの区界には垂直に目地が入り、石段状の降り口がつく。また、基底部から1.2m付近でやや道路側にずらして積み重ねられており、積み増したと思われる。さらに裏込には焼土が使われ(図版37)、この焼土は石垣基底部を貫いて石垣7以西にも広がる。このような点や玄武岩の野面石の乱積みである点も共通しているため、同一時期に同一集団によって一気に積み重ねられたものであろう。それは積み増す時期についても同じことがいえる。積み増し部とそれ以下の部分において石質や大きさ、積み方や面の調整に大きな違いは認められない。このことから石垣7が構築されて積み増されるまでの時期差は小さいといえる。裏込の焼土に含まれる遺物は、17世紀末から18世紀後半の幅を持つ。A区の土層断面(第67図)から積み増し部が2面、石垣構築は3面相当時期が妥当と考える。

D、E区はそれぞれ間口5.8mと6.1mの区画である。両区画とも石垣7に相当するラインに石垣は検出されず、E区において軸を約2.0m東にずらして石垣41を検出した。D区では石垣15を構築する際に大きく破壊を受けており石垣は検出できなかったが、石垣の一部とみられる石が面を西に向けて据えられているのを検出した。原位置を留めているのでおそらく石垣41に続く石垣があったと思われる。それぞれ南側の区界に貼り付いて石段状の降り口がつく。

石垣41は、高さ約2.0mで玄武岩の野面石の乱積みである。積み方から見て石垣7と同一時期と思われる。北側は、東西方向にのびる石垣54と直交する(第68図 図版37)。

F区(図版35)は、石垣54、石列172によって区画される敷地(間口5.9m)である。石垣24によって高低差1.5mを保ちつつ堀側に続く。24の1.0m西に24に平行して石列30が走る。建物西面の地覆石と思われる。石垣24(第68図)は、調査区東端から堀側に6.0m張り出す。基底部にSE29の上端の石がかかる。SE29も2面に相当するので2面にあたる時期に拡張されたと思われる。また、F区の南を区切る石垣54によって、F区の2面はF区以南の2面より約0.4m程度高い。また、調査区全体においてもF区が最も高い。絵図上に調査区を当てはめると石垣54が北片河町と南片河町の境界に相当するので、それと何らかの関連が想定できる。

G区は当初石垣106が検出できていなかったため、石列172から石列173まで同一区画と考えていたが、石垣106によって区切られる2区画であることがわかった。G南半区は間口6.0mで石垣59によって高低差約1.0mを保ちつつ堀側に続く(図版38)。石垣59の1.0m西に59に平行して石列174が走り、2.0m間隔に礎石が乗る。区画やや南よりに東西方向に軸が通る礎石列があり、やはり2.0m間隔に並ぶ。東端の礎石は石垣59上に乗る、西端の礎石から南に自然石の地覆石が並ぶので、この部分が家屋部分であると思われる。石列174付近には集中して胞衣埋納遺構を4基検出し、家屋部分の堀側に埋甕を検出した。周囲に径10cm程度の川原石が敷き詰めてあり、便所遺構と思われる。

G北半～I区(図版38)までの3区画は各々間口4.9～5.0mの区画で南北を石列173、石垣80、75、77が区切り、東西を石垣76、石垣74などが区切るが礎石などはほとんど検出できなかった。

J区以北は、現代のコンクリート基礎によって著しい破壊を受けている区画で2面の遺構は少ない。面設定が難しいが、石垣78の上端レベルを2面とした。また、F区の2面レベルとJ区の2面レベルでは約0.7mの高低差がある。このことは、各敷地ごとに面レベルが異なっていることを示し、この調査区の生活面の時期決定を困難なものにしている。

石垣55（図版38）はJ～M区を南北に貫く長さ約30.6m、高さ約1.5～1.7mの玄武岩の野面石乱積みの石垣である。所々垂直に目地が入るが石垣7と同じく同一時期、同一集団によって積まれたものと思われる。石垣7より使用石材がやや小振りで、積み方も雑な印象を受ける。石垣78の上端を2面としたが78の東端は55とは交わらず、1.0m西側の石列と交わる。この石列上に南北方向に軸が通る礎石が約2.0m間隔で乗る。石垣55の基底面はこの礎石が乗る面と同一レベルであることから55の構築時期は、2面から1面にかけてのある時期といえる。石垣55以东については南の石垣77からLとM区を分ける石列175までの約26.3mの間、礎石や区を分けるような石列は検出できなかった。この間は棟方向を南北にとる長屋状の家屋の可能性が指摘できる。なお、石垣55は崩落の危険性があったため、平面の記録に留め、撤去した。

3面（第62図 図版32）

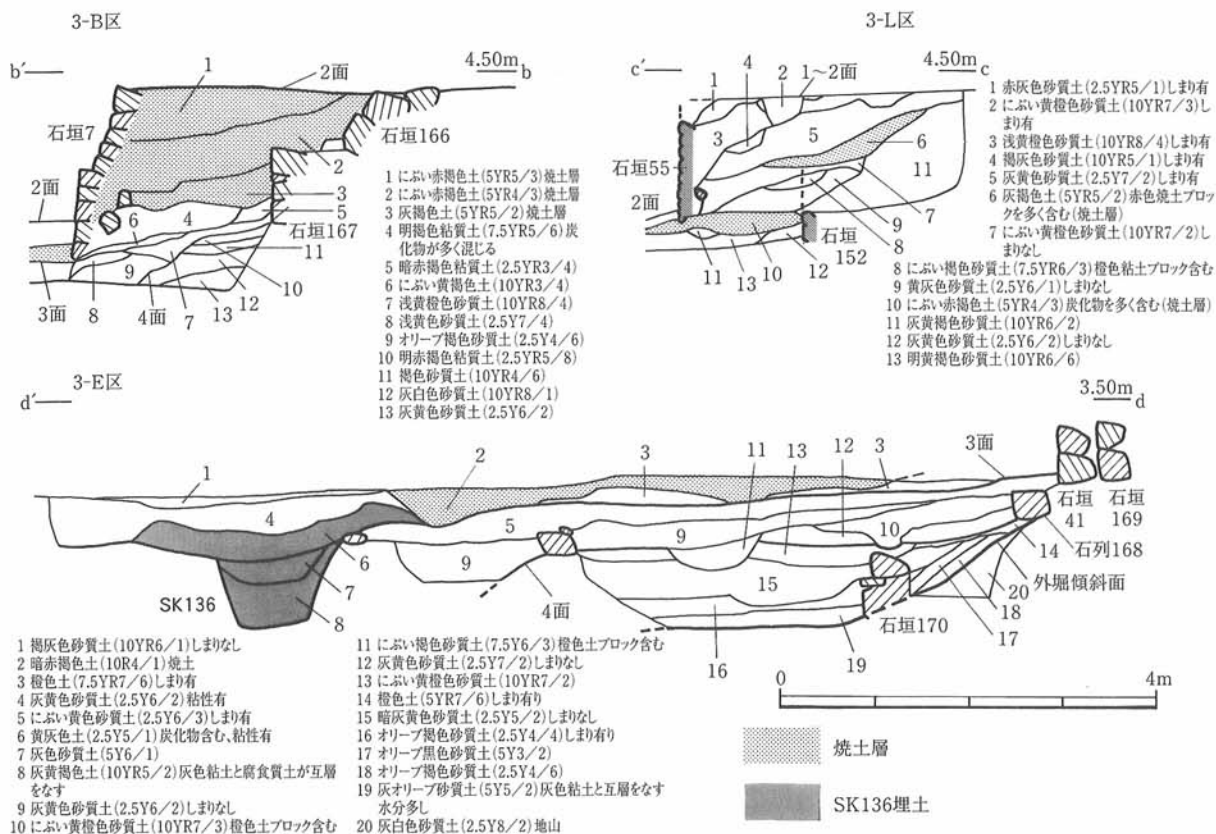
この面は、石垣7の構築された時期、すなわち裏込の焼土が広がる面とその直下の生活面とした。時期は、SX96、SK136、石垣7裏込焼土の遺物から17世紀末～18世紀初頭とした。この時期は、文献上で堀を浚渫し、堀幅を8間に整備する直前の時期で、2面とともに町屋の中心時期にあたる。堀側については、2面以降に掘り込まれた井戸や、堀の浚渫土と思われる黒褐色砂質土の堆積によって遺構の確認ができない部分が多かった。検出された遺構は、石垣、石列、井戸、埋甕、かまど、土坑、不明遺構とした木杵、木桶、粘土土坑、石囲い遺構等である。町割りは、2面とほぼ同じである。

A区（図版35）では、石垣7以西に礎石、地覆石と思われる石列176、177を検出した。礎石や石列は2面と位置がずれるので、2面の家屋以前のものといえる。屋内にあたる部分からかまど跡、井戸、胞衣埋納遺構を検出した。これらの西側で不明遺構としたSX96、161を検出した。SX161（図版42）は木桶で径1.2mを測る。底面から0.2mを残すのみで上部は腐食して残存しない。四隅に柱の根石と思われる石を伴うことから便槽と思われる。

B区（図版35）は、2面の建物遺構の下層から地覆石と思われる石列178、179を検出した。隣接して、10cm大の礫が敷かれている。家屋の外部構造と見られ、これらの配置の違いから2面の家屋以前のものとした。堀側に方形の石囲い遺構であるSX149（図版39）、160がある。SX160（図版42）は長方形の木杵であるが、用途は不明である。

C、D、E区に家屋構造を明確に示す遺構は検出されなかったが、C、D区石垣7直下にかまどが集中して計6基検出されたことが特筆できる。いずれも石組方形の燃焼室を持つ小型のものである。D、E区の石垣41直下から調査区中央部にかけて、2面直下に焼土が広がる（第60図 図版36）。焼土層内に包含される遺物や状況から石垣7裏込焼土と同時期のものと思われる。

G南半区では土坑（SK131）を検出した。出土遺物から3面相当の廃棄土坑と考えられるが、基底部から廃絶井戸（SE163）の上端石が検出されたことから、163を廃絶して井戸石を抜き取った跡の窪地を廃棄土坑として利用した可能性がある（図版39）。I区では、2面で検出した石垣76のすぐ東側にそれよりも古い石垣98を検出した。この石垣はH区にも続くが、検出直後に崩落した。高低差約1.3mの自然石を粗割りした乱積みで、石垣7などと比較するとやや古い様相を呈する。基底面のレベルでSK127を検出しており、遺物から3面相当とした。F～I区では調査区東端から西に約13mラインを境にして、黒褐色の粘質砂土が厚く広がり遺構がなくなる。この層からは木製品が多く出土した。



第60図 3地区土層断面図①(1/80)

土坑の様な平面プランもないので堀の浚れ土と考えている。

J～M区までは、前述の通り堀側がかなり破壊されているので、石垣55撤去後の現道路側を中心に掘り下げ、遺構の少ない55以西については、外堀構築当初の傾斜面を探るトレンチ調査に重点を置いた。55裏の整地土層断面を見ると(第60図)2層に分けて焼土層が入る。焼土内には遺物を含まないため、2層の時期差や石垣7裏込の焼土との関連はわからない。また、下層の焼土は石垣55の基底面を貫いて以西につながる区画もあるが、広がりはつかめなかった。この焼土の直下に南北方向の石垣、すなわち石垣99、150、151、152、153を検出し(第68図)、併せてそれらに貼り付く石段状の降り口を検出した。この基底面を3面とした。時期はSK136より若干古くA～E区の4面時期の遺物も混ざる。おそらく4面から3面まで継続した遺構と考えられる。残存するのは、基底面から2段ないし3段で、大振りな自然石を粗割りした乱積みで、石材は花崗岩が多くなる。こういう石垣はこれまでの調査成果から見ても古い時期の様相を示す。また、石垣98以北については、石垣の南北の軸方向がやや西へずれていることが指摘できる。すなわち現道路に並行して走っていたこれまでの石垣に比べて、北に行くに従って道路から堀側に離れていくのである。この理由を解明するには資料に乏しいので、指摘するに留める。

町屋の敷地区画であるが、J区以北についてK区は石垣153北端に貼り付く降り口を境にする間口約7.9mで、区画ほぼ中央に降り口が付く。L区は、G区同様当初1区画と考えていたが石垣152が通る南半区と石垣151が通る北半区の2区画に分かれることが判明した。南半区は、石垣152北端の石列を境にする間口約8.1mの敷地で、北半区は石垣151の北端の石列を境にする間口約4.2mの敷地である。M区は、石垣150の北端の石列を境にする間口約5.1mの敷地を想定した。(図版34、38)

4面（第63図 図版34）

この面は、石垣7を撤去した後のA～E区を中心に検出した面で、区画全体を検出したのはA～C区にすぎない。遺構の時期を知る良好な資料に乏しく、整地面からの遺物による他ないが、概ね17世紀後半の面である。文献上で堀幅14間と出てくる時期にあたる。

A区では新たに石垣159、石列140、146、SX162を検出した。石列146は、調査区東端から西約12mラインを南北に走る石列で、140は、更に西13.5mラインを146と並行して走る。2列とも花崗岩の山石を粗割りして2段程度乱積みしたもので、上端に礎石と思われる石が乗ることから地覆石と根石を兼ねているものと思われる。この石列より東の面にはいわゆるまさ土を入れ込んで整地してあるのでこの面を4面と比定した（第67図）。石垣159（第69図）は、区画のほぼ中央をやや南に弧を描いて東西方向に構築されている石垣で、西端部で高低差約0.8mを測る。おそらく当初はL字形に構築されていたと思われるが、西面は石垣7構築時に失われた可能性がある。この石垣の北面直下に礎石が1m間隔で検出され、石垣60まで薄く赤褐色粘質土を張った緩傾斜面が露出している。SX162（図版42）は、石列146の西に検出した径約20cmを測る木桶である。用途は不明であるが、可能性として胞衣埋納容器が指摘できる。

B区（図版37）は、基本的にはA区に準じる。すなわち石列140のラインに石列139、石列146に対応する石列141（図版37）である。目的、用途も同様である。石列139南端部にSX138を検出した。SX138（図版39）は、内法1m、深さ0.4mを測る方形の石積み遺構で、底面は砂質土のままである。北側に丸瓦を裏向きに据えた溝状遺構を伴うことから溜め桝と考える。現道路側では、南北に階段状に走る石垣166と167（第68図 図版37）、この2列と直交して西へL字形に張り出す石垣181を検出した。石垣181の裏はA区4面の整地土と同質の土で整地されている。B区はこの時期石垣60と181で張り出していたことがわかった。石垣166の上端と167の下端の高低差は、約1.4mある。

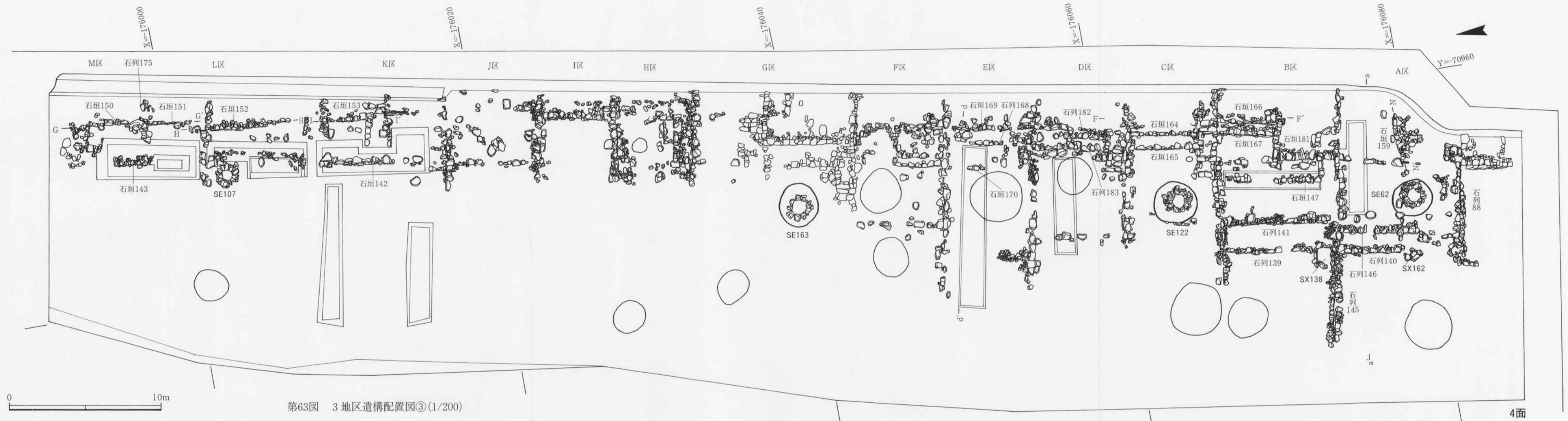
C区では、石垣7以東にやはり現道路と並行して走る石垣164、165を検出した（第68図 図版37）。164と165の高低差は約1.3mあり、南端に降り口が付く。

D区では、石列182、183を検出した。現道路と平行に走る石垣であったようであるが、基底部1段を残すのみである。やはり区画南端に降り口が付く。

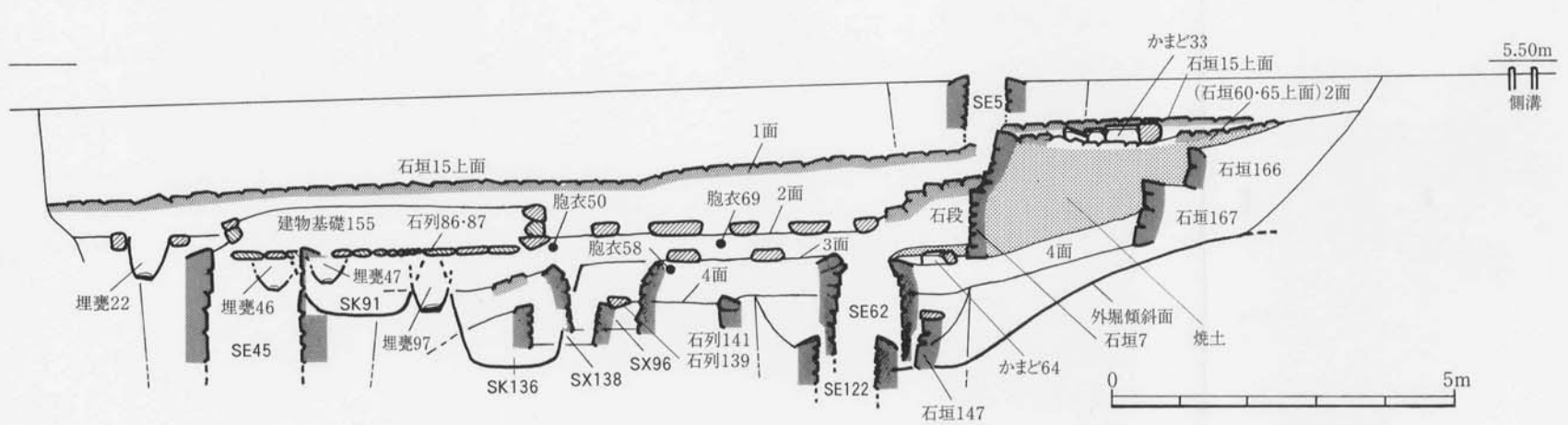
E区では、石列168、石垣169を検出した（第60図）。高低差は約1.3mある。

B～E区にかけて現道路と平行に走る2列の石垣、石列については、次の点が指摘できる。まず、外堀掘削時の緩斜面に対し、階段状に2列に構築している点である。これにより石垣の構築が簡略化できるとともに、崩落の危険度が減る。また、花崗岩の自然石を粗割りした大振りな石が多用されていることも共通している。石列168、石垣169が外堀の基盤層をなす淡黄色細砂の上に据えられていることから（第60図）、これらの遺構は、外堀構築当初の傾斜面を利用して構築された町屋形成初期の遺構といえる。当初の家屋形態は、A区の石垣159直下の礎石、B区の石垣181直下の礎石列等からいわゆる「懸作り」が想定できる。A～C区の2列の石垣は、石表面が熱により赤化していることが注目できる。礎石や礎石が乗る整地面も変色をきたしており、C区石垣165直下にあつては、板戸や畳、米、麦が炭化した状態で検出されている（図版37）。石垣7裏込に厚く焼土が堆積していた箇所と重なるので、4面から3面に至る時期に火災が生じ、その火災処理土で石垣7を構築し、併せて

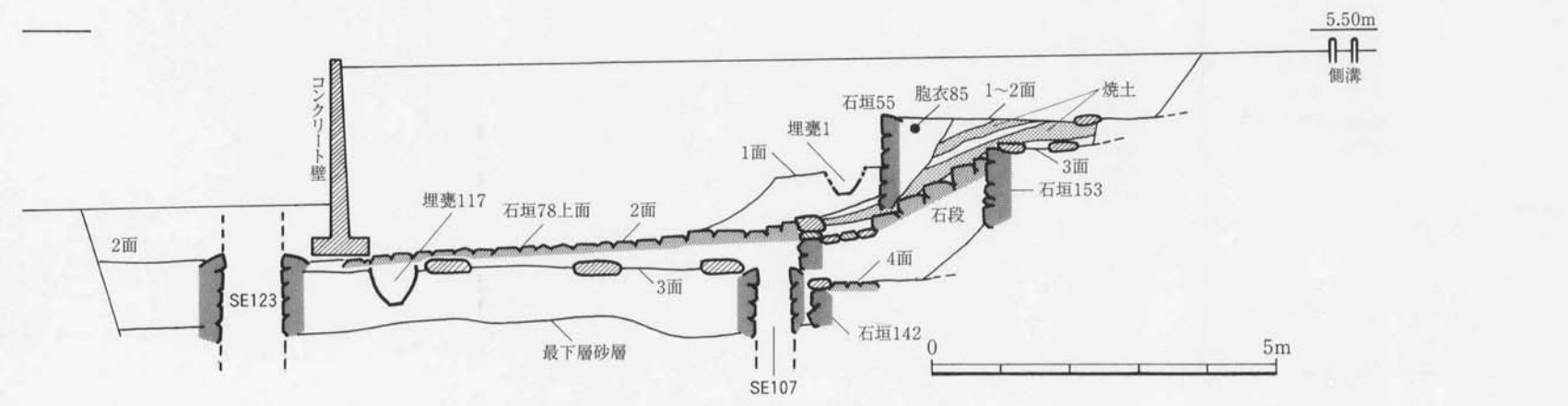




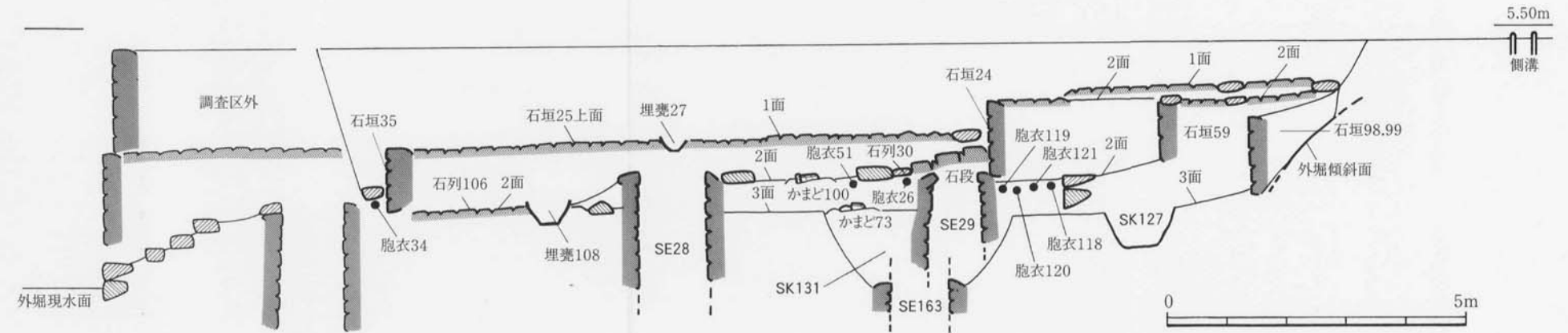
第63図 3地区遺構配置図③(1/200)



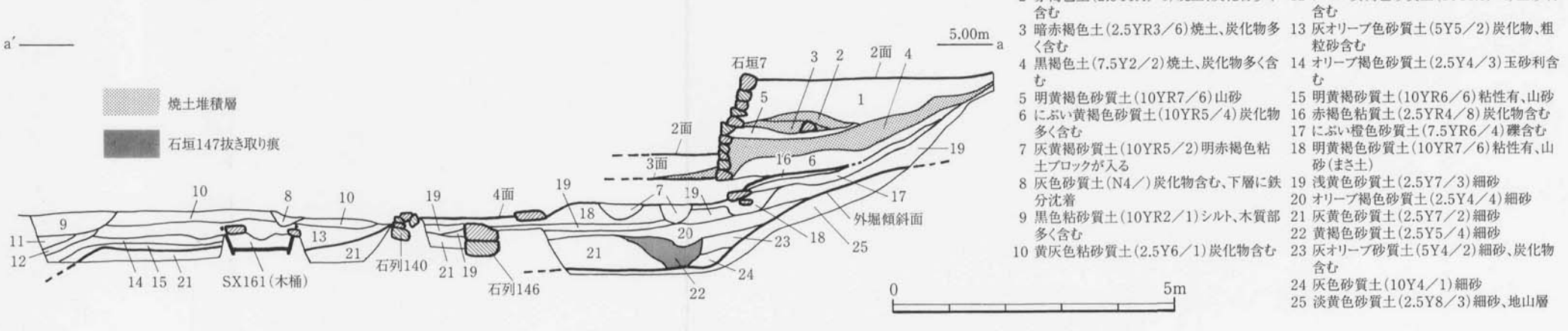
第64図 3地区東西断面模式図①(1/100)



第66図 3地区東西断面模式図③(1/100)

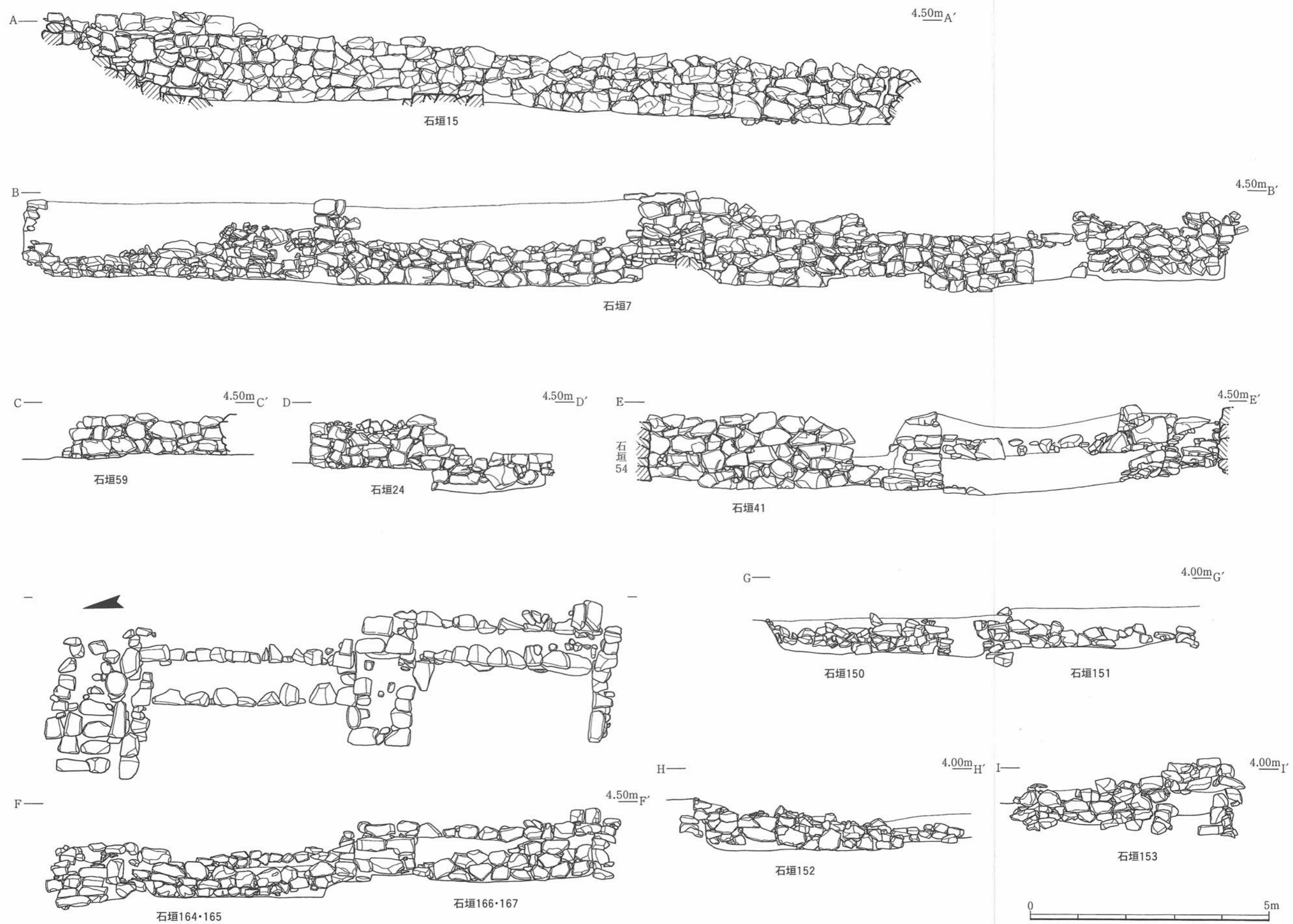


第65図 3地区東西断面模式図②(1/100)

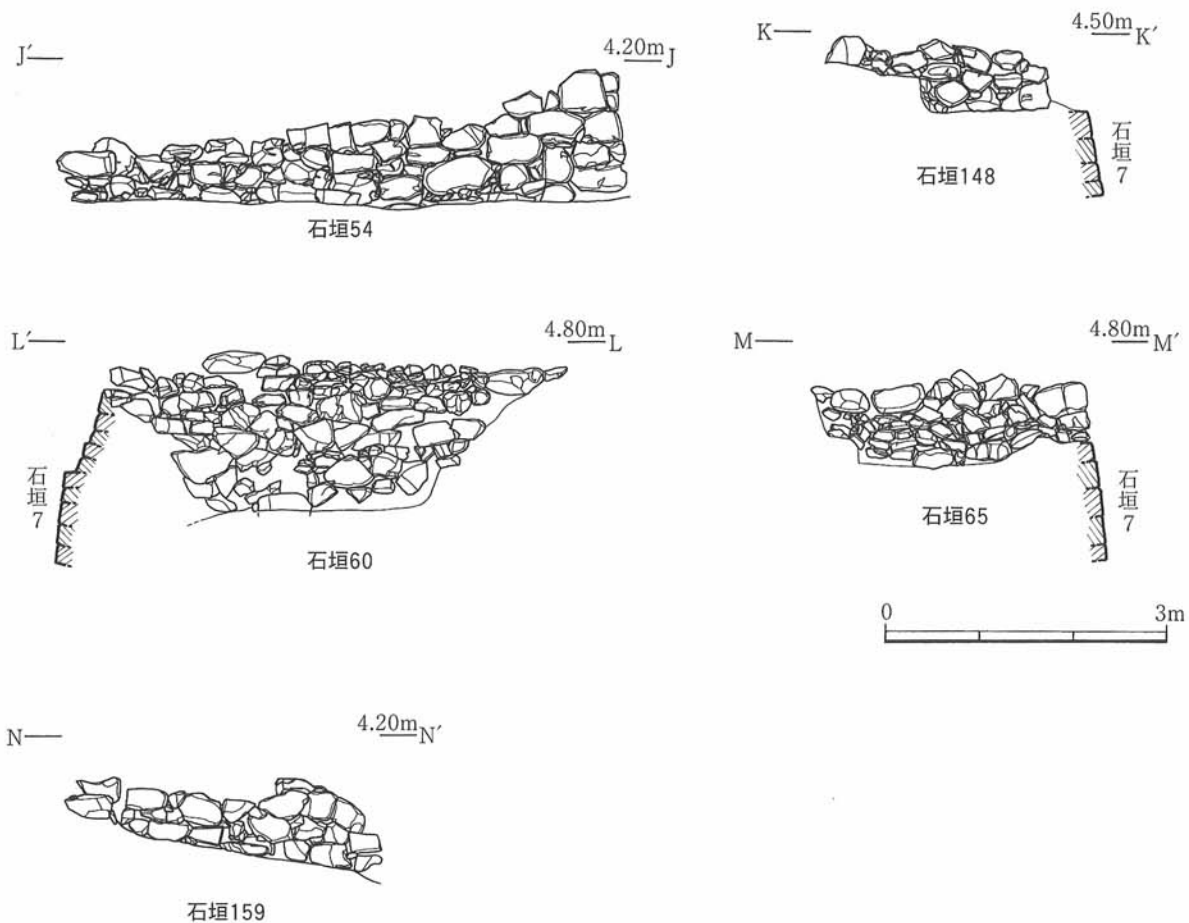


第67図 3地区土層断面図②(1/100)

- 1 におい黄褐色砂質土(10YR7/4)細砂
- 2 赤褐色土(2.5YR4/6)焼土、炭化物多く含む
- 3 暗赤褐色土(2.5YR3/6)焼土、炭化物多く含む
- 4 黒褐色土(7.5Y2/2)焼土、炭化物多く含む
- 5 明黄褐色砂質土(10YR7/6)山砂
- 6 におい黄褐色砂質土(10YR5/4)炭化物多く含む
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)明赤褐色粘土ブロックが入る
- 8 灰色砂質土(N4/)炭化物含む、下層に鉄分沈着
- 9 黒色粘砂質土(10YR2/1)シルト、木質部多く含む
- 10 黄灰色粘砂質土(2.5Y6/1)炭化物含む
- 11 灰色砂質土(N5/)粗粒砂含む
- 12 におい黄褐色砂質土(10YR5/4)玉砂利含む
- 13 灰オリブ色砂質土(5Y5/2)炭化物、粗粒砂含む
- 14 オリブ褐色砂質土(2.5Y4/3)玉砂利含む
- 15 明黄褐色砂質土(10YR6/6)粘性有、山砂
- 16 赤褐色粘質土(2.5YR4/8)炭化物多く含む
- 17 におい橙褐色砂質土(7.5YR6/4)礫含む
- 18 明黄褐色砂質土(10YR7/6)粘性有、山砂(まじり)
- 19 浅黄色砂質土(2.5Y7/3)細砂
- 20 オリブ褐色砂質土(2.5Y4/4)細砂
- 21 灰黄色砂質土(2.5Y7/2)細砂
- 22 黄褐色砂質土(2.5Y5/4)細砂
- 23 灰オリブ砂質土(5Y4/2)細砂、炭化物含む
- 24 灰色砂質土(10Y4/1)細砂
- 25 淡黄色砂質土(2.5Y8/3)細砂、地山層



第68图 3地区石垣立面实测图①(1/80)



第69図 3地区石垣立面実測図②(1/80)

7以西の低い面も整地し直したと考えられる。

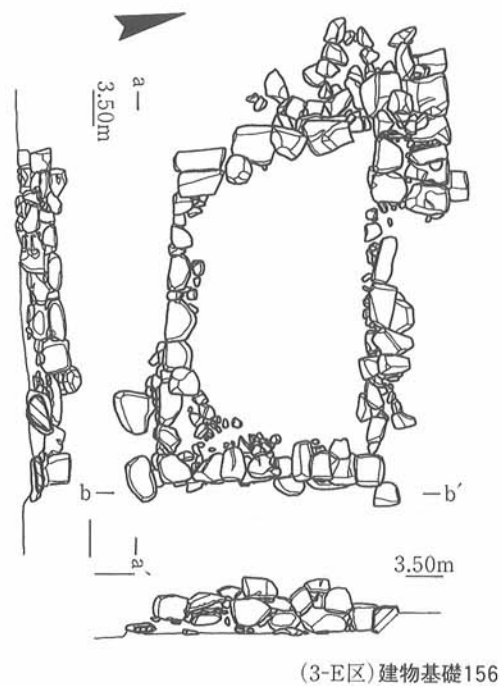
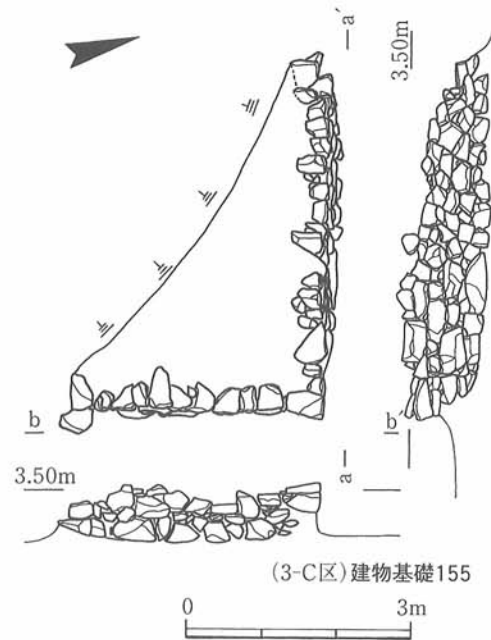
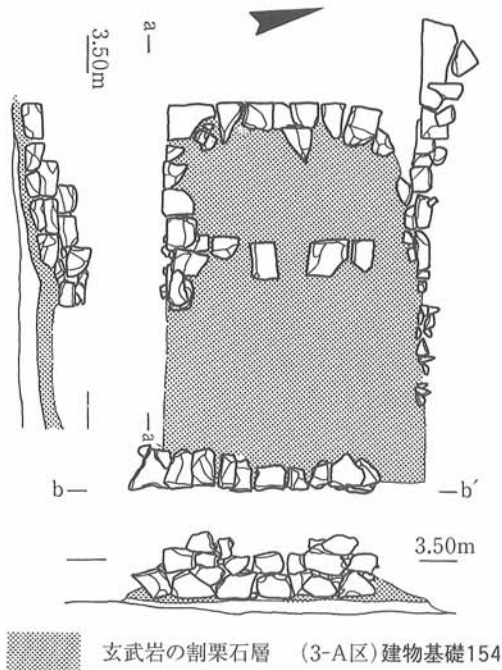
4面以下の遺構の有無と外堀傾斜面の確認のため、A、E区の東西方向及びB区の石垣181直下に南北方向のトレンチをあけた。また、J区以北は石垣55ライン直下に南北方向、L区北端に東西方向のトレンチをあけた。結果、南北方向に石垣147、170、142、143を検出した(図版37・38)。いずれも花崗岩の自然石を粗割りして2、3段程度乱積みしたもので、調査区東端から約8m西のラインで軸が通る。基底面の標高は1mで調査区最下層にあたる。東西トレンチでは、A区トレンチで石垣147にあたる石垣の抜き取り痕らしき土層が確認できたのみで、それより西に遺構は見あたらない。おそらくこの石垣が外堀の最下層遺構と思われる。石垣の裏込には、17世紀前半の遺物が包含されている。

以下、遺構別にその概要を述べる。

建物基礎(基壇状石組遺構)(第70図 図版35)

建物の基礎部分と思われる基壇状の石組遺構を3基検出した。いずれも2面の時期にあたる。

154は、A区で検出された、長辺5.1m、短辺3.8mを測る長方形の石組遺構である。玄武岩の野面石で3段程度積まれているが、所々石が抜けており、当初の天端石は残っていない。残存高は約78cmを測る。石組の内側及び基底面には、厚さ約24cmにわたって玄武岩の割栗石が敷かれている。石組内で、西面から1.7m東に南北に並ぶ礎石列を検出している。栗石敷きの基礎であることから蔵のような建物が想定できる。155は、C区で検出された石組遺構である。北、東面を残すのみで、残り2面は後世の削平を受けている。検出時点で短辺3.3m、長辺4.8mを測る。玄武岩野面石の乱積みで東面



約65cm、北面約96cmの高さを測る。いずれも天端石はない。内側は土のみで整地してあり、遺構は検出できなかった。156は、E区で検出された石組遺構である。北面は、石垣23構築時に壊されている。検出時点で短辺3.1m、長辺5mを測る。花崗岩自然石の乱積みで、一部玄武岩野面石も混ざる。石積みは下2、3段を残すのみで、いずれも天端石までではない。残存高は、東面78cm、南面90cmを測る。内側は砂層で覆われ遺構は検出されなかった。

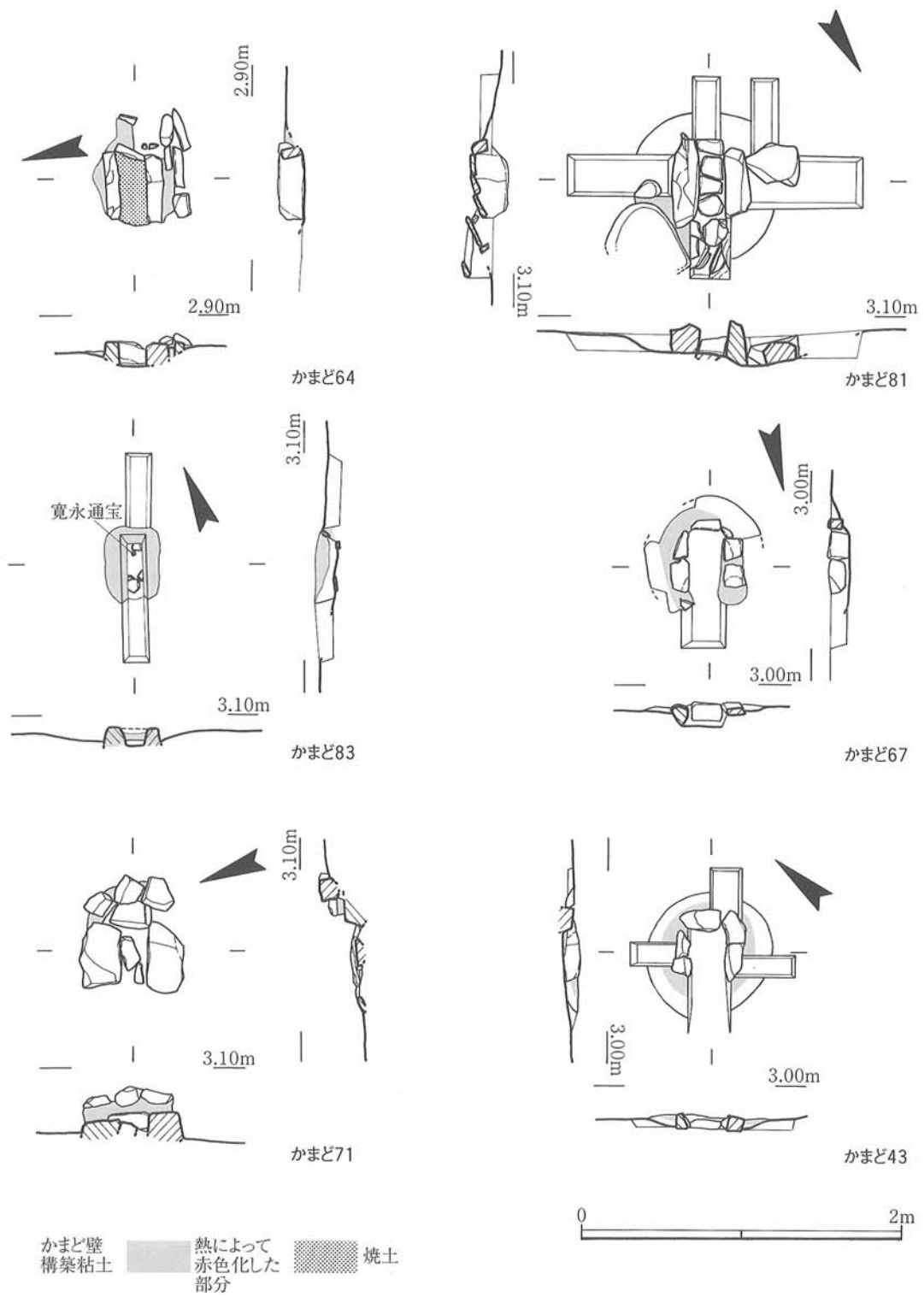
かまど (第71、72図 図版45、46)

かまど遺構は、計17基検出した。検出面は、B区の33、G南半区の100が2面の他はすべて3面

第70図 3地区建物基礎実測図(1/100)

検出時に出土した。ただし、33の下層に位置する84、158については、33とのレベル差があまりなく、遺物による時期差も不明なため2面の可能性も残っている。検出された位置にも一定の傾向がある。すなわち、33、84、158が現道路側の高い部分で検出された他は、石垣の西の一段低い家屋部分に集中している点である。

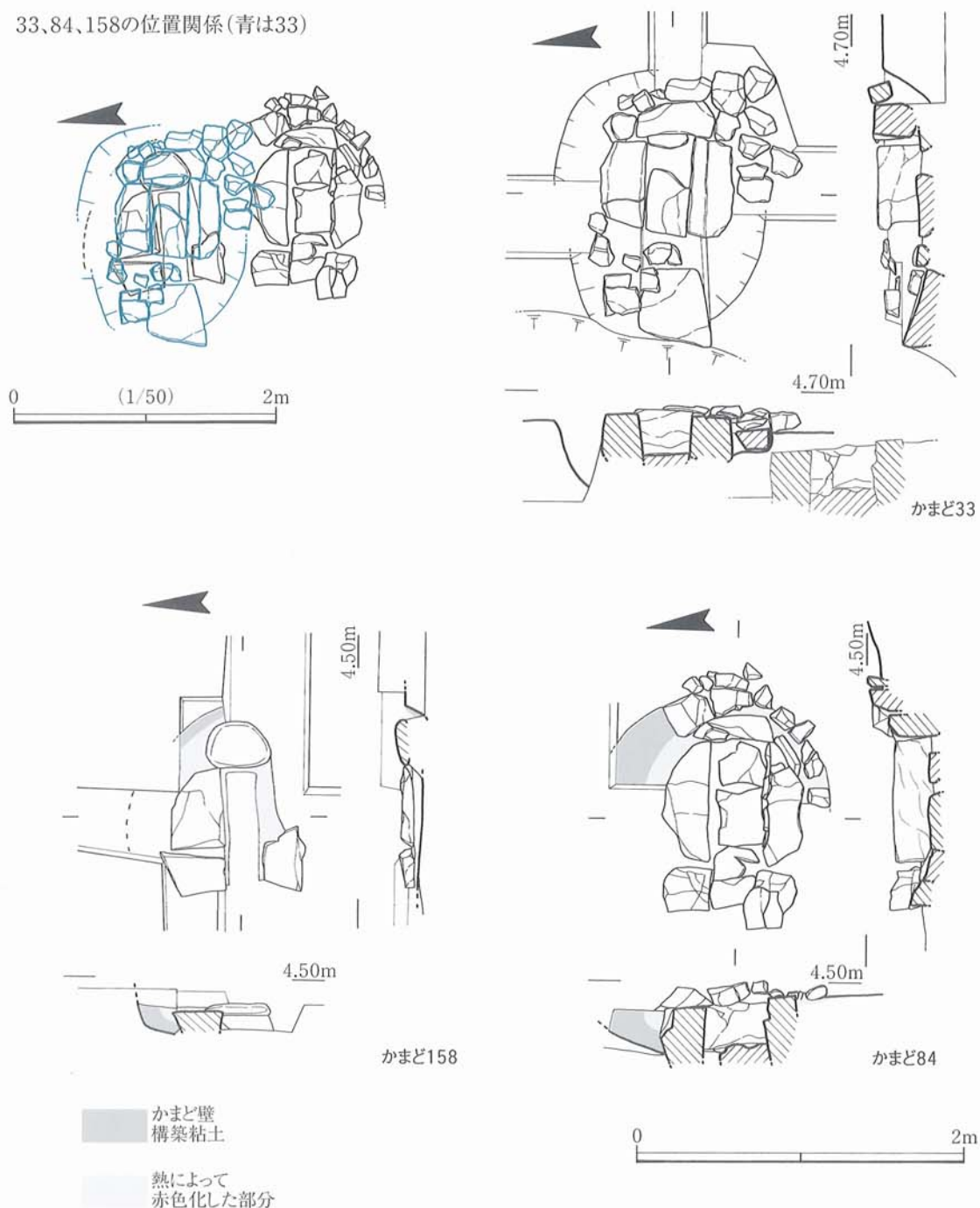
B区石垣7以東から33、84、158の3基がほぼ同じ位置で検出された。33検出後、その基底面直下より84、158が出土したため、84、158を廃絶の後その直上に33を構築したことがわかった。3基とも上部施設が削平されて基部のみを残す。33は、石垣7裏込の焼土を切り込んで構築され、玄武岩の長



第71図 3地区かまど実測図①(1/40)

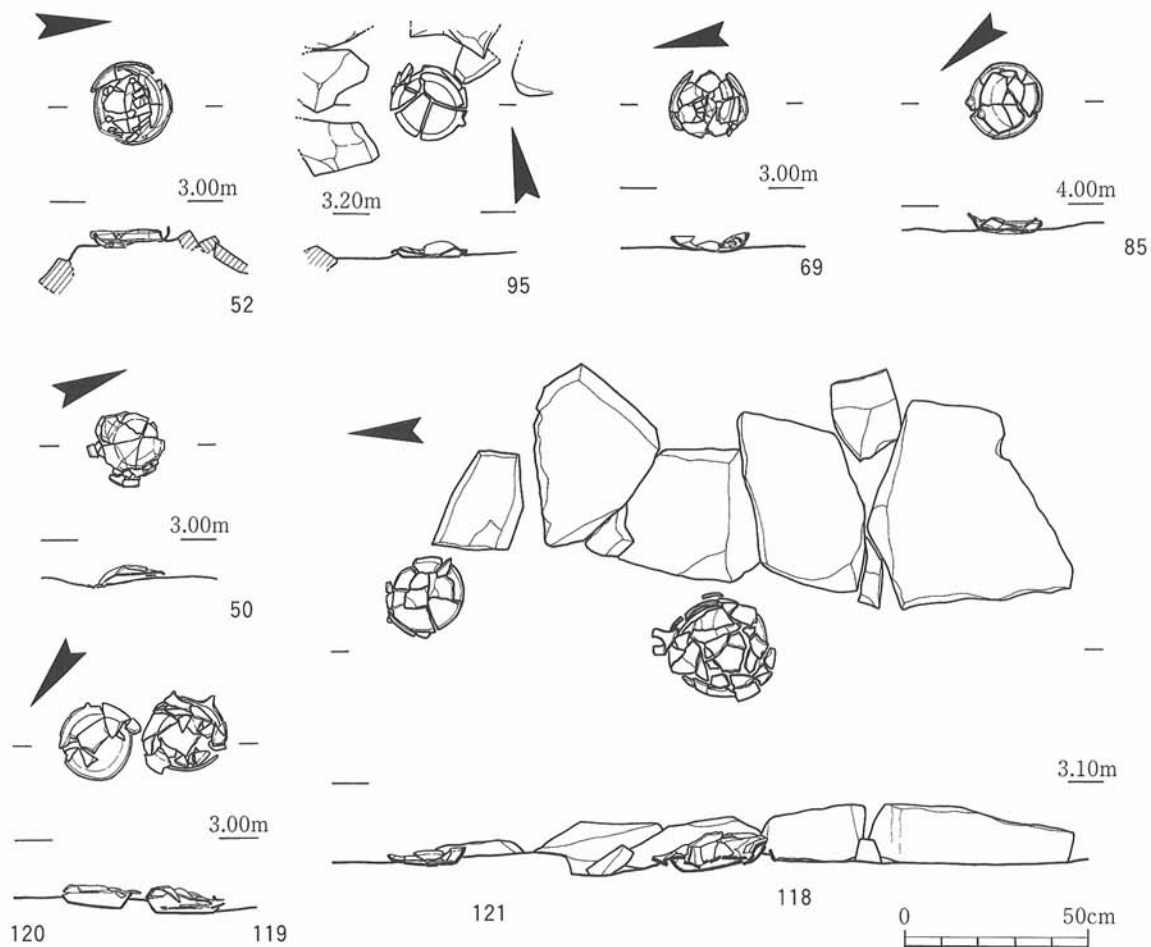
方形の石を「コ」の字形に囲んだ方形の燃焼室を持つかまどで、内法長軸60cm、短軸29cmを測る。焚き口は西に開き、燃焼室底面と焚き口にあたる部分には、玄武岩の板石が敷かれている。燃焼室内面と底面は、熱による赤化をおこしており、石目に沿って亀裂が生じている。石組の裏には小割にした石が詰められ、すき間を橙色粘土で埋めてある。この粘土は燃焼室を中心に長軸160cm、短軸126cmの楕円状に巡り、燃焼室に近い部分はやはり赤化している。この部分が上部施設の床面と思われる。84はこの調査区で検出したかまどの内もっとも大型のものである。33と同様の石組方形の燃焼室を持ち、

33、84、158の位置関係(青は33)



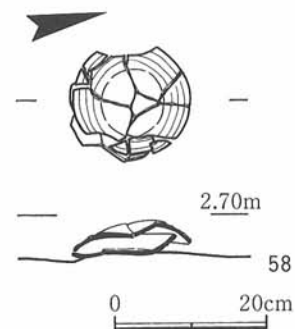
第72図 3地区かまど実測図②(1/40)

内法長軸1m、短軸35cmを測る。焚き口は西に開き、燃烧室底面には4個の石が敷かれ、焚き口に向かって緩く立ち上がる。燃烧室内面及び底面はやはり熱によって著しく赤化している。石組の周囲には、小割にした石が環状に巡る様子が一部残存しており、この石を芯に橙色粘土によって径170cmを測る円形の上部施設が構築されていたと思われる。158は84の北側に隣接して検出したかまどであるが、残存状況が悪く、燃烧室を作る石組の一部を検出したのみである。底面部分は灰色粘土が敷いてあるが熱を受けた様子はない。当初84と158は2連と思われたが、長軸方向がそろわないことから別物と考えられる。33はその構築状況から2面に帰属するが、33と84、158との間には整地土が薄く入るのみで、時期差を明確にする資料に乏しい。下層の二基は3面に帰属させているが、2面の可能性も

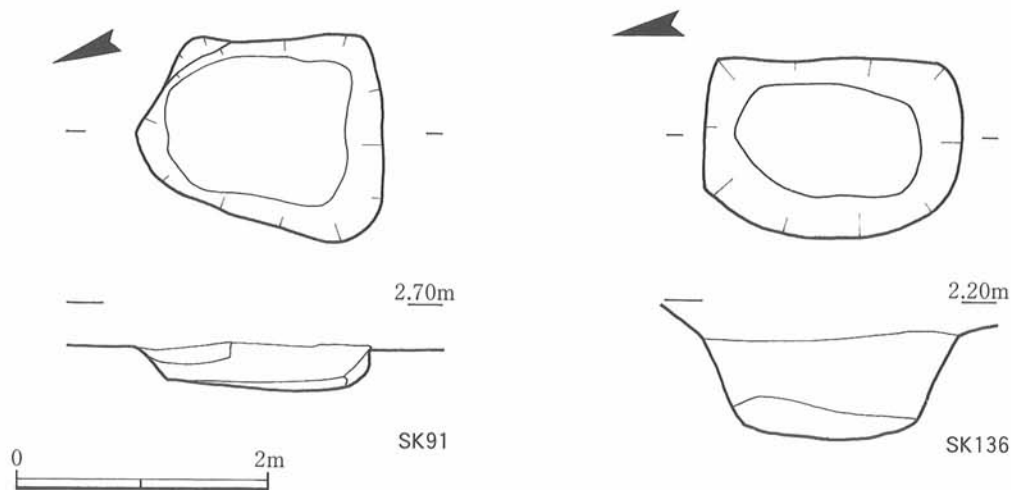


第73図 3地区胞衣埋納遺構実測図①(1/20)

否定できない。石垣7の西面に貼り付く石段状の降り口付近に集中してかまど43、44、67、71、72を検出した。43、44、67はD区、71、72はC区に入る。いずれも石組方形の燃焼室を持つが、44、72は奥壁の石を欠き、残存状況は悪い。底面を構成するものは71に一部分石が敷かれているのを検出した他は焼土が入るのみである。燃焼室は、内法長軸32~40cm、短軸18~23cmにおさまる小型のかまどである。焚き口方向は、43が南西、44、67が北、71が西、72が南である。43、67は比較的残りがよく、石組周囲を径70~77cmの円形にめぐる橙色粘土の床面が検出できた。石組付近の粘土は熱によって赤化している。かまど64、83はA区石垣7以西3面で検出したかまどである。いずれも石組方形の燃焼室を持つ。64は、底面を敷くものは検出されなかったが、81は平たい礫を4個敷き、焚き口に向けて緩く立ち上げてあった。燃焼室は内法長軸40~45cm、短軸16~17cmにおさまる小型のかまどである。焚き口は64が西、81が北を向く。81周辺では元禄年間鑄造の豆板銀が1個体出土しており、3面設定時期と重なる。83は81の南に隣接し、焚き口を反対方向に向けて構築された小型のかまどである。燃焼室にあたる部分は内法長軸35cm、短軸17cmを測る方形であるが、赤化した粘土のみで、芯材はない。焚き口から30cm奥、底面に古寛永通宝1枚を検出した。原位置を留めていることから廃絶に伴う遺物と思われる。



第74図 3地区胞衣埋納遺構実測図②(1/10)



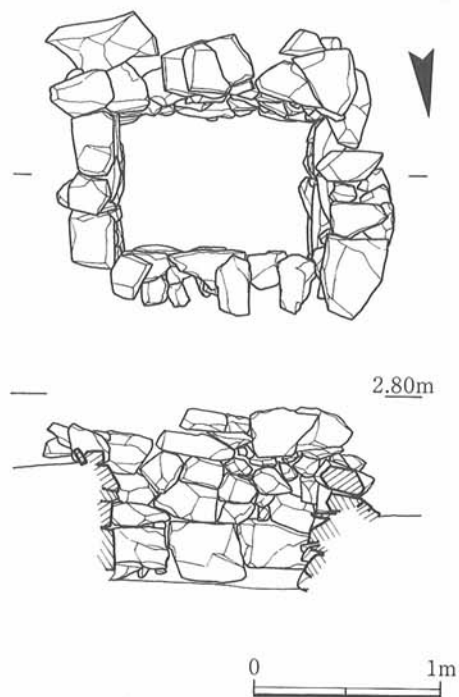
第75図 3地区SK実測図(1/60)

胞衣埋納遺構 (第73、74図 図版43、44)

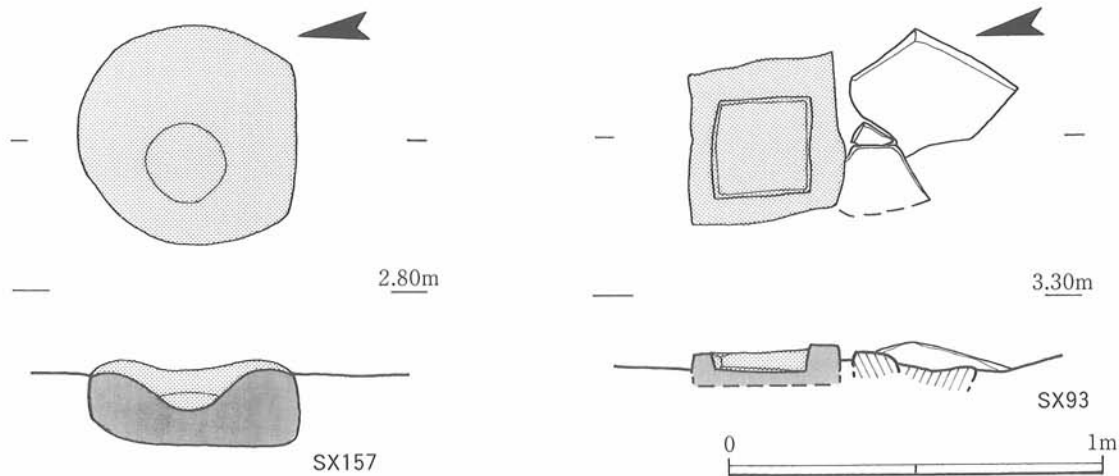
胞衣埋納遺構は、計19基検出した。この数値は、これまでの検出数に比して突出して多い。埋納容器は、外面に短い把手のついた土師質の焙烙を使用し、上下あわせ口にして埋納してある例がほとんどであるが、50、58 (第74図 図版43) の例のように、土師質の皿を上下あわせ口にして埋納した例もある。容器は120 (図版44) の例を除き未使用で、胞衣埋納のために用意したもののようである。埋納位置は、建物遺構と思われる石列や礎石付近、石段状の降り口付近に集中する傾向があり、家屋の床下や縁の下のような場所に該当する。整地面を浅く掘り込んで埋納されたとと思われるが、埋納坑は検出できなかった。検出面と検出地区にかなり偏った傾向があることが指摘できる。検出面は、2面18基、3面1基で、1面4面からは検出されてなく、2面の時期に集中していることがわかる。埋納容器に焙烙を使用した遺構は、すべて2面の時期におさまる。また、検出地区は、A区(7基)、C区(1基)、F区(5基)、G南半区(4基)、H区(1基)、M区(1基)で地区による偏りが大きい。

土坑 (第75図 図版39)

土坑は計10基検出された。91は、A区建物基礎154直下に検出された長軸1.9m、短軸1.7m、深さ38cmを測る不整形の浅い土坑である。浅いことや遺物が少ないことから、廃棄土坑とは考えにくい。136は、E区3面で検出された長軸2.1m、短軸1.5mの楕円形の土坑で、深さは88cmを測る。家屋部分の裏、調査区の西側に位置し、長軸方向を東西に向ける。3面の生活面を掘り込んで多量の陶磁器が廃棄されていた。埋土は大きく3層に分かれるが、時期差はない。最上層は掘り込みレベルを超えて高く盛られていることがわかる (第60図)。土坑と生活面との境界を示すものは検出されなかった。今年度調査では、明らかに廃棄土坑として掘り込まれた大型の土坑は、この1基のみである。92は、B区の石



第76図 3-SX96実測図(1/40)



第77図 3-SX157・93実測図(1/20)

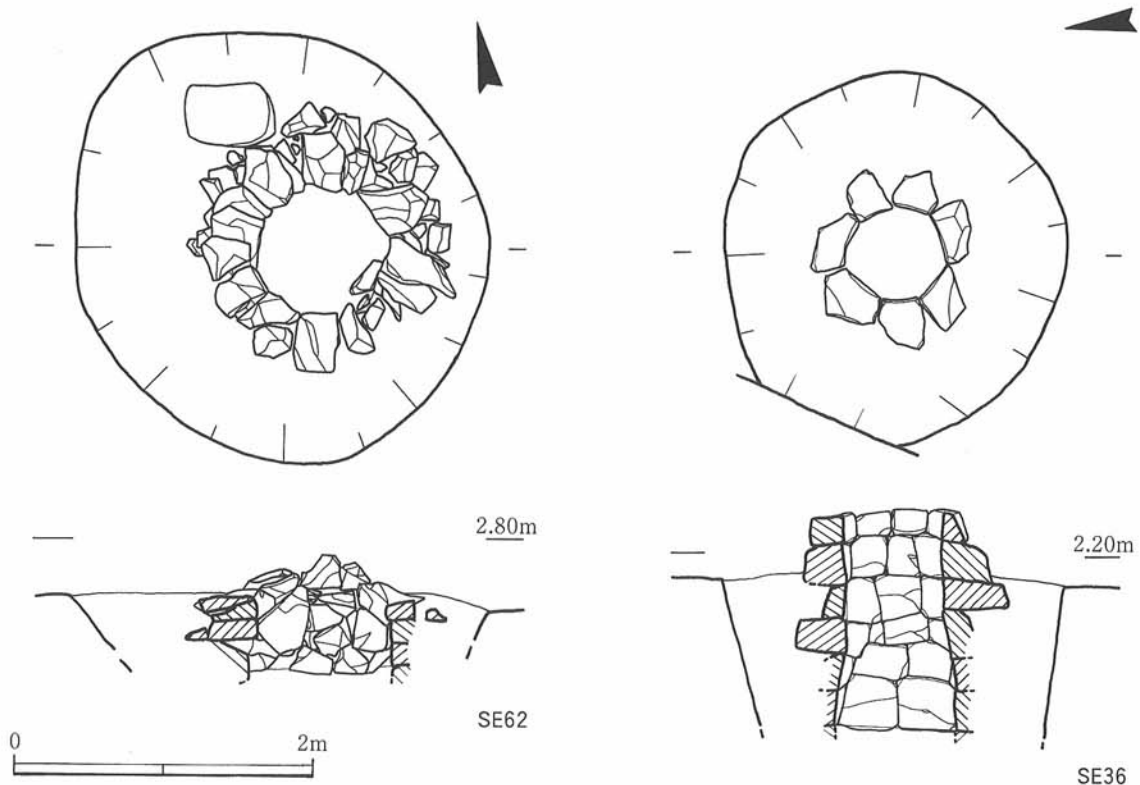
列86直下3面に検出された土坑である。上面約1.6m四方を平瓦を木端立てにして囲っている。おそらく生活面と土坑を分ける境界と思われる。131は、G南半区で検出された土坑である。径2.9mを測る円形の土坑で、深さは1.1mある。3面時期に相当する遺物を多量に含み、最下層は、玄武岩のバラスや礫を多量に含んでいる。この層を更に掘り込むとSE163の井戸石上面を検出した。131はSE163を廃絶し、井戸石を抜き取った後の窪地を廃棄土坑として利用した可能性がある。住居部分に関わる現道路側に位置していることもあり、3面の整地時期に短期間で埋められたものであろう。

用途不明遺構 (第76、77図 図版39、42)

用途不明遺構としたものは計12基ある。石積み遺構、木枠、木桶、瓦囲い遺構などである。SX96 (第76図 図版39) は、A区3面の家屋遺構である石列176の西側で検出された石積み遺構である。内法長辺1.1m、短辺0.8mを測る東西に長い方形遺構で、花崗岩の山石や堆積岩の川原石を粗割りして4段程度乱積みされており、深さは0.8mを測る。底面は素掘のままで砂層である。状況から東面、南面は当初の上端面を保っていると思われることや、遺構内遺物の時期から、3面から掘り込んで積まれた遺構であるが、掘り形は検出できなかった。用途不明としたが、検出位置や形状から考えて溜め桝遺構である可能性が高い。SX93 (第77図 図版42) は、G南半区2面の石垣59直下に検出した遺構である。固く締まった明褐色粘質土で作られた辺40cm、厚さ12cmを測る直方体の遺構で、内側に辺25cm、深さ6cmのくぼみがつけてある。くぼみに何かを据えて位置を固定するための遺構と思われるが、詳細は不明である。SX157 (第77図 図版42) は、石垣7直下3面で検出した粘土土坑である。径58cmの円形の平面プランで、深さは20cmを測る。粘土は水簸された均質な橙色粘土で、すぐそばにかまど72を伴うことから、かまどの上部施設を構築する際に使用した粘土の余りを放置したものと思われる。

井戸 (第78、79図 図版40)

井戸は計19基検出された。すべて石組の井戸である。調査の安全を考えて井戸底は未検出である。6はA区堀側で検出された井戸で、内径95cmを測る。2面検出時に径3.1mの円形の掘り形を検出した。この地区が1段低く放置されていたことから1面で使われていたかどうかは不明である。45は、

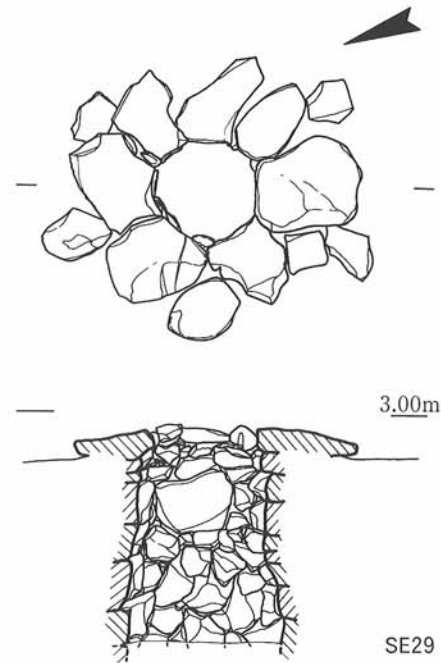
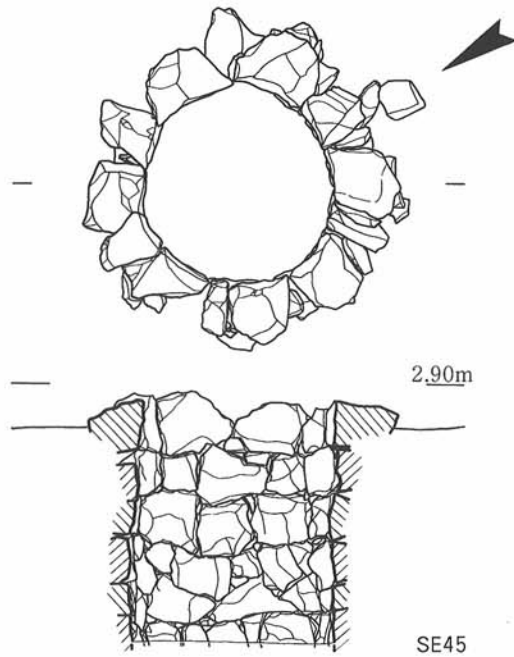


第78図 3地区 SE 実測図①(1/50)

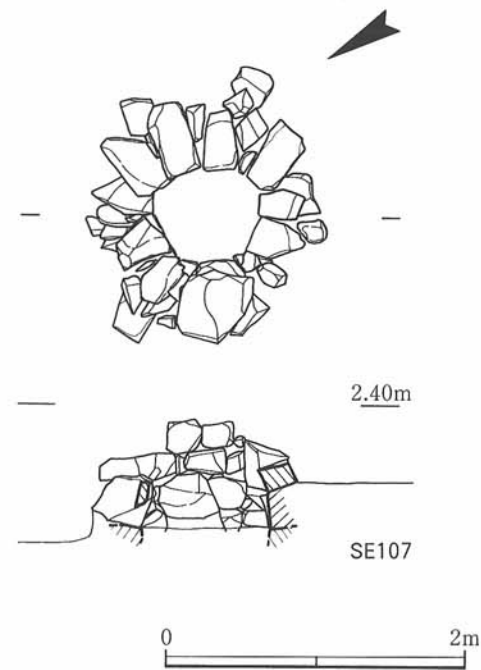
C区堀側で検出された井戸である。内径1.2mを測る大型の井戸であるが、2面で検出した時点では掘り形は未検出で、3面で西半分のみではあるが円形の掘り形を検出した。推定径3.5mの円形の掘り形と思われる。北に隣接する建物基礎155との前後関係は、後世の削平で不明である。29は、F区石垣24西面直下に検出された内径66cmの小型の井戸である。井戸側の石は上端の石までほぼ完全に検出できた。この井戸から4.2m堀側に28という内径90cmの井戸が構築されていることから、29は3面から2面の時期にわたって使用され、石垣24が張り出して家屋部分が拡張された時点で廃絶されたと思われる。107は、L区の現道路側3面相当面で検出された内径68cmを測る井戸である。L区の3面はA～C区の4面時期の遺物も含むため107は、4面時期から継続されて使用されていた可能性がある。62は、A区石垣7直下に検出された3面相当の井戸である。2面相当の礎石の直下から掘り形とともに検出した。井戸の内径84cm、掘り形は径2.8mの円形である。36は、D区2面で検出した内径63cmを測る小型の井戸である。井戸側石は玄武岩の切石で布積みされており、仕上げが丁寧である。標高2.5m付近で増し積みされており、3面相当の面から径2.5mの円形の掘り形が検出された。この井戸が3面で構築され、2面に嵩上げされる時点で増し積みされたことを示している。増し積み部分は崩落したため、3面からの記録になった。122は、内径82cmを測る井戸である。C区3面検出時に径2.8mを測る円形プランを検出し、土坑を想定して掘り下げたところ深さ約60cmのところ井戸側の石を検出した。163と異なり、上面埋土には遺物をほとんど含まないため、122を廃絶した後井戸側の石を抜き取り、できた窪地は一気に埋めて整地したものと思われる。

埋甕 (第80図 図版41、42)

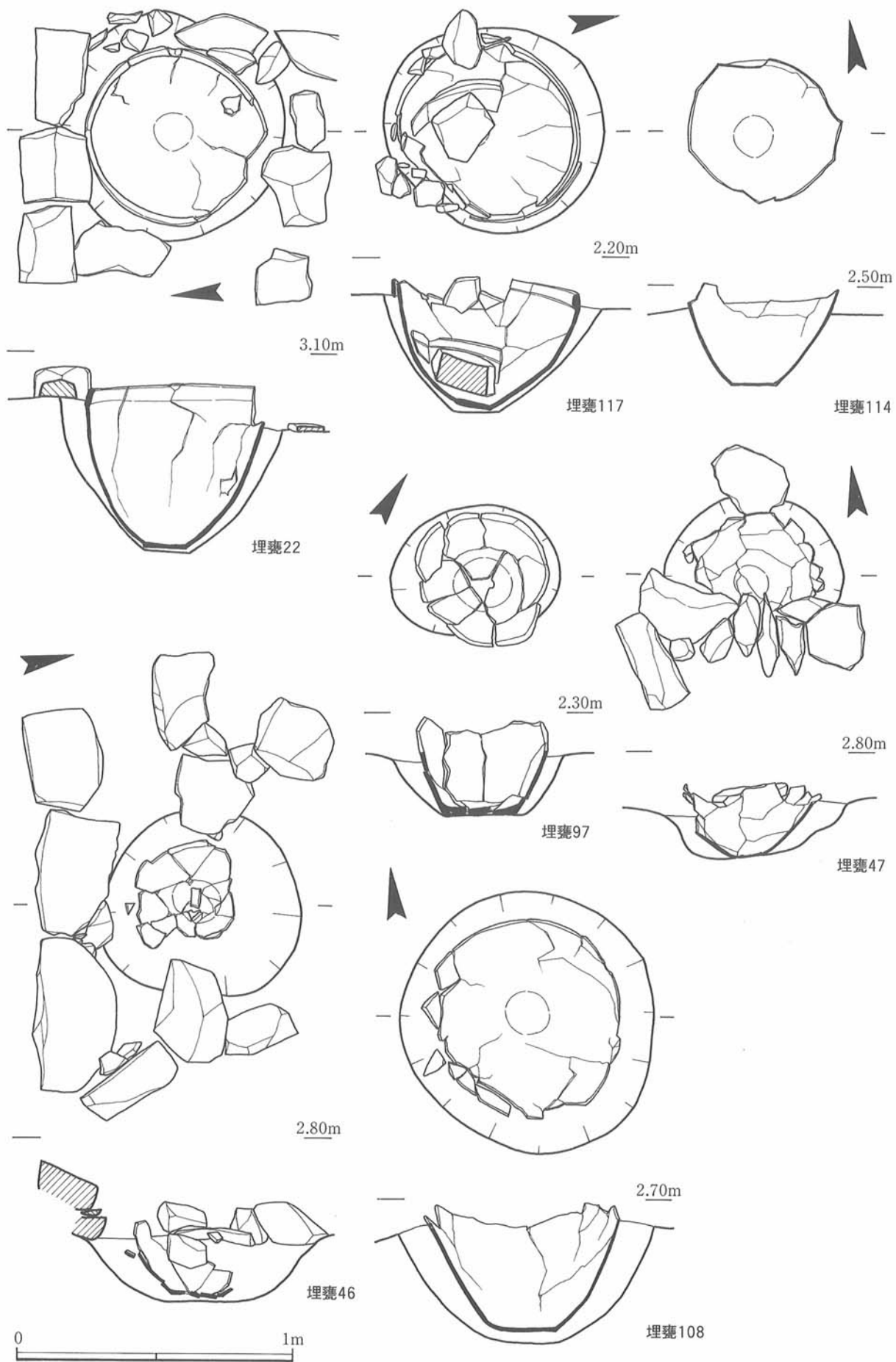
埋甕は計18基検出された。内4基(32、97、103、104)は陶器の甕であるが、他14基は土師質の甕



である。検出面は、1面3基、2面11基、3面4基で4面では検出されていない。検出位置は、建物部分から離れた掘側に集中する傾向がある。検出される甕は、攪乱や整地によって上半部が欠損しているものが多いが、22、117のように生活面を土坑状に掘り込み、上部8～16cm露出させて据えられた甕もみられる。多くは単体で検出されるが、46、47のように2連の例もある。用途としては、32、40、103を除き内面に石灰分の付着が見られることからみて、便槽とするのが妥当であろう。32はE区1面、石垣15直下に検出した陶器の甕で、倒立させて埋設されていた。底部はなく、用途は不明である。40はE区2面、石垣41直下に検出した土師質の甕で、上半部は欠損している。底部に穴が穿たれており、植木鉢に転用された甕の可能性はある。103はM区2面で検出した陶器の甕で、底部は原位置にない。内面に付着物はなく便槽以外の目的で使用されたとみられる。



第79図 3地区 SE 実測図②(1/50)



第80图 3地区埋甕实测图(1/20)

2 遺物

調査では1～3地区を合わせて整理用コンテナ約1,000箱、総数で数十万点の遺物が出土した。遺物は土器、陶磁器、土製品、瓦、金属製品、木製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物など多岐にわたり、江戸時代の人々の生活の多様さを示している。これら大量の出土遺物のうち、遺構の時期決定に必要な一括資料、各時期、各場所の特徴的な遺物などを考慮して整理対象としたが、それらを報告書に掲載するとしても相当量に達する。そこで本報告では土坑等の遺構出土遺物を中心に取り上げ、建物整地層や焼土層出土遺物については次報告でまとめて報告することとする。

以下、土器・陶磁器・土製品、埋甕、胞衣埋納容器、石製品、木製品、金属製品、骨角製品、ガラス製品、自然遺物の順で遺物の概要について述べる。

なお掲載した遺物は、遺構から出土したもののうち代表的な遺物を選択して報告することとし、陶磁器の時期については、肥前陶磁の編年および東大編年を参考にした。

(1) 土器・陶磁器・土製品

ここでは土器（土師器、瓦質土器）、陶磁器（磁器、陶器）、土製品について代表的な遺構ごとに報告する。なお次の遺物については本文、一覧表や図面で以下の通りに表現した。

焙烙については、在地系のものに把手のつくタイプがあるが、把手部がない破片についてはその破片だけで図化をして把手の存在を復元描写していない。一覧表では「把手部欠損」として記載することとする。

磁器高台内の文字文様は立面図からの対象反転した方向ではなく、その正位の状態で記載した。

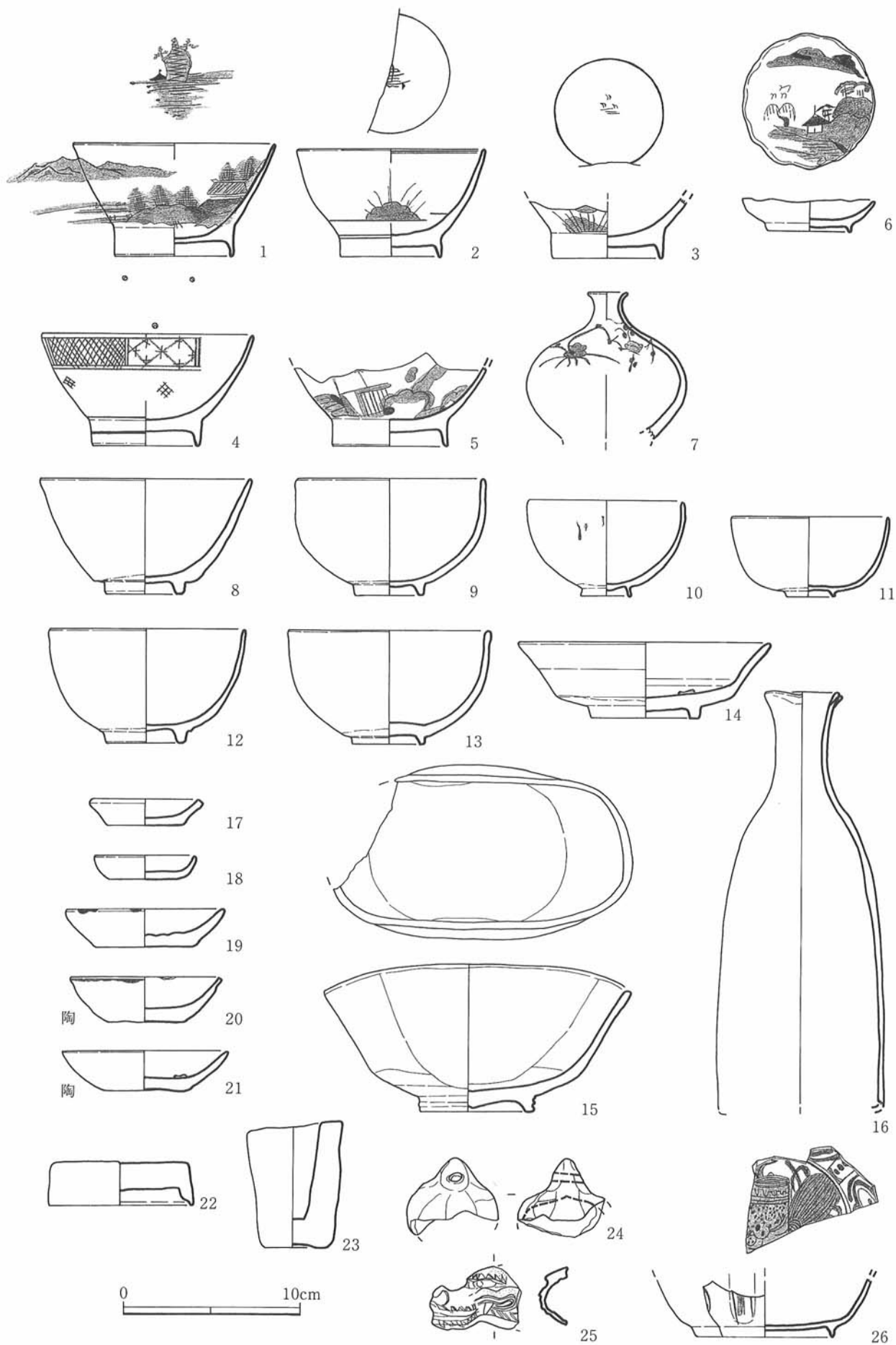
萩焼は基本的に乳白色または黄白色など白色を基調としたものを藁灰釉、透明釉および灰釉の発色をするものを土灰釉（または灰釉）とした。在地の製品として須佐唐津窯の製品があるが、その詳細については不明な部分が多い。そこでここでは次のような特徴のあるものについて須佐唐津製品とする。ただし今後資料の増加に伴い見直しが必要であろう。特徴は、灰釉（透明黄色または緑灰色）をかけ、胎土は土師質に近い軟質で、窯詰め方法は胎土目を用いることから、見込みにその痕跡が多く残る。器形には皿、鉢、片口が多い。また播鉢は口縁部を外面に肥厚させ、胎土は軟質。鉄釉をかけ、窯詰めは胎土目を用いる、などが挙げられる。

1 地区（第81～170図 図版47～127）

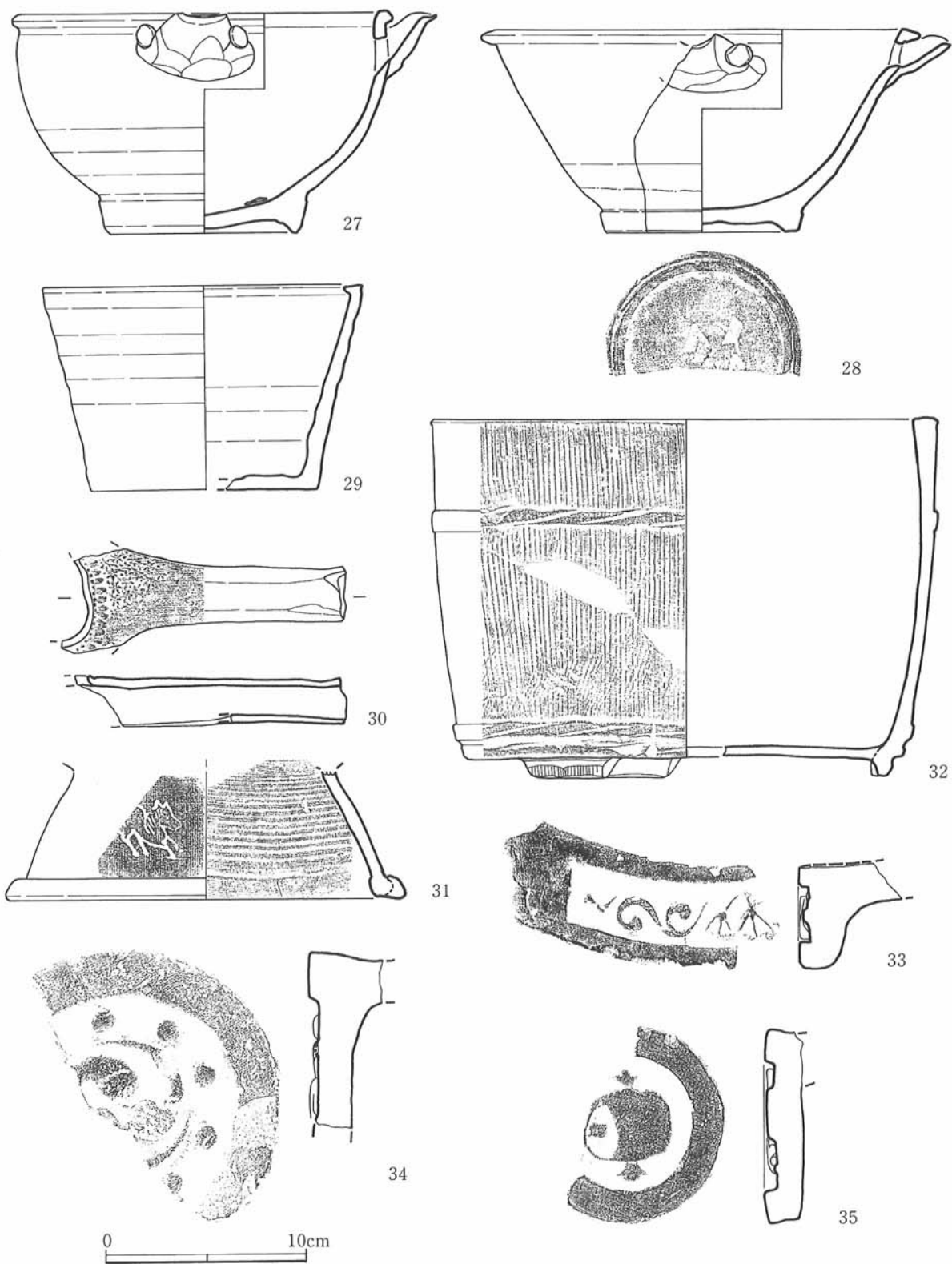
SK49（第81図 図版47、48）

1～7、26は磁器。8～16、20、21、27～29は陶器。17～19、22～25は土師器。30～32は瓦質土器。33～35は瓦。

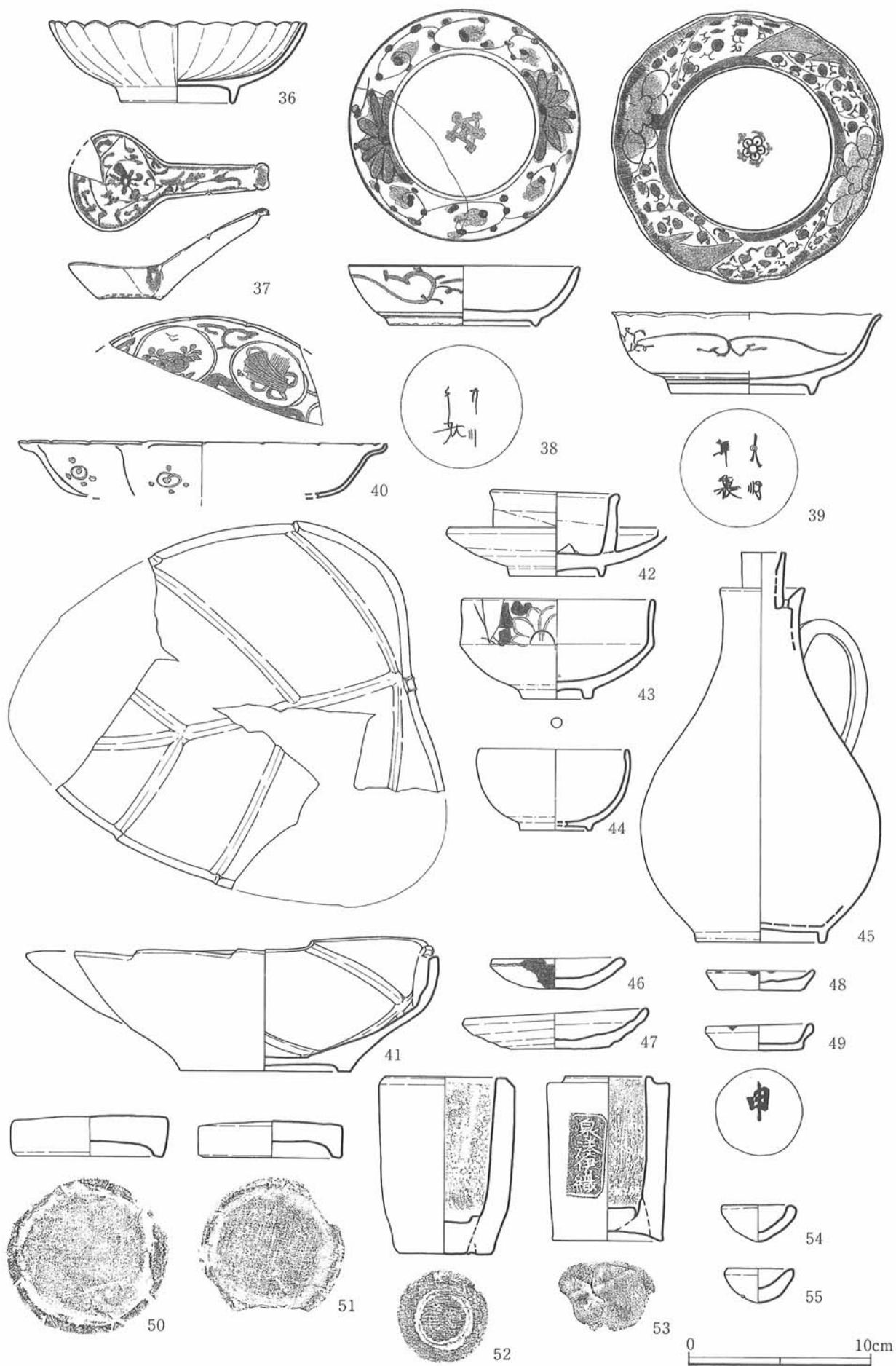
1～5は広東碗で、4、5は内面に三足ハマ痕が認められる。6は輪花の小皿。7は油壺。8～16は陶器。8、9、12、13、15は萩。8は藁灰釉の開口碗。10は京信楽系か。11は灰釉の碗で貼付高台で瀬戸美濃系か。14は須佐唐津とみられる灰釉の皿。胎土目痕が残る。15は萩の土灰釉沓形碗。16は燗德利。17～19は土師器皿。20、21は陶器灰釉皿。胎土目痕あり。煤が付着するので17～20は灯明皿として使用された。22は焼塩壺蓋。23は焼塩壺の身部。24は土鈴。25は型作りの人形片で龍の頭部である。26は青花の皿。27、28は灰釉の在地産片口。体部が球形に内湾する27に対して28は直線的。29は焼締陶器。32は瓦質でいずれも焼成後穿孔し、植木鉢に転用。30は焙烙、31は火鉢の脚部でいずれ



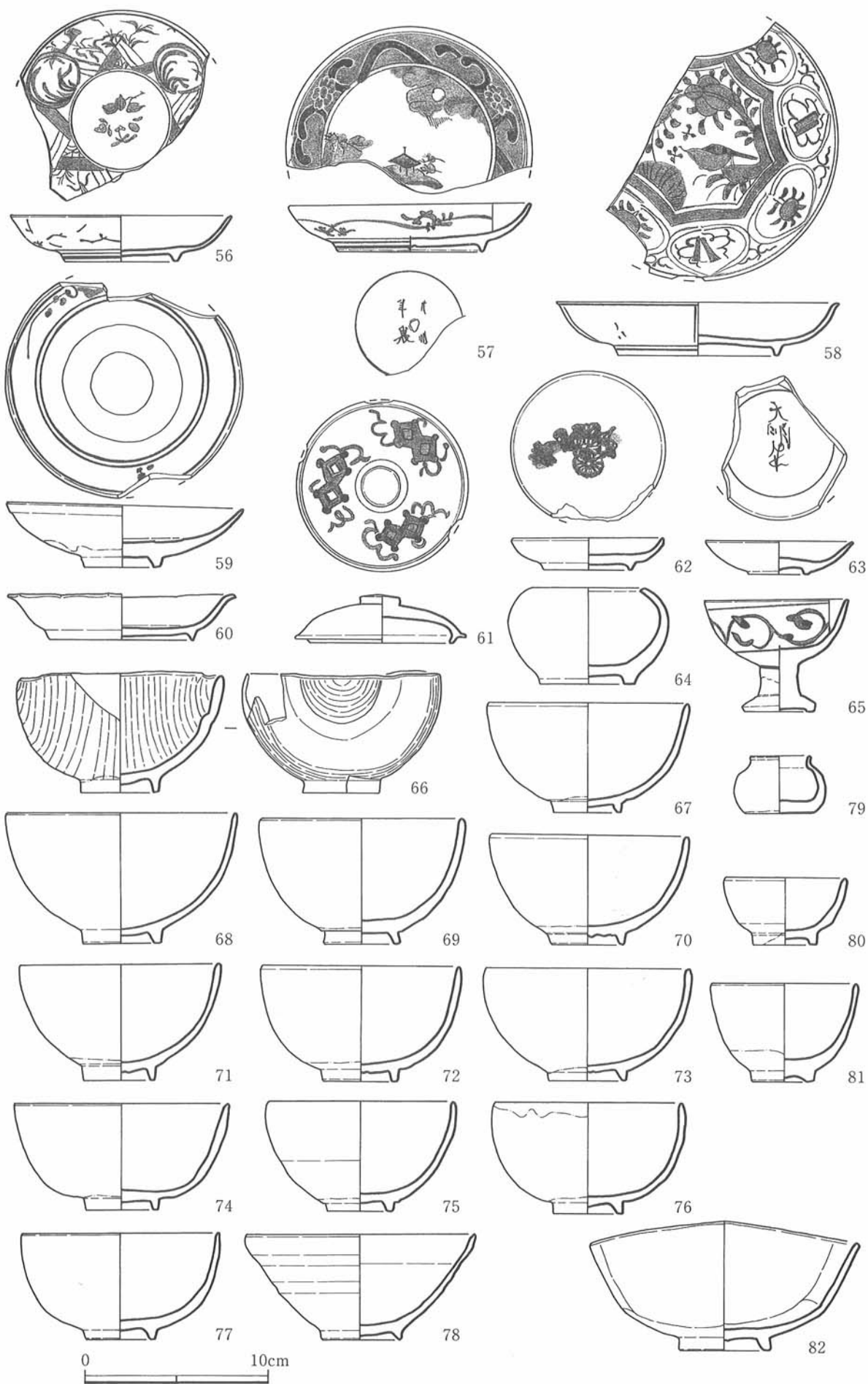
第81图 1-SK49出土遺物①(1/3)



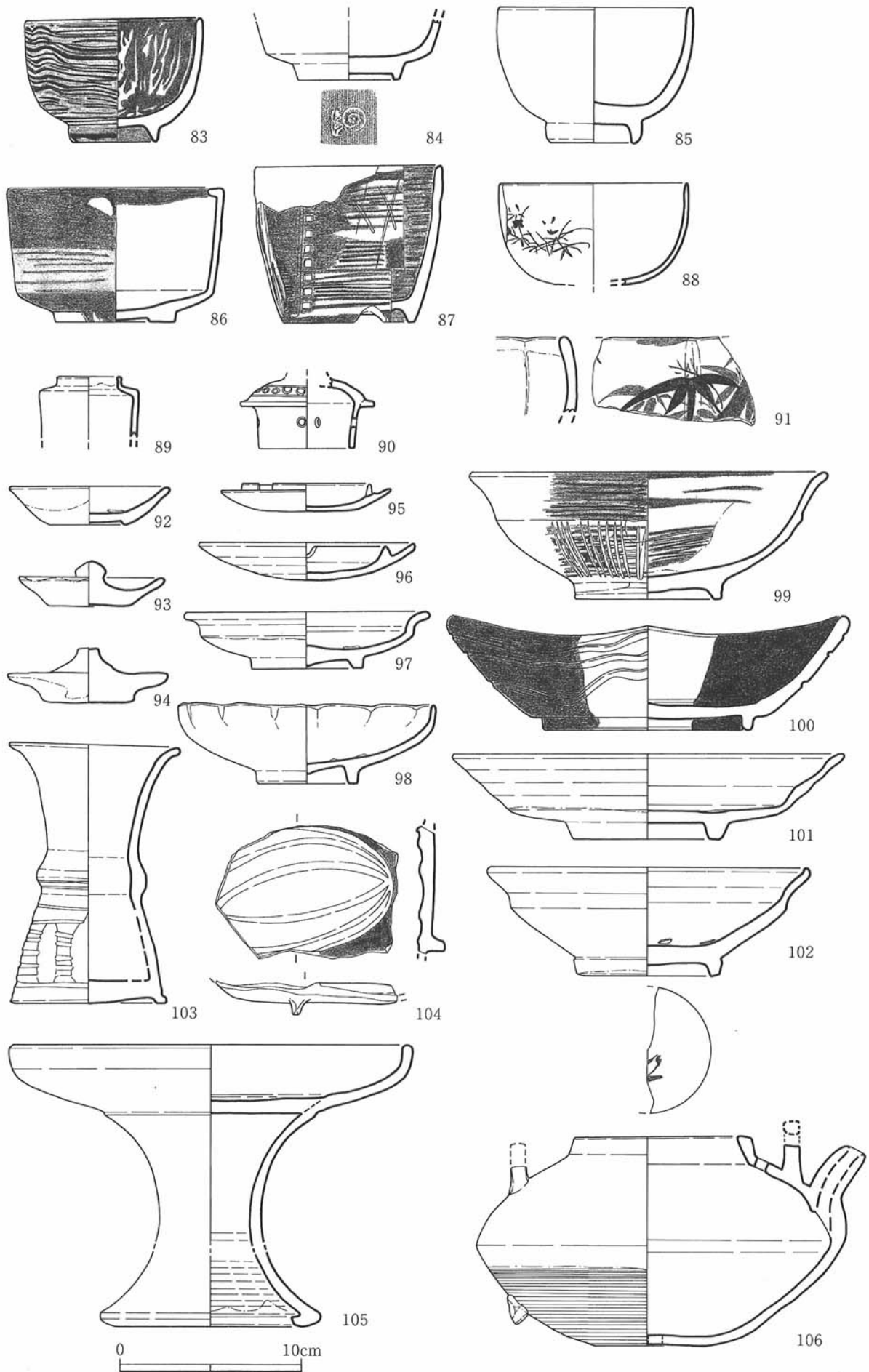
第82図 1-SK49出土遺物②(1/3)



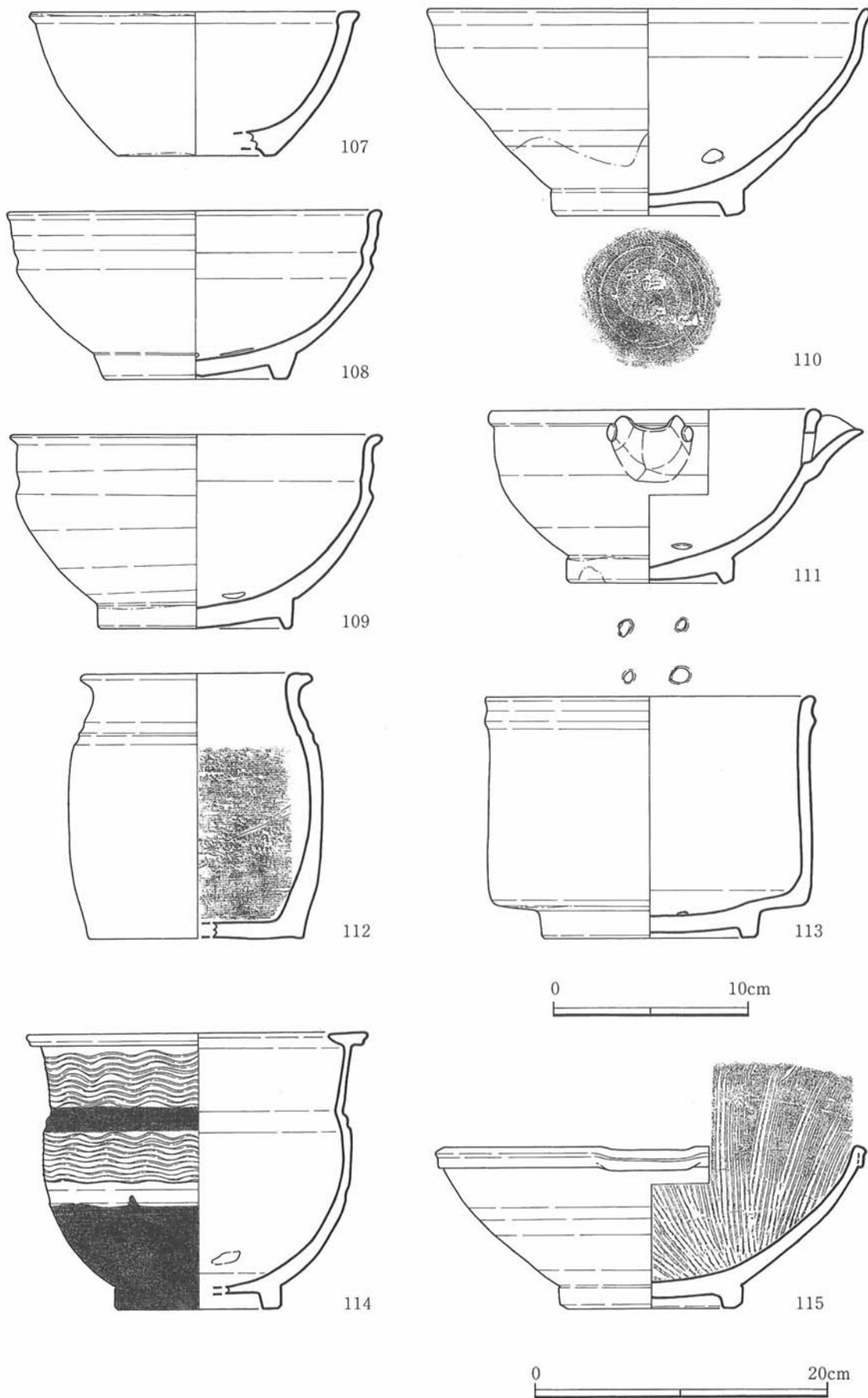
第83图 1-SK80出土遺物(1/3)



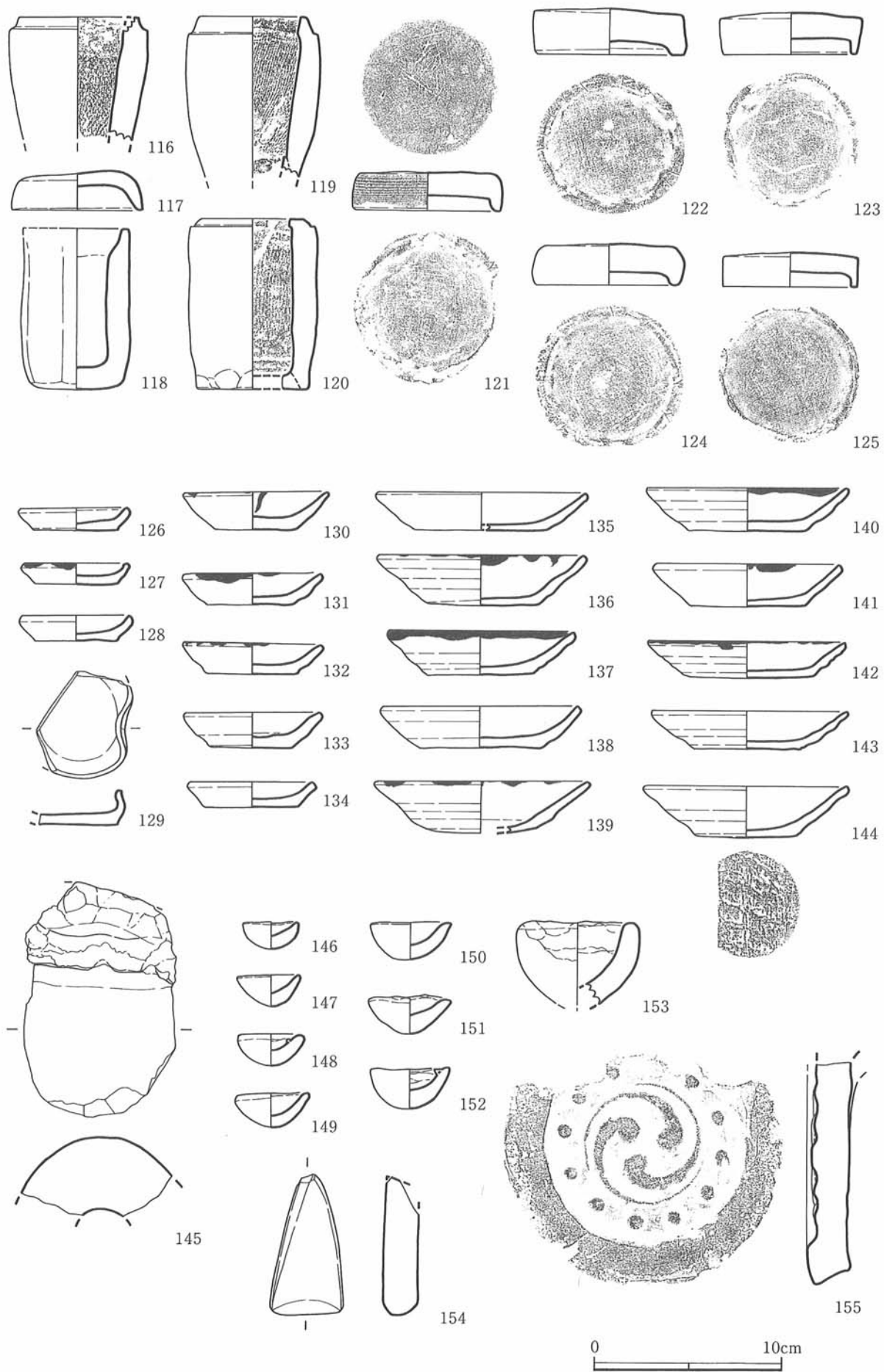
第84图 1-SK92出土遺物①(1/3)



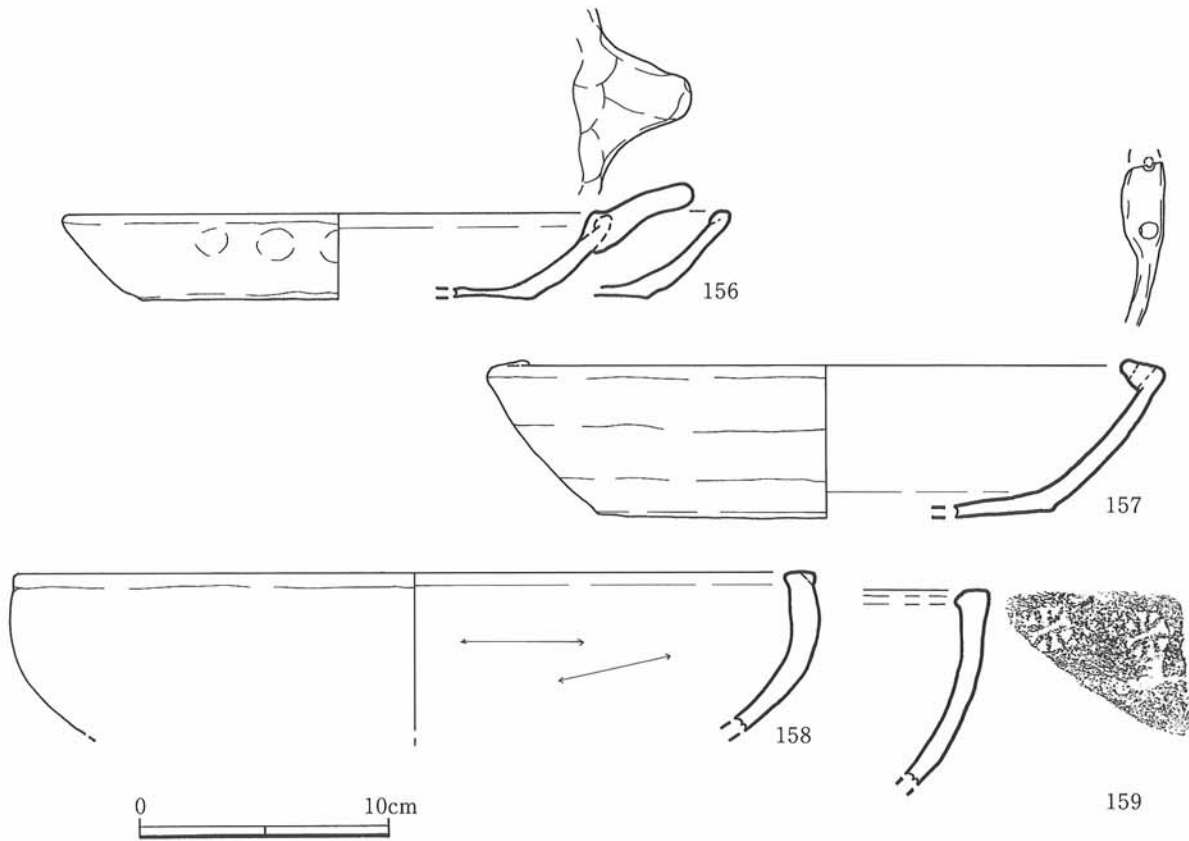
第85图 1-SK92出土遺物②(1/3)



第86図 1-SK92出土遺物③(1/3、1/4)



第87图 1-SK92出土遺物④(1/3)



第88図 1-SK92出土遺物⑤(1/3)

も瓦質。

SK49の時期は広東碗を伴うが、端反碗は出土していないので18世紀末から19世紀前半とみられる。29、32は植木鉢に転用したもので、園芸の普及時期を示す資料である。また26の青花皿はこの時期まで青花が混在することを示している。

SK80 (第83図 図版48、49)

36～40は磁器。41～45は陶器。46～53は土師器。

36は白磁輪花皿。37は青花の散蓮華で清朝期のもので18世紀末～19世紀中頃。38、39は見込みに五弁花が入り、高台に「大明年製」くずし銘がある。40は景德鎮の輪花皿で16世紀末のもの。41～45は陶器。41は萩の葉形皿で白土を化粧掛けする。42は灰釉（黄釉）の灯明受皿で須佐唐津。43は腰折れ碗。44は灰釉碗で京信楽系か。45は鉄釉油徳利。46～49は土師器皿。49は底面に「申」の墨書が認められる。50、51は焼塩壺の蓋。52、53は焼塩壺で、53は「泉湊伊織」銘を持つ。54、55は小型の埴塙。

36、38、39は18世紀前半から中頃で、43、53は18世紀中頃とみられるので、SK80は18世紀中頃の土坑とみられる。なお37の清朝の散蓮華は年代的に後出であるが、SK80上の堆積層が除去しきれずに混入したものであろう。

SK92 (第84～88図 図版49～54)

56～65は磁器。66～115は陶器。116～144、156、157は土師器。145～154は土製品。155は瓦。158、159は瓦質土器である。

56は輸出用のカップアンドソーサーの皿を国内に流通させたものであろう。18世紀前半。57は墨弾

きを使用した文様と、高台内に「大明年製」とハリ支え痕がある。17世紀末から18世紀。58は中国写しの皿で、1670～1690年代。59は蛇の目釉剥ぎ皿で高台無釉。17世紀後半～18世紀前半。60は白磁の稜花皿で17世紀後半。61は蓋で17世紀末～18世紀前半。62はコンニャク判の皿。63は見込に「大明年」と書く皿で、1630～1640年代。64は白磁の香炉（火入れ）で17世紀後半から18世紀前半。65は仏飯器で、17世紀中頃から末とみられる。

66は藁灰釉の俵形碗。67～78は萩の碗。78以外は藁灰釉。79は灰釉の小壺。80は鉄釉小碗。81は肥前の鉄釉碗。82は土灰釉の杓形碗。83は肥前刷毛目碗。84は京焼風陶器で「清水」の刻印がある。85は呉器手碗。86は肥前の香炉（火入れ）で、外面に螿手。87は内外面刷毛目。割高台で、外面に「×」の線刻と綴目がある。88は京焼風陶器で青と呉須で描く。17世紀後半から18世紀前半。95、96は備前とみられる灯明受皿。98は刷毛目の輪花皿で、輪状の胎土目痕があることから萩焼の製品の可能性がある。100は藁灰釉と鉄釉の掛け分けをした皿。101、102は灰釉で胎土目のある皿で須佐唐津。103は土灰釉の仏花瓶。104は藁灰釉と緑釉を掛け分けた瓜形の皿で、短い三足がつくとみられる。105は萩藁灰釉の台付き皿。106の土瓶は注ぎ口の形状から18世紀後半か。また、底部に穿孔があり植木鉢に転用か。107～110、113は灰釉の鉢で、このうち111は片口で、胎土目の痕跡が残る。112は肥前の小甕。114は肥前二彩の鉢。115は須佐唐津の播鉢。

焼塩壺の116、119、120は刻印部を欠損している。118は無刻印の焼塩壺。126～144は土師器の皿。口径から5～6cm、7～8cm、10～11cmの3種類に分けられる。145は鞆羽口片。146～152は器径2～4cmの小型の埴塙。146、147、149、152の内面には1mmほどの金色の粒が付着していたが、他例の成分分析の結果、この粒は金であることがわかったので、当土坑資料も同様であると見られる。154は瓦片を転用したもので、下端が使用によって磨滅していることから、砥石として使用された可能性がある。156の焙烙は在地系の把手のつくタイプで、157は2孔の内耳がつくタイプである。

63は1630、40年代と65は17世紀中～末と17世紀代であるが、56は18世紀前半、61、64も前半が下限とみられる。他に17世紀後半から18世紀前半の京焼風陶器84、88と肥前刷毛目碗などから、18世紀前半頃の土坑と見られる。SK92はSK80と重複した土坑で、下位に位置することから、出土遺物もSK80よりは時期が古くなる。

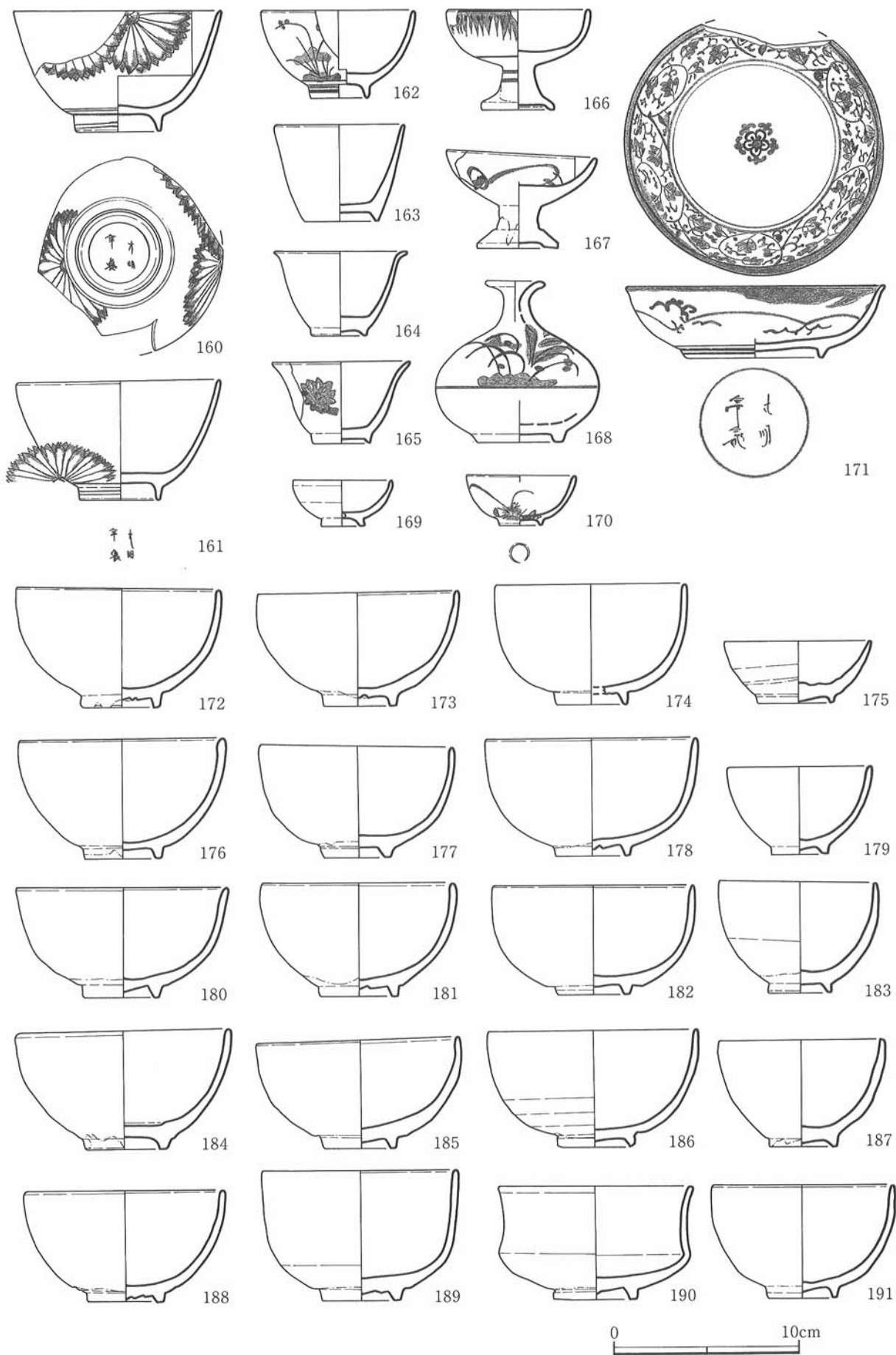
SK109（第89、90図 図版54～57）

磁器は160～171。陶器は172～197、206、212～214。土師器は198～205、207～210。211は小型の埴塙である。磁器は碗、皿、猪口、小杯、仏花瓶があり、17世紀末18世紀初頭から18世紀前半にかけてのものである。陶器は萩の藁灰釉の碗が中心で、192の刻印がある京焼風陶器は17世紀末18世紀初頭とみられる。195の杓形碗は灰釉に金泥が塗布されている。210は土師器の蓋がつくとみられる容器。形態から花焼塩壺の容器に似るが定かでない。

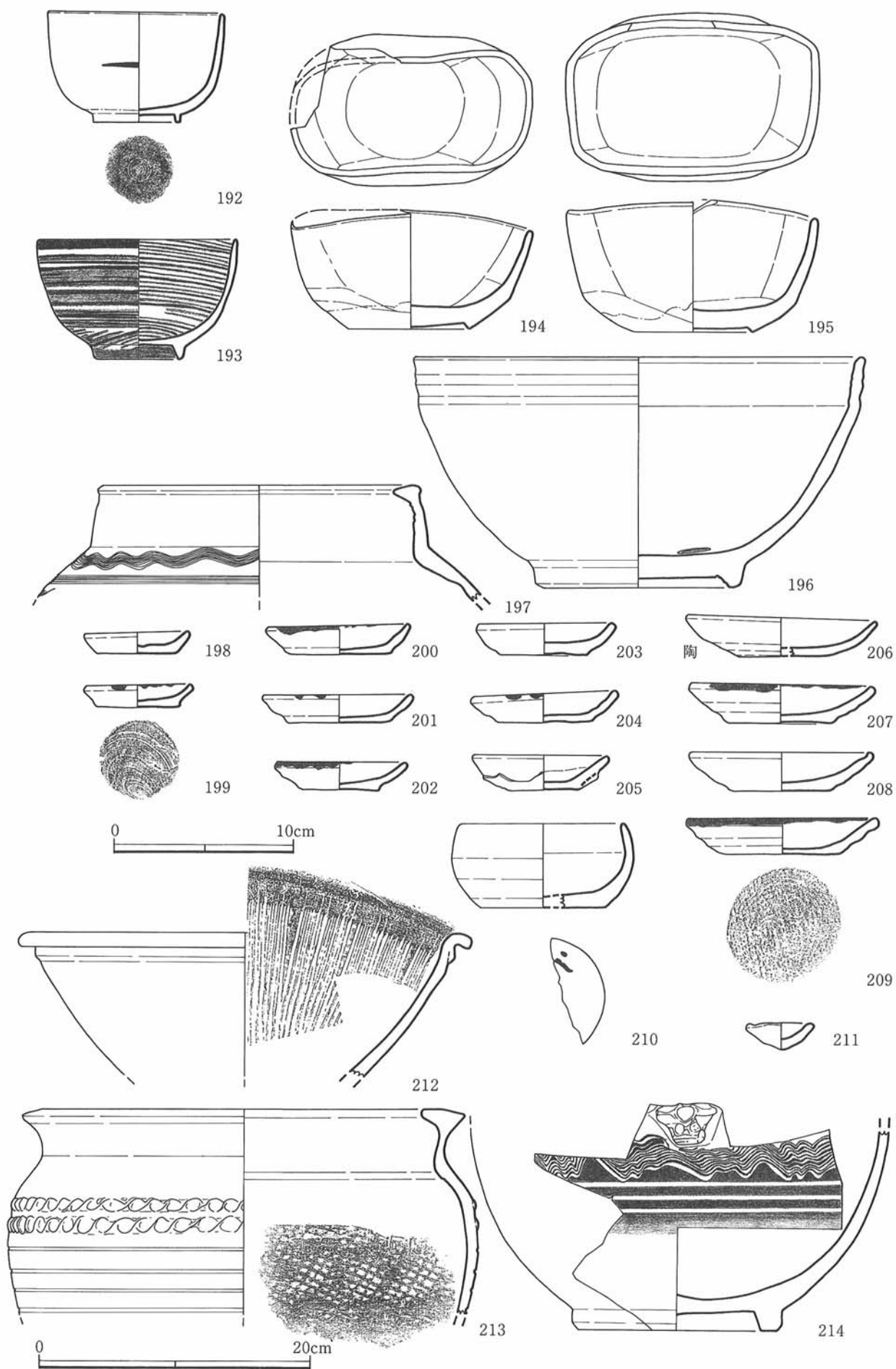
これらからSK109は18世紀初頭から18世紀前半とみられる。

SK111（第91、92図 図版57～60）

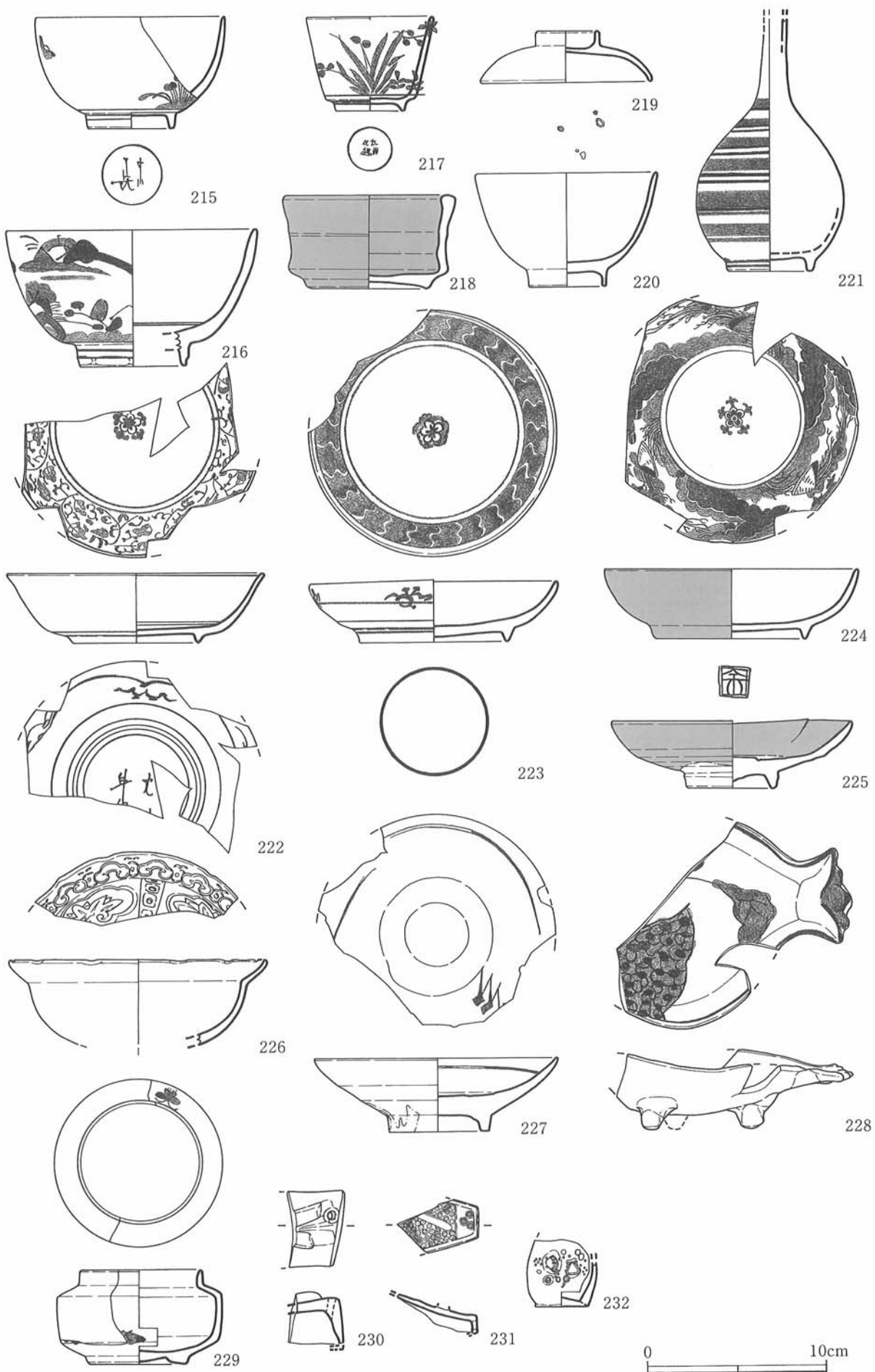
磁器は215～232。陶器は233～251。土師器皿は252～262。224は「金」とみられる銘款から17世紀後半が中心ながら18世紀前半までの可能性があるとする。221は17世紀末～18世紀前半で、225、227の高台無釉の蛇の目釉剥ぎ皿は18世紀前半とみられる。陶器では萩の碗が数量的に中心で、肥前陶器



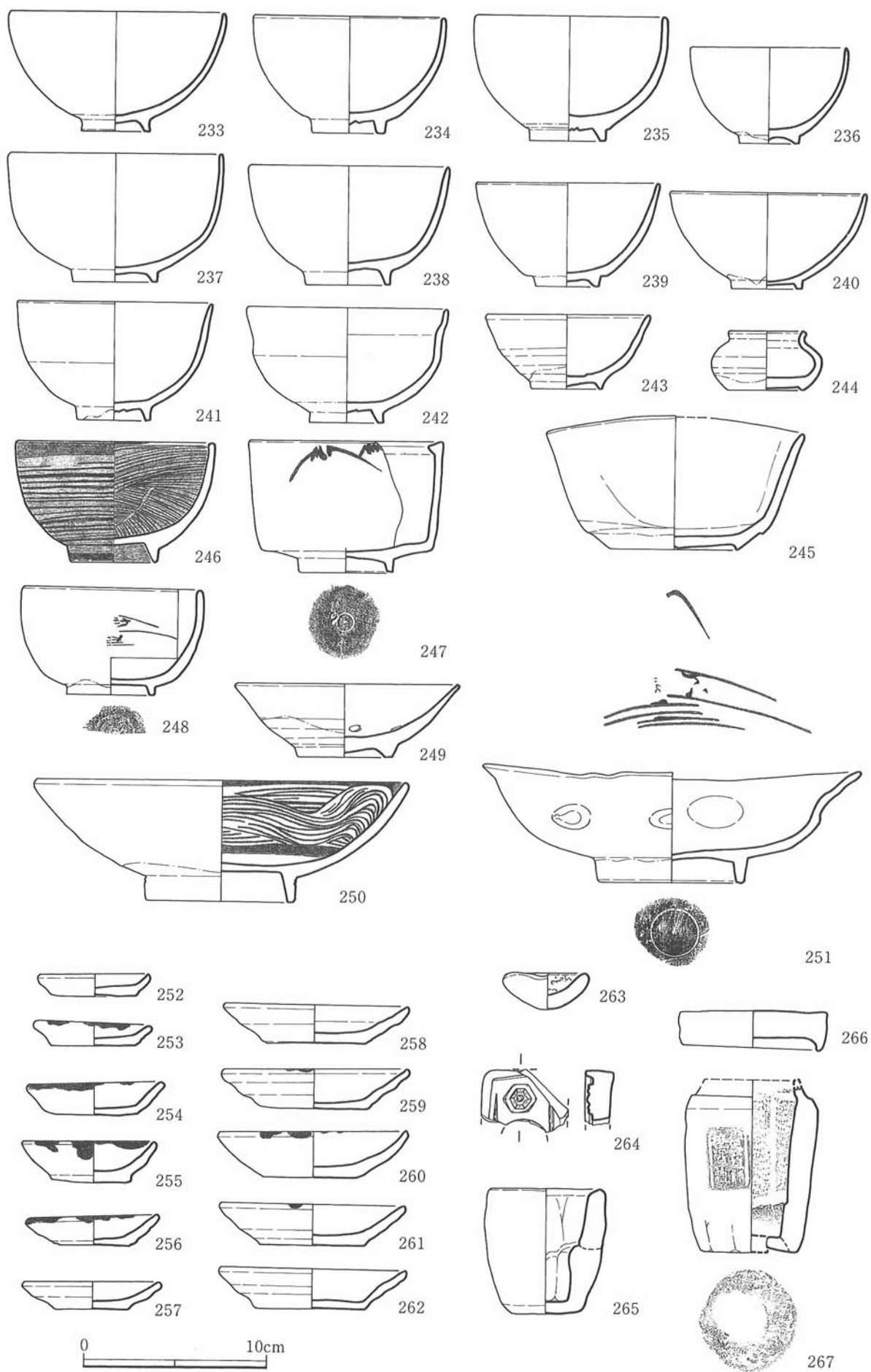
第89图 1-SK109出土遺物①(1/3)



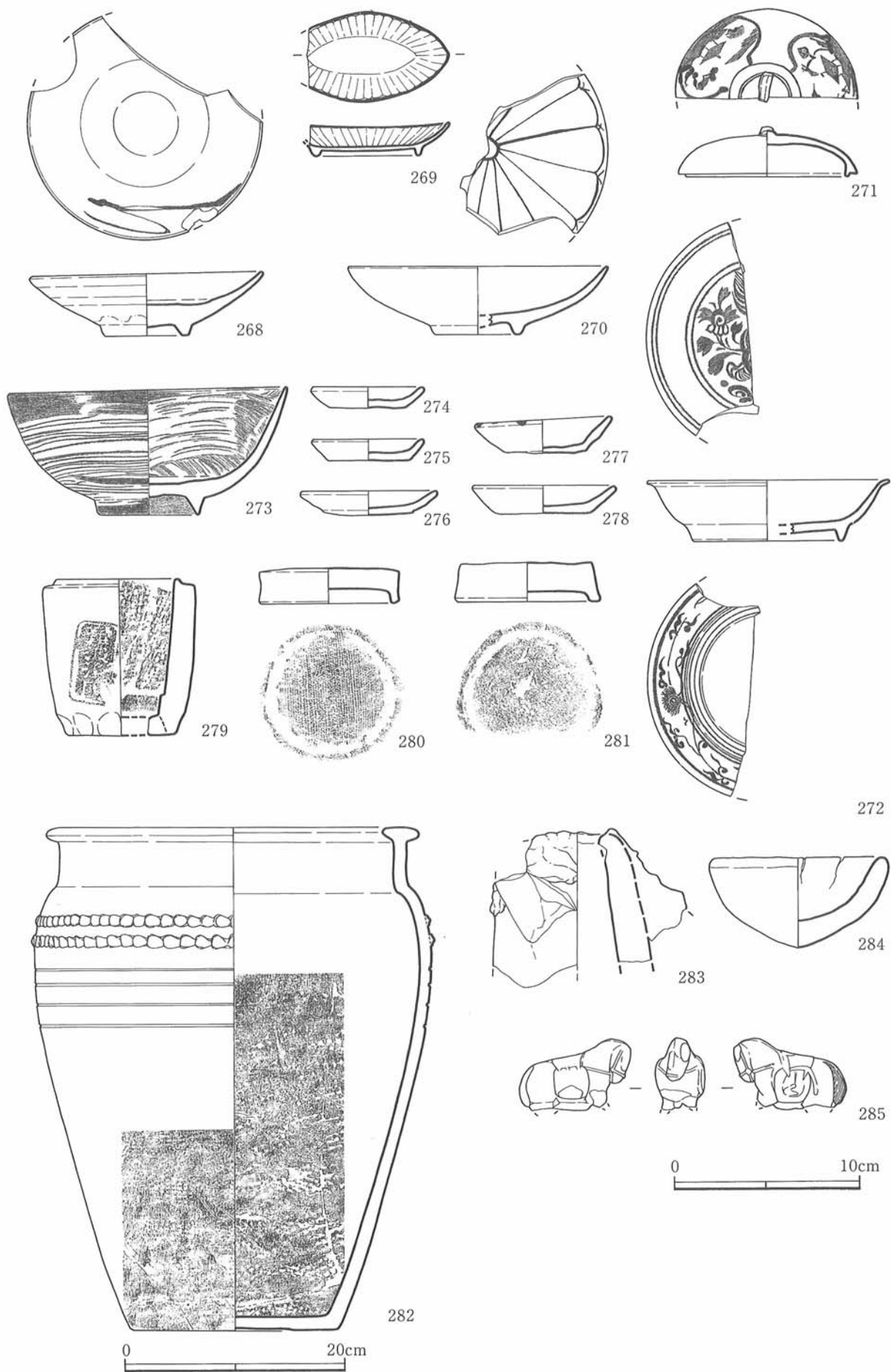
第90图 1-SK109出土遺物②(1/3、1/4)



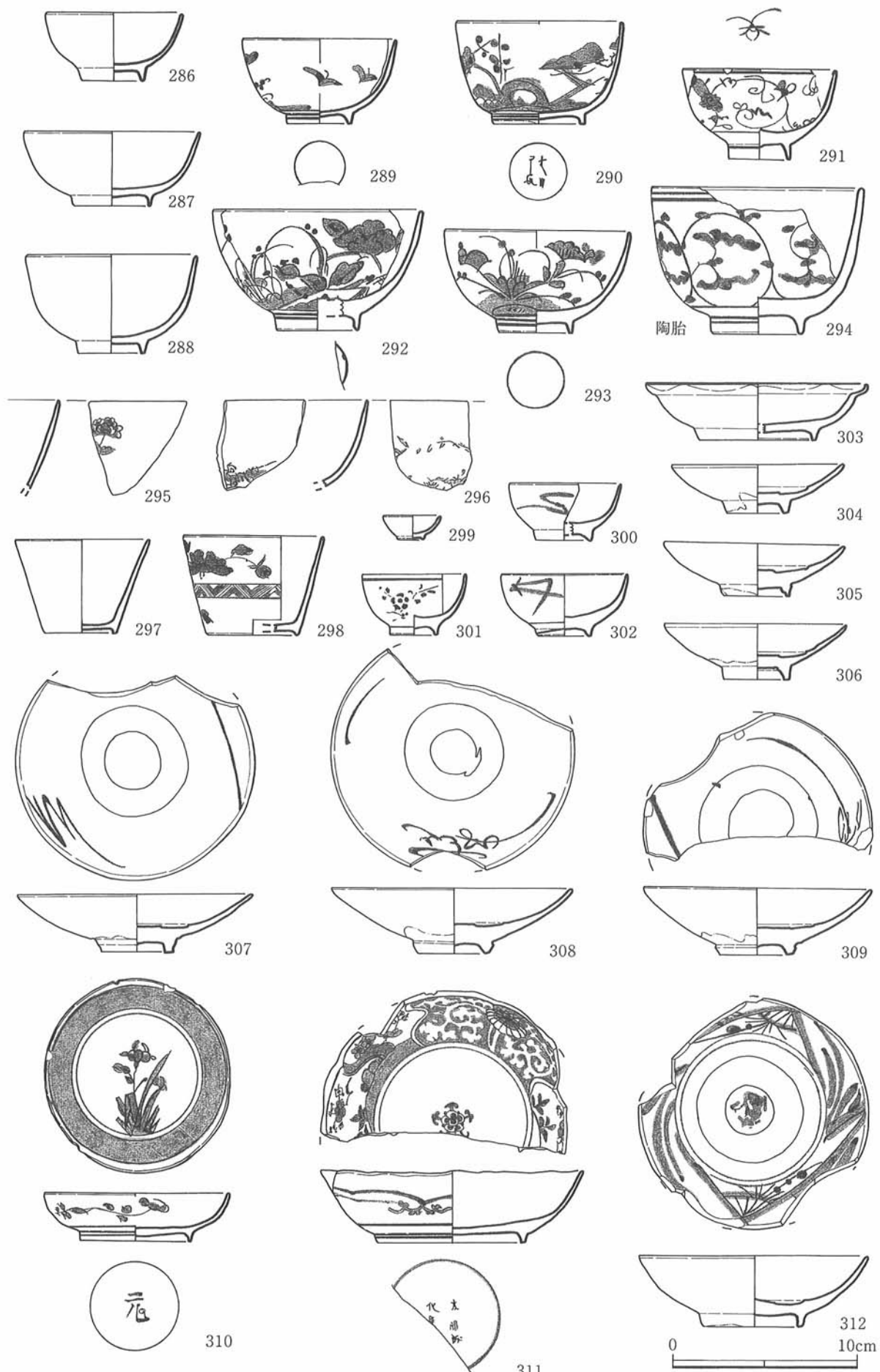
第91図 1-SK111出土遺物①(1/3)



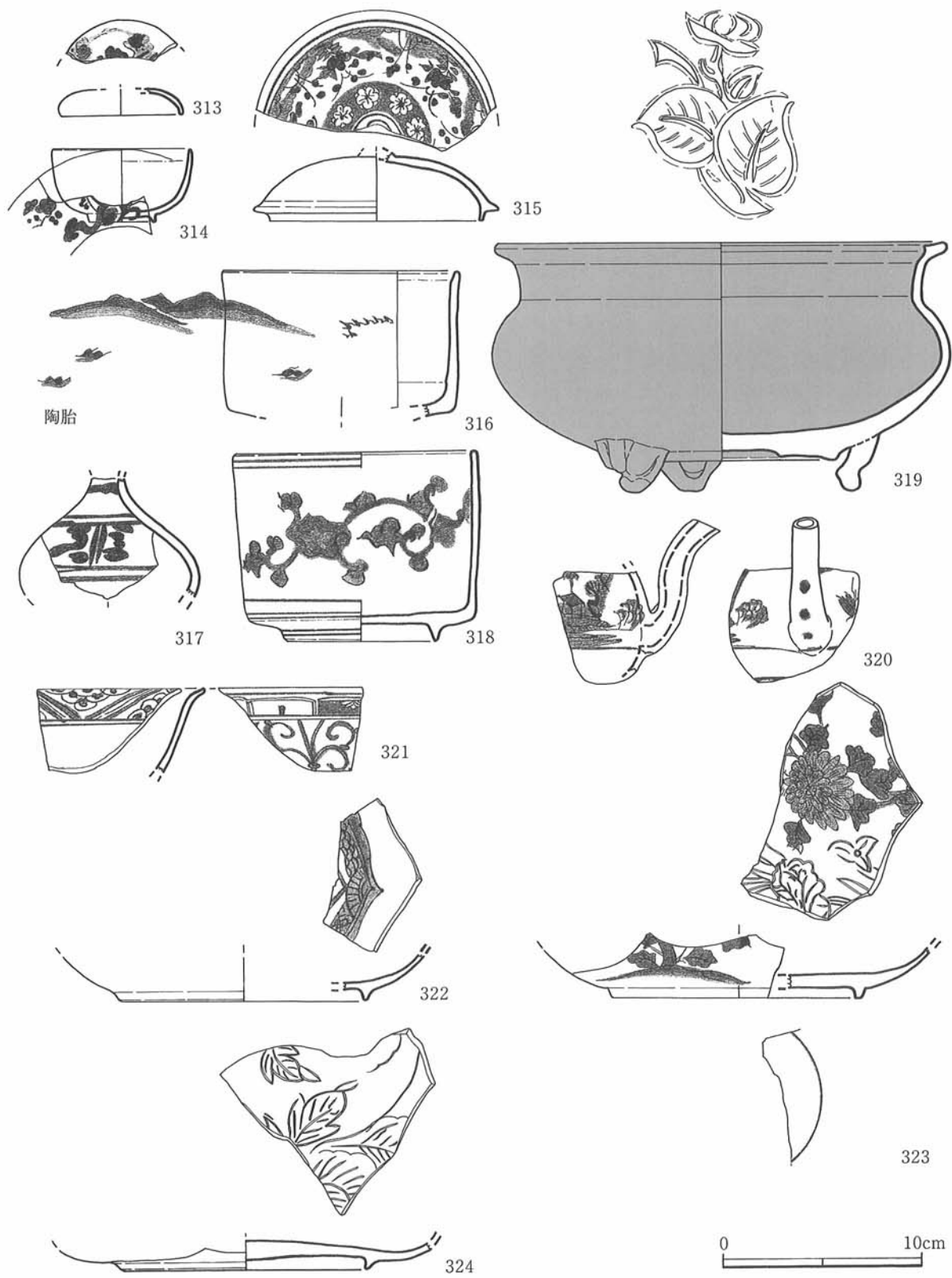
第92図 1-SK111出土遺物②(1/3)



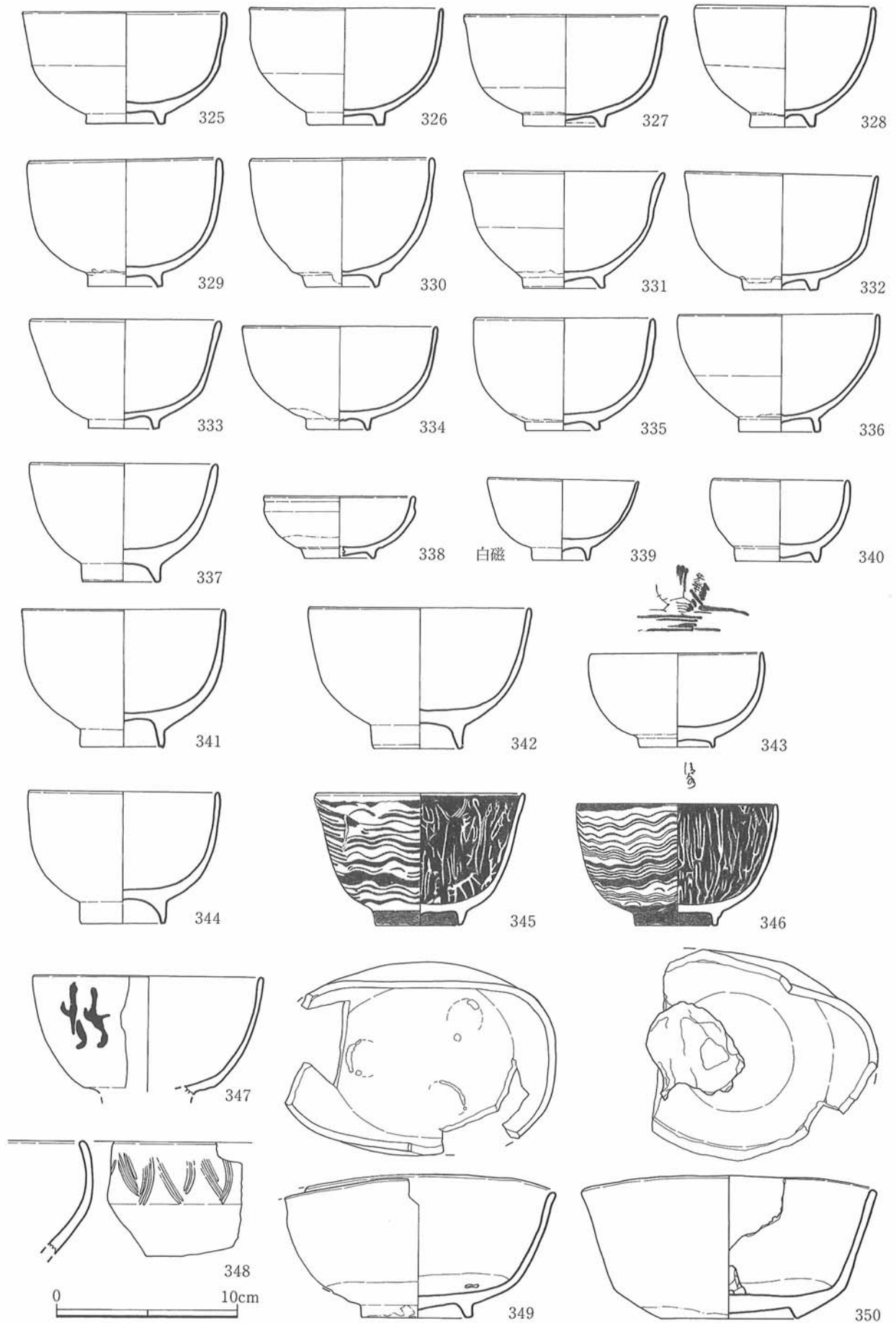
第93图 1-SK128出土遺物(1/3、1/5)



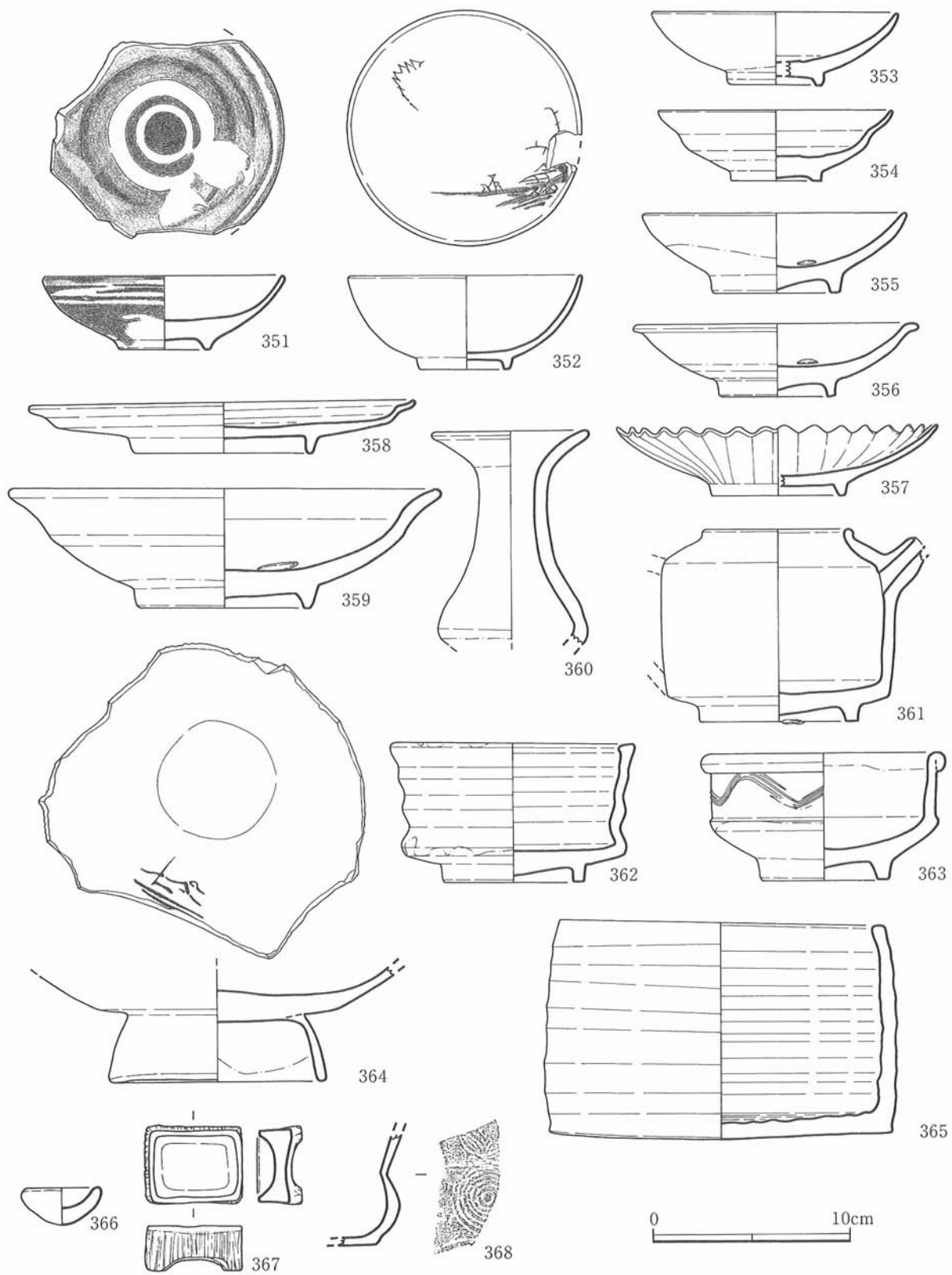
第94图 1-SK139出土遺物①(1/3)



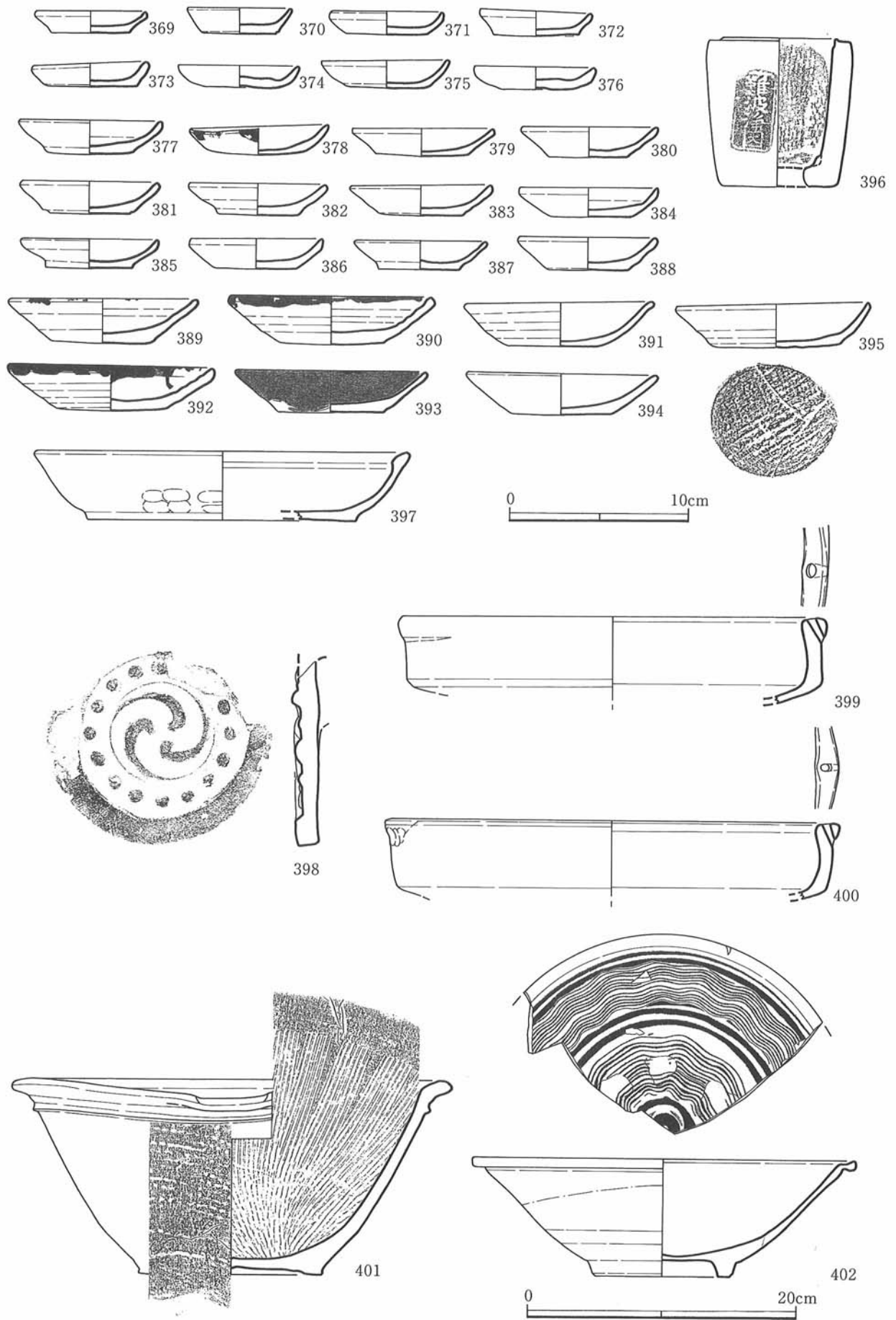
第95图 1-SK139出土遺物②(1/3)



第96図 1-SK139出土遺物③(1/3)



第97图 1-SK139出土遺物④(1/3)



第98図 1-SK139出土遺物⑤(1/3、1/4)

では247、248、250、251があり、247、248、251の京焼風陶器は刻印があることから17世紀末とみられる。267の「御壺塩師堺湊伊織」の焼塩壺は17世紀末から18世紀前半。また1708～9年に使用された宝永通宝も出土している。

SK111は18世紀初頭～18世紀前半とみられる。前述のSK109とSK111は遺構が重複しており、その前後関係からもほぼ同時期とみてよいだろう。

SK128 (第93図 図版60)

磁器は268～272。陶器は273、282。土師器皿は274～278。280、281は焼塩壺蓋。285は土人形の馬。

268は高台無釉の蛇の目釉剥ぎ皿で18世紀前半。269の口鏤のある手塩皿、273の肥前陶器刷毛目碗は18世紀前半を中心とするものである。「難波浄因」の刻印をもつ279の焼塩壺は、寸詰まりの形態から18世紀前半から中頃か。陶器は他の廃棄土坑と比較して少ないためか、萩、須佐唐津製品が占める割合が少ない。

SK128の時期は出土遺物から18世紀前半頃とみられる。なお270の皿や272の青花皿は17世紀前半までの時期で、遺構の時期より古い遺物が混在する。283と284は鞆羽口と埴塙である。この他金属精錬や加工にともなうスラグも出土している。284の埴塙は径10cmと大型であり、この大きさのものは出土数が少ない。

SK139 (第94～98図 図版61～66)

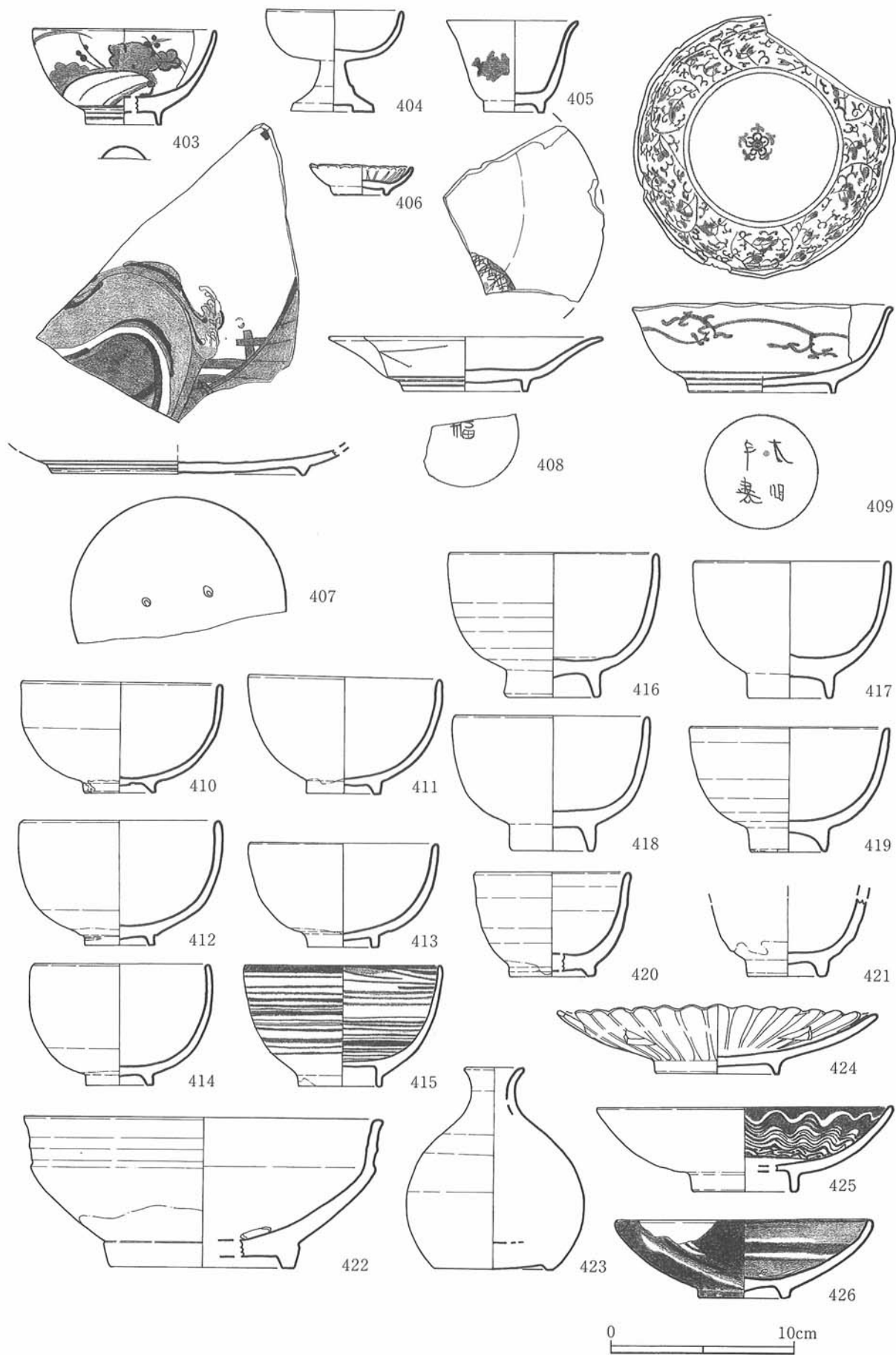
286～324、339のうち294、316は陶胎染付で、他は磁器。325～338、340～365、368、401、402は陶器、369～397、399、400は土師器。

286～288は白磁碗。290、292、293の梅樹文碗は18世紀初頭からのものであり、294は陶胎染付の碗で18世紀前半。295、296は色絵の碗片。297、298は猪口。303の白磁皿は17世紀末～18世紀初頭。304～309は蛇の目釉剥ぎ皿で高台無釉。310は「元」銘にハリ支え痕がある。311は五弁花に「大明成化年製」銘の輪花皿。312は大型の蛇の目釉剥ぎ皿で見込にコンニャク印判五弁花を施し、高台まで施釉することから、18世紀前半以降である。316は陶胎染付で18世紀前半。319の青磁香炉は見込に片切り、線彫りの草花文があり、底面の蛇の目釉剥ぎ高台にチャツ痕がある。321～324は景德鎮系の白磁と青花。

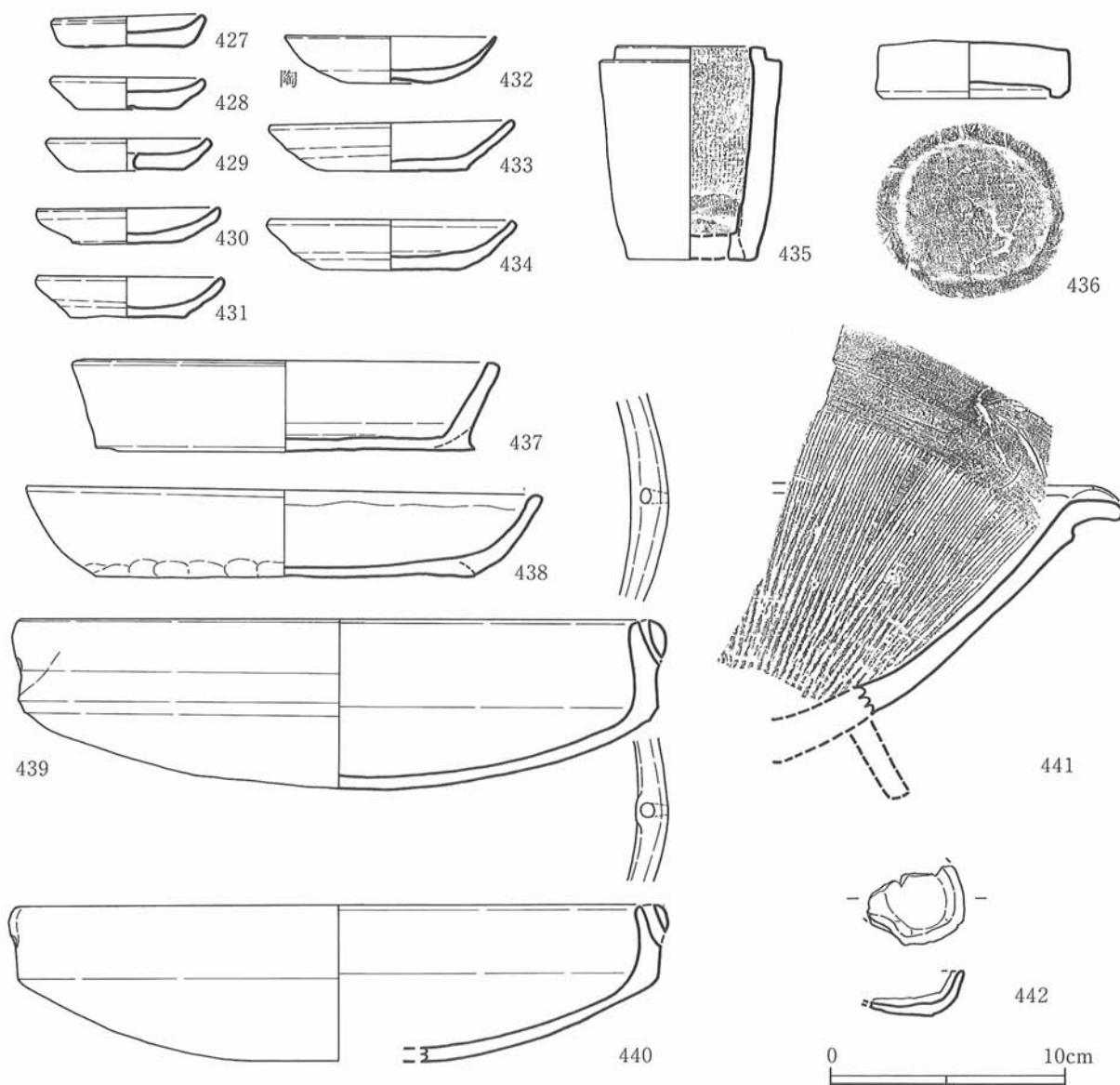
陶器碗は萩の藁灰釉碗が主体である。341～346、353は肥前の呉器手碗、銅緑釉皿、京焼風陶器で「清水」印のある碗、刷毛目碗があり、17世紀末～18世紀にかけてのものである。349、350は杓形碗で、高台を持つものと、碁笥底のものがある。349は萩の土灰釉の杓形碗で内面に輪状の胎土目痕が残る。350は須佐唐津の灰釉杓形碗。353、354は肥前蛇の目釉剥ぎ皿。351は蛇ノ目釉剥ぎの刷毛目皿。355、356は胎土目のある灰釉皿。357は灰釉の菊花形皿。361は灰釉水注。362は萩藁灰釉香炉（火入れ）。363は肥前の鉄釉香炉（火入れ）。366は埴塙。367は鉄釉をかけた箱庭道具の一種。368は肥前の火入れで、17世紀後半のものである。

369～395は土師器皿。口径の大きさが5～6cm、7～8cm、10～11cmの3つに分類できる。397は在地の焙烙。399、400は関西系の焙烙。396の寸詰まりな「難波浄因」の焼塩壺は18世紀中頃までであろう。401は外面格子目叩きのある肥前播鉢。402は肥前の二彩大皿で、砂目が残る。

これらの遺物からSK139は18世紀前半頃の土坑と考えられる。なお321～324の虫食いや高台内に放射状の削り痕が認められる青花片は17世紀前半までのものとみられ、17世紀後半の363、368の火入れ



第99図 1-SK149出土遺物①(1/3)



第100図 1-SK149出土遺物②(1/3)

など17世紀に属する陶磁器も含まれる。

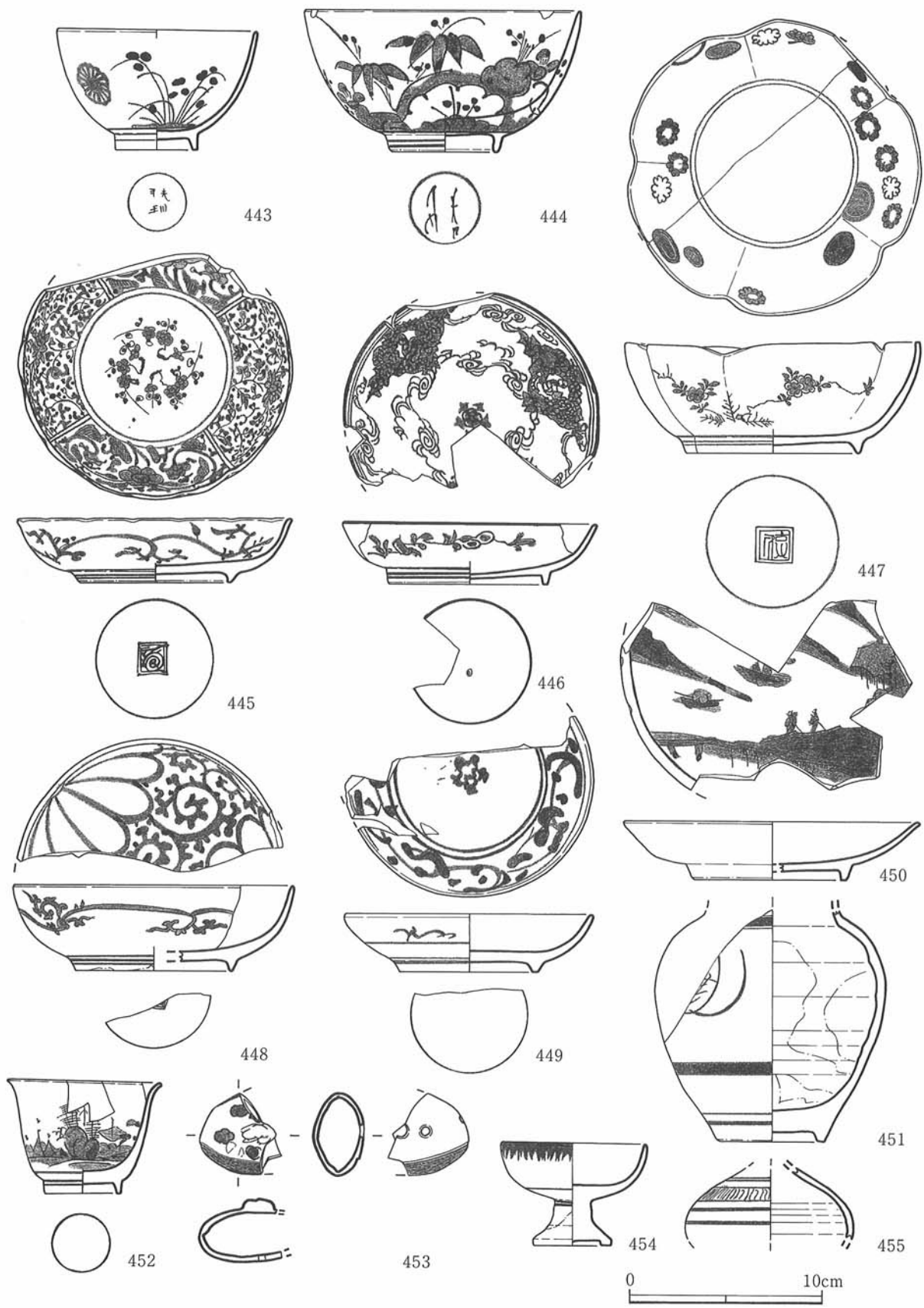
SK149 (第99、100図 図版74～76)

403～409は磁器。410～426、432、441は陶器。427～431、433～440は土師器。梅樹文の碗403や、五弁花と花唐草文の皿の409は18世紀前半とみられる。また416～419の肥前呉器手碗、425の刷毛目皿の肥前陶器も出土する。438は把手がつき口縁部が肥厚する在地系の焙烙で、439、440は把手を装着する孔を持つ関西系の焙烙である。両者が併用されることから調理によって使い分けがなされてきたとみられる。442は手づくねの小型坩堝で、内面に金（銀？）の小粒が付着する。

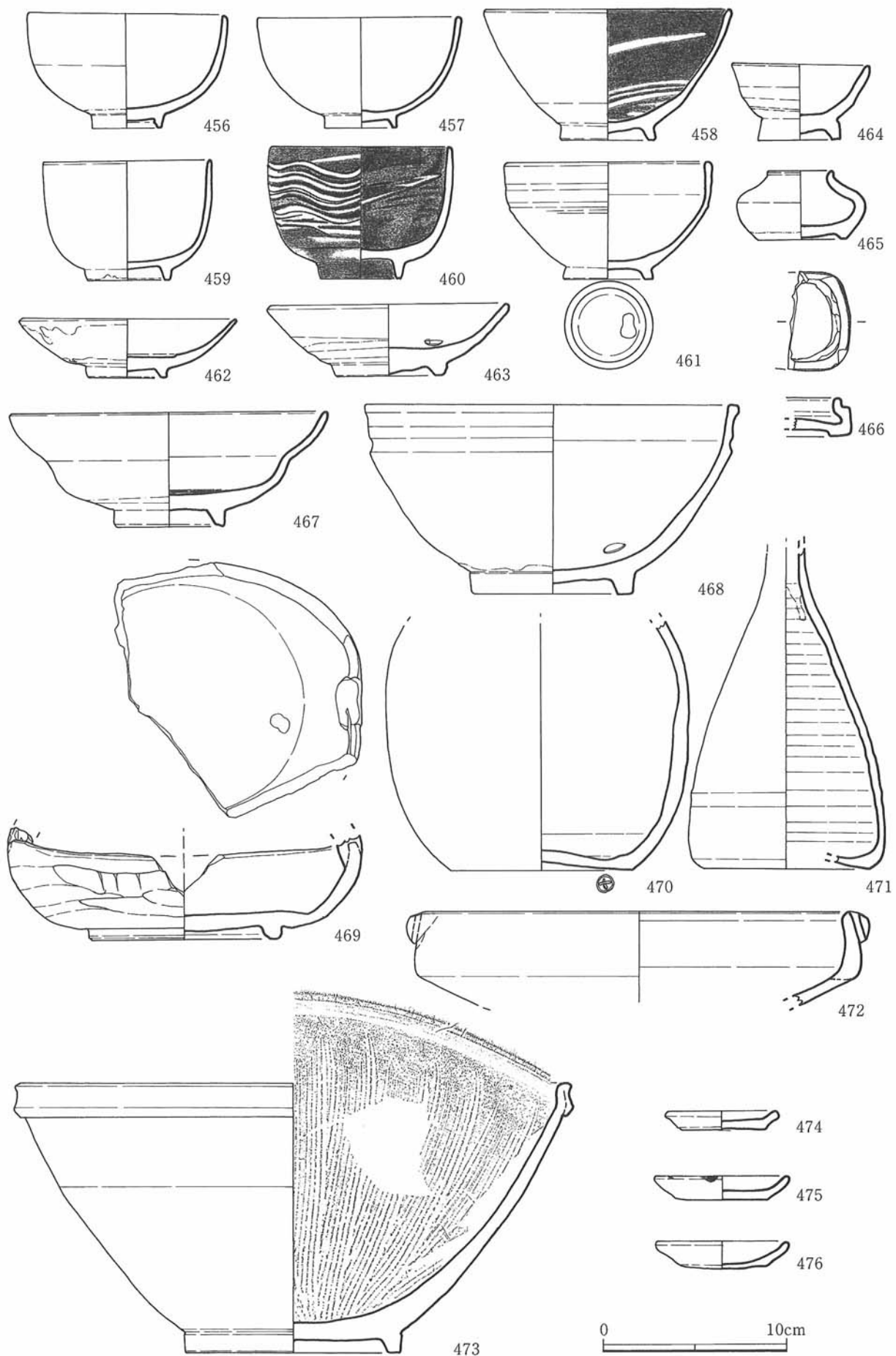
SK142 (第101～103図 図版67～69)

443～455は磁器。456～471、473は陶器。472、474～480は土師器。481は瓦質土器。

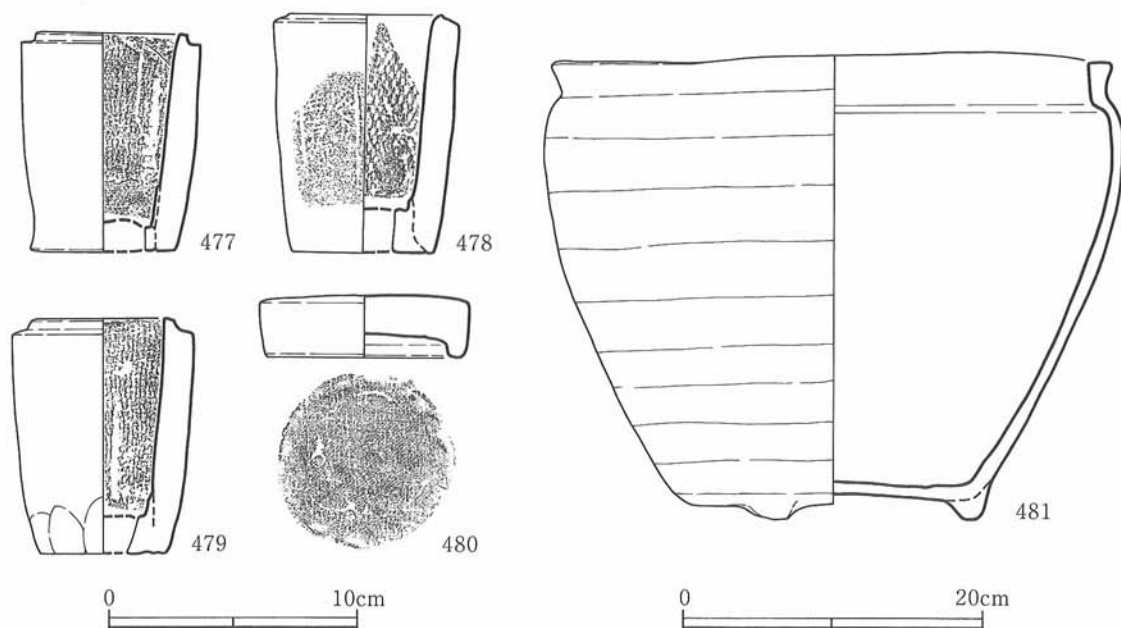
磁器445は見込の梅文と渦福の銘款などから18世紀初頭。449はコンニャク印判でやや新しくなる。447は輪花鉢。上手で内面に丸文と墨弾き、外面に折枝花文を施す。高台内の銘款から1670年代から18世紀初頭とみられる。450の青花皿、451の瓶は17世紀中頃までのものとみられる。



第101图 1-SK142出土遺物①(1/3)



第102图 1-SK142出土遺物②(1/3)



第103図 1-SK142出土遺物③(1/3、1/5)

陶器は萩、須佐唐津以外では、462は肥前の蛇の目釉剥ぎ皿。461は京信楽系の碗か。高台内にひょうたん形の刻印がある。466は瀬戸美濃系で鉄釉と緑釉をかける織部風の合子。469は萩薬灰釉の把手付きの皿。470、471は備前。473は口縁を肥厚し折り返す須佐唐津の播鉢。胎土軟質で鉄釉を施釉し、体部下半のケズリ調整が特徴である。陶器における萩、須佐唐津製品は他の土坑に比べて個体数が少なく、肥前に加えて京信楽系、瀬戸美濃、備前などが認められるのがこの土坑の特徴である。

472は関西系の焙烙で、粘土を貼り付けそこに把手を装着する孔がある。478は「堺本湊焼吉右衛門」の焼塩壺。481は瓦質土器の甕で、短い3足脚がつく。

以上から SK142は18世紀前半までの時期と見られる。

SK143 (第104図 図版69、70)

482～486は磁器。487～490は陶器。491～497は土師器。

482は雪輪梅樹文で「大明年製」くずし銘がある碗。484は五弁花と「大明年製」銘を持つ輪花皿。485は雨降り文の猪口で18世紀中頃までのもの。486は色絵蛇の目釉剥ぎの皿である。

489は刷毛目のある仏花瓶。490は須佐唐津の灰釉沓形碗で、碁笥底で沓形碗の中では大型品である。491は口径に対して器高が高い細身の焼塩壺で、刻銘は不明である。496は在地系の焙烙。497は土師器火鉢の一部か。

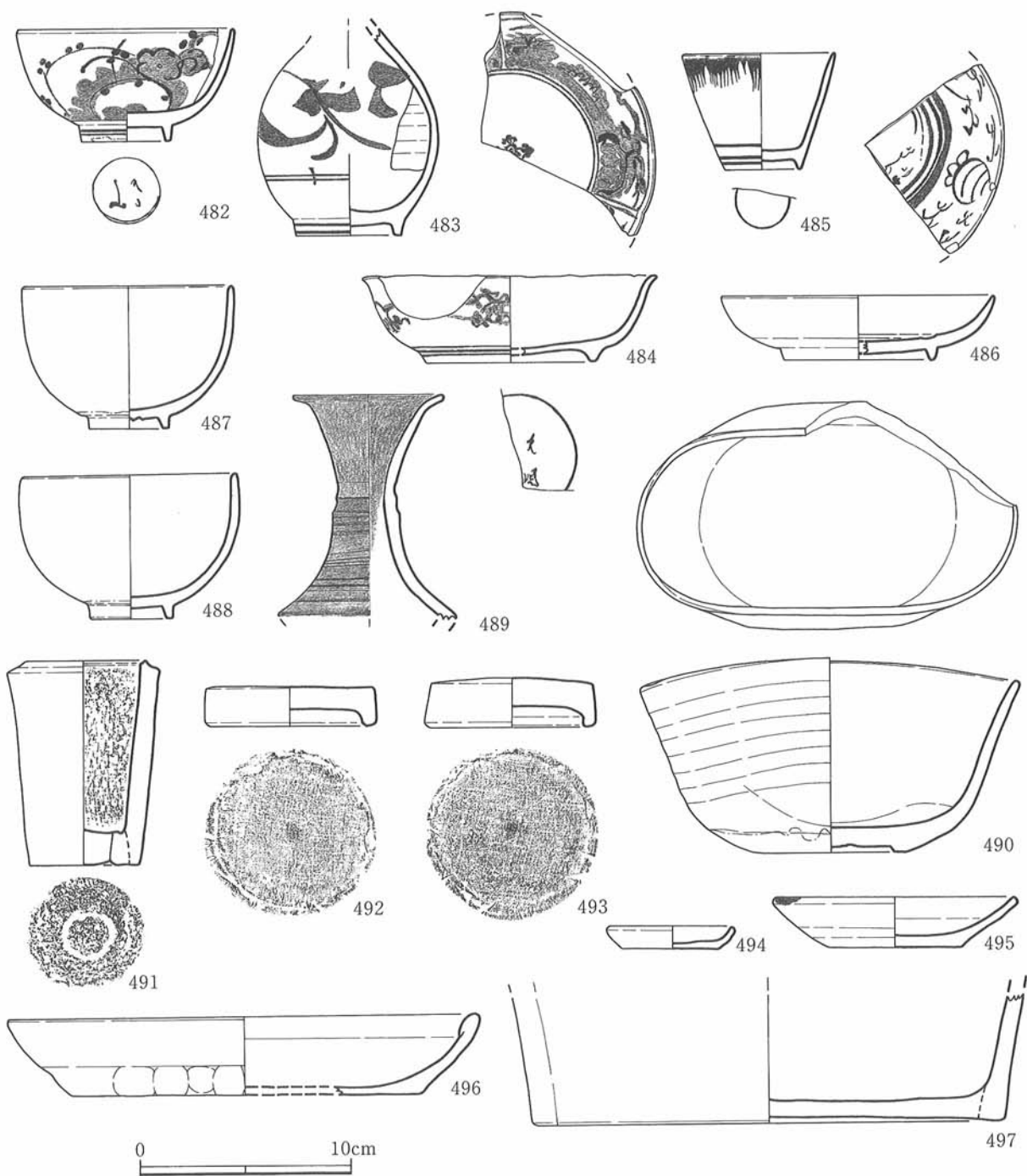
以上の遺物から SK143は18世紀とみられる。

SK145 (第105、106図 図版70、71)

498～507、519が磁器。508～517が陶器。518、520～527が土師器である。

498、499は青磁染付の碗。500は口縁内に四方襷文のある深皿。501は蛇の目釉剥ぎのくらわんか碗。502は型紙摺りの蓋。503～505は高台内に「大明年製」のくずし銘があり、見込に五弁花を持つ皿。506は青磁瓶。507は白磁の水滴。519は伊万里人形の灯芯押さえ。

陶器は508～511が萩薬灰釉碗。512～515、517は灰釉（黄釉）で須佐唐津の製品か。胎土目の残る



第104図 1-SK143出土遺物(1/3)

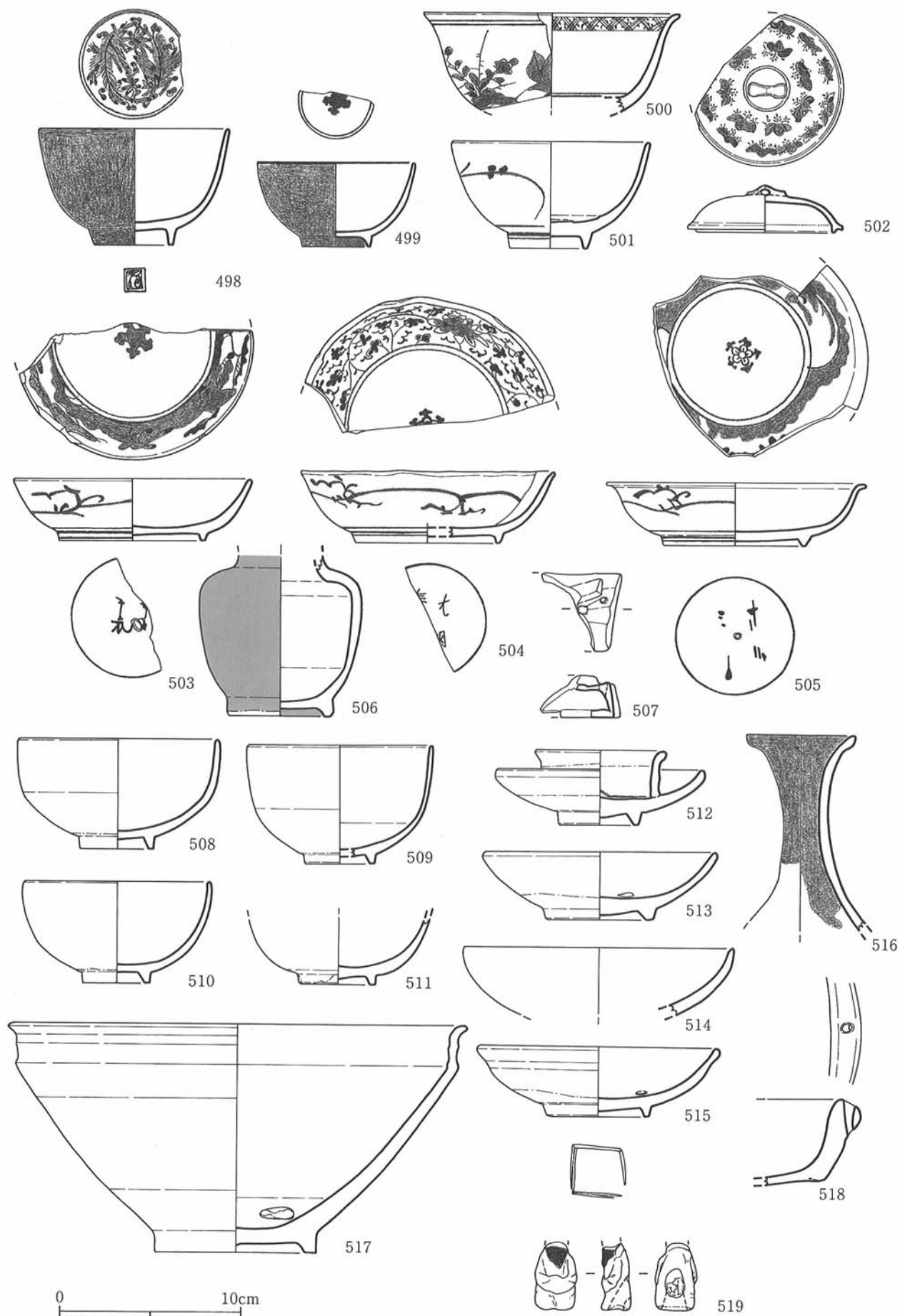
ものがある。515は高台内に釘書きで方形の図柄が刻まれる。

527は「御壺塩師泉湊伊織」の焼塩壺で17世紀末から18世紀前半。

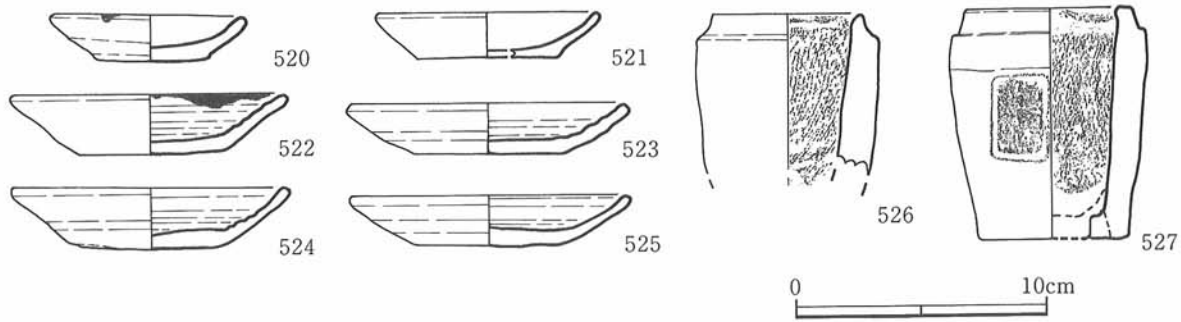
以上から SK145は18世紀前半とみられる。

SK68 (第107図 図版76)

528は肥前陶器の呉器手碗で17世紀後半～18世紀前半。529は萩の輪状の胎土目が残る皿。530は中国漳州窯系の青花鉢で、三足の獣足に八卦文と牡丹唐草を施す。16世紀末から17世紀前半。531は景德鎮の青花輪花皿で、陰刻の魚藻文を施す。口縁には虫食いといわれる剝離がある。16世紀末～17世紀前半である。



第105图 1-SK145出土遺物①(1/3)



第106図 1-SK145出土遺物②(1/3)

SK68は建物敷地内の小土坑であるが、青花、萩と肥前陶器が出土し、注目される遺構である。528は18世紀まで時期幅があるが、他の遺物から17世紀を中心とする時期であると考えられる。

SK152 (第108、109図 図版72、73)

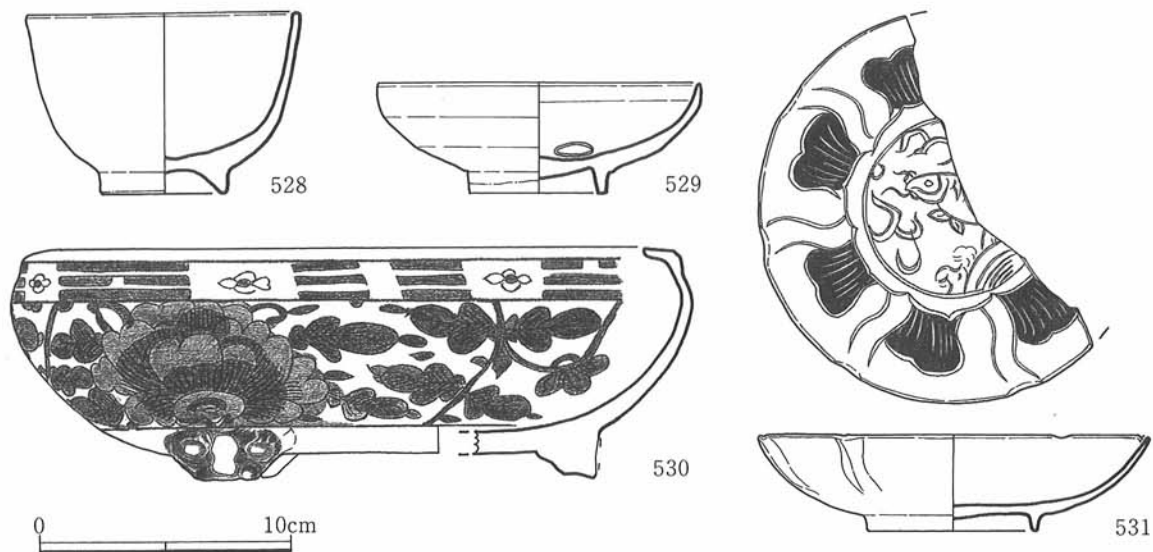
532～534は見込に五弁花、高台内に渦福や「大明年製」のくずし銘を持つ皿に対し、535～537は丁寧な絵付けで、「大明成化年製」を書く上手の皿。541は漳州窯系の砂目が残る皿。545、546は青磁皿。554～556の蛇の目釉剥ぎで銅緑釉をかけた皿、551の呉器手碗、552の螢手の碗は17世紀から18世紀前半のものである。560、561は瀬戸美濃とみられる灰釉に鉄釉をかけた皿。553は京信楽系の腰折れ碗で18世紀中頃以降であろう。

瀬戸美濃、京信楽系が出土し、その他は17世紀から18世紀前半のものがあるので、SK152は18世紀前半から中頃とみられる。

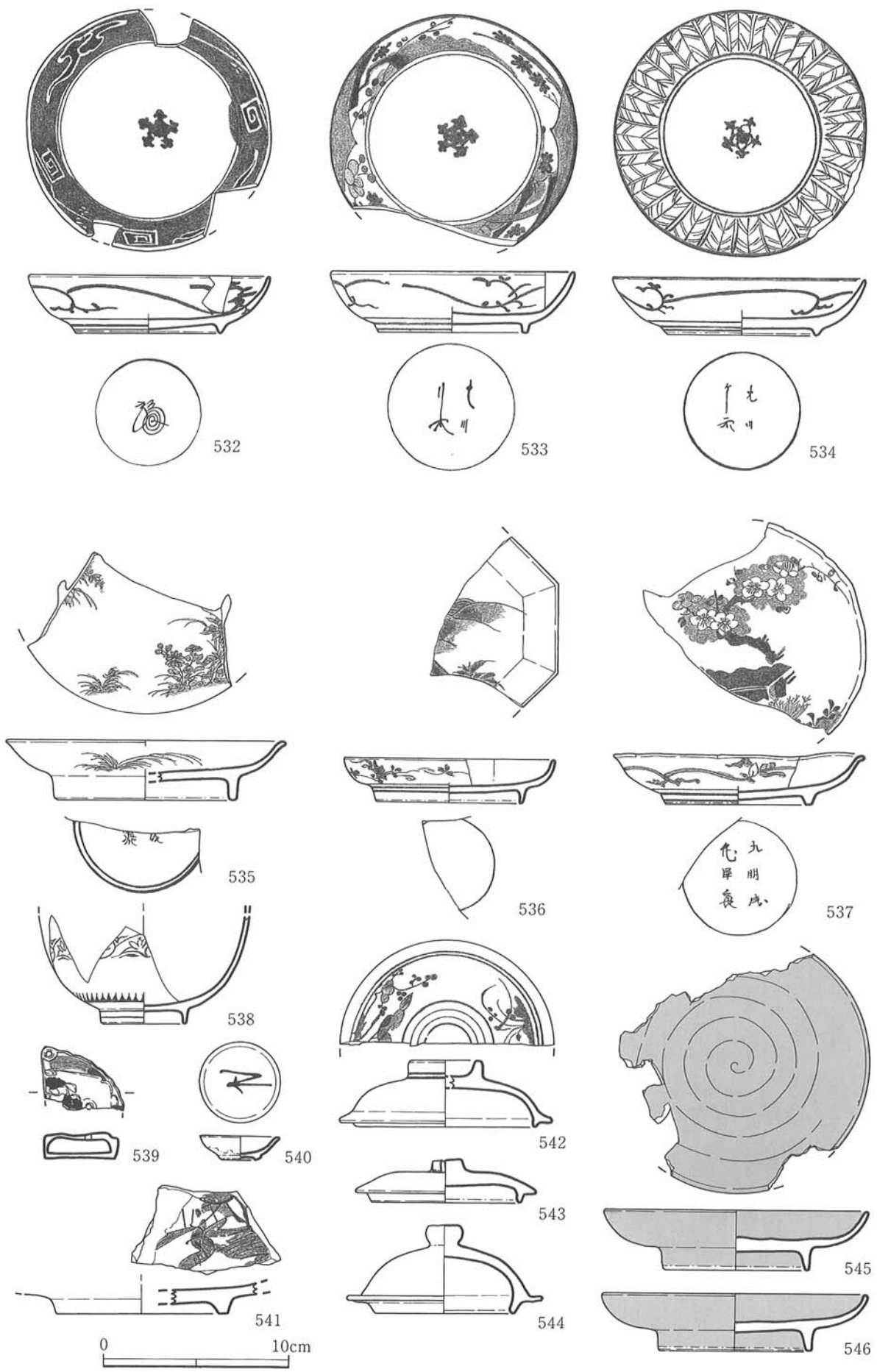
1-H区鯨骨包含層 (第110図 図版76、77)

1-H区で2・3面下に検出され、鯨骨がまとまって出土した包含層である。鯨骨の周辺から出土した点数は少なく、次に掲げる陶磁器のみである。568～571が磁器。572～581が陶器である。

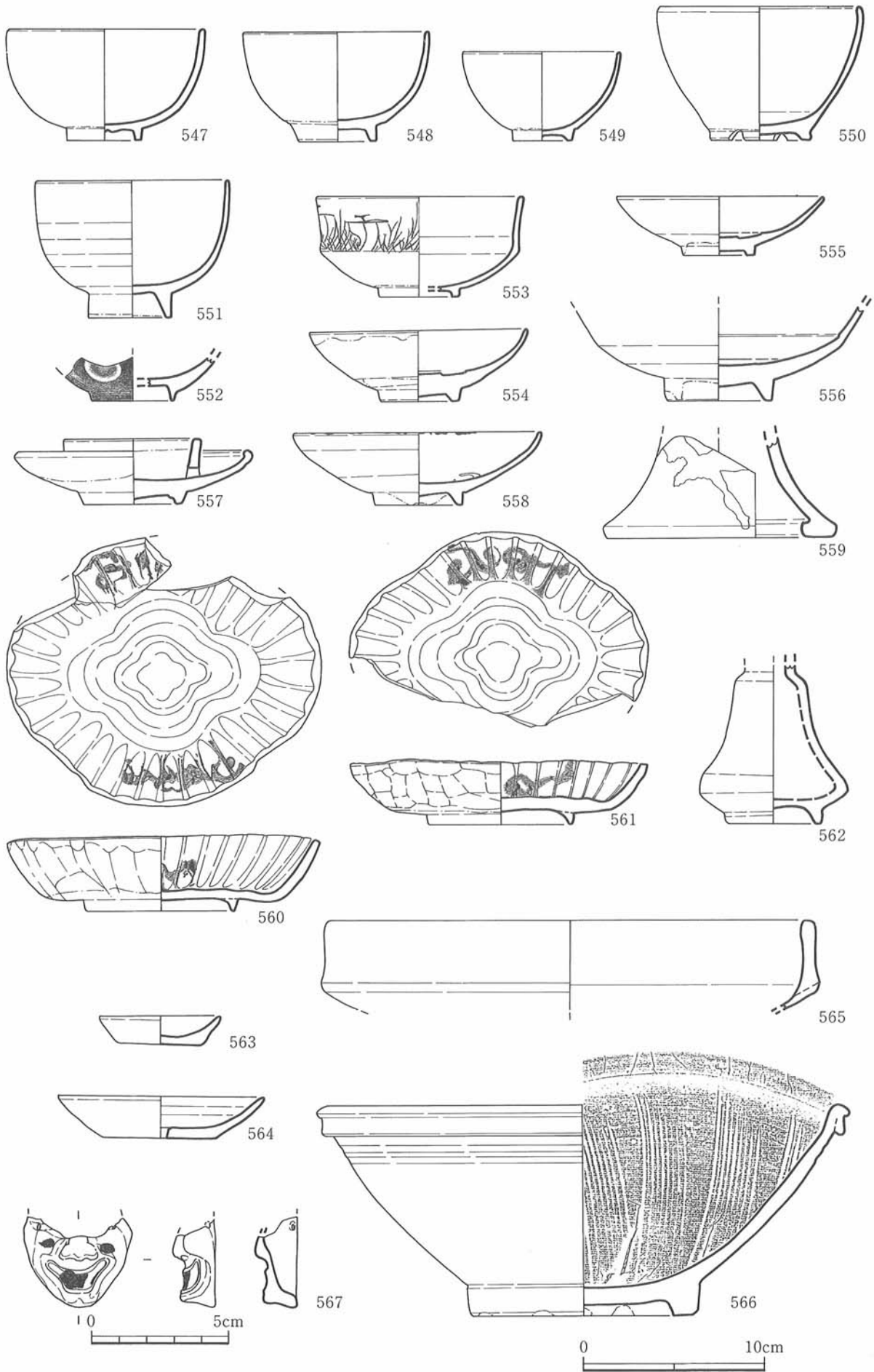
568は網目文の碗で、高台内に「宣明化製」の銘款をもつ。569は鑄のある猪口。570は梅文を巡らせる皿。571は高高台の皿で高台に草花文、底部に「大明成化年製」銘。572は呉器手碗。573、574は



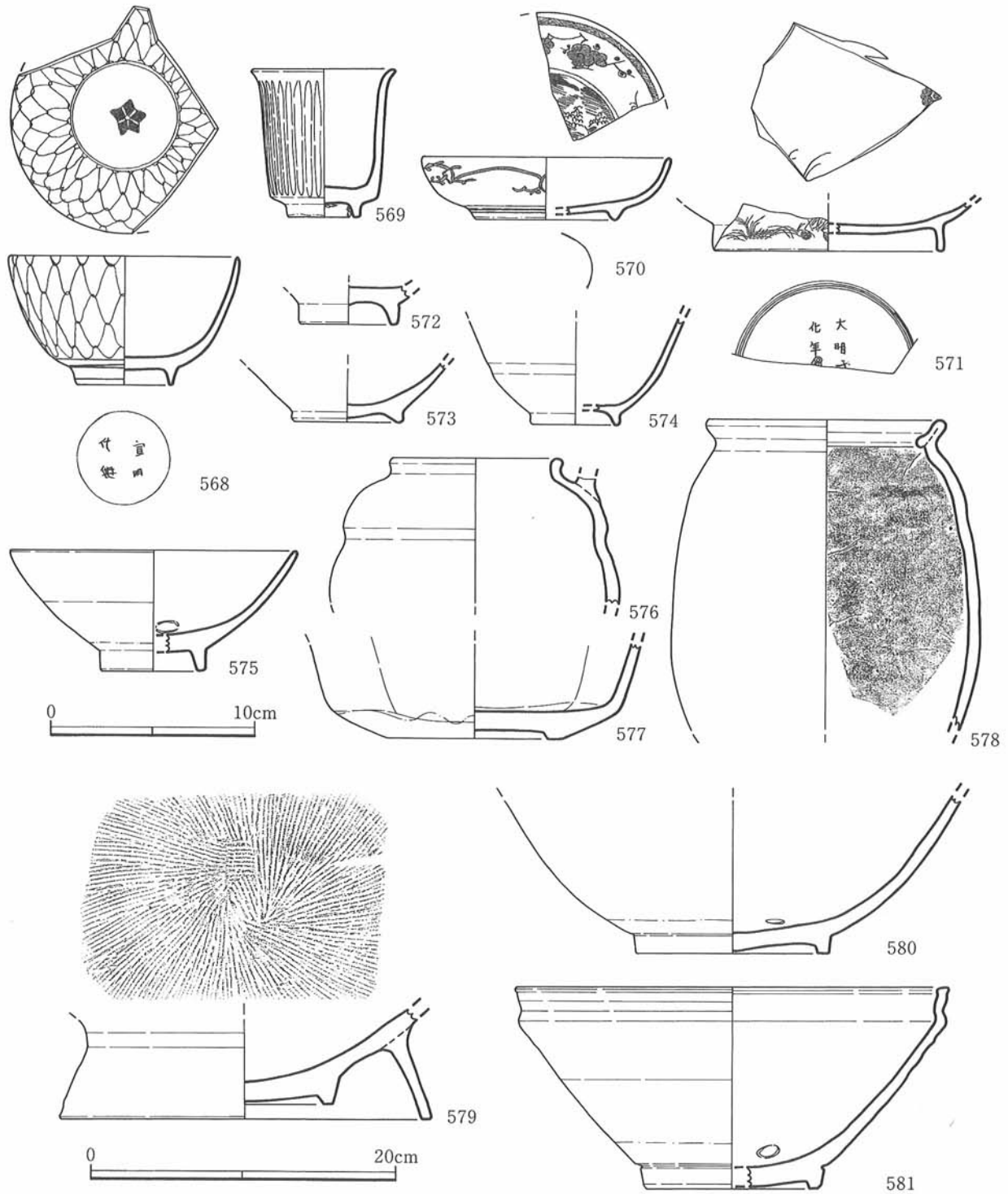
第107図 1-SK68出土遺物(1/3)



第108图 1-SK152出土遺物①(1/3)



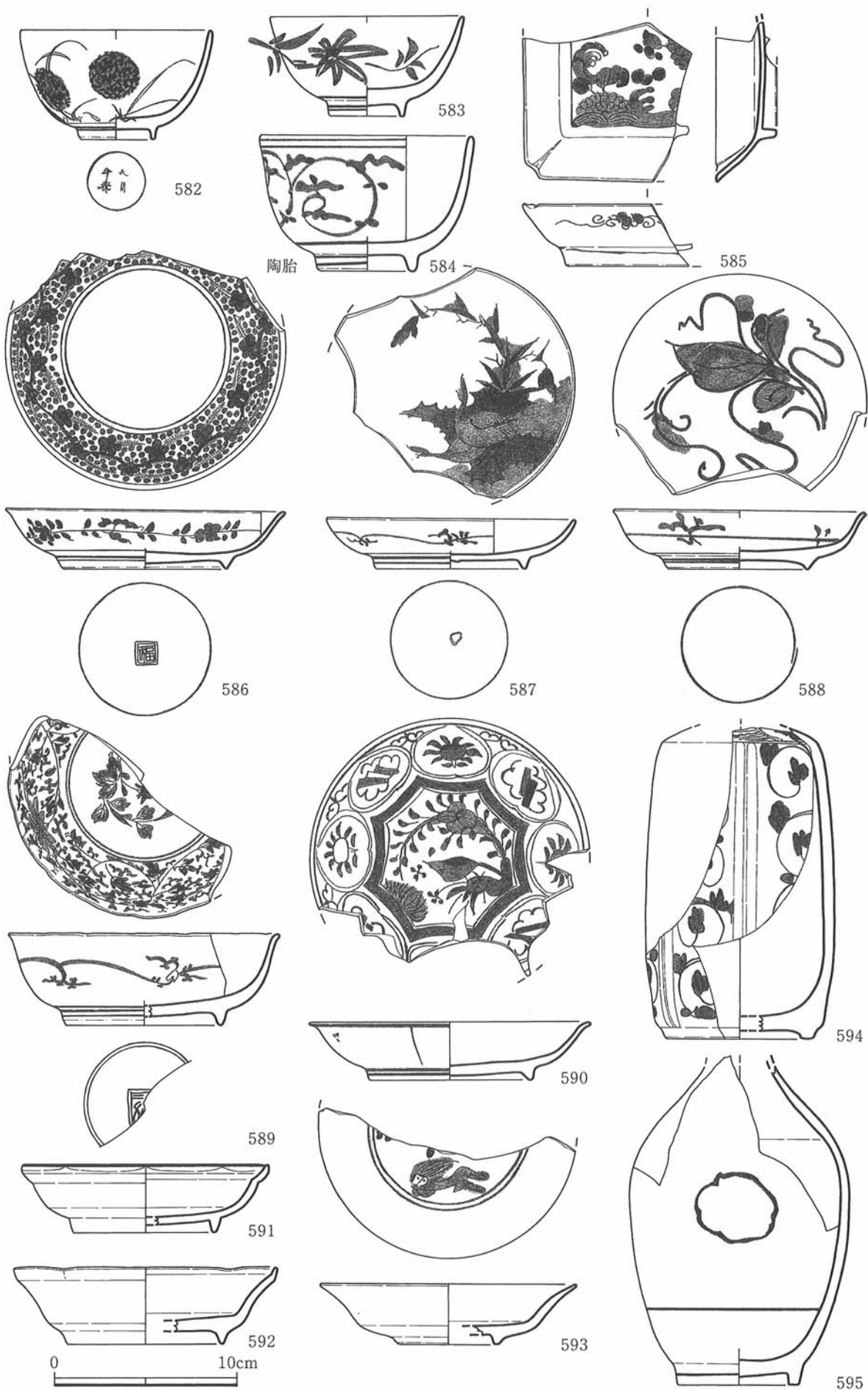
第109图 1-SK152出土遺物②(1/2、1/3)



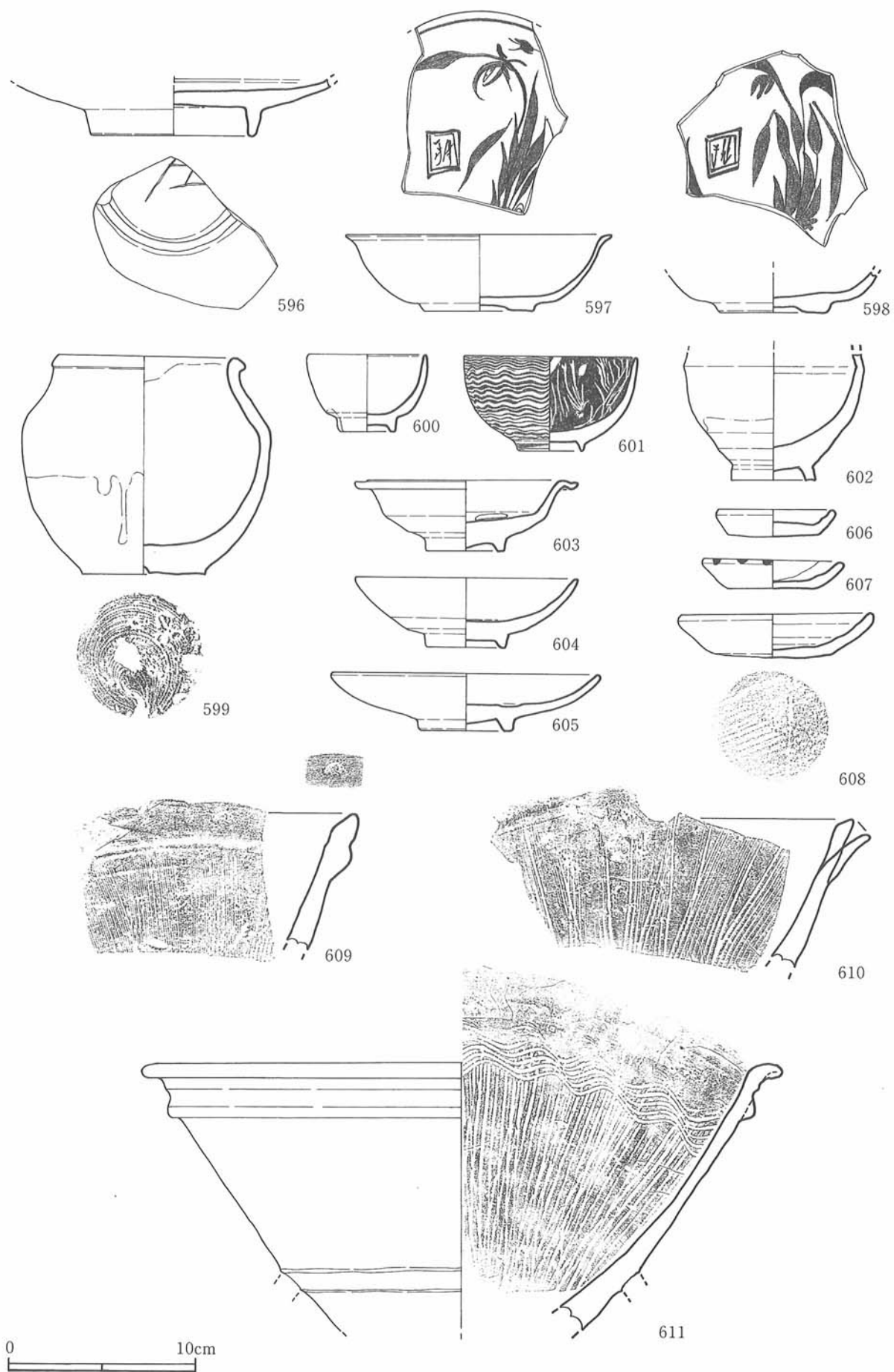
第110図 1 - H区鯨骨包含層出土遺物(1/3、1/4)

刷毛目状の装飾をする碗。575は土灰釉をかける胎土目の残る碗。576は灰釉の把手付き壺。577は碁筒底の灰釉杏形碗。578は土灰釉をかけ、口縁を肥厚させた甕。579は須佐唐津の台の付く掃鉢。580、581は胎土目のある灰釉鉢。

この包含層は資料数が少ないが、18世紀にはいる遺物はないことから、17世紀代におさまる時期であり、層序的にも17世紀後半までが想定されることから矛盾はしないであろう。



第111图 1-C区石段整地層出土遺物①(1/3)



第112图 1-C区石段整地層出土遺物②(1/3)

1-C区石段整地層 (第111、112図 図版77、78)

1-C区において建物礎石に伴って石段が構築されたが、その石段が構築された際に整地層が検出された。ここではこの石段に伴う整地層出土の遺物を取り上げる。

582は1680～18世紀初頭。583は18世紀前半。584は陶胎染付で18世紀前半。585の方形皿は1660～1690年。586は見込の圏線内は無文で、銘款に二重方形枠の「福」字をもつ。587は1690～18世紀初頭。589は1690～18世紀前半。590は中国写しの芙蓉手皿で1670～1690年。592は1690～18世紀前半。595は瓶で1650～1670年。597、598は景德鎮の1620～1640年代の皿で「蘭」と「雅」が描かれる。596は朝鮮王朝期の白磁皿。内面に圏線状の段があり、高台内に「左」の刻書がある。17世紀前半か。601は肥前刷毛目碗で18世紀前半。603は唐津の胎土目折縁皿で、1600～1630年。604、605は肥前の銅緑釉蛇の目釉剥ぎ皿で17世紀後半～18世紀初頭。609は口縁の片口部に「長上」の刻印があることから、堺産播鉢とみられる。当遺跡では堺産播鉢の出土はほとんどなく、当時の物流を考えるうえで貴重な資料である。時期は18世紀前半～中頃である。

以上の遺物は17世紀から18世紀前半頃までの時期であるが、建物とその石段が構築されたのは17世紀後半とみられる。輸入磁器を含めて17世紀前半に比定できる資料が多いことが特徴的である。

SX314 (第113図 図版79)

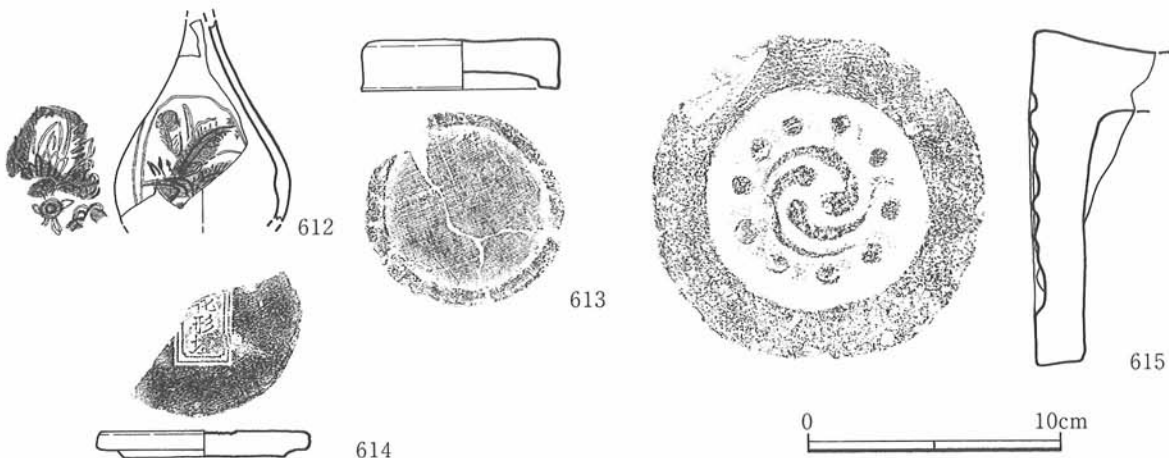
地下室内からは出土遺物が少なく、床面から次の4点が出土した。612は17世紀後半から18世紀前半の染付小瓶とみられる。613は焼塩壺蓋。614は花焼塩壺の蓋。上面の二重方形枠に「花形塩」の刻印が認められる。615は三巴文の軒丸瓦。

SX314はこれらの遺物からは時期を決しがたいが、遺構構築の前後関係も踏まえて18世紀を中心とした時期で、19世紀まで入る可能性もある。

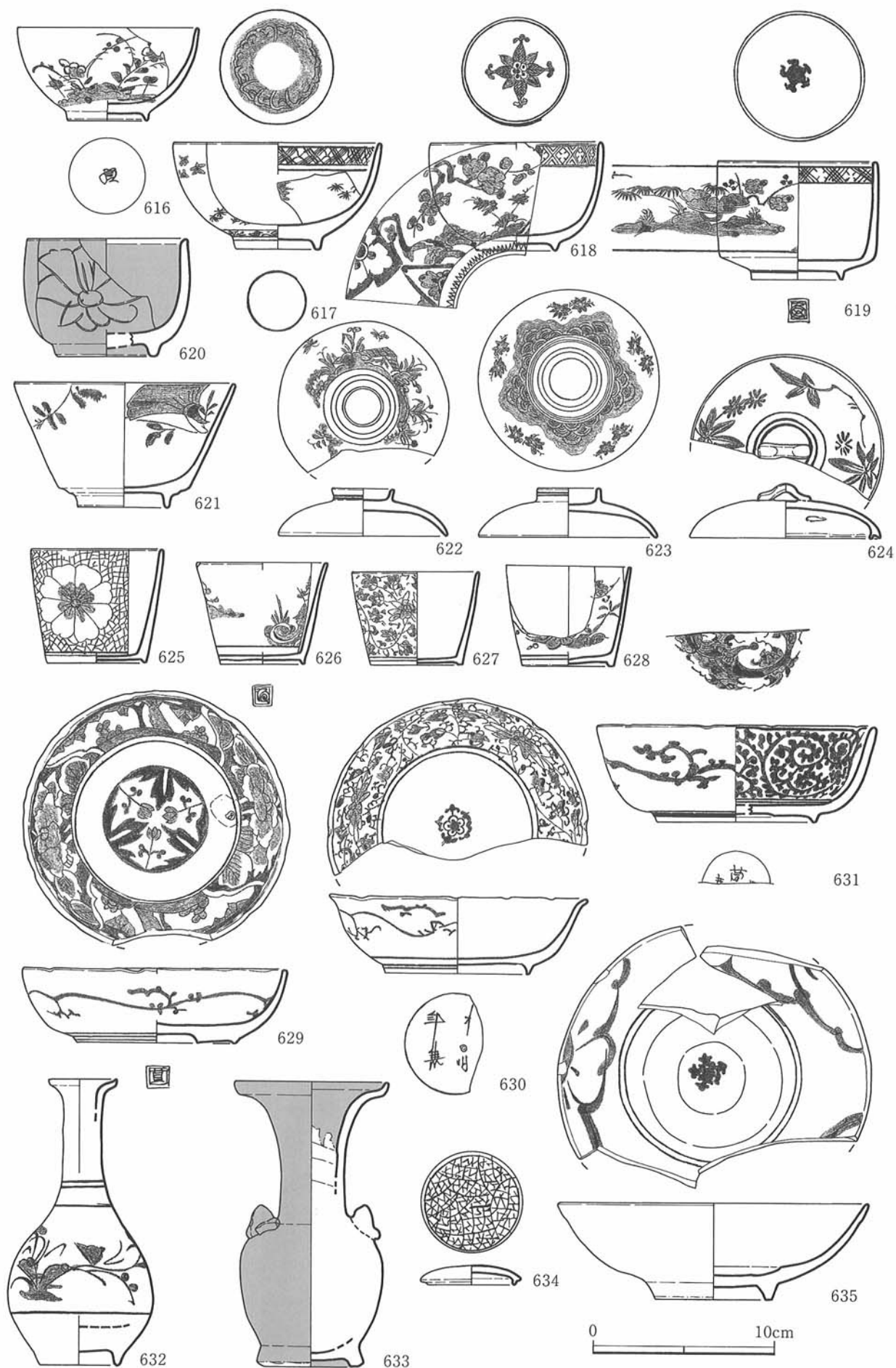
SK276 (第114～118図 図版79～83)

616～644は磁器。645～674は陶器。675～691は土師器。

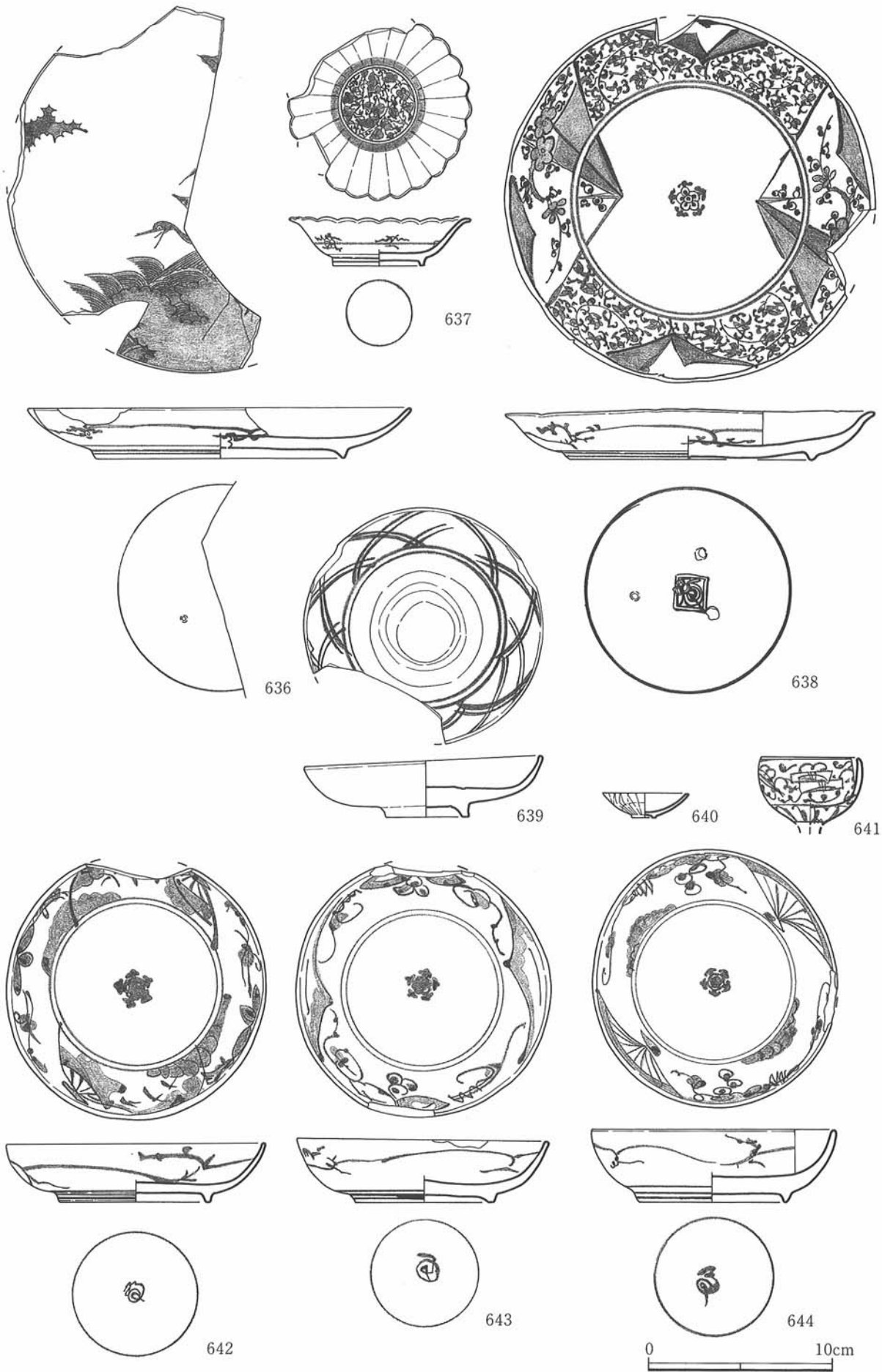
616の銘款は「筒江」とみられ、武雄領の窯場である筒江山を指すものである。617は見込の蛇の目釉剥ぎ部分に緑釉をかけ、文様を描く。619は筒形碗。617～619は口縁内面に四方禰文を巡らすことから、18世紀中頃から後半とみられる。621は開口する碗で、器形から18世紀中頃から後半。622～624



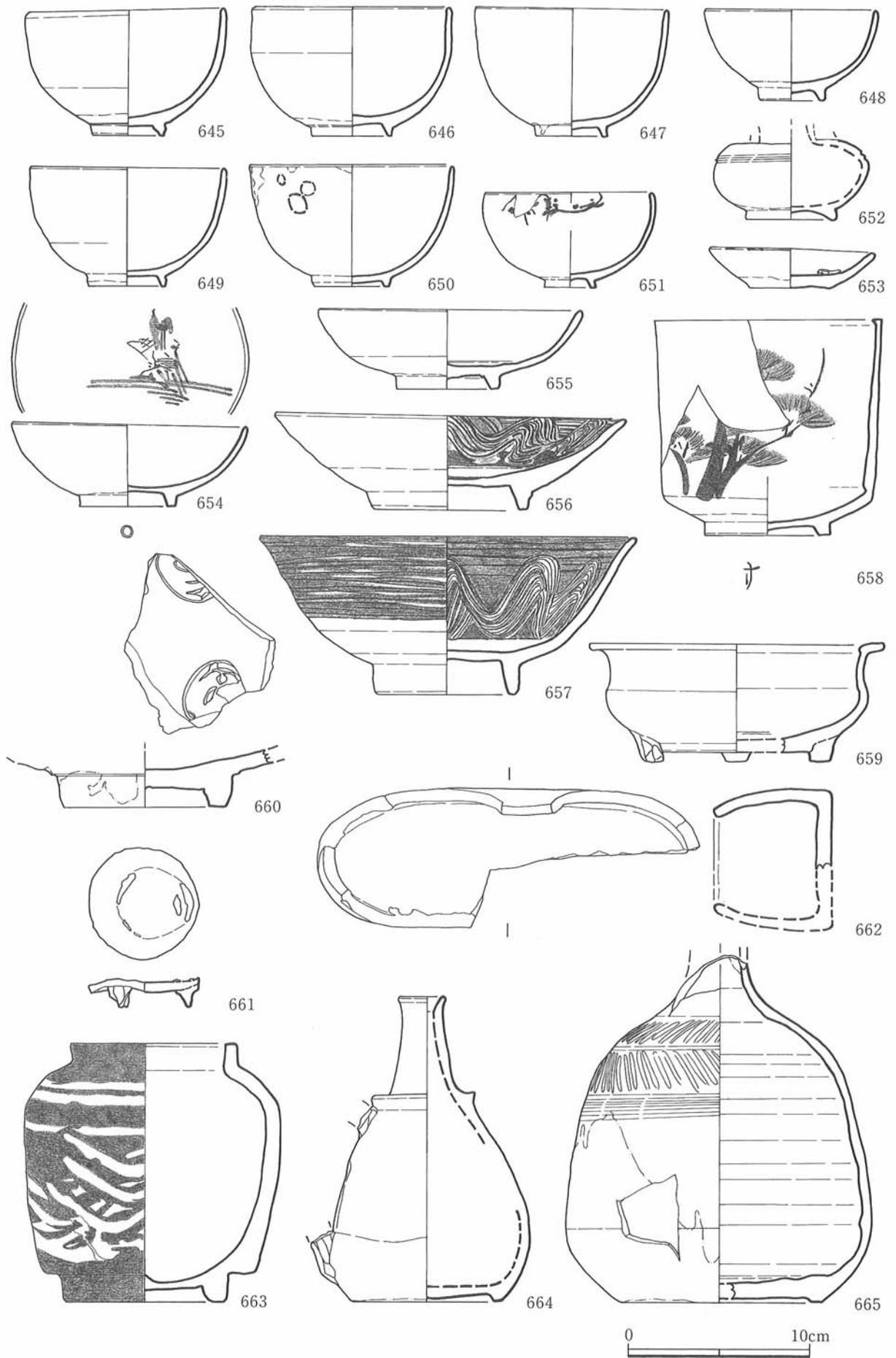
第113図 1-SX314出土遺物(1/3)



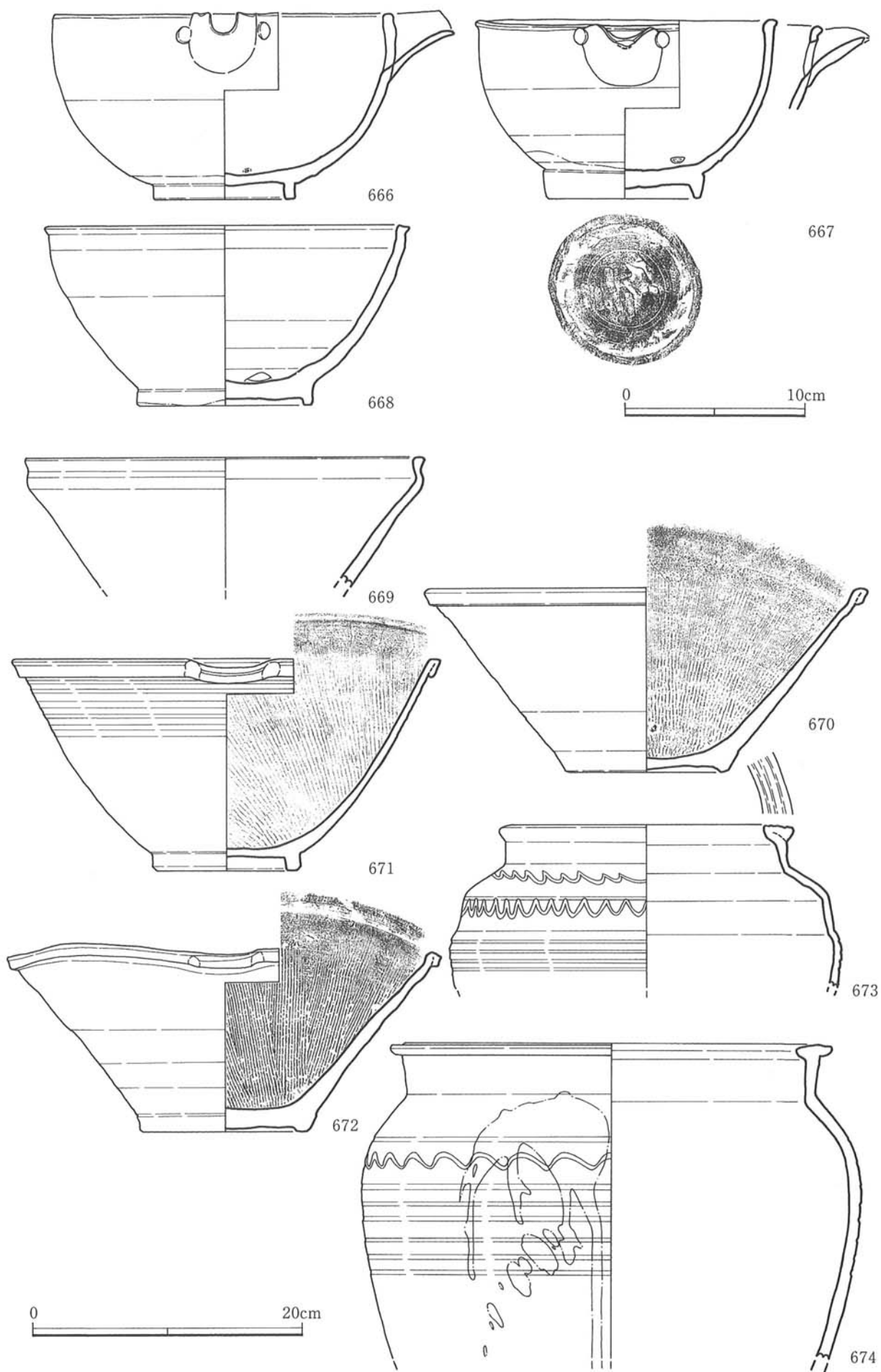
第114图 1-SK276出土遺物①(1/3)



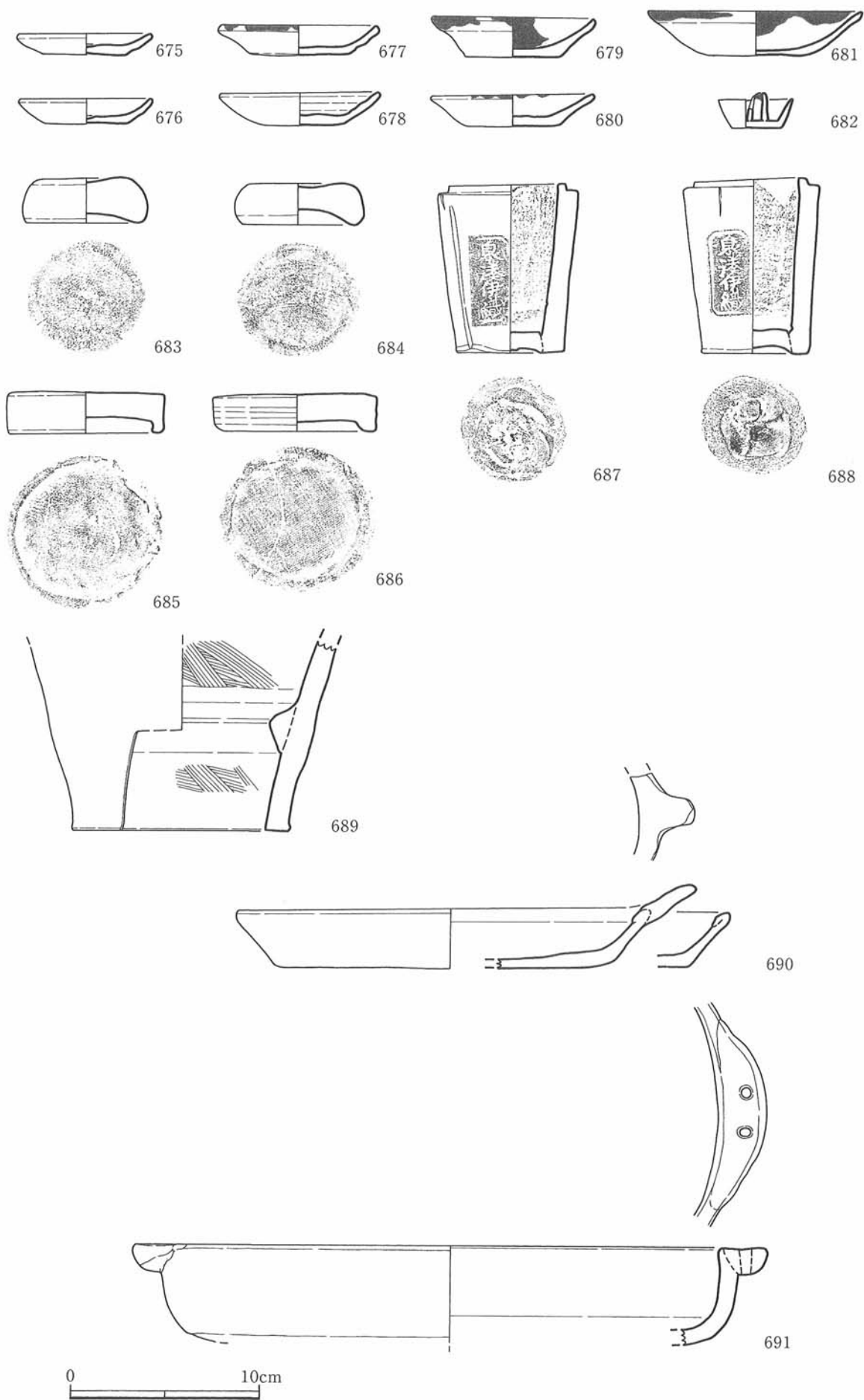
第115図 1-SK276出土遺物②(1/3)



第116図 1-SK276出土遺物③(1/3)



第117图 1-SK276出土遺物④(1/3、1/4)



第118図 1-SK276出土遺物⑤(1/3)

は蓋。625～628は猪口。蛇の目凹形底部より以前の形態と見られ、1780年以前であろう。629、631は高台内に「筒」の文字がみえるので、616と同様「筒江」であるとみられる。低い蛇の目凹形高台の深皿は1730年以降にみられる。635は大型の蛇の目釉剥ぎ皿でコンニャク印判五弁花。639は厚手の蛇の目釉剥ぎ皿で、二重格子文を施し高台まで施釉している。642～644はコンニャク印判による五弁花と高台内に一重圏線に方形枠のない渦福で、全体的に厚手である皿。これらは波佐見の製品と見られ、18世紀後半であろう。

陶器は萩、須佐唐津の製品が主体である。650、651、658は京信楽系とみられる。654は肥前京焼風陶器の皿で、高台内に文字刻印がないことから、18世紀に入るものであろう。656、657は肥前の蛇の目釉剥ぎ刷毛目皿。660は萩の鉢で貝目がつく。662は萩薬灰釉の鬢水入れ。665は薬灰釉の瓶。661は窯道具である三足ハマで、他の土坑や整地層、堆積層からも三足ハマ、トチン、匣鉢が出土している。666、667は片口。668、669は鉢。670～672は播鉢。口縁部は折り返して肥厚させているが、671は体部が内湾気味に、他は直線的に立ち上がる。671が輪状に痕跡が残る胎土目で、672は胎土目である。前者は萩、後者は須佐唐津の可能性がある。673、674は肥前の甕。

687、688は「泉湊伊織」銘の焼塩壺で18世紀の前半から中頃。683、684は小型の焼塩壺蓋。691は関西系焙烙のうち、粘土を貼り付けて2つの孔を穿ちしっかりした耳を取り付けるタイプである。

SK276は広東碗を含まないことや、京信楽系陶器、「泉湊伊織」の焼塩壺の存在などから、18世紀中頃を主体とする時期で、広東碗の出現する1780年以前であろう。

SK280 (第119図 図版95)

692、693、695、696は磁器。694、697、698、706、707は陶器。699、700、708は土師器。701～705は土製品である。

692は草花文の碗。693は小型の碗で、蛇の目釉剥ぎ部分に赤絵を施す。695、696は皿で、ハリ支え痕があり、1690年以降18世紀。698は灰釉鉢で胎土目がある。701～704は埴塙。小型と大型が2種類で内面にスラグや銅が付着していた。705は把手状のつまみがあり、表面は溶解した自然釉とスラグが付着していた。埴塙等とともに金属加工に使用された容器蓋とみられる。706、707は須佐唐津と肥前の播鉢である。708は内耳を持つ焙烙で、底外面はケズリ調整がされている。

SK280の時期は18世紀であろう。

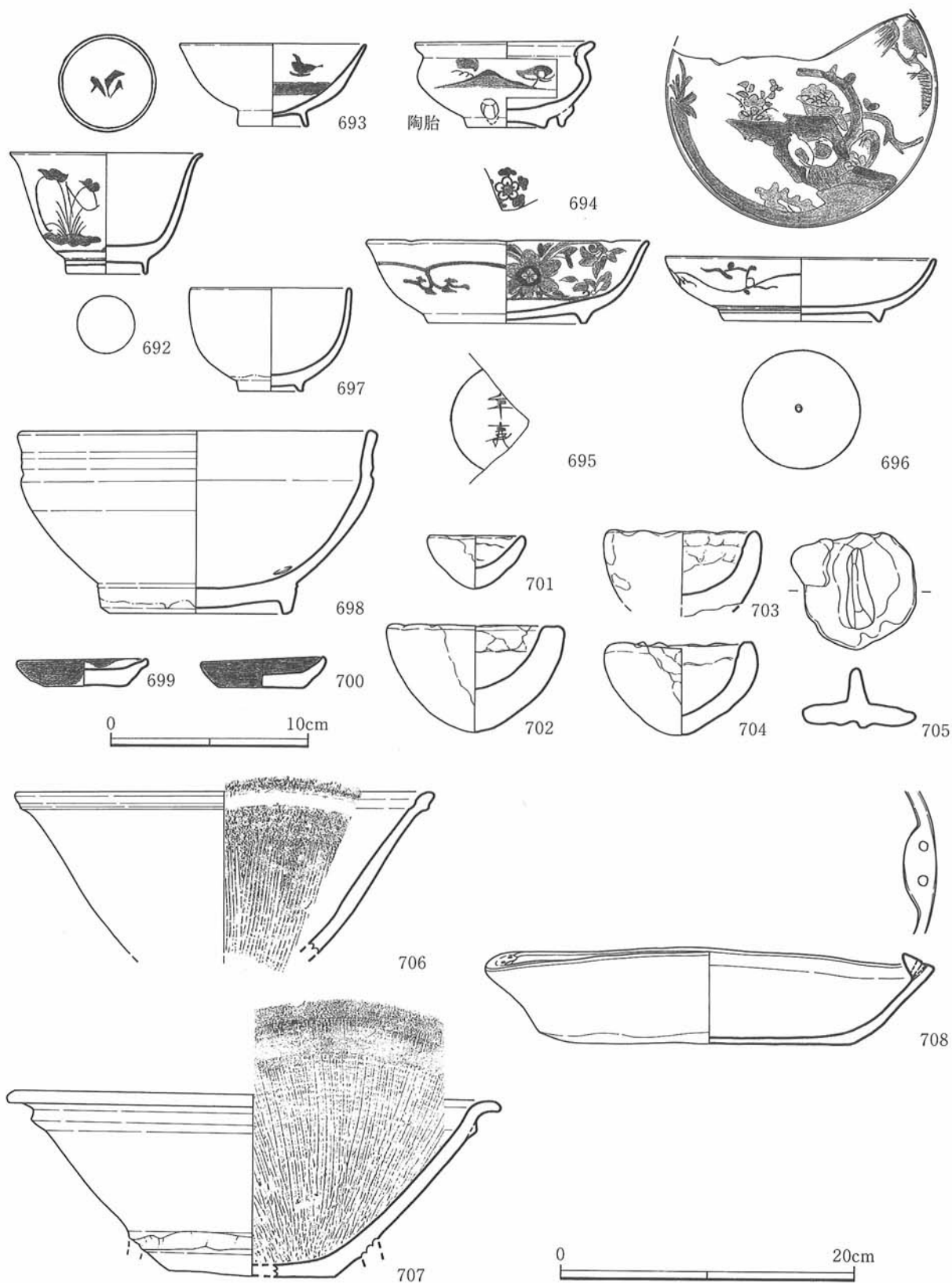
SK281 (第120～122図 図版96～98)

709～716、718、719は磁器。717、720、732～746、748は陶器。721～731、747は土師器。

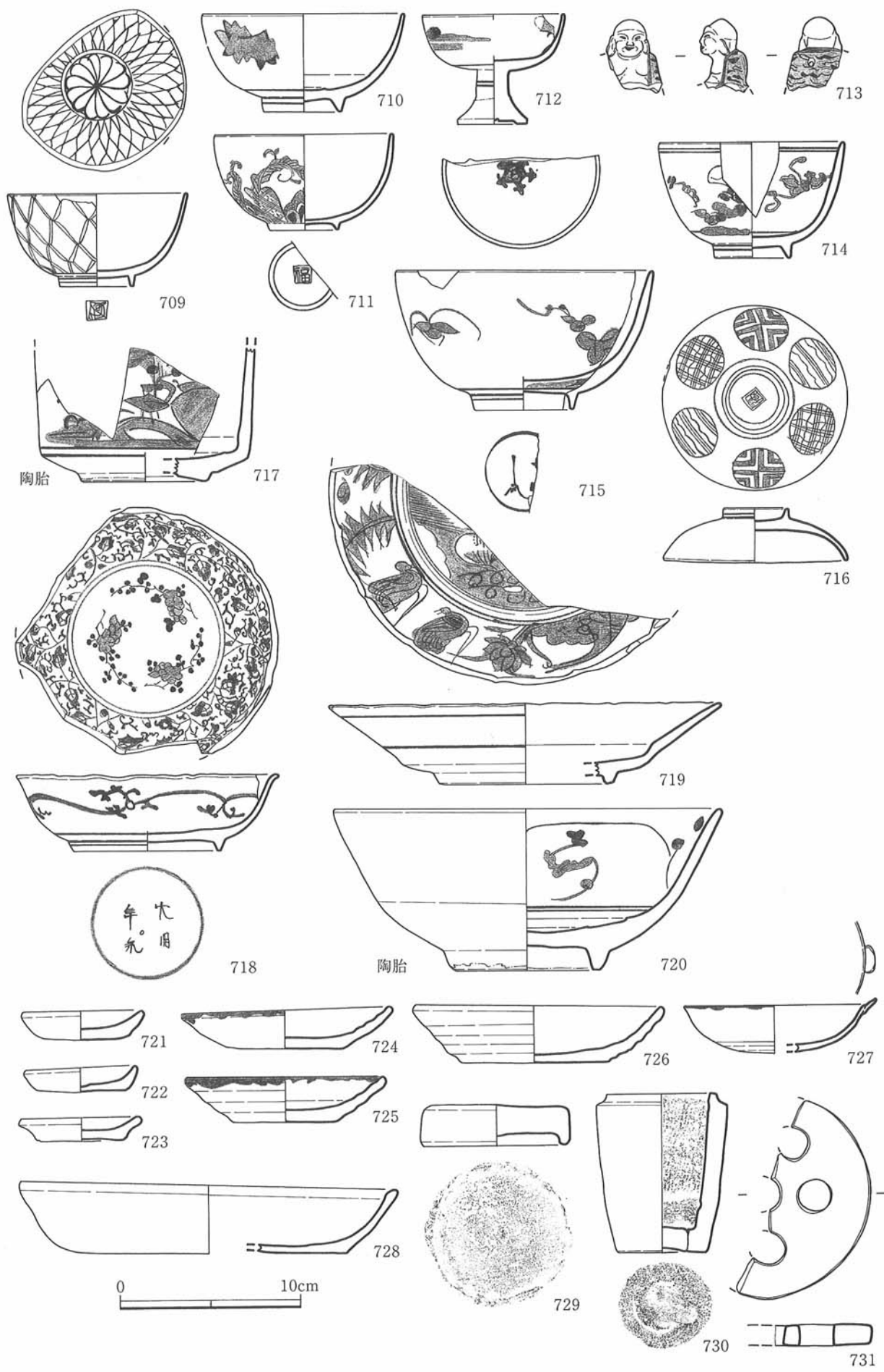
709は外面二重、内面一重網目文の碗で、方形枠に渦福を記す。710は染付の碗。蛇の目釉剥ぎにコンニャク印判を施す。711は方形枠に「福」字を持つ。717は陶胎染付の香炉（火入れ）。713は色絵の人物水滴。715は大型の碗で、コンニャク印判五弁花と「大明年製」くずし銘。716は丸文と二重方形枠に渦福を持つ蓋。718は環状の梅文に花唐草文を施す輪花皿。高台には「大明年製」銘にハリ支え痕がある。18世紀前半。719は青花皿。720は陶胎染付の鉢で蛇の目釉剥ぎ。

721～727は土師器皿。727は硬質の土師器皿で、薄い粘土を貼り付けて小さいつまみにしている。灯明皿として使用。728は在地系の焙烙。730の焼塩壺は刻印部分を欠損。731は七厘のサナである。

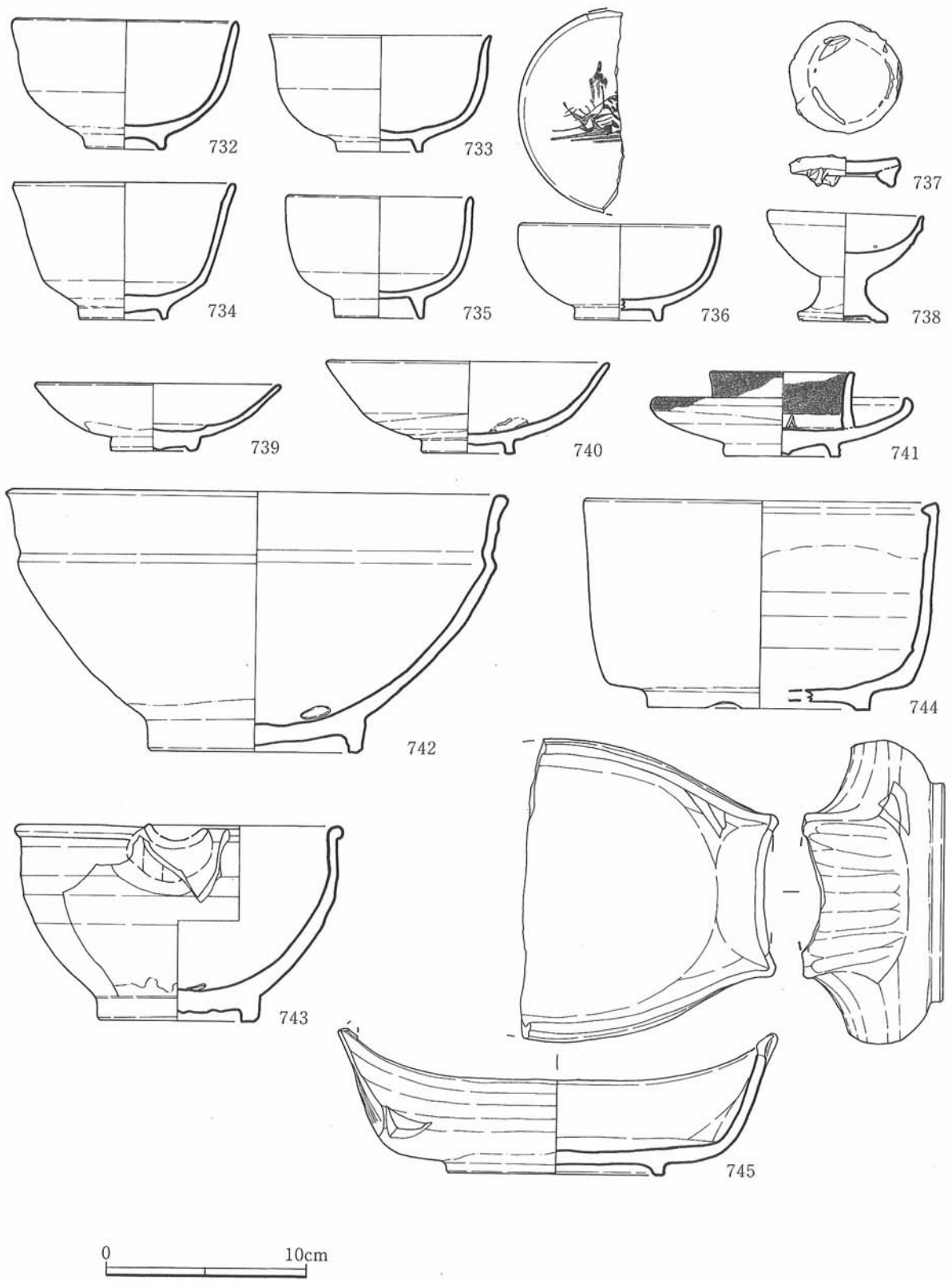
732～734は萩薬灰釉碗。736は京焼風陶器の皿で刻印はない。739は肥前の銅緑釉蛇の目釉剥ぎ皿。



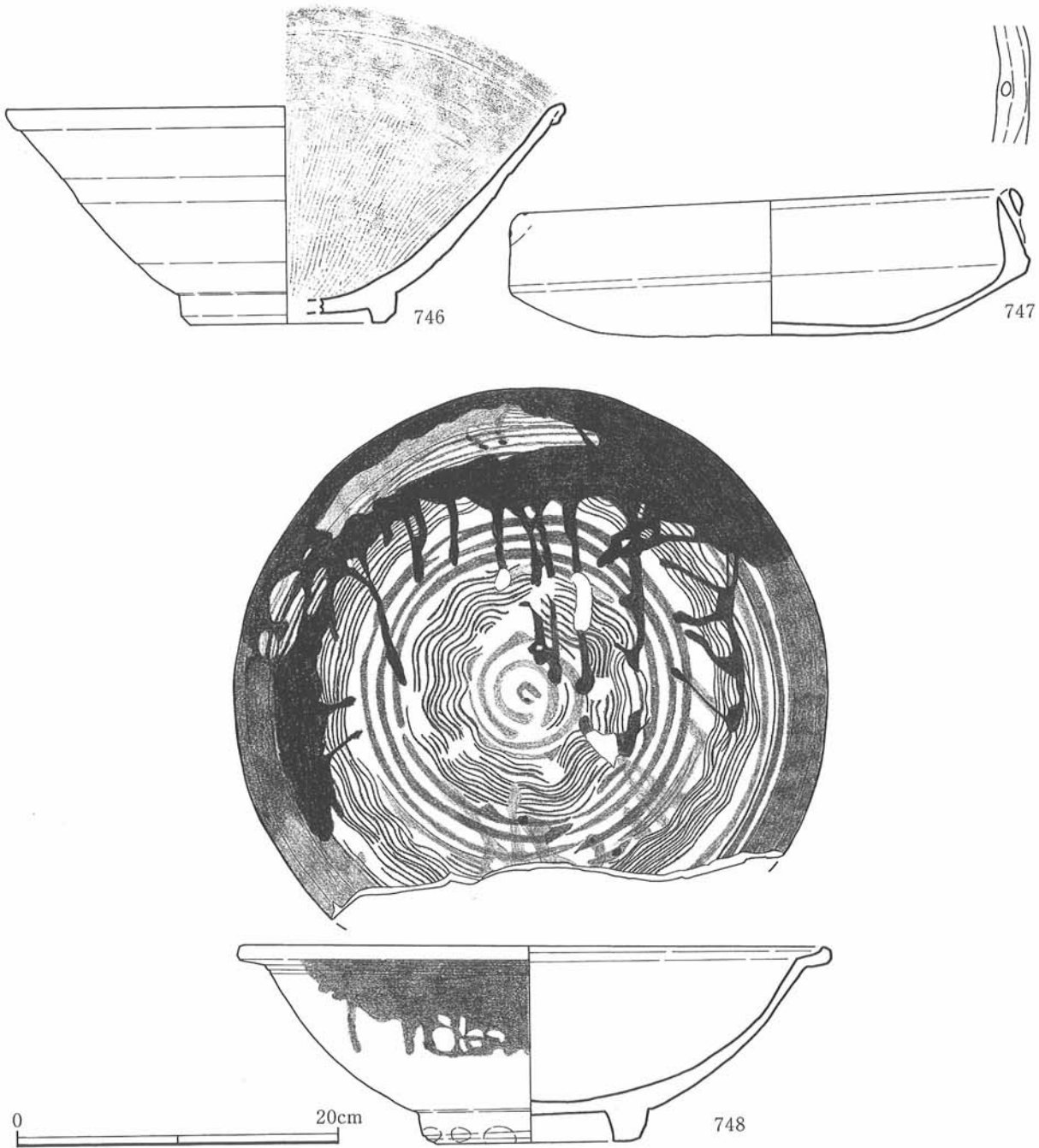
第119図 1-SK280出土遺物(1/3、1/4)



第120图 1-SK281出土遺物①(1/3)



第121図 1-SK281出土遺物②(1/3)



第122図 1-SK281出土遺物③(1/4)

肥前陶器で17世紀末から18世紀初頭か。737は窯道具の三足ハマ。740は萩土灰釉の皿で輪状の胎土目が残る。741は灰釉の灯明受皿。742は灰釉鉢で胎土目痕がある。743は灰釉片口。744は藁灰釉の香炉(火入れ)で、割高台。745は萩の菓子器で把手部を欠損する。藁灰釉。746は須佐唐津の播鉢。747は関西系の焙烙で耳部分の貼り付ける粘土が薄い。748は二彩唐津の大皿。

SK281の時期は18世紀前半とみられる。

SK306 (第123、124図 図版109～111)

749～755が磁器。756～780、786が陶器。781～785、787が土師器。

749は白磁猪口で17世紀後半～18世紀。751はコンニャク印判のある紅猪口。752は青磁香炉(火入れ)。

底部にチャツ痕がある。753、754は雨降り文の碗で、18世紀前半～中頃。755は蛇の目釉剥ぎ皿で、高台無釉。18世紀前半まで。

756～762は萩碗。763は土灰釉の小碗。765、766は呉器手碗。767～770は刷毛目碗で767以外は肥前とみられる。771は京焼風陶器で「清水」の銘がある。これらの肥前陶器は17世紀末から18世紀前半である。772は萩薬灰釉瓶。773は灰釉の蓋付きの水注。774、775は灰釉の杓形碗。碁笥底で体部に面を持つ。776～778は灰釉の鉢で、胎土目の痕跡がある。779は鉄釉で三足が付く香炉（火入れ）か。780、786の播鉢は須佐唐津、肥前のものである。いずれも内湾して体部が立ち上がる。787は土師器火消し壺。

SK306の時期は18世紀前半とみられる。

SK278（第125、126図 図版93、94）

788～791、793～801は磁器。792、802～812、820、821は陶器。813～815、817、818、819は土師器。816は瓦。

788は蛇の目釉剥ぎ碗。789は猪口。790は小杯。791は白磁仏飯器。792は陶胎染付の香炉（火入れ）。794は蛇の目釉剥ぎの皿で高台無釉。793は青磁香炉（火入れ）。796は見込に山水文、体部内面に型作りで陽出文があり、高台に二重方形枠に渦福の銘がある。797は見込中央が無文で、ハリ支えのある皿。17世紀末～18世紀初頭。798はコンニャク印判五弁花の輪花皿。799は掛け花生け。800は合子の蓋。801は紅猪口。

802～804は萩薬灰釉碗。806は呉器手碗。807は刷毛目碗。809は須佐唐津の灰釉皿で、灯明皿として使用。808は鉄釉香炉（火入れ）。810は黒釉蓋。811は薬灰釉に鉄釉をかけた瓶。812は灰釉杓形碗。碁笥底で胎土目の痕跡がある。

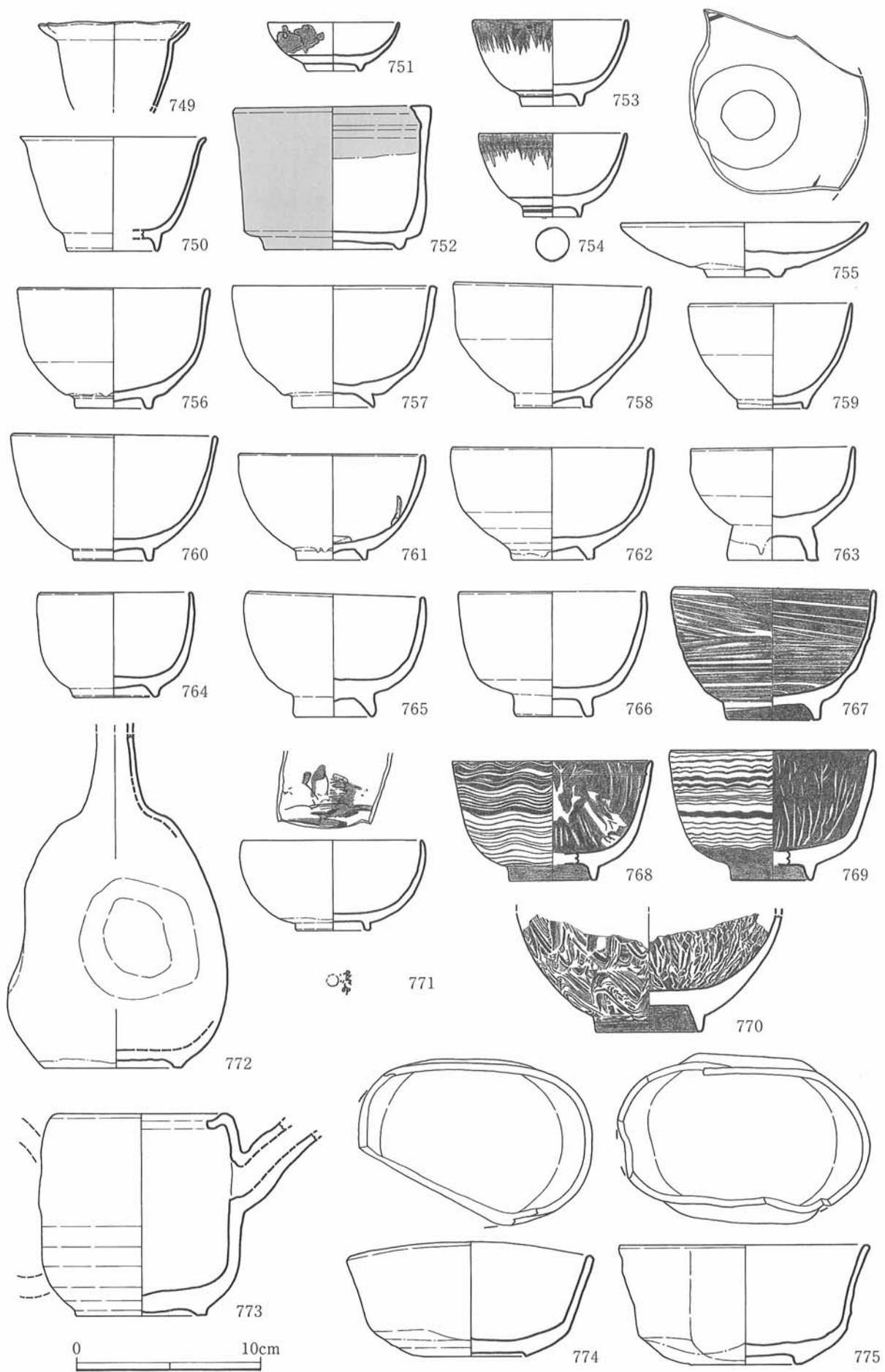
813～815は土師器皿。815は底面に「×」の墨書がある。817は「泉州磨生」、818は「三門津吉磨」銘とみられる焼塩壺で、これらの焼塩壺は出土点数が少ない。いずれも18世紀前半とみられる。819は関西系の焙烙で、耳部は薄く粘土を貼り付け孔を穿つ。820、821は須佐唐津の播鉢で、体部は外傾して立ち上がる。

SK278は17世紀末～18世紀前半とみられる。

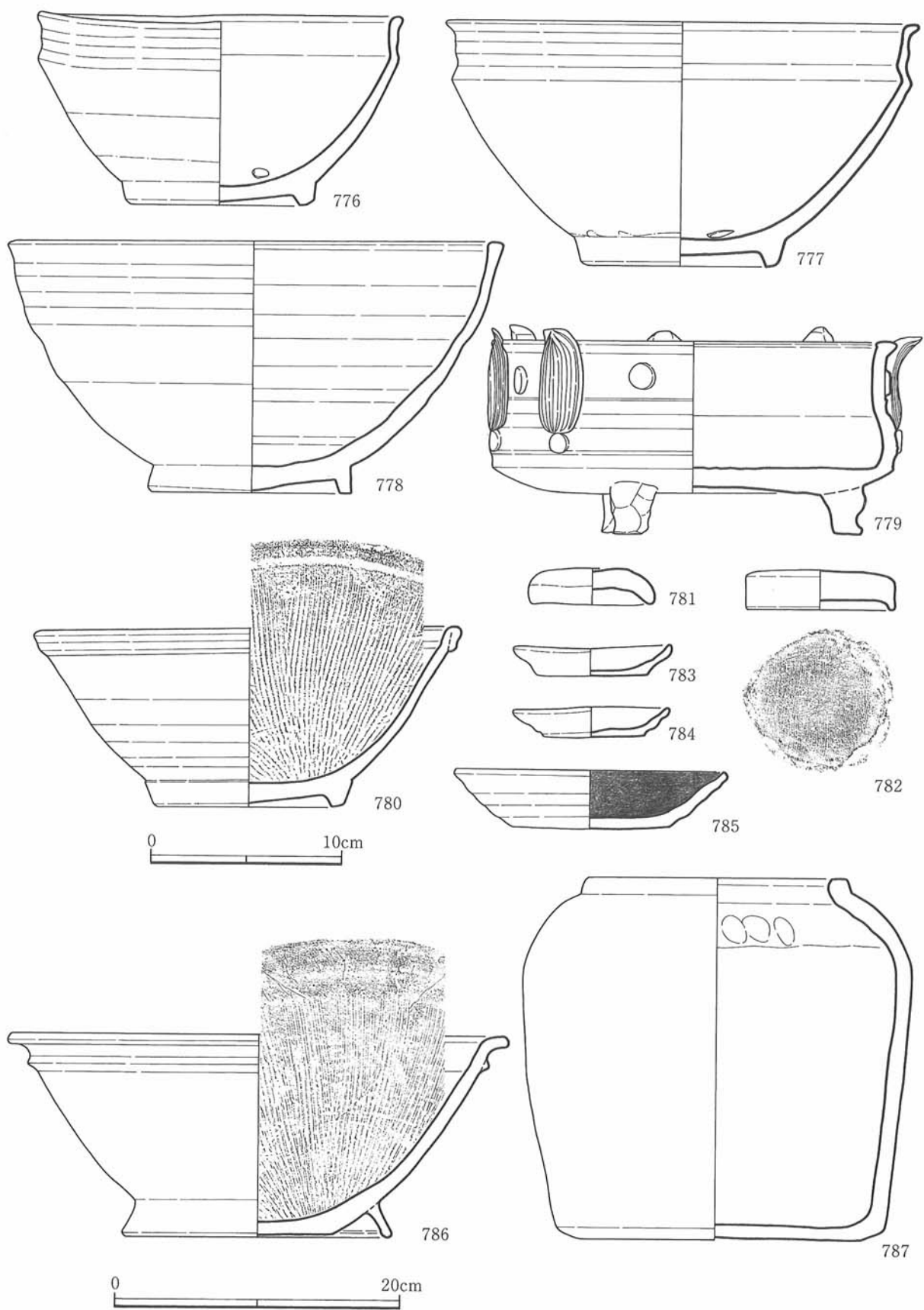
SK277（第127～136図 図版83～92）

822～889のうち838、887は陶胎染付。他は磁器で、890～928、930～962、979は陶器。963～978、980～1003、1007～1012は土師器。929、1004～1006、1014～1016は土製品。1007、1009は瓦質土器である。

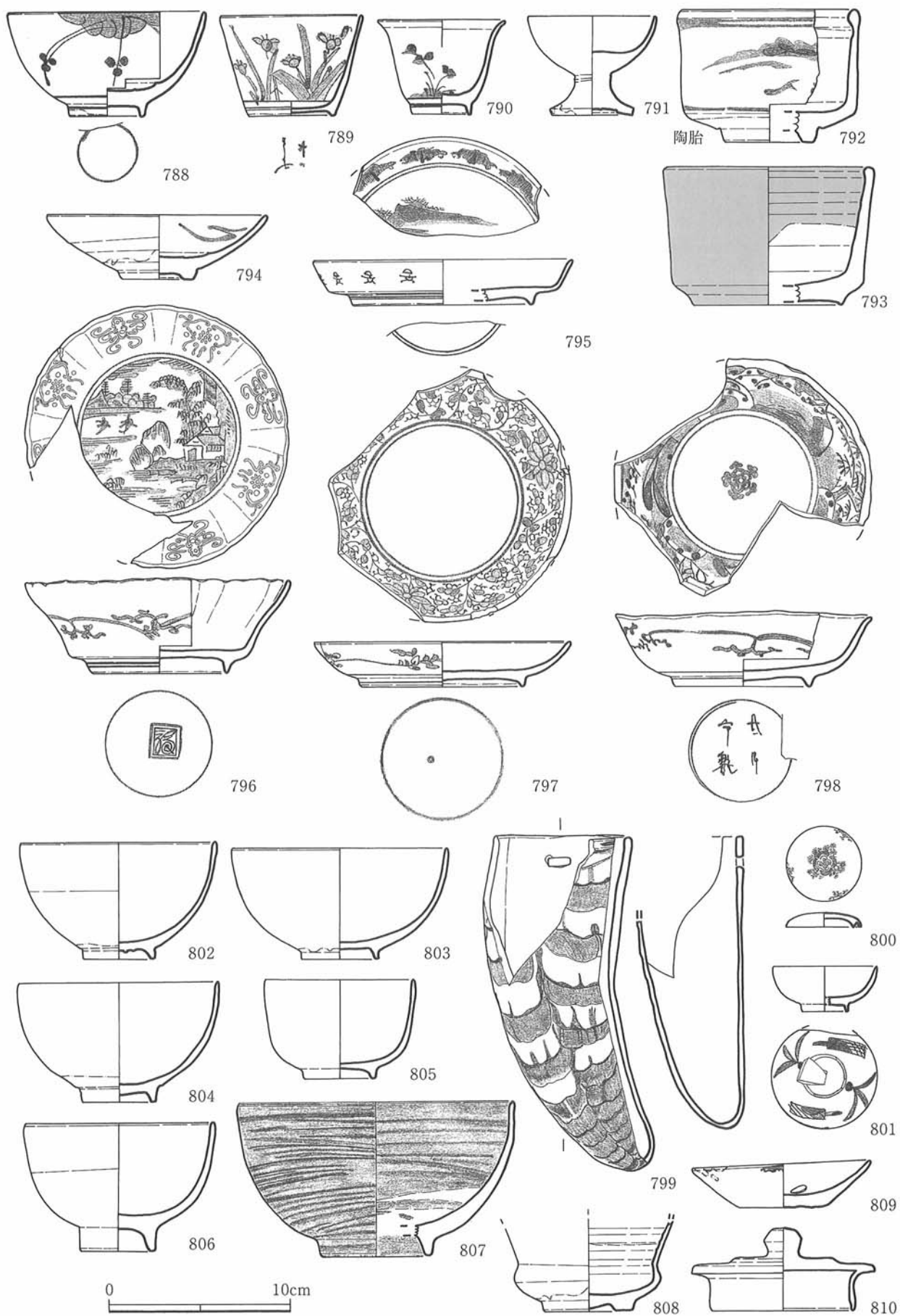
822～827はコンニャク印判や雪輪文、梅樹文の碗。828は金彩で文字が記される。829は型紙摺りを施す碗。830～833は白磁碗。834は半球状の碗。835～837は大型の碗。このうち835は蛇の目釉剥ぎ。838は陶胎染付碗。839はうがい茶碗。840、841、843は小杯。843は、五弁花と二重方形枠に渦福を有する。844は猪口で「大明年製」くずしの銘がある。842、846は紅猪口。845は青磁猪口。847、851は小杯。848～850は猪口。850は高台に「富」銘を持つ。852～854は仏飯器。855～858は紅皿。861、862は格子目文の蛇の目釉剥ぎ皿で、高台無釉。863は五弁花に「大明年製」くずし銘がある。864、865は墨弾きで、渦福と「大明年製」くずし銘がある。866は桃を見込に描き二重方形枠に渦福のある輪花皿。867、868はコンニャク五弁花に「大明年製」銘を持つ。869は蛇ノ目凹形高台の輪花皿で二重



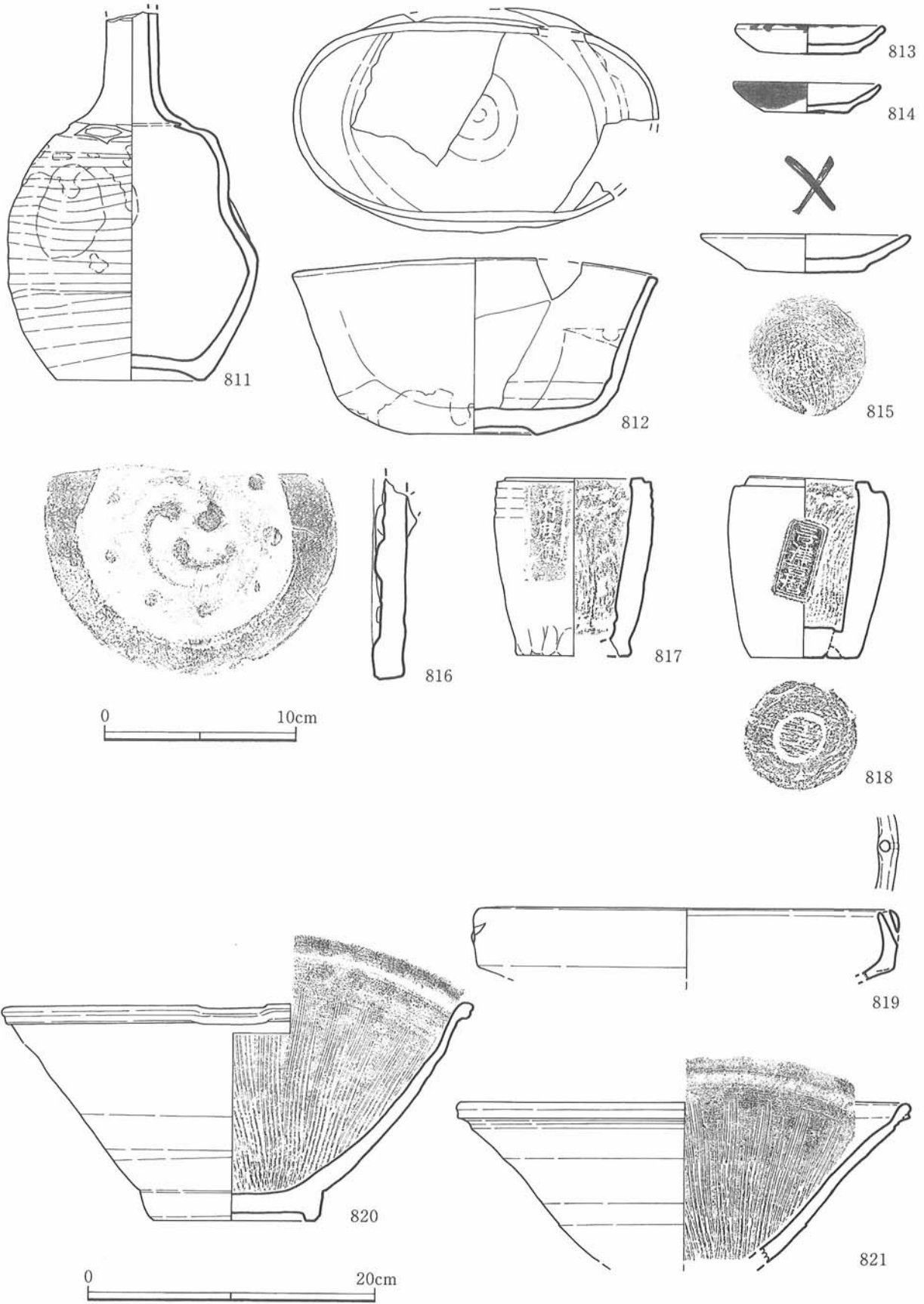
第123图 1-SK306出土遺物①(1/3)



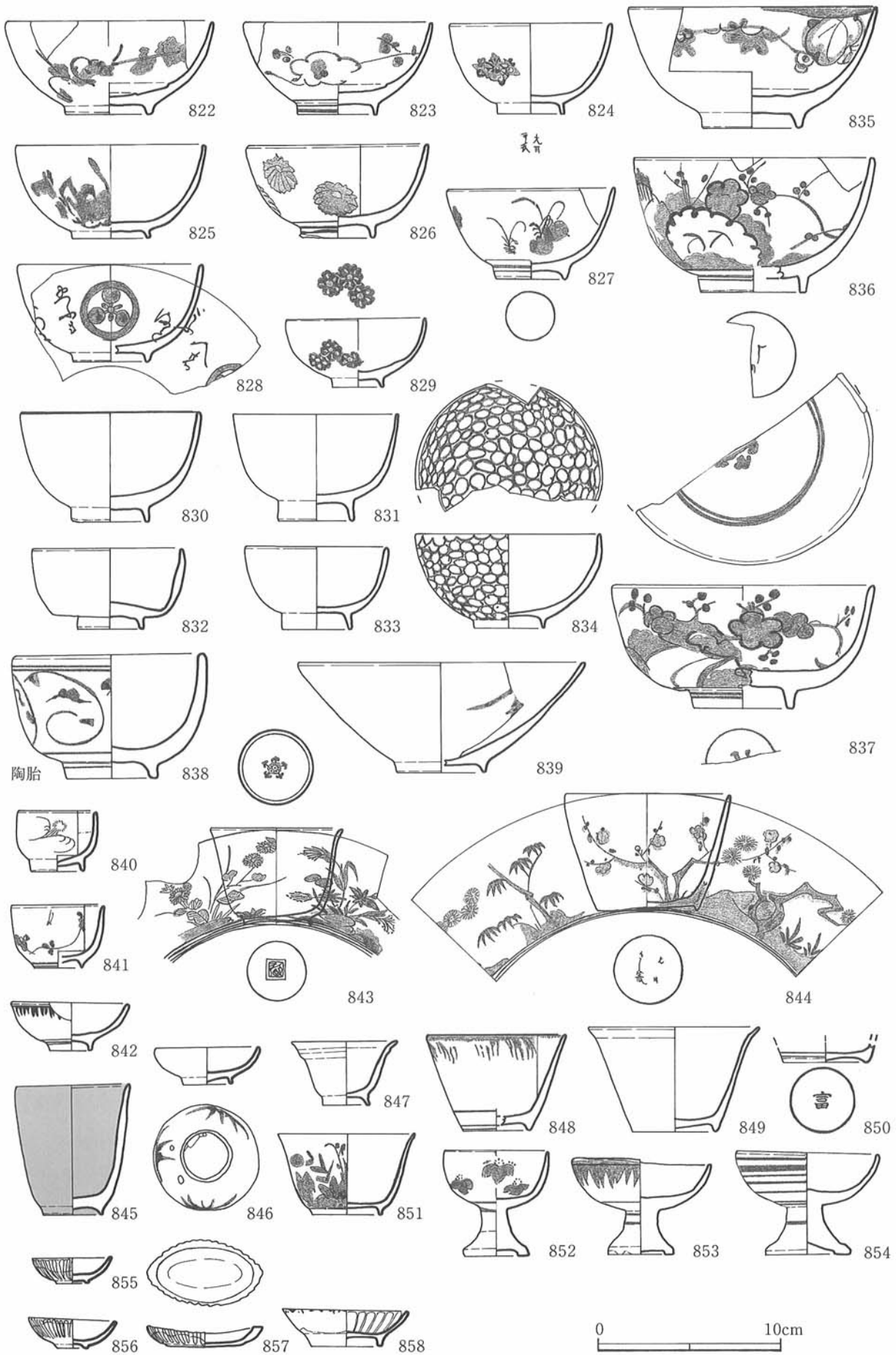
第124図 1-SK306出土遺物②(1/3、1/4)



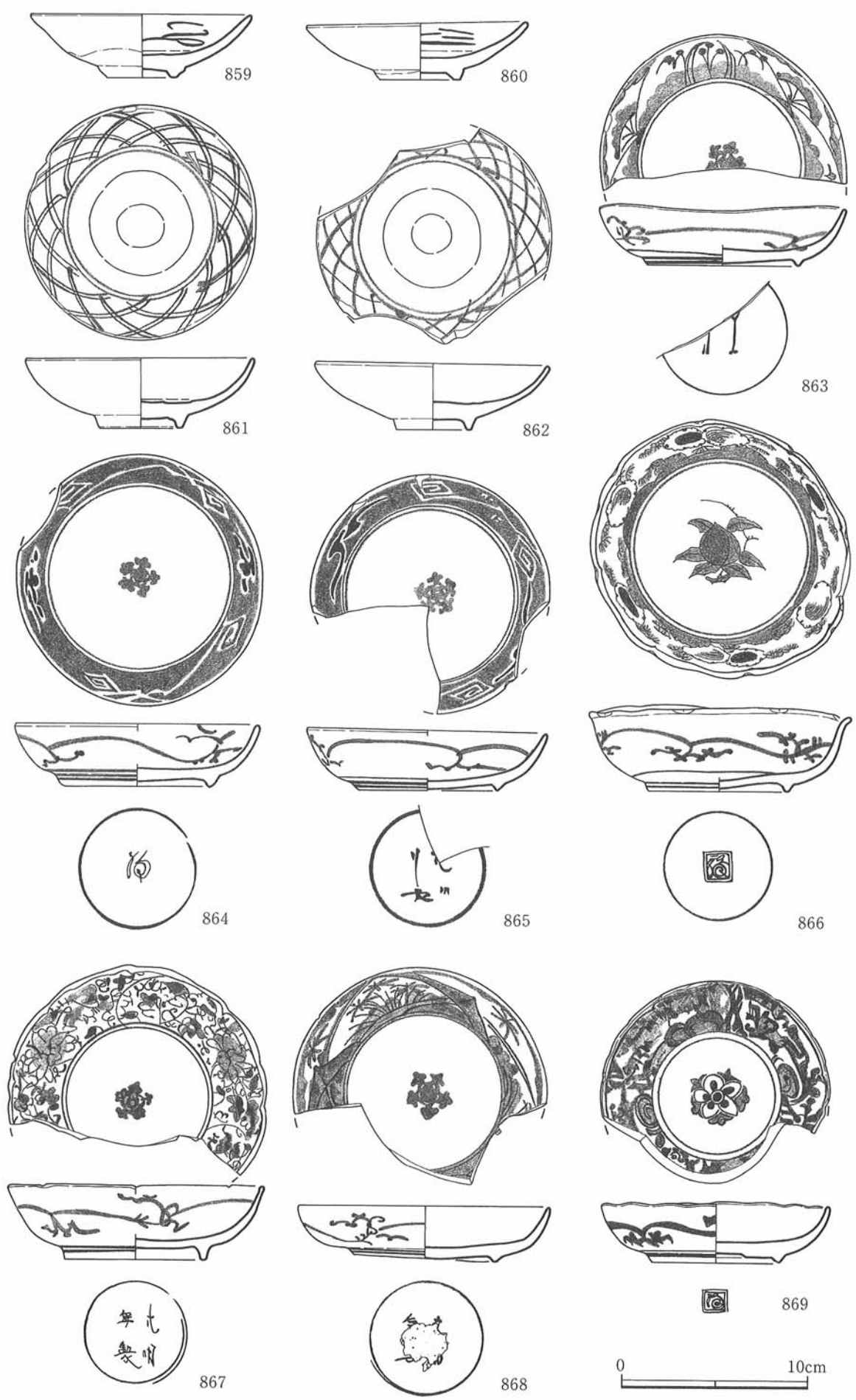
第125图 1-SK278出土遺物①(1/3)



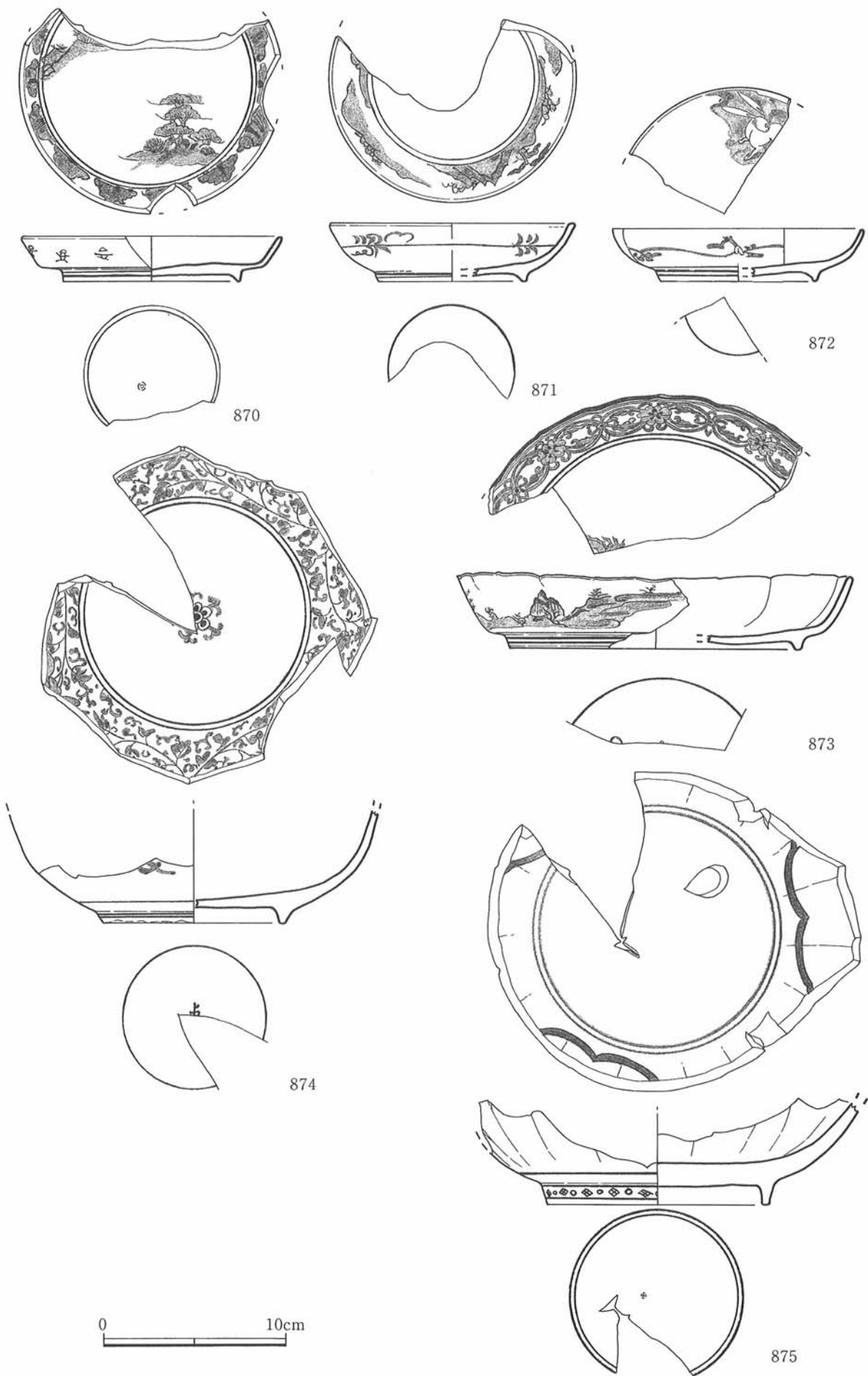
第126图 1-SK278出土遺物②(1/3、1/4)



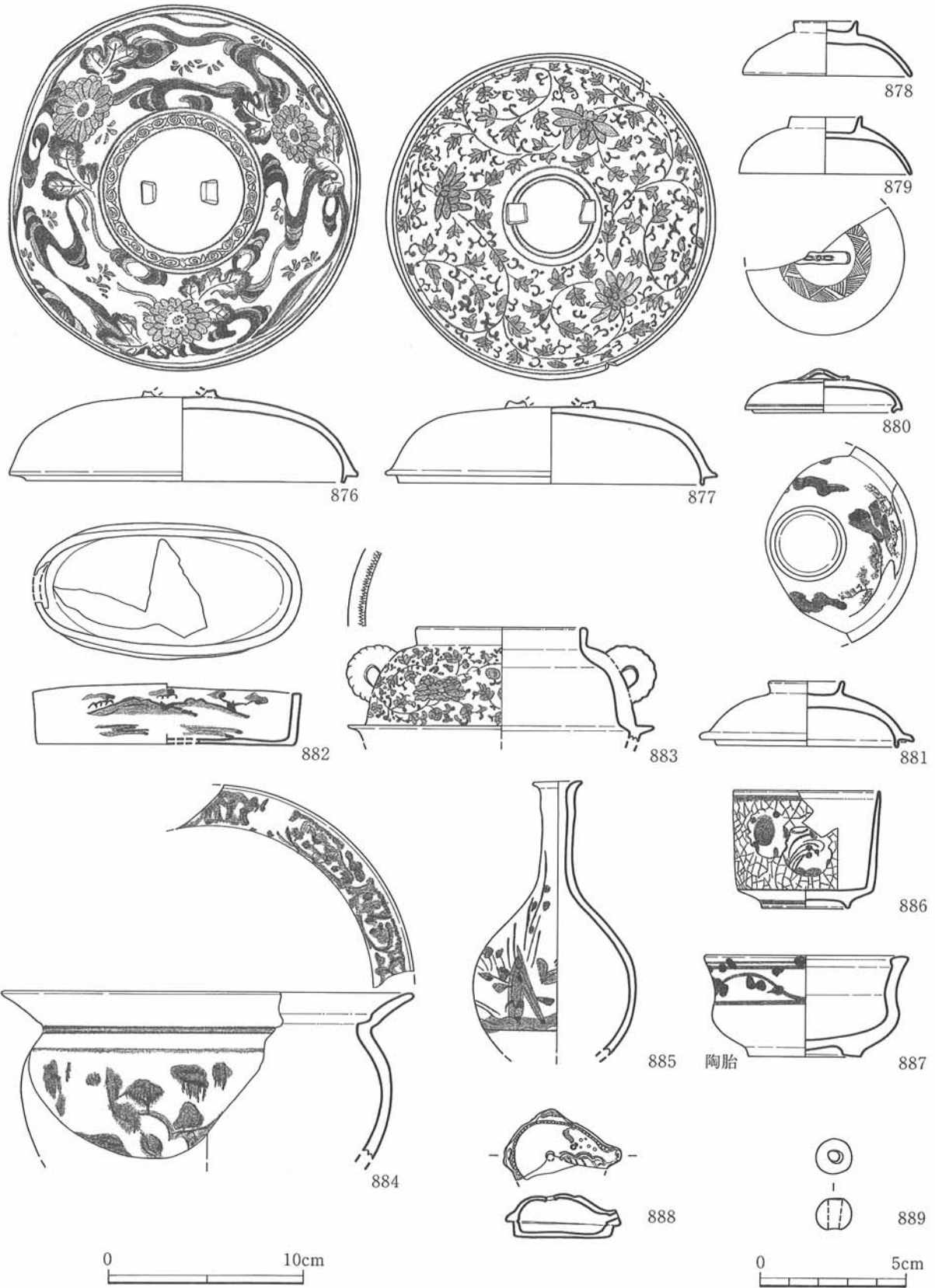
第127图 1-SK277出土遺物①(1/3)



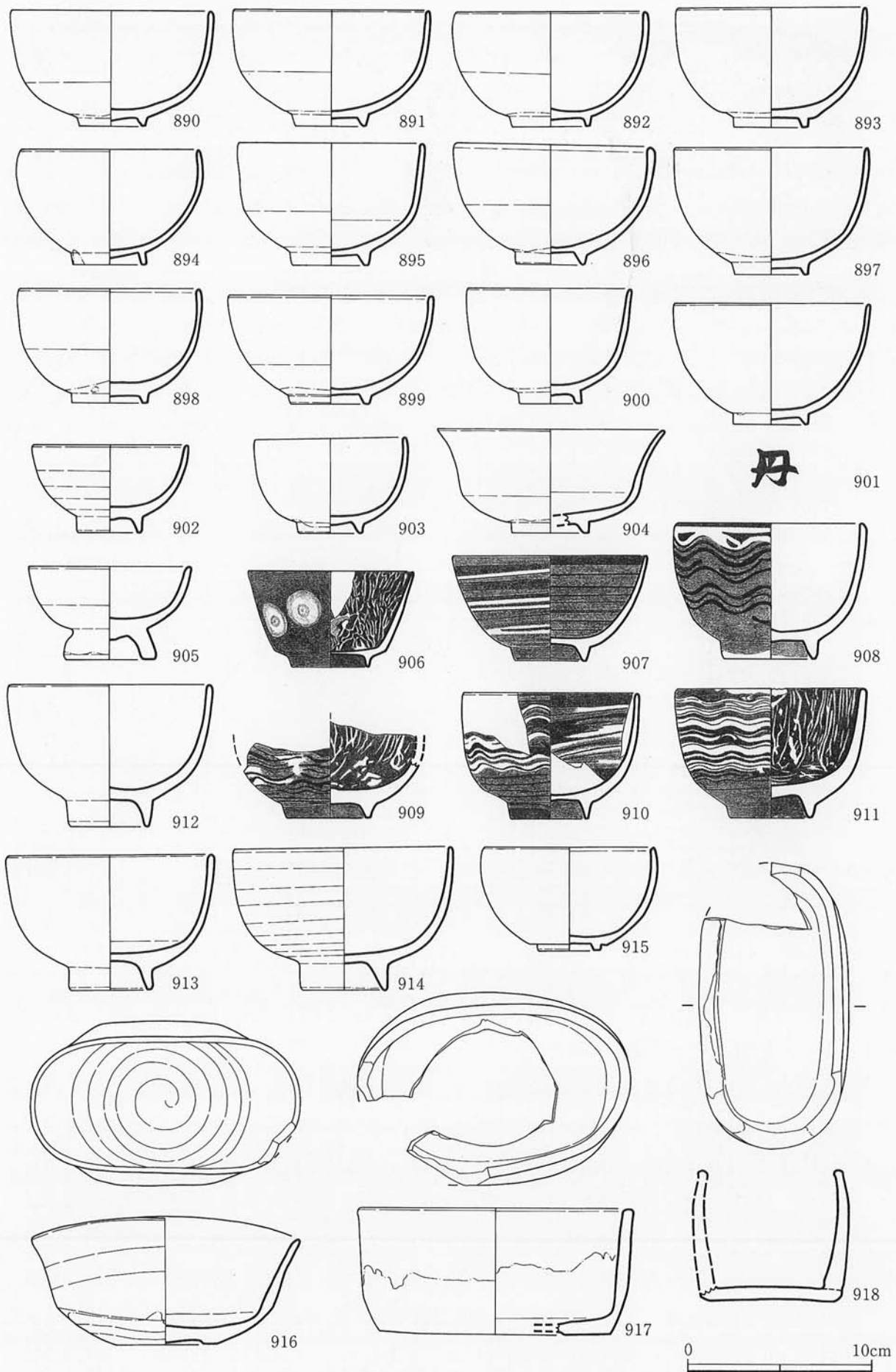
第128图 1-SK277出土遺物②(1/3)



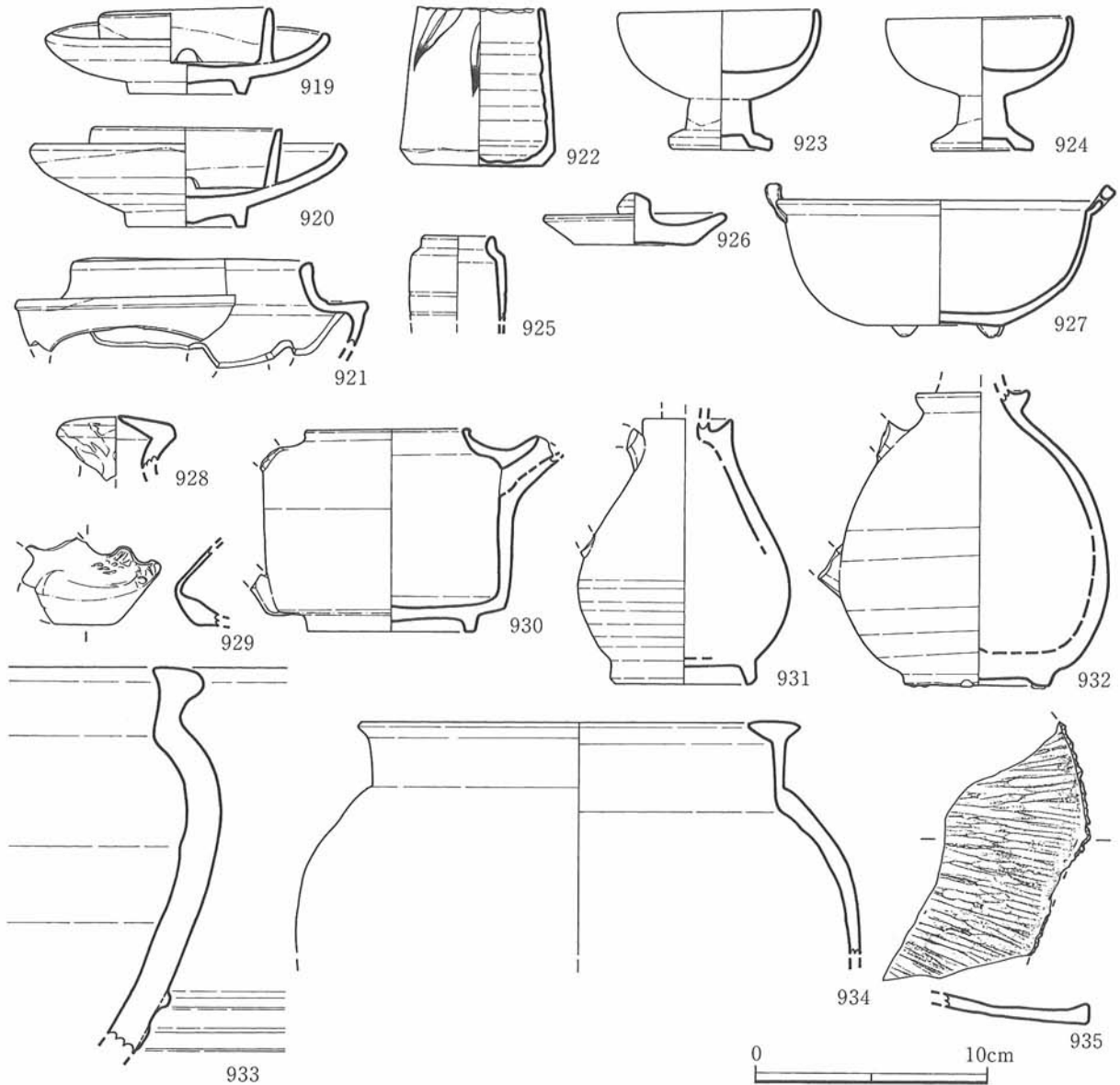
第129図 1-SK277出土遺物③(1/3)



第130图 1-SK277出土遺物④(1/2、1/3)



第131图 1-SK277出土遺物⑤(1/3)

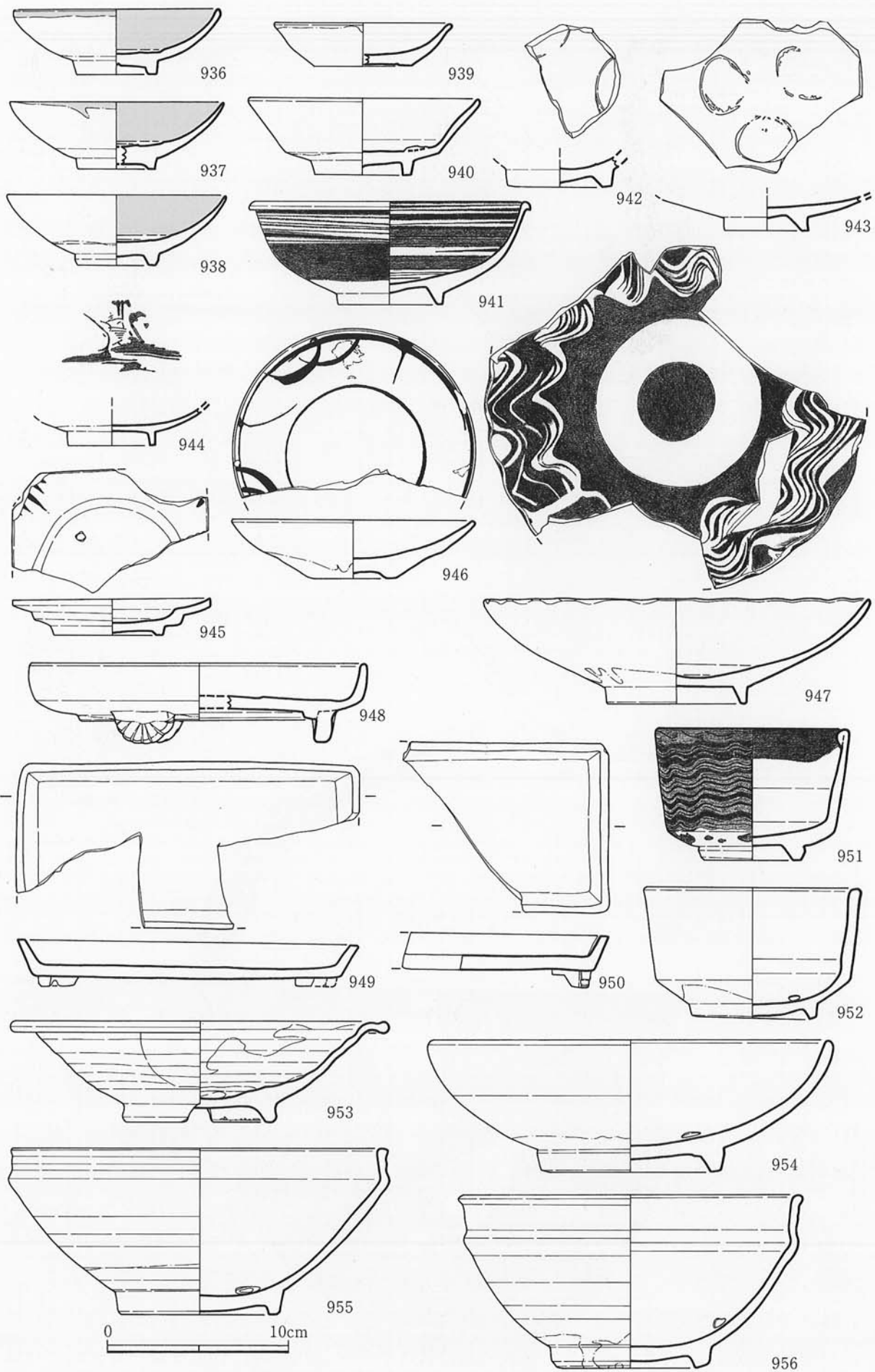


第132図 1-SK277出土遺物⑥(1/3)

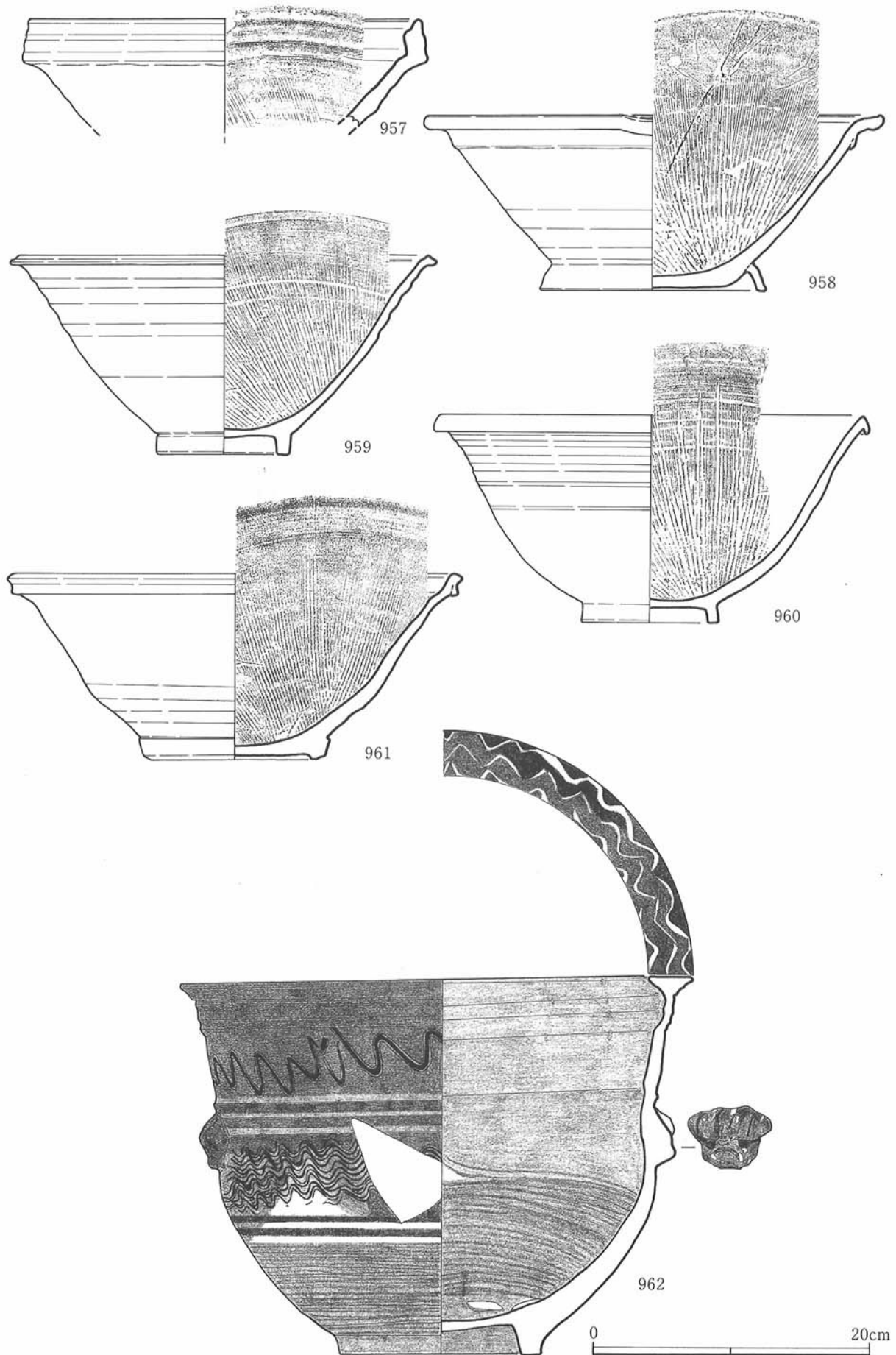
方形枠に渦福。18世紀中頃。874は五弁花に花唐草文の鉢。875は輪花皿でハリ支え痕がある。876～881は蓋。882は鬢水入れ。883は茶釜。886は蓋物で雪輪氷裂文。884は蓋付鉢。885は瓶。887は陶胎染付の香炉（火入れ）。889は青磁の緒締め。

890～901、903、904は萩碗で藁灰釉を施釉する。902は灰釉碗。906～911は刷毛目碗。912～914は呉器手碗。915は黒釉碗。916、917は灰釉の杏形碗。918は藁灰釉の鬢水入れ。919、920は灯明受皿で、919は藁灰釉か。920は灰釉。921は風炉か。922は上絵付けをした京信楽系の灰落とし。925は茶入れ。923、924は仏飯器。929は灰釉の蓋。927は鉄釉の土鍋。928は鉄釉のつまみ部。929は鳥形の緑釉水滴。930は灰釉の水注。931、932は鉄釉、灰釉の油徳利。932は畳付けに輪状の胎土目が認められる。933は体部下半に突帯をもつ甕。934は肥前の格子叩きのある甕。935は縁部に刻み目のある板状の製品。

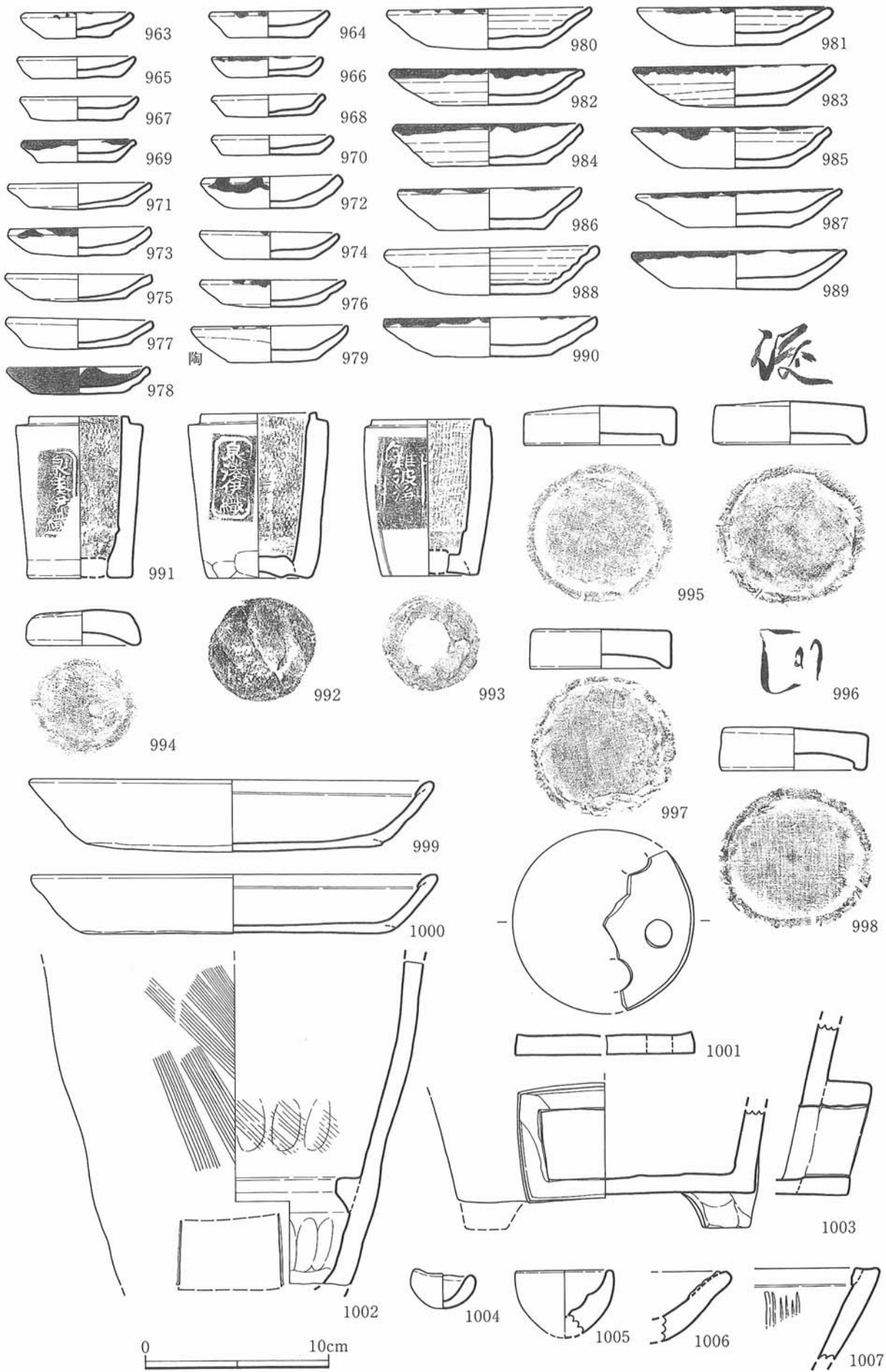
936～938は銅緑釉の蛇の目釉剥ぎ皿。939、940は灰釉の皿で、940には胎土目あり。941は刷毛目のある鉢で、萩か。942は萩土灰釉の貝目皿。943は萩貝目皿で、刷毛目状に白泥を掃いている。944は



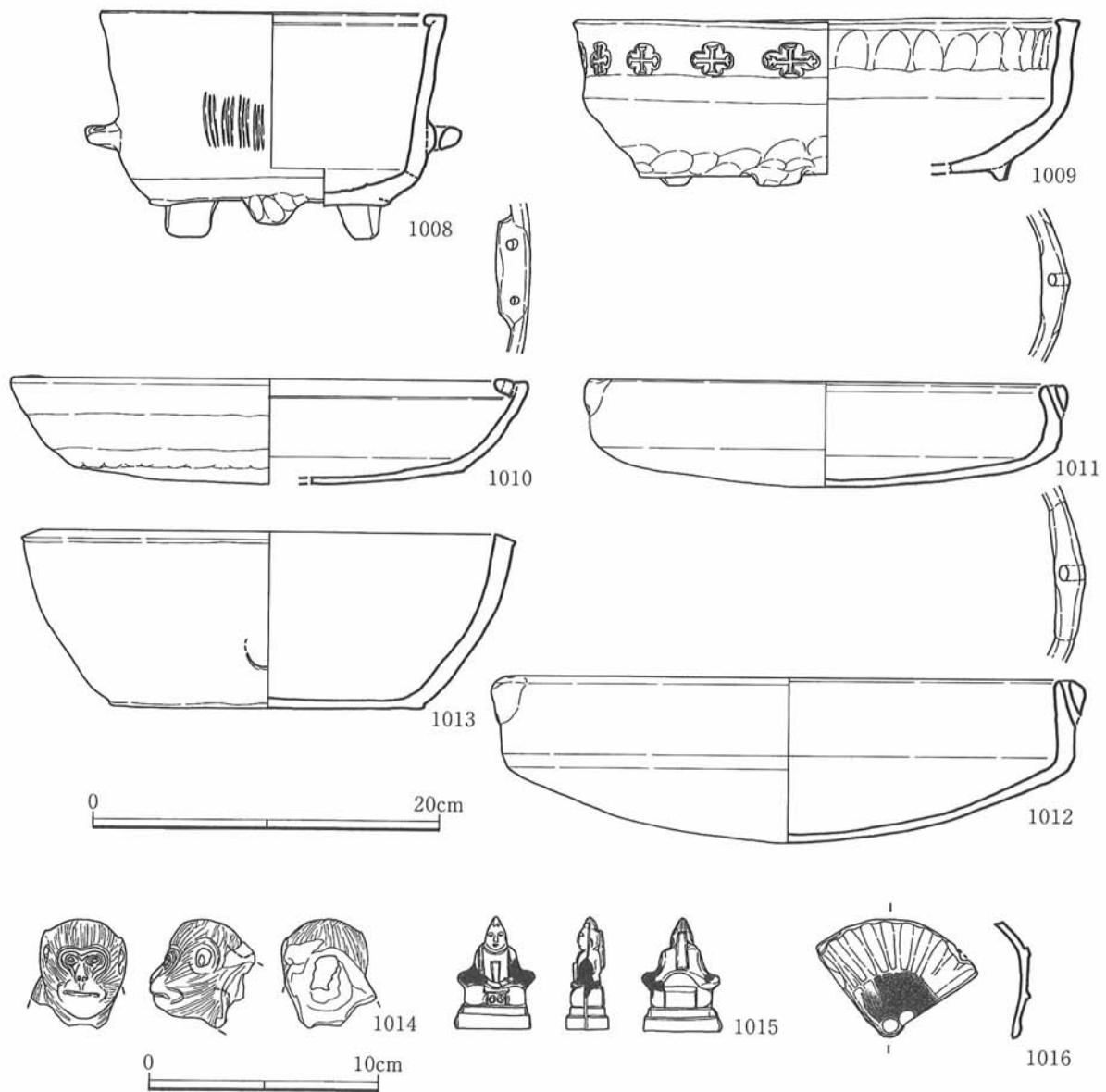
第133图 1-SK277出土遺物⑦(1/3)



第134图 1-SK277出土遺物⑧(1/4)



第135图 1-SK277出土遺物⑨(1/3)



第136図 1-SK277出土遺物⑩(1/3、1/4)

京焼風陶器皿で刻印はない。945は瀬戸美濃系の方形皿。ハマ痕がある。946は唐津灰釉皿。高台との境が不明瞭である。947は蛇の目釉剥ぎの刷毛目皿。948は藁灰釉の三足皿。949は灰釉皿。951は刷毛目香炉（火入れ）。952は透明釉の腰折れ形の碗で、胎土目の痕跡あり。953は土灰釉に藁灰釉を掛け流す鉢。割高台。954は胎土目の灰釉鉢。955、956は灰釉の鉢。胎土目の痕跡がある。957～961は播鉢で、957は備前、958は肥前。959、960は短く折り返した口縁部の播鉢で、萩の製品とみられる。961は須佐唐津。962は二彩唐津の鉢。櫛目装飾と二方につまみがある。

963～990は土師器皿で、口径から6～7cm、7～8cm、10～11cmの3種類に分類できる。991～998は焼塩壺。991、992は「泉湊伊織」銘、993は「難波浄因」銘のもの。994～998は蓋。996は外面に「従」、内面に「回」の墨書がある。999、1000は在地系の焙烙で把手部を欠損する。1010は口縁内側に2穴の内耳を有し、1011、1012は関西系の焙烙で、粘土で肥厚させそこに穿孔する。1001は七厘のサナ。1002、1003は七厘。1004～1006は坩堝で大きさに差がある。1007は内面に肥厚させる口縁部の瓦質土

器播鉢。1008は三足の火鉢で把手を有し、口縁部は内に肥厚させる。1009は三足の火鉢で外面に十字のスタンプを押す。1013は鉢。体部に焼成後穿孔がある。

1014は鉄釉をかけた猿の頭部。1015は土人形の天神。1016はままごと道具とみられる扇のミニチュアで、両者は一部に緑釉をかける。

SK277は大量の遺物が出土した廃棄土坑で、遺物の時期からみると17世紀末から18世紀後半であるが、肥前陶器、焼塩壺から18世紀中頃までが遺構の中心時期と考える。

SK293 (第137～149図 図版98～108)

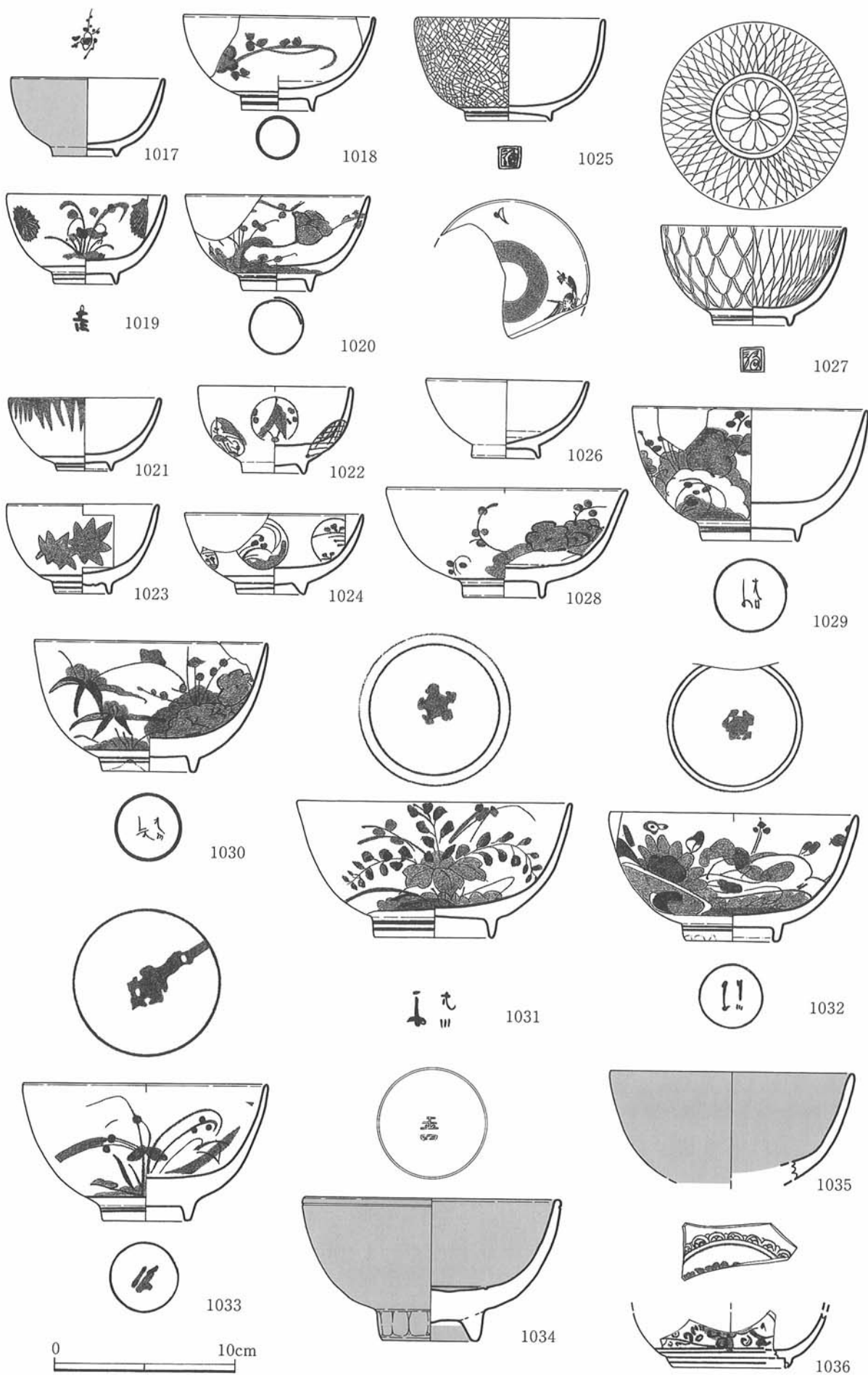
1017～1084は磁器。1085～1143、1199、1205は陶器。1144～1195、1197～1204は土器。1196は瓦。

1017は外面青磁で見込に折枝文。1018～1020は草花文、梅樹文の碗。1021は雨降り文、1023はコンニャク印判。1022、1024は丸文を施す厚手の碗。1026は内面に蛇の目釉剥ぎをし、そこを含めて色絵を施す。1027は外面二重網目文、内面一重網目文で二重方形枠内に渦福を有す。1030～1033は大型の碗。草花文、雪輪文などを施す。内面にはコンニャク印判五弁花、底面には「大明年製」くずし銘がある。1034、1035は輸入青磁の碗で同一個体。1034は口縁部に1条の沈線と、見込には圈線と「金□」の二文字を陽出する。高台は面を持つ。1036は青花碗。

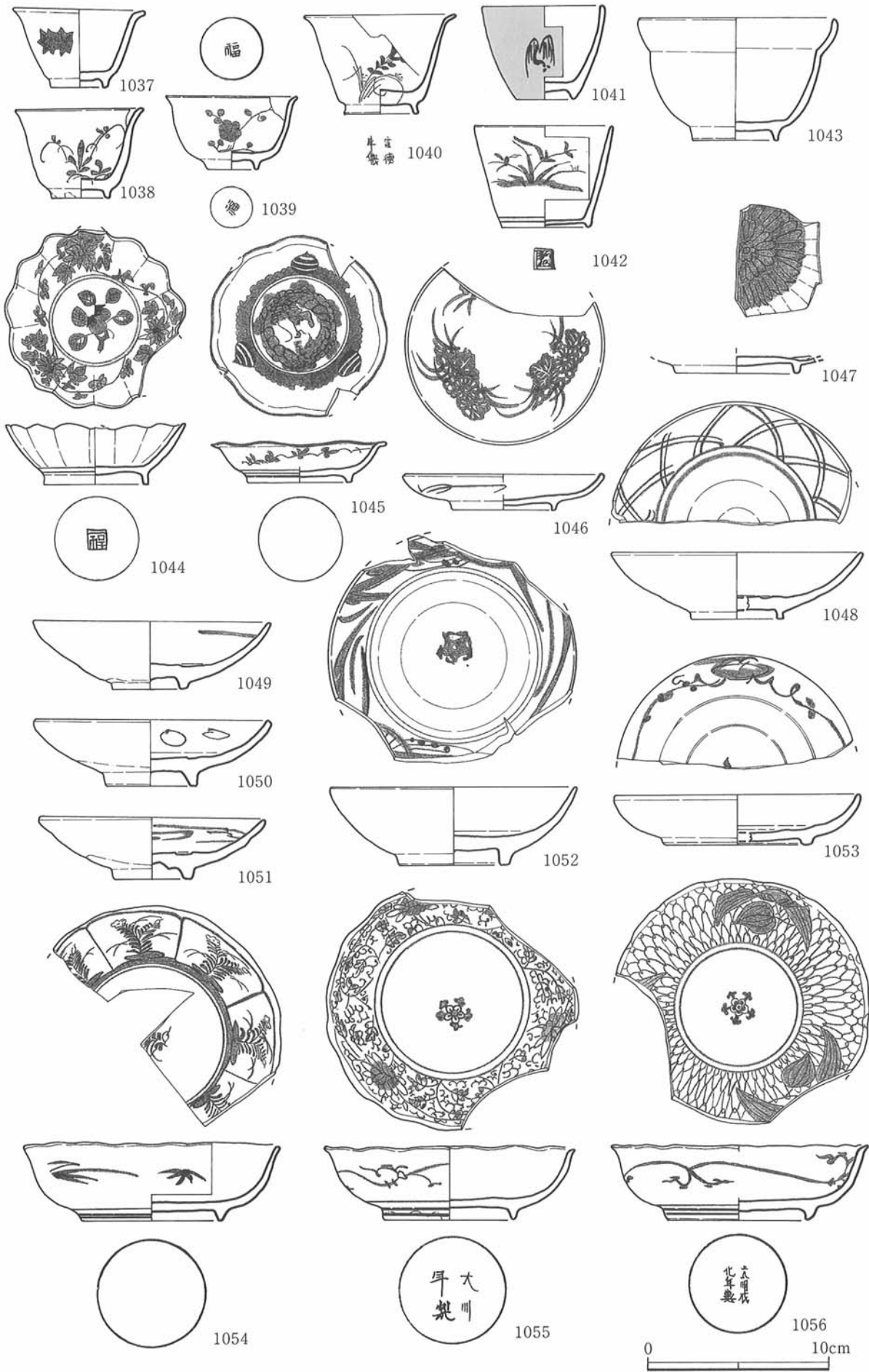
1037、1039は小杯。1040～1043は猪口。1041は青磁に柳文。1044、1045は小型の輪花皿。1044は一重方形枠に「福」字。1045は団竜文、1046は草花の型紙摺り。1047は青花皿。1048～1053は蛇ノ目釉剥ぎ皿。1048は格子文で高台施釉。1052はコンニャク印判五弁花。1054～1056は輪花皿。1055、1056は見込に五弁花、高台内に「大明年製」「大明成化年製」を記す。1057は色絵の蛇の目釉剥ぎ皿。1058は型打ちの輪花深皿で、見込に山水文と体部内面に陽出文。1059は五弁花を記す。1058、1059は二重枠内に渦福。1060は折縁形の皿で、「富貴長春」にハリ支えの痕跡あり。1061はコンニャク印判五弁花。1062は糸切り成形、高台貼り付けの皿。「元」字を記す。1063は半筒形の蓋物。1064は段重。1065、1066は仏飯器。1067は仏花瓶。1068は小型の蓋。1069は瓶。1070は白磁の皿。1071は紅皿。1072は外面鉄釉で掻き落として施文。1073は「朱」扁に「米」減画の旁をあわせた銘を持つ。1074は鉢。1075、1076は皿。1077は大皿。見込に山水文、高台内に三箇所ハリ支え。1078は白磁香炉（火入れ）。1079は三足の青磁香炉。底部に鉄泥を塗布。1080～1084は染付、鉄釉、色絵による鳥形、舟形、太鼓形などの水滴。

1085、1086は肥前銅緑釉の蛇の目釉剥ぎ皿。1087、1088は須佐唐津の胎土目のある灰釉皿。1089、1091は京焼風陶器。器形は碗であるが、見込に楼閣山水文を施すことから皿の可能性もある。1089は呉須絵、1091は呉須と色上絵付けによる。1090は肥前刷毛目皿。1092、1093は蛇の目釉剥ぎ皿。1092は鉄絵、1093は緑釉と鉄釉の掛け分け。1094は萩の貝目痕のある鉢。1095は肥前三島手の皿。1096～1105、1107は萩藁灰釉の碗。1106は土灰釉。1108は小碗、1109は猪口でいずれも灰釉を施釉。1110、1111は灰釉の杓形碗。底部は碁笥底。1112～1118は肥前陶器。1112～1115は刷毛目碗で、1114、1115は螢手といわれるもの。1116、1118は京焼風陶器碗。1118は高台部に鉄泥を塗布。1119は鉄釉。1120は京信楽系とみられる碗。

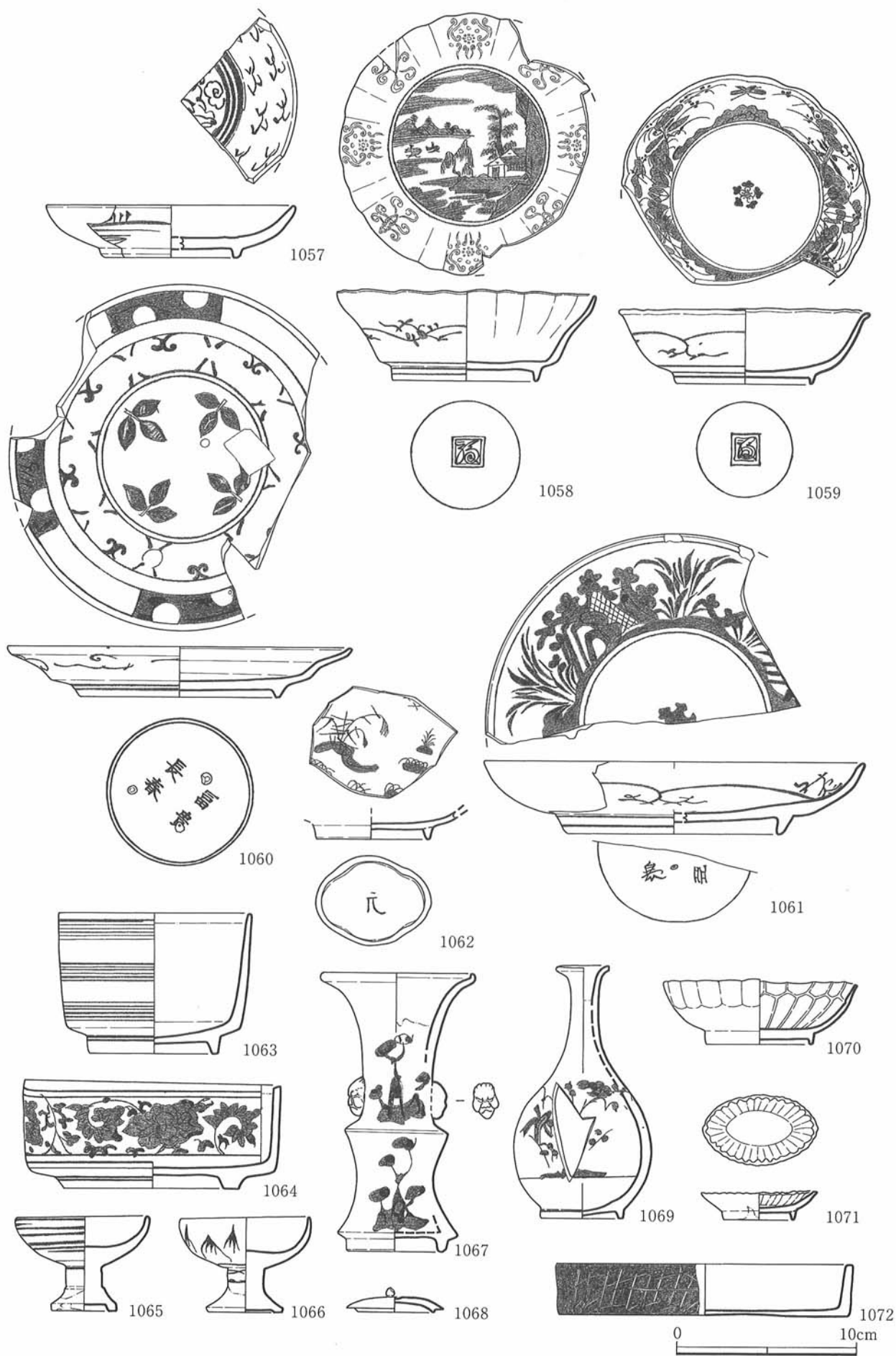
1121～1123は香炉（火入れ）。1121は胎土目が残る灰釉の製品で、1122は刷毛目、1123は瀬戸美濃の型紙摺り花文。1124は灰釉瓶。1125は灰釉蓋でつまみ貼り付け。内面に墨書あり。1126、1127は京



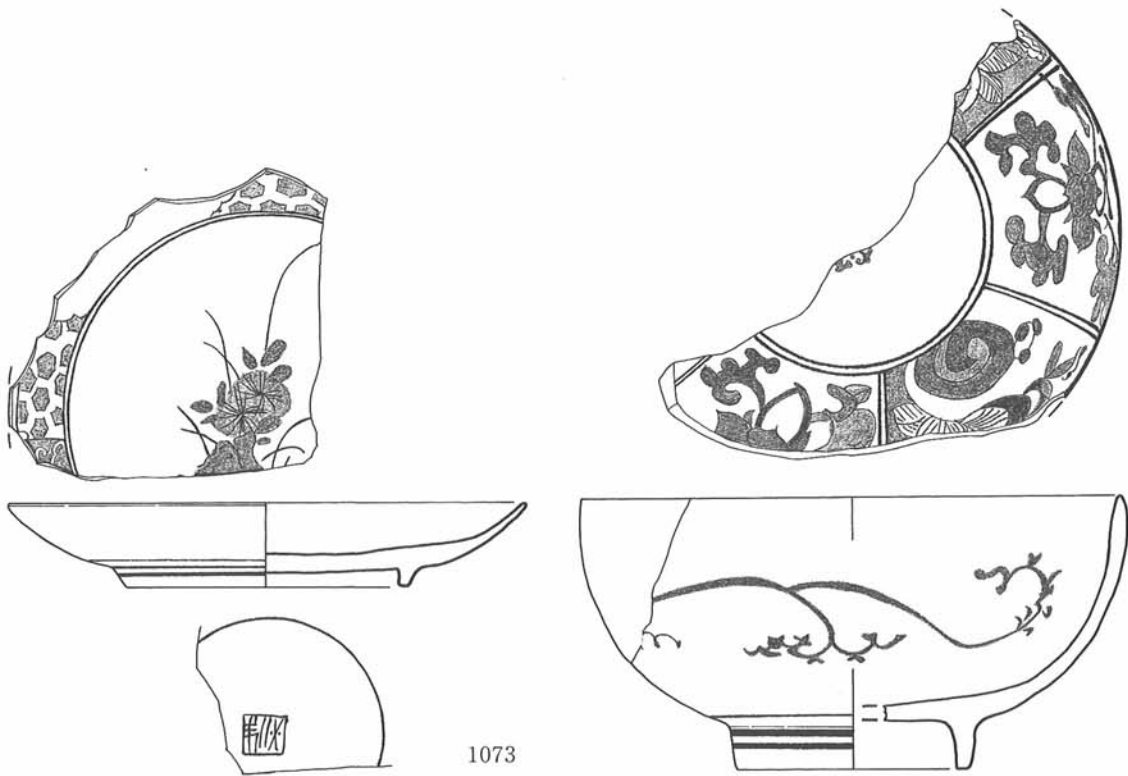
第137图 1-SK293出土遺物①(1/3)



第138图 1-SK293出土遺物②(1/3)

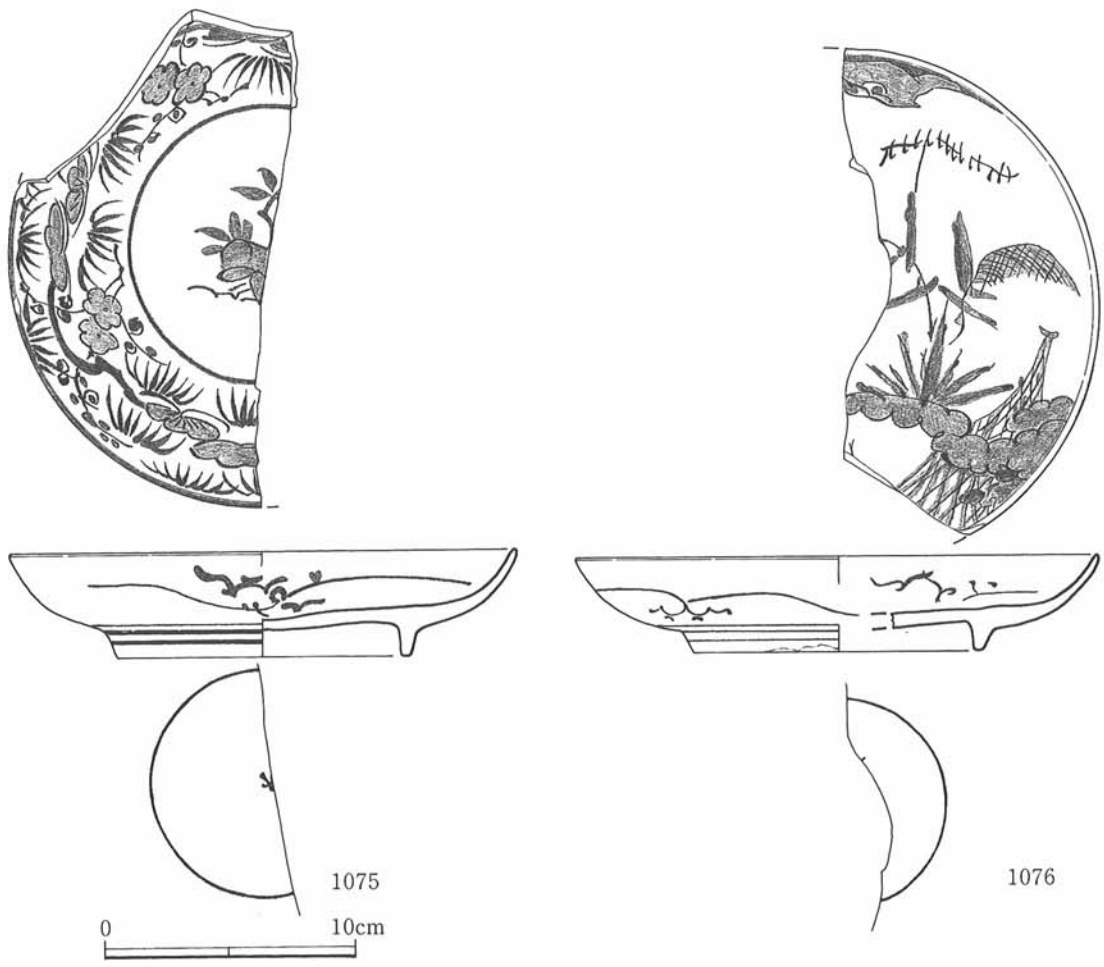


第139图 1-SK293出土遺物③(1/3)



1073

1074



1075

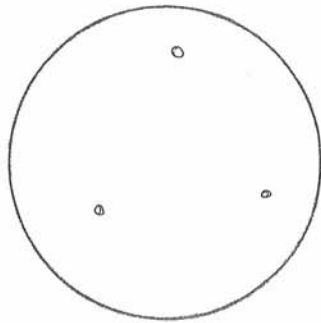
1076

0 10cm

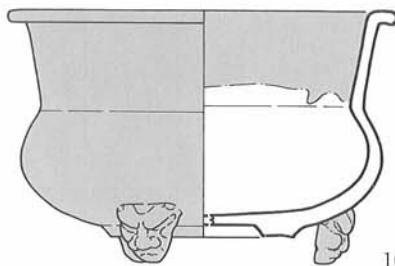
第140图 1-SK293出土遺物④(1/3)



1077



1078



1079



1080



1081



1082

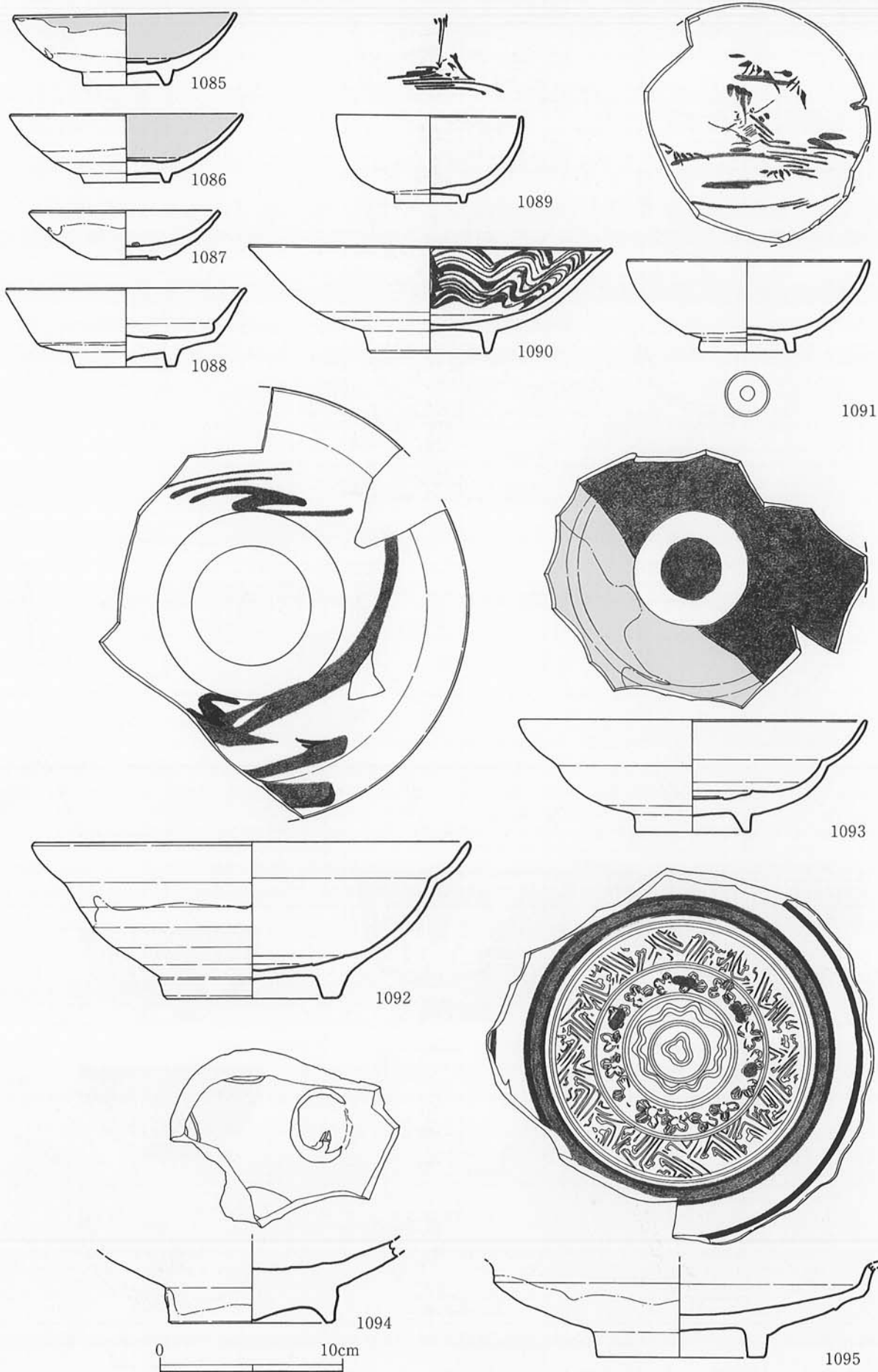


1083

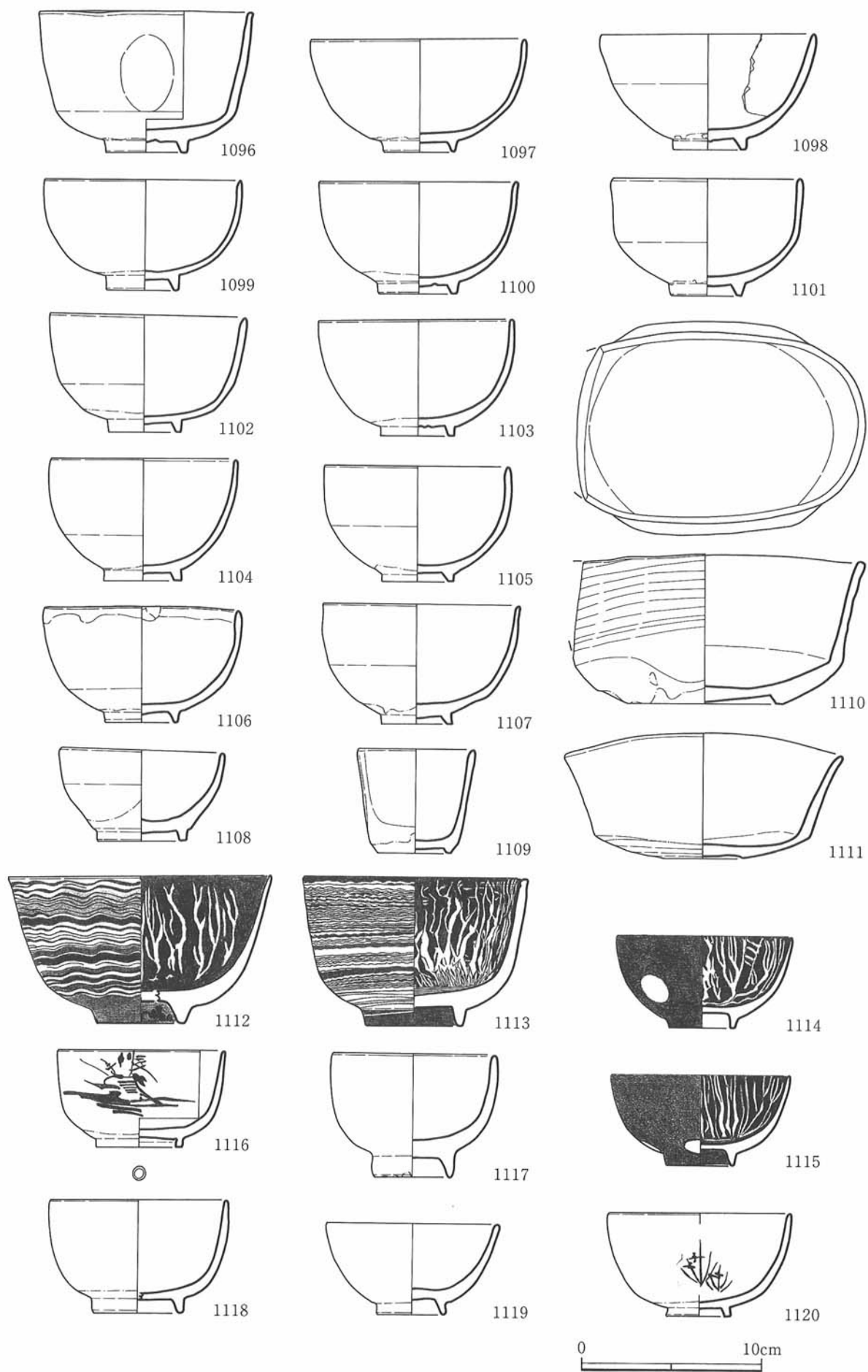


1084

第141图 1-SK293出土遺物⑤(1/3)



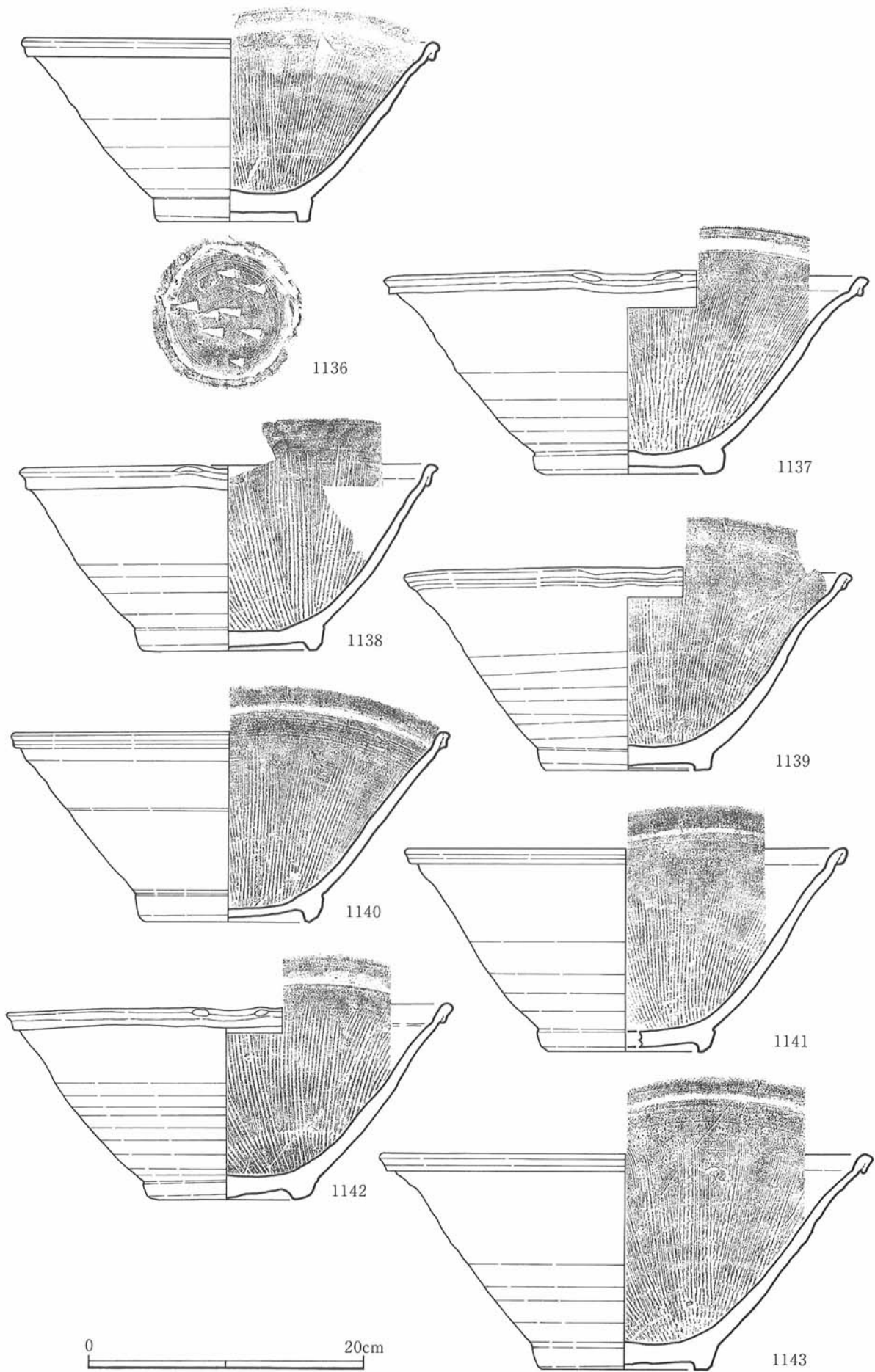
第142図 1-SK293出土遺物⑥(1/3)



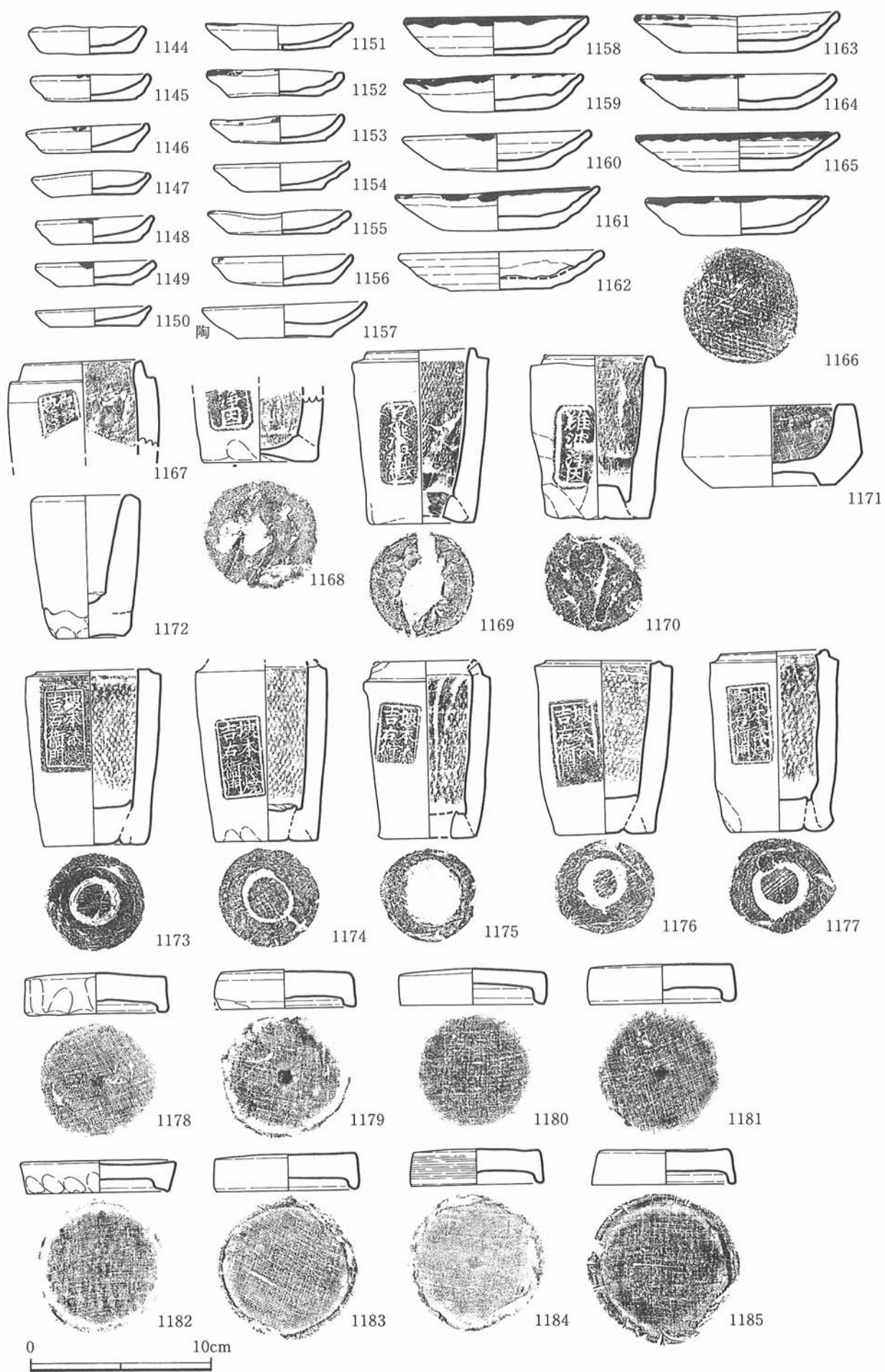
第143图 1-SK293出土遺物⑦(1/3)



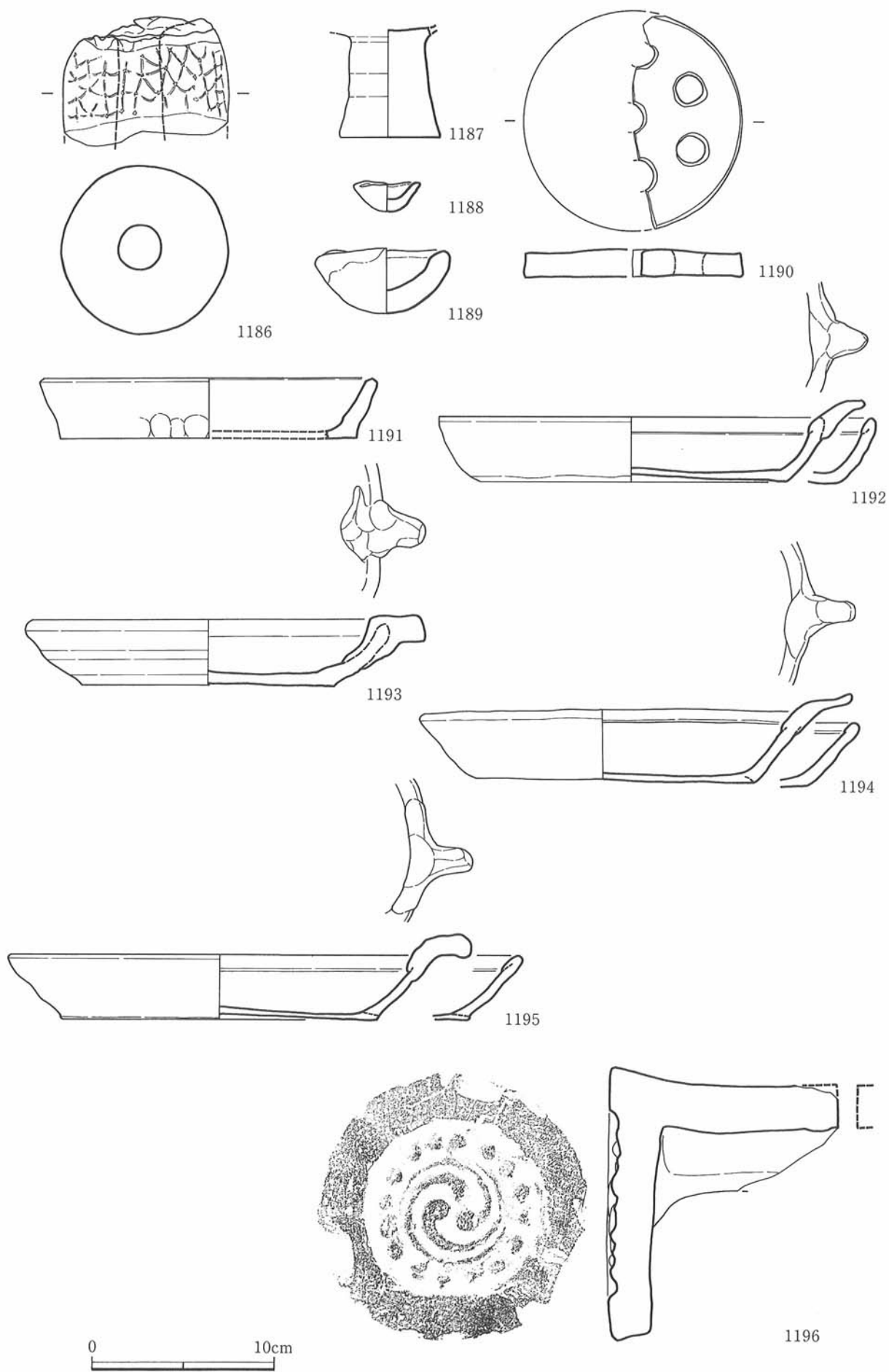
第144図 1-SK293出土遺物⑧(1/3)



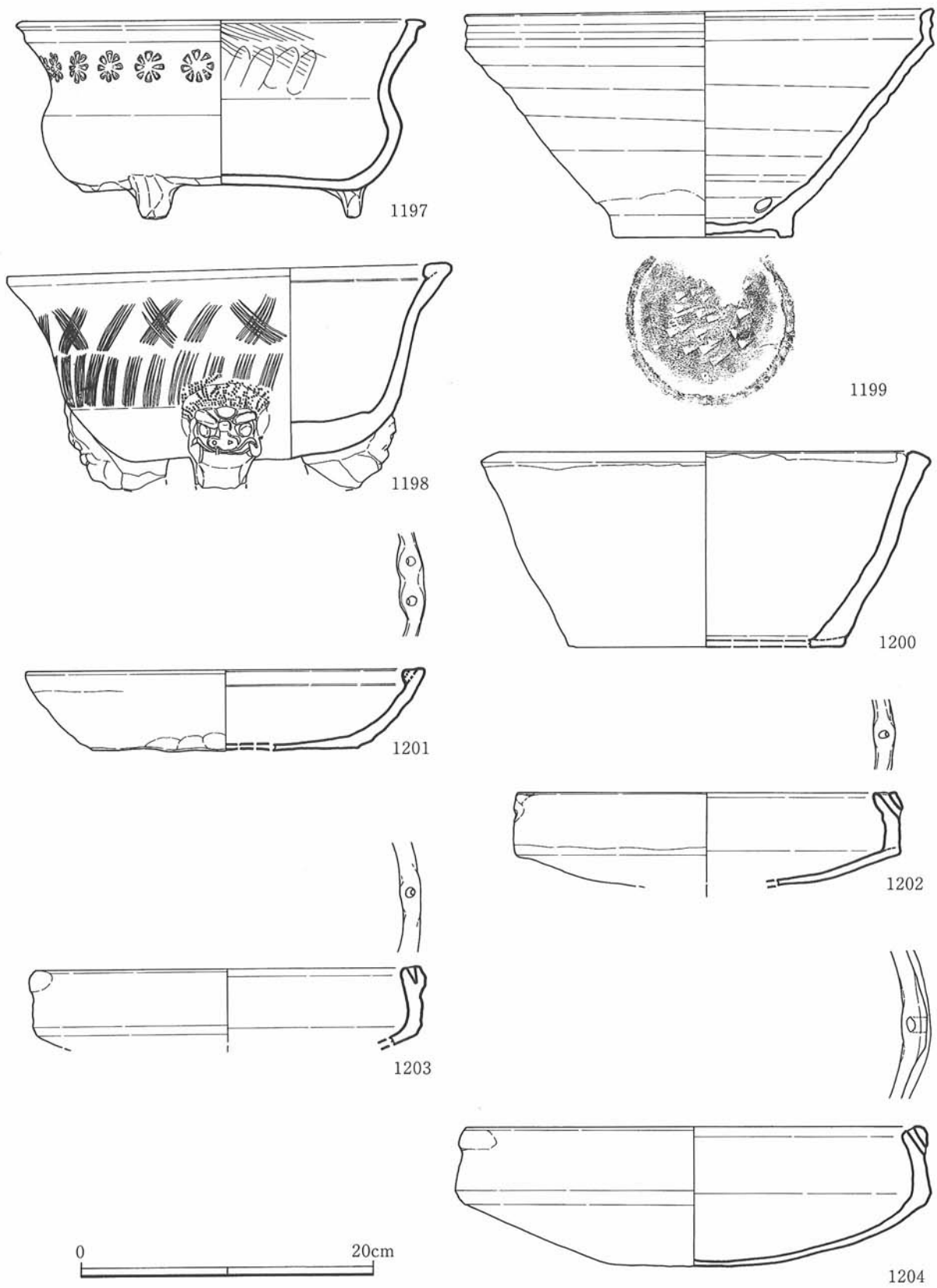
第145図 1-SK293出土遺物⑨(1/4)



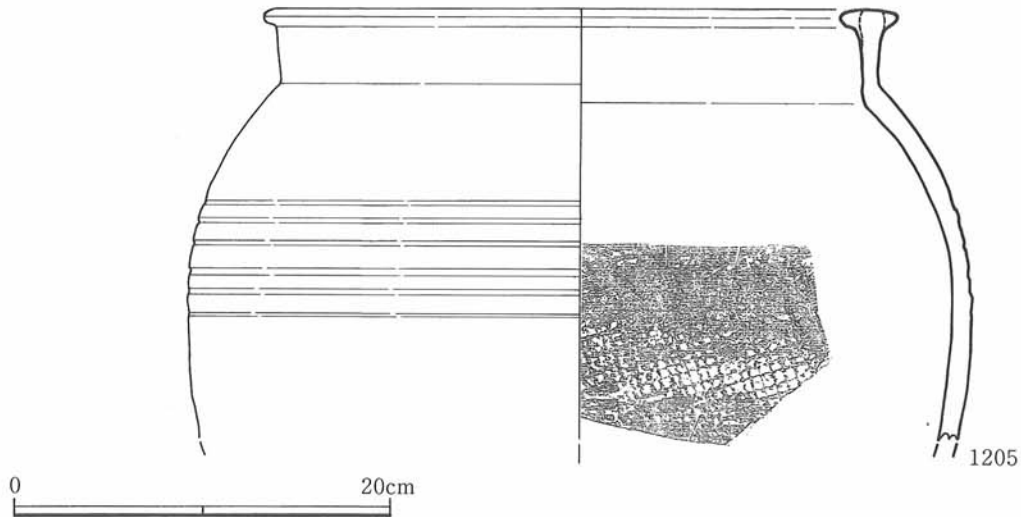
第146图 1-SK293出土遺物⑩(1/3)



第147图 1-SK293出土遺物⑩(1/3)



第148図 1-SK293出土遺物⑫(1/4)



第149図 1-SK293出土遺物⑬(1/4)

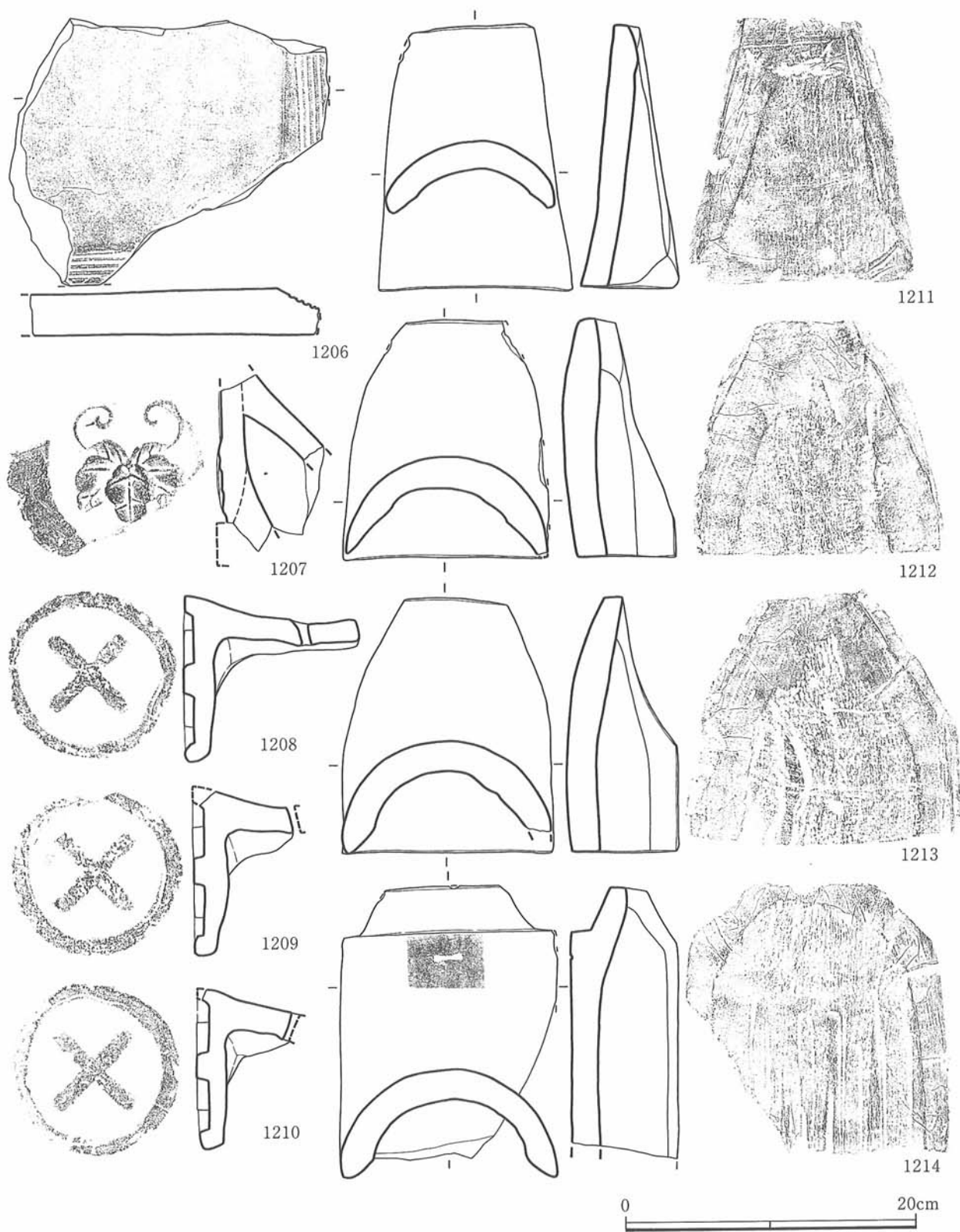
信楽系の型打ち成形の皿。鉄釉と呉須による絵付け。1128は灰釉片口。胎土目があり高台に「御部屋／松右衛門様」の墨書がある。1129は灰釉の油徳利。1130は灰釉鉢で胎土目が残る。1131は萩藁灰釉の風炉か。三足で把手がつく。1132は鉄釉の水指。1133は鉄釉花生で外面に陽出文。1134、1135は萩藁灰釉の鬚水入れ。1136～1143は須佐唐津の製品と見られる播鉢。口縁を肥厚させ体部はケズリ調整。体部は外傾するもの（1136、1138～1143）とS字状になるもの（1137、1139）がある。高台内には1136のように楔形のノミ痕が残る。鉄釉をほぼ全面にかけ、胎土は土師質が多い。

1144～1166は土師器皿。このうち口径の大きさにより、6～7cm（1144～1150）、7～8cm（1151～1156）、10～11cm（1158～1166）の3つに分けることができる。1157は陶器質の皿。1167～1185は焼塩壺とその蓋。1167は「御壺塩師堺湊伊織」、1168、1170は「難波浄因」、1169は「泉湊伊織」、1173～1177は「堺本湊焼吉右衛門」のそれぞれの銘を持つ。1171は鉢形の断面算盤玉で碁笥底となる焼塩壺。1186は鞆羽口で、外面に金網の圧痕が残る。1187は台付き皿の台部。1188、1189は埴塙。1190は七厘のサナ。1191は焙烙か。1192～1195は在地系の把手のつく焙烙。1196は三巴文の軒丸瓦。1197、1198は火鉢。1197は三足で、外面に菊花のスタンプを押す。1198は獣足で口縁を内面に肥厚させ、外面には粗いハケメによる施文をする。1199は灰釉鉢で、内面に胎土目、底面に楔形のノミ痕がある。1200は土師質の鉢。1201～1204は焙烙。1201は把手を装着する2孔内耳があるタイプで、他は関西系の焙烙。1202、1204は把手の孔を穿つが、1203は未穿孔のもの。1205は肥前の大甕。T字状の口縁と体部には6条の沈線を施す。内面格子目叩き痕。

SK293はSK277とともに調査で検出された最大の廃棄土坑であり、大量の遺物が出土した。そのため遺物から判断される時期は17世紀から18世紀後半であるが、その主体となる時期は18世紀前半から中頃とみられる。これはSK293の上層に位置するSK276の時期が18世紀中頃であることから、妥当であろう。

SX292（第150図 図版111）

1206は海鼠壁に使用された海鼠瓦。1207は鳥伏間。瓦当は桐胡蝶文。1208～1210は土師質で、「×」の瓦当文様。棟込瓦とみられ、他に7点出土した。1211～1213は輪違い。長さは16～17cm。幅13～14cm。



第150图 1-SX292出土遺物(1/4)

輪違いは他に数十点出土している。1214は丸瓦片。「一」の刻印がある。

かまど・埋甕内出土遺物（第151、152図 図版115）

1215は1-X区埋甕522内から出土した土師器皿で、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されていた。1216、1217はかまど510内出土。1216は土師器皿。1217は土師器焙烙で、口縁部を内面に肥厚させる。把手部は欠損している。

1218、1219はかまど510、1220はかまど511、1221はかまど518、1222、1223はかまど517のそれぞれ床面に敷かれた平瓦である。いずれもかまど内で熱を受けて赤色化し、亀裂が入るなどしてもろくなっている。長さは27～33cm。幅25～26cmである。

SK516（第153、154図 図版116、117）

磁器は1224～1229。陶器は1230～1240。1241は瓦質土器。1242は土師器。1243～1245は土製器。

1224は広東碗。1225の猪口は蛇の目凹形高台。1226は小型の輪花皿で口銹を施す。1227は蛇の目釉剥ぎの皿で高台まで施釉され、コンニャク印判による五弁花を描く。1228は五弁花に「大明年製」銘のある皿。1229は二重方形枠内に変形字銘がある。1224は広東碗であるので1780年代以降とみられ、1229は銘款から18世紀中～末。

陶器は1230の萩焼の開口碗で藁灰釉を厚くかけるもので、江戸などの他消費地では18世紀後半から出土する傾向にある。1231は京信楽系の小杉碗で18世紀後半以降増加する資料である。

SK516は端反碗を含まないことや各陶磁器の時期から、18世紀末から19世紀初頭と考えられる。

調査では広東碗を伴う土坑一括資料が少ないことから、当土坑出土例は良好な資料と言えよう。さらに葉形皿の土型である1245が町屋から出土したことは、生産地である窯場との関係を考える上で注目される。

SK555（第155～158図 図版112～115）

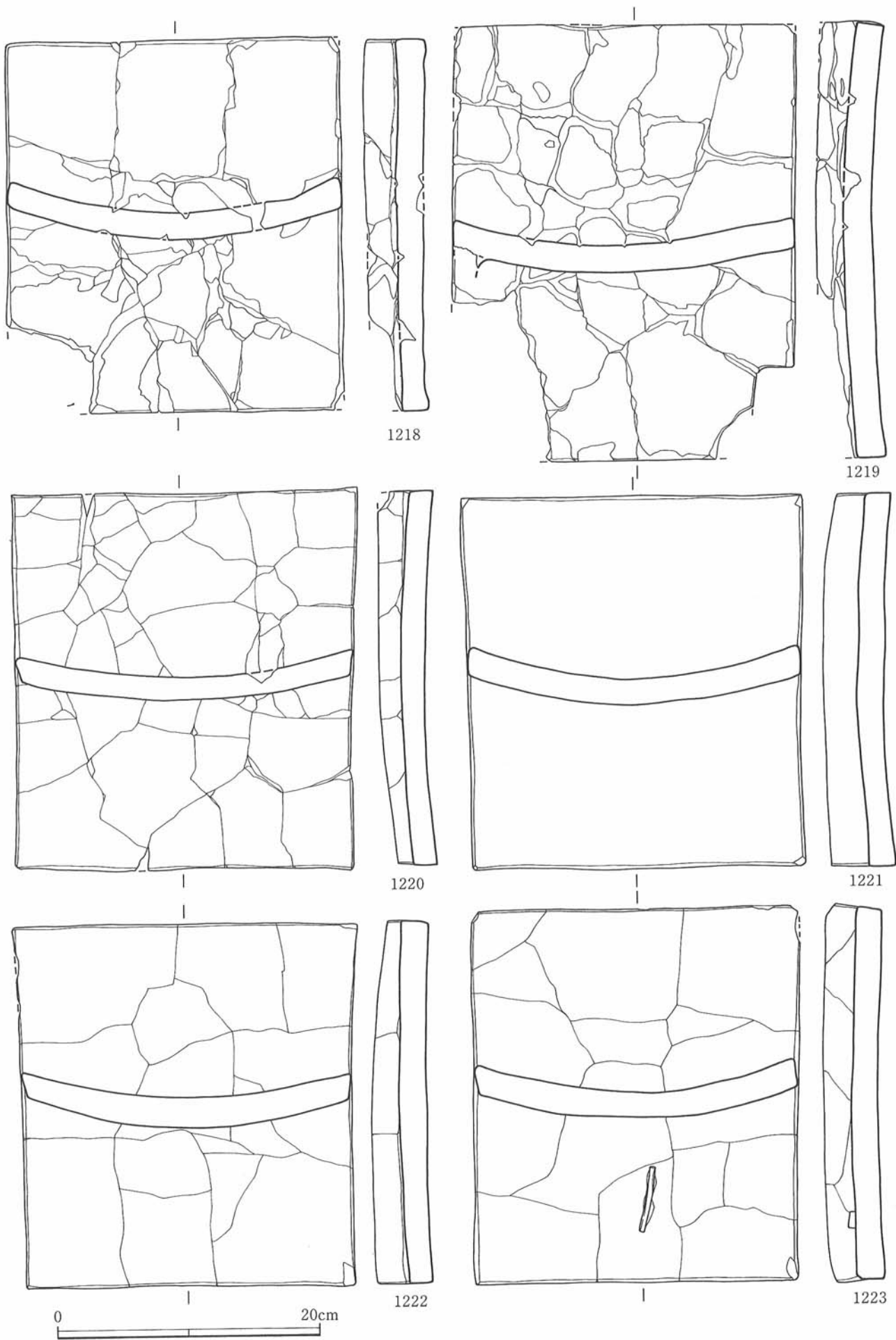
磁器は1246～1260。陶器は1275～1303、1307、1309～1313。土師器は1261～1274。瓦は1305、1306、1308で、瓦質土器は1304、1314、1315である。

磁器のうち、初期伊万里とみられる碗1247、油壺1251、皿1260があり、1249の碗は17世紀中頃、1258は方形枠に「福」字銘で17世紀後半、1257も17世紀後半とみられる。1246は雪輪梅樹文に「大明年製」銘を持つ碗で、1256の深手で短く口縁が外反する皿は18世紀にはいるものとみられる。これらから磁器は17世紀後半を中心として18世紀前半までの時期とみられる。

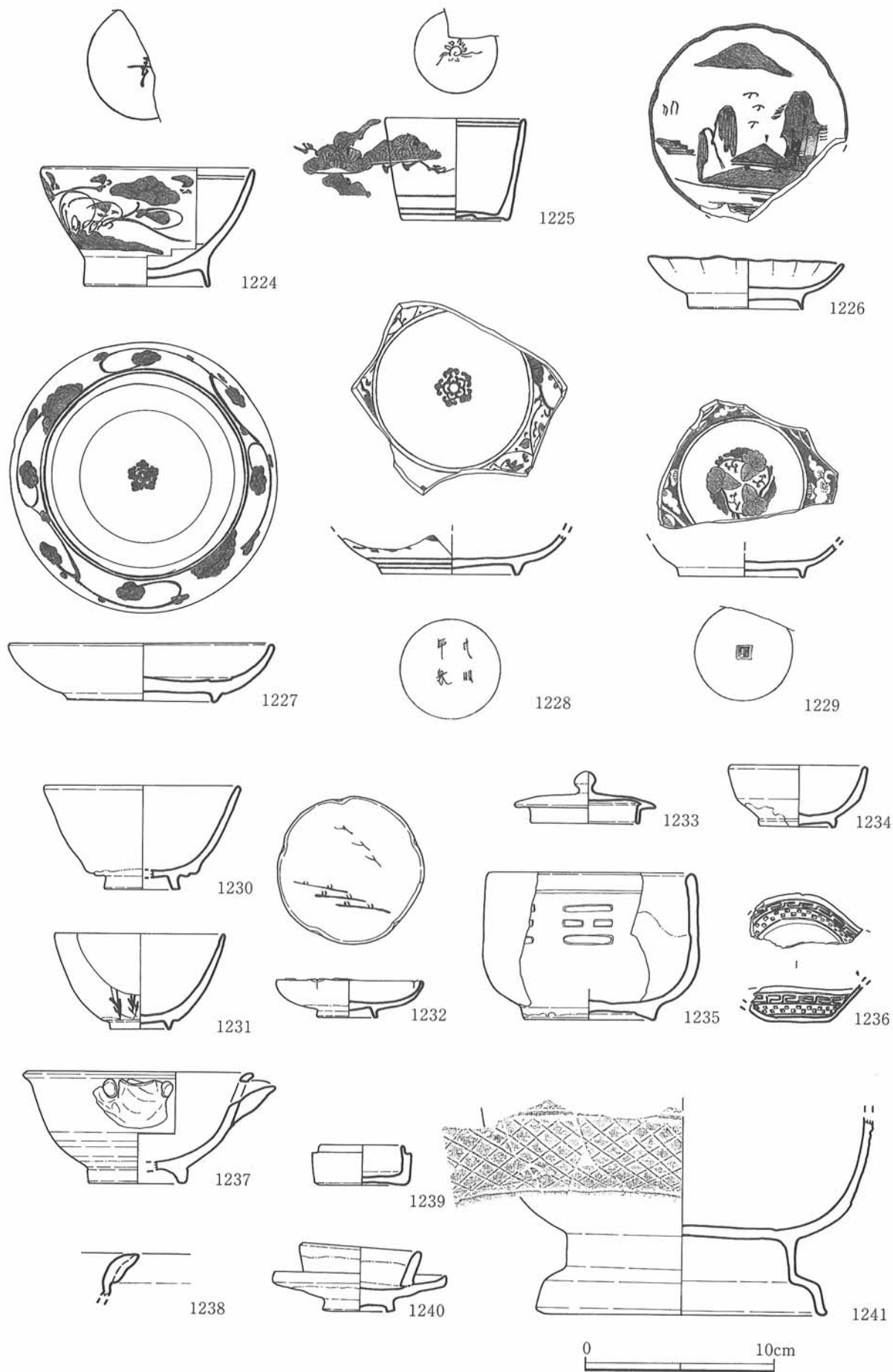
陶器のうち碗は、萩焼の藁灰釉、土灰釉を施釉した碗があり、肥前陶器では1281の呉器手碗、1282の刷毛目碗がある。1283は萩の杓形碗で、橙色の胎土に透明釉をかけ内面に輪状の胎土目痕が残る。皿は1284が肥前の砂目皿で、1285は鉄釉をかける蛇の目釉剥ぎ皿。1286は透明釉の皿で胎土目痕があ



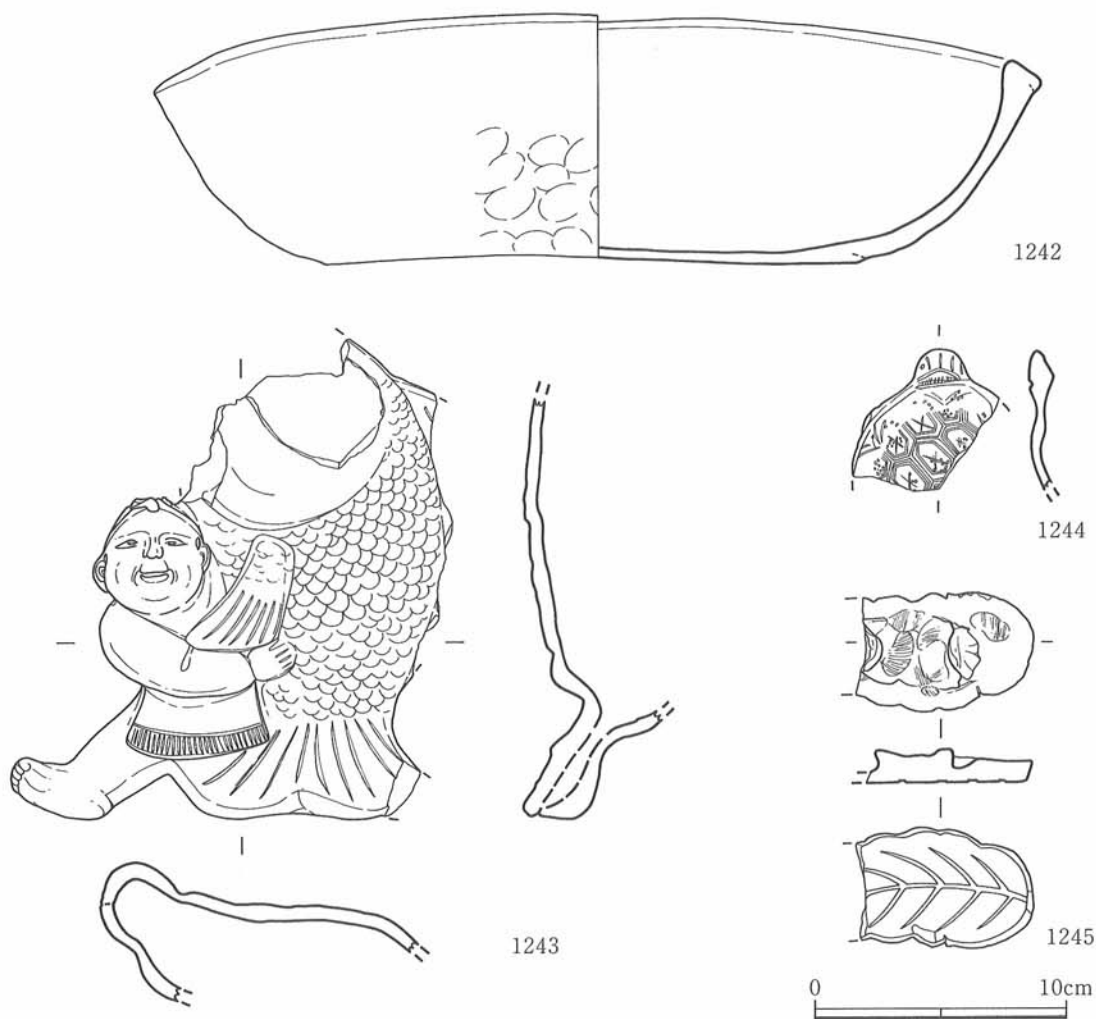
第151図 1地区埋甕・かまど内出土遺物①(1/3)



第152図 1地区埋甕・かまど内出土遺物②(1/4)



第153图 1-SK516出土遺物①(1/3)



第154図 1-SK516出土遺物②(1/3)

る。1287は肥前の香炉か。1288は須佐唐津とみられる灰釉の香炉（火入れ）で、胎土目が認められる。1289、1290は肥前の灯明受皿で、受け部と口径の高さがほぼ同じである。1291、1292の皿は1291が灰釉で須佐唐津、1292は土灰釉で萩焼の製品である。1293は餌播鉢。1294は鉄釉茶入れ。1295は備前の徳利。ぺこかん形で底部に「大」の窯印がある。1296は匣鉢。1297、1298は肥前の壺で鉄釉、緑釉をかける。1299、1300は同器形の壺で、1299は黄釉、1300は透明釉の発色をするが、焼成温度による釉発色の違いであろう。1302は把手がつく片口で、土灰釉を施す。1307は肥前の二彩鉢。

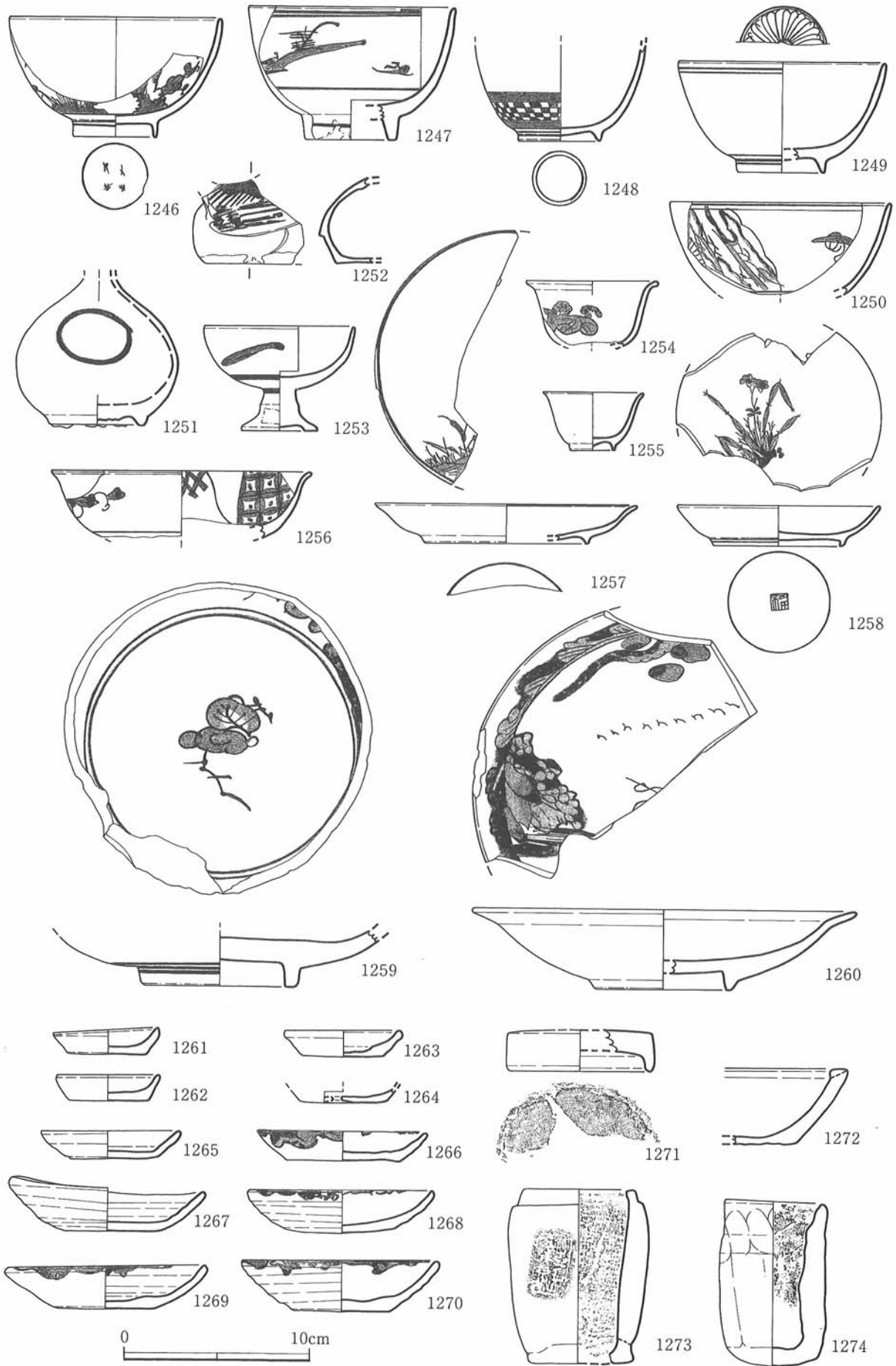
土師器の皿は、灯明皿に使用され、1264は底部に穿孔がある。焼塩壺は1273が「御壺塩師泉湊伊織」の銘を持つタイプと無刻印の1274の2者がある。

播鉢は1303、1309～1311で、1303は備前の播鉢、1309、1310は口縁の形態から須佐唐津の製品とみられ、1311は萩焼。瓦質土器は1304の火鉢の獣足と、1314、1315の短い三足の甕である。

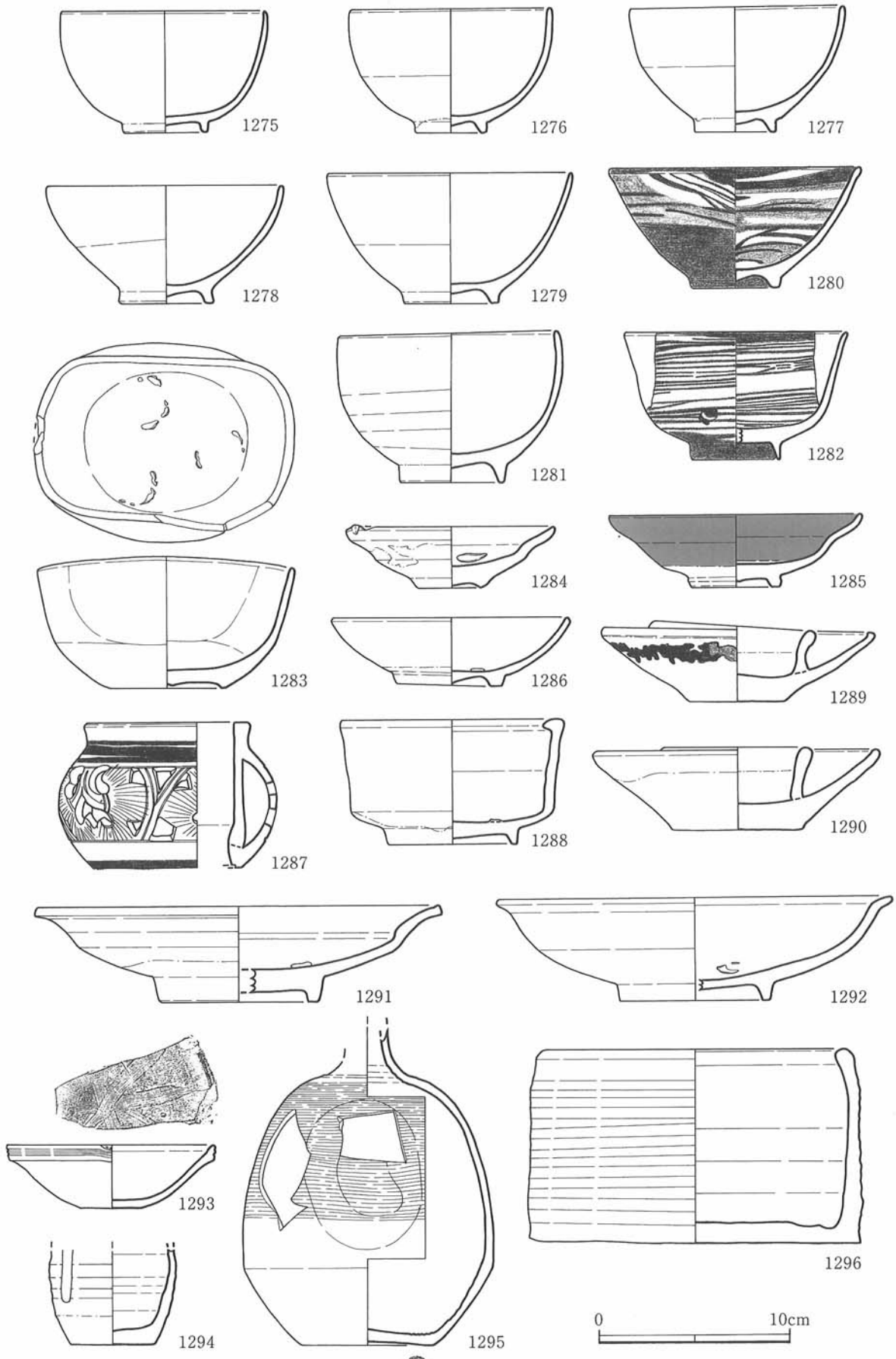
以上から SK555は17世紀後半から18世紀にかけてとみられる。

SK534 (第159、160 図版122、123)

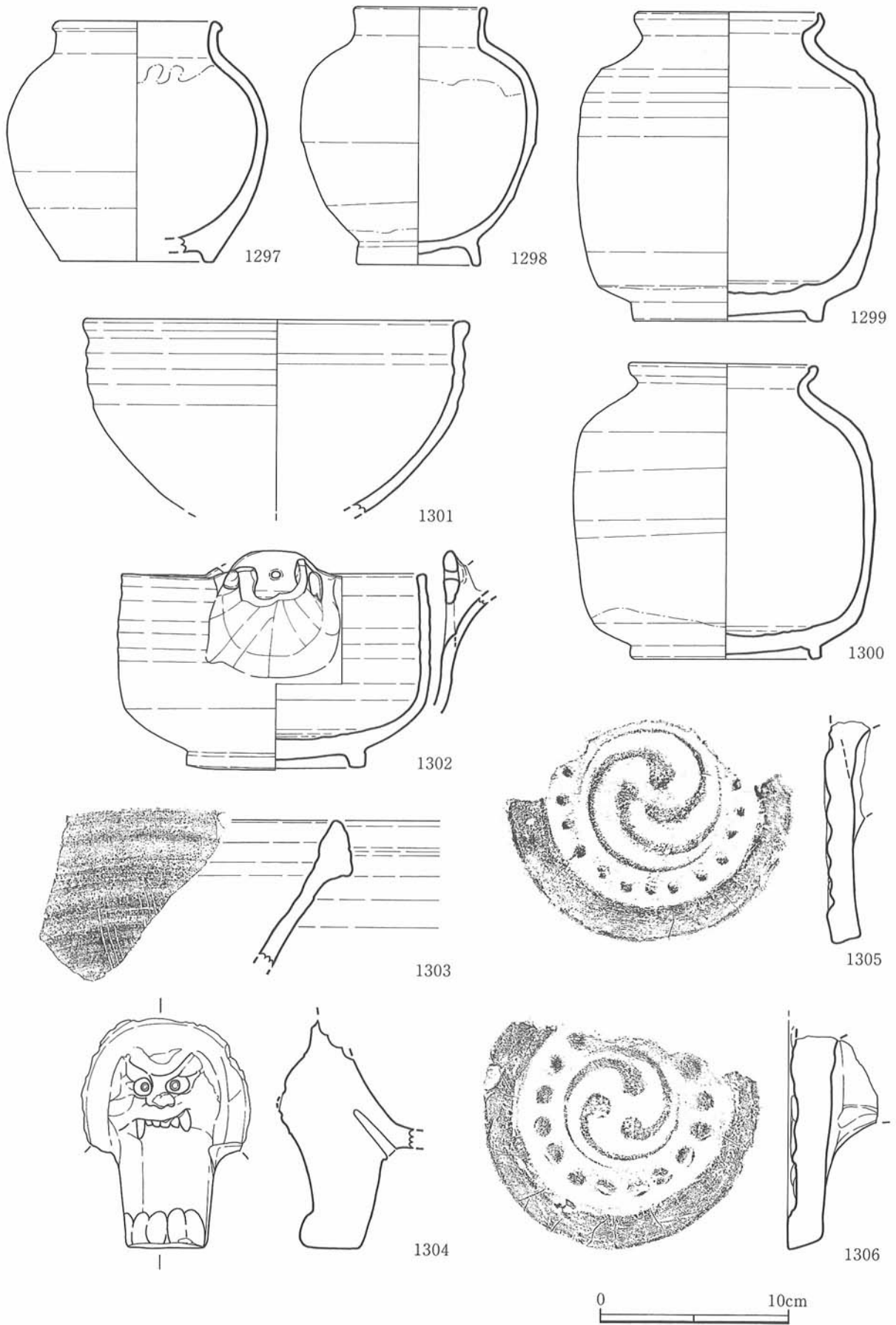
1316～1325は磁器。1326～1332、1338～1341、1345～1347は陶器。1333～1337は土師器。1342は輔羽口。1343、1344は瓦。



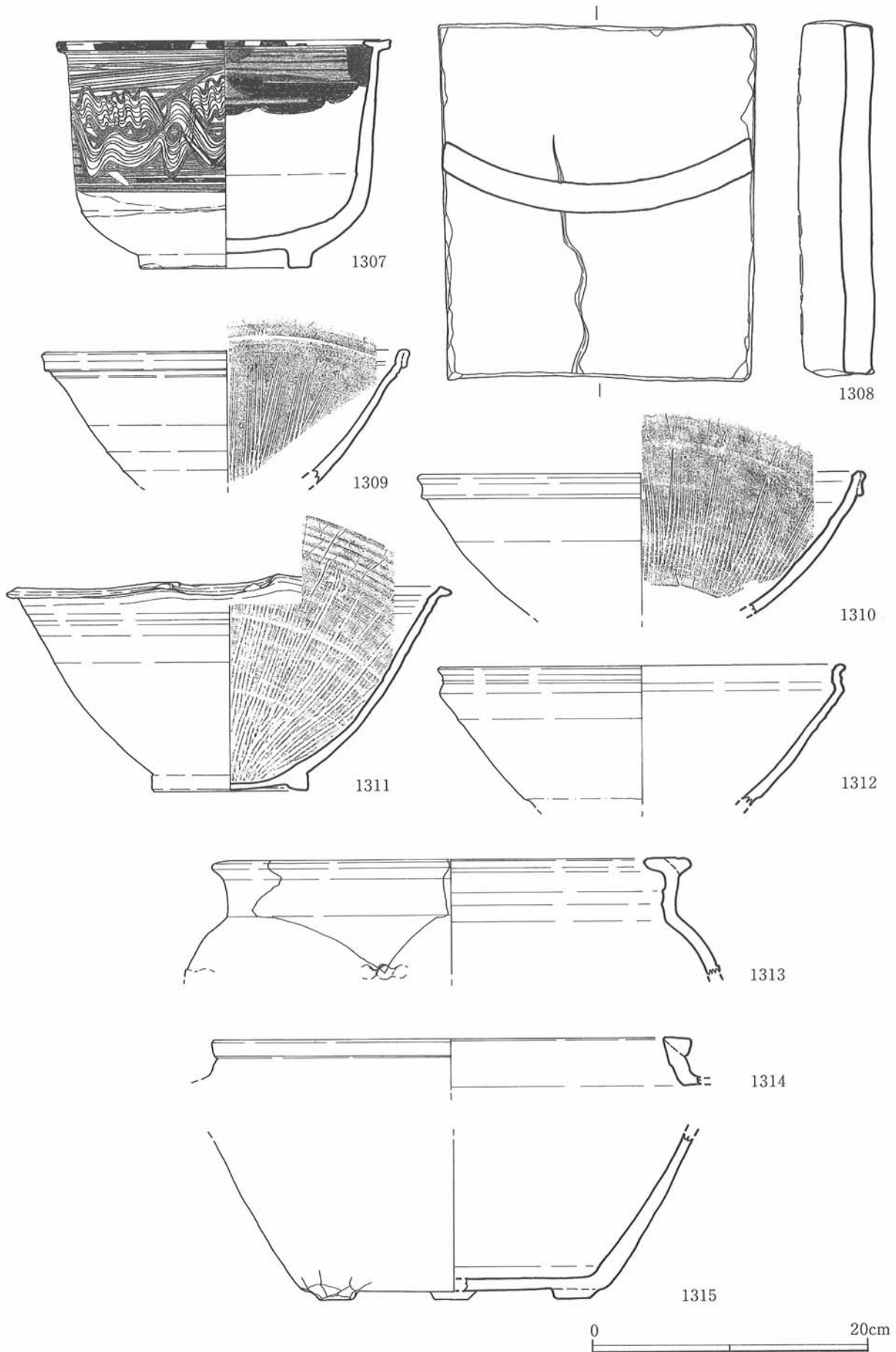
第155图 1-SK555出土遺物①(1/3)



第156図 1-SK555出土遺物②(1/3)



第157图 1-SK555出土遺物③(1/3)



第158図 1-SK555出土遺物④(1/4)

磁器は初期伊万里の皿である1324や、17世紀後半の1320、1325、17世紀末の1316、1317の18世紀初頭までが出土している。1316、1317は碗。1318は小杯。1319は青磁染付の底部で、内面に五弁花。1320は高台内に圏線と二重方形枠に「福」字がある。1322は見込に草花文、高台内に二重圏線と「大明成化年製」銘のある青花。1323は内面に山水文、高台内に圏線を施す。1325は最大径が体部上半にあり、高台との境が明瞭である瓶である。

陶器の碗類は藁灰釉、土灰釉の萩製品が主体である。1332は刷毛目状に白泥を掃いて透明釉をかけた碗。1328は化粧掛けの碗、1339は萩の土灰釉の鉢または皿の底部で、いずれもたたみ付けに貝目痕あり。1340は灰釉（黄釉）の鉢で胎土目が残る。須佐唐津か。1341は内面に白土を象嵌する皿。

土師器皿は1333～1335。1342は鞆の羽口。1343は海鼠壁の海鼠瓦で、縁辺に5条の沈線がめぐる。釘穴あり。1344は三巴文の軒丸瓦。焙烙は在地系（1336）と関西系（1337）の両方がある。1338はサヤ鉢とみられ、内面に4箇所（4箇所）の貝目痕がある。

播鉢は須佐唐津の1345と唐津の口縁内側に肥厚させる1346がある。1346は17世紀後半。1347は萩の土灰釉鉢で、内面に輪状の胎土目痕が残る。

SK534は、17世紀後半から18世紀初頭とみられる。

SK556（第161～163図 図版123～125）

1348～1358、1367は磁器。1359～1366、1368～1373、1382～1384は陶器。1374～1381は土師器。

磁器のうち、1348～1350は17世紀末～18世紀にかけてとみられる碗。1351はコンニャク印判の紅猪口。1352は白磁小杯で方形枠に「福」字。1353は蓋。1354は白磁蓋。1355は青磁染付のうがい茶碗で、高台内に「大明年製」銘。1356は白磁の稜花皿で17世紀後半。1357は芙蓉手の皿で1670～1690年。1358も高台幅の狭い初期伊万里の製品である。

陶器碗のうち1359～1361は萩。1362の刷毛目碗は内外面に横刷毛目を施し、内面に三足ハマの痕跡がある。胎土は赤褐色であるが、器形は肥前のものより萩の碗に似ることから、萩の刷毛目碗の可能性はある。1364は肥前の呉器手碗。皿のうち1366は肥前の皿。灰黄色の素地に透明釉をかけたもので17世紀後半か。1368は萩の藁灰釉鉢で、内面に胎土目が残る。割高台。1369は萩の透明釉を施した三足鉢。外面はケズリによって面取りされている。1370は呉須絵のある鉢。1371は灰釉の鉢。1372は鉄釉の茶入れ。1373は灰釉の茶巾筒か。播鉢は萩とみられる1382と、須佐唐津の1383がある。1384は灰釉を施す家形または灯籠形ともいえる陶器。屋根の上に突起があることから、つり下げて使用した可能性がある。形態から照明具ともみられるが、内面には煤の付着などは認められない。茶道具の置物とも考えられる。

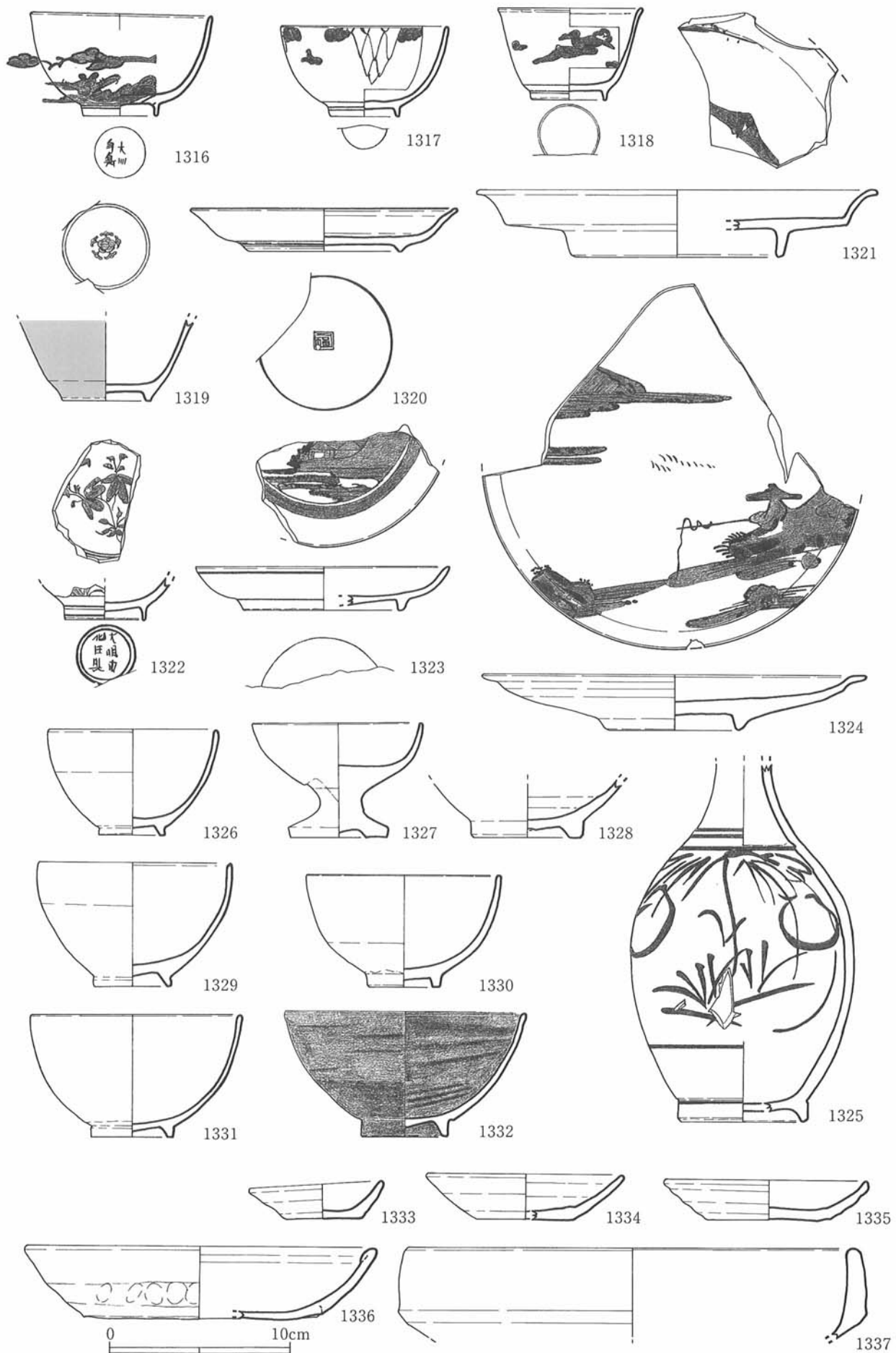
1374～1377は土師器皿。1379は「御壺塩師泉湊伊織」の焼塩壺で17世紀末～18世紀前半。焙烙は在地系の1380と関西系の1381がある。

以上から SK556は17世紀末から18世紀初頭を中心とする時期と見られる。

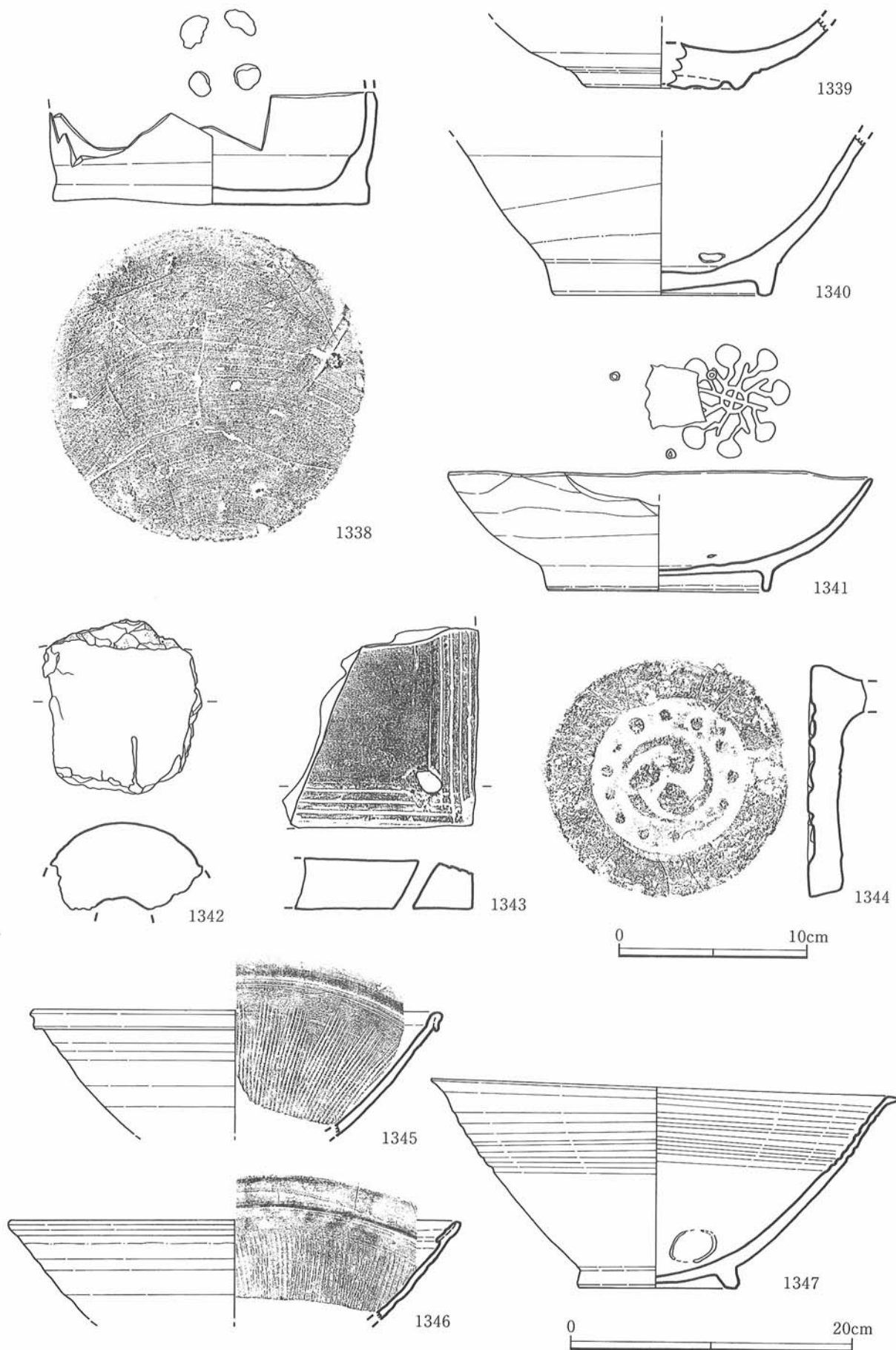
SK532（第164～168図 図版117～121）

1385～1396、1398～1402、1404～1407が磁器。1397、1403が陶胎染付。1408～1437、1466～1476が陶器。1438～1462が土師器。1463は瓦質土器。1464、1465は瓦。

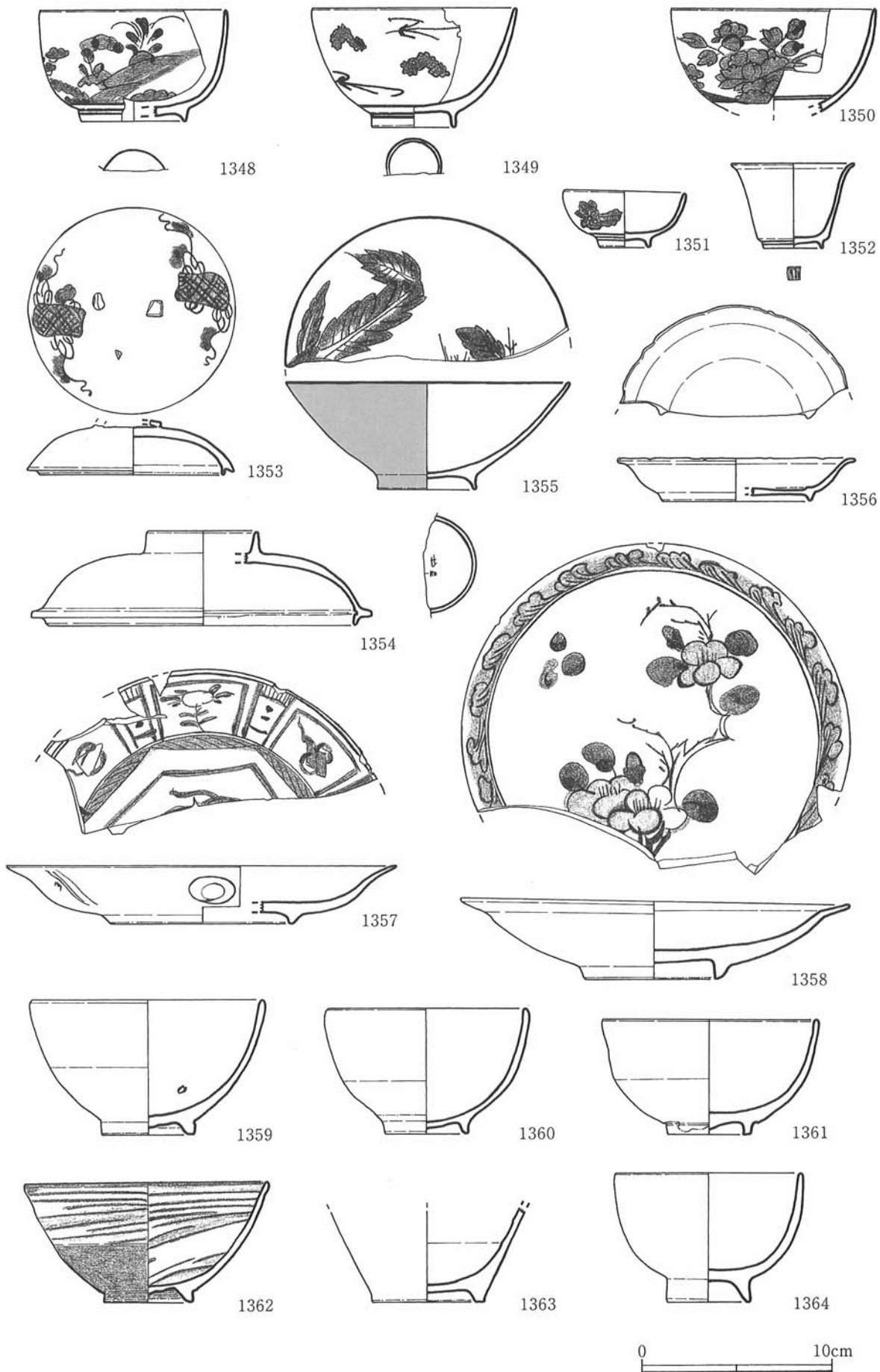
1385は葵文、1386は雨降り文、1387は梅樹文を施文する碗。1388は内面に色絵の人物像を書く。1390



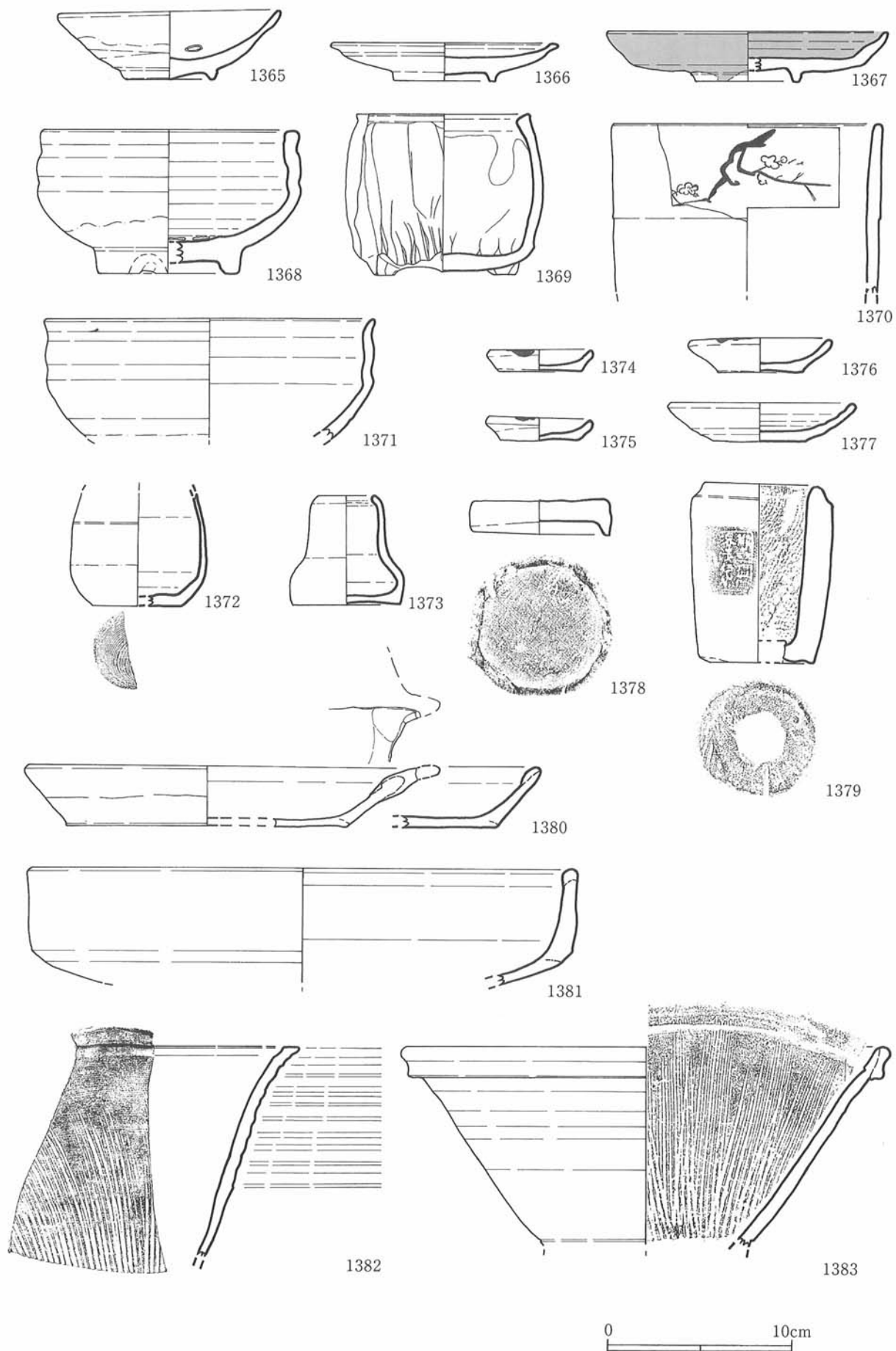
第159图 1-SK534出土遺物①(1/3)



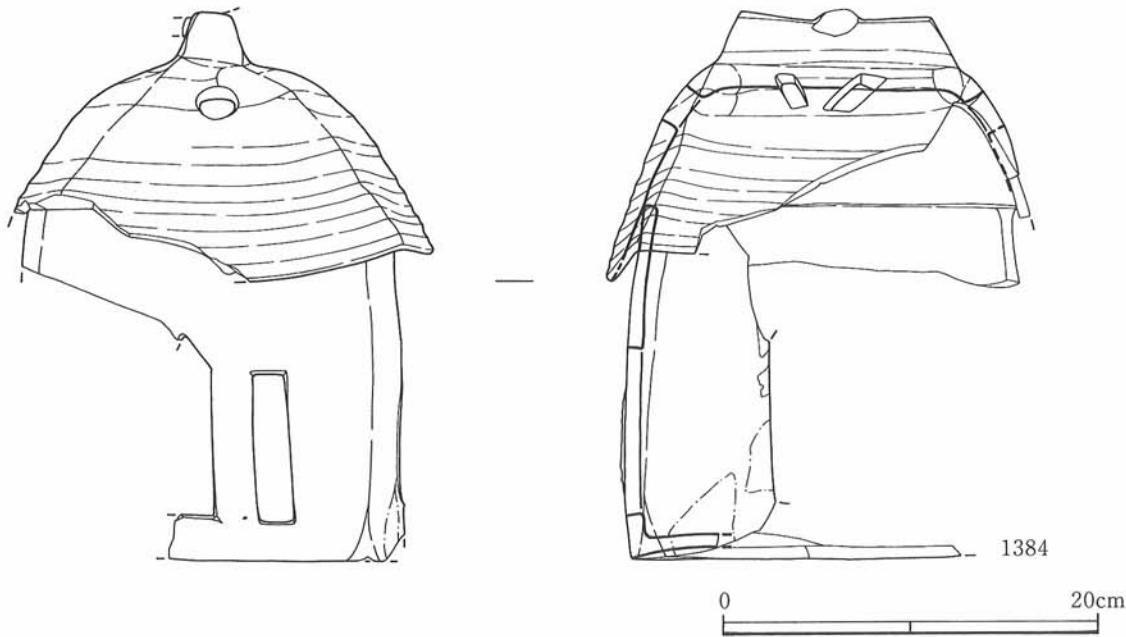
第160图 1-SK534出土遺物②(1/3、1/4)



第161图 1-SK556出土遺物①(1/3)



第162図 1-SK556出土遺物②(1/3)



第163図 1-SK556出土遺物③(1/4)

～1392、1394は猪口。1391は青磁染付で柳文。1389はコンニャク印判の小杯。1396は大型の碗。1397は陶胎染付の碗。1398は青磁香炉（火入れ）で脚と底部がほぼ同じ高さとなる。1400は五弁花と墨弾きを施し、ハリ支えが残る皿。1401は五弁花に二重方形枠の「福」字。1405は口鏽のある菊花形の白磁皿。これらは17世紀末～18世紀前半とみられる。1399は青花漳州窯系の皿、1404は初期伊万里の瓶。1406、1407は底面に鉄泥を塗る青磁皿である

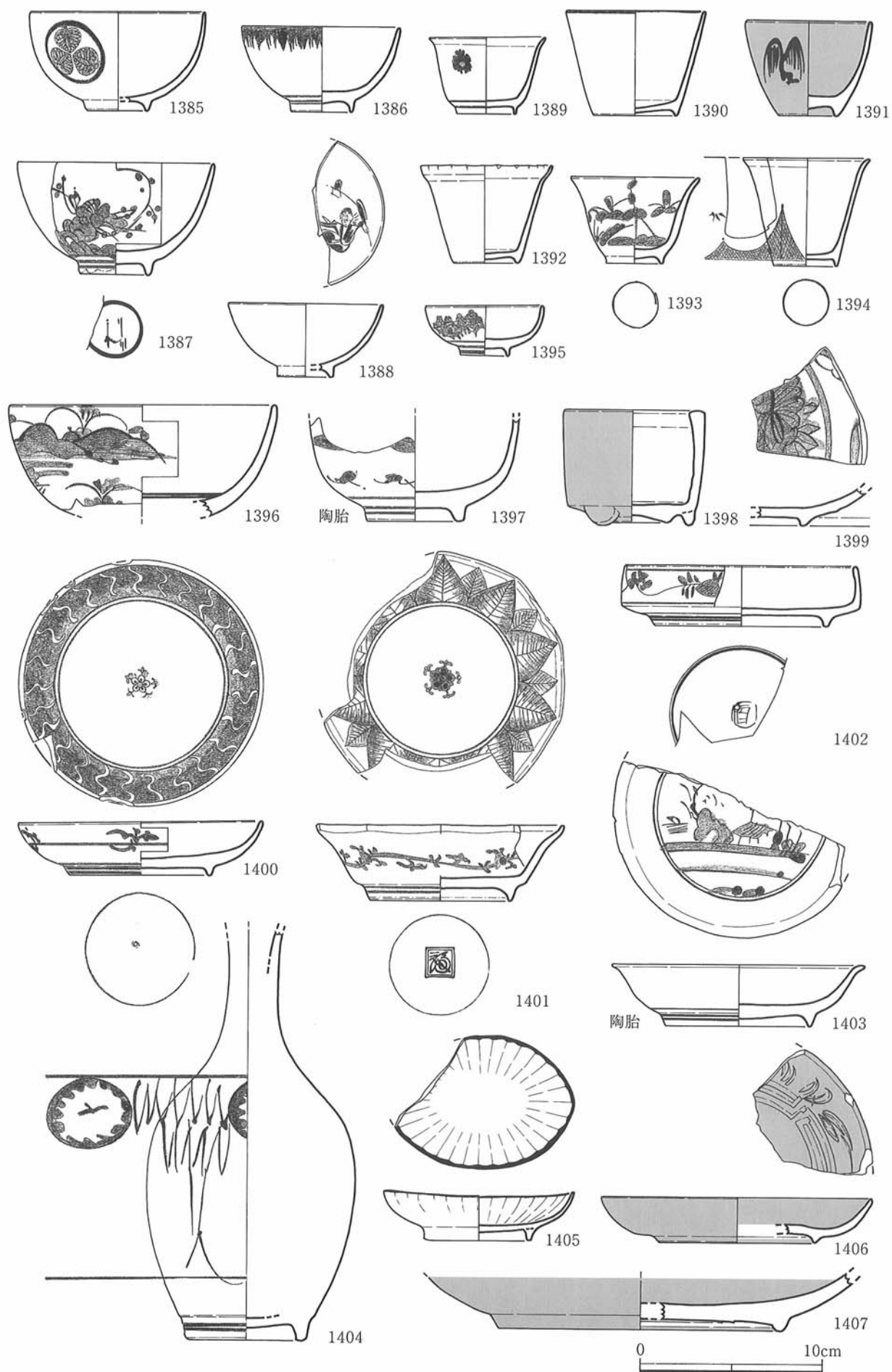
陶器では在地の萩や須佐唐津の製品が多く、肥前では呉器手碗（1418）や京焼風陶器で呉須、青で絵付けをするもの（1421）と「清水」銘があるもの（1419）があり、他に刷毛目碗（1422、1423）、蛇の目釉剥ぎ皿（1424～1426）がある。1417は出土点数が少ない灰釉の碗で、高台無釉。1427は刷毛目を施す皿で、内面に輪状の胎土目痕が残る。おそらく萩であろう。1428は唐津とみられる灰釉砂目皿。1429は灰釉の灯明受皿。1433は藁灰釉の四足香炉（火入れ）。底部は無釉である。1431、1432は灰落とし。1434は灰釉の杓形碗。碁笥底で、須佐唐津の製品。1437、1466、1467、1469は灰釉の鉢で、口縁の形態に差がある。1468は胎土明褐色で透明釉をかける鉢。1470は肥前の三島手の皿。砂目痕がある。

土師器皿のうち1449は焼成後の穿孔をし、内面に灯芯押さえとみられる粘土を貼り付けている。焼塩壺は「御壺塩師堺湊伊織」銘を持つものが5点出土している。他に刻印をもつものはない。1453、1454は小型の焼塩壺で、おそらく1451、1452の蓋とセットになるとみられる。播鉢は須佐唐津（1473、1475）の他に萩とみられる製品もある（1472、1474）。1471は備前徳利。1476の壺と1436の壺口縁片は信楽であろう。

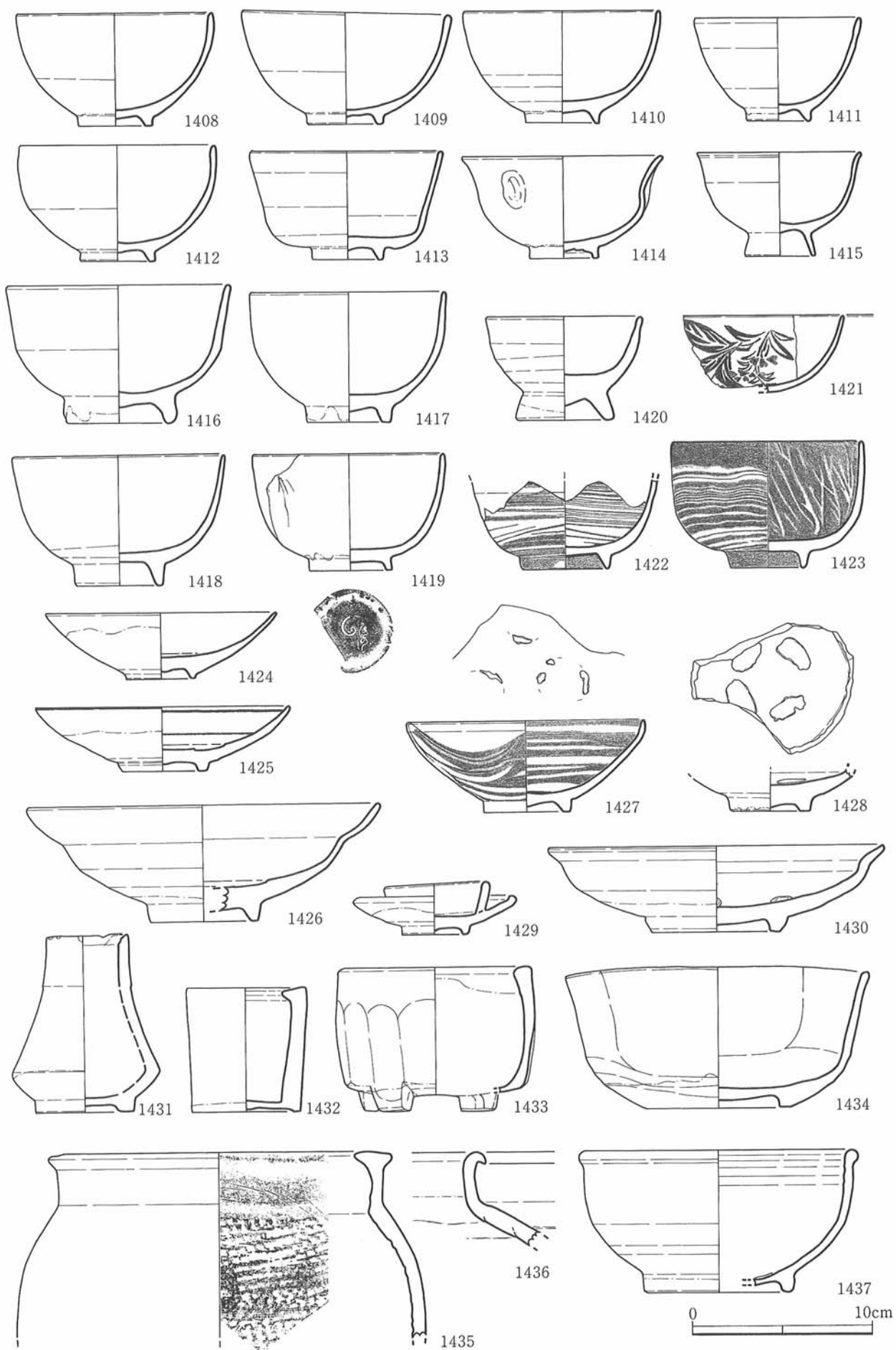
これらから SK532の時期は、18世紀前半とみられる。

1 地区北端区（第169、170図 図版125～127）

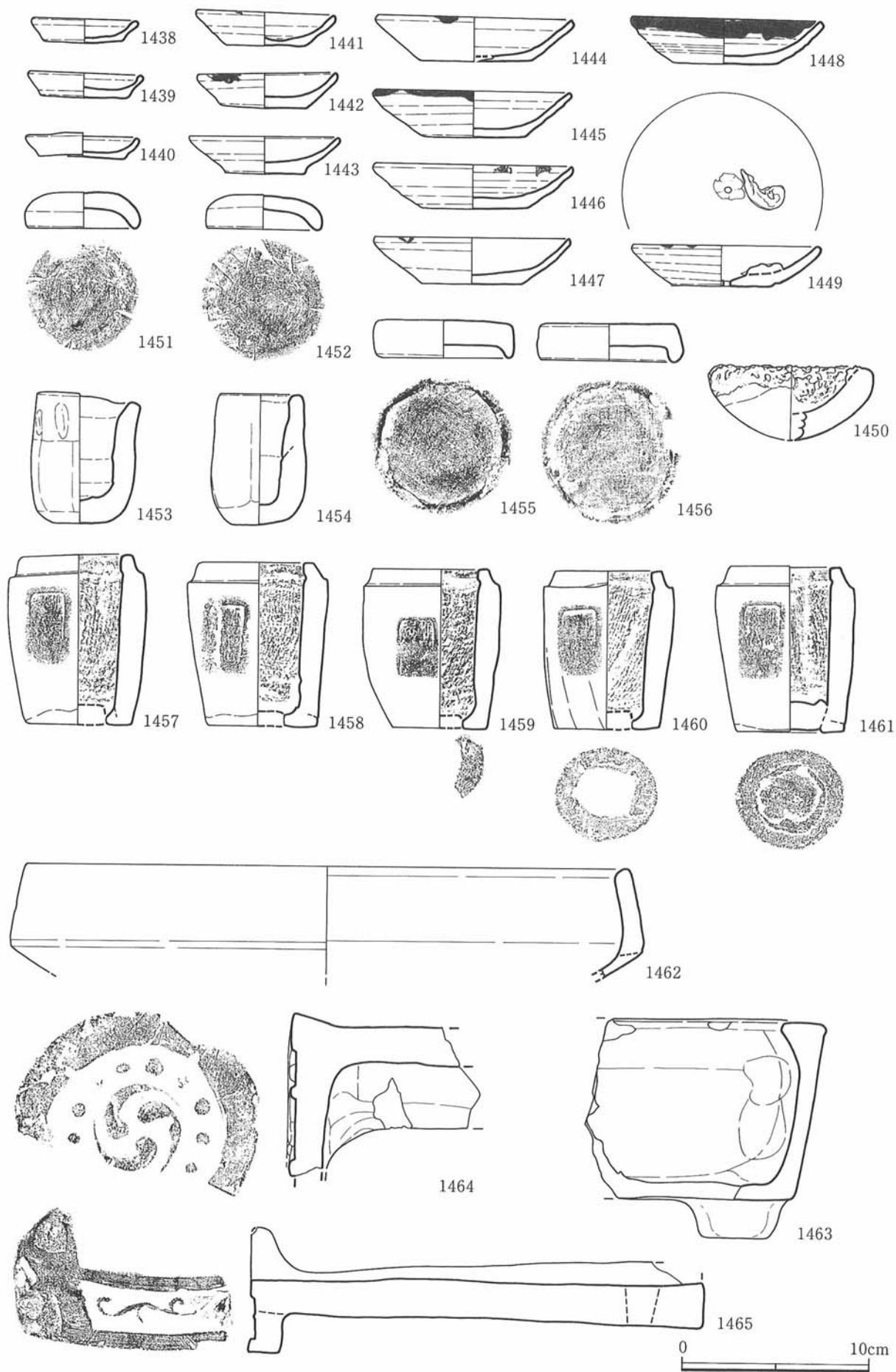
1477～1488は磁器。1489～1497、1504、1506～1511は陶器。1498～1502は土師器。1503は土製品。



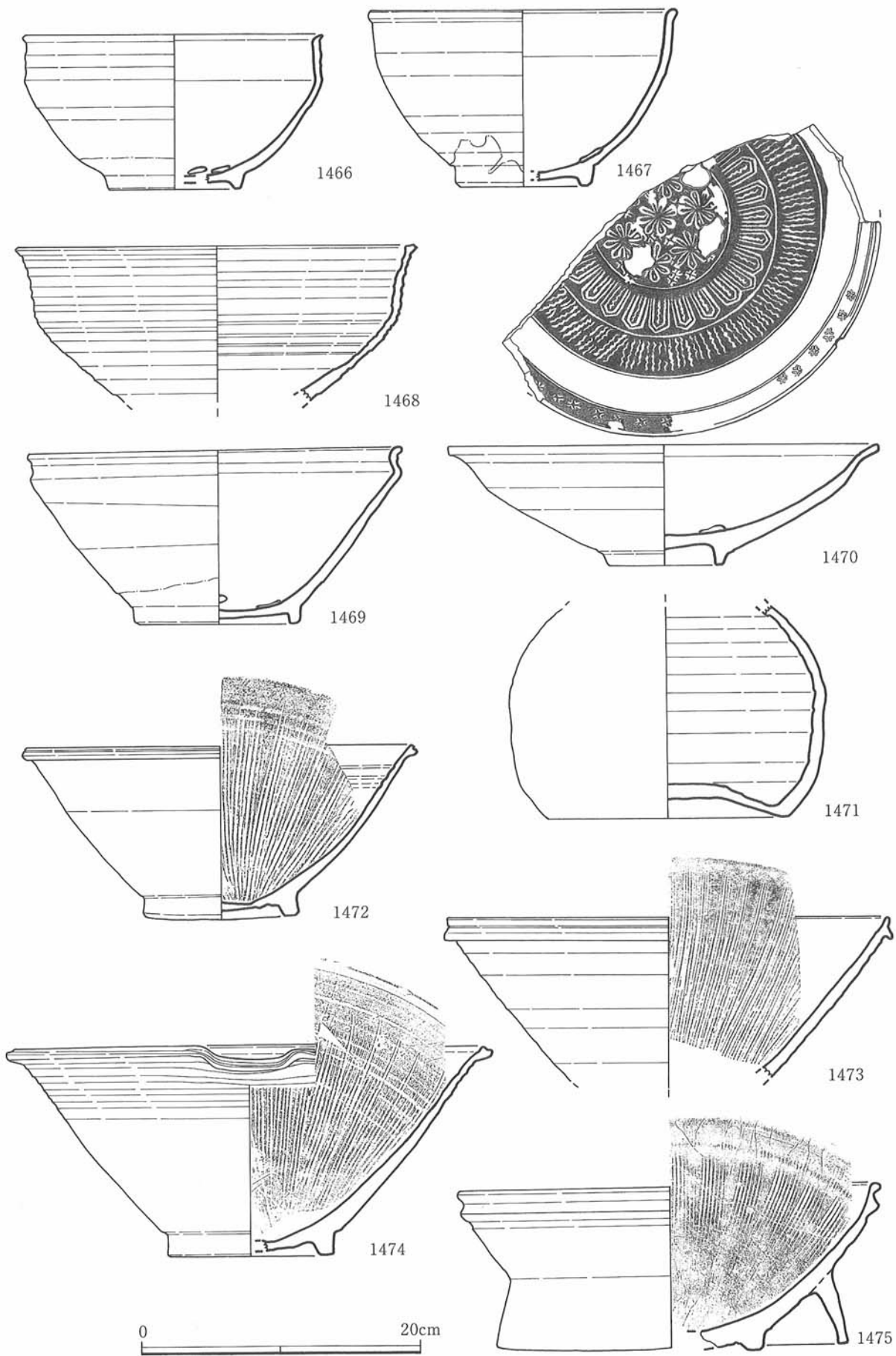
第164图 1-SK532出土遺物①(1/3)



第165图 1-SK532出土遺物②(1/3)



第166图 1-SK532出土遺物③(1/3)



第167图 1-SK532出土遺物④(1/4)

1505は瓦。1513は瓦質土器か。

磁器のうち1・2面から出土した1477、1483と、3面出土の1478、1485、1486、1488は、1477、1485が17世紀中頃であるが、他は18世紀代にはいるものである。1477～1482は碗。1477は初期伊万里。1478はコンヤク印判で蛇の目釉剥ぎをする。1479は体部の文様が口縁と高台の圈線のみである。1480～1482は青花。1483、1484は皿。1484は口径に対し高台径の狭い初期伊万里の皿。1485は小杯。口縁と高台に圈線のみ。1486は猪口。1487は青磁香炉(火入れ)。1488は雨降り文の仏飯器。

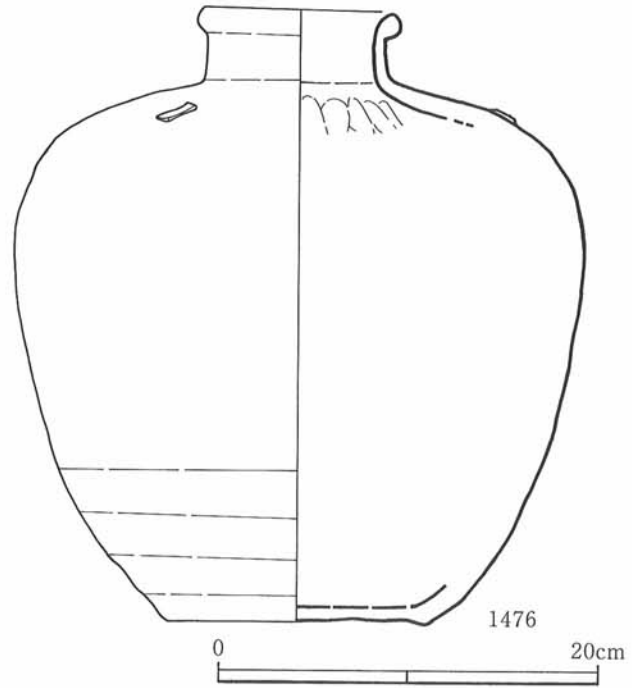
陶器では1・2面より上層では肥前銅緑釉蛇の目釉剥ぎ皿や、体部が半球形の萩藁

灰釉碗が認められる。それに対して3面やその下層堆積層からは、萩藁灰釉碗は出土せず、体部が外傾して立ち上がる土灰釉を施釉した碗(1491、1492、1493)が中心となる。鉢類も土灰釉を施釉した萩の製品が目立ち(1508～1511)、須佐唐津製品は出土しない。1512の須佐唐津の播鉢は体部が内湾し、口縁の肥厚部も幅があり丸味のある作りをしている。これらの陶器の組成は18世紀前半頃の廃棄土坑のそれとは異なり、古い様相を示すとみられる。

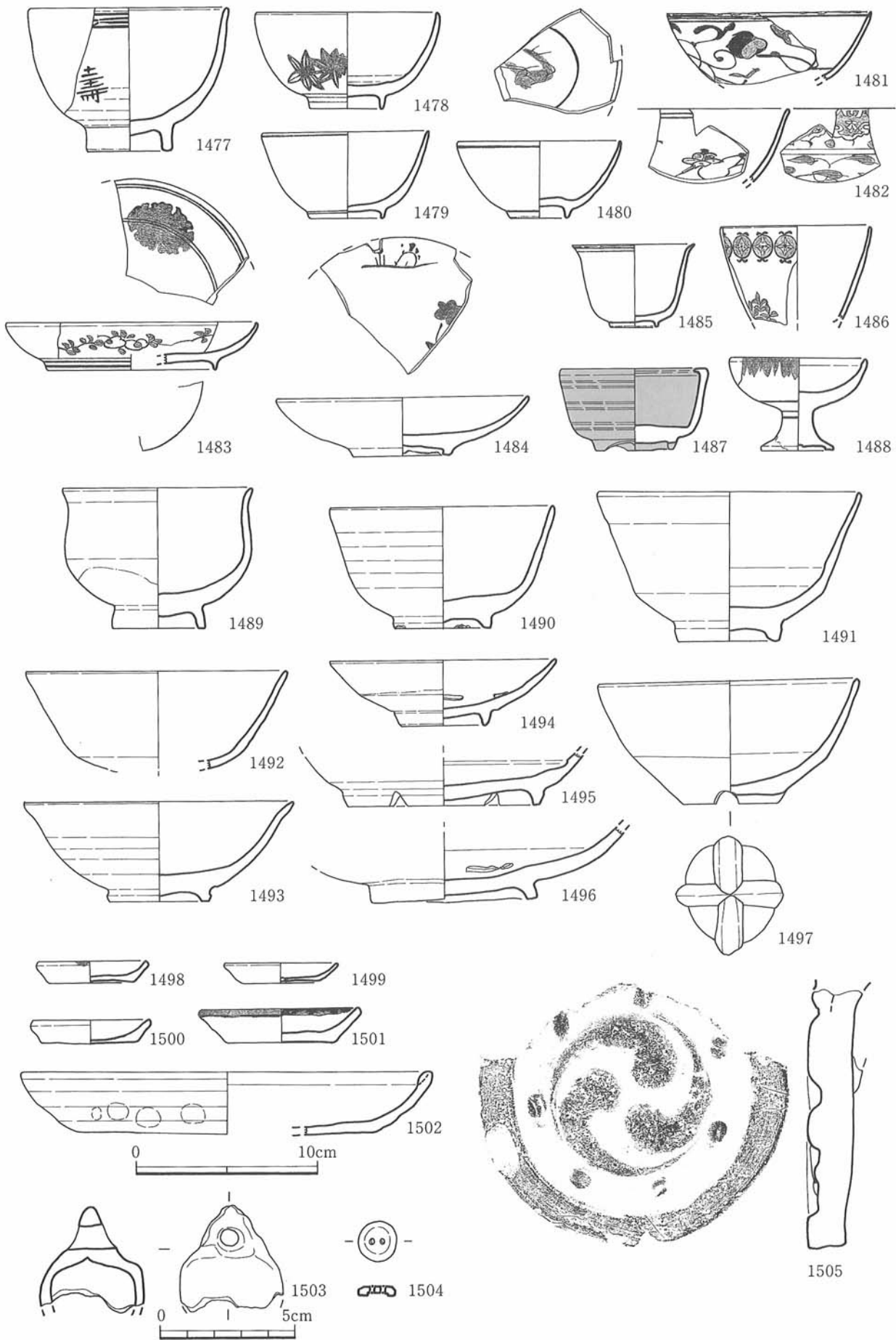
1489は鉄釉の碗で萩。1490は土灰釉碗でたたみ付けに貝目痕がある萩。1491は土灰釉碗で輪状の胎土目痕が残る。1492、1493は口径に対して器高が低い萩碗で土灰釉。1494は灰釉(黄釉)の胎土目が残る皿で、須佐唐津製とみられる。1495、1496は土灰釉の皿または鉢で、輪状の胎土目痕が残る。1495は割高台。1497は透明釉をかけた碗で、底部は十文字に割り切る。特徴的な遺物として緑釉をかけた陶製の釦(1504)が出土した。外堀地区での調査では他に出土例がない。1506、1507は備前の水屋甕で、輪状の貼文がある。1508は土灰釉の鉢で割高台。1509は土灰釉で貝目痕がある鉢。萩の製品。1510、1511も土灰釉をかけた鉢。

土師器のうち皿は1498～1501。このうち1498、1499は器の厚さが薄手である。1502は把手の付く在地系の焙烙。1503は土鈴。1505は三巴文の軒丸瓦。1513は瓦質土器の甕。短い三足がつき体部はハケメ調整。口縁は肥厚させて短く直に立ち上がる。

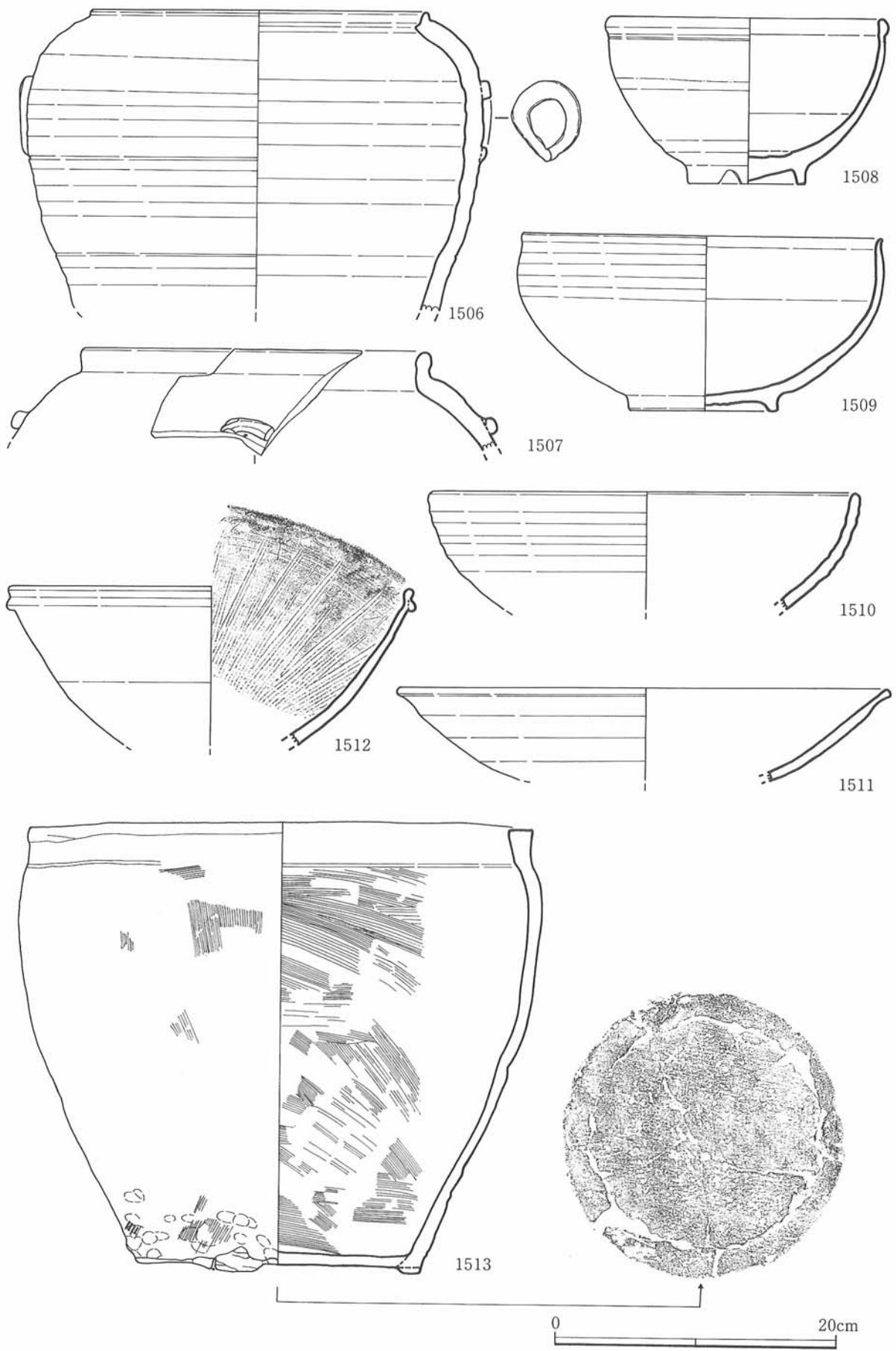
3面の時期は、3面下の堆積層で17世紀中頃の肥前磁器(1479、1480、1484)や輸入磁器(1481)があり、陶器では貝目痕や古相を示す萩焼の碗、薄手の土師器皿などが認められることから、17世紀中頃以降とみられる。また1・2面は18世紀にはいるとみられるので、3面は17世紀後半から18世紀にはいる時期と考えられる。



第168図 1-SK532出土遺物⑤(1/4)



第169图 1地区北端区出土遺物①(1/2、1/3)



第170图 1地区北端区出土遺物②(1/4)

第3表 1 地区出土陶磁器一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	発掘番号	収蔵番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1	81	47	1-F	SK49	磁器	碗	(11.2)	6.2	6.6	染付	広東碗	肥前系
2	81	47	1-F	SK49	磁器	碗	(10.4)	5.9	5.6	染付	広東碗	肥前系
3	81	47	1-F	SK49	磁器	碗			6.2	染付	広東碗	肥前系
4	81	47	1-F	SK49	磁器	碗	(11.8)	6.2	6.0	染付	広東碗 三足ハマ痕	肥前系 19C 前
5	81	47	1-F	SK49	磁器	碗			6.4	染付	広東碗 三足ハマ痕	肥前系
6	81	47	1-F	SK49	磁器	小皿	7.3	1.8	4.6	染付	輪花	肥前系 18C 末-19C 前
7	81	47	1-F	SK49	磁器	油壺	2.2			染付		肥前系 18C 後-19C 初
8	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	(11.8)	6.4	4.4	藁灰釉	間口碗	萩
9	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	10.5	6.5	3.9	藁灰釉		萩
10	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	8.5	5.3	2.8	透明釉	丸碗 トキン状高台 内面にベンガラ状の付着物	京信楽系
11	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	(8.8)	4.4	3.0	灰釉	貼り付け高台	瀬戸美濃系
12	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	13.0	6.3	4.4	藁灰釉		萩
13	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	11.2	6.3	4.4	藁灰釉		萩
14	81	47	1-F	SK49	陶器	皿	(14.0)	4.2	6.0	灰釉(黄釉)	胎土目	須佐唐津
15	81	47	1-F	SK49	陶器	碗	(17.0)	8.1	6.2	土灰釉	唇形碗 トキン状高台	萩
16	81	47	1-F	SK49	陶器	割徳利	4.2	*23.0		藁灰釉	内面土灰釉	
17	81	48	1-F	SK49	土師器	皿	6.4	1.5	4.2		糸切り	
18	81	48	1-F	SK49	土師器	皿	(5.6)	1.3	3.8			
19	81	48	1-F	SK49	土師器	皿	8.9	2.1	5.4		糸切り	灯明皿
20	81	47	1-F	SK49	陶器	小皿	(8.4)	2.5	4.2	灰釉(黄釉)	糸切り	須佐唐津 灯明皿として使用
21	81	48	1-F	SK49	陶器	小皿	(8.2)	2.2	4.8	灰釉	胎土目 糸切り	萩
22	81	48	1-F	SK49	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.1	2.4			布目痕	
23	81	48	1-F	SK49	土師器	焼塩壺(身)	5.3	7.0	3.9		布目痕	
24	81	48	1-F	SK49	土製品	土鈴					焼成前の穿孔 底部板目	
25	81	48	1-F	SK49	土製品	土人形					龍 型押成形	頭部のみ
26	81	47	1-F	SK49	磁器	皿		(7.6)		青花		景徳鎮
27	82	47	1-F	SK49	陶器	片口	(18.8)	10.8	9.2	灰釉	目跡	須佐唐津か
28	82	47	1-F	SK49	陶器	片口	(21.8)	9.9	9.8	灰釉	底面楔形のノミ痕	萩
29	82	48	1-F	SK49	陶器	植木鉢	(15.8)	10.0	(11.2)	無釉	焼成後穿孔 底部板目	
30	82	48	1-F	SK49	瓦質	焙塔	長9.9	厚2.2	幅2.7			
31	82	48	1-F	SK49	瓦質	火鉢の脚			(19.8)			
32	82	48	1-F	SK49	瓦質	駒付鉢	(25.2)	17.6	21.8		ハケメ調整 焼成後穿孔	植木鉢に転用
33	82	48	1-F	SK49	瓦	軒棧瓦					唐草文	
34	82	48	1-F	SK49	瓦	軒丸瓦					土師質 珠文 三巴文	
35	82	48	1-F	SK49	瓦	瓦当径9.6					植文	瓦当のみ
36	83	49	1-D	SK80	磁器	皿	(14.0)	4.4	(6.3)	白磁	輪花 漆継	肥前 18C 前
37	83	49	1-D	SK80	磁器	散蓮花	長10.9	高5.0	幅5.4	青花		清朝 18C 末-19C 中
38	83	49	1-D	SK80	磁器	皿	12.6	3.3	8.0	染付	口縁 コンニャク印料五弁花「大明年製」くずし 漆継	肥前 18C 前半-中
39	83	49	1-D	SK80	磁器	皿	14.6	4.4	7.8	染付	輪花 五弁花 高台ハリ支え「大明年製」くずし	肥前
40	83	49	1-D	SK80	磁器	皿	(20.0)			青花	輪花	景徳鎮 16C 末
41	83	49	1-D	SK80	陶器	皿	長22.5 短20.0	7.4	9.2	化粧掛け	木葉形	萩
42	83	49	1-D	SK80	陶器	灯明受皿	口径7.1 受部径(12.0)	5.7	6.2	灰釉		須佐唐津
43	83	49	1-D	SK80	陶器	碗	(10.4)	5.4	3.8	透明釉	腰折碗 花卉(白土)葉(呉須) 三足ハマ痕	京信楽系
44	83	49	1-D	SK80	陶器	碗	8.2	4.4	3.9	灰釉(土灰釉)		京信楽系か
45	83	49	1-D	SK80	陶器	油徳利	2.5	16.2	7.4	鉄釉	油受部穿孔有	
46	83	49	1-D	SK80	土師器	皿	7.3	1.6	3.5		糸切り	灯明皿
47	83	49	1-D	SK80	土師器	皿	10.2	2.2	6.2		糸切り 板目	灯明皿
48	83	49	1-D	SK80	土師器	皿	5.9	1.1	4.5			灯明皿
49	83	49	1-D	SK80	土師器	皿	5.9	1.5	4.7		糸切り	墨書「申」灯明皿
50	83	49	1-D	SK80	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.7	2.2			布目	
51	83	49	1-D	SK80	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.8	2.0			布目	
52	83	49	1-D	SK80	土師器	焼塩壺(身)	6.6	9.7	5.0		粗い布目 板作り	銘不明
53	83	49	1-D	SK80	土師器	焼塩壺(身)	(4.6) 受部径(6.6)	8.9	(6.0)		「泉徳伊織」粗い布目 板作り	
54	83	49	1-D	SK80	土製品	埴塀	4.1	2.0				
55	83	49	1-D	SK80	土製品	埴塀	3.8	1.9				
56	84	49	1-D	SK92	磁器	皿	(12.0)	2.5	6.2	染付	輸出用カップアンドソーサーの受け皿	肥前 18C 前
57	84	49	1-D	SK92	磁器	皿	13.2	2.6	8.0	染付	ハリ支え 墨弾き 「大明年製」	肥前 1690-18C
58	84	49	1-D	SK92	磁器	皿	(15.4)	2.9	(8.8)	染付	ハリ支え 漆継 中国写し	肥前 1670-90
59	84	50	1-D	SK92	磁器	皿	12.9	3.4	4.0	染付	蛇の目輪割ぎ 高台無釉	肥前 17C 後-18C 前
60	84	50	1-D	SK92	磁器	皿	12.3	2.5	7.9	白磁	稜花 ハリ支え	肥前 17C 後
61	84	50	1-D	SK92	磁器	蓋	7.7 口径9.3	受部径7.7 器高2.6	染付	型紙摺り 宝文	肥前 1690-18C 前	
62	84	50	1-D	SK92	磁器	皿	8.2	1.8	4.8	染付	型紙摺り 菊花文	肥前 18C 前
63	84	50	1-D	SK92	磁器	皿	(8.0)	1.9	3.2	染付	見込「大明年」漆継	肥前 1630-40年
64	84	50	1-D	SK92	磁器	香炉(火入れ)	(6.0)	5.2	5.1	白磁		肥前 17C 後半-18C 前
65	84	50	1-D	SK92	磁器	仏飯器	7.9	6.1	3.9	染付		肥前 17C 中-末
66	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	長(11.1) 短(10.6)	6.5	4.2	藁灰釉	俵形碗	萩
67	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(10.8)	6.0	3.6	藁灰釉		萩
68	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(12.4)	7.1	4.4	土灰釉(透明釉)	三足ハマ痕 胎土褐色	
69	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(6.2)	6.8	4.2	藁灰釉		萩
70	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	10.8	6.1	4.0	藁灰釉	渦巻き高台	萩
71	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(10.9)	6.3	3.9	藁灰釉	渦巻き高台	萩
72	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(10.8)	6.3	4.2	藁灰釉	渦巻き高台	萩
73	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(11.0)	6.2	4.2	藁灰釉	渦巻き高台	萩

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	排戻番号	国産番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
74	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(11.7)	5.8	4.0	藁灰釉	竈
75	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	10.2	6.0	3.6	藁灰釉	竈
76	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(10.2)	6.1	3.8	藁灰釉	トキン状高台 溶融不良
77	84	50	1-D	SK92	陶器	碗	(10.8)	5.7	3.8	藁灰釉	竈
78	84	51	1-D	SK92	陶器	碗	12.6	5.7	4.5	化粧掛け	竈
79	84	52	1-D	SK92	陶器	小壺	3.3	3.1	3.6	灰釉	糸切り
80	84	51	1-D	SK92	陶器	小碗	(6.6)	3.7	(3.4)	鉄釉	竈か 胎土では須佐唐津か
81	84	51	1-D	SK92	陶器	碗	(8.1)	5.4	3.5	鉄釉	肥前
82	84	51	1-D	SK92	陶器	碗	(14.8)	7.0	5.1	土灰釉	青形碗
83	85	51	1-D	SK92	陶器	碗	9.8	6.6	4.9	透明釉	外面横刷毛目 内面打刷毛目
84	85	51	1-D	SK92	陶器	香炉(火入れ)			5.1	透明釉	京焼風陶器 「清水 〇」銘
85	85	51	1-D	SK92	陶器	碗	(10.8)	7.4	4.8	透明釉	呉器手碗
86	85	51	1-D	SK92	陶器	香炉(火入れ)	(13.8)	7.3	6.4	透明釉	茶手
87	85	51	1-D	SK92	陶器	碗	(10.0)	8.5	7.0	白化粧	刷毛目 緋目 割高台 線刻「×」
88	85	51	1-D	SK92	陶器	碗	(10.3)	*5.5		透明釉	京焼風陶器 呉須(青・黒)
89	85	52	1-D	SK92	陶器	茶入	(3.4)			鉄釉	17C 後-18C 前
90	85	52	1-D	SK92	陶器	蓋	口径(7.2)		(5.2)	灰釉	三鳥手
91	85	51	1-D	SK92	陶器	碗				透明釉	京焼風陶器か 呉須(黒・緑) 内面無釉
92	85	53	1-D	SK92	陶器	小皿	8.6	2.1	4.1	灰釉(黄釉)	胎土目 暮筒底
93	85	51	1-D	SK92	陶器	蓋	7.9	2.4	4.4	灰釉	糸切り
94	85	51	1-D	SK92	陶器	蓋	口径8.7	3.0	5.0	土灰釉(灰釉)	糸切り
95	85	54	1-D	SK92	陶器	灯明受皿	7.0	1.5	9.2		
96	85	52	1-D	SK92	陶器	灯明受皿	(11.8)	2.0	2.2		備前
97	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	13.5	3.1	6.0	土灰釉(灰釉・黄釉)	トキン状高台 胎土目
98	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	(14.0)	4.3	(5.3)	透明釉	輪花 輪状胎土目 刷毛目
99	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	(19.6)	6.9	8.0	透明釉	刷毛目
100	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	22.0	6.2	(11.4)	藁灰釉・鉄釉掛分け	竈か
101	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	(21.2)	4.7	8.2	土灰釉(灰釉)	胎土目 高台内ノミ痕
102	85	51	1-D	SK92	陶器	皿	(17.6)	5.9	(7.8)	土灰釉(灰釉)	胎土目
103	85	51	1-D	SK92	陶器	仏花瓶	9.3	14.2	8.5	土灰釉(灰釉)	底面墨書
104	85	52	1-D	SK92	陶器	皿				藁灰釉 緑釉	三足付型皿 瓜形
105	85	52	1-D	SK92	陶器	台付皿	(22.0)	(15.3)	(12.0)	藁灰釉 台内土灰釉	竈
106	85	52	1-D	SK92	陶器	土甗	口径8.7		6.0	土灰釉(透明釉)	焼成後底部外面より穿孔
107	86	52	1-D	SK92	陶器	鉢	(16.8)	7.3	(8.0)	土灰釉	暮筒底 内面無釉
108	86	52	1-D	SK92	陶器	鉢	(19.0)	8.5	9.6	土灰釉(灰釉)	胎土目
109	86	52	1-D	SK92	陶器	鉢	18.9	9.9	9.9	灰釉(黄釉)	胎土目
110	86	52	1-D	SK92	陶器	鉢	(22.6)	10.5	9.8	灰釉(黄釉)	胎土目 高台内ノミ痕
111	86	52	1-D	SK92	陶器	片口	(16.9)	8.9	8.6	土灰釉(灰釉)	胎土目
112	86	52	1-D	SK92	陶器	甕	(11.8)	12.4	11.0		
113	86	52	1-D	SK92	陶器	鉢	(16.8)	12.2	11.0	灰釉	胎土目
114	86	52	1-D	SK92	陶器	甕	(23.2)	18.7	(11.4)	二彩	砂目 横刷毛目
115	86	52	1-D	SK92	陶器	播鉢	(29.4)	11.0	12.6	鉄釉	須佐唐津
116	87	54	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(身)	(6.4) 受部径(7.4)				布目 板作り
117	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.0	2.1			
118	87	54	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(身)	(5.6)	8.5	4.1		輪積み
119	87	54	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(身)	(5.6) 受部径(6.9)				布目 板作り
120	87	54	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(身)	(5.4) 受部径(6.6)	9.0	(6.0)		銘不明
121	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.0	2.1			粗い布目 板作り
122	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.1	2.5			布目 上面に釘書き有
123	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.6	2.3			布目
124	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.0	2.2			布目
125	87	53	1-D	SK92	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.2	1.9			布目
126	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	6.1	1.2	4.5		
127	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	5.8	1.2	4.4		灯明皿
128	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(6.0)	1.4	(4.4)		糸切り
129	87	53	1-D	SK92	土師器	皿		1.8			耳皿風のくびれ有 糸切り
130	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	7.8	2.1	4.3		糸切り
131	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	7.4	1.6	4.6		糸切り
132	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	7.5	1.7	4.8		糸切り
133	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	7.4	1.9	4.2		灯明皿
134	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(6.8)	1.4	(5.0)		糸切り
135	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(11.4)	2.0	(7.0)		糸切り
136	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(11.2)	2.7	5.9		板目
137	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	10.0	2.4	5.6		灯明皿
138	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(10.8)	2.2	(6.4)		糸切り
139	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(11.6)	2.7	(6.0)		糸切り
140	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(10.8)	2.3	(6.4)		灯明皿
141	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(9.8)	2.3	6.2		糸切り
142	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	10.6	2.0	6.5		糸切り
143	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	10.6	2.0	5.7		灯明皿
144	87	53	1-D	SK92	土師器	皿	(11.0)	2.7	(5.4)		板目
145	87	53	1-D	SK92	土製品	釉羽口					
146	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塼	2.0	1.4			金とみられる細粒付着 溶着物有り

単位：cm ()：復元値 *：残存値

通物番号	標記番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
147	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	3.4	1.7		金・銀粒付着 溶着物有り	
148	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	3.6	1.7			
149	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	4.0	1.8		金・銀粒付着 溶着物有り	
150	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	4.3	2.0			
151	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	2.4	2.0			
152	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	4.2	2.1		金とみられる細粒付着 溶着物有り	
153	87	53	1-D	SK92	土製品	埴塙	(6.5)			内面溶着物有り	
154	87	53	1-D	SK92	土製品	砥石か	長7.5	厚3.9	幅1.8	瓦片を転用	
155	87	54	1-D	SK92	瓦	軒丸瓦	瓦当径14.8			珠文 三巴文	
156	88	53	1-D	SK92	土師器	焙烙	長(把手部含)(25.0)	口径15.6	(15.6)	外面スス付着	
157	88	53	1-D	SK92	土師器	焙烙	(27.0)	6.0	(18.4)	内耳付 外面スス付着	
158	88	52	1-D	SK92	瓦質	焙烙	(31.8)			内面ミガキ	内耳の有無は不明
159	88	53	1-D	SK92	瓦質	鉢				口縁部外面印花	
160	89	55	1-C	SK109	磁器	碗	(11.2)	6.5	4.4	染付	菊文「大明年製」
161	89	55	1-C	SK109	磁器	碗	11.0	6.4	4.4	染付	菊文「大明年製」
162	89	55	1-C	SK109	磁器	小碗	(8.4)	4.7	(3.1)	染付	草花文
163	89	55	1-C	SK109	磁器	猪口	(7.0)	5.2	4.0	白磁	
164	89	55	1-C	SK109	磁器	小杯	7.2	4.6	3.0	白磁	
165	89	55	1-C	SK109	磁器	小杯	(7.6)	4.4	3.2	染付	コンニャク印判 菊文
166	89	55	1-C	SK109	磁器	仏飯器	7.7	5.4	3.9	染付	雨降り文
167	89	55	1-C	SK109	磁器	仏飯器	8.2	5.1	(4.4)	染付	
168	89	55	1-C	SK109	磁器	油壺	3.2	8.7	4.6	染付	草花文
169	89	55	1-C	SK109	磁器	紅猪口	(5.4)	2.5	(2.4)	白磁	
170	89	55	1-C	SK109	磁器	紅猪口	5.9	2.7	2.3	染付	草花文
171	89	55	1-C	SK109	磁器	皿	13.9	3.9	7.2	染付	口縁 コンニャク印判五弁花 唐草文「大明年製」
172	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	10.6	6.4	4.1	藁灰釉	渦巻き高台
173	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	10.9	6.1	3.9	藁灰釉	渦巻き高台
174	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	(10.4)	6.5	(3.8)	藁灰釉	渦巻き高台
175	89	56	1-C	SK109	陶器	小碗	8.0	3.3	5.1	土灰釉	トキン状高台
176	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	11.1	6.4	4.2	藁灰釉	
177	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	10.7	6.1	3.6	藁灰釉	トキン状高台
178	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	(11.6)	6.3	4.0	藁灰釉	渦巻き高台
179	89	56	1-C	SK109	陶器	小碗	(7.9)	4.8	(3.1)	土灰釉	トキン状高台
180	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	(11.5)	5.9	4.1	藁灰釉	トキン状高台
181	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	(10.4)	6.1	4.2	藁灰釉	渦巻き高台
182	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	(10.8)	5.9	3.8	藁灰釉	トキン状高台
183	89	56	1-C	SK109	陶器	小碗	9.0	6.1	3.5	土灰釉	トキン状高台
184	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	11.6	6.4	4.6	藁灰釉	
185	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	12.0	5.7	3.9	藁灰釉	
186	89	55	1-C	SK109	陶器	碗	11.4	6.3	4.2	藁灰釉	トキン状高台
187	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	9.0	5.7	3.5	土灰釉	トキン状高台
188	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	(11.0)	6.0	4.2	藁灰釉	渦巻き高台
189	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	(10.6)	7.0	(4.2)	藁灰釉	渦巻き高台
190	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	10.4	6.2	4.5	藁灰釉	トキン状高台 窟変
191	89	56	1-C	SK109	陶器	碗	(9.9)	6.1	3.8	藁灰釉	トキン状高台
192	90	56	1-C	SK109	陶器	碗	9.7	6.1	4.8	透明釉	京焼風陶器 刻印あり
193	90	56	1-C	SK109	陶器	碗	(11.0)	6.6	(4.9)	透明釉	刷毛目
194	90	56	1-C	SK109	陶器	碗	長13.2 短5.8	6.5	6.7	土灰釉	春形碗 刷毛目 碁筒底
195	90	56	1-C	SK109	陶器	碗	長13.8 短8.5	7.2	6.4	土灰釉	春形碗 碁筒底 金泥塗布
196	90	57	1-C	SK109	陶器	鉢	(24.8)	12.7	(11.4)	土灰釉	胎土目
197	90	57	1-C	SK109	陶器	壺	(17.8)				櫛掻波状文
198	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	5.8	1.3	4.4		糸切り
199	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	6.1	1.2	4.6		糸切り
200	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	8.0	1.8	5.6		糸切り
201	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	8.3	1.6	5.6		糸切り
202	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	7.3	1.6	4.2		糸切り
203	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	7.6	1.8	4.8		糸切り
204	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	8.1	1.8	5.2		糸切り
205	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	7.5	2.0	4.2		糸切り
206	90	54	1-C	SK109	陶器	皿	10.5	2.3	4.9		紫焼きか
207	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	10.2	2.3	5.5		糸切り
208	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	10.1	2.2	5.3		糸切り
209	90	54	1-C	SK109	土師器	皿	10.5	2.0	6.6		糸切り 板目
210	90	57	1-C	SK109	土師器	鉢	(9.2)	4.6	(6.8)		
211	90	57	1-C	SK109	土製品	埴塙	3.7	1.5			
212	90	57	1-C	SK109	陶器	摺鉢	(33.4)			鉄釉	
213	90	54	1-C	SK109	陶器	盥	(32.6)			鉄釉	格子目叩き
214	90	54	1-C	SK109	陶器	鉢			(14.8)	二彩	砂目 刷毛目 鉄釉
215	91	57	1-C	SK111	磁器	碗	(10.3)	6.1	4.7	染付	「大明年製」くずし
216	91	57	1-C	SK111	磁器	碗	(13.8)	7.5	5.8	染付	
217	91	57	1-C	SK111	磁器	猪口	7.0	5.2	3.8	染付	
218	91	58	1-C	SK111	磁器	香炉(火入れ)	9.4	5.1	6.7	青磁	高台鉄泥「大明化製」
219	91	57	1-C	SK111	磁器	蓋	つまみ径3.5	2.8	9.4	白磁	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	邦厨番号	国庫番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
220	91	57	1-C	SK111	磁器	碗	10.0	6.2	4.3	白磁	見込に重ね焼き痕	肥前
221	91	58	1-C	SK111	磁器	瓶			4.7	染付		肥前 17C末-18C前
222	91	57	1-C	SK111	磁器	皿	(14.0)	3.8	6.8	染付	コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	肥前
223	91	57	1-C	SK111	磁器	皿	13.4	3.4	8.2	染付	コンニャク印判五弁花	肥前
224	91	57	1-C	SK111	磁器	皿	13.8	3.8	8.2	青磁染付	輪花 五弁花 外面青磁「金」	肥前 17C後-18C前
225	91	59	1-C	SK111	磁器	皿	(13.4)	3.7	4.9	青磁	蛇の目軸割ぎ トキン状高台 高台無軸	肥前 18C前
226	91	57	1-C	SK111	磁器	皿	(14.2)			白磁	桜花 内面に陽出文	肥前
227	91	57	1-C	SK111	磁器	皿	(13.3)	4.0	5.4	染付	蛇の目軸割ぎ 高台無軸	肥前 18C前
228	91	58	1-C	SK111	磁器	皿	長*12.9	*4.3		染付	魚形 三足付	肥前
229	91	58	1-C	SK111	磁器	小壺	(6.8)	5.2	5.3	染付	蛇の目高台	肥前
230	91	58	1-C	SK111	磁器	水滴				白磁		肥前
231	91	58	1-C	SK111	磁器	水滴				染付	胎形 墨付着	肥前
232	91	58	1-C	SK111	磁器	小瓶	器体部径2.3	3.6	2.9	白磁	外面貝・ウニの陽出文	肥前
233	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(11.6)	6.5	3.8	霽灰釉(白釉)	トキン状高台	萩
234	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(10.6)	6.3	4.0	霽灰釉	渦巻き高台	萩
235	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(10.5)	6.7	4.1	霽灰釉	渦巻き高台	萩
236	92	58	1-C	SK111	陶器	小碗	8.4	5.2	3.2	霽灰釉	トキン状高台	萩
237	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(11.8)	7.0	4.6	透明釉		肥前か
238	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(11.0)	6.4	4.6	透明釉	刷毛目	
239	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(10.0)	5.6	3.4	霽灰釉	トキン状高台 窯変	萩
240	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(10.8)	6.2	3.8	霽灰釉		萩
241	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	10.6	6.4	4.0	霽灰釉	渦巻き高台	萩
242	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	(10.8)	6.2	4.1	霽灰釉	渦巻き高台	萩
243	92	58	1-C	SK111	陶器	小碗	8.9	5.0	4.5	土灰釉	トキン状高台	萩
244	92	59	1-C	SK111	陶器	小壺	(4.2)	3.2	4.2	灰釉		
245	92	59	1-C	SK111	陶器	碗	(14.0)	(7.2)	7.0	土灰釉	香形碗 碁筋底	萩
246	92	58	1-C	SK111	陶器	碗	10.9	6.6	4.6	透明釉	刷毛目	肥前
247	92	59	1-C	SK111	陶器	香炉(火入れ)	10.6	7.1	5.0	透明釉	呉須絵 京焼風陶器「清水」	肥前
248	92	59	1-C	SK111	陶器	碗	(9.7)	5.7	(4.8)	透明釉	京焼風陶器 桜園山水文「紫」	肥前
249	92	59	1-C	SK111	陶器	皿	12.3	4.0	5.2	灰釉(黄釉)	胎目	須佐唐津か 灯明皿
250	92	59	1-C	SK111	陶器	皿	20.4	6.6	8.2	透明釉	蛇の目軸割ぎ 刷毛目	肥前 18C
251	92	59	1-C	SK111	陶器	皿	20.5	6.4	8.0	透明釉	京焼風陶器 呉須絵「紫」	肥前
252	92	60	1-C	SK111	土師器	皿	6.2	1.3	4.3		糸切り	内面墨書
253	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	6.5	1.3	4.6		糸切り	灯明皿
254	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	7.5	1.8	4.6		糸切り	灯明皿
255	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	(7.4)	2.3	4.4			灯明皿
256	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	7.3	1.7	3.8		糸切り 板目	灯明皿
257	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	7.7	7.6	4.2		糸切り	
258	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	10.2	2.2	5.5		糸切り	
259	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	10.3	2.2	6.0		糸切り	
260	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	(10.5)	2.6	5.0		糸切り 板目	灯明皿
261	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	(10.2)	2.2	5.8		糸切り	灯明皿
262	92	59	1-C	SK111	土師器	皿	10.3	2.3	6.0		糸切り	
263	92	60	1-C	SK111	土製品	埴塼	4.7	2.1	0.6			
264	92	58	1-C	SK111	土製品	埴塼壺(身)	長3.4	厚1.6	幅4.6		輪積み 小型	
265	92	60	1-C	SK111	土師器	埴塼壺(身)	(6.0)	6.8	3.6			
266	92	59	1-C	SK111	土師器	埴塼壺(蓋)	器径8.0	2.1				
267	92	59	1-C	SK111	土師器	埴塼壺(身)	受部径6.5	(5.1)	5.2		「御志塩師澄漆伊織」粗い布目 板作り	17C末-18C前
268	93	60	1-F	SK128	磁器	皿	12.6	3.4	4.5	染付	蛇の目軸割ぎ 高台無軸	肥前 18C前
269	93	60	1-F	SK128	磁器	小皿	(9.0)	1.7	5.8	白磁	手皿皿 口縁 型打ち成形	肥前 1690-18C前
270	93	60	1-F	SK128	磁器	皿	(14.0)	3.7	(4.6)	染付	菊文	肥前 1630-40
271	93	60	1-F	SK128	磁器	蓋	9.8	8.6	2.7	染付		肥前 18C中・末
272	93	60	1-F	SK128	磁器	皿	(13.0)	3.3	(8.2)	青花		景徳鎮 16C中頃か
273	93	60	1-F	SK128	陶器	碗	15.2	6.9	5.3	透明釉	蛇の目軸割ぎ 刷毛目	肥前 18C前-中
274	93	60	1-F	SK128	土師器	皿	6.2	1.2	4.0		糸切り	
275	93	60	1-F	SK128	土師器	皿	6.2	1.1	4.6		糸切り	
276	93	60	1-F	SK128	土師器	皿	7.5	1.3	5.0		糸切り	
277	93	60	1-F	SK128	土師器	皿	7.2	2.0	4.5		糸切り	灯明皿
278	93	60	1-F	SK128	土師器	皿	7.8	2.0	5.2		糸切り 内外面スス付着	灯明皿
279	93	60	1-F	SK128	土師器	埴塼壺(身)	(6.6) 受部径(8.2)	8.4	(5.6)		「鹽波浄因」粗い布目 板作り	
280	93	60	1-F	SK128	土師器	埴塼壺(蓋)	器径7.6	1.9			布目	
281	93	60	1-F	SK128	土師器	埴塼壺(蓋)	器径7.6	2.1			布目	
282	93	60	1-F	SK128	陶器	大甕	(33.6)	45.2	18.8		格子目叩き	肥前
283	93	60	1-F	SK128	土製品	輪羽口	羽口上端径3.4×3.1					
284	93	60	1-F	SK128	土製品	埴塼	10.0	3.0				
285	93	60	1-F	SK128	土製品	土人形	長6.0	厚2.7			馬	
286	94	61	1-F	SK139	磁器	小碗	7.5	3.7	3.4	白磁		肥前
287	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	9.7	4.0	4.3	白磁		肥前
288	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	(9.3)	5.3	3.6	白磁		肥前
289	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	8.4	4.6	3.5	染付		肥前
290	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	(9.0)	5.6	4.8	染付	「大明年製」くずし 漆継	肥前
291	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	(8.4)	4.9	3.4	染付	高台無軸	肥前
292	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	(11.4)	6.6	(4.4)	染付		肥前

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	探検番号	国辰番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
293	94	61	1-F	SK139	磁器	碗	10.0	5.6	3.9	染付	漆継	肥前
294	94	61	1-F	SK139	陶器	碗	(11.7)	7.9	5.1	陶胎染付		肥前
295	94	62	1-F	SK139	磁器	碗				色絵		肥前
296	94	61	1-F	SK139	磁器	碗				色絵		肥前
297	94	61	1-F	SK139	磁器	猪口	7.3	5.1	3.9	白磁		肥前
298	94	61	1-F	SK139	磁器	猪口	(7.7)	5.4	(5.0)	染付		肥前
299	94	61	1-F	SK139	磁器	紅皿	3.2	1.3	1.5	白磁		肥前
300	94	61	1-F	SK139	磁器	小杯	(6.1)	3.1	(3.0)	染付		肥前
301	94	61	1-F	SK139	磁器	小杯	5.7	3.3	2.7	染付	型紙摺り	肥前
302	94	61	1-F	SK139	磁器	小杯	(6.8)	3.4	2.9	染付	折松葉文	肥前
303	94	61	1-F	SK139	磁器	皿	(12.0)	3.1	6.4	白磁か	口髹	肥前
304	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	9.5	2.7	3.3	白磁	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
305	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	9.9	2.8	3.6	白磁	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前 灯明皿として使用か
306	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	9.9	3.0	3.1	白磁	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
307	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	12.8	3.2	3.9	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
308	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	13.1	3.5	3.9	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
309	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	12.4	3.7	4.0	染付	蛇ノ目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
310	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	10.0	2.7	6.0	染付	「元」ハリ支え アヤメ文	肥前
311	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	(14.2)	3.4	7.9	染付	輪花 五弁花「大明成化年(製)」	肥前
312	94	62	1-F	SK139	磁器	皿	12.4	3.8	5.3	染付	蛇の目軸刺ぎ コンニャク印判五弁花	肥前
313	95	62	1-F	SK139	磁器	合子 蓋	(6.0)			色絵		肥前
314	95	61	1-F	SK139	磁器	蓋付碗	(7.0)	3.7	3.4	染付		肥前 18C 前
315	95	61	1-F	SK139	磁器	蓋	10.6 器径12.2			染付		肥前
316	95	62	1-F	SK139	陶器	蓋付碗	12.0			陶胎染付		肥前 18C 前
317	95	66	1-F	SK139	磁器	蓋				輪裏紅	灰砂 口縁断面を研磨	肥前
318	95	62	1-F	SK139	磁器	蓋付筒碗	12.2	9.4	7.6	染付		肥前
319	95	66	1-F	SK139	磁器	香炉	口径(22.5)	12.4	11.6	青磁	三足脚付 印花 蛇の目高台 軸刺ぎ部に鉄泥	肥前
320	95	62	1-F	SK139	磁器	水注				染付		肥前
321	95	61	1-F	SK139	磁器	皿				青花	口縁部虫食い	景德鎮
322	95	62	1-F	SK139	磁器	皿			(12.5)	青花	底面放射状のケズリ 漆継	景德鎮
323	95	62	1-F	SK139	磁器	皿			(12.4)	青花	底面放射状のケズリ 漆継 陰刻文	景德鎮
324	95	62	1-F	SK139	磁器	皿			(12.4)	白磁	高台内・高台脇放射状のケズリ 陰刻文	景德鎮
325	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	11.0	6.2	4.4	藁灰釉	剥落多し	萩
326	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	10.6	6.4	3.6	藁灰釉		萩
327	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(11.3)	6.1	4.6	藁灰釉	窟裏	萩
328	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	10.1	6.7	3.6	藁灰釉	トキン状高台	萩
329	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	10.8	7.0	4.2	藁灰釉		萩
330	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(10.2)	7.1	4.0	藁灰釉		萩
331	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	11.1	6.5	4.5	藁灰釉	トキン状高台	萩
332	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	10.8	6.4	4.1	藁灰釉	トキン状高台	萩
333	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(10.5)	6.0	4.0	藁灰釉		萩
334	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(10.8)	5.7	3.4	藁灰釉	渦巻き高台	萩
335	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(10.0)	6.2	4.1	藁灰釉		萩
336	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	11.2	6.5	4.5	藁灰釉	トキン状高台	萩
337	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(10.4)	6.5	4.3	藁灰釉	兵器手碗	
338	96	64	1-F	SK139	陶器	小碗	8.4	3.5	3.9	土灰釉		萩
339	96	62	1-F	SK139	磁器	碗	8.3	4.5	3.2	白磁	トキン状高台	
340	96	64	1-F	SK139	陶器	小碗	(7.7)	4.5	4.6	土灰釉		
341	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(11.2)	7.6	4.5	透明釉	兵器手碗	肥前
342	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(12.2)	7.8	4.8	透明釉	兵器手碗	肥前
343	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	9.5	5.2	4.1	透明釉	京焼風陶器 樓閣山水文「清水」	肥前
344	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	10.5	7.2	4.6	透明釉	兵器手碗	肥前
345	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	(11.6)	7.3	(4.8)	透明釉	外面磨刷毛目 内面打刷毛目 胎土黒灰色系	肥前
346	96	63	1-F	SK139	陶器	碗	11.0	6.7	4.5	透明釉	外面磨刷毛目 内面打刷毛目 胎土赤褐色系	肥前
347	96	64	1-F	SK139	陶器	碗	(12.8)			透明釉	呉須絵	瀬戸美濃系か
348	96	64	1-F	SK139	陶器	鉢				藁灰釉	外面線刻	萩
349	96	64	1-F	SK139	陶器	碗	長(15.1) 短(9.4)	8.0	6.1	透明釉 藁灰釉	唇形碗 輪状胎土目 胎土赤褐色	萩
350	96	64	1-F	SK139	陶器	碗	長(16.2)	7.9	7.4	土灰釉	唇形碗 唇底 内容物付着 溶融不良	須佐唐津
351	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	12.1	3.7	4.7	透明釉	蛇の目輪刺ぎ 刷毛目	肥前か
352	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	11.7	4.7	4.4	透明釉	渦巻き高台 見込呉須絵	
353	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	(12.4)	3.7	(4.8)	銅緑釉	蛇の目輪刺ぎ 高台無軸	肥前
354	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	(11.7)	3.5	4.6	透明釉	蛇の目輪刺ぎ 高台無軸	肥前
355	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	13.2	4.1	6.4	長石釉	胎土目 トキン状高台	
356	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	14.4	3.7	5.8	灰釉(黄釉)	胎土目 トキン状高台	
357	97	64	1-F	SK139	陶器	皿	(16.1)	3.4	(6.6)	灰釉	菊花皿	瀬戸美濃 424と同一個体
358	97	66	1-F	SK139	陶器	皿	(19.4)	2.5	9.0	透明釉		肥前
359	97	66	1-F	SK139	陶器	皿	21.7	6.0	8.8	灰釉	胎土目	須佐唐津か
360	97	64	1-F	SK139	陶器	仏花瓶	7.6			灰釉		
361	97	64	1-F	SK139	陶器	水注	口径(7.5)	9.6	(8.0)	土灰釉	高台に胎土目	
362	97	64	1-F	SK139	陶器	香炉(火入れ)	12.3	7.0	7.1	藁灰釉	トキン状高台	萩
363	97	64	1-F	SK139	陶器	香炉(火入れ)	12.3	6.4	6.5	鉄釉	外面3条の揚掻き	
364	97	66	1-F	SK139	陶器	皿			10.9	透明釉	京焼風陶器 呉須絵山水文 高高台	肥前
365	97	66	1-F	SK139	陶器	皿鉢	16.3	10.9	17.3	焼締	糸切り 内面器付着	

単位：cm ():復元値 * :残存値

通物番号	標記番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
366	97	64	1-F	SK139	土製品	埴塼	4.1	1.9		金粒附着	
367	97	64	1-F	SK139	土製品	箱庭道具	長4.9	幅3.9	高2.3	鉄軸	
368	97	64	1-F	SK139	陶器	火入れ				土化粧	肥前
369	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(6.2)	1.2	(4.2)	糸切り	
370	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(5.8)	1.4	4.0	糸切り	
371	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(6.3)	1.3	(4.4)	糸切り	
372	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	6.2	1.4	4.7	糸切り	
373	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	6.5	1.3	5.2	糸切り	
374	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	6.7	1.2	3.9	糸切り 板目	
375	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.0	1.5	(4.6)	糸切り 板目	灯明皿
376	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	6.7	1.3	3.6	糸切り	
377	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	8.0	1.9	4.7	糸切り	
378	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.7	1.6	5.7	糸切り 板目	灯明皿
379	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.8	1.5	5.1	糸切り	
380	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.6	1.7	4.4	糸切り	灯明皿
381	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(7.7)	1.8	4.3	糸切り	灯明皿
382	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.7	1.8	4.6	糸切り	灯明皿
383	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.9	1.7	4.6	糸切り	
384	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.6	1.7	4.4	糸切り	灯明皿
385	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(7.6)	1.6	4.7	糸切り	
386	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	7.4	1.7	4.5	糸切り	
387	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(7.3)	1.6	4.4	糸切り	
388	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(7.8)	1.9	4.6	糸切り	
389	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(10.5)	2.5	5.5	糸切り	灯明皿
390	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(11.4)	2.7	(5.6)	糸切り	灯明皿
391	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	10.5	2.4	4.7	糸切り	灯明皿
392	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	11.4	2.5	6.2	糸切り	灯明皿
393	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	10.6	2.4	5.8	糸切り	灯明皿
394	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	(10.6)	2.3	5.5	糸切り	
395	98	65	1-F	SK139	土師器	皿	10.7	2.4	7.0	糸切り 板目	
396	98	65	1-F	SK139	土師器	焼塩壺(身)	(6.2) 受部径(7.6)	8.2	(6.0)	「難波浄因」粗い布目 板作り	
397	98	65	1-F	SK139	土師器	焙烙	(20.7)	3.8	(14.7)	把手部欠	
398	98	65	1-F	SK139	瓦質	軒丸瓦	瓦当径(16.4)			珠文 三巴文	瓦当のみ
399	98	66	1-F	SK139	土師器	焙烙	31.7			孔は貫通しない	関西系
400	98	64	1-F	SK139	土師器	焙烙	(33.6)				関西系
401	98	66	1-F	SK139	陶器	摺鉢	(32.7)	14.4	(13.9)	土灰釉	格子目叩き
402	98	66	1-F	SK139	陶器	皿	(28.5)	8.7	(10.5)	二彩	柳刷毛目鉄軸 砂目
403	99	74	1-H	SK149	磁器	碗	(9.8)	5.2	(4.0)	染付	梅樹文
404	99	74	1-H	SK149	磁器	仏飯器	7.4	5.4	4.5	白磁	
405	99	74	1-H	SK149	磁器	小杯	(7.0)	4.9	3.1	染付	コンニャク印判
406	99	74	1-H	SK149	磁器	紅皿	5.6	1.7	2.9	白磁	
407	99	74	1-H	SK149	磁器	皿			(13.4)	染付	ハリ支え
408	99	74	1-H	SK149	磁器	皿	(14.6)	2.9	(6.6)	染付	「福」
409	99	74	1-H	SK149	磁器	皿	13.9	4.7	8.1	染付	輪花 コンニャク印判五弁花「大明年製」
410	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	10.8	5.9	3.8	霽灰釉	湯巻き高台
411	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	10.3	6.3	3.9	霽灰釉	湯巻き高台
412	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(10.8)	6.7	3.7	霽灰釉	
413	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(10.2)	5.5	3.8	霽灰釉	胎土灰色~橙色
414	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(9.4)	6.5	(3.6)	霽灰釉	胎土灰色系
415	99	75	1-H	SK149	陶器	碗	(10.6)	6.5	4.4	透明釉	刷毛目 胎土橙色系
416	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(11.2)	7.7	5.1	透明釉	呉器手碗
417	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	10.5	7.3	4.5	透明釉	呉器手碗
418	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(10.4)	7.2	4.5	透明釉	呉器手碗
419	99	74	1-H	SK149	陶器	碗	(10.7)	6.7	4.2	透明釉	呉器手碗
420	99	75	1-H	SK149	陶器	碗	(8.4)	5.6	(4.5)	ナマコ釉(土灰釉)	
421	99	74	1-H	SK149	陶器	小壺		4.2		鉄軸	萩
422	99	75	1-H	SK149	陶器	鉢	(19.1)	8.0	(9.9)	灰釉	胎土目
423	99	74	1-H	SK149	陶器	(油)壺	3.2	10.8	6.3	土灰釉	
424	99	75	1-H	SK149	陶器	皿	(17.2)	3.7	(6.5)	灰釉	
425	99	75	1-H	SK149	陶器	皿	15.9	4.5	5.8	透明釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無釉 刷毛目
426	99	75	1-H	SK149	陶器	皿	13.8	4.2	4.9	透明釉	刷毛目 輪状胎土目
427	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	6.5	1.3	5.2	糸切り	灯明皿
428	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	6.5	1.4	4.2	糸切り	灯明皿
429	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	7.0	1.4	5.0	糸切り 孔	灯明皿
430	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	7.7	1.5	4.7	糸切り	灯明皿
431	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	7.9	1.8	4.8	糸切り	灯明皿
432	100	75	1-H	SK149	陶器	皿	9.0	2.0	3.4	硬質	灯明皿
433	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	10.5	2.1	6.5	板目	灯明皿
434	100	75	1-H	SK149	土師器	皿	(10.6)	2.2	6.2	糸切り 板目	灯明皿
435	100	75	1-H	SK149	土師器	焼塩壺(身)	(6.2)	9.0	(5.6)	粗い布目 板作り	銘不明
436	100	75	1-H	SK149	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.2	2.5		布目	
437	100	75	1-H	SK149	土師器	焙烙小	18.1	3.9	16.1	底部板目	
438	100	75	1-H	SK149	土師器	焙烙	21.9	3.7	16.2	把手部欠 外面スス付着	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

通物番号	博覧番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
439	100	76	1-H	SK149	土師器	焙烙	27.2	7.1		外面スス付着 孔は未貫通	関西系
440	100	76	1-H	SK149	土師器	焙烙	28.0	6.1		外面スス付着	関西系
441	100	75	1-H	SK149	陶器	播鉢				鉄軸か	肥前
442	100	75	1-H	SK149	土製品	小型埴塼		2.0		内面1mm以下の金・銀粒付着	
443	101	67	1-H	SK142	磁器	碗	10.5	6.3	4.3	染付 外面コンニャク印判「大明年製」くずし	肥前
444	101	67	1-H	SK142	磁器	碗	14.4	7.4	5.6	染付 「大明年製」くずし 漆継	肥前
445	101	67	1-H	SK142	磁器	皿	14.2	3.4	4.0	染付 輪花 二重方形枠渦福 見込松竹梅文	肥前 18C 初
446	101	67	1-H	SK142	磁器	皿	13.2	3.2	8.2	染付 口髷 ハリ支え コンニャク印判五弁花 型紙摺り	肥前
447	101	67	1-H	SK142	磁器	鉢	(15.2)	5.6	(9.1)	染付 輪花 ハリ支え 丸文罨弾き 二重方形枠に変形字銘	肥前 1670-18C 初
448	101	67	1-H	SK142	磁器	皿	(14.6)	4.5	8.2	染付 菊文と蛸唐草「渦福」	肥前
449	101	67	1-H	SK142	磁器	皿	(12.8)	3.0	7.2	染付 コンニャク印判五弁花	肥前
450	101	67	1-H	SK142	磁器	皿	(15.4)	3.0	7.8	青花	景徳鎮
451	101	67	1-H	SK142	磁器	瓶		*12.0	5.6	染付 鉄軸	豊付砂付着 辰砂 肥前 17C
452	101	67	1-H	SK142	磁器	猪口	8.0	5.8	4.0	染付	肥前
453	101	67	1-H	SK142	磁器	水滴		厚2.6		赤絵	金彩 肥前
454	101	67	1-G	SK142	磁器	仏飯器	7.6	5.3	4.2	染付	雨降り文 肥前
455	101	67	1-H	SK142	磁器	油壺				赤絵	肥前
456	102	67	1-H	SK142	陶器	碗	10.8	6.2	3.8	藁灰釉	萩
457	102	67	1-H	SK142	陶器	碗	11.0	6.0	3.9	藁灰釉	トキン状高台 萩
458	102	68	1-H	SK142	陶器	碗	13.4	7.1	5.1	透明釉	内面刷毛目 三足ハマ痕 胎土橙色-灰色 萩
459	102	68	1-H	SK142	陶器	碗	9.2	6.4	4.3	鉄軸	
460	102	68	1-H	SK142	陶器	碗	(9.9)	7.1	4.4	透明釉	刷毛目 胎土赤褐色系 肥前
461	102	68	1-H	SK142	陶器	碗	11.2	6.4	4.8	灰釉	ヒョウタン形銘 京儀楽系
462	102	68	1-H	SK142	陶器	皿	11.9	3.2	4.3	銅緑釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸 肥前
463	102	68	1-G	SK142	陶器	皿	13.2	3.4	5.9	灰釉(黄釉)	トキン状高台 胎土目 須佐唐津
464	102	68	1-H	SK142	陶器	小碗	7.6	4.1	4.5	藁灰釉	萩
465	102	68	1-H	SK142	陶器	小壺	3.6	3.7	4.8	鉄軸	
466	102	68	1-H	SK142	陶器	合子(身)	奥行5.4	2.1		透明長石釉	外面鉄軸 緑釉織部風 瀬戸美濃系
467	102	68	1-H	SK142	陶器	皿	(17.3)	6.2	6.0	透明釉	蛇の目軸刺ぎ 釉刺ぎ部鉄泥 高台無軸 肥前
468	102	68	1-H	SK142	陶器	鉢	(20.2)	10.2	8.7	灰釉	胎土目 高台内楔形のノミ痕 須佐唐津
469	102	68	1-H	SK142	陶器	把手付皿			10.4	藁灰釉(白釉)	萩
470	102	68	1-G	SK142	陶器	徳利			9.9	鉄軸	底部窓印「〇に十」 備前
471	102	68	1-H	SK142	陶器	徳利		*17.5	(9.0)		備前
472	102	69	1-G	SK142	土師器	焙烙	(25.1)				内面墨書痕 関西系
473	102	68	1-H	SK142	陶器	播鉢	(30.3)	14.6	(11.7)	鉄軸	須佐唐津
474	102	68	1-H	SK142	土師器	皿	6.2	1.1	4.7		糸切り
475	102	68	1-H	SK142	土師器	皿	7.4	1.3	5.1		糸切り 灯明皿
476	102	68	1-H	SK142	土師器	皿	7.3	1.5	4.9		糸切り
477	103	69	1-G	SK142	土師器	焼塼壺(身)	6.0	8.7	5.7		板作り 銘部分欠損
478	103	69	1-H	SK142	土師器	焼塼壺(身)	(6.1)	9.4	(5.7)		「塼本漆焼吉右衛門」板作り
479	103	69	1-H	SK142	土師器	焼塼壺(身)	(6.7)	9.3	(5.0)		板作り 銘不明
480	103	69	1-H	SK142	土師器	焼塼壺(蓋)	口径8.3	2.5			布目
481	103	69	1-H	SK142	瓦質	瓦質	三足付		19.5		三足脚が付く
482	104	69	1-H	SK143	磁器	碗	(10.2)	5.3	4.1	染付	雷輪梅樹文 「大明年製」くずし 肥前
483	104	69	1-H	SK143	磁器	瓶	*8.9	9.0	4.9	染付	肥前 17C か
484	104	69	1-H	SK143	磁器	皿	(13.7)	4.1	(7.9)	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 「大明年(製)」 肥前
485	104	69	1-H	SK143	磁器	猪口	7.1	5.4	3.5	染付	雨降り文 肥前
486	104	69	1-H	SK143	磁器	皿	(12.8)	3.0	7.0	色絵	蛇の目軸刺ぎ 肥前
487	104	69	1-H	SK143	陶器	碗	(9.9)	6.7	(3.8)	藁灰釉	渦巻き高台 萩
488	104	69	1-H	SK143	陶器	碗	10.1	6.7	3.9	藁灰釉	内面付着物有 萩
489	104	69	1-H	SK143	陶器	仏花瓶	(7.0)			鉄軸 冊分け	刷毛目
490	104	69	1-H	SK143	陶器	碗	長17.8 短(8.8)	9.1	7.1	土灰釉	香形碗 基筒底 須佐唐津
491	104	70	1-H	SK143	土師器	焼塼壺(身)	5.7 受部径7.1	9.6	5.1		板作り 刺印不明
492	104	70	1-H	SK143	土師器	焼塼壺(蓋)	口径8.0	1.9			布目
493	104	70	1-H	SK143	土師器	焼塼壺(蓋)	口径8.1	2.2			布目
494	104	69	1-H	SK143	土師器	皿	6.0	1.1	4.6		糸切り 灯明皿
495	104	69	1-H	SK143	土師器	皿	11.5	2.4	6.2		板目か 灯明皿
496	104	70	1-H	SK143	土師器	焙烙	22.1	3.6	16.3		把手部欠
497	104	70	1-H	SK143	土師器	火鉢か			(22.2)		
498	105	70	1-H	SK145	磁器	碗	(10.6)	6.5	4.3	青磁染付	四方博文 二重方形枠渦福 漆継 肥前
499	105	70	1-H	SK145	磁器	碗	(8.8)	4.7	(3.8)	青磁染付	コンニャク印判五弁花 口髷 肥前
500	105	70	1-H	SK145	磁器	鉢	(14.2)			染付	四方博文 肥前
501	105	70	1-H	SK145	磁器	碗	(11.0)	5.9	4.2	染付	蛇の目軸刺ぎ 肥前
502	105	70	1-H	SK145	磁器	蓋	7.5	8.5	2.7(つまみ)	染付	型紙摺り 肥前
503	105	70	1-H	SK145	磁器	皿	(13.1)	3.5	8.0	染付	コンニャク印判五弁花 ハリ支え「大明年製」くずし 肥前
504	105	70	1-H	SK145	磁器	皿	(14.0)	4.0	(7.9)	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 「大明年(製)」 肥前
505	105	70	1-H	SK145	磁器	皿	(14.4)	3.5	7.8	染付	コンニャク印判五弁花 ハリ支え「大明年製」くずし 肥前
506	105	70	1-H	SK145	磁器	仏花瓶			(5.6)	青磁	肥前
507	105	70	1-H	SK145	磁器	水滴				白磁	肥前
508	105	70	1-H	SK145	陶器	碗	(11.2)	6.1	4.1	藁灰釉	萩
509	105	70	1-H	SK145	陶器	碗	(10.4)	6.6	(3.9)	藁灰釉	萩
510	105	71	1-H	SK145	陶器	碗	(10.4)	5.7	3.7	藁灰釉	萩
511	105	71	1-H	SK145	陶器	碗			4.3	藁灰釉	萩

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	標記番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴		備考
512	105	71	1-H	SK145	陶器	灯明受皿	口径11.7 受部径7.4	4.2	4.5	灰釉(黄釉)	孔 高台有り	須佐唐津
513	105	71	1-H	SK145	陶器	皿	(13.1)	3.8	6.0	灰釉(黄釉)	胎土目	須佐唐津
514	105	71	1-H	SK145	陶器	皿か	(15.0)			灰釉	灰釉上に金彩	須佐唐津
515	105	71	1-H	SK145	陶器	皿	(13.5)	3.9	5.7	灰釉(黄釉)	胎土目(足付ハマ痕か) 底面に釘掻き	須佐唐津か
516	105	71	1-H	SK145	陶器	瓶	6.0	*10.4		鉄釉	刷毛目	
517	105	71	1-H	SK145	陶器	鉢	(25.5)	12.7	(9.0)	灰釉(黄釉)	胎土目	須佐唐津
518	105	71	1-H	SK145	土師器	焙烙						関西系
519	105	70	1-H	SK145	磁器	灯芯押さえ	全長*3.7		幅2.3 奥行1.7	白磁 鉄釉 掛分け		肥前
520	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	7.8	1.8	4.5		糸切り	灯明皿
521	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	(8.8)	1.8	(5.4)		糸切り	
522	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	11.0	2.4	5.8		糸切り	灯明皿
523	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	(11.2)	2.1	(6.0)		糸切り 板目	灯明皿
524	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	11.0	2.5	6.0		糸切り	
525	106	71	1-H	SK145	土師器	皿	(11.1)	19.5	(5.6)		糸切り 板目	
526	106	71	1-H	SK145	土師器	焼塩壺(身)	(6.0) 受部径(7.2)				板作り 布目	銘不明(御壺塩師系か)
527	106	71	1-H	SK145	土師器	焼塩壺(身)	6.5 受部径7.5	9.2	6.0		「御壺塩師伊織」粗い布目	17C 末-18C 前
528	107	76	1-B	SK68	陶器	碗	10.8	7.1	5.2	透明釉	呉器手碗	肥前 17C 後-18C 前
529	107	76	1-B	SK68	陶器	皿	(7.0)	4.4	(5.5)	透明釉	輪状胎土目 トキン状高台	萩
530	107	76	1-D	SK68	磁器	鉢	(23.0)	9.1	(15.5)	青花	獸脚付 漆継 牡丹唐草	瀬州窟 16C 末-1630
531	107	76	1-B	SK68	磁器	皿	(15.4)	3.8	6.8	青花	除刻魚藻文 輪花 虫食い	景德鎮 1590-1630
532	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	13.1	3.1	7.9	染付	コンニャク印判五弁花 墨弾き 湯福	肥前
533	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	12.6	3.3	8.0	染付	コンニャク印判五弁花 口縁「大明年製」くずし	肥前 溶融不良
534	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	33.6	3.1	8.2	染付	コンニャク印判五弁花 口縁「大明年製」くずし	肥前
535	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	15.1	3.3	9.7	染付	「(大)(明)成(化)(年)製」	肥前
536	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	11.4	2.4	7.9	染付	八角皿	肥前
537	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	(13.5)	2.7	7.8	染付	輪花「大明成化年製」	肥前
538	108	72	1-H	SK152	磁器	碗			4.6	赤絵		肥前
539	108	72	1-H	SK152	磁器	水漬	幅*4.0	1.4	奥行*3.4	染付	底部布目	肥前
540	108	72	1-H	SK152	磁器	紅皿	4.3	1.3	2.2	染付	見込折松葉文	肥前
541	108	72	1-H	SK152	磁器	皿			(9.2)	青花	砂目	瀬州窟系か
542	108	72	1-H	SK152	磁器	蓋	(9.8) 器径(11.5)	3.6	つまみ部径(4.9)	染付	漆継	肥前
543	108	72	1-H	SK152	磁器	蓋	8.2 器径9.8	2.3		染付	瑠璃釉	肥前
544	108	72	1-H	SK152	磁器	蓋	(7.5) 器径(10.7)	4.8	つまみ部径(2.0)	白磁		肥前
545	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	(14.2)	3.3	7.9	青磁		
546	108	72	1-H	SK152	磁器	皿	(14.4)	3.1	8.3	青磁		545と組物か
547	109	72	1-H	SK152	陶器	碗	10.7	6.1	4.0	薬灰釉	渦巻き高台	萩
548	109	72	1-H	SK152	陶器	碗	10.2	6.0	4.1	薬灰釉		萩
549	109	72	1-H	SK152	陶器	碗	(8.6)	4.9	3.2	薬灰釉	トキン状高台	萩
550	109	72	1-H	SK152	陶器	碗	10.9	7.3	5.5	薬灰釉	割・渦巻き高台	萩
551	109	73	1-H	SK152	陶器	碗	(10.6)	7.6	4.5	透明釉	呉器手碗	肥前
552	109	73	1-H	SK152	陶器	碗			(4.4)	透明釉	釜手 刷毛目 胎土褐色系	肥前
553	109	73	1-H	SK152	陶器	碗	(11.5)	5.5	(4.2)	透明釉	腰折碗 呉須・白泥で草(アシカ)帆かけ舟	京僧堂系
554	109	73	1-H	SK152	陶器	皿	11.9	3.9	4.3	銅緑釉	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉	肥前
555	109	73	1-H	SK152	陶器	皿	(11.3)	3.2	3.9	銅緑釉	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉	肥前
556	109	73	1-H	SK152	陶器	皿			5.7	銅緑釉 鉄釉	蛇の目釉刺ぎ 掛分け	肥前
557	109	73	1-H	SK152	陶器	灯明受皿	口径12.9 皿受部7.5	3.4	5.3	土灰釉		
558	109	73	1-H	SK152	陶器	皿	13.6	4.0	(4.8)	土灰釉	輪状胎土目	萩 灯明皿に転用
559	109	73	1-H	SK152	陶器				12.4	鉄釉に薬灰釉		
560	109	73	1-H	SK152	陶器	皿	長(17.0) 短(14.7)	4.0	8.1	灰釉(透明釉)に鉄釉	型打ち成形	瀬戸美濃系
561	109	73	1-H	SK152	陶器	皿	長(16.2) 短(14.0)	3.4	7.8	灰釉(透明釉)に鉄釉	型打ち成形	瀬戸美濃系 560と同形
562	109	73	1-H	SK152	陶器	仏花瓶			5.2	土灰釉		
563	109	73	1-H	SK152	土師器	皿	6.5	1.5	4.8		糸切り	
564	109	73	1-H	SK152	土師器	皿	(11.2)	2.3	5.9		糸切り 底に孔	灯明皿
565	109	73	1-H	SK152	土師器	焙烙	(26.6)					関西系
566	109	73	1-H	SK152	陶器	播鉢	29.0	11.4	12.4	鉄釉	胎土目	須佐唐津
567	109	73	1-H	SK152	土製品	ミニチュア 甕	幅4.0	厚1.6		赤絵	穿孔	肥前
568	110	76	1-H	鯨骨包含層	磁器	碗	(11.2)	6.3	4.8	染付	外・内面一重網目文「宣明化製」	肥前 17C 中-
569	110	76	1-H	鯨骨包含層	磁器	小杯	7.0	7.2	3.6	白磁	鍋除刻 底部砂付着	肥前
570	110	76	1-H	鯨骨包含層	磁器	皿	(12.0)	3.0	(7.0)	染付	梅文	肥前
571	110	76	1-H	鯨骨包含層	磁器	皿			(11.2)	染付	ハリ支え「大明成化年製」高台に草花文	肥前
572	110	76	1-H	鯨骨包含層	陶器	碗			4.9	透明釉	呉器手碗	肥前
573	110	76	1-H	鯨骨包含層	陶器	碗			5.1	透明釉	刷毛目 胎土褐色系	
574	110	76	1-H	鯨骨包含層	陶器	碗			4.4	透明釉	刷毛目	
575	110	76	1-H	鯨骨包含層	陶器	碗	(14.0)	5.8	(5.2)	土灰釉	輪状胎土目	萩
576	110	76	1-H	鯨骨包含層	陶器	把手付壺	8.5			灰釉		萩か
577	110	77	1-H	鯨骨包含層	陶器	碗			(8.4)	灰釉	香形碗 碁筒底	萩
578	110	77	1-H	鯨骨包含層	陶器	壺	11.8			土灰釉		
579	110	77	1-H	鯨骨包含層	陶器	播鉢			18.0	鉄釉	台付き	須佐唐津
580	110	77	1-H	鯨骨包含層	陶器	鉢			9.5	灰釉	胎土目	
581	110	77	1-H	鯨骨包含層	陶器	鉢	(28.4)	13.2	11.6	灰釉	胎土目	須佐唐津
582	111	77	1-C	石段整地層	磁器	碗	10.3	5.9	4.1	染付	コンニャク印判に手書き「大明年製」	肥前 1680-18C 初
583	111	77	1-C	石段整地層	磁器	碗	10.5	5.4	4.1	染付		肥前 18C 前
584	111	77	1-C	石段整地層	陶器	碗	11.6	7.3	5.3	陶胎染付		肥前 18C 前

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	掛図番号	図説番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
585	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿		3.3		染付	型打ち成形 肥前 1660-90	
586	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	15.1	3.2	8.9	染付	ハリ支え 二重方形枠に「福」 肥前 1670-80	
587	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	13.4	2.7	8.3	染付	ハリ支え 肥前 1690-18C 初	
588	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	13.6	3.2	7.7	染付	ハリ支え 肥前	
589	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	(14.6)	5.1	(8.6)	染付	輪花 花唐草 肥前 1690-18前	
590	111	78	1-C	石段整地層	磁器	皿	15.2	3.2	9.0	染付	ハリ支え 中国写し 肥前 1670-1690	
591	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	(13.3)	3.7	(7.7)	白磁	八角皿 口縁 ロクロ成型後型押し 肥前	
592	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	(14.1)	4.1	(8.4)	白磁	輪花 肥前 1690-18C 前	
593	111	77	1-C	石段整地層	磁器	皿	(13.8)	3.2	(5.6)	染付	肥前	
594	111	78	1-C	石段整地層	磁器	瓶			(8.0)	染付	茶セン形 肥前 1610-1630	
595	111	78	1-C	石段整地層	磁器	瓶	12.8	6.5	*17.1	染付	肥前 1650-1670	
596	112	78	1-C	石段整地層	磁器	皿か			9.0	白磁	「左」か 朝鮮李朝 17C	
597	112	78	1-C	石段整地層	磁器	皿	(14.2)	4.1	5.8	青花	蘭「雅」か 景德鎮 1620(30)-1640か	
598	112	78	1-C	石段整地層	磁器	皿		2.0	5.8	青花	蘭「雅」か 597と同文 景德鎮 1620(30)-1640か	
599	112	78	1-C	石段整地層	陶器	壺	10.4	11.7	6.6	鉄釉	糸切り 肥前 18C 前半	
600	112	78	1-C	石段整地層	陶器	小碗	(6.4)	4.1	(3.8)	鉄釉	漆襷 17C 後-18C 前	
601	112	78	1-C	石段整地層	陶器	碗	9.3	5.1	3.7	透明釉	外面磨刷毛目 内面打刷毛目 肥前 18C 前半	
602	112	78	1-C	石段整地層	陶器	壺か			4.5	鉄釉	トキン状高台 肥前か 17C 前	
603	112	78	1-C	石段整地層	陶器	皿	(11.9)	3.8	4.2	透明釉	胎土目 肥前 1600-1630	
604	112	78	1-C	石段整地層	陶器	皿	(11.8)	3.7	4.3	透明釉	蛇の目輪割ぎ 高台無釉 肥前	
605	112	78	1-C	石段整地層	陶器	皿	(14.4)	3.1	5.0	銅緑釉	蛇の目輪割ぎ トキン状高台 肥前 17C 後-18C 初	
606	112	78	1-C	石段整地層	土師器	皿	6.3	1.4	4.8		糸切り	
607	112	78	1-C	石段整地層	土師器	皿	7.6	1.7	4.7		糸切り	灯明皿
608	112	78	1-C	石段整地層	土師器	皿	10.3	2.4	6.4		糸切り 板目	
609	112	78	1-C	石段整地層	陶器	摺鉢				焼締	「長上」の刻印 堺 18C 前半-中	
610	112	78	1-C	石段整地層	陶器	摺鉢				無釉		
611	112	78	1-C	石段整地層	陶器	摺鉢	(34.2)			土灰釉	肥前	
612	113	79	1-L	SX314	磁器	瓶	胴部径(6.9)			染付	肥前	
613	113	79	1-L	SX314	土師器	焼塩壺(蓋)	器径7.8	2.0			布目	
614	113	79	1-L	SX314	土師器	花焼塩壺(蓋)	器径(8.4)	1.0			二重輪縁内「花形壇」	
615	113	79	1-L	SX314	瓦	軒丸瓦	瓦当径13.2	厚2.1			珠文 左三巴文	
616	114	79	1-L	SK276	磁器	碗	(9.9)	5.1	4.4	染付	ハリ支えか 草花文「筒江」 肥前	
617	114	79	1-J	SK276	磁器	碗	11.4	5.7	4.6	色絵	蛇の目輪割ぎ部分に緑釉と文様 肥前	
618	114	79	1-J	SK276	磁器	碗	9.3	5.9	4.4	染付	四方押文 見込十字花文 肥前	
619	114	79	1-J	SK276	磁器	碗	8.7	4.9	6.5	染付	筒形碗 コンニャク印判五弁花 二重方形枠に満福 肥前 18C 中-後半	
620	114	79	1-J	SK276	磁器	碗(蓋付)	(8.8)	6.5	(5.6)	青磁	陰刻花文 肥前	
621	114	79	1-J	SK276	磁器	碗	(12.1)	6.8	5.0	染付	肥前 18C 中-後半	
622	114	79	1-J	SK276	磁器	蓋	9.4	2.6	つまみ径3.5	染付	肥前	
623	114	79	1-J	SK276	磁器	蓋	9.8	2.7	つまみ径3.5	染付	花文手描き 口縁 肥前	
624	114	79	1-J	SK276	磁器	蓋	10.4	3.0	2.8	染付	把手貼り付け 肥前	
625	114	79	1-J	SK276	磁器	猪口	7.2	6.2	5.4	染付	氷裂文 肥前	
626	114	79	1-J	SK276	磁器	猪口	(7.2)	5.5	(4.6)	染付	二重方形枠に満福 肥前	
627	114	80	1-J	SK276	磁器	猪口	7.0	5.1	5.1	染付	花唐草 肥前	
628	114	80	1-J	SK276	磁器	猪口	6.8	5.5	5.0	染付	内面に焼成時の付着物が溶着(墨状) 肥前	
629	114	80	1-J	SK276	磁器	皿	14.4	4.1	8.6	染付	輪花 蛇の目凹形高台「筒江」 肥前	
630	114	80	1-J	SK276	磁器	皿	14.0	4.2	7.8	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 ハリ支え「大明年製」 肥前	
631	114	80	1-J	SK276	磁器	皿	(15.2)	5.3	(8.7)	青磁染付	輪花 蛇の目凹形高台 菊唐草 田龍文か「筒江」か 肥前	
632	114	80	1-J	SK276	磁器	瓶	口径(3.7)	15.6	4.3	染付	端反縁非形 草花文 肥前	
633	114	80	1-J	SK276	磁器	仏花瓶	口径8.4	15.6	5.8	青磁	肥前 1750-1860か	
634	114	81	1-J	SK276	磁器	合子(蓋)	4.7 器径5.5	1.1		染付	氷裂文 肥前	
635	114	80	1-J	SK276	磁器	皿	17.0	5.3	6.4	染付	蛇の目輪割ぎ コンニャク印判五弁花 漆襷 肥前	
636	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	(20.7)	2.6	(12.5)	染付	ハリ支え 肥前	
637	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	(9.8)	2.6	4.9	染付	輪花(菊花)皿 肥前	
638	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	19.9	2.7	13.4	染付	輪花 五弁花 ハリ支え 高台二重方形枠に満福 肥前	
639	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	12.9	3.0	4.5	染付	蛇の目輪割ぎ 二重斜格子文 肥前	
640	115	81	1-J	SK276	磁器	缸皿	4.7	1.3	1.3	白磁	肥前	
641	115	81	1-J	SK276	磁器	仏飯器	5.3			染付	肥前	
642	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	14.0	3.2	8.1	染付	コンニャク印判五弁花 満福くずし 肥前	
643	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	13.6	3.4	7.5	染付	コンニャク印判五弁花 満福くずし 肥前	
644	115	80	1-J	SK276	磁器	皿	13.3	4.0	8.1	染付	コンニャク印判五弁花 満福くずし 肥前	
645	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	11.0	6.8	4.0	藁灰釉	萩	
646	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	10.9	7.0	4.3	藁灰釉	萩	
647	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	10.5	7.0	3.8	土灰釉	萩	
648	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	9.4	5.0	3.6	藁灰釉	トキン状高台 萩	
649	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	10.8	6.5	4.2	白釉(藁灰釉)	萩	
650	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	11.2	6.6	4.0	透明釉	鉄絵 京信楽系か	
651	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	9.1	5.2	2.8	灰釉 透明釉	鉄絵 京信楽系か	
652	116	81	1-J	SK276	陶器	小壺か			4.9	藁灰釉		
653	116	81	1-J	SK276	陶器	皿	9.1	2.2	4.4	灰釉	糸切り 胎土目 灯明皿	
654	116	81	1-J	SK276	陶器	皿	12.3	4.5	5.2	透明釉	京焼風陶器「○」 楼閣山水文 肥前	
655	116	81	1-J	SK276	陶器	皿	14.3	4.3	4.6	藁灰釉	渦巻き高台 萩	
656	116	81	1-J	SK276	陶器	皿	19.0	5.1	8.4	透明釉	刷毛目 蛇の目輪割ぎ 高台無釉 肥前	
657	116	81	1-J	SK276	陶器	碗	20.4	8.5	7.6	透明釉	刷毛目 蛇の目輪割ぎ 高台無釉 全体的に変形 肥前	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	群区番号	図帳番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考		
658	116	81	1-J	SK276	陶器	鉢(蓋付)	12.4	11.7	6.3	透明釉	鉄絵・丹須絵 三足ハマ痕	京信楽系 高台墨書	
659	116	81	1-J	SK276	陶器	香炉(火入れ)	(16.0)	6.9	(8.2)	鉄釉	糸切り 脚貼り付け		
660	116	82	1-J	SK276	陶器	(大)皿			(8.8)	霽灰釉	貝目	萩	
661	116	82	1-J	SK276	陶器	三足ハマ	口径6.0	1.6			糸切り 足貼り付け		
662	116	82	1-J	SK276	陶器	盥水入れ	長(20.2) 短(5.6)	6.5	長径11.4 短径7.4	霽灰釉	畚形碗	萩	
663	116	82	1-J	SK276	陶器	壺	9.0	14.0	8.6	鉄泥 化粧土			
664	116	82	1-J	SK276	陶器	油德利	口径2.6	器高最大径10.8	8.3		灰釉	孔	
665	116	82	1-J	SK276	陶器	德利			11.1		土灰釉 霽灰釉掛分け	萩	
666	117	82	1-J	SK276	陶器	片口	8.8	10.2	7.8	霽灰釉	足付ハマ痕	萩	
667	117	82	1-J	SK276	陶器	片口	16.6	9.7	8.4	灰釉	胎土目 底面ノミ痕	須佐唐津	
668	117	82	1-J	SK276	陶器	捏鉢	20.1	9.9	9.7	灰釉	胎土目	須佐唐津	
669	117	82	1-J	SK276	陶器	捏鉢	(29.6)			灰釉			
670	117	82	1-J	SK276	陶器	搦鉢	(32.8)	13.5	(12.0)	鉄釉		須佐唐津	
671	117	82	1-J	SK276	陶器	搦鉢	31.8	15.6	10.9	鉄釉	輪状胎土目	萩か	
672	117	82	1-J	SK276	陶器	搦鉢	32.2	13.9	12.1	鉄釉	胎土目	須佐唐津か	
673	117	82	1-J	SK276	陶器	壺	22.4			土灰釉	液状文 格子目叩き	肥前	
674	117	82	1-J	SK276	陶器	壺	(32.8)			鉄釉白粉流し掛け	格子目叩き	肥前	
675	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	7.1	1.2	4.5		糸切り		
676	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	7.0	1.4	4.2		糸切り		
677	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	8.4	1.7	5.4		糸切り	灯明皿	
678	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	8.4	1.9	4.3		糸切り		
679	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	8.6	2.2	5.0		糸切り	灯明皿	
680	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	8.6	1.7	4.8		糸切り	灯明皿	
681	118	82	1-J	SK276	土師器	皿	(11.2)	2.4	(5.0)		糸切り	灯明皿	
682	118	82	1-J	SK276	土師器	灯明具	口径4.0	1.9	2.6		糸切り		
683	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(蓋)	口径6.5	2.4			布目 ウンモを含む		
684	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(蓋)	口径6.7	2.2			布目 ウンモを含む		
685	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.6	2.1			布目 ウンモを含む		
686	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.3	2.2			布目 ウンモを含む		
687	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(身)	6.1 受口径7.4	9.0	5.7		「泉湊伊織」布目 ウンモを含む 板作り		
688	118	83	1-J	SK276	土師器	焼塩壺(身)	5.9 受口径7.2	9.4	5.7		「泉湊伊織」布目 板作り		
689	118	83	1-J	SK276	土師器	七輪			(11.4)				
690	118	83	1-J	SK276	土師器	焙烙	口径22.5 口径24.0	3.2	17.5		把手あり 板目		
691	118	83	1-J	SK276	土師器	焙烙	(30.2)	器幅(33.2)			ウンモを含む 穿孔	関西系	
692	119	95	1-K	SK280	磁器	猪口	9.8	6.1	4.1	染付	端反 草花文	肥前	
693	119	95	1-K	SK280	磁器	碗	(9.4)	4.2	(3.6)	赤絵	蛇の目輪刺ぎ部分に赤絵	肥前	
694	119	95	1-K	SK280	陶器	香炉(火入れ)	9.1	4.4	4.0	陶胎染付	足三脚	肥前	
695	119	95	1-K	SK280	磁器	皿	(14.4)	5.2	(8.0)	染付	輪花 コンニャク印判五弁花「(大)(明)年製」	肥前	
696	119	95	1-K	SK280	磁器	皿	13.6	3.2	8.0	染付	ハリ支え	肥前	
697	119	95	1-K	SK280	陶器	小碗	8.2	5.2	3.2	霽灰釉		萩	
698	119	95	1-K	SK280	陶器	捏鉢	(18.2)	9.2	9.6	灰釉	胎土目 胎土土師質	須佐唐津	
699	119	95	1-K	SK280	土師器	皿	6.7	1.4	4.0		糸切り	灯明皿	
700	119	95	1-K	SK280	土師器	皿	6.3	1.6	4.2			灯明皿	
701	119	95	1-K	SK280	土製品	増埴	5.0	2.7			スラグ溶着		
702	119	95	1-K	SK280	土製品	増埴	9.0	5.4			スラグ溶着		
703	119	95	1-K	SK280	土製品	増埴	(7.8)				スラグ溶着		
704	119	95	1-K	SK280	土製品	増埴	7.3	4.7	1.0		銅付着		
705	119	95	1-K	SK280	土製品	蓋か	口径5.7	3.0			全体二次焼成 スラグ溶着 つまみ部あり		
706	119	95	1-K	SK280	陶器	搦鉢	28.4	*10.9		鉄釉		須佐唐津	
707	119	95	1-K	SK280	陶器	搦鉢	30.5	*12.2	11.2	鉄釉	格子目叩き 台部欠損	肥前	
708	119	95	1-K	SK280	土師器	焙烙	30.0	6.5	19.2		穿孔 内耳貼り付け		
709	120	96	1-L	SK281	磁器	碗	(9.9)	5.2	4.0	染付	外面二重網目 内面一重網目 方形枠に満福	肥前	
710	120	96	1-L	SK281	磁器	碗	(11.2)	5.4	4.3	染付	蛇の目輪刺ぎ コンニャク印判	肥前	
711	120	96	1-L	SK281	磁器	碗	(9.8)	5.3	3.8	染付	一重方形枠「祖」	肥前	
712	120	96	1-L	SK281	磁器	仏飯器	(7.8)	6.0	(3.8)	染付	「○」	肥前	
713	120	96	1-L	SK281	磁器	水滴		*4.0		色絵	色絵(赤・黄・青)	肥前	
714	120	96	1-L	SK281	磁器	碗	(10.2)	6.4	4.2	染付		肥前	
715	120	96	1-L	SK281	磁器	碗	14.1	7.7	5.4	染付	コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	肥前	
716	120	96	1-L	SK281	磁器	蓋	10.2	3.0	つまみ部径3.6	染付	二重方形枠に満福 丸文	肥前 灯明皿に転用か	
717	120	96	1-L	SK281	陶器	香炉(火入れ)		(7.0)		陶胎染付		肥前	
718	120	96	1-L	SK281	磁器	皿	(14.4)	4.2	8.0	染付	輪花 花唐草 ハリ支え「大明年製」	肥前	
719	120	96	1-L	SK281	磁器	皿	(21.5)	4.5	9.6	青花	桜花	肥前	
720	120	96	1-L	SK281	陶器	鉢	21.4	8.9	8.0	陶胎染付	蛇の目輪刺ぎ	肥前	
721	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	6.8	1.6	5.0				
722	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	6.2	1.9	(9.5)		内面一部に灯明使用痕 糸切り		
723	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	6.7	1.3	5.0		糸切り		
724	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	11.6	2.3	6.4			灯明皿	
725	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	(11.0)	2.5	(5.4)		板目	灯明皿	
726	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	13.8	3.3	8.0			灯明皿	
727	120	97	1-L	SK281	土師器	皿	(10.0)	2.6	(2.5)		硬質	灯明皿	
728	120	97	1-L	SK281	土師器	焙烙	20.4	3.7	15.6		把手部欠損		
729	120	97	1-L	SK281	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.2	2.3			布目		
730	120	97	1-L	SK281	土師器	焼塩壺(身)	(6.0) 受口径(7.2)	8.7	5.0		布目 ウンモを含む 板作り	刻印不明	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	探検番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
731	120	97	1-L	SK281	土師器	七輪サナ	口径(11.5)	厚1.2				
732	121	96	1-L	SK281	陶器	碗	11.1	6.4	4.0	藁灰釉 白釉	渦巻き高台	
733	121	96	1-L	SK281	陶器	碗	(10.9)	5.8	4.2	藁灰釉		
734	121	96	1-L	SK281	陶器	碗	11.1	6.8	4.4	藁灰釉	渦巻き高台	
735	121	96	1-L	SK281	陶器	碗	9.3	6.1	4.4	鉄釉		
736	121	96	1-L	SK281	陶器	碗(皿)	(10.0)	4.8	(4.4)		京焼風陶器 桜岡山水文	
737	121	97	1-L	SK281	竈道具	三足ハマ	口径5.6	1.5			糸切り 足貼り付け	
738	121	97	1-L	SK281	陶器	仏飯器	7.8	5.4	4.5	鉄釉	ハマ痕	
739	121	97	1-L	SK281	陶器	皿	12.2	3.4	4.2	銅緑釉 透明釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	
740	121	97	1-L	SK281	陶器	皿	(14.1)	4.5	4.6	灰釉	輪状胎土目	
741	121	97	1-L	SK281	陶器	灯明受皿	7.2	受部径12.4	5.8	灰釉		
742	121	97	1-L	SK281	陶器	鉢	25.0	12.9	10.6	灰釉	胎土目	
743	121	97	1-L	SK281	陶器	片口	(16.4)	9.7	8.1	灰釉	胎土目	
744	121	97	1-L	SK281	陶器	香炉(火入れ)	(17.5)	10.3	11.0	藁灰釉	割高台	
745	121	97	1-L	SK281	陶器	鉢	長(21.8) 短14.2	長7.1 短4.7	10.8	藁灰釉	把手部欠損	
746	122	97	1-L	SK281	陶器	播鉢	(34.7)	13.6	(12.0)	鉄釉		
747	122	98	1-L	SK281	土師器	焙烙	31.4	8.3	(14.0)			
748	122	98	1-L	SK281	陶器	大皿	外36.9 内35.1	12.3	12.0		二彩	白化緑刷毛目 緑釉
749	123	109	1-K	SK306	磁器	猪口	8.2			白磁	輪花	
750	123	109	1-K	SK306	磁器	碗	(10.0)	6.2	(4.9)	白磁		
751	123	109	1-K	SK306	磁器	紅猪口	7.0	2.7	3.0	染付	コンニャク印判	
752	123	109	1-K	SK306	磁器	香炉(火入れ)	9.4	7.7	7.4	青磁	高台鉄泥 チャップ痕	
753	123	109	1-K	SK306	磁器	小碗	8.3	4.7	3.3	染付	雨降り文	
754	123	109	1-K	SK306	磁器	小碗	8.0	4.6	3.1	染付	雨降り文	
755	123	109	1-K	SK306	磁器	皿	(13.4)	3.0	4.0	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	
756	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	(10.2)	6.5	4.1	藁灰釉	竈変 トキン状高台	
757	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	(10.1)	6.6	(4.4)	藁灰釉	渦巻き高台	
758	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	10.5	6.7	4.2	藁灰釉	渦巻き高台	
759	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	8.7	5.7	3.5	藁灰釉		
760	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	11.3	6.8	4.3	藁灰釉	トキン状高台	
761	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	10.1	5.7	3.8	藁灰釉	トキン状高台	
762	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	(11.0)	6.1	4.5	藁灰釉	トキン状高台	
763	123	109	1-K	SK306	陶器	小碗	8.8	6.1	4.9	土灰釉	高高台	
764	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	8.4	5.7	4.7	黒釉		
765	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	9.6	6.8	4.0	透明釉	呉器手碗	
766	123	109	1-K	SK306	陶器	碗	10.5	6.7	4.3	透明釉	呉器手碗	
767	123	110	1-K	SK306	陶器	碗	11.2	7.2	3.0	透明釉	刷毛目	
768	123	110	1-K	SK306	陶器	碗	(11.0)	7.0	(4.8)	透明釉	刷毛目 胎土赤褐色系	
769	123	110	1-K	SK306	陶器	碗	(11.2)	7.1	(4.4)	透明釉	刷毛目 胎土赤褐色系	
770	123	110	1-K	SK306	陶器	碗			5.8	透明釉	刷毛目 胎土赤褐色系	
771	123	110	1-K	SK306	陶器	碗(皿)	9.6	4.9	3.9	透明釉	京焼風陶器 桜岡山水文「清水〇」	
772	123	110	1-K	SK306	陶器	瓶	胴部径12.0		7.4	藁灰釉	竈変	
773	123	110	1-K	SK306	陶器	水注	口径(10.0) 内(7.2)	10.9	7.0	灰釉(土灰釉)	把手欠損	
774	123	110	1-K	SK306	陶器	碗	長(13.4) 短(8.4)	6.2	5.5	灰釉	沓形碗 萆筒底 焼成不良	
775	123	110	1-K	SK306	陶器	碗	長(13.3) 短7.5	6.5	6.1	灰釉	沓形碗 萆筒底	
776	124	110	1-K	SK306	陶器	鉢	19.1	9.9	9.8	灰釉	胎土目	
777	124	110	1-K	SK306	陶器	鉢	24.5	12.7	10.4	灰釉	胎土目	
778	124	110	1-K	SK306	陶器	鉢	25.1	13.0	10.1	灰釉 土灰釉	胎土目の一部付着	
779	124	110	1-K	SK306	陶器	香炉(火入れ)	20.8	10.8	13.6	鉄釉	三足脚	
780	124	110	1-K	SK306	陶器	播鉢	22.3	9.3	20.0	鉄釉		
781	124	110	1-K	SK306	土師器	焼塩壺(蓋)	口径6.1	1.9				
782	124	110	1-K	SK306	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.8	2.1			布目	
783	124	110	1-K	SK306	土師器	皿	8.1	1.6	5.2		糸切り	
784	124	110	1-K	SK306	土師器	皿	8.2	1.7	5.7		糸切り	
785	124	110	1-K	SK306	土師器	皿	14.3	3.1	8.1			
786	124	111	1-K	SK306	陶器	播鉢	(35.0)	14.0	10.5 台部径13.3	土灰釉	台部付き	
787	124	111	1-K	SK306	土師器	壺	(18.0)	25.2	22.7		火消し蓋 底部板づくり	
788	125	93	1-K	SK278	磁器	碗	(10.8)	5.7	(4.1)	染付	蛇の目軸刺ぎ	
789	125	93	1-K	SK278	磁器	猪口	7.9	5.5	4.8	染付	「大明年製」くずし	
790	125	93	1-K	SK278	磁器	小杯	7.0	5.2	3.3	染付	漆継	
791	125	93	1-K	SK278	磁器	仏飯器	7.1	5.5	4.4	白磁		
792	125	93	1-K	SK278	陶器	香炉(火入れ)	(9.8)	7.3	(5.0)	陶胎染付		
793	125	93	1-K	SK278	磁器	香炉	(11.5)	7.6	(8.0)	青磁		
794	125	93	1-K	SK278	磁器	皿	(12.1)	3.6	(13.8)	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	
795	125	93	1-K	SK278	磁器	皿	(14.2)	2.6	(9.9)	染付		
796	125	93	1-K	SK278	磁器	鉢	14.6	5.2	7.3	染付	輪花 型打ち陶出文 唐草文 二重方形枠に渦摺	
797	125	93	1-K	SK278	磁器	皿	(14.0)	2.5	9.0	染付	ハリ支え 花唐草文 中白	
798	125	93	1-K	SK278	磁器	皿	14.1	4.1	7.4	染付	輪花 コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	
799	125	93	1-K	SK278	磁器	掛け花生	長18.3	幅9.3	厚5.7	染付		
800	125	93	1-K	SK278	磁器	合子(蓋)	4.2	0.8		染付		
801	125	93	1-K	SK278	磁器	紅猪口	5.7	2.5	2.5	染付		
802	125	93	1-K	SK278	陶器	碗	(10.8)	6.4	4.0	藁灰釉	渦巻き高台	
803	125	93	1-K	SK278	陶器	碗	(11.9)	6.1	(4.3)	藁灰釉		

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	群内番号	図版番号	地区	遺情	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
804	125	93	1-K	SK278	陶器	碗	(11.0)	6.5	4.1	藁灰釉	
805	125	93	1-K	SK278	陶器	碗	(8.2)	5.5	4.0	黒釉	
806	125	93	1-K	SK278	陶器	碗	10.4	7.1	4.2	透明釉	兵器手碗
807	125	94	1-K	SK278	陶器	碗	(15.2)	8.5	(6.2)	透明釉	刷毛目 蛇ノ目釉刺
808	125	94	1-K	SK278	陶器	香炉(火入れ)			5.0	鉄釉	
809	125	94	1-K	SK278	陶器	皿	9.8	2.5	4.9	灰釉(黄釉)	胎土目
810	125	94	1-K	SK278	陶器	蓋	口径7.7 受部径10.1	4.5	つまみ径2.1	黒釉	須佐唐津 灯明皿
811	126	94	1-K	SK278	陶器	瓶		*14.1	7.8	透明釉 藁灰釉 鉄釉	
812	126	94	1-K	SK278	陶器	碗	長18.9 短10.2	8.7	6.7	灰釉	寄形碗 暮筒底
813	126	94	1-K	SK278	土師器	皿	8.9	1.5	5.3		灯明皿
814	126	94	1-K	SK278	土師器	皿	7.8	1.6	4.4		灯明皿
815	126	94	1-K	SK278	土師器	皿	10.8	2.0	6.0		墨書「×」
816	126	94	1-K	SK278	瓦	軒九瓦	瓦当径15.3	厚1.6			瓦当のみ
817	126	94	1-K	SK278	土師器	埴壇壺(身)	(7.0) 受部径(8.0)	9.2	(6.0)		「泉州磨生」布目 肩部ろくろ目 板作り
818	126	94	1-K	SK278	土師器	埴壇壺(身)	4.8 受部径6.1	9.4	5.7		「三(門)津吉蔵」ウンモを含む 布目 板作り
819	126	94	1-K	SK278	土師器	埴壇	(29.0)				関西系
820	126	94	1-K	SK278	陶器	播鉢	31.9	15.2	12.0	鉄釉	胎土目
821	126	94	1-K	SK278	陶器	播鉢	(31.4)	*11.0		鉄釉	須佐唐津
822	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	11.3	5.0	4.7	染付	蛇の目釉刺ぎ
823	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	(10.2)	5.0	4.3	染付	蛇の目釉刺ぎ
824	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	(8.3)	4.9	3.6	染付	コンニャク印判 桐文「大明年製」くずし
825	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	10.1	5.0	4.3	染付	肥前
826	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	9.1	5.0	4.1	染付	コンニャク印判
827	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	9.2	4.9	3.8	染付	コンニャク印判 手描き草花文
828	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	(9.9)	5.3	(4.2)	染付	金彩
829	127	83	1-K	SK277	磁器	小碗	7.6	3.6	2.8	染付	型紙摺り
830	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	9.8	6.0	4.3	白磁	口鏝
831	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	8.9	5.8	4.2	白磁	肥前
832	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	8.1	4.3	3.6	白磁	肥前
833	127	84	1-K	SK277	磁器	小碗	8.9	4.5	3.9	白磁	肥前
834	127	83	1-K	SK277	磁器	碗	10.0	5.1	3.8	染付	肥前
835	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	(13.4)	6.6	5.4	染付	蛇の目釉刺ぎ部に白化粧 雪輪文
836	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	(13.0)	7.3	5.7	染付	「大明(年)製」くずし 雪輪梅樹文
837	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	14.2	6.6	5.4	染付	コンニャク印判五弁花 梅樹文
838	127	84	1-K	SK277	陶器	碗	10.6	6.7	5.0	陶胎染付	肥前
839	127	84	1-K	SK277	磁器	碗	(15.6)	6.0	(4.9)	染付	うがい茶碗
840	127	85	1-K	SK277	磁器	蓋付小碗	(4.4)	3.3	(2.9)	色絵	漆継
841	127	85	1-K	SK277	磁器	小杯	(5.1)	3.4	(2.6)	青花	景徳鎮
842	127	85	1-K	SK277	磁器	紅猪口	6.3	2.5	2.3	染付	雨降り文
843	127	84	1-K	SK277	磁器	猪口	7.2	5.2	3.6	染付	端反 草花文 五弁花 二重方形枠に渦福
844	127	84	1-K	SK277	磁器	猪口	9.0	6.4	5.4	染付	「大明年製」
845	127	84	1-K	SK277	磁器	猪口	6.3	7.1	3.3	青磁	漆継
846	127	85	1-K	SK277	磁器	紅猪口	5.7	2.0	2.7	染付	笹文
847	127	85	1-K	SK277	磁器	小杯	(5.8)	3.5	2.6	白磁	肥前
848	127	84	1-K	SK277	磁器	猪口	(7.6)	5.2	(3.9)	染付	雨降り文の簡略化 口鏝
849	127	84	1-K	SK277	磁器	猪口	(9.4)	5.7	4.7	白磁	肥前
850	127	85	1-K	SK277	磁器	猪口か			4.6	染付	「富」
851	127	84	1-K	SK277	磁器	小杯	(7.6)	4.4	3.8	染付	肥前
852	127	84	1-K	SK277	磁器	仏飯器	5.5	5.7	3.4	染付	コンニャク印判
853	127	84	1-K	SK277	磁器	仏飯器	7.2	5.1	3.6	染付	雨降り文
854	127	84	1-K	SK277	磁器	仏飯器	7.8	5.5	4.5	染付	肥前
855	127	85	1-K	SK277	磁器	紅皿	4.0	1.4	1.8	白磁	菊花形
856	127	85	1-K	SK277	磁器	紅皿	4.9	1.6	1.7	白磁	菊花形
857	127	85	1-K	SK277	磁器	紅皿	6.3	1.2	4.1	白磁	肥前
858	127	85	1-K	SK277	磁器	紅皿	6.9	2.0	3.9	白磁	肥前 1700-1730 灯明具に転用
859	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	11.9	3.5	3.7	染付	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉
860	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	11.9	3.1	4.3	染付	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉
861	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	12.3	3.8	4.5	染付	蛇の目釉刺ぎ 二重斜格子文
862	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	12.4	3.6	4.1	染付	蛇の目釉刺ぎ 斜格子文
863	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	13.2	3.2	8.2	染付	コンニャク印判五弁花 口縁変形「大明年製」くずし
864	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	12.9	3.4	8.4	染付	コンニャク印判五弁花 墨弾き 渦福くずし
865	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	12.9	3.3	7.6	染付	コンニャク印判五弁花 墨弾き「大明年製」くずし
866	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	14.1	4.5	7.5	染付	輪花 口縁変形 見込椀文 二重方形枠に渦福
867	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	13.7	4.0	7.7	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 花唐草文「大明年製」
868	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	13.5	2.8	7.7	染付	コンニャク印判五弁花 砂付着「大明年製」
869	128	85	1-K	SK277	磁器	皿	12.2	5.3	6.8	染付	蛇の目凹形高台 輪花 唐草文 二重方形枠に渦福
870	129	85	1-K	SK277	磁器	皿	14.2	2.5	9.7	染付	ハリ支え
871	129	86	1-K	SK277	磁器	皿	(13.4)	3.2	(8.1)	染付	肥前
872	129	86	1-K	SK277	磁器	皿	(13.6)	2.9	(8.6)	染付	兎文 漆継
873	129	86	1-K	SK277	磁器	皿	(21.6)	4.1	(15.9)	染付	椀花 口鏝 ハリ支えか
874	129	86	1-K	SK277	磁器	鉢			(9.9)	染付	五弁花手描き 花唐草文
875	129	86	1-K	SK277	磁器	皿			(12.1)	染付	輪花 ハリ支え
876	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋	16.1	17.7	4.3	染付	つまみ部貼り付け

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	押印番号	原収番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
877	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋(段重)	口径15.5 受部径16.9	3.9		染付	花唐草文 つまみ部貼り付け	肥前
878	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋	8.5	2.8	つまみ部径3.2	白磁		肥前
879	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋	8.8	2.9	つまみ径3.6	白磁		肥前
880	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋	7.2	2.2		染付	漆継 つまみ部貼り付け	肥前
881	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋	口径(9.3) 受部径(10.9)	3.4	つまみ部径3.9	染付		肥前
882	130	86	1-K	SK277	磁器	熨水入れ	長(13.7) 短(6.4)	3.1	13.1	染付		肥前
883	130	86	1-K	SK277	磁器	茶釜	8.8		胴径15.6	染付	花唐草文	肥前
884	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋付鉢	(21.1)			染付	漆継	肥前
885	130	86	1-K	SK277	磁器	瓶	2.5			染付		肥前
886	130	86	1-K	SK277	磁器	蓋付碗	(7.4)	6.0	2.5	染付	半筒形 氷裂文に雪輪文	肥前
887	130	86	1-K	SK277	陶器	香炉(火入れ)	10.3	5.2	5.7	陶胎染付	蛇の目高台	肥前
888	130	86	1-K	SK277	磁器	水筒	2.3	幅6.0		染付	孔	肥前
889	130	86	1-K	SK277	磁器	緒締	径1.2	長1.1	孔径0.5-0.4	青磁		
890	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	10.9	6.2	3.6	霽灰釉		萩
891	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	(10.6)	6.3	3.8	霽灰釉		萩
892	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	10.4	4.2	6.2	霽灰釉		萩
893	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	13.5	6.4	4.0	霽灰釉	窯変	萩
894	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	9.8	6.2	4.0	霽灰釉		萩
895	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	(10.1)	6.6	4.2	霽灰釉	渦巻き高台	萩
896	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	11.0	6.5	3.8	霽灰釉		萩
897	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	10.6	6.8	4.0	霽灰釉	底面「〇」	萩
898	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	(9.9)	6.1	4.1	霽灰釉		萩
899	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	(11.1)	5.8	4.4	霽灰釉		萩
900	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	9.0	6.2	3.4	霽灰釉	トキン状高台	萩
901	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	10.7	6.5	5.0	霽灰釉		萩 墨書「丹」
902	131	87	1-K	SK277	陶器	小碗	8.5	4.7	3.6	土灰釉		萩
903	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	8.3	5.1	3.6	霽灰釉		萩
904	131	87	1-K	SK277	陶器	碗	(12.4)	5.6	(4.2)	霽灰釉	窯変	萩
905	131	87	1-K	SK277	陶器	小碗	(8.8)	5.0	4.4	土灰釉		萩
906	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	(8.8)	5.2	4.2	透明釉	盃手 内面打刷毛目	肥前
907	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	10.6	5.7	3.9	透明釉	刷毛目	肥前
908	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	10.5	7.3	5.0	透明釉	刷毛目	肥前
909	131	88	1-K	SK277	陶器	碗			4.5	透明釉	刷毛目 蛇の目軸割ぎ	肥前
910	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	(9.6)	6.8	4.2	透明釉	刷毛目	肥前
911	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	(10.0)	7.1	4.4	透明釉	外面刷毛目 内面打刷毛目	肥前
912	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	(11.1)	7.7	4.3	透明釉	呉器手碗	肥前
913	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	(11.2)	7.3	4.6	透明釉	呉器手碗	肥前
914	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	11.9	7.7	4.7	透明釉	呉器手碗 胎土土師質系	
915	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	9.4	5.6	3.4	黒釉		京信楽系か 高台内黒書
916	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	14.5	6.9	5.4	灰釉(黄釉)	宍形碗 葎筒底	須佐唐津
917	131	88	1-K	SK277	陶器	碗	14.8	6.8	12.4	土灰釉 霽灰釉	宍形碗	
918	131	88	1-K	SK277	陶器	熨水入れ	型(7.8)	7.1	長(14.5) 短(7.7)	霽灰釉		萩
919	132	88	1-K	SK277	陶器	灯明受皿	口径12.3 受部径7.6	3.7	5.1	灰釉	孔	萩か
920	132	88	1-K	SK277	陶器	灯明受皿	口径8.3 受部径13.6	4.2	5.2	土灰釉		
921	132		1-K	SK277	陶器	茶器(風炉か)	10.3 受部径15.2			霽灰釉		萩
922	132	88	1-K	SK277	陶器	灰落とし			(5.6)	灰釉	上絵付(白・緑) 糸切り 口縁部敲打痕	京信楽系
923	132	88	1-K	SK277	陶器	仏飯器	8.7	6.1	4.2	鉄釉		
924	132	88	1-K	SK277	陶器	仏飯器	8.0	5.7	4.4	鉄釉	足付ハマ痕	
925	132	89	1-K	SK277	陶器	茶入	3.2			鉄釉	胎土灰色系	
926	132	89	1-K	SK277	陶器	蓋	外径7.9	2.3	5.6	土灰釉	糸切り	
927	132	88	1-K	SK277	陶器	土鍋	(14.0)	6.6	(6.0)	鉄釉	両手鍋 脚付	
928	132	89	1-K	SK277	陶器	つまみ部	つまみ部径5.2			鉄釉	孔	
929	132	89	1-K	SK277	土製品	水筒	厚0.2-0.9			緑釉	鳥形か 胎土土師質	
930	132	89	1-K	SK277	陶器	水注	7.1	8.7	7.3	灰釉	把手欠損	
931	132	89	1-K	SK277	陶器	油徳利	受部径3.9		胴部径9.2	鉄釉	孔 把手欠損	
932	132	89	1-K	SK277	陶器	油徳利	受部径5.0		6.4	灰釉	孔 輪状胎土目(高台登付)	萩か
933	132	89	1-K	SK277	陶器	壺				焼締		
934	132	89	1-K	SK277	陶器	壺	(19.0)			土灰釉	格子目叩き	肥前
935	132		1-K	SK277	陶器	不明			厚0.4	鉄釉		
936	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	(11.4)	3.6	4.4	銅緑釉 透明釉	蛇の目軸割ぎ 高台無釉 カンナ痕	肥前
937	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	(11.8)	3.7	(4.2)	銅緑釉	蛇の目軸割ぎ 高台無釉	肥前
938	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	12.1	3.9	4.3	銅緑釉 透明釉	蛇の目軸割ぎ 高台無釉	
939	133	89	1-K	SK277	陶器	小皿	(9.8)	2.4	(5.4)	灰釉	糸切り	
940	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	外12.8 内12.6	4.2	5.3	灰釉(透明釉)	胎土目 トキン状高台	
941	133	89	1-K	SK277	陶器	鉢	(15.6)	5.7	(5.8)	透明釉	刷毛目	萩か
942	133	89	1-K	SK277	陶器	皿			(5.8)	土灰釉	貝目	萩
943	133	89	1-K	SK277	陶器	皿			4.7	透明釉	刷毛目 貝目	萩
944	133	89	1-K	SK277	陶器	皿			4.3	透明釉	京焼風陶器 樓閣山水文	肥前
945	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	11.0	2.0	6.0	灰釉(透明釉)	鉄絵 目跡(ハマ痕か)	瀬戸美濃系
946	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	13.4	3.3	4.6	灰釉	鉄絵	肥前
947	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	(21.0)	5.8	7.7	透明釉	蛇の目軸割ぎ 刷毛目 口縁ひだ状	肥前
948	133	89	1-K	SK277	陶器	皿	18.7	4.4	13.2	霽灰釉	三足脚付	萩
949	133	90	1-K	SK277	陶器	皿	長18.8 短9.2	2.5	長16.7 短7.7	土灰釉(透明釉)	布目 脚付	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

通称番号	棟号番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴		備考
950	133	90	1-K	SK277	陶器	皿	短9.4	2.9	短7.8	土灰釉(透明釉)	布目 舞付	
951	133	90	1-K	SK277	陶器	香炉(火入れ)	(10.7)	7.3	5.3	灰釉	刷毛目	
952	133	90	1-K	SK277	陶器	碗	(12.0)	7.2	6.8	透明釉	胎土目	
953	133	90	1-K	SK277	陶器	鉢	(20.9)	5.6	(8.5)	土灰釉 蒸灰釉流し掛け	二方向高台	
954	133	90	1-K	SK277	陶器	鉢	(22.4)	7.3	9.9	灰釉	胎土目	
955	133	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(27.9)	12.2	11.9	灰釉	胎土目	須佐唐津
956	133	90	1-K	SK277	陶器	鉢	19.0	9.5	8.7	灰釉	胎土目	須佐唐津
957	134	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(28.4)			焼締		備前
958	134	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(3.3)	12.6	16.2	鉄釉	タタキ痕	肥前
959	134	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(29.6)	14.3	9.7	鉄釉		萩
960	134	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(30.1)	14.9	9.9	鉄釉	輪状胎土目	萩
961	134	90	1-K	SK277	陶器	摺鉢	(33.0)	13.4	13.2	鉄釉		須佐唐津
962	134	90	1-K	SK277	陶器	鉢	37.1	14.4	27.0	二彩	土灰釉 緑釉 柳描波状文	肥前
963	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.1	1.4	3.6		糸切り	
964	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.6	1.4	4.3		糸切り	灯明皿
965	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.4	1.2	4.8		糸切り	
966	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.1	1.1	4.6		糸切り	灯明皿
967	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.4	1.3	5.0			
968	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.2	1.3	4.8		糸切り	灯明皿
969	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.2	1.3	4.3		糸切り	灯明皿
970	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	6.7	1.1	5.3		糸切り	
971	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	7.8	1.5	5.4			
972	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	7.8	1.8	5.0		板目	灯明皿
973	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	8.8	1.6	5.2			灯明皿
974	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	7.7	1.6	5.0		糸切り	灯明皿
975	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	8.0	1.6	5.1		糸切り	灯明皿
976	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	8.0	1.5	5.3		糸切り	灯明皿
977	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	8.0	1.8	5.7		糸切り	灯明皿
978	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	7.8	2.0	5.0		板目	灯明皿
979	134	91	1-K	SK277	陶器	皿	8.6	2.0	4.9	灰釉	糸切り	灯明皿
980	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.2	2.3	6.3			灯明皿
981	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	10.6	2.1	5.0		糸切り	
982	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	10.7	2.0	5.5		板目	灯明皿
983	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.0	2.3	5.7		糸切り 板目	灯明皿
984	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	10.5	2.3	6.2		板目	灯明皿
985	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	10.9	2.2	6.0		糸切り	灯明皿
986	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	10.1	2.3	5.8		糸切り	灯明皿
987	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.2	2.1	5.8		糸切り	灯明皿
988	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.8	2.7	6.5		板目	
989	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.7	2.2	6.5			灯明皿
990	134	91	1-K	SK277	土師器	皿	11.6	2.1	6.2		板目	灯明皿
991	134	92	1-K	SK277	土師器	焼壺(身)	7.4 受部径6.9	8.8	5.8		「泉湊伊織」布目 ウンモを含む 板作り	
992	134	92	1-K	SK277	土師器	焼壺(身)	6.3 受部径7.6	8.9	5.7		「泉湊伊織」布目 板作り	
993	134	92	1-K	SK277	土師器	焼壺(身)	(6.0) 受部径(6.8)	8.5	5.3		「豊波浄(因)」布目 板作り	
994	134	91	1-K	SK277	土師器	焼壺(蓋)	口径6.3	1.9			布目	
995	134	91	1-K	SK277	土師器	焼壺(蓋)	口径8.3	2.2			布目 ウンモを含む	
996	134	91	1-K	SK277	土師器	焼壺(蓋)	口径8.4	2.4			布目	内外墨書「従」「回」
997	134	91	1-K	SK277	土師器	焼壺(蓋)	口径7.7	2.2			布目 ウンモを含む	
998	134	91	1-K	SK277	土師器	焼壺(蓋)	口径8.1	2.4			布目 ウンモを含む	
999	134	92	1-K	SK277	土師器	焙烙	(22.0)	4.0	16.1		板目 把手部欠損	
1000	135	92	1-K	SK277	土師器	焙烙	22.0	3.2	17.0		板目 把手部欠損	
1001	135	90	1-K	SK277	土師器	七厘ヤナ	口径(9.8)	厚1.2			孔 ハケメ調整	
1002	135	90	1-K	SK277	土師器	七厘						
1003	135	90	1-K	SK277	土師器	七厘	送風口5.8×3.9	底幅16.2	底奥行15.8		底部内面粗い柳状ハケメ 送風口貼り付け	
1004	135	92	1-K	SK277	土製品	埴塙	3.4	1.9				
1005	135	92	1-K	SK277	土製品	埴塙	(5.4)					
1006	135	92	1-K	SK277	土製品	埴塙						
1007	135	92	1-K	SK277	瓦質	摺鉢					口縁内面肥厚	
1008	136	92	1-K	SK277	土師器	火鉢	19.8	12.8	13.4		刷毛目 糸切り 穿孔	
1009	136	92	1-K	SK277	瓦質	火鉢	28.9	9.1	20.8		板目 貼り付け短脚 印花	
1010	136	92	1-K	SK277	土師器	焙烙	(29.8)	6.1	(22.4)		穿孔 板目	関西系
1011	136	92	1-K	SK277	土師器	焙烙	(27.8)	6.0			穿孔	関西系
1012	136	92	1-K	SK277	土師器	焙烙	(31.6)	9.4			穿孔	関西系
1013	136	92	1-K	SK277	土師器	鉢	(14.2)	10.1	18.0		焼成後底部穿孔	
1014	136	92	1-K	SK277	土製品	土人形	高*4.6	幅4.0	奥行4.4		猿 頭部	
1015	136	92	1-K	SK277	土製品	土人形	高4.8	幅3.3	奥行1.8	透明釉 緑釉	天神	
1016	136	92	1-K	SK277	土製品	ミニチュア	口径5.0	1.6	幅6.9	灰釉 緑釉	扇形	
1017	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	8.5	4.3	3.6	青磁染付	折杖文	肥前
1018	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	10.4	5.2	4.0	染付	蛇ノ目輪割ぎ 梅樹文	肥前
1019	137	98	1-J	SK293	磁器	小碗	4.9	8.6	3.4	染付	コンニャク印判 手描き	肥前
1020	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	10.2	5.3	3.8	染付	梅樹文	肥前
1021	137	98	1-J	SK293	磁器	小碗	8.5	3.9	3.0	染付	雨降り文	肥前
1022	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	8.4	4.7	3.4	染付	丸文	肥前

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	種別番号	収容番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1023	137	98	1-J	SK293	磁器	小碗	18.4	4.9	13.6	染付	コンニャク印判「紅葉」	肥前
1024	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	9.8	4.4	3.6	染付	丸文	肥前
1025	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	10.2	5.6	4.6	染付	水裂文 二重方形枠に渦福	肥前 18C前半
1026	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	(8.7)	4.3	(3.7)	色絵	蛇ノ目軸刺ぎ部分を緑色地軸 漆継	肥前
1027	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	10.2	5.4	4.3	染付	菊文 外二重内一重個目文 二重方形枠に渦福	肥前
1028	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	13.1	6.0	4.5	染付	蛇の目軸刺ぎ 草花文	肥前
1029	137	99	1-J	SK293	磁器	碗	12.9	7.2	5.4	染付	草花文 雷紋文「大明年製」くずし	肥前
1030	137	99	1-J	SK293	磁器	碗	12.8	7.2	5.1	染付	草花文「大明年製」くずし	肥前
1031	137	99	1-J	SK293	磁器	碗	14.8	7.4	6.4	染付	草花文 コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	肥前
1032	137	99	1-J	SK293	磁器	碗	(13.4)	7.0	5.0	染付	コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	肥前
1033	137	99	1-J	SK293	磁器	碗	13.3	7.5	4.9	染付	草花文 コンニャク印判五弁花「大明年製」くずし	肥前
1034	137	98	1-J	SK293	磁器	碗	(14.2)	7.8	5.6	青磁	トキン状・貼り付け高台「金口」スタンプ 漆継	龍泉窯系 1034と同一
1035	137	99	1-J	SK293	磁器	碗				青磁	漆継	龍泉窯系 1035と同一
1036	137	99	1-J	SK293	磁器	小碗			(6.4)	青花		景德鎮
1037	138	99	1-J	SK293	磁器	小杯	12.2	4.4	3.1	染付	コンニャク印判楓	肥前
1038	138	99	1-J	SK293	磁器	小杯	6.2	4.8	3.1	染付	草花文 菊反	肥前
1039	138	99	1-J	SK293	磁器	小杯	(7.2)	3.9	2.8	染付	「福」漆付着	肥前
1040	138	99	1-J	SK293	磁器	猪口	(8.3)	5.4	4.1	染付	「宣徳年製」菊反 草花文・銀杏 漆継	肥前
1041	138	99	1-J	SK293	磁器	猪口	6.4	5.1	3.1	青磁染付	桶形 柳文 内面白磁	肥前
1042	138	99	1-J	SK293	磁器	猪口	7.5	5.6	4.7	染付	桶形 二重方形枠に渦福	肥前
1043	138	99	1-J	SK293	磁器	猪口	(9.9)	5.6	3.4	白磁	折湾形	肥前
1044	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	9.8	3.3	5.6	染付	輪花 見込ナス 方形枠に「福」	肥前
1045	138	99	1-J	SK293	磁器	皿	9.6	2.2	5.6	染付	輪花 墨紙摺り 墨弾き 花唐草 口髹	肥前
1046	138	99	1-J	SK293	磁器	皿	10.7	2.0	5.6	染付	草花文 墨紙摺り手描き	肥前
1047	138	100	1-J	SK293	磁器	皿		0.9	(6.7)	青花	輪花	景德鎮
1048	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	(13.9)	3.6	(5.0)	染付	蛇の目軸刺ぎ 二重斜格子文	肥前
1049	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	12.3	3.7	4.1	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1050	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	12.6	3.7	4.8	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸 興須絵	肥前
1051	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	12.1	3.5	4.1	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1052	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	14.5	4.3	6.1	染付	蛇の目軸刺ぎ コンニャク印判五弁花	肥前
1053	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	13.3	2.7	8.1	染付	蛇の目軸刺ぎ	肥前
1054	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	(14.0)	4.3	7.7	染付	輪花 草花文	肥前
1055	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	13.7	4.0	7.2	染付	花唐草 コンニャク印判五弁花 輪花「大明年製」	肥前
1056	138	100	1-J	SK293	磁器	皿	(14.0)	4.1	7.8	染付	輪花 網目文にホノスキ 手描き五弁花「大明成化年製」	肥前
1057	139	100	1-J	SK293	磁器	皿	13.8	2.9	7.6	色絵	蛇の目軸刺ぎ 透明軸	肥前
1058	139	100	1-J	SK293	磁器	皿	14.3	4.9	8.0	染付	輪花 墨打ち陽出文 山水文 二重方形枠に渦福	肥前
1059	139	101	1-J	SK293	磁器	皿	14.4	4.1	7.6	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 二重方形枠に渦福	肥前
1060	139	100	1-J	SK293	磁器	皿	19.0	2.8	11.0	染付	折線形 ハリ支え「富貴長春」	肥前
1061	139	101	1-J	SK293	磁器	皿	(21.0)	4.0	(11.6)	染付	コンニャク印判五弁花 ハリ支え「(大)明(年)製」	肥前
1062	139	101	1-J	SK293	磁器	皿			6.3	染付	糸切り成形 高台貼り付け「元」	肥前
1063	139	101	1-J	SK293	磁器	蓋付碗	5.5	7.8	7.1	染付	半筒形 漆継	肥前
1064	139	101	1-J	SK293	磁器	段重	14.2	5.4	9.7	染付		肥前
1065	139	101	1-J	SK293	磁器	仏飯器	7.8	3.5	5.3	染付		肥前
1066	139	101	1-J	SK293	磁器	仏飯器	7.2	5.3	4.2	染付	蓮華文	肥前
1067	139	101	1-J	SK293	磁器	仏花瓶	8.6	15.3	5.6	染付		肥前
1068	139	101	1-J	SK293	磁器	蓋	口径5.4	1.4	受部径4.2	白磁	つまみ貼り付け	肥前
1069	139	101	1-J	SK293	磁器	小瓶	2.7	13.9	4.6	染付		肥前
1070	139	101	1-J	SK293	磁器	皿	10.3	3.6	5.8	白磁	口髹 型打ち成形	肥前
1071	139	101	1-J	SK293	磁器	缸皿	長6.3 短3.9	1.5	長3.8 短2.2	白磁	型打ち成形 貼り付け高台	肥前
1072	139	101	1-J	SK293	磁器	盥水入れ	長(16.4)	2.8	幅6.7	鉄軸(湯釉)	播磨とし	肥前
1073	140	101	1-J	SK293	磁器	皿	(20.5)	3.3	(11.0)	染付	亀甲文 草花文 墨弾き 方形枠に変体字	肥前 17C中葉か
1074	140	101	1-J	SK293	磁器	鉢	(21.4)	10.8	9.0	染付	五弁花手描き 口髹	肥前
1075	140	101	1-J	SK293	磁器	皿	20.0	4.2	11.6	染付	口髹 松竹梅文	肥前
1076	140	101	1-J	SK293	磁器	皿	20.7	3.8	11.4	染付	漆継	肥前
1077	141	102	1-J	SK293	磁器	大皿	33.6	4.9	16.7	染付	山水文 ハリ支え 漆継	肥前
1078	141	102	1-J	SK293	磁器	香炉(火入れ)	9.8	5.2	6.5	白磁	三足 高台無軸	肥前
1079	141	102	1-J	SK293	磁器	香炉	15.4	10.0	7.2	青磁	三足 鼎形 鉄泥塗布	肥前
1080	141	102	1-J	SK293	磁器	水滴か小瓶			3.6	染付		肥前 墨書
1081	141	102	1-J	SK293	磁器	水滴				染付	舟形か 型押し成形→穿孔 刻印	肥前
1082	141	102	1-J	SK293	磁器	水滴				色絵	水鳥形 布目(赤・緑)	肥前
1083	141	102	1-J	SK293	磁器	水滴か				白磁	鳥形 鉄軸 布目	肥前
1084	141	102	1-J	SK293	磁器	水滴か				色絵	タイコ形(赤・青)	肥前
1085	142	103	1-J	SK293	陶器	皿	12.0	3.9	4.6	銅緑釉 透明軸	蛇の目軸刺ぎ	肥前
1086	142	103	1-J	SK293	陶器	皿	(12.4)	3.7	4.6	銅緑釉 透明軸	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1087	142	103	1-J	SK293	陶器	皿	10.0	2.6	3.9	灰釉	胎土目 蔞筒底	須佐唐津
1088	142	104	1-J	SK293	陶器	皿	12.3	4.2	5.3	灰釉	胎土目 トキン状高台	須佐唐津
1089	142	104	1-J	SK293	陶器	碗(皿)	9.9	4.7	3.8	透明釉	京焼風陶器 椀園山水文	肥前
1090	142	104	1-J	SK293	陶器	皿	19.4	5.8	6.8	透明釉	刷毛目 蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1091	142	104	1-J	SK293	磁器	碗(皿)	13.1	5.0	5.2	色絵	京焼風陶器 椀園山水文+上絵付(赤・青・緑)	肥前 印刻「〇」
1092	142	104	1-J	SK293	陶器	皿	(23.6)	8.5	9.6	透明釉	浅丸形 蛇の目軸刺ぎ 鉄軸	肥前 墨書「□木」
1093	142	104	1-J	SK293	陶器	皿	18.6	6.0	6.2	緑釉 鉄軸 透明釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前系 高台内墨書か
1094	142	104	1-J	SK293	陶器	皿		*4.4	9.0	墨灰釉	貝目	萩
1095	142	104	1-J	SK293	陶器	皿			9.0	鉄泥 透明釉	三鳥手 目痕	肥前

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	邦図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1096	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	11.6	7.7	4.5	藁灰釉	渦巻き高台	萩
1097	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	11.5	3.8	6.2	藁灰釉	トキン状高台	萩
1098	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	11.5	5.4	3.9	藁灰釉	渦巻き高台 漆継 窟変	萩
1099	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.6	6.0	3.9	藁灰釉		萩
1100	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	8.9	4.1	6.2	藁灰釉	渦巻き高台	萩
1101	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.2	6.4	3.9	藁灰釉	渦巻き高台	萩
1102	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.6	6.4	3.9	藁灰釉		萩
1103	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.6	6.2	4.0	藁灰釉	渦巻き高台	萩
1104	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.0	6.6	4.2	藁灰釉		萩
1105	143	102	1-J	SK293	陶器	碗	10.0	6.3	3.9	藁灰釉		萩
1106	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	5.5	6.3	3.9	土灰釉		萩
1107	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	10.6	6.5	3.8	藁灰釉	トキン状高台	萩
1108	143	103	1-J	SK293	陶器	小碗	8.7	5.1	4.7	土灰釉		須佐唐津
1109	143	103	1-J	SK293	陶器	猪口	(6.2)	5.6	3.9	灰釉 透明釉		
1110	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	長17.3 短10.4		8.4	灰釉	杓形碗 碁筒底	
1111	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	(14.5)	6.8	4.4	灰釉	杓形碗 碁筒底	須佐唐津か
1112	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	(14.2)	8.0	4.8	透明釉	外面拂刷毛目 内面打刷毛目	肥前
1113	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	(12.2)	8.1	5.4	透明釉	外面拂刷毛目 内面打刷毛目	肥前
1114	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	9.6	5.0	3.6	透明釉	刷毛目 笠手 胎土赤褐色系	肥前
1115	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	9.8	4.9	3.8	透明釉	刷毛目 笠手	肥前
1116	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	(9.9)	5.3	4.6	透明釉	京焼風陶器 刻印「◎」 椀山水文	肥前
1117	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	8.8	6.7	4.2	灰釉	呉器手碗	肥前
1118	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	(9.5)	5.2	4.8	透明釉(灰釉) 鉄釉	京焼風陶器か 高台鉄釉 底面圈線	肥前系
1119	143	103	1-J	SK293	陶器	小碗	5.3	3.8	5.0	鉄釉		
1120	143	103	1-J	SK293	陶器	碗	10.6	6.7	4.6			京信楽系
1121	144	104	1-J	SK293	陶器	香炉(火入れ)	(11.6)	7.1	(8.0)	灰釉か	胎土目 トキン状高台	
1122	144	104	1-J	SK293	陶器	香炉(火入れ)	(10.8)	7.6	5.4	透明釉	刷毛目	肥前
1123	144	104	1-J	SK293	陶器	香炉(火入れ)	(13.1)	6.5	(13.0)	透明釉	型紙摺り花文	瀬戸美濃系
1124	144	104	1-J	SK293	陶器	瓶			7.0	透明釉 灰釉		
1125	144	104	1-J	SK293	陶器	蓋	8.2	3.0	器径9.8	灰釉 自然釉	つまみ貼り付け	墨書
1126	144	104	1-J	SK293	陶器	皿	(15.0)	4.8	7.8	灰釉(透明釉)	菊花型打ち成形 高台貼り付け 呉須・鉄絵	京信楽系
1127	144	104	1-J	SK293	磁器	皿	15.6	4.5	8.6	染付	菊花型打ち成形 高台貼り付け 呉須・鉄絵	京信楽系
1128	144	104	1-J	SK293	陶器	片口	15.4	8.5	7.8	灰釉	胎土目 墨書「御部屋ノ松右衛門様」	須佐唐津
1129	144	104	1-J	SK293	陶器	油徳利	2.6 受部径4.8			灰釉	孔 漆継	須佐唐津
1130	144	104	1-J	SK293	陶器	鉢	18.6	9.3	9.4	灰釉	胎土目	須佐唐津
1131	144	105	1-J	SK293	陶器	風炉か		*12.0				茶器の一種 萩
1132	144	105	1-J	SK293	陶器	水指	10.7		12.4	鉄釉	蓋付	
1133	144	105	1-J	SK293	陶器	花生	*15.0	7.2		鉄釉	蓮花 型打ち成形	
1134	144	105	1-J	SK293	陶器	製水入れ	長*15.3 短*5.9	6.1	長14.9 短5.8	藁灰釉 土灰釉		萩
1135	144	105	1-J	SK293	陶器	製水入れ	長(18.2) 短7.2	5.2	長17.3 短6.6	藁灰釉	墨書有	萩
1136	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	29.5	13.6	11.3	鉄釉	高台内ノミ裏	須佐唐津
1137	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	34.1	14.5	13.5	鉄釉	胎土土師質	須佐唐津
1138	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	(29.5)	13.4	13.3	鉄釉	胎土目	須佐唐津
1139	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	31.5	14.7	12.4	鉄釉		須佐唐津
1140	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	31.8	13.7	13.8		胎土目	須佐唐津
1141	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	(32.1)	14.7	(12.8)			須佐唐津
1142	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	31.3	13.8	11.8	鉄釉	胎土目か	須佐唐津
1143	145	105	1-J	SK293	陶器	摺鉢	(35.8)	15.6	13.2	鉄釉		須佐唐津
1144	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.5	1.6	5.1		糸切り	灯明皿
1145	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.6	1.5	4.8		糸切り	灯明皿
1146	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.5	1.6	4.1		糸切り	灯明皿
1147	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.6	1.4	4.6		糸切り	灯明皿
1148	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.6	1.5	4.6			灯明皿
1149	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	8.7	1.3	4.0			
1150	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	6.4	1.1	5.0			
1151	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	8.0	1.6	5.4		糸切り 焼成後穿孔	灯明皿
1152	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	7.6	1.7	5.1		糸切り	灯明皿
1153	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	7.3	1.6	5.2		糸切り	灯明皿
1154	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	7.5	1.6	4.4			
1155	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	7.9	1.4	5.5		糸切り	灯明皿
1156	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	7.8	1.7	5.4			灯明皿
1157	146	106	1-J	SK293	陶器	小皿	9.1	1.9	5.2		無釉	
1158	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	10.3	2.1	6.4			灯明皿
1159	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	9.9	2.1	5.7		糸切り 板目	灯明皿
1160	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	10.5	2.3	6.0			灯明皿
1161	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	11.3	2.3	6.4		糸切り	灯明皿
1162	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	11.3	2.1	5.7			内面付着物(植物繊維種子)
1163	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	11.3	2.2	5.8		糸切り	灯明皿
1164	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	10.8	2.0	6.5		糸切り	灯明皿
1165	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	11.2	2.1	5.5			灯明皿
1166	146	106	1-J	SK293	土師器	皿	10.2	2.2	6.1		糸切り 板目	灯明皿
1167	146	107	1-J	SK293	土師器	焼壇壺(身)	口径(5.8) 受部径(6.8)	*5.4				「御壺(壺) 塙清伊(壺)」ウンモ含む 粗布目 板作り
1168	146	107	1-J	SK293	土師器	焼壇壺(身)	*7.1	*4.4	6.2			「壺(波) 浄因」ウンモ含む 粗布目 板作り

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	発掘番号	図説番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
1169	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	5.2 受部径6.3	9.7	5.8		「泉湊伊織」ウンモ含む 粗布目 板作り
1170	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	4.9 受部径6.2	9.1	9.1		「難波津園」ウンモ含む 布目
1171	146	106	1-J	SK293	土師器	花焼塩壺(身)	9.2	4.5	6.8		泉州麻生系か 布目 蒔筒底
1172	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	6.0	7.9	3.7		
1173	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	7.4	9.6	5.6		「堺本湊焼吉右衛門」粗布目 板作り
1174	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	4.9 受部径6.3	9.8	5.6		「堺本湊焼吉右衛門」粗布目 板作り
1175	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	4.7 受部径6.2	9.8	5.0		「堺本湊(焼)吉右(衛)門」粗布目 板作り
1176	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	6.2 受部径7.5	9.7	5.5		「堺本湊(焼)吉右衛門」粗布目 板作り クサリ雜含む
1177	146	107	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(身)	4.9 受部径6.2	10.0	5.5		「堺本湊焼(吉)右衛門」粗布目 板作り
1178	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.0	2.3			ウンモ含む 布目
1179	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.8	2.2			ウンモ含む 布目
1180	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.2	2.1			布目
1181	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.1	2.1			ウンモ含む 布目
1182	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径8.5	1.7			布目
1183	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.4	2.0			ウンモ含む 布目
1184	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.4	2.0			ウンモ含む 布目
1185	146	106	1-J	SK293	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.9	1.9			ウンモ含む 布目
1186	147	107	1-J	SK293	土製品	輪羽口	口径9.1	内径2.3			金網の圧痕
1187	147	107	1-J	SK293	土師器	高台付皿			5.5		糸切り
1188	147	107	1-J	SK293	土製品	小型埴塼	3.5	1.6	内径2.8	自然釉	金粒付着
1189	147	107	1-J	SK293	土製品	埴塼	7.3	3.5	内径6.0		
1190	147	107	1-J	SK293	土師器	七厘サナ	口径(12.0)	厚1.5			孔確定7個
1191	147	108	1-J	SK293	土師器	焙烙か	(18.4)	3.3	(16.2)		板目
1192	147	107	1-J	SK293	土師器	焙烙	(20.8)	3.5	(16.4)		把手貼り付け 板目
1193	147	107	1-J	SK293	土師器	焙烙	(19.8)	3.5	(13.6)		把手貼り付け 糸切り
1194	147	107	1-J	SK293	土師器	焙烙	22.0 器幅13.6	4.1	15.2		把手貼り付け
1195	147	107	1-J	SK293	土師器	焙烙	(23.0) 器幅(25.2)	3.5	(17.2)		把手貼り付け
1196	147	108	1-J	SK293	瓦	軒丸瓦	瓦当径14.8				瓦当のみ
1197	148	108	1-J	SK293	土師器	火鉢か	(27.8)	13.5	(18.8)		刷毛目 板目 スタンプ 三足脚
1198	148	108	1-J	SK293	土師器	火鉢	(30.4)	15.3	15.8		獸脚三足 列点文 帯状工具で施文
1199	148	108	1-J	SK293	陶器	捏鉢	32.0	15.2	12.0	灰釉	胎土目
1200	148	108	1-J	SK293	土師器	捏鉢	(30.2)	18.8	13.3		
1201	148	108	1-J	SK293	土師器	焙烙	27.2	5.5	18.2		板目 粘土紐の痕
1202	148	108	1-J	SK293	土師器	焙烙	(25.8)				穿孔
1203	148	108	1-J	SK293	土師器	焙烙	(26.5)				孔未貫通
1204	148	108	1-J	SK293	土師器	焙烙	32.0	9.5			穿孔
1205	149	108	1-J	SK293	陶器	大甕	(33.6)			鉄釉	格子叩き
1206	150	111	1-J	SX292	瓦	海泉瓦					
1207	150	111	1-J	SX292	瓦	鳥伏間瓦					柄胡蝶文
1208	150	111	1-J	SX292	瓦	棟込瓦	瓦当径11.4	長12.2			土師質 ×文
1209	150	111	1-J	SX292	瓦	棟込瓦	瓦当径(11.6)				土師質 ×文
1210	150	111	1-J	SX292	瓦	棟込瓦	瓦当径11.2				土師質 ×文
1211	150	111	1-J	SX292	瓦	輪造い	長18.2	高7.0	幅13.4		布目
1212	150	111	1-J	SX292	瓦	輪造い	長16.4	高7.7	幅14.2		布目
1213	150	111	1-J	SX292	瓦	輪造い	長17.5	高7.7	幅14.2		布目 縄目
1214	150	111	1-J	SX292	瓦	丸瓦	瓦当径11.2				「一」の刻印
1215	151	115	1-X	埋裏522	土師器	皿	8.3	1.7	4.0		糸切り
1216	151	115	1-Z	かまど510	土師器	皿	8.3	1.8	3.8		糸切り
1217	151	115	1-Z	かまど510	土師器	焙烙	(21.4)	3.9	(15.2)		把手部欠損
1218	152	115	1-Z	かまど510	瓦	平瓦	28.4	幅25.4	厚2.1		焼熱による変色
1219	152	115	1-Z	かまど510	瓦	平瓦	33.3	幅26.0	厚2.2		焼熱による変色
1220	152	115	1-Z	かまど511	瓦	平瓦	29.2	幅25.7-26.5	厚1.8		焼熱による変色
1221	152	115	1-Z	かまど518	瓦	平瓦	28.4	幅25.4-26.0	厚2.0		焼熱による変色
1222	152	115	1-Z	かまど517	瓦	平瓦	27.5	幅25.0-26.3	厚2.4		焼熱による変色
1223	152	115	1-Z	かまど517	瓦	平瓦	28.5	幅24.6-25.0	厚2.0		鉄釘付着
1224	153	116	1-Z	SK516	磁器	碗	(11.5)	6.4	(6.8)	染付	広東碗
1225	153	116	1-Z	SK516	磁器	猪口	7.5	5.5	5.5	染付	蛇の目凹形高台 松文
1226	153	116	1-Z	SK516	磁器	皿	10.5	2.7	6.1	染付	輪花 口縁
1227	153	116	1-Z	SK516	磁器	皿	14.2	3.1	8.0	染付	蛇の目輪割ぎ コンニャク五弁花
1228	153	116	1-Z	SK516	磁器	皿			7.3	染付	コンニャク五弁花「大明年製」
1229	153	116	1-Z	SK516	磁器	皿			6.7	染付	銘「寛」のくずしか
1230	153	116	1-Z	SK516	陶器	碗	10.6	5.5	4.1	霰灰釉	開口碗
1231	153	116	1-Z	SK516	陶器	碗	9.2	5.1	3.3	灰釉	呉須絵 小杉碗
1232	153	116	1-Z	SK516	陶器	小皿	7.8	2.0	3.3	灰釉	鉄絵 輪花
1233	153	116	1-Z	SK516	陶器	蓋	5.8 口径7.5	2.8		鉄釉	
1234	153	116	1-Z	SK516	陶器	小碗	7.5	3.3	4.1	灰釉	溶融不良
1235	153	116	1-Z	SK516	陶器	香炉(火入れ)	11.0	7.9	7.1	灰釉	八角 算木文
1236	153	117	1-Z	SK516	陶器	散蓮華				灰釉	型押し成形
1237	153	116	1-Z	SK516	陶器	片口	12.4	6.0	5.3	灰釉	胎土目
1238	153	116	1-Z	SK516	陶器	摺鉢				鉄釉	
1239	153	116	1-Z	SK516	陶器	合子(身)	4.6	2.2	5.0	灰釉	
1240	153	116	1-Z	SK516	陶器	灯明受皿	(9.3) 受部径6.5	3.4	3.9	灰釉(黄釉)	
1241	153	116	1-Z	SK516	瓦質	火鉢			15.5		

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	採区番号	図改番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1242	154	116	1-Z	SK516	土師器	焙烙	34.9	9.5	21.0			
1243	154	117	1-Z	SK516	土製品	土人形				童と鯛		
1244	154	117	1-Z	SK516	土製品	土人形				亀		
1245	154	117	1-Z	SK516	土製品	皿の土型				木葉形		
1246	155	112	1-Z	SK555	磁器	碗	(11.4)	6.5	4.5	染付	「大明年製」	肥前
1247	155	112	1-Z	SK555	磁器	碗	(11.1)	7.1	(4.9)	染付	高台無軸	肥前 内都付着物
1248	155	112	1-Z	SK555	磁器	碗			4.5	染付		肥前
1249	155	112	1-Z	SK555	磁器	碗	(11.0)	6.0	(4.6)	染付	菊文	肥前
1250	155	112	1-Z	SK555	磁器	碗	(11.8)			染付		肥前
1251	155	112	1-Z	SK555	磁器	油壺		*7.8	5.1	染付	丸文 底部砂付着	肥前
1252	155	112	1-Z	SK555	磁器	水滴				色絵	鳥形(赤・緑)	肥前
1253	155	112	1-Z	SK555	磁器	仏飯器	(8.2)	(5.7)	(4.1)	染付	漆襷	肥前
1254	155	112	1-Z	SK555	磁器	小杯	(7.1)			染付		肥前
1255	155	112	1-Z	SK555	磁器	小杯	5.3	3.2	2.5	白磁	トキン状高台	肥前
1256	155	112	1-Z	SK555	磁器	皿	(14.0)	*3.6		染付		肥前
1257	155	112	1-Z	SK555	磁器	皿	(14.0)	2.1	(8.7)	染付	口髹	肥前 17C後
1258	155	112	1-Z	SK555	磁器	皿	(10.8)	2.2	(7.0)	染付	ハリ支え 方形枠に「福」	肥前 17C後
1259	155	112	1-Z	SK555	磁器	鉢		*2.3	8.4	染付		肥前
1260	155	112	1-Z	SK555	磁器	皿	(20.6)	4.3	(7.3)	染付	折縁皿	肥前
1261	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	5.7	1.3	4.0		糸切り	
1262	155	114	1-Z	SK555	土師器	皿	(5.7)	1.4			糸切り	
1263	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	6.3	1.4	4.3		糸切り	
1264	155	114	1-Z	SK555	土師器	皿			4.1		孔	灯明皿
1265	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	7.5	1.5	4.0		糸切り	
1266	155	114	1-Z	SK555	土師器	皿	9.0	1.6	6.0		板目	灯明皿
1267	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	10.5	2.4	4.7		板目	
1268	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	10.0	2.3	6.0			灯明皿
1269	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	10.9	2.3	4.7		板目	灯明皿
1270	155	115	1-Z	SK555	土師器	皿	10.6	2.7	4.9		板目	灯明皿
1271	155	114	1-Z	SK555	土師器	焼壺(蓋)	口径(7.6)	*2.2			布目	
1272	155	114	1-Z	SK555	土師器	焙烙		4.1			板目 把手部欠損	
1273	155	114	1-Z	SK555	土師器	焼壺(身)	6.0	9.3	5.7		「御壺塩師(塚)漆伊織」布目	
1274	155	114	1-Z	SK555	土師器	焼壺(身)	5.4	8.8	4.4		布目 輪積み	刻印なし
1275	156	112	1-Z	SK555	陶器	碗	10.8	6.4	(4.4)	藁灰釉	トキン状高台	萩
1276	156	112	1-Z	SK555	陶器	碗	10.6	6.5	3.7	藁灰釉		萩
1277	156	112	1-Z	SK555	陶器	碗	11.2	6.4	4.2	藁灰釉	トキン状高台	萩
1278	156	112	1-Z	SK555	陶器	碗	(12.5)	6.2	5.0	化性土 透明釉	トキン状高台 輪割落	
1279	156	113	1-Z	SK555	陶器	碗	12.8	6.9	4.9	土灰釉(灰釉)	盤付目痕の痕跡	萩
1280	156	113	1-Z	SK555	陶器	碗	(13.2)	6.3	4.6		刷毛目 三足ハマ裏 トキン状高台	萩
1281	156	113	1-Z	SK555	陶器	碗	11.6	7.8	5.4	灰釉		萩か須佐唐津
1282	156	113	1-Z	SK555	陶器	碗	(11.6)	6.7	(4.6)		刷毛目	肥前
1283	156	113	1-Z	SK555	陶器	碗	長(13.4) 短8.6	6.9	6.0	透明釉	香形碗 碁碁底 輪状胎土目	萩
1284	156	113	1-Z	SK555	陶器	皿	(10.9)	3.2	3.7	透明釉	砂目	肥前
1285	156	113	1-Z	SK555	陶器	皿	(13.2)	3.8	3.7	鉄釉	蛇の目釉刺ぎ 高台無軸	肥前
1286	156	113	1-Z	SK555	陶器	皿	(12.5)	3.6	5.5	透明釉	胎土目 トキン状高台	須佐唐津
1287	156	113	1-Z	SK555	陶器	香炉	(8.7)			鉄釉	透かし彫り	肥前
1288	156	113	1-Z	SK555	陶器	香炉(火入れ)	(11.7)	6.5	6.7	灰釉	胎土目ハマ裏	須佐唐津
1289	156	114	1-Z	SK555	陶器	灯明受皿	14.2 受部径8.1	4.0	4.8	鉄釉	糸切り	肥前
1290	156	114	1-Z	SK555	陶器	灯明受皿	(15.0) 受部径7.9	4.4	6.9	鉄釉	糸切り	肥前
1291	156	113	1-Z	SK555	陶器	皿	(21.2)	5.0	(8.4)	灰釉		須佐唐津
1292	156	113	1-Z	SK555	陶器	皿	(20.7)	5.4	(7.9)	土灰釉	輪状胎土目	萩
1293	156	114	1-Z	SK555	陶器	えざり鉢	(10.9)	3.4	3.1	鉄泥		肥前
1294	156	114	1-Z	SK555	陶器	茶入		*4.9	(4.4)	鉄釉	糸切り	
1295	156	114	1-Z	SK555	陶器	徳利			6.8	鉄釉か鉄泥	煎印「大」	肥前
1296	156	113	1-Z	SK555	陶器	匣鉢	(15.6)	10.1	17.3			
1297	157	113	1-Z	SK555	陶器	壺	(8.9)	12.7	(8.0)	鉄釉 緑釉		肥前
1298	157	113	1-Z	SK555	陶器	壺	(7.0)	13.6	6.5	鉄釉		肥前
1299	157	113	1-Z	SK555	陶器	壺	(9.7)	16.3	10.0	灰釉		須佐唐津
1300	157	113	1-Z	SK555	陶器	壺	(10.1)	15.6	10.1	灰釉		須佐唐津
1301	157	114	1-Z	SK555	陶器	鉢	(20.4)	*10.1		灰釉		
1302	157	113	1-Z	SK555	陶器	片口	16.2	11.6	9.5	土灰釉	銚をつける孔2か所	
1303	157	114	1-Z	SK555	陶器	摺鉢				焼締		肥前
1304	157	114	1-Z	SK555	瓦貫	火鉢の脚					獣足	
1305	157	115	1-Z	SK555	瓦	軒九瓦	瓦当径14.8				瓦当のみ珠文 左三巴文	
1306	157	115	1-Z	SK555	瓦	軒九瓦	瓦当径14.9				瓦当のみ珠文 左三巴文	
1307	158	114	1-Z	SK555	陶器	鉢	(24.1)	16.4	12.4	二彩	鉄釉と緑釉	肥前
1308	158	115	1-Z	SK555	瓦	平瓦	長25.9 短22.5					
1309	158	114	1-Z	SK555	陶器	摺鉢	(26.0)			鉄釉		須佐唐津
1310	158	114	1-Z	SK555	陶器	摺鉢	(32.4)			鉄釉		須佐唐津
1311	158	114	1-Z	SK555	陶器	摺鉢	(32.3)	14.2	11.4	鉄釉	硬質 胎土目	萩
1312	158	114	1-Z	SK555	陶器	火鉢	(29.4)	*10.2		灰釉		
1313	158	114	1-Z	SK555	陶器	甕	(34.8)	*8.3		鉄釉		肥前
1314	158	115	1-Z	SK555	瓦貫	鉢	(34.8)					

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	押収番号	図収番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考
1315	158	115	1-Z	SK555	瓦質	鉢		*10.9	(21.7)	板目 髹付	
1316	159	122	1-X	SK534	磁器	碗	10.0	5.6	4.1	染付	肥前
1317	159	122	1-X	SK534	磁器	碗	(9.2)	5.0	(3.8)	網目文 漆継	肥前
1318	159	122	1-X	SK534	磁器	猪口	7.9	5.0	4.1	染付	肥前
1319	159	122	1-X	SK534	磁器	碗			4.8	青磁染付	肥前
1320	159	122	1-X	SK534	磁器	皿	(14.6)	2.4	8.4	染付	肥前 17C 後
1321	159	122	1-X	SK534	磁器	皿	(22.0)	3.7	(11.0)	染付	肥前
1322	159	122	1-X	SK534	磁器	碗		*1.9	4.4	青花	景德鎮
1323	159	122	1-X	SK534	磁器	皿	(13.9)	2.4	(8.8)	染付	漆継 山水文
1324	159	122	1-X	SK534	磁器	皿	(21.1)	3.1	7.5	染付	折縁皿
1325	159	122	1-X	SK534	磁器	瓶	胴部径12.2	*19.6	(7.2)	染付	肥前 17C 後
1326	159	122	1-X	SK534	陶器	碗	9.4	5.8	3.6	土灰釉	
1327	159	122	1-X	SK534	陶器	仏飯器	(9.4)	6.3	5.3	鉄釉	
1328	159	122	1-X	SK534	陶器	碗		*3.0	6.2	化粧がけ 透明釉	湯巻き高台 畳付貝目
1329	159	122	1-X	SK534	陶器	碗	10.7	6.8	4.3	藁灰釉	
1330	159	122	1-X	SK534	陶器	碗	(10.8)	6.2	4.1	藁灰釉	
1331	159	122	1-X	SK534	陶器	碗	11.7	6.7	4.5	藁灰釉(透明釉)	
1332	159	122	1-X	SK534	陶器	碗	13.3	6.8	4.8		刷毛目 胎土目又は三足ハマ痕 トキン状高台
1333	159	123	1-X	SK534	土師器	皿	7.4	2.1	4.1		糸切り
1334	159	123	1-X	SK534	土師器	皿	(11.0)	2.5	(5.2)		糸切り
1335	159	123	1-X	SK534	土師器	皿	(11.3)	2.2	7.0		板目
1336	159	123	1-X	SK534	土師器	焙烙	(19.4)	4.0	(12.8)		把手部欠損
1337	159	123	1-X	SK534	土師器	焙烙	(25.6)	*4.8			
1338	160	123	1-X	SK534	陶器	押鉢		*6.1	16.8		貝目 敲打痕
1339	160	123	1-X	SK534	陶器	鉢		*3.3	(8.5)	灰釉か	貝目
1340	160	123	1-X	SK534	陶器	鉢			(11.6)	灰釉(黄釉)	胎土目
1341	160	123	1-X	SK534	陶器	皿	22.6	6.5	11.8	灰釉(透明釉)	白土象嵌文様 目跡か 釉剥落
1342	160	123	1-X	SK534	土製品	桶羽口					
1343	160	123	1-X	SK534	瓦	海泉瓦					
1344	160	123	1-X	SK534	瓦	軒丸瓦	瓦当径12.3				珠文 左三巴文
1345	160	123	1-X	SK534	陶器	福鉢	(29.4)			鉄釉	須佐唐津
1346	160	123	1-X	SK534	陶器	福鉢	(32.2)			口縁鉄釉	肥前 17C 後
1347	160	123	1-X	SK534	陶器	鉢	33.3	14.8	11.4	土灰釉	輪状胎土目
1348	161	123	1-Z	SK556	磁器	碗	(9.9)	5.9	(5.5)	染付	肥前
1349	161	123	1-Z	SK556	磁器	碗	(10.8)	6.3	(4.3)	染付	型紙摺り(楓)手描き(松葉)
1350	161	123	1-Z	SK556	磁器	碗	(10.9)	*5.4		染付	肥前
1351	161	123	1-Z	SK556	磁器	紅猪口	6.5	2.1	2.7	染付	コンヤク印判
1352	161	124	1-Z	SK556	磁器	小杯	(6.6)	4.5	3.2	染付	方形枠「福」
1353	161	124	1-Z	SK556	磁器	蓋	9.8 受部径10.9	2.5		染付	型紙摺り 手描き 把手部欠損
1354	161	124	1-Z	SK556	磁器	蓋	(16.4) 受部径(18.1)	5.0	つまみ径(6.0)	白磁	漆継
1355	161	123	1-Z	SK556	磁器	茶碗	(15.0)	5.7	(5.2)	青磁染付	うがい茶碗 口縁「大明(年)(製)くずし」漆継
1356	161	124	1-Z	SK556	磁器	皿	(12.6)	2.2	(7.9)	白磁	桜花 漆継
1357	161	124	1-Z	SK556	磁器	皿	(20.7)	3.1	(9.8)	染付	中国写し
1358	161	123	1-Z	SK556	磁器	皿	20.6	4.2	7.3	染付	折縁皿 梅文
1359	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗	12.4	7.2	4.9	土灰釉	三足ハマ痕
1360	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗	(10.6)	6.7	(4.4)	藁灰釉	トキン状高台
1361	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗	11.4	6.1	4.4	藁灰釉	トキン状高台
1362	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗	13.0	6.4	4.8	透明釉	刷毛目 三足ハマ痕 トキン状高台
1363	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗		*4.8	5.9	透明釉	刷毛目 溶融不良
1364	161	124	1-Z	SK556	陶器	碗	(10.0)	6.9	4.5	透明釉	呉器手碗
1365	162	124	1-Z	SK556	陶器	皿	12.1	3.7	5.0	灰釉	胎土目 トキン状高台
1366	162	124	1-Z	SK556	陶器	皿	12.4	2.1	5.5	透明(長石)釉	
1367	162	125	1-Z	SK556	磁器	皿	(15.2)	2.7	(7.6)	青磁	高台無釉
1368	162	124	1-Z	SK556	陶器	鉢	(13.9)	7.7	(7.6)	藁灰釉	胎土目 削高台
1369	162	124	1-Z	SK556	陶器	香炉(火入れ)	(9.4)	8.7	(9.8)	透明(長石)釉	脚付
1370	162	124	1-Z	SK556	陶器	鉢	(14.7)	*9.0		透明釉	呉須絵 漆継
1371	162	125	1-Z	SK556	陶器	鉢	(17.9)	*6.4		灰釉	
1372	162	125	1-Z	SK556	陶器	茶入		*6.1	(4.8)	鉄釉	糸切り
1373	162	124	1-Z	SK556	陶器	茶巾筒か	3.1	5.9	5.9	灰釉	
1374	162	125	1-Z	SK556	土師器	皿	5.8	1.2	4.5		糸切り
1375	162	125	1-Z	SK556	土師器	皿	5.8	1.3	4.2		糸切り
1376	162	125	1-Z	SK556	土師器	皿	7.9	1.9	4.7		糸切り
1377	162	125	1-Z	SK556	土師器	皿	(10.3)	2.1	5.1		板目
1378	162	125	1-Z	SK556	土師器	焼塩壺(蓋)	口径7.7	1.8			布目
1379	162	125	1-Z	SK556	土師器	焼塩壺(身)	6.3 受部径7.4	9.8	6.2		「師器塩師堺漆伊織」布目 板作り
1380	162	125	1-Z	SK556	土師器	焙烙	(19.8)	3.3	(15.3)		把手部欠損
1381	162	125	1-Z	SK556	土師器	焙烙	(29.3)	*6.2			
1382	162	125	1-Z	SK556	陶器	福鉢				鉄釉	萩
1383	162	125	1-Z	SK556	陶器	福鉢	(26.5)	*10.7		鉄釉	須佐唐津
1384	163	124	1-Z	SK556	陶器	茶道具か		29.2		灰釉	家形
1385	164	117	1-Z	SK532	磁器	碗	(9.6)	5.4	(3.4)	染付	葵文
1386	164	118	1-Z	SK532	磁器	碗	8.6	4.7	3.3	染付	雨降り文
1387	164	117	1-Z	SK532	磁器	碗	(10.7)	6.2	3.9	染付	「大明年製」くずし

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	標記番号	団版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1388	164	118	1-Z	SK532	磁器	碗	(8.4)	4.0	(3.1)	色絵	(赤・緑) 漆継	肥前
1389	164	118	1-Z	SK532	磁器	小杯	6.4	4.2	3.3	染付	コンニャク印判 変形	肥前
1390	164	118	1-Z	SK532	磁器	猪口	7.6	5.7	4.6	白磁	口縁	肥前
1391	164	117	1-Z	SK532	磁器	小杯	7.0	5.2	3.2	青磁染付	柳文	肥前
1392	164	118	1-Z	SK532	磁器	猪口	7.2	5.4	3.5	白磁	輪花	肥前
1393	164	117	1-Z	SK532	磁器	小杯	(7.0)	4.8	(3.1)	染付	車花文	肥前
1394	164	117	1-Z	SK532	磁器	猪口	7.0	5.9	3.5	染付	網干文	肥前
1395	164	118	1-Z	SK532	磁器	紅皿	6.5	2.7	2.7	染付	型紙摺り	肥前
1396	164	117	1-Z	SK532	磁器	碗	14.7	*6.0		染付	漆継	肥前
1397	164	118	1-Z	SK532	陶器	碗			(5.3)	陶胎染付		肥前
1398	164	118	1-Z	SK532	磁器	香炉(火入れ)	7.6	6.3	4.1	青磁	三足脚付	肥前
1399	164	118	1-Z	SK532	磁器	皿				青花	砂目付着	津州窯系
1400	164	117	1-Z	SK532	磁器	皿	13.5	3.0	7.8	染付	ハリ支え 墨弾き コンニャク印判五弁花	肥前
1401	164	117	1-Z	SK532	磁器	皿	13.6	4.2	7.9	染付	ハリ支え 手描き五弁花 二重方形枠渦福	肥前
1402	164	117	1-Z	SK532	磁器	皿	(12.7)	3.3	(9.5)	染付	ハリ支え「変形字」	肥前
1403	164	118	1-Z	SK532	陶器	皿	(13.8)	3.4	8.0	陶胎染付		肥前
1404	164	118	1-Z	SK532	磁器	飯	体部径11.4	*22.3	6.6	染付		肥前
1405	164	118	1-Z	SK532	磁器	小皿	長(10.5) 短7.3	2.7	長5.9 短3.8	白磁	口縁 鉄軸 布目痕 貼付高台 型打ち成形	肥前
1406	164	118	1-Z	SK532	磁器	皿	(14.8)	2.5	(8.7)	青磁	底部蛇の目軸刺ぎ 鉄軸 文様片彫 チャンズ痕	肥前
1407	164	118	1-Z	SK532	磁器	皿か鉢		*2.6	(15.7)	青磁	底部軸刺ぎ部分に鉄泥塗布 漆継	肥前
1408	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	10.8	6.7	4.1	藁灰釉		萩
1409	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	11.5	6.1	4.2	藁灰釉		萩
1410	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	10.9	6.1	4.2	藁灰釉		萩
1411	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(9.1)	(5.7)	3.6	藁灰釉		萩
1412	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(10.8)	6.0	3.8	透明釉		萩
1413	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(16.0)	6.0	3.8	藁灰釉		萩
1414	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(11.1)	5.7	(3.8)	藁灰釉		萩
1415	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(9.0)	5.8	3.9	透明釉		萩
1416	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(12.4)	7.6	5.9	灰釉(緑釉)	漆継	
1417	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(10.8)	7.2	4.6	灰釉		須佐唐津か
1418	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(11.8)	7.2	4.9	透明釉	呉器手碗	肥前
1419	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(10.6)	6.5	4.5	透明釉	京焼風陶器 呉須絵 漆継	肥前
1420	165	119	1-Z	SK532	陶器	小碗	8.7	5.7	5.4	灰釉		
1421	165	120	1-Z	SK532	陶器	碗				絵付(緑・青)	京焼風陶器「清水」	肥前
1422	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗			(4.8)	透明釉	刷毛目	
1423	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(10.6)	7.0	(4.2)	透明釉	外面刷毛目、内面打刷毛目	肥前
1424	165	118	1-Z	SK532	陶器	皿	(12.8)	3.7	3.8	灰釉か	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1425	165	118	1-Z	SK532	陶器	皿	(14.1)	3.6	4.6	灰釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1426	165	118	1-Z	SK532	陶器	皿	(19.5)	6.5	(5.9)	鉄泥 透明釉	蛇の目軸刺ぎ 高台無軸	肥前
1427	165	120	1-Z	SK532	陶器	碗	(13.2)	5.0	4.7		刷毛目 輪状胎土目	萩
1428	165	118	1-Z	SK532	陶器	皿		*1.9	4.5	灰釉	砂目	肥前
1429	165	120	1-Z	SK532	陶器	灯明受皿	9.1 受部径5.9	2.9	3.8	灰釉		
1430	165	118	1-Z	SK532	陶器	皿	18.6	4.8	7.1	灰釉	胎土目	須佐唐津
1431	165	120	1-Z	SK532	陶器	灰落とし	胴部径8.3	*9.8	5.6	黒釉	敲打痕	
1432	165	120	1-Z	SK532	陶器	灰落とし	内5.2 外6.5	6.8	5.9	土灰釉か	敲打痕	萩
1433	165	119	1-Z	SK532	陶器	香炉(火入れ)	(10.7)	7.9	(9.4)	藁灰釉か	四足	
1434	165	119	1-Z	SK532	陶器	碗	(16.8)	7.7	(8.4)	灰釉	香形碗 碁笥底	須佐唐津
1435	165	121	1-Z	SK532	陶器	壺	(19.0)			土灰釉	内面格子目叩き	肥前
1436	165	120	1-Z	SK532	陶器	壺				鉄釉		信楽
1437	165	120	1-Z	SK532	陶器	鉢	(15.4)	7.8	(8.3)	灰釉	胎土目 片口か	
1438	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	5.6	1.3	4.2		糸切り	
1439	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	6.1	1.3	4.7		糸切り	
1440	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	6.0	2.4	4.6		糸切り	灯明皿
1441	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	7.5	1.8	4.3		糸切り	灯明皿
1442	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	7.6	1.7	4.8		糸切り	灯明皿
1443	166	120	1-Z	SK532	土師器	皿	(8.1)	2.0	4.3		糸切り	
1444	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.7	2.4	6.0		板目	灯明皿
1445	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.7	2.5	5.6		板目	灯明皿
1446	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.7	2.4	5.6		板目	灯明皿
1447	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.5	2.5	5.2			灯明皿
1448	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.3	2.4	5.6		板目	灯明皿
1449	166	121	1-Z	SK532	土師器	皿	10.1	2.2	5.5			灯明皿
1450	166	120	1-Z	SK532	土師器	埴塙	(8.8)	(4.0)			焼成後穿孔 粘土貼付け 灯芯押さえか	灯明皿
1451	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(蓋)	器径6.2	2.0				
1452	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(蓋)	器径6.3	1.9				
1453	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	5.5	6.9	4.5		輪積み成形	
1454	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	(4.4)	(7.1)	3.2		輪積み成形	
1455	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(蓋)	器径7.5	2.1			布目	
1456	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(蓋)	器径7.5	2.1			布目	
1457	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	6.1 受部径7.2	9.2	5.7		「御壺塩師□□□□」布目 板作り	
1458	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	6.2 受部径7.5	8.8	(5.9)		「御壺塩師□□□□」布目 板作り	
1459	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	6.1 受部径7.2	8.9	(5.1)		「御壺(壺)師(師)壺(壺)伊(伊)織」布目 板作り	
1460	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塙壺(身)	5.7 受部径6.9	8.5	5.7		刻印不明 布目 板作り	

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	標図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1461	166	121	1-Z	SK532	土師器	焼塩焔(身)	5.9 受部径7.3	9.0	5.7	刻印不明 布目 板作り		
1462	166	121	1-Z	SK532	土師器	焙烙	(32.4)			耳部欠損	関西系	
1463	166	121	1-Z	SK532	瓦質	火鉢		11.7		板目 凹足		
1464	166	121	1-Z	SK532	瓦	軒九瓦	瓦当径12.8			瓦当 布目痕 珠文 左三巴文		
1465	166	121	1-Z	SK532	瓦	棧瓦				唐草文		
1466	167	120	1-Z	SK532	陶器	鉢	(21.4)	10.9	9.5	灰釉	須佐唐津	
1467	167	120	1-Z	SK532	陶器	鉢	(22.1)	12.5	(9.8)	灰釉	須佐唐津	
1468	167	120	1-Z	SK532	陶器	鉢	(28.7)			土灰釉	肥前か	
1469	167	120	1-Z	SK532	陶器	鉢	26.7	12.4	11.8	灰釉	須佐唐津か	
1470	167	118	1-Z	SK532	陶器	皿	(30.8)	8.6	(8.0)	三鳥手	砂目痕	肥前
1471	167	120	1-Z	SK532	陶器	徳利		*15.0	(17.0)	焼締	備前	
1472	167	120	1-Z	SK532	陶器	揃鉢	(28.2)	12.3	11.3	鉄釉	目痕	萩
1473	167	120	1-Z	SK532	陶器	揃鉢	(31.7)			鉄釉		須佐唐津
1474	167	120	1-Z	SK532	陶器	揃鉢	(34.8)	14.9	(12.0)	鉄釉		萩
1475	167	120	1-Z	SK532	陶器	揃鉢	30.2	11.7	内13.0 外24.9	鉄釉	穿孔して植木鉢に転用か	須佐唐津
1476	168	121	1-Z	SK532	陶器	壺	10.8	32.6	14.0	焼締		信楽
1477	169	125	1-北端	1-2面	磁器	碗	(11.0)	7.8	4.8	染付	「寿」文	肥前
1478	169	125	1-北端	3面	磁器	碗	(10.2)	5.3	4.2	染付	型紙摺り 蛇の目釉割き	肥前
1479	169	125	1-北端	3面下堆積層	磁器	碗	9.3	4.8	4.2	染付	内面磨付着	肥前
1480	169	126	1-北端	3面下堆積層	磁器	碗	(9.0)	4.2	3.4	青花		景德鎮
1481	169	126	1-北端	3面下堆積層	磁器	碗	(11.3)			青花	虫喰い	景德鎮
1482	169	126	1-北端	遺構検出	磁器	碗				青花		景德鎮
1483	169	126	1-北端	1-2面	磁器	皿	(13.8)	2.6	(9.2)	染付	型紙摺り	肥前
1484	169	126	1-北端	3面下堆積層	磁器	皿	(13.9)	3.2	(5.4)	染付	渦巻き高台 陶器質	肥前
1485	169	125	1-北端	3面	磁器	小杯	(6.8)	4.5	(2.8)	染付	輪花	肥前
1486	169	125	1-北端	3面	磁器	猪口	(8.3)			染付		肥前
1487	169	126	1-北端	3面下堆積層	磁器	香炉(火入れ)	(8.2)	4.4	4.2	青磁		肥前
1488	169	125	1-北端	3面	磁器	仏飯器	(7.6)	5.0	4.0	染付	雨降り文	肥前
1489	169	126	1-北端	3面下堆積層	陶器	碗	(10.4)	7.7	5.0	鉄釉(黒釉)	トキン状高台	
1490	169	126	1-北端	1-2面	陶器	碗	(12.4)	6.6	5.2	土灰釉(灰釉)	畳付貝目 トキン状高台	萩
1491	169	126	1-北端	3面下堆積層	陶器	碗		7.1	5.6	土灰釉	畳付輪状胎土目 トキン状高台	萩
1492	169	126	1-北端	3面	陶器	碗	14.4			土灰釉		萩
1493	169	126	1-北端	3面	陶器	碗	(14.8)	5.4	5.6	土灰釉		萩
1494	169	126	1-北端	3面下堆積層	陶器	皿	(14.4)	3.6	4.8	灰釉(黄釉)	胎土目	須佐唐津
1495	169	126	1-北端	3面	陶器	鉢か			10.6	土灰釉(透明釉)	割高台 畳付に輪状胎土目	萩
1496	169	126	1-北端	3面	陶器	鉢			9.1	土灰釉	輪状胎土目 変形	萩
1497	169	126	1-北端	3面	陶器	碗	長14.3 短12.6	6.8	5.2	透明釉	底部十文字に切り割る	
1498	169	127	1-北端	3面下堆積層	土師器	皿	6.2	1.2	4.8		糸切り	灯明皿
1499	169	127	1-北端	3面下堆積層	土師器	皿	6.4	1.2	4.3		糸切り 底部穿孔	灯明皿
1500	169	127	1-北端	3面	土師器	皿	6.5	1.8	5.3		糸切り	
1501	169	127	1-北端	3面下堆積層	土師器	皿	9.0	1.9	6.0		糸切り 板目	灯明皿
1502	169	127	1-北端	1-2面	土師器	焙烙	(22.6)	3.4	(16.2)		把手部欠損	
1503	169	127	1-北端	3面下堆積層	土製品	土鈴	長3.9+ α	幅3.9			穿孔	
1504	169	127	1-北端	3面下堆積層	陶器	鈿	径1.4	厚0.4		緑釉(灰釉)		
1505	169	127	1-北端	3面	瓦	軒九瓦	瓦当径16.9	厚2.5			瓦当 珠文 左三巴文	
1506	170	127	1-北端	3面下堆積層	陶器	甕	24.0	21.1+ α		焼締		備前
1507	170	127	1-北端	3面中	陶器	甕	25.0			焼締		備前
1508	170	127	1-北端	3面下堆積層	陶器	揃鉢	(20.4)	11.8	8.5	土灰釉	割高台	萩
1509	170	126	1-北端	3面下堆積層	陶器	鉢	25.9	12.5	10.8	土灰釉	畳付貝目	萩
1510	170	127	1-北端	3面	陶器	鉢	(31.0)			土灰釉		萩
1511	170	126	1-北端	3面下堆積層	陶器	鉢	(35.4)	6.5+ α		灰釉(土灰釉)		萩
1512	170	127	1-北端	3面下堆積層	陶器	揃鉢	(29.2)			鉄釉		須佐唐津
1513	170	127	1-北端	埋蔵404	瓦片土器	甕	長37.0 短32.4	32.0	20.0			

2 地区 (第171~177図 図版128~133)

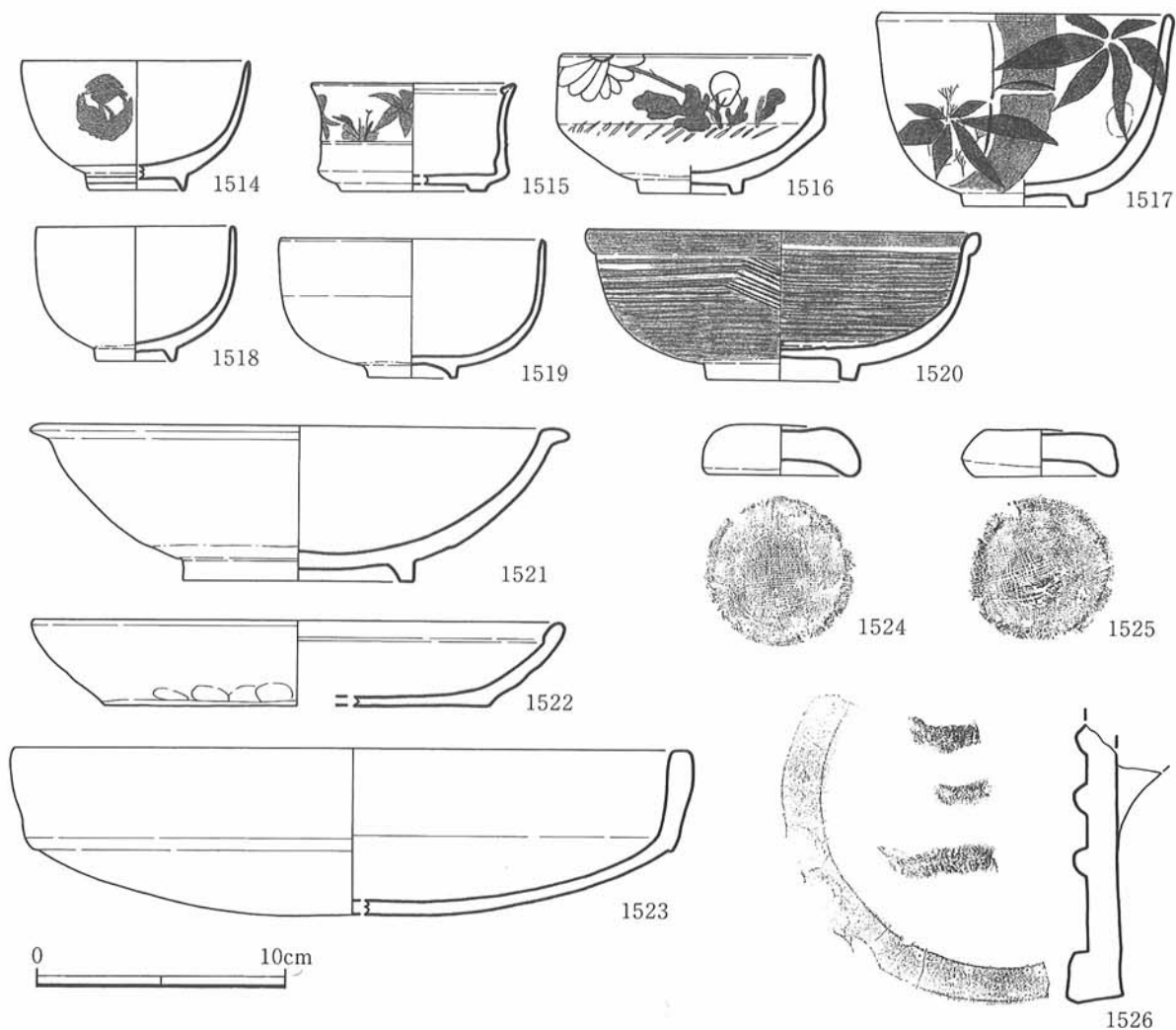
2 地区から出土した陶磁器は、SK、SX など遺構に伴うものは少ない。かわって建物整地層や石垣構築に伴う客土、さらに第1焼土層、第2焼土層出土の遺物が多いことが特徴である。遺物の多くが17世紀後半から18世紀前半に属することから、この時期の遺構が町屋の中心となるとみられる。

2-A・B区をはじめとする第1焼土層、第2焼土層の2つの焼土層は比較的遺物を多く包含しており、遺構の時期決定に重要な資料である。第1焼土層の時期はおおよそ17世紀後半から18世紀にかけて、第2焼土層は砂目のある唐津や肥前磁器、織部、志野、輸入磁器が出土していることから、17世紀前半~中頃にかけての遺物が主体となる。これらの遺物については次報告に掲載予定である。ここではSK、SX 出土の陶磁器について報告する。

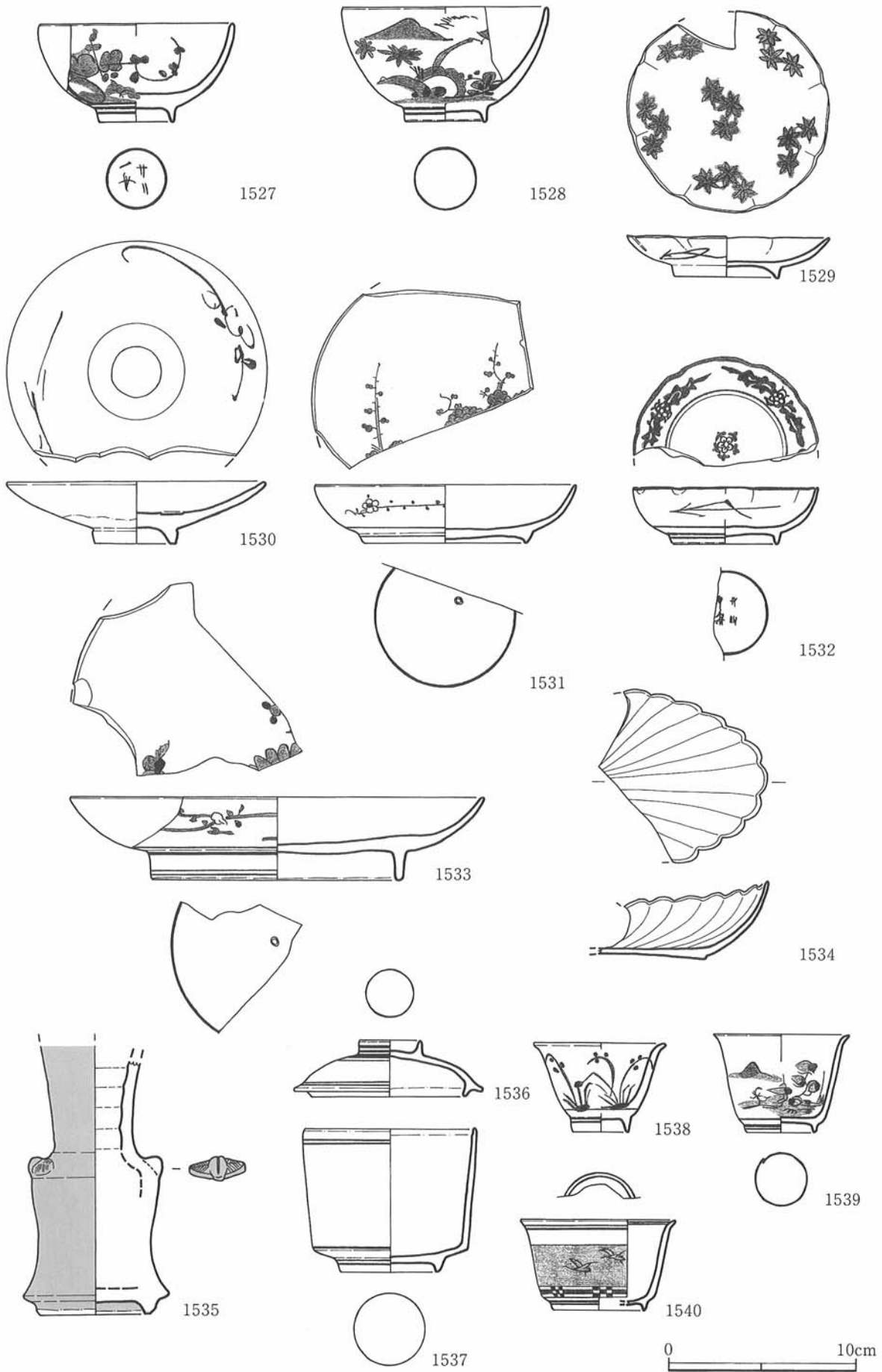
SK25 (第171図 図版128)

1514、1515は磁器。1516~1521は陶器。1522~1525は土師器。1526は瓦。

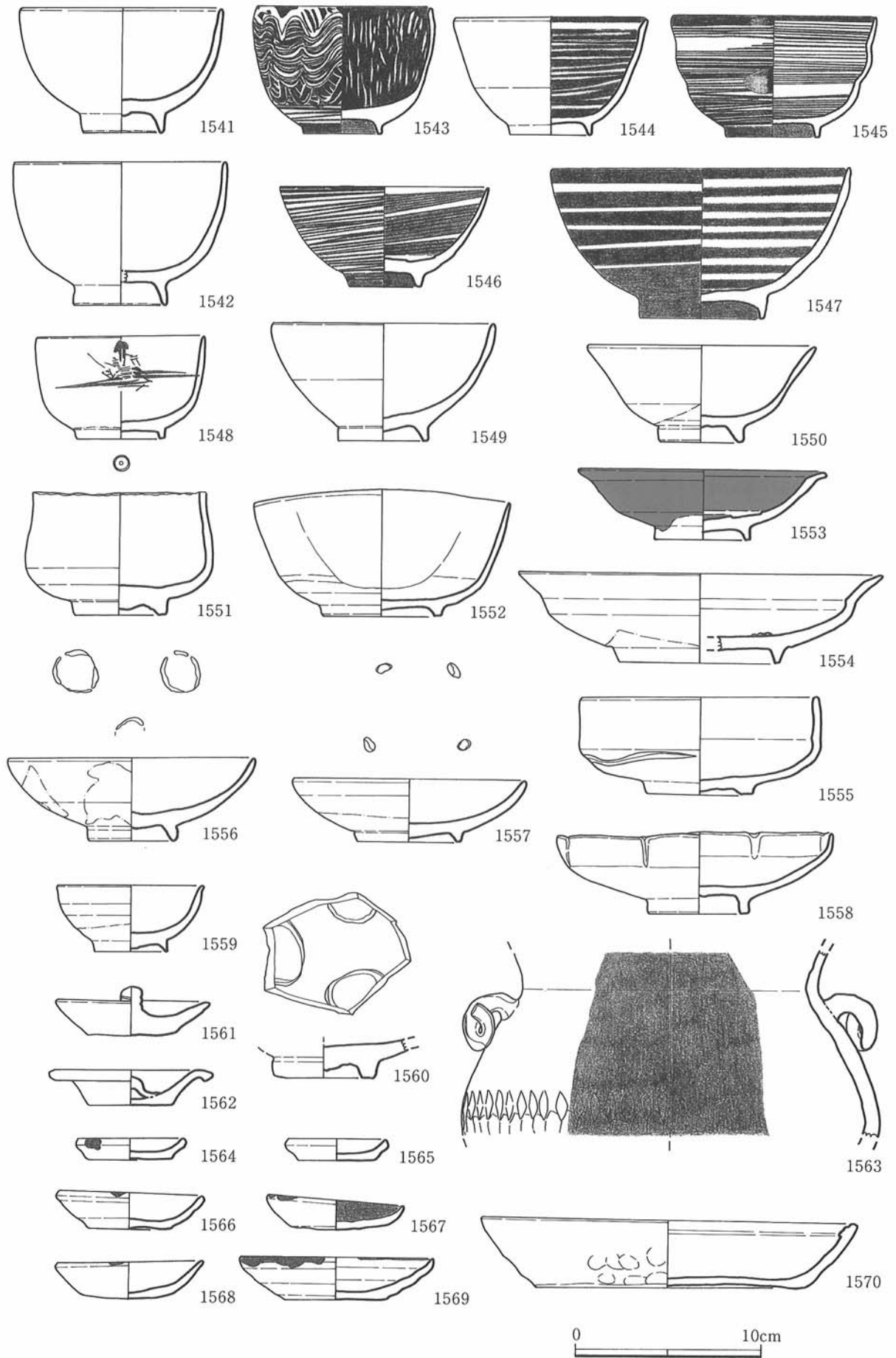
1514はコンニャク印判を外面に押す染付碗。1515は染付の香炉（火入れ）で、口縁を内面に肥厚させる。内面全体にも施釉。1516、1517は京信楽系の陶器。1516は腰折れ碗で、1517は大型の碗で鉄絵で竹文を描く。1520は蛇の目釉剥ぎの刷毛目鉢。1518、1519、1521は萩の藁灰釉陶器。1524、1525は焼塩壺の小型蓋。1522、1523は二種類の焙烙で、前者は在地系で後者は関西系のもの。1526は「三」



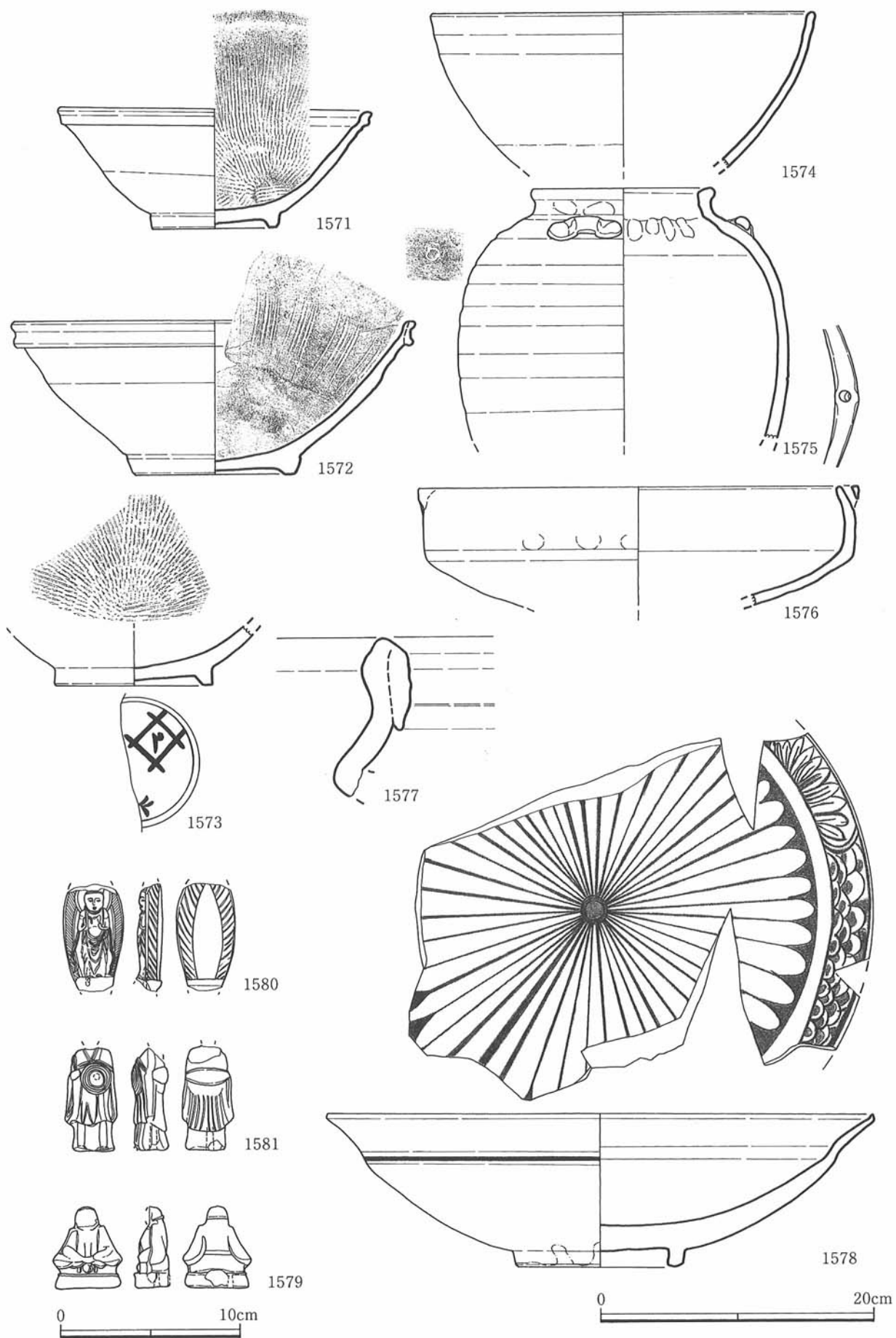
第171図 2-SK25出土遺物(1/3)



第172図 2-SX46出土遺物①(1/3)



第173図 2-SX46出土遺物②(1/3)



第174图 2-SX46出土遺物③(1/3、1/4)

字のある軒丸瓦。

SK25は肥前陶器が残り、京信楽系陶器が含まれることから18世紀中頃から後半か。

SX46 (第172、173図 図版128～131)

1527～1540、1578は磁器。1527、1528は染付碗で雪輪草花文などを施すくらかわんか碗。1529は型紙摺りを施した輪花皿で、1530は蛇の目釉剥ぎ皿で梅樹文、折松葉文が描かれる。高台無釉。1531、1533は見込に梅樹文などを描き、高台内には圏線とハリ支えの痕跡が認められる。1532は五弁花、高台に「大明年製」くずしのある輪花皿。1534は白磁の菊菱型打皿。1535は青磁の仏花瓶。1536、1537は蓋物のセット。1538、1539は小杯。1540は猪口。

1541～1563、1571～1575、1577は陶器。1541、1542は呉器手碗。1543～1547は刷毛目碗で1543、1546は肥前。1544は形態や胎土から萩の刷毛目碗であろう。1548は京焼風陶器碗で高台内に「○」記号で、刻印はない。1550は萩の土灰釉碗で見込に輪状の胎土目痕あり。1551は敲打痕があることから灰落としに転用された萩の碗。1552は灰釉沓形碗。1553は鉄釉蛇の目釉剥ぎ皿。1556は外面に吹き刷毛目を施し、内面に胎土目が輪状の痕跡として残る皿。1557は胎土目痕の残る灰釉皿で、須佐唐津か。1555、1558は萩の皿。1559は須佐唐津の灰釉小碗。1560は貝目痕が残る萩の皿。1561、1562は陶器蓋。1563は内外面とも鉄釉と透明釉を掛け分けた水指で、蕨手状の耳がつく。1564～1569は土師器皿。1570は在地系の把手のつく焙烙。1571～1573は須佐唐津の播鉢で体部が内湾して立ち上がる。1573は底面に屋号を記した墨書がある。1574は灰釉の大型鉢。1575、1577は備前の三耳壺、大甕片。1575は肩部に「○」の刻印がある。1576は関西系焙烙で、粘土を貼り付け把手をつける孔を一つ穿つ。1578は染付大皿で見込に菊花を描く。高台内まで施釉。1579～1581は土人形。

時期は17世紀後半から18世紀前半であり、肥前陶器の京焼風陶器、刷毛目碗、蛇の目釉剥ぎ皿もほぼ同時期であることから、SX46もこの時期とみられる。

SX47 (第175図 図版131、132)

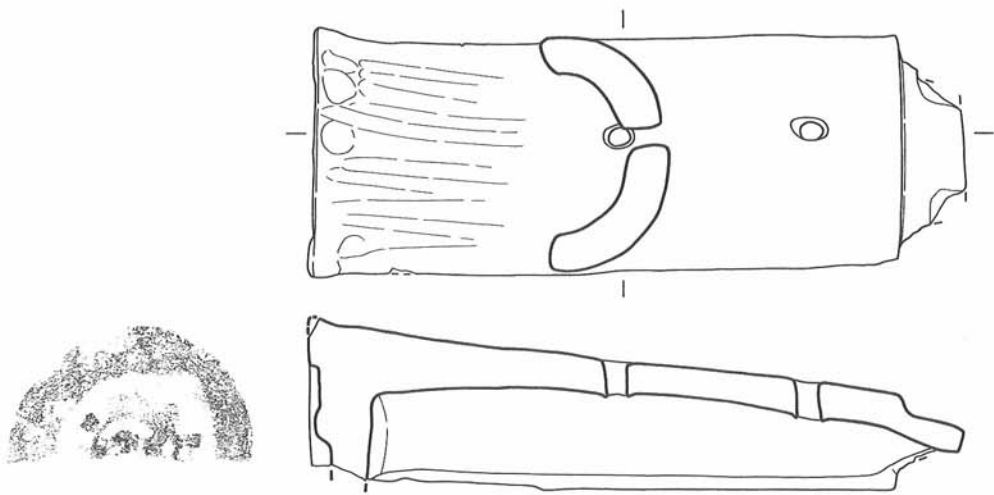
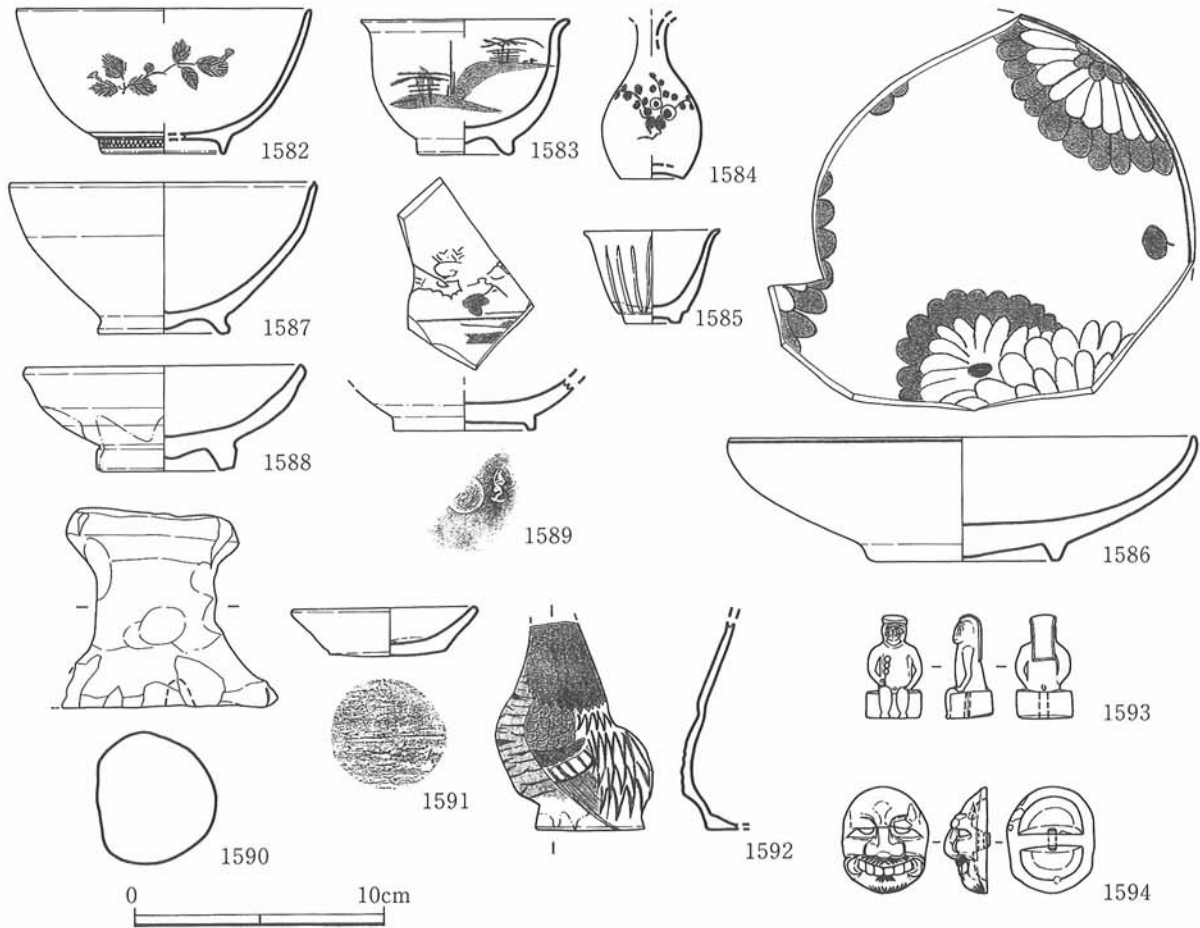
磁器は1582～1586。1582は外面に草花文の染付碗。1583は山水文を描く碗で高台内無釉。1584は梅文の小瓶。1585は鎬のある小杯。1586は陶器質に近い染付皿で見込に割菊文。高台内無釉。1587～1589は陶器。1588は萩土灰釉の皿で、灯明皿として転用される。1589は京焼風陶器の皿で、「清水」銘の刻印あり。1590は窯道具のトチン。1592は色絵の鶏形の水滴。1593は鉄釉をかけた土人形で猿か。1594は施釉した面根付。1595は軒丸瓦で三巴文。

SX47の時期は磁器および京焼風陶器から17世紀後半～末ごろとみられる。

SK72 (第176図 図版132)

1596は景德鎮系の青花碗。1597は白磁で高台内無釉。1598は稜花の皿。二重方形枠に「福」字の銘款で17世紀後半とみられる。1599は備前の徳利。鳶口で底部外面に窯印とみられる記号がある。1600は青磁の香炉(火入れ)。口縁部は折り返して、端部に赤絵で上絵付けが施される。底部無釉で焼成時の亀裂が入っている。1603は瓦質の鉢で内面に肥厚させ、外面に凹線3条。1604は台のつく播鉢。肥厚させる口縁部は幅がせまく、体部は内湾気味に立ち上がる。焼成は硬質で須佐唐津の製品。

SK72の時期は、17世紀とみられる。

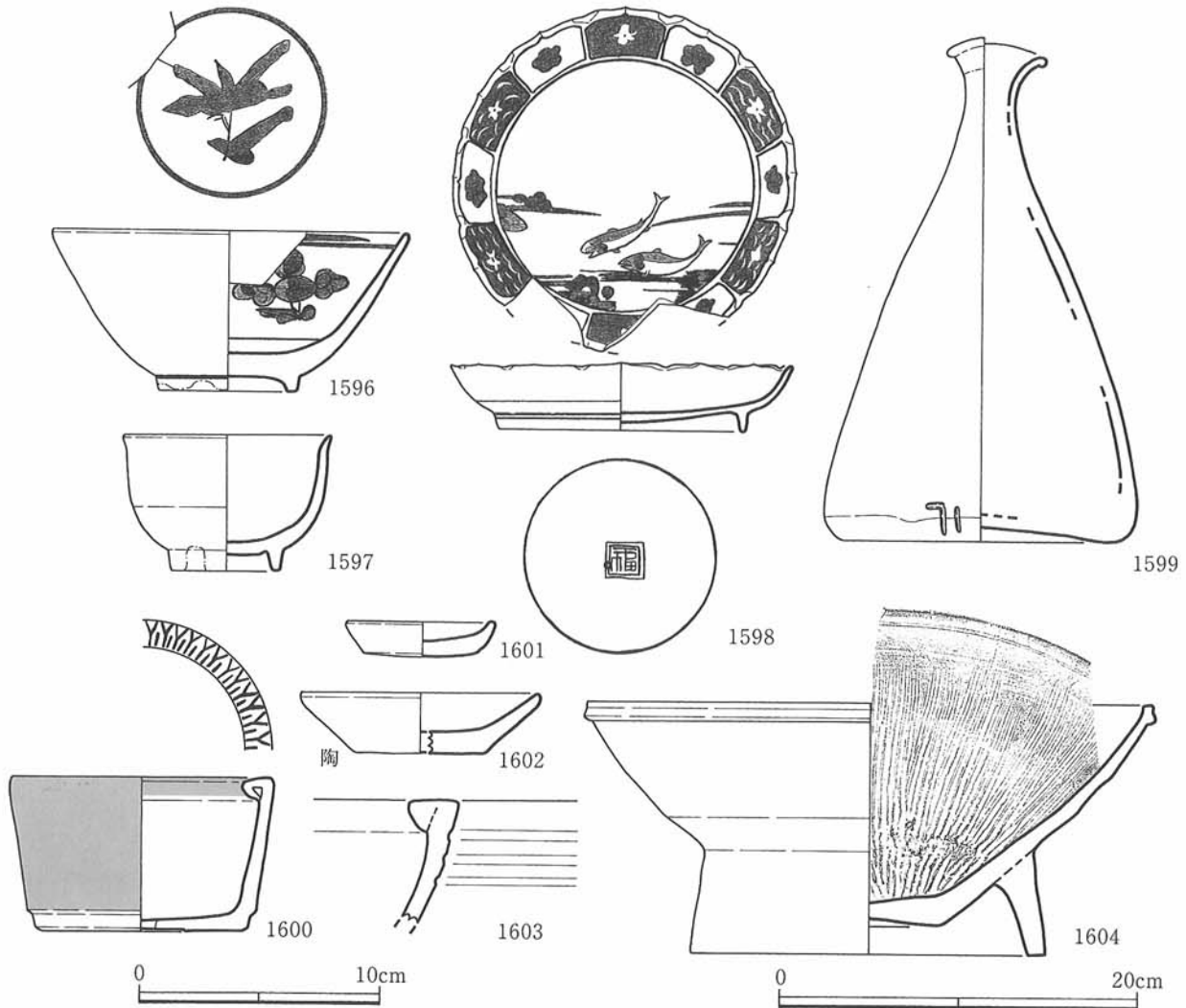


第175图 2-SX47出土遺物(1/3、1/4)

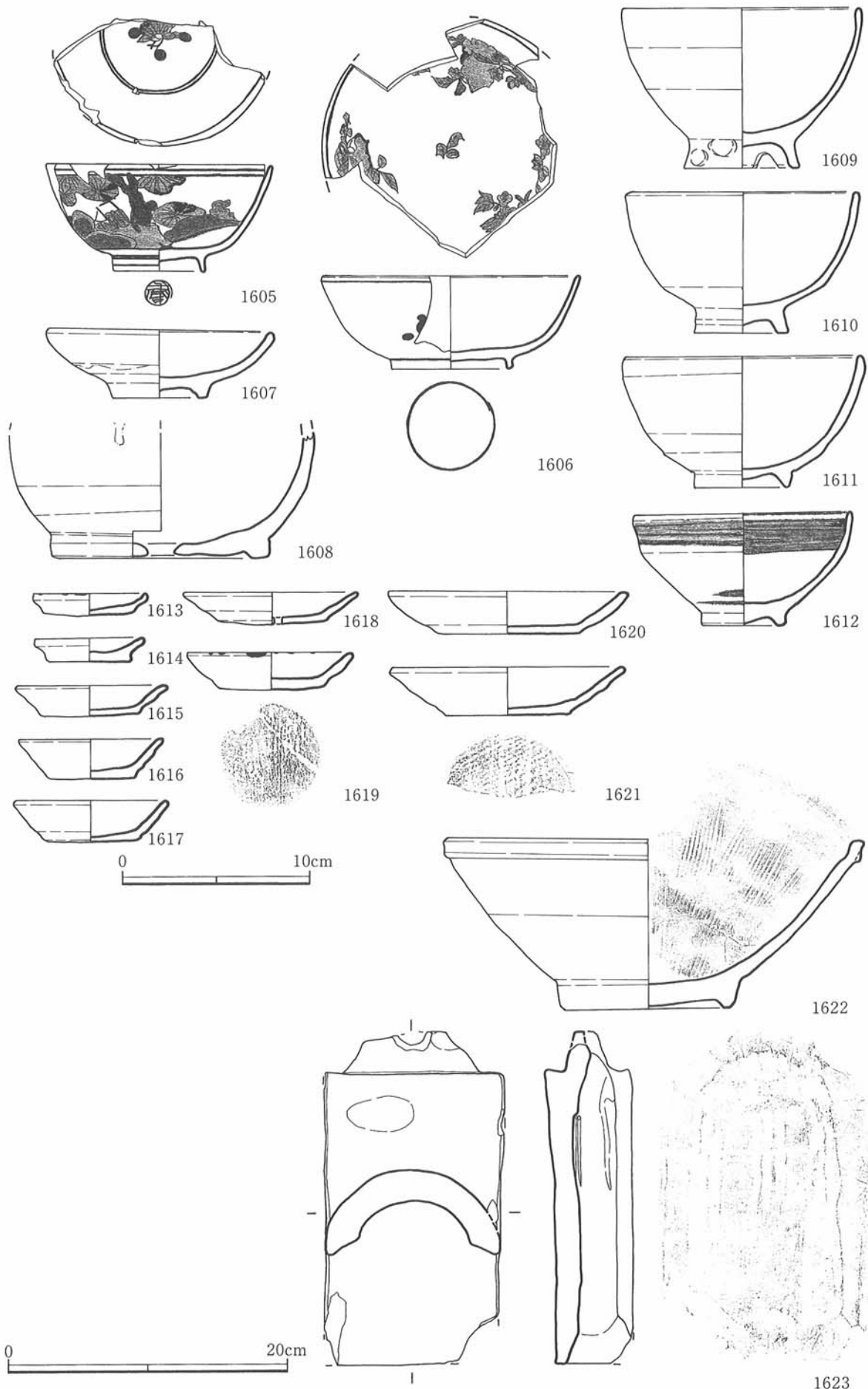
SK79 (第177図 図版133)

1605、1606は磁器。1605はいわゆる「誉」の銘款から17世紀後半とみられる。1606は青花皿。1607～1612は陶器。1607は灰釉皿。1608は二彩唐津の鉢で底部に焼成後の穿孔があり、植木鉢等に転用されたものであろう。1609～1611は透明釉を掛けた陶器碗。1609は割高台。1612は白化粧をして口縁部のみ刷毛目状に掃きとった碗。1613～1621は土師器皿。1618は底部に穿孔がある。これを含めて1620、1621は口径に対して器高が低いもので、17世紀代にはいるものであろう。1622は須佐唐津の播鉢で、体部は内湾し、外面ケズリ調整。1623は丸瓦。

SK79の時期は、17世紀後半とみられ、遺構の前後関係からも大過ないとみられる。



第176図 2-SK72出土遺物(1/3、1/4)



第177图 2-SK79出土遺物(1/3、1/4)

第4表 2地区出土陶磁器一覧

単位：cm ()：復元値

遺物番号	採回番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴		備考
1514	171	128	2-D	SK25	磁器	碗	(9.2)	5.2	(3.8)	染付	コンニャク印判 錦か	肥前
1515	171	128	2-D	SK25	磁器	香炉(火入れ)	(8.2)	4.3	(5.8)	染付		肥前
1516	171	128	2-D	SK25	陶器	碗	10.6	5.6	4.2	灰釉	腰折碗 白土・鉄絵 三足ハマ痕	京信楽か
1517	171	128	2-D	SK25	陶器	碗	12.0	7.7	5.0	灰釉	鉄絵	京信楽
1518	171	128	2-D	SK25	陶器	碗	(8.0)	5.4	3.2	藁灰釉		萩
1519	171	128	2-D	SK25	陶器	碗	(10.6)	5.6	3.6	藁灰釉		萩
1520	171	128	2-D	SK25	陶器	鉢	(15.8)	6.0	6.0	透明釉	刷毛目 蛇の目軸刺ぎ	肥前
1521	171	128	2-D	SK25	陶器	鉢	(11.6)	6.3	9.2	藁灰釉		萩
1522	171	128	2-D	SK25	土師器	焙烙	(21.4)	3.5	(15.4)		把手部欠損	
1523	171	128	2-D	SK25	土師器	焙烙	(27.4)	6.7			耳部不明	関西系
1524	171	128	2-D	SK25	土師器	焼塩壺(蓋)	口径6.4	2.0			布目	
1525	171	128	2-D	SK25	土師器	焼塩壺(蓋)	口径6.3	1.9			布目	
1526	171	128	2-D	SK25	瓦	軒九瓦					瓦当「三」字	
1527	172	129	2-F	SX46	磁器	碗	(10.4)	5.2	4.0	染付	雷輪草花文「大明年製」くずし	肥前
1528	172	129	2-F	SX46	磁器	碗	(11.0)	6.1	4.4	染付		肥前
1529	172	129	2-F	SX46	磁器	皿	10.7	2.2	5.5	染付	輪花 型紙摺り(楓)	肥前
1530	172	129	2-F	SX46	磁器	皿	13.8	3.3	4.4	染付	蛇の目軸刺ぎ 高台無袖	肥前
1531	172	129	2-F	SX46	磁器	皿	(14.0)	3.1	(8.8)	染付	ハリ支え 梅樹文	肥前
1532	172	129	2-F	SX46	磁器	皿	9.9	3.0	5.8	染付	輪花 口縁 五弁花コンニャク印判 型紙摺り	肥前
1533	172	129	2-F	SX46	磁器	皿	(22.0)	4.4	(13.4)	染付	ハリ支え	肥前
1534	172	129	2-F	SX46	磁器	皿		4.1		白磁	菊菱型打皿	肥前
1535	172	128	2-F	SX46	磁器	仏花壺			5.8	青磁		肥前
1536	172	128	2-F	SX46	磁器	蓋物 蓋	10.1	3.0	8.2	染付		肥前
1537	172	128	2-F	SX46	磁器	蓋物 碗	9.4	7.7	5.3	染付		肥前
1538	172	129	2-F	SX46	磁器	小杯	(7.0)	4.7	3.0	染付	菊花文	肥前
1539	172	129	2-F	SX46	磁器	小杯	7.2	5.2	3.8	染付	腰張形 端反 山水文	肥前
1540	172	129	2-F	SX46	磁器	猪口	(8.2)	4.8	(4.8)	染付		肥前
1541	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(11.0)	6.7	4.4	透明釉	呉器手碗	肥前
1542	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(11.4)	7.7	5.2	透明釉	呉器手碗	肥前
1543	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	9.3	6.8	4.1	透明釉	刷毛目 胎土黒褐色系	肥前
1544	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(10.4)	6.3	4.4	透明釉	刷毛目 ハマ痕 胎土赤褐色系	萩か
1545	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(11.0)	6.5	5.0	透明釉	刷毛目	
1546	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(11.2)	5.4	3.9	透明釉	蛇の目軸刺ぎ 刷毛目	肥前
1547	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	16.1	8.2	6.7	透明釉(土灰釉)	刷毛目	萩
1548	173	129	2-F	SX46	陶器	碗	(9.2)	5.4	4.9	透明釉	京焼風陶器 桜園山水文「〇」	肥前
1549	173	130	2-F	SX46	陶器	碗	(12.0)	6.3	4.8	透明釉	胎土目 トキン状高台 刷毛目	萩
1550	173	130	2-F	SX46	陶器	碗	(12.4)	5.2	4.6	灰釉	輪状胎土目 トキン状高台	萩
1551	173	130	2-F	SX46	陶器	碗			5.0	藁灰釉	渦巻き・トキン状高台 敲打痕	萩 灰落としに転用
1552	173	130	2-F	SX46	陶器	碗	長13.8 短10.7	6.8	6.4	土灰釉(透明釉)	香形碗	萩
1553	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	13.4	3.7	5.1	鉄釉(褐釉)	蛇の目軸刺ぎ	肥前
1554	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	(19.6)	4.8	8.6	灰釉	胎土目	須佐唐津
1555	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	12.9	5.3	5.6	土灰釉	渦巻き・トキン状高台	萩
1556	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	(13.4)	4.5	4.8	透明釉	刷毛目 輪状胎土目 胎土褐色	萩
1557	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	12.6	3.4	5.6	灰釉(黄釉)	胎土目	須佐唐津
1558	173	130	2-F	SX46	陶器	皿	14.9	4.4	5.5	透明釉	輪花 刷毛目 輪状胎土目か	萩
1559	173	130	2-F	SX46	陶器	小碗	7.9	3.6	4.0	灰釉		須佐唐津
1560	173	130	2-F	SX46	陶器	皿			5.4	土灰釉	貝目 トキン状高台	萩
1561	173	130	2-F	SX46	陶器	蓋	8.4	2.6	4.6	灰釉(土灰釉)		須佐唐津
1562	173	130	2-F	SX46	陶器	蓋	8.9	1.9	4.6	鉄釉	つまみ部貼り付け	
1563	173	130	2-F	SX46	陶器	水指				灰釉・鉄混掛分け	耳付	
1564	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	5.9	1.2	1.2		糸切り	灯明皿
1565	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	(5.6)	1.2	4.0		糸切り	
1566	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	8.1	2.1	4.5		糸切り	
1567	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	7.2	1.9	5.1		糸切り	灯明皿
1568	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	10.4	2.3	5.4		糸切り	灯明皿

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	持込番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴		備考
1569	173	130	2-F	SX46	土師器	皿	8.0	2.1	5.0		糸切り	灯明皿
1570	173	131	2-F	SX46	土師器	焙烙	21.3	3.8	14.5		把手部欠損	
1571	174	130	2-F	SX46	陶器	擂鉢	22.9	8.9	9.4	鉄軸	胎土目	須佐唐津
1572	174	130	2-F	SX46	陶器	擂鉢	(29.2)	11.2	12.0	鉄軸 一部自然軸	胎土目	須佐唐津
1573	174	131	2-F	SX46	陶器	擂鉢			11.4	鉄泥		須佐唐津 墨書
1574	174	130	2-F	SX46	陶器	鉢	(28.2)			灰軸		須佐唐津
1575	174	131	2-F	SX46	陶器	三耳壺	(13.4)			焼締		備前 窠印有
1576	174	131	2-F	SX46	土師器	焙烙	(32.2)					関西系
1577	174	131	2-F	SX46	陶器	大甕				鉄軸		備前
1578	174	128	2-F	SX46	磁器	大皿	(40.0)	11.2	12.2	染付	菊花文	
1579	174	131	2-F	SX46	土製品	土人形	高4.3	幅3.6	厚1.9		天神 ウンモを含む	
1580	174	131	2-F	SX46	土製品	土人形	高*5.8	幅3.2	厚1.4		仏	
1581	174	131	2-F	SX46	土製品	土人形	高*5.6	幅2.8	厚2.0		西行法師 顔なし ウンモを含む	
1582	175	131	2-H	SX47	磁器	碗	(11.6)	5.7	4.8	染付		肥前
1583	175	131	2-H	SX47	磁器	小碗	(8.2)	5.3	3.8	染付	高台無軸 山水文	肥前
1584	175	132	2-H	SX47	磁器	小皿			2.4	染付	梅文	肥前
1585	175	131	2-H	SX47	磁器	小杯	(5.4)	3.7	2.2	白磁	鏡文	肥前
1586	175	131	2-H	SX47	磁器	皿	(18.4)	4.9	7.4	染付	胡蝶文	肥前 焼成不良
1587	175	131	2-II	SX47	陶器	碗	(12.2)	6.0	5.2	透明軸	刷毛目 胎土橙色系 トキン状高台	
1588	175	131	2-II	SX47	陶器	皿	11.2	4.2	5.5	土灰軸	トキン状高台	萩 灯明皿に転用か
1589	175	131	2-II	SX47	陶器	皿			(5.6)	透明軸	京焼風陶器「清水」模陶山水文	肥前
1590	175	131	2-II	SX47	窯道具	トチン	上面径6.7	7.9		自然軸		
1591	175	131	2-II	SX47	土師器	皿	6.9	2.0	4.6		板目	
1592	175	132	2-II	SX47	色絵	水滴				白磁	鳥形(赤・青・黄)	
1593	175	132	2-II	SX47	土製品	土人形	高4.1	幅2.2	厚1.9	鉄軸	猿か 穿孔	
1594	175	132	2-II	SX47	陶器	面根付	全長4.2	幅3.3	厚1.8	鉄軸か	人面裏面に貫通しの孔	
1595	175	132	2-II	SX47	瓦	軒丸瓦	長35.0	幅13.3	高*9.1		布目 珠文 三巴文	
1596	176	132	2-D	SK72	磁器	碗	(14.8)	6.7	5.8	青花		景徳鎮
1597	176	132	2-D	SK72	磁器	小碗	(8.6)	5.6	4.4	白磁	底部無軸	肥前
1598	176	132	2-D	SK72	磁器	皿	14.2	2.8	10.2	染付	桜花 ハリ支え 二重方形枠に「福」	肥前
1599	176	132	2-D	SK72	陶器	德利	4.2×1.9	20.8	11.2	鉄軸		備前
1600	176	132	2-D	SK72	磁器	香炉(火入れ)	10.8	6.4	8.9	青磁	口縁に赤絵	
1601	176	132	2-D	SK72	土師器	皿	6.0	1.5	4.4		糸切り	灯明皿
1602	176	132	2-D	SK72	陶器	皿	(10.0)	2.5	(5.2)	無軸	糸切り	
1603	176	132	2-D	SK72	瓦質	鉢						
1604	176	132	2-D	SK72	陶器	擂鉢	(31.4)	13.9	幅6.6 台部11.6	鉄軸		須佐唐津
1605	177	133	2-A	SK79	磁器	碗	(12.1)	5.8	(4.3)	染付	○に「管」漆継	肥前
1606	177	133	2-A	SK79	磁器	皿	(13.8)	5.0	6.4	青花		景徳鎮
1607	177	133	2-A	SK79	陶器	皿	12.2	3.6	5.1	灰軸	糸切り	
1608	177	133	2-A	SK79	陶器	甕			11.6	二彩 緑軸	二次的に穿孔し植木鉢に転用	肥前か
1609	177	133	2-A	SK79	陶器	碗	(12.8)	8.6	6.2	透明軸	割高台	
1610	177	133	2-A	SK79	陶器	碗	12.6	7.5	5.1	透明軸	盤付に貝目	萩
1611	177	133	2-A	SK79	陶器	碗	12.4	7.0	5.1	土灰 透明軸	トキン状高台	萩
1612	177	133	2-A	SK79	陶器	碗	11.8	6.0	4.6		刷毛目	
1613	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	6.2	1.2	4.8		糸切り 板目	灯明皿
1614	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	(7.8)	2.1	4.8		糸切り	
1615	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	8.2	1.7	5.3		糸切り	
1616	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	5.9	1.3	4.6		板目	
1617	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	(8.2)	2.2	5.0		糸切り 板目	
1618	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	(9.4)	1.7	(5.8)		糸切り 板目 焼成後穿孔	灯明皿
1619	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	9.0	2.0	5.6		板目	灯明皿
1620	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	(12.8)	2.3	(7.4)		糸切り	
1621	177	133	2-A	SK79	土師器	皿	(12.6)	2.5	(6.3)		板目	
1622	177	133	2-A	SK79	陶器	擂鉢	30.2	12.3	12.5	鉄軸	胎土目の一部付着	須佐唐津
1623	177	133	2-A	SK79	瓦	丸瓦	長23.7	幅12.7	高6.1			

3 地区 (第178～183図 図版134～137)

3 地区は、遺構内遺物は少なく、建物整地層や石垣構築に伴う客土層からの出土遺物が多い。その中で3-A-E区にわたって広がる焼土層からは、17世紀後半から18世紀前半を中心とした遺物がまわって出土した。中には組み物とみられる上手の染付や、17世紀前半の青花皿、町屋遺跡からの出土例が少ない糸印などの出土があり、注目される。これらは次報告で掲載する。

SK136 (第178～180図 図版134～137)

1624～1636は磁器。1637～1660、1682～1686は陶器。1661～1680は土師器。1681は瓦である。

1624、1625は草花や松を描き、高台内に「大明年製」を記す碗。1628は白磁皿、1629、1630は蛇の目釉剥ぎ皿で、高台無釉。前者は染付で折枝文、後者は青磁。1626、1627は小杯で、1626は型押しした陽出文に濃みを施す。1631は紅皿でコンニャク印判を押す。1632、1633は水滴。1632は色絵の人形水滴とみられる。1634は輪花皿で、丸文と五弁花。ハリ支えの痕跡がある。1635は大皿で、見込に折枝の梅文を中心に描く。高台内は無銘でハリ支えの痕跡が残る。1636は皿で、底面は圏線のみ。

1637は萩透明釉の碗。1640、1642、1644は萩藁灰釉碗。1644は割高台で体部上半で屈折し立ち上がる。1643は透明釉をかけた碗で三足ハマ痕が残る。1638は黄灰色の素地に透明釉をかけた碗。1639は京信楽系の碗で透明釉をかける。1641は灰釉碗。1645～1649は刷毛目碗。1646、1647は白泥を刷毛で掃き取り刷毛目状の痕跡を残すもので、文様として意識したものではないであろう。1657は横刷毛目を内外面に施す輪花皿。内面に輪状の胎土目痕が残るので、萩の製品か。1658は灰釉皿で胎土目が残る。1653は灰釉（黄釉）の杓形碗で、碁笥底。1650は鉄釉天目碗。1651、1652は小型の鉢か。前者は藁灰釉、後者は透明釉をかける。1654は肥前の呉器手碗。1655、1659は萩土灰釉の皿で、見込に貝目痕がある。1656は鉄釉の皿か。内面に圏線状の段があり、見込に砂目がみられる。1660は灰釉鉢で胎土目の痕跡があり、須佐唐津か。

1661～1669は土師器皿。1670～1680は焼塩壺の身と蓋。1670は輪積み成形で無刻印のもの。1671、1672は「御壺塩師泉湊伊織」の銘を持つ。1673～1677の蓋は印籠蓋で、内面に布目痕。1678～1680はかぶせ蓋となるもので、1670の身に対応すると見られる。1681は三巴文の軒丸瓦。1682は肥前二彩鉢。緑釉と鉄釉を掛け分ける。1684、1685は須佐唐津の播鉢。1685は底部に台がつくもの。1686は備前の播鉢。1683は肥前の甕。T字状の口縁に外面13条の沈線と、内面に格子叩き痕がある。

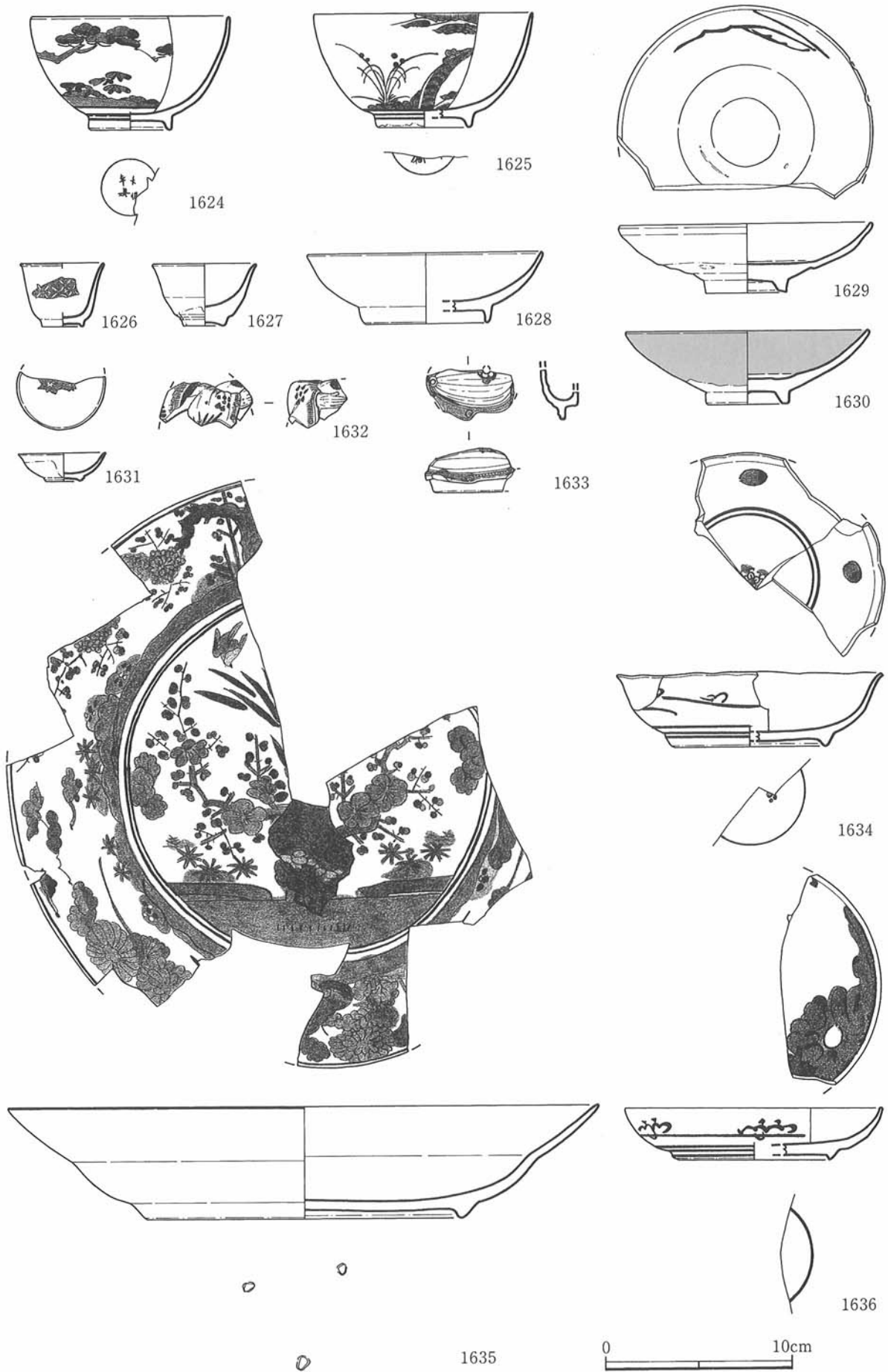
SK136は肥前陶磁器や焼塩壺から18世紀前半までとみられる。

SX96 (第181図 図版137、138)

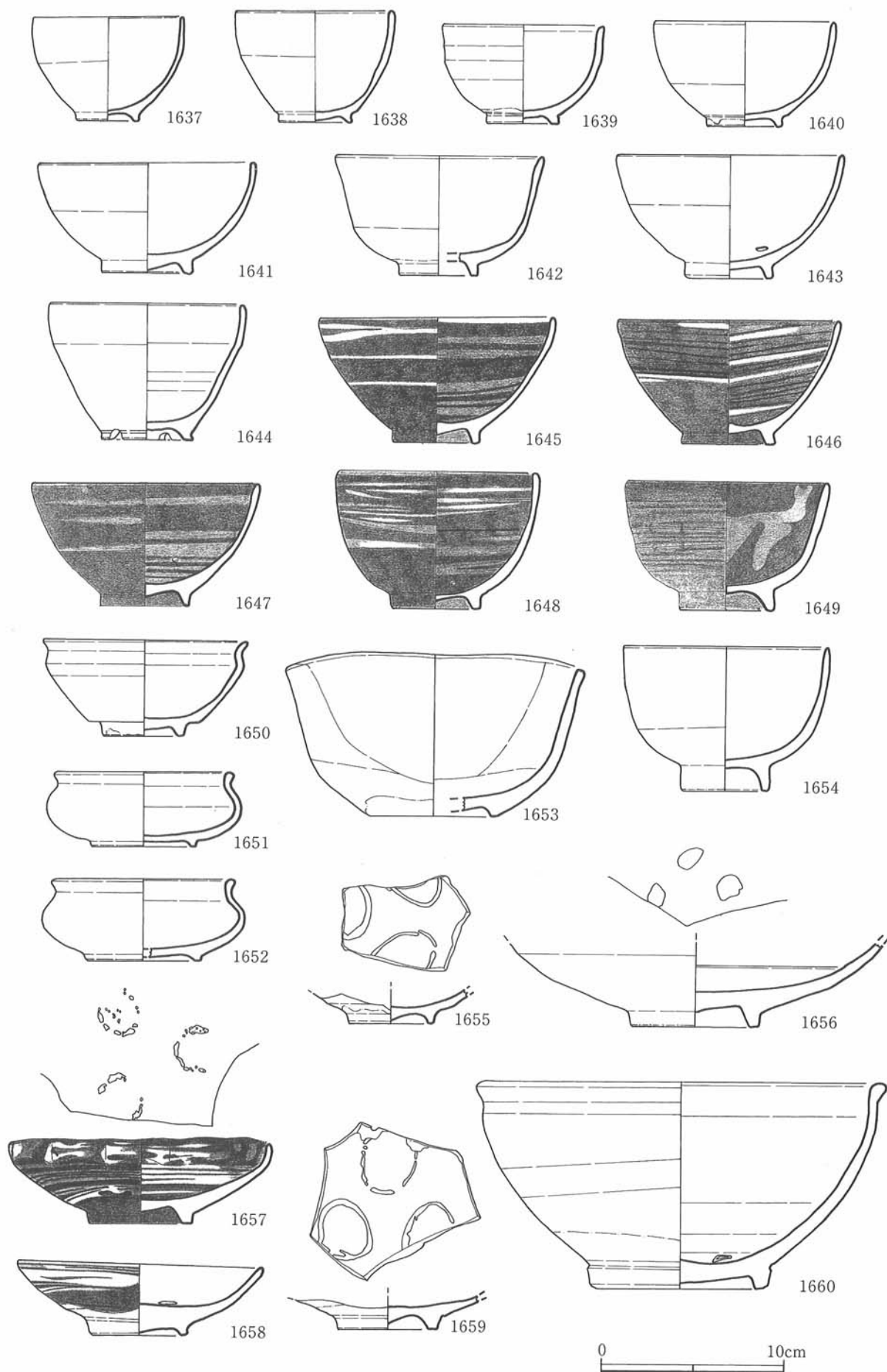
1687～1694は磁器。1695～1698、1704～1706は陶器。1699～1703は土師器。

1687、1688は碗で、1687は外面の花弁は型紙摺り、内面に四方禪文を施す。1688は口縁に圏線を巡らせ、外面に二重丸線などを描く。1690は紅皿。1689、1691～1693は白磁の小杯。1694は高高台の皿で、見込に櫛歯文を巡らせ中に文字を描く。高台内には方形枠に「福」字を記す。

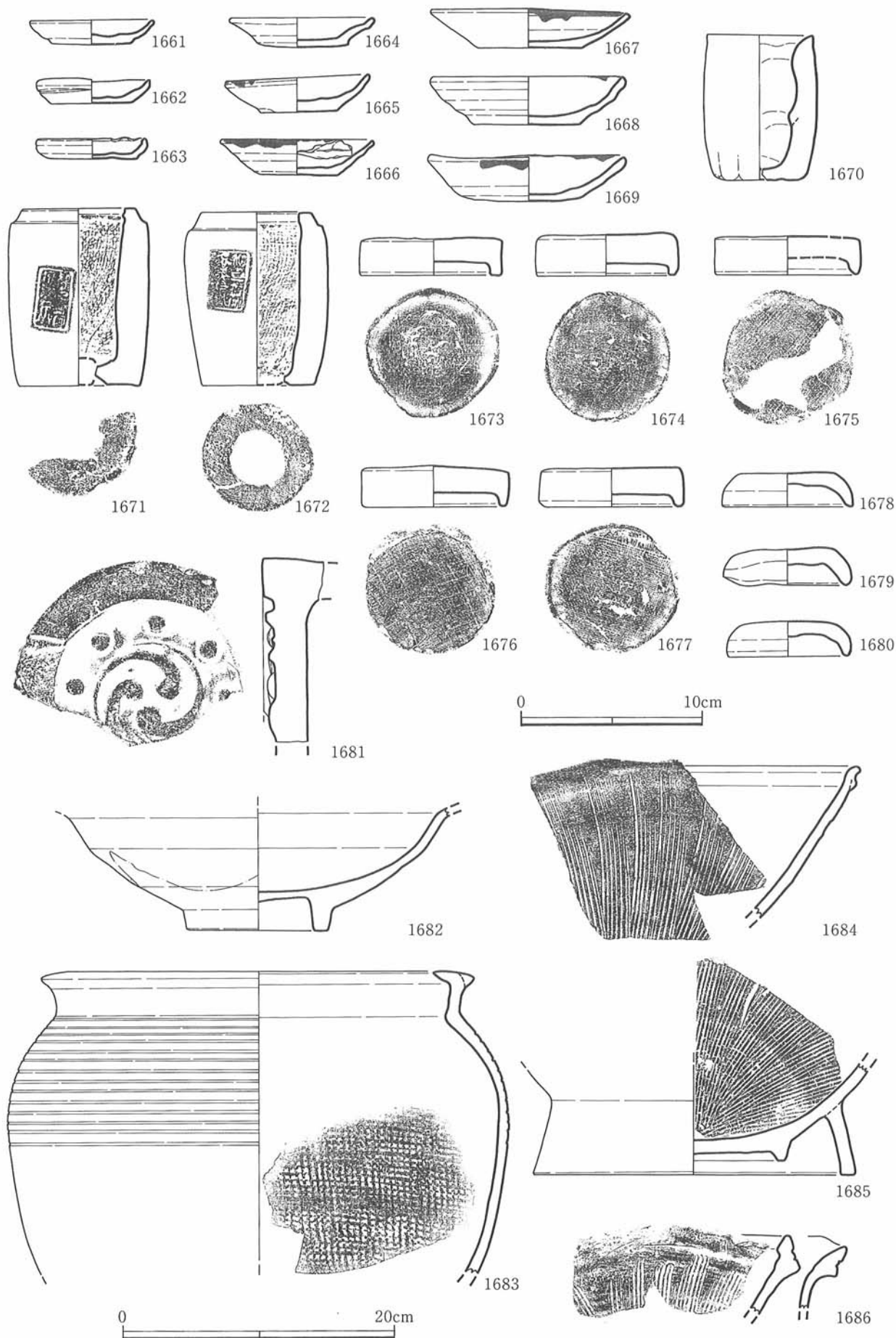
1695は螢手の肥前刷毛目碗。1696～1698は萩の藁灰釉をかけた製品。1696、1697は皿で、1697は高台内に貝目痕が残る。1698は鉢または建水として使用か。1699～1703は土師器皿。1704は須佐唐津の播鉢。1705は備前播鉢。1706は胎土に長石を多く含むことから、信楽の壺とみられる。口縁部を内側に丸めるように玉縁状にし、頸部に2条の沈線を持つ。



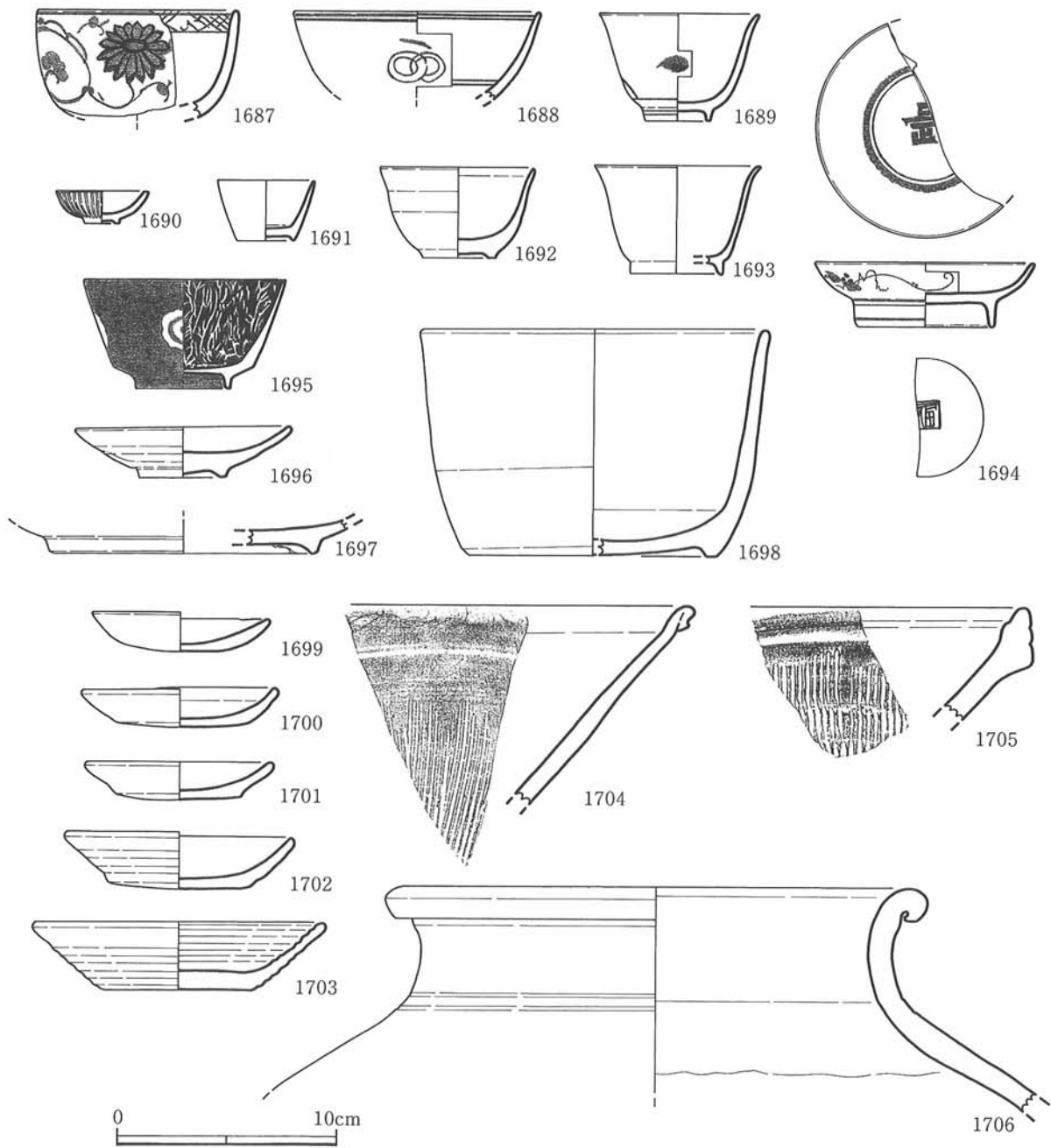
第178図 3-SK136出土遺物①(1/3)



第179図 3-SK136出土遺物②(1/3)



第180图 3-SK136出土遺物③(1/3、1/4)



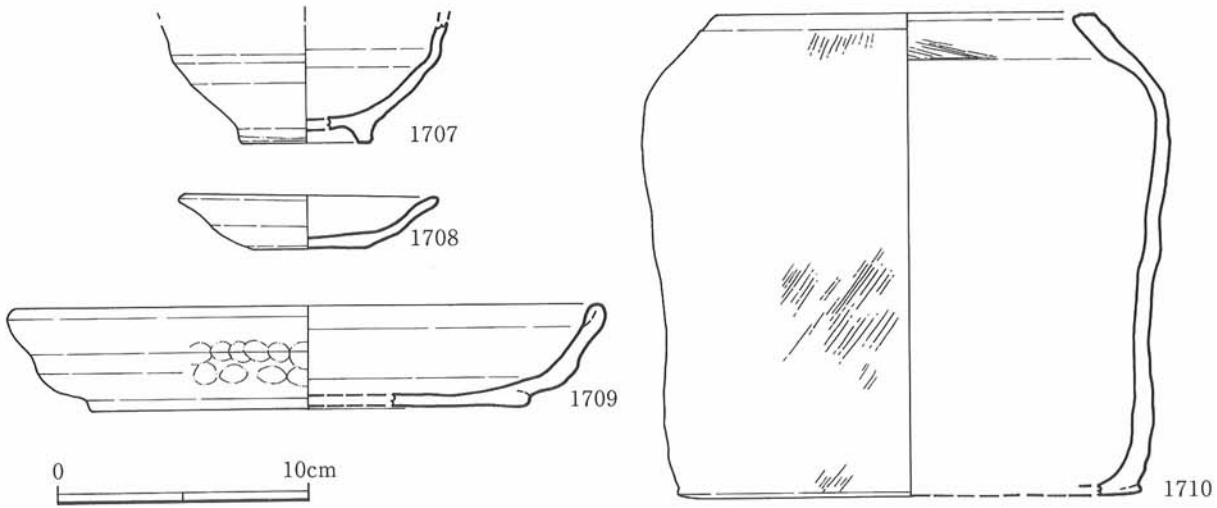
第181図 3-SX96出土遺物(1/3)

かまど84 (第182図 図版138)

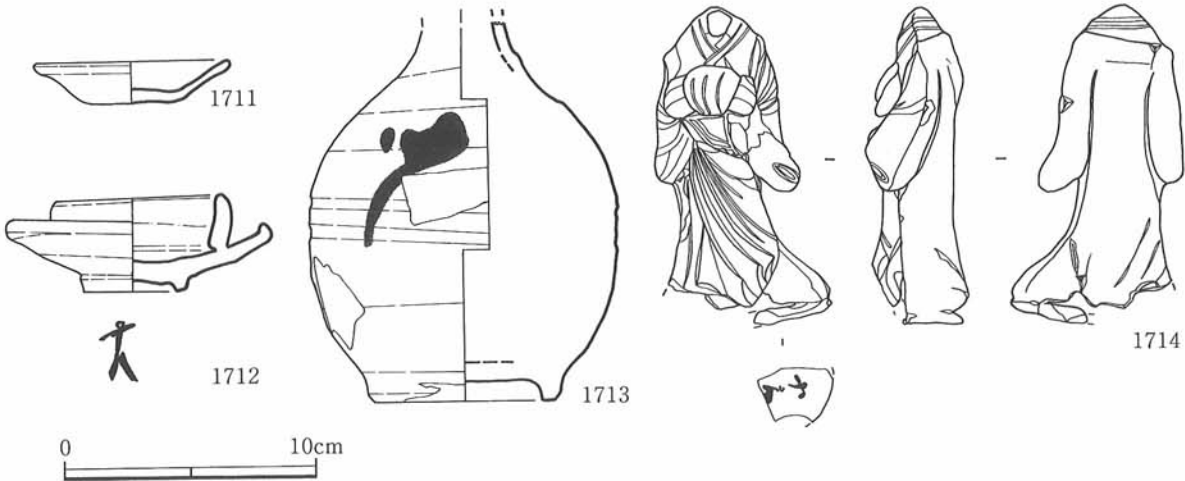
1707は萩藁灰釉の碗。体部に凹線がめぐる。1708は土師器皿。体部中央で僅かに屈曲する特徴がある。1709は在地系の焙烙で、把手部欠損。1710は土師器火消し壺。

かまど33 (第183図 図版138)

1711は土師器皿。体部は内湾気味に立ち上がる。1712は灰釉(黄釉)の灯明受皿で、底面に「十八」の墨書がある。1713は灰釉の瓶で口縁部欠損。体部に鉄絵を施す。1714は土人形。頭部は欠損するが、女性像とみられる。底面に墨書痕あり。



第182図 3-かまど84出土遺物(1/3)



第183図 3-かまど33出土遺物(1/3)

第5表 3地区出土遺物遺構一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	神宮番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1624	178	134	3-E	SK136	磁器	碗	10.5	6.1	4.4	染付	「大明年製」	肥前
1625	178	134	3-E	SK136	磁器	碗	(11.7)	6.1	(5.1)	染付	「(大)(明)(年)製」	肥前
1626	178	134	3-E	SK136	磁器	小杯	4.5	3.4	2.2	染付	陽出文	肥前
1627	178	134	3-E	SK136	磁器	小杯	(5.6)	3.3	(2.2)	白磁		肥前
1628	178	134	3-E	SK136	磁器	皿	(12.5)	3.8	(6.8)	白磁		肥前
1629	178	134	3-E	SK136	磁器	皿	13.3	3.7	4.3	染付	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉 折枝文	肥前
1630	178	134	3-E	SK136	磁器	皿	(12.9)	3.9	(4.4)	青磁	蛇の目釉刺ぎ 高台無釉	肥前
1631	178	134	3-E	SK136	磁器	紅皿	4.6	1.5	2.1	染付	コンニャク印判(楓)	肥前
1632	178	134	3-E	SK136	磁器	水滴				色絵	人形型押し陽出「亀甲」(青、緑絵)	肥前
1633	178	134	3-E	SK136	磁器	水滴				染付	瓜形	肥前
1634	178	134	3-E	SK136	磁器	皿	(14.2)	4.0	(8.4)	染付	輪花 コンニャク印判五弁花 底面にハリ支え痕	肥前
1635	178	134	3-E	SK136	磁器	大皿	(31.4)	6.0	(17.2)	染付	底面にハリ支え痕	肥前
1636	178	134	3-E	SK136	磁器	皿	(13.7)	2.8	(8.5)	染付		肥前
1637	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	8.1	5.6	3.4	透明釉		萩
1638	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	8.5	6.0	4.0	透明釉		萩
1639	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	(8.7)	5.4	3.8	透明釉		京信楽系
1640	179	134	3-E	SK136	陶器	碗	9.8	5.7	4.0	薬灰釉		萩
1641	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	11.7	6.0	4.9	透明釉	トキン状高台	萩
1642	179	134	3-E	SK136	陶器	碗	11.2	6.4	4.3	薬灰釉		萩
1643	179	134	3-E	SK136	陶器	碗	12.2	6.6	5.8	透明釉(びわ釉)	三足ハマ痕	萩
1644	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	(10.4)	7.3	4.9	薬灰釉	割・渦巻き高台	萩
1645	179	134	3-E	SK136	陶器	碗	12.7	6.7	4.6	透明釉	刷毛目 トキン状高台	萩
1646	179	134	3-E	SK136	陶器	碗	(12.1)	6.7	5.0	透明釉	刷毛目 三足ハマ痕	萩

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	地区番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	特徴	備考	
1647	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	12.3	6.6	4.7	透明釉	刷毛目 三足ハマ痕	萩
1648	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	11.0	7.4	4.8	透明釉	刷毛目 三足ハマ痕	萩
1649	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	11.0	6.9	5.1	透明釉	刷毛目	
1650	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	(11.1)	5.2	4.4	鉄釉	天目碗 高台無軸	
1651	179	135	3-E	SK136	陶器	鉢か	(9.6)	4.1	5.6	薬灰釉		萩
1652	179	135	3-E	SK136	陶器	鉢か	(9.9)	4.4	6.1	透明釉		萩
1653	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	(16.1)	8.8	(6.7)	灰釉(黄釉)	春形碗	須佐唐津か
1654	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	11.1	7.8	4.7	透明釉	兵器手碗	肥前
1655	179	135	3-E	SK136	陶器	皿			4.6	土灰釉	見込、高台に貝目	萩
1656	179	136	3-E	SK136	陶器	皿			6.9	鉄釉	砂目	肥前
1657	179	135	3-E	SK136	陶器	碗	(14.0)	4.7	5.6	透明釉	刷毛目 輪花 輪状胎土目	萩
1658	179	135	3-E	SK136	陶器	皿	13.1	3.8	5.2	灰釉	胎土目	須佐唐津
1659	179	135	3-E	SK136	陶器	皿			5.4	土灰釉	貝目	萩
1660	179	136	3-E	SK136	陶器	摺鉢	22.0	11.1	9.6	灰釉	胎土目 片口なし	須佐唐津
1661	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	(6.8)	1.4	4.4			灯明皿
1662	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	6.1	1.5	4.4		糸切り	灯明皿
1663	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	6.0	1.1	4.7		糸切り	灯明皿
1664	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	8.1	1.7	5.1			灯明皿
1665	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	8.0	2.2	4.3		糸切り	灯明皿
1666	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	(8.4)	1.9	4.3		板目	灯明皿
1667	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	10.9	2.2	5.8		糸切り	灯明皿
1668	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	(10.7)	2.7	5.8		糸切り	灯明皿
1669	180	137	3-E	SK136	土師器	皿	10.8	3.6	6.6		板目	灯明皿
1670	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(身)	(5.8)	8.0	5.0		輪積み成形	刻銘なし
1671	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(身)	(6.1)受部径(6.8)	9.6	(6.6)		「御査塩師塀淡伊織」板作り成形 布目痕	
1672	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(身)	6.1 受部径6.9	9.4	6.1		「御査塩師塀淡伊織」板作り成形 布目痕	
1673	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径7.9	2.2			布目	刻銘なし
1674	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径7.8	2.4			布目	刻銘なし
1675	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径8.0	2.2			布目	刻銘なし
1676	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径8.0	2.3			布目	刻銘なし
1677	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径8.0	2.2			布目	刻銘なし
1678	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径(7.2)	1.9				刻銘なし
1679	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径6.9	2.1				刻銘なし
1680	180	136	3-E	SK136	土師器	焼塩壺(蓋)	器径6.8	1.9				刻銘なし
1681	180	137	3-E	SK136	瓦	軒九瓦					珠文 左三巴文	
1682	180	136	3-E	SK136	陶器	大皿			10.4	二彩	白化雑土 緑釉 鉄釉 液状砂目痕	肥前
1683	180	136	3-E	SK136	陶器	甕	31.7			土灰釉	格子目叩き	肥前
1684	180	135	3-E	SK136	陶器	摺鉢				鉄釉		須佐唐津
1685	180	135	3-E	SK136	陶器	摺鉢			23.6	鉄釉	胎土目	須佐唐津
1686	180	135	3-E	SK136	陶器	摺鉢						備前
1687	181	137	3-A	SX96	磁器	碗	(4.6)			染付	花卉は型紙摺り	肥前
1688	181	137	3-A	SX96	磁器	碗	11.2			染付		肥前
1689	181	137	3-A	SX96	磁器	小杯	7.4	4.9	3.0	染付	菊花	肥前
1690	181	137	3-A	SX96	磁器	紅皿	4.2	1.5	1.6	白磁		肥前
1691	181	137	3-A	SX96	磁器	小杯	(4.4)	2.8	(2.6)	白磁		肥前
1692	181	137	3-A	SX96	磁器	小杯	(7.0)	4.1	3.3	白磁		肥前
1693	181	137	3-A	SX96	磁器	小杯	(7.4)	4.9	(4.2)	白磁		肥前
1694	181	137	3-A	SX96	磁器	皿	10.0	3.0	6.2	染付	方形枠に「福」	肥前
1695	181	137	3-A	SX96	陶器	碗	(9.2)	4.9	(4.2)	透明釉	笠手 刷毛目	肥前
1696	181	137	3-A	SX96	陶器	皿	9.8	2.3	4.0	薬灰釉		萩
1697	181	137	3-A	SX96	陶器	皿			(12.1)	薬灰釉	底面に貝目	萩
1698	181	138	3-A	SX96	陶器	鉢(建水か)	15.8	10.2	11.2	薬灰釉		萩
1699	181	138	3-A	SX96	土師器	皿	8.0	1.8	4.8			灯明皿
1700	181	138	3-A	SX96	土師器	皿	8.8	1.8	6.0			
1701	181	138	3-A	SX96	土師器	皿	(8.1)	1.7	2.7		糸切り	
1702	181	138	3-A	SX96	土師器	皿	10.2	(2.7)	6.5		糸切り	
1703	181	138	3-A	SX96	土師器	皿	(13.0)	3.1	(6.8)		糸切り→板目	
1704	181	138	3-A	SX96	陶器	摺鉢				鉄釉		須佐唐津
1705	181	138	3-A	SX96	陶器	摺鉢				焼締		備前
1706	181	138	3-A	SX96	陶器	壺	(24.5)			焼締	胎土は長石を多く含む	備前
1707	182	138	3-B	カマド84	陶器	碗		*4.7	(5.2)	薬灰釉	渦巻き高台	萩
1708	182	138	3-B	カマド84	土師器	皿	10.2	2.1	5.0		糸切り	灯明皿
1709	182	138	3-B	カマド84	土師器	焙烙	(23.6)	4.1	(17.1)		板目 把手部欠損	
1710	182	138	3-B	カマド84	土師器	壺	(15.0)	19.1	(18.4)		火消し壺	
1711	183	138	3-B	カマド33	土師器	皿	7.9	1.7	3.0		糸切り	
1712	183	138	3-B	カマド33	陶器	灯明受皿	器径10.6 受部径6.9	3.7	4.0	灰釉(黄釉)		底面墨書「十八」
1713	183	138	3-B	カマド33	陶器	瓶		*15.1	7.3	灰釉	鉄絵 高台に砂目	
1714	183	138	3-B	カマド33	土製品	土人形	全長*12.6	幅7.0	奥行4.1			底面墨書

埋甕 (第184～187図 図版139～143)

埋甕は調査で66基が検出され、遺構内に埋置した土器、陶器で実測可能な資料は30点である。このうち口縁部から底部まで器形が残存しているもの、または復元できるものについて以下に報告する。

埋甕に使用される容器は、土師器大甕、鉢、陶器大甕、甕である。

1715～1726、1728～1731は土師器大甕である。形態的には、平底の底部から内湾気味にたちあがる体部を有する。口縁部は外面に沈線を1または2条施し、さらに内面に肥厚帯を設けることで体部と区別する。口縁部がこの体部の境で最大器径となり、内傾するタイプ(1715、1717～1721、1724～1726、1728、1730、1731)と、直線的に立ち上がるタイプ(1716、1722、1729)がある。前者は器高が口縁に対して高いが、後者は低く全体的に寸詰まりで小型な印象を与える。さらに口縁部と体部の差が明瞭でなく肥厚帯も薄いという特徴がある。

1723は他と違い、3条の沈線をもつ頸部はくびれて、そこから短い口縁部が外反する。焼成は良好で土師質としては硬質である。

1727は土師器甕の底部で、中央に焼成後の穿孔が認められる。

これらの大甕の成形技法は器面調整の観察から次のようになる。まず板作りで底板となる円板をつくり、それに粘土帯を積み上げ、指押さえ、ハケメ、ナデにより成形して、器高の1/7～1/10ほどになる底部をつくる。それより上部は同心円叩き痕が内面全体に認められることから、粘土積み上げと叩き調整で成形されることがみてとれる。口縁部は内面または内外面側に肥厚させて、ナデ調整を施している。なお色調が瓦質土器に近い暗灰色のものもあるが、これは焼成状況からくるものであり、大甕は基本的に土師器の範疇に入るものと考えられる。

これらの土師器大甕は、県内において一遺跡でまとまって出土したのは当遺跡が初めてである。今後の調査によってさらに資料が増加すれば、全体的なプロポーションや口縁部の形状、成形技法によって将来的に分類が可能であると考えられる。

1732～1734は陶器大甕である。1732は口縁部袋状の大甕で内面格子目叩きを施す。肥前産。1733は口縁部が内側に折れる大甕。1734は備前の大甕。口縁部は玉縁状で、肩部に「𠄎」の窯印がある。

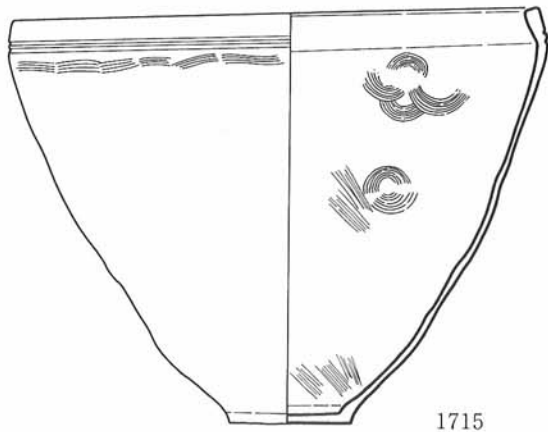
陶器甕は1735～1739。いずれも肥前産とみられる。1736～1738のうち、1735は口縁の形態がT字状で内側に肥厚し、1736～1738は丸みをもって肥厚する。これらは体部に縄状突帯や沈線が施される。内面は格子叩き調整。1735は外面にも格子叩きの痕跡が一部残る。

1740は小型の甕。逆L字状に肥厚させた口縁部には端部に貝目痕が残り、肩部には貼花文と沈線を施してある。内面には格子目と同心円文の叩き調整が認められる。17世紀前半で肥前産。

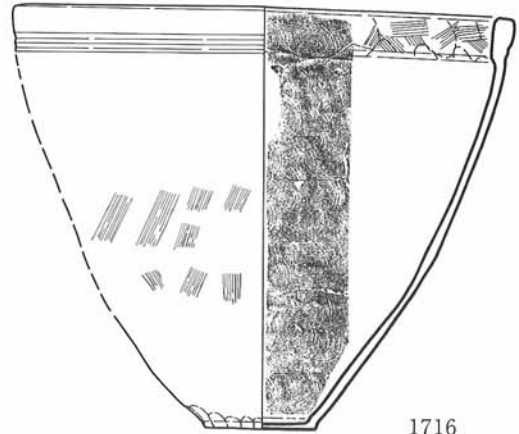
1741は土師器甕。肥厚させた口縁部が短く立ち上がり、最大径は肩部にくる。内面ハケ目調整。

1742は土師器の鉢。緻密な胎土で焼成は良好。両側に短い耳がつく。

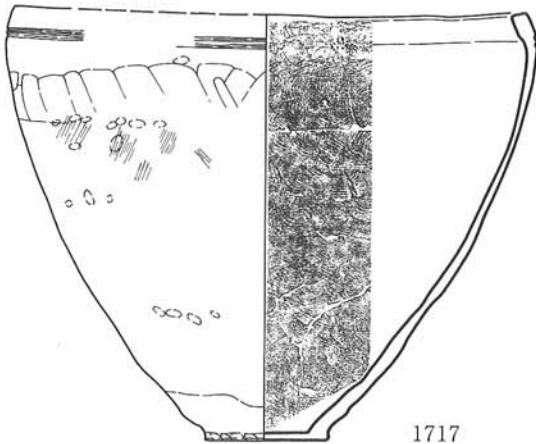
これらのうち土師器・陶器の大甕には、内面に石灰質の付着物があることから、便槽として使用されたとみられる。出土遺構面は土師器大甕が1面を中心として検出され、備前などの陶器大甕はそれより古い時期に出土する傾向がある。このことは埋甕に使用された容器が陶器から土師器へと移行していったことを示すものであろう。また中型・小型の甕を埋設したものは、大甕とは異なった使用がなされたことも考慮される。



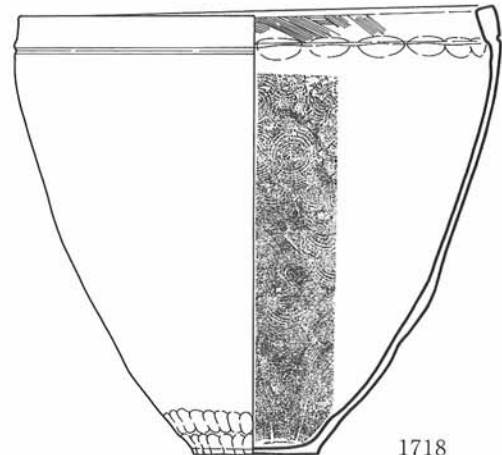
1715



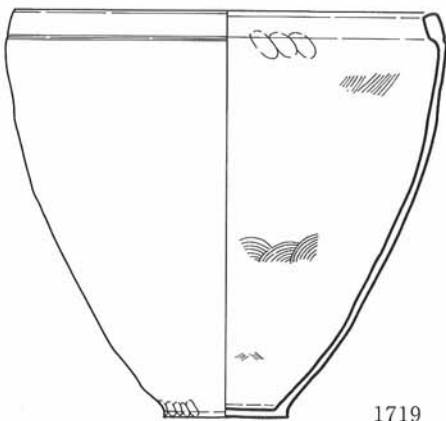
1716



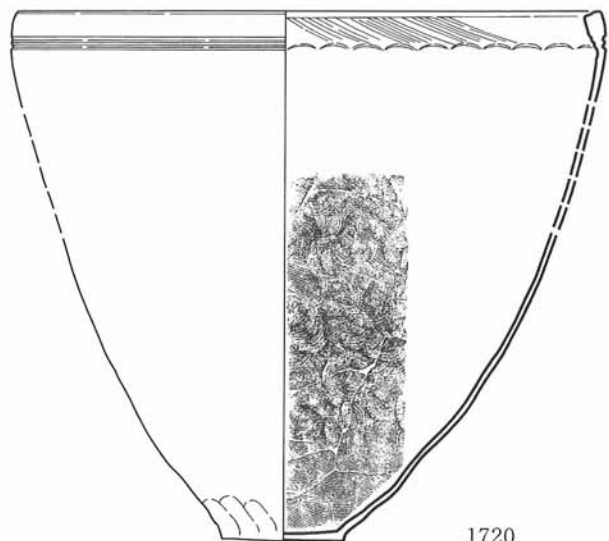
1717



1718



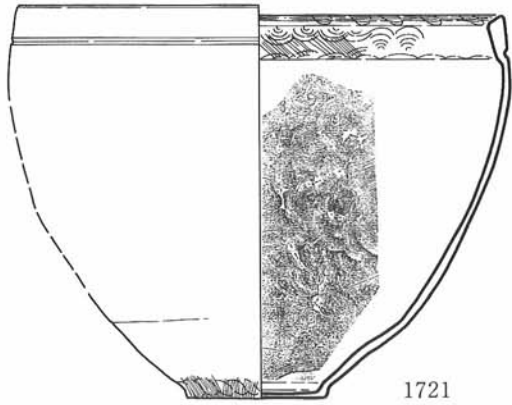
1719



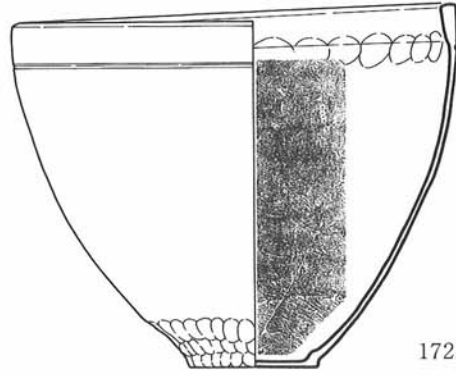
1720



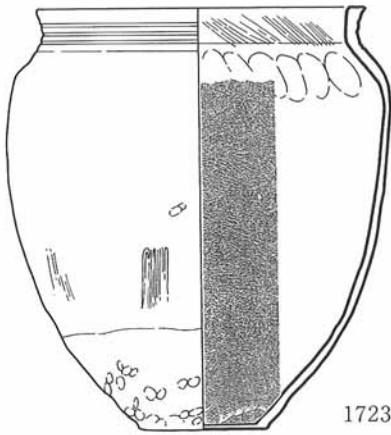
第184図 埋甕①(1/10)



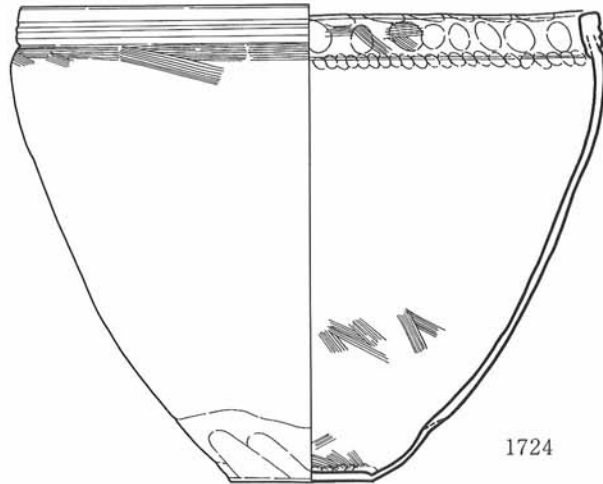
1721



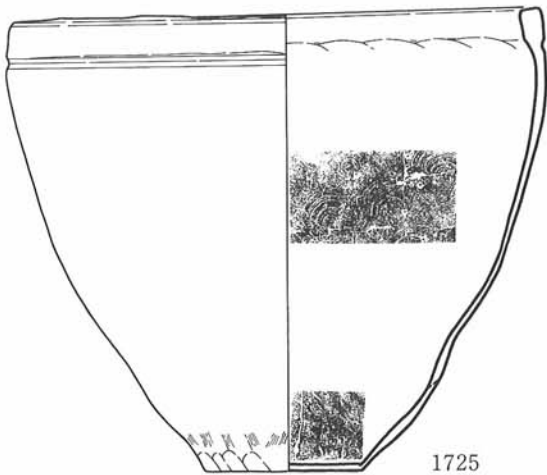
1722



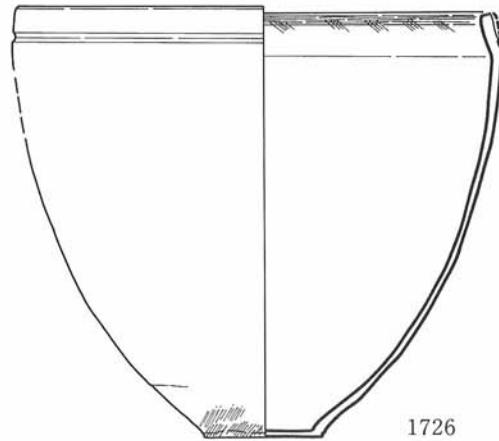
1723



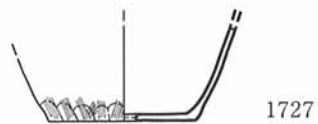
1724



1725



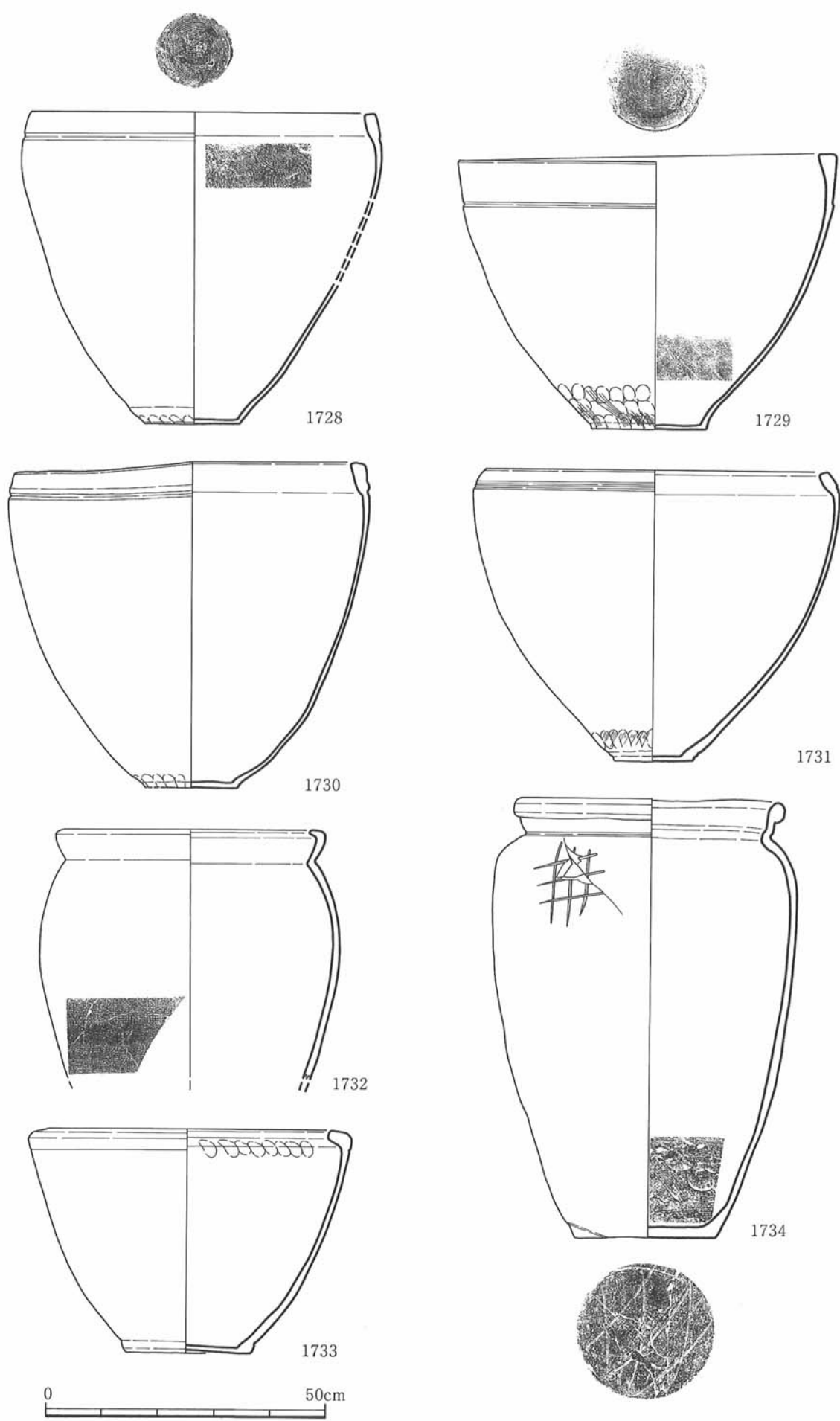
1726



1727



第185図 埋甕②(1/10)



1728

1729

1730

1731

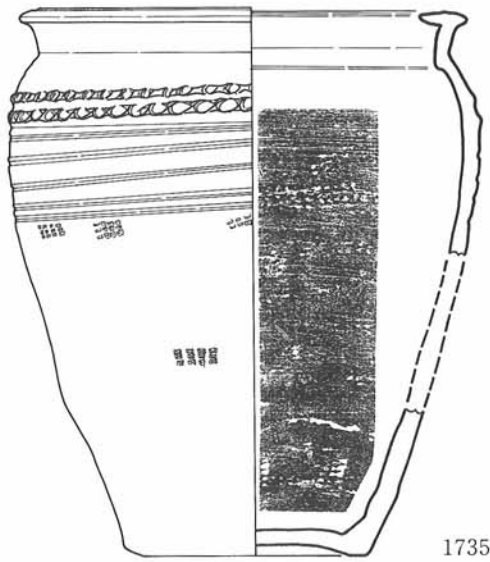
1732

1734

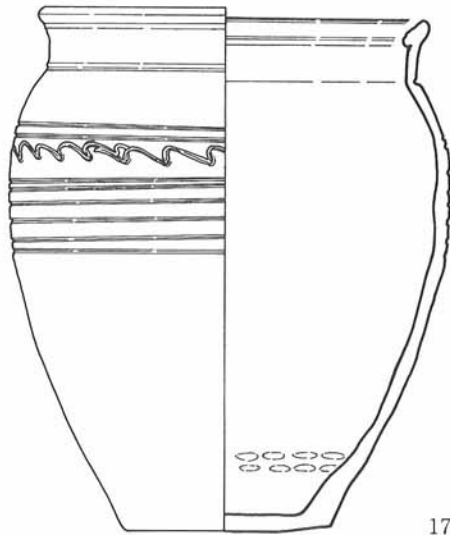
1733

0 50cm

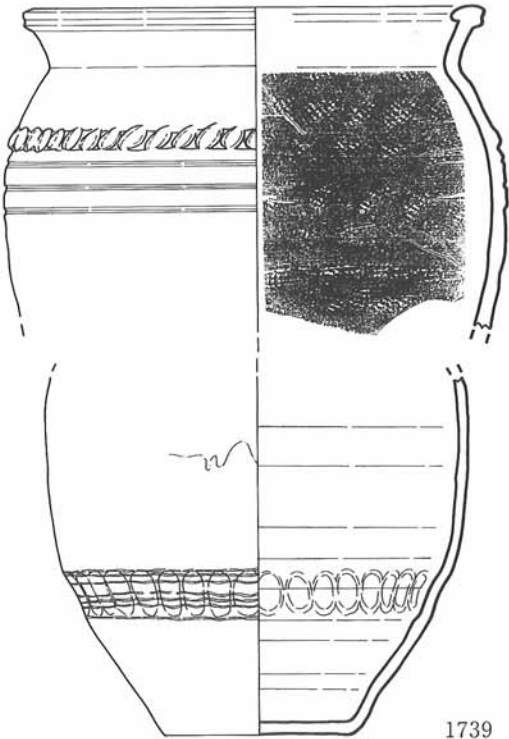
第186図 埋甕③(1/10)



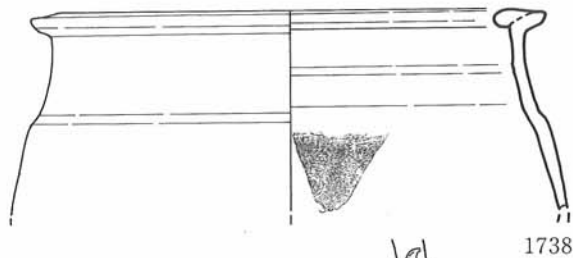
1735



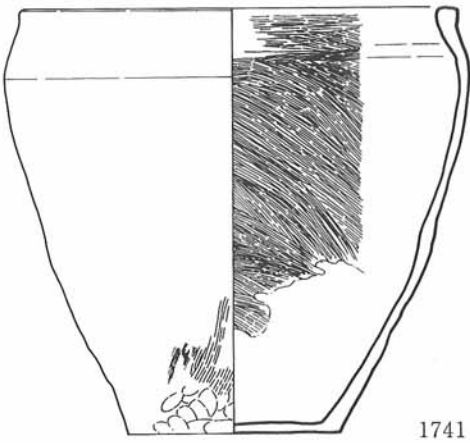
1736



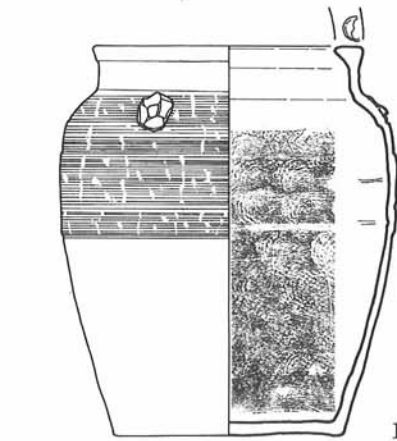
1737



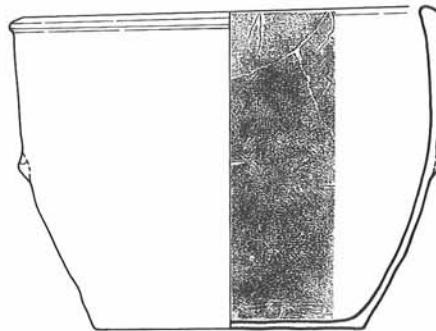
1738



1741



1740



1742



第187图 埋甕④(1/6)

第6表 埋甕一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

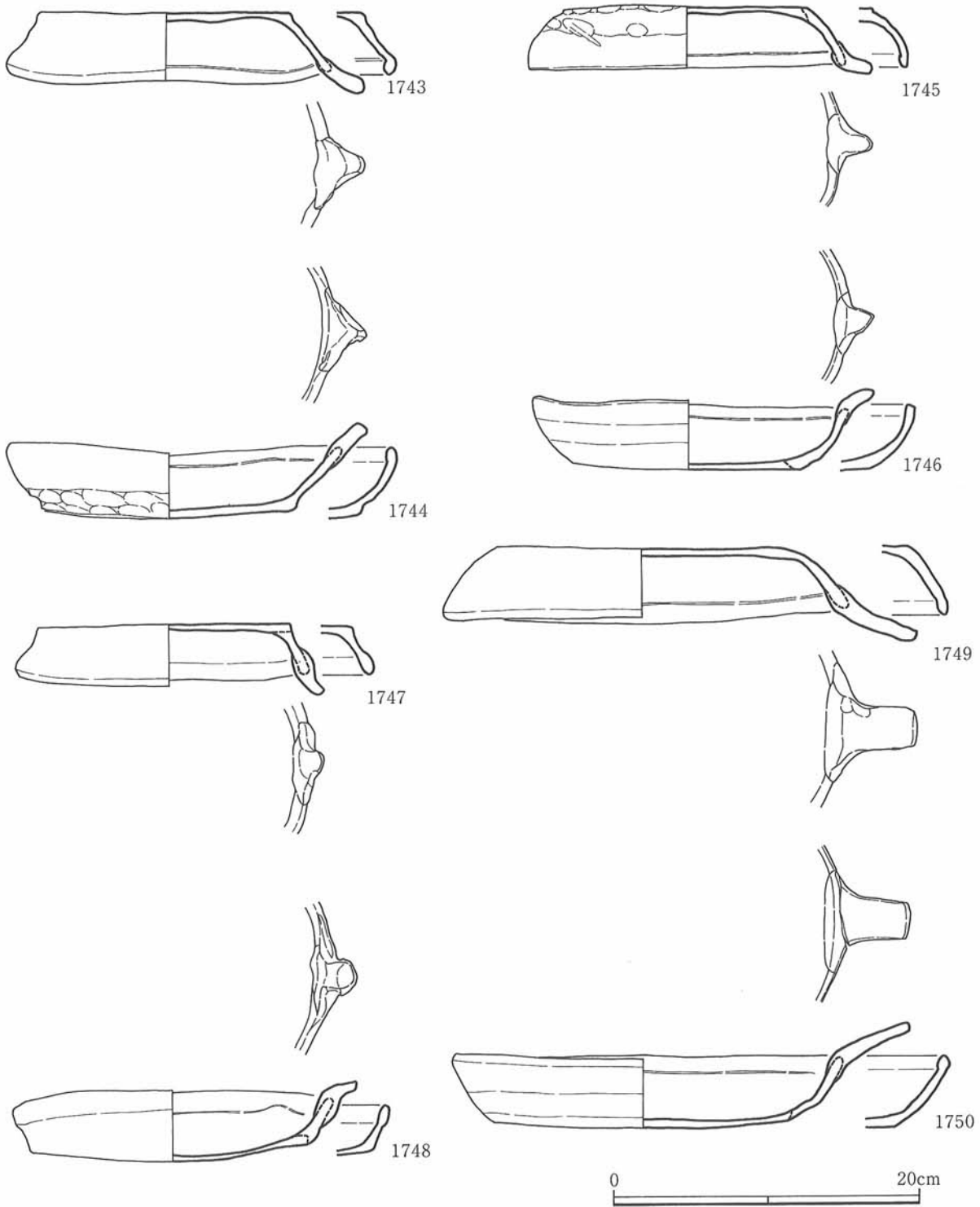
遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備考
1715	184	141	1-X	埋甕522	土師器	大甕	69.2	54.0	16.4	内:同心円叩き・ハケメ 外:ハケメ・ナデ
1716	184	139	1-D	埋甕72	土師器	大甕	66.2~52.2	57.0~55.6	13.8	同心円叩き・ハケメ・ナデ
1717	184	140	1-K	埋甕205	土師器	大甕	67.6	56.2	16.2	同心円叩き・ハケメ
1718	184	139	1-D	埋甕3	土師器	大甕	62.6	59.6	16.2	同心円叩き・ハケメ・ナデ
1719	184	140	1-G	埋甕97	土師器	大甕	56.0	53.4	16.6	同心円叩き・ナデ
1720	184	141	1-A	埋甕515	土師器	大甕	38.3	35.0	16.4	内:同心円叩き・ハケメ 外:叩き・ナデ
1721	185	139	1-G	埋甕96	土師器	大甕	64.0	54.0	18.4	同心円叩き・ハケメ・ナデ
1722	185	140	1-H	埋甕110	土師器	大甕	27.7	47.8~45.4	17.0	内:同心円叩き・ハケメ 外:ナデ
1723	185	139	1-G	埋甕82	土師器	大甕	44.0	57.3	17.0	同心円叩き・ハケメ・ナデ
1724	185	140	2-B	埋甕	土師器	大甕	76.0	63.2	19.0	内:同心円叩き・ハケメ 外:叩き・ナデ 付着物あり
1725	185	142	3-C	埋甕117	土師器	大甕	62.0	61.5~61.0	15.8	内外:ナデ
1726	185	142	3-G	埋甕108	土師器	大甕	70.4	58.0~57.5	26.0	同心円叩き 付着物あり
1727	185	143	3-E	埋甕40	土師器	甕			19.2	底面に穿孔あり ナデ
1728	186	142	3-H	埋甕114	土師器	大甕	(60.4)	56.0	16.8	内:ハケメ・ナデ 外:ナデ 付着物あり
1729	186	141	3-J	埋甕1	土師器	大甕	66.8	49.5~48.0	20.3	内:ハケメ・ナデ 外:ナデ 付着物あり
1730	186	141	3-A	埋甕22	土師器	大甕	62.8	58.5	16.4	ナデ 付着物あり
1731	186	142	3-B	埋甕47	土師器	大甕	(60.0)	52.5	14.0	内外:ナデ 付着物あり
1732	186	142	3-M	埋甕103	陶器	大甕	(48.0)			肥前 内外:格子叩き
1733	186	139	1-G	埋甕10	陶器	大甕	(50.0)	39.8	21.8	ナデ 口縁端部無釉
1734	186	142	3-A	埋甕97	陶器	大甕	48.0	76.8	24.8	備前 窯印あり 内:叩き・ナデ 外:ナデ 付着物あり
1735	187	141	1-A	埋甕514	陶器	甕	35.4~30.5	43.2~42.9	19.2	肥前 突帯 沈線 内外:格子叩き
1736	187	141	1-N	埋甕208	陶器	甕	30.7	41.3	16.5	肥前 内外:ナデ 口縁目跡あり
1737	187	143	3-E	埋甕32	陶器	甕	37.0			肥前 突帯 沈線 格子叩き・ナデ
1738	187	143	1-F	埋甕79	陶器	甕	40.8			肥前
1739	187	139	1-F	埋甕79	陶器	甕		*28.3	14.6	肥前 外面に摺鉢との重ね焼き痕
1740	187	143	1-F	埋甕59	陶器	甕	(21.2)	30.7	18.0	肥前 貝目 格子目と同心円の叩き 貼花文
1741	187	140	2-B	埋甕12	土師器	甕	34.5	33.4	16.6	内:ハケメ 外:ナデ 付着物あり
1742	187	140	2-I	埋甕8	土師器	鉢	33.9	25.1	21.4	内:同心円叩き・ナデ 外:ハケメ・ナデ

胞衣埋納容器 (第188~190図 図版144)

胞衣埋納遺構は1地区から3地区の調査で、20基が検出された。これらは2つの同じ器種を上下合わせ口にして、胞衣を埋納する容器としたものである。使用された容器は土師器の焙烙、皿の2種類があり、さらに焙烙は把手の有無や形態によって分類できる。調査では攪乱などによって上部の蓋が欠失してしまったものもあり、ここでは上下の容器がセットで残っているものについて取りあげる。

土師器皿を使用するのは3地区胞衣埋納遺構50である1765・1766と、同地区58の1767・1768である。1765、1766は口径20cmを超える大型の土師器皿である。調査ではこれだけの法量をもつ土師器皿はほとんど出土していないことから、胞衣埋納の専用容器として使用された可能性がある。1767、1768はそれよりは小型で、径14cm以内である。これらの皿を容器とする例は現在のところ他地区では検出されていない。

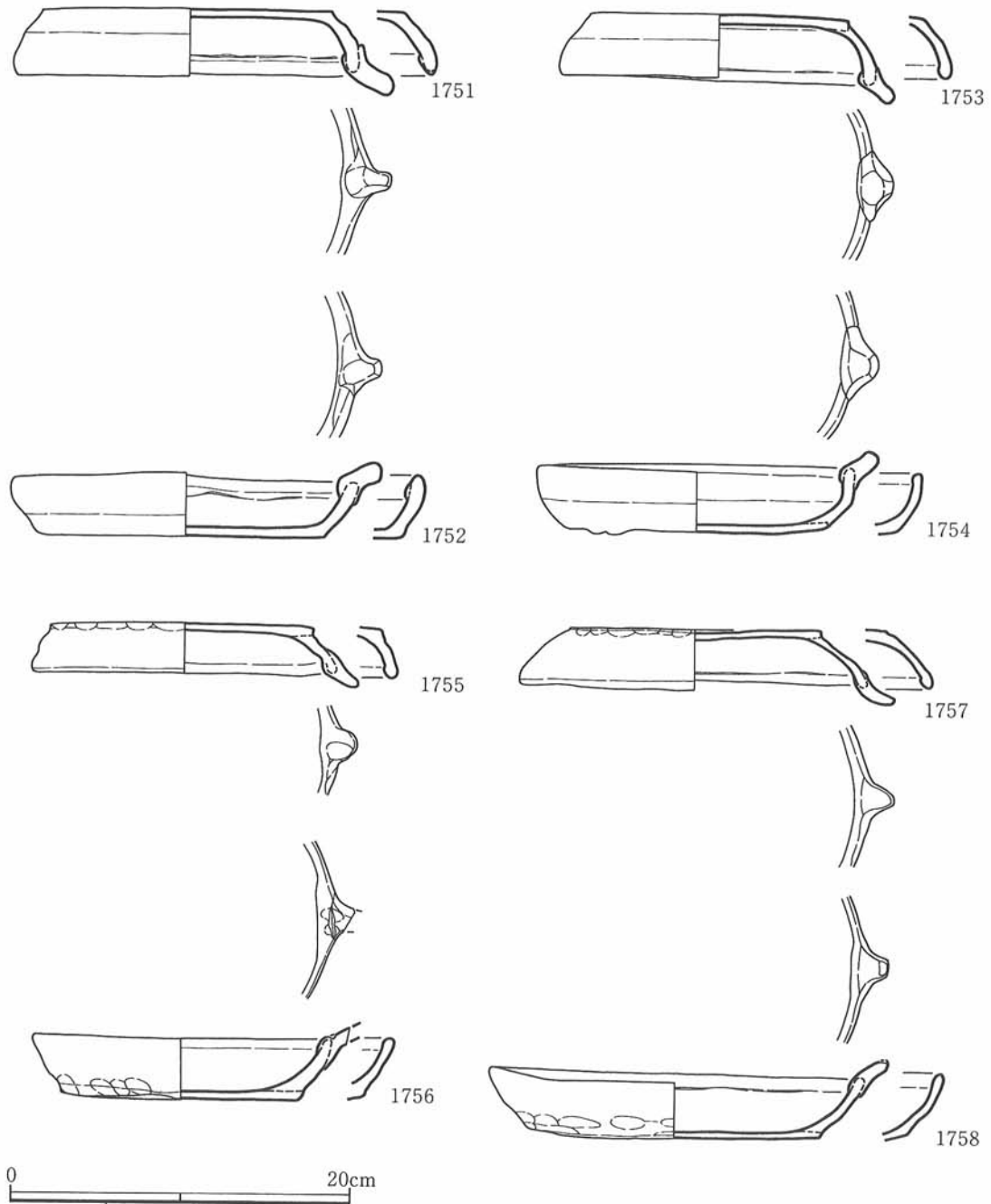
3地区胞衣埋納遺構34の1759・1760、51の1761・1762は型作り成形で比較的硬質な土師器の焙烙である。底部から体部へ緩やかに曲がり、短く立ち上がって口縁に至る。口縁内面はわずかに肥厚する。2地区胞衣埋納遺構2の1763・1764は焼成が良好で硬質な焙烙。口縁内面に肥厚し、把手として機能するのが難しいほどの短い寸詰まりの把手がつく。1764は把手に釘のような工具によって未貫通の小孔がある。外面には粗い同心円状のケズリ痕がある。このタイプの胞衣容器は1面で検出されること



第188図 胞衣埋納容器①(1/4)

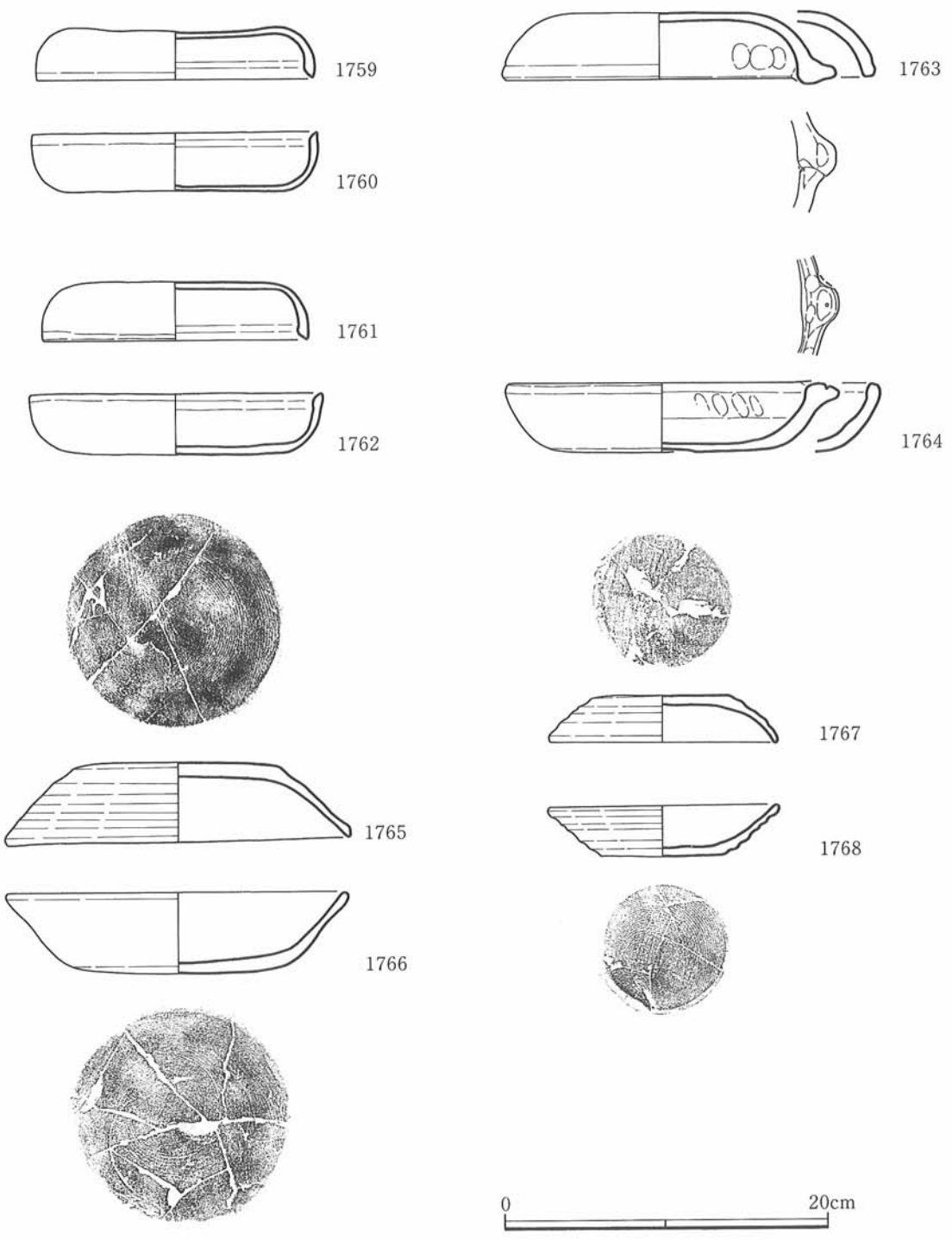
から、19世紀以降のものであろう。

胞衣埋納遺構119の1743・1744、120の1745・1746、115の1747・1748、118の1749・1750、48の1751・1752、85の1753・1754、95の1755・1756、63の1757・1758はすべて3地区から出土した。いずれも在地系の把手付き土師器焙烙を使用する。板作りの底部に内湾して立ち上がる体部にはヨコナデ、指頭圧痕が残る。口縁部は内面に肥厚させ丸みを持つ。把手は1749・1750のように長くしっかりしたもの



第189図 胞衣埋納容器②(1/4)

をつける以外は、ほとんどが粘土塊を貼り付けつまみ出したような簡単なものである。これらの焙烙は廃棄土坑などから出土するものと形態的に大差がないことから、一般的に使用されていた製品を胞衣容器として使用したとみられる。なお煤など外部からの加熱痕がないことから、容器は未使用の焙烙に限られていたと考えられる。120は蓋、身とも内面にタール状の黒色有機物が付着していた。これが胞衣の残滓であるかどうかは分析を行っていないので、不明である。また付着物の上には瓦片が置かれたように出土した。隣接する119にも同様の瓦片が認められたことから、胞衣習俗にかかわるものとみられる（図版44）。



第190図 胞衣埋納容器③(1/4)

第7表 胞衣埋納容器一覧

単位：cm ()：推定値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	口径	器高	底径	備考
1743	188	144	3-G	胞衣119	土師器	焙烙	20.0	4.5	16.2	容器の蓋
1744	188	144	3-G	胞衣119	土師器	焙烙	21.2	4.2	16.5	容器の身 内面に瓦片
1745	188	144	3-G	胞衣120	土師器	焙烙	20.0	4.0	15.4	容器の蓋 付着物
1746	188	144	3-G	胞衣120	土師器	焙烙	20.0	4.5	14.8	容器の身 付着物 内面に瓦
1747	188	144	3-F	胞衣115	土師器	焙烙	18.6	3.6	16.4	容器の蓋
1748	188	144	3-F	胞衣115	土師器	焙烙	20.0	4.6	18.1	容器の身
1749	188	144	3-G	胞衣118	土師器	焙烙	25.0	4.8	18.5	容器の蓋
1750	188	144	3-G	胞衣118	土師器	焙烙	24.8	4.8	19.7	容器の身
1751	189	144	3-A	胞衣48	土師器	焙烙	19.6	3.9	17.0	容器の蓋
1752	189	144	3-A	胞衣48	土師器	焙烙	19.8	3.7	16.3	容器の身
1753	189	144	3-M	胞衣85	土師器	焙烙	18.0	3.8	15.1	容器の蓋
1754	189	144	3-M	胞衣85	土師器	焙烙	18.3	3.7	15.4	容器の身
1755	189	144	3-H	胞衣95	土師器	焙烙	17.8	3.1	15.4	容器の蓋
1756	189	144	3-H	胞衣95	土師器	焙烙	23.7	3.5	14.1	容器の身
1757	189	144	3-A	胞衣63	土師器	焙烙	20.2	3.0	14.5	容器の蓋
1758	189	144	3-A	胞衣63	土師器	焙烙	21.4	3.3	17.0	容器の身
1759	190	144	3-F	胞衣34	土師器	焙烙	17.0	3.0	13.0	容器の蓋 型作り
1760	190	144	3-F	胞衣34	土師器	焙烙	17.4	3.6	13.5	容器の身 型作り
1761	190	144	3-F	胞衣51	土師器	焙烙	(16.4)	3.7	(11.5)	容器の蓋 型作り
1762	190	144	3-F	胞衣51	土師器	焙烙	18.0	3.7	14.0	容器の身 型作り
1763	190	144	2-F	胞衣2	土師器	焙烙	19.3	4.3	(14.0)	容器の蓋 同心円状のケズリ調整
1764	190	144	2-F	胞衣2	土師器	焙烙	19.2	4.3	14.0	容器の身 同心円状のケズリ調整
1765	190	144	3-A	胞衣50	土師器	皿	21.0	4.9	12.6	容器の蓋
1766	190	144	3-A	胞衣50	土師器	皿	20.7	5.0	13.1	容器の身
1767	190	144	3-A	胞衣58	土師器	皿	13.7	2.9	8.5	容器の蓋
1768	190	144	3-A	胞衣58	土師器	皿	(14.0)	3.1	7.7	容器の身

「胞衣埋納遺構」は「胞衣」として略記

(2) 石製品

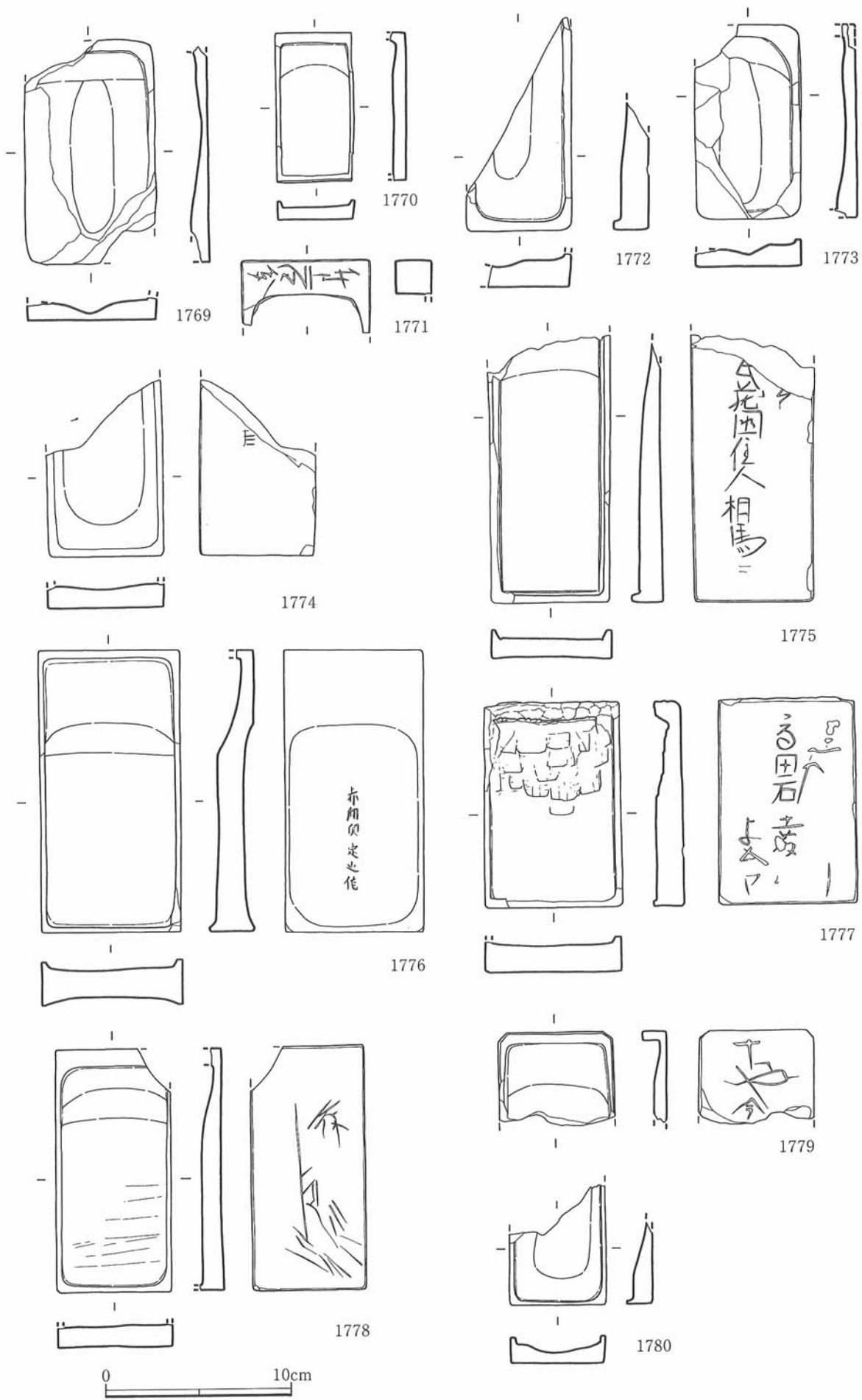
硯 (第191、192図 図版145、146)

硯は土製と石製があり、土製は素焼きの硯や瓦片を転用加工し硯として使用したもので、ほとんどが石製硯である。石製硯は大別して2種類が確認されている。一つは長門特産の赤間硯で、その特徴は小豆色をした赤色頁岩である赤間石を使用し、硯背に「赤間関」等の文字が彫り込まれている。他方は黒色粘板岩を使用した硯で、「(上々) 高田石」(岡山県勝山町産)等の文字が認められる。硯のうち長方硯が最も多く出土し、円硯や装飾を施した彫刻硯はわずかである。使用により墨を擦る墨堂がくぼんでいる硯も多く、背面には生産者を示す文字以外に所有者やいたずら書きに近い釘書きが認められる例もある。

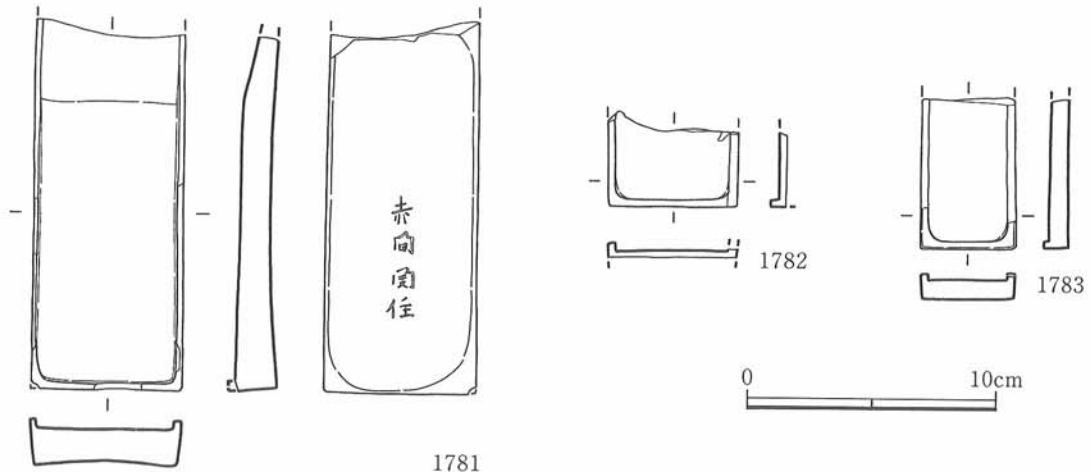
出土硯のうち土坑等の遺構から出土した硯は15点である。大きさから2種類あり、1783等の小型硯は携帯用であろう。硯背の刻書には1775には「武蔵国住人相馬□」、1776に「赤間関定之作」、1777に「高田石土□(藤カ)」、1781に「赤間関住」の文字が確認できる。

砥石 (第193図 図版146)

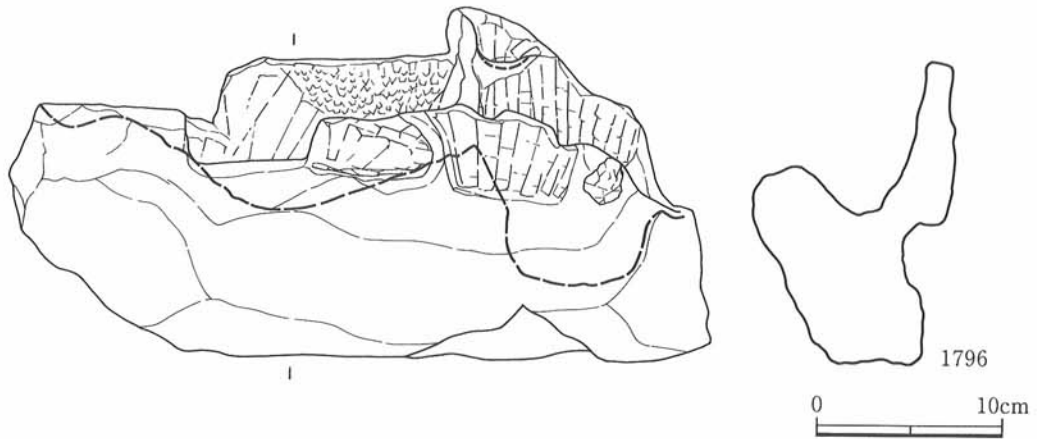
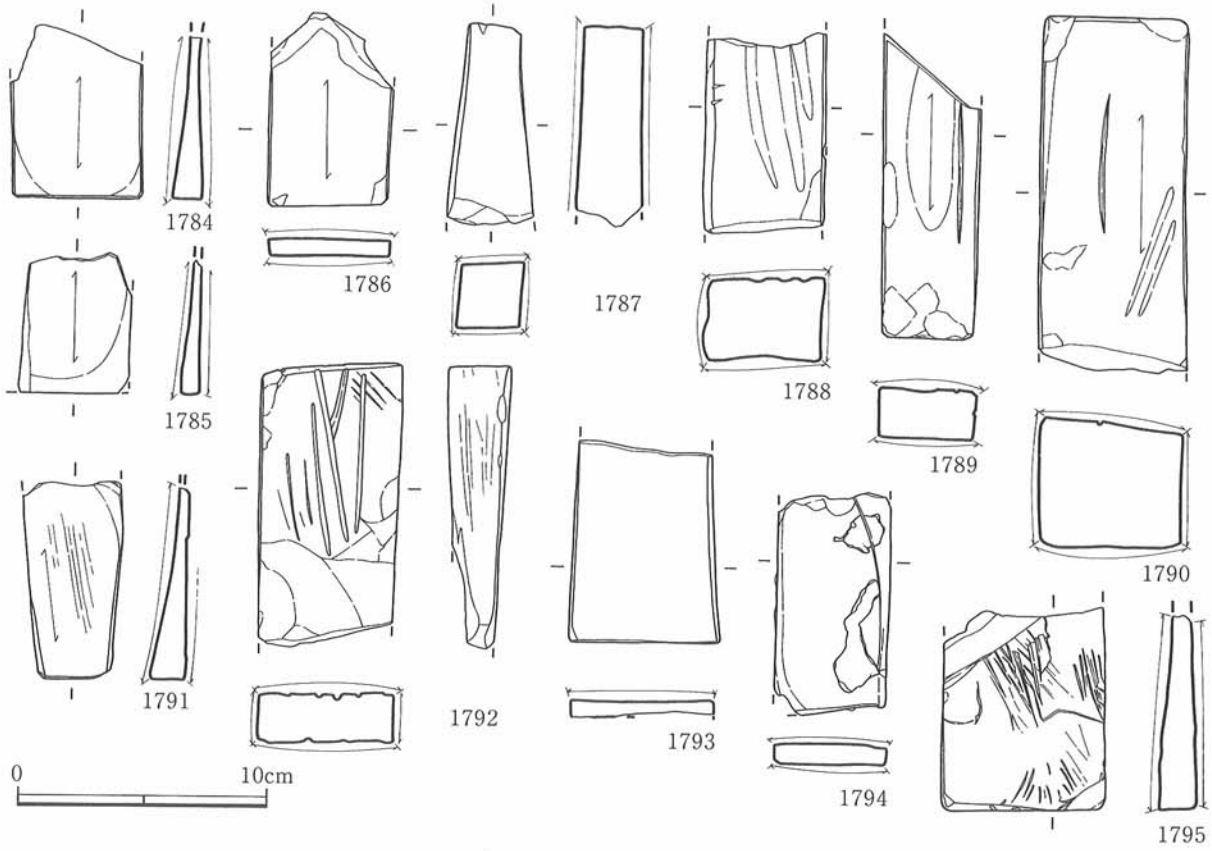
出土した砥石は、幅が6 cm以下の扁平な仕上げ砥が最も多い。中には1788、1792のように使用によ



第191図 硯①(1/3)



1781
第192図 硯②(1/3)

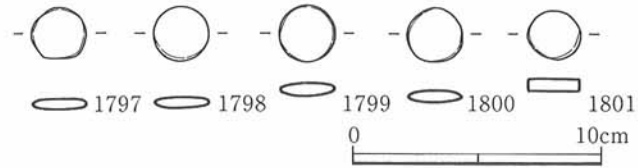


第193図 砥石・石鉢(1/3、1/4)

り筋状の溝があるものもある。石材は砂岩、凝灰岩、粘板岩である。

石鉢 (第193図 図版146)

1796は1地区 SK68出土。赤色の自然石塊に深さ2.4cmから3.6cmのくぼみを彫り込んでおり、鑿痕が明瞭に残る。くぼみに草花を植える石製の植木鉢である石鉢とみられる。石材は地元の笠山周辺で産する玄武岩質で軽石状になった「スコリア」と呼ばれるものであろう。



第194図 碁石(1/3)

碁石 (第194図 図版168)

碁石は土製、石製があり、ほとんどが石製である。土製は素焼きで、石製は黒色の自然石をそのまま使用したものもあるが、径2.2cmほどに加工したものがほとんどである。また碁石のうち黒は石製で、白は貝製である。貝製のものは摩滅風化してほとんど出土しない。

今回取り上げるのは次の5点である。1797は1地区 SK139出土。径2.1cm、厚さ0.4cm。1798は1地区 SK92出土。径2.2cm、厚さ0.5cm。1799は3地区 SK129出土。径2.2cm、厚さ0.6cm。以上は黒石。1800は1地区 SK277出土。径2.1cm、幅0.5cm。1801は2地区 SX46出土。軽石を成形してつくられ、白の代用品と見られる。径2.1cm、厚さ0.5cm。

火打ち石

火打ち石は緑灰色のチャート質と黒白色半透明な石英質とがあるが、量的には緑灰色のチャート質のものが多い。5cmを超える大きさの例は少なく、大抵が2～3cmのものである。

第8表 石製品一覧

単位：cm ()：推定値 *残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	長	幅	厚	備考
1769	191	145	1-F	SK128	石製品	硯	12.0	7.0	*1.1	粘板岩
1770	191	145	1-F	SK128	石製品	硯	8.0	2.0	1.1	粘板岩
1771	191	145	1-D	SK92	石製品	硯		7.0		粘板岩 線刻
1772	191	145	1-H	SK136	石製品	硯	*11.4	5.6	1.9	粘板岩
1773	191	145	1-B	SK116	石製品	硯	10.4	5.7	1.4	粘板岩
1774	191	145	1-H	SK149	石製品	硯	*9.4	6.2	*1.3	粘板岩
1775	191	145	1-H	SK152	石製品	硯		6.5	1.7	赤色頁岩 釘書き「武(藏)国住人相馬□」
1776	191	145	1-M	SK214	石製品	硯	15.2	7.5	2.4	頁岩「赤間関定之作」
1777	191	145	1-H	SK152	石製品	硯	11.0	7.4	1.9	粘板岩 釘書き「高田石土(藤)」
1778	191	146	1-X	SK534	石製品	硯	13.1	6.1	*1.3	粘板岩 釘書き
1779	191	145	1-J	SK293	石製品	硯		6.4	1.3	粘板岩 釘書き
1780	191	145	1-L	SK281	石製品	硯	*6.4	5.2	1.5	粘板岩
1781	192	145	1-K ~ L	SD207	石製品	硯	*14.7	6.0	1.8	赤色頁岩「赤間関住」
1782	192	145	3-B	SK128	石製品	硯	*3.8	5.2	0.6	頁岩
1783	192	145	3-B	SK92	石製品	硯	*5.9	3.7	1.0	粘板岩
1784	193	146	1-D	SK92	石製品	砥石	*6.9	5.2	1.2	粘板岩 仕上げ砥
1785	193	146	1-F	SK128	石製品	砥石	*5.2	4.5	0.7	粘板岩 仕上げ砥
1786	193	146	1-D	SK92	石製品	砥石	*7.7	4.9	0.7	粘板岩 仕上げ砥
1787	193	146	1-F	SK104	石製品	砥石	*7.9	2.7	2.6	粘板岩 仕上げ砥
1788	193	146	1-F	SK104	石製品	砥石	*8.8	4.8	3.3	砂岩 荒砥
1789	193	146	1-H	SK152	石製品	砥石	*12.0	3.8	2.1	粘板岩 仕上げ砥
1790	193	146	1-B	SK117	石製品	砥石	*14.0	5.7	5.1	凝灰岩 中砥
1791	193	146	1-K	SK278	石製品	砥石	7.8	3.9	1.4	頁岩 仕上げ砥
1792	193	146	1-J	SK293	石製品	砥石	*11.3	5.6	2.5	粘板岩 中砥
1793	193	146	1-J	SK276	石製品	砥石	*8.0	6.0	0.7	粘板岩 仕上げ砥
1794	193	146	1-Z	SK555	石製品	砥石	*8.8	4.4	0.8	粘板岩 仕上げ砥
1795	193	146	1-Z	SK532	石製品	砥石	*8.1	6.7	1.5	粘板岩 仕上げ砥
1796	193	146	1-B	SK68	石製品	石鉢	37.4	18.5	奥行8.2	赤色軽石(スコリア)軟質 ノミ痕
1797	194	168	1-F	SK139	石製品	碁石	径2.1		0.4	黒色粘板岩
1798	194	168	1-D	SK92	石製品	碁石	径2.2		0.5	黒色粘板岩
1799	194	168	3-B	SK129	石製品	碁石	径2.2		0.6	黒色粘板岩
1800	194	168	1-K	SK277	石製品	碁石	径2.1~0.5		0.2~0.5	黒色粘板岩
1801	194	168	2-F	SX46	石製品	白碁石の代用	径2.1		0.5	軽石

(3) 木製品 (第195~219図 図版147~164)

木製品はほとんどが廃棄土坑からまとまって出土した。総数は約2,100点で、下駄、漆椀、建築部材、盤、栓、箸、篋、刷毛、曲物、櫛、傘、桶や樽の把手、羽子板、木製の鏝、刀、刀子、包丁などの柄、人形頭部、舟形木製品、将棋駒、槌の子、柄杓、灯明具、算盤玉、などである。また墨書の痕跡が残る荷札木簡など、文字資料も多く出土した。

以下、遺構ごとに出土木製品の概要を述べ、墨書木製品はまとめて報告する。なお一覧表のうち樹種については樹種鑑定したものの¹⁾みについて記載した。漆器の表面漆色調については、主観的な判断で黒、赤、黒赤(褐色)の三種類に分けた。蒔絵については、金、銀、錫蒔絵の種類があるとされるが、色調からの区別は難しいので、表面観察による発色の色調を記載した。

1) 株式会社吉田生物研究所が行った樹種鑑定による

1 地区出土の木製品

SK80 (第195、196図 図版147、148)

出土した木製品は約214点である。

1802~1806は下駄。1803、1806は刳り下駄で、他は連歯下駄。歯は使用により摩滅している。下駄は漆の下地が残っていたり、前壺のまわりに指の圧痕が認められる。

1807、1810、1811は加工木材。1808は盤か。内面に段差がある。1809は桶などの底板。1812は曲物の底板で木釘が4カ所に残る。1813は木刀の鏝であろう。1814、1815は栓。1816~1818、1825は円板状の加工木材片で孔がある。1819、1820は長さ約19cmの箸。端部が斜めに削られている。1821、1822は刷毛の柄部。板を裂いてその中に毛を挟み、植えつけるための糸を通す孔や溝がある。1823は櫛。1824は不明部材。1826は和傘の「ろくろ」で竹製である。

1827~1836は漆椀。蓋を中心に簡単な家紋状の紋様が描かれる。1835は平椀。1836は一文字腰椀。1828はつまみ部に穿孔があり、また口縁部には袂りが認められる。1833は高台(またはつまみ)内に竹材を通して、底部に穿孔を行っている。これらは転用されたものであろう。

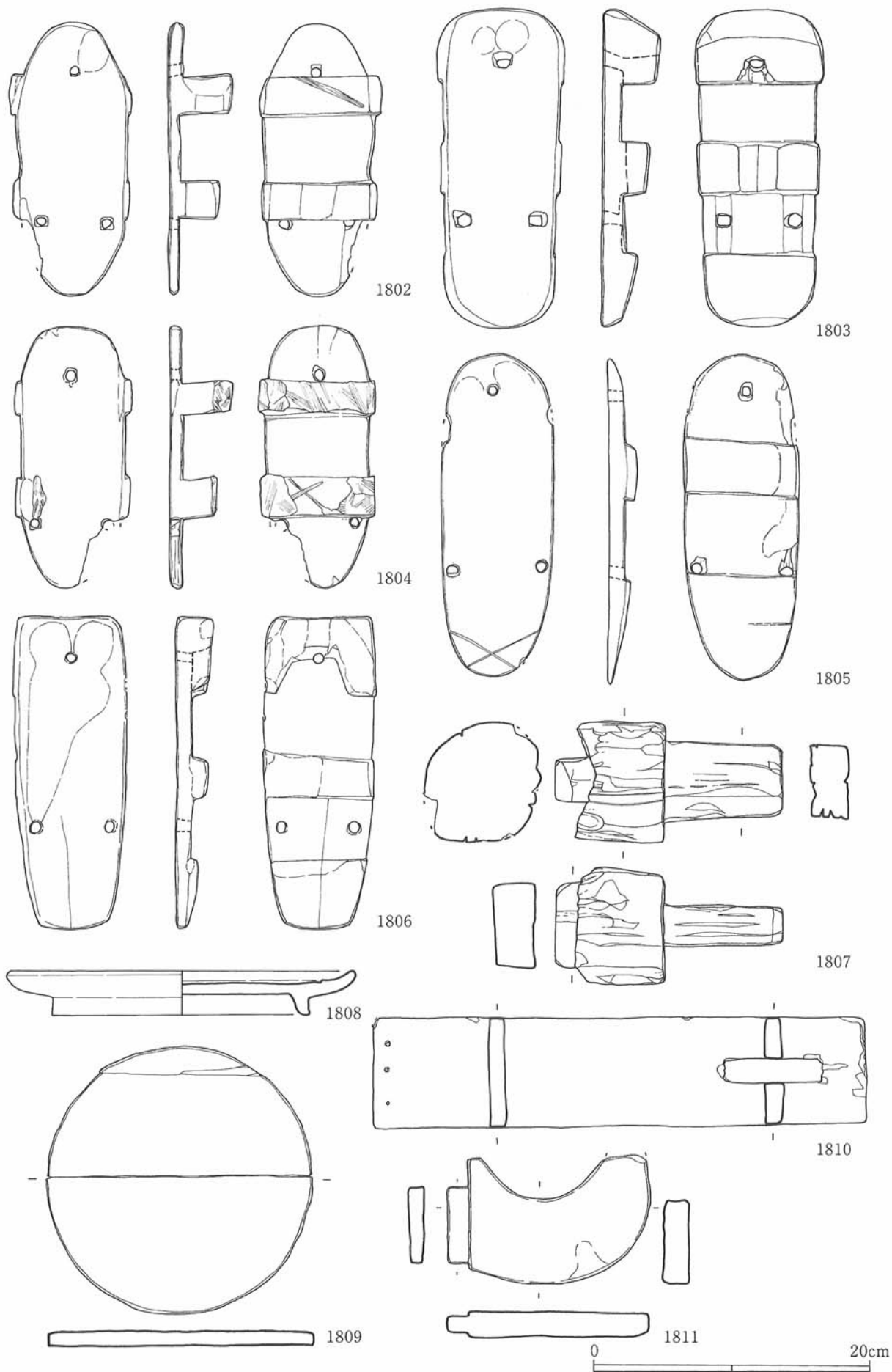
この他、シュロ箒の一部やざる(図版7)、扇子や笠の一部が出土したが、いずれも残存状況が悪く取り上げに至っていない。

SK92 (第197~199図 図版148~150)

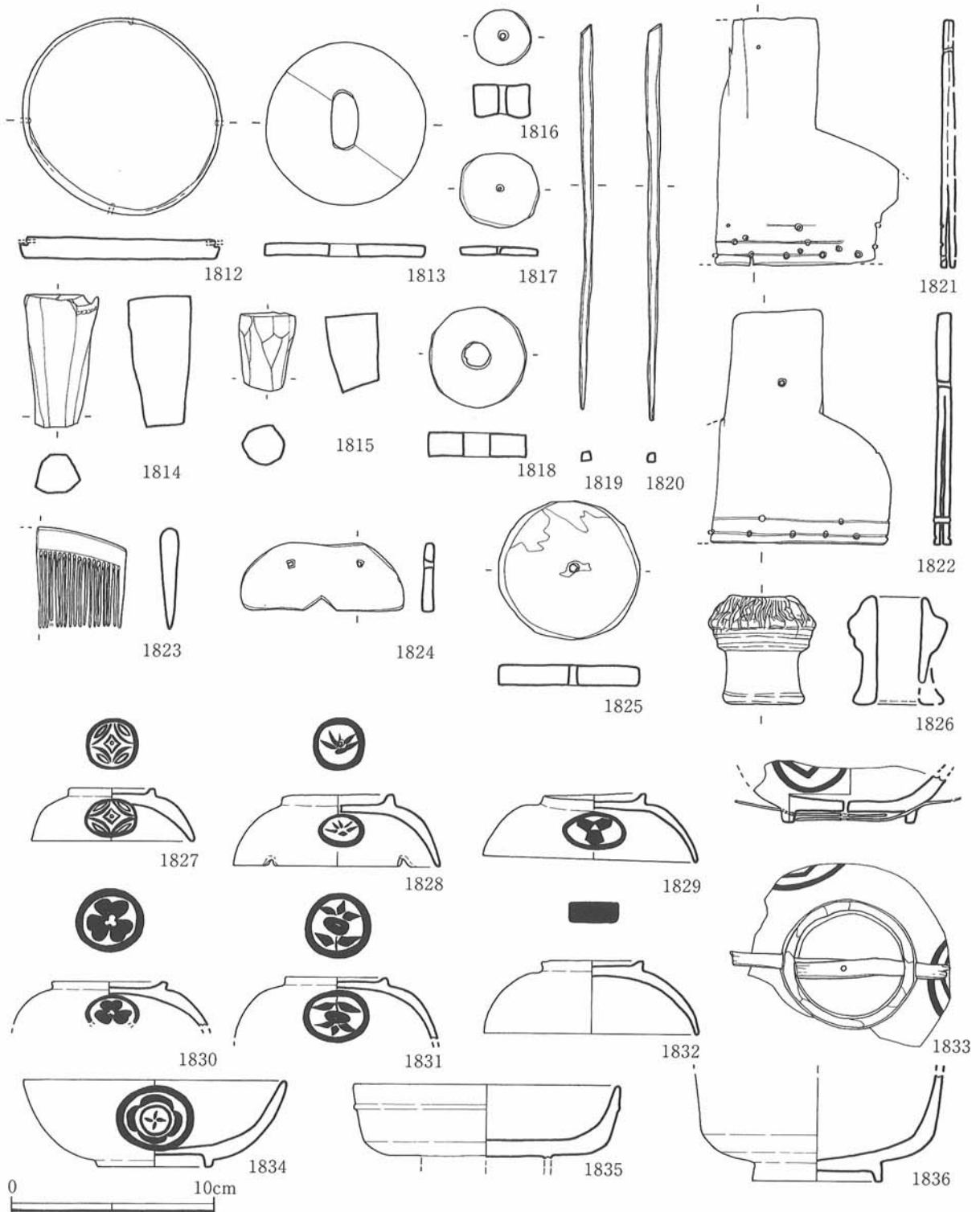
出土した木製品は309点である。

1837~1845は下駄。1837~1839は刳り下駄。1840は連歯下駄。1841は露卯の差歯下駄。1842は陰卯の差歯下駄で、全体に黒漆が良く残っていた。1843は釘および釘穴があり、鼻緒をとおす目があることから、無歯の下駄で、歯のある下部を釘によって装着する下駄であろう。1844は逆に無眼下駄で、上部に鼻緒のつく表(草履など)を装着したとみられる。歯は使用によってほとんどない状態である。1848~1851は、突起部分と凹部を組み合わせ使用する製品で、おそらく無眼下駄の「中折れ下駄」と呼ばれるものとする。釘穴は表を装着したものであろう。1845は小型の連歯下駄で子供用か。

1846は把手。1847は羽子板。1853~1855は加工部材。1852は曲物の底板か。木釘の痕が7カ所にある。1856は刀の柄部で、鯨皮が表面に貼り付けてある。1857は木刀の鏝。1859は櫛。1860は将棋の駒である。墨書は見あたらない。



第195図 1-SK80出土木製品①(1/4)

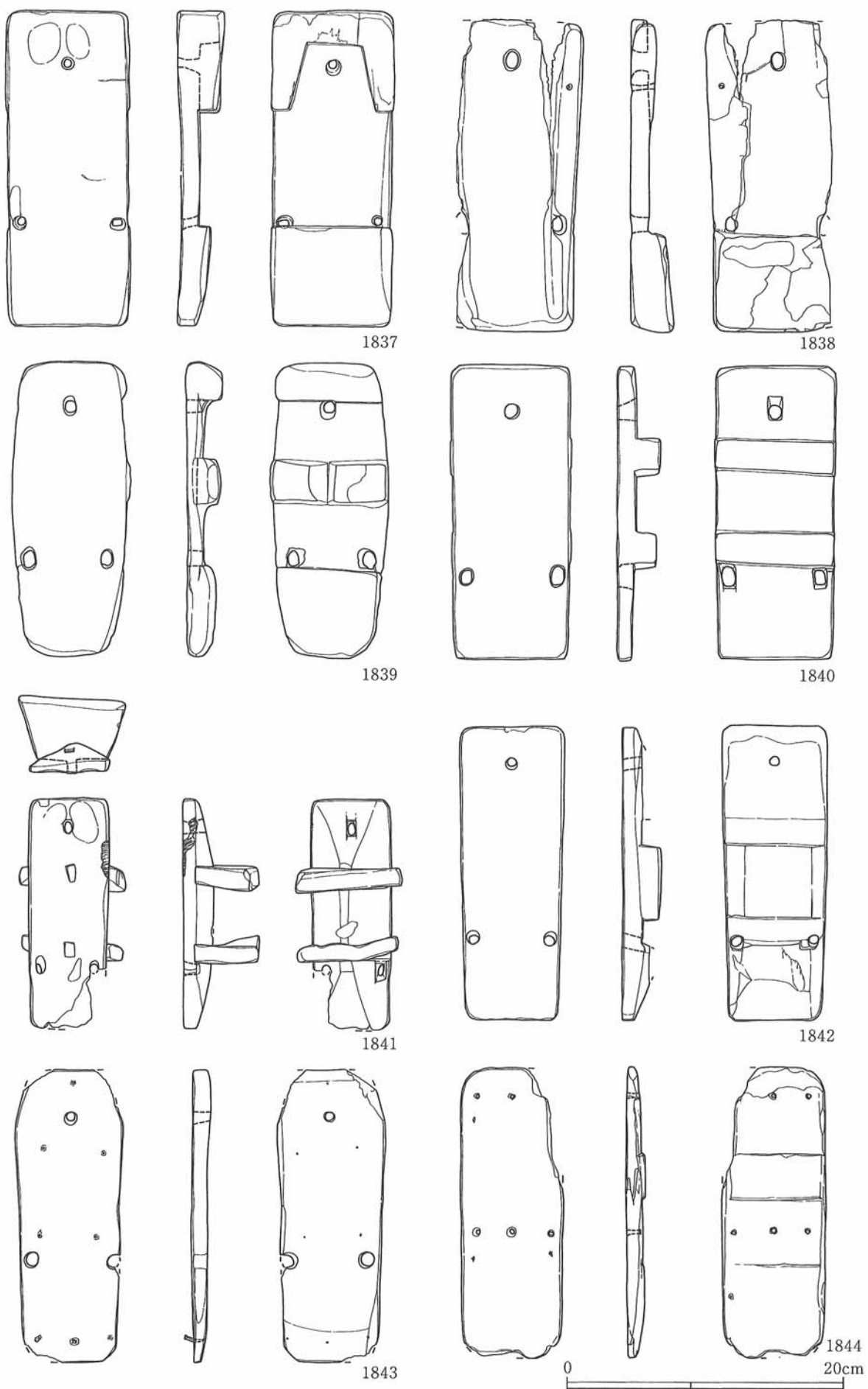


第196図 1-SK80出土木製品②(1/3)

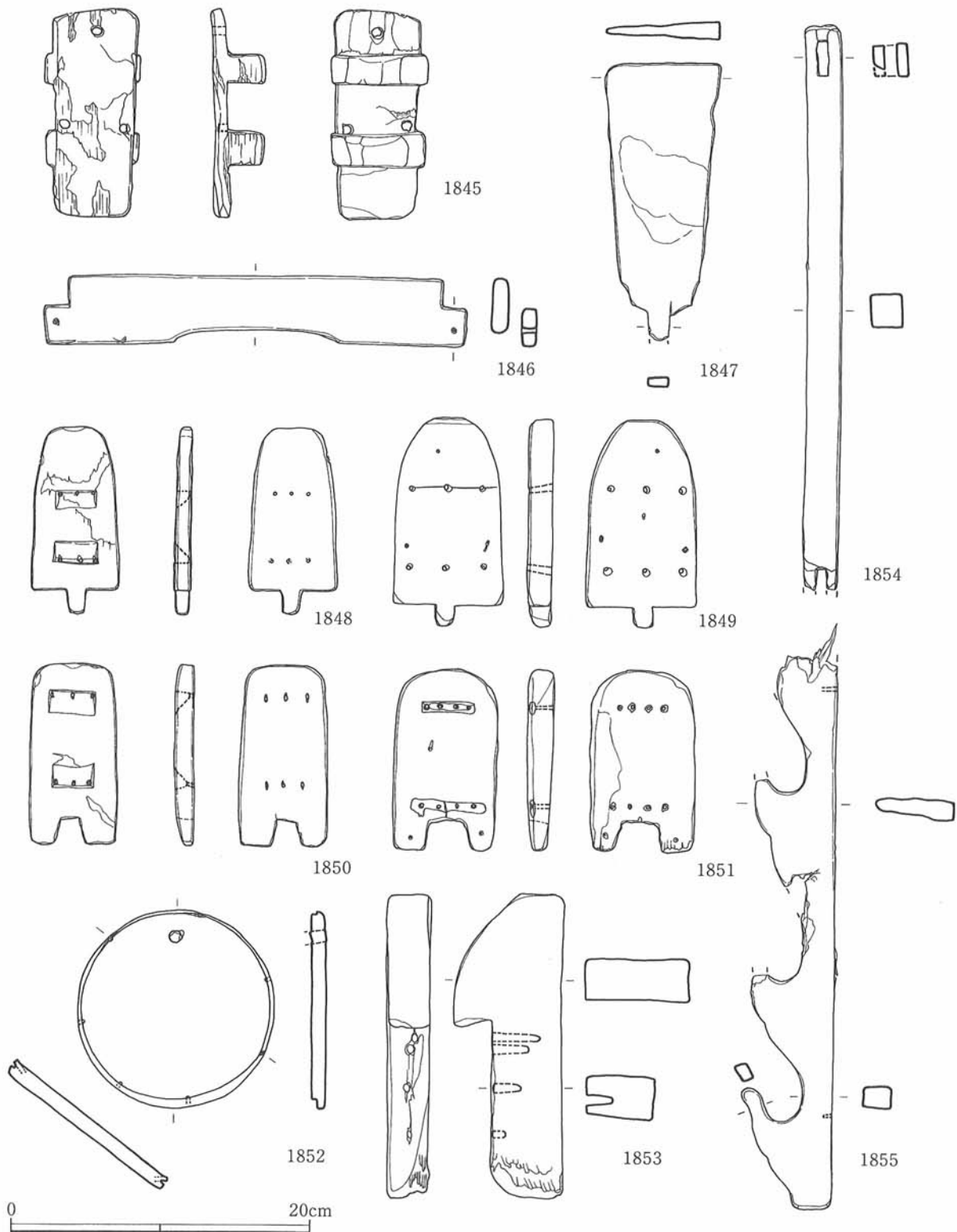
1862～1866は漆碗。1863、1864は腰丸碗。1866は一文字腰碗。1862、1865、1866は赤漆絵で松鶴亀、杉、扇文を描く。1864は内面に墨(?)が付着しており、食器とは別の用途に使用されたとみられる。

SK92はSK80と重複し下位に検出された廃棄土坑であり、両者はほぼ同時期か、SK92がやや古くなる様相が陶磁器から指摘される。

SK277 (第201～203図 図版151～153)

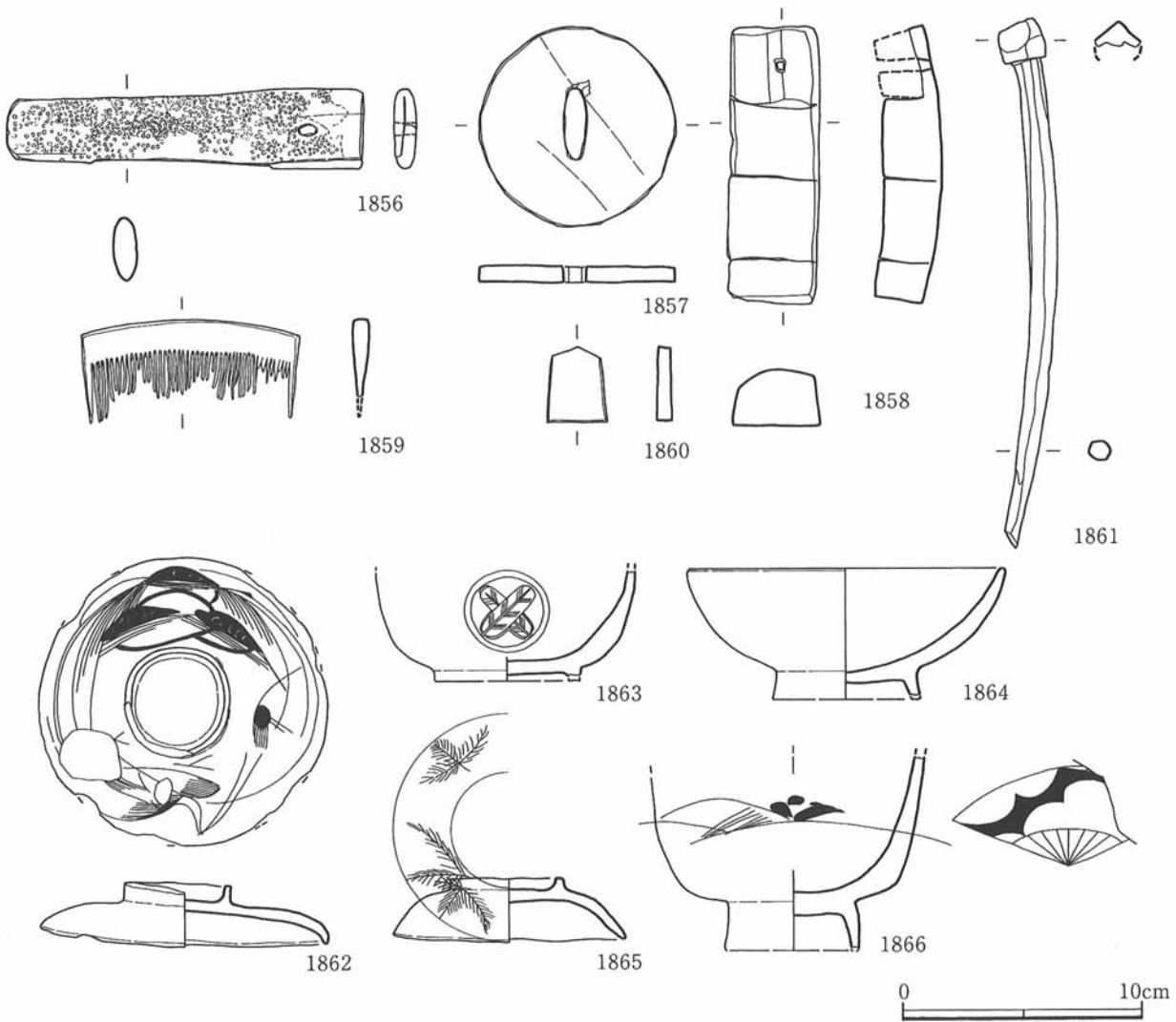


第197図 1-SK92出土木製品①(1/4)

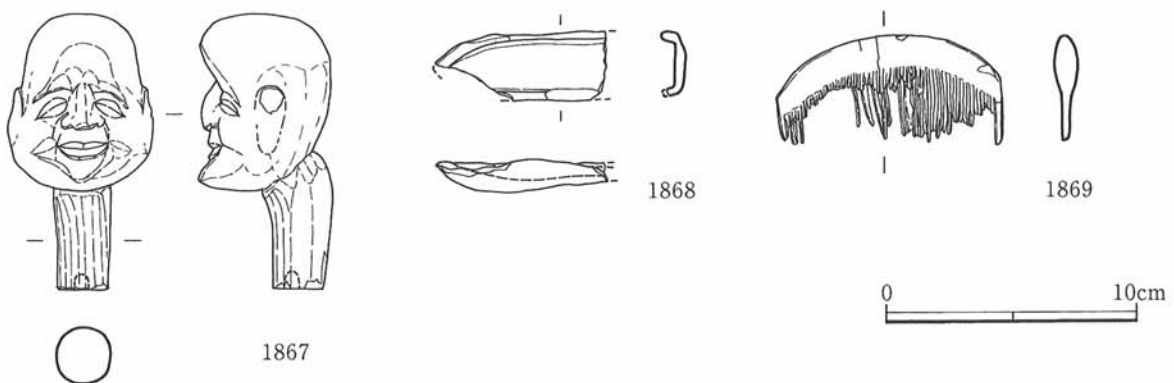


第198図 1-SK92出土木製品②(1/4)

SK277は大型の廃棄土坑で、木製品が331点出土した。1870、1871、1873、1874は削り下駄。1872、1875は連歯下駄。1875は前歯が欠損しており、それを釘によって修復した痕跡がある。1876は陰卯の差歯下駄。台部の樹種はヒノキで、歯はカツラを使用している。1877、1878は小型の削り下駄。大きさから子供用であろう。1879～1881は中折れ下駄とみられる。1881、1882は比較的太い釘が打ってあるので、修復を行ったものかもしれない。



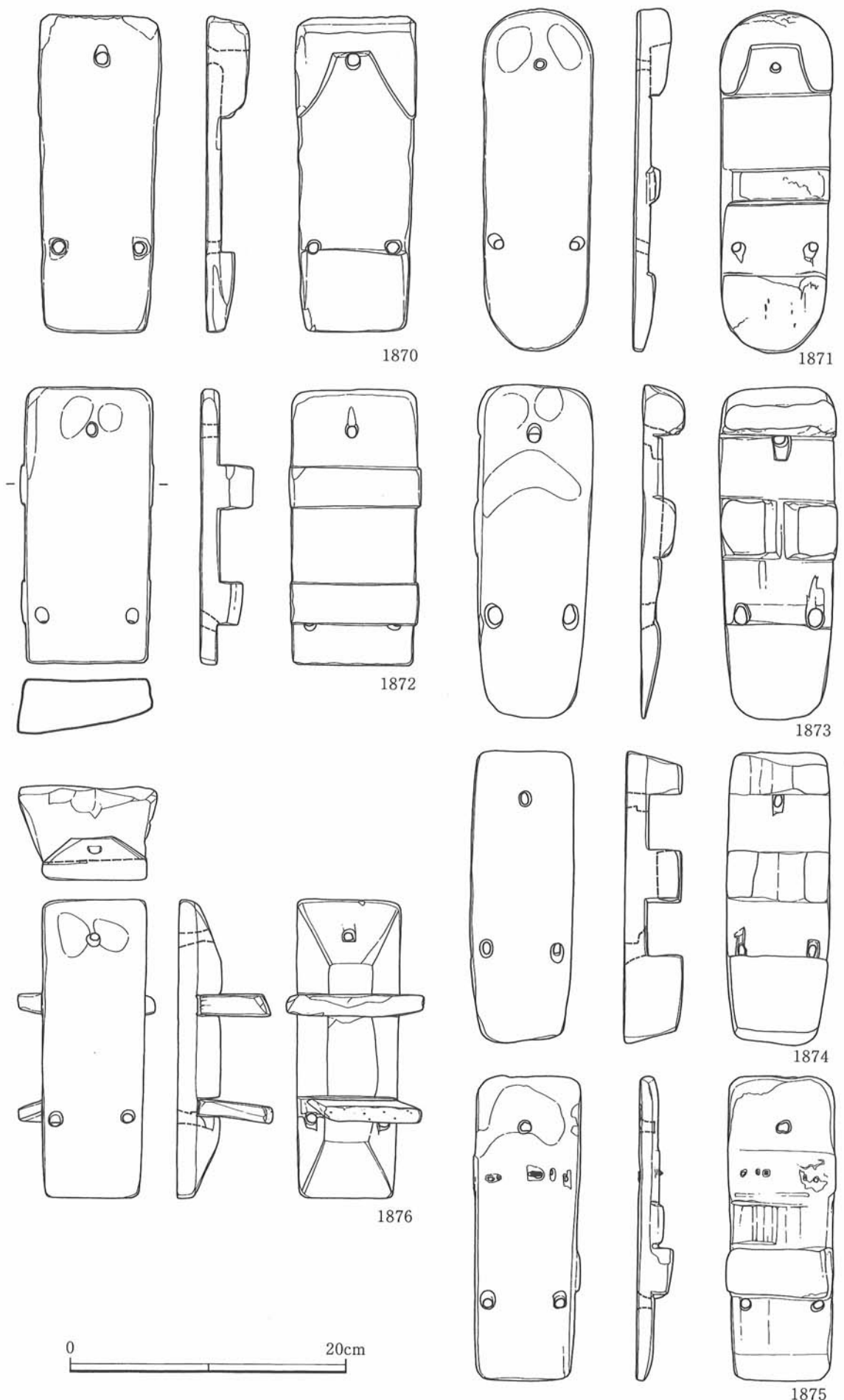
第199図 1-SK92出土木製品③(1/3)



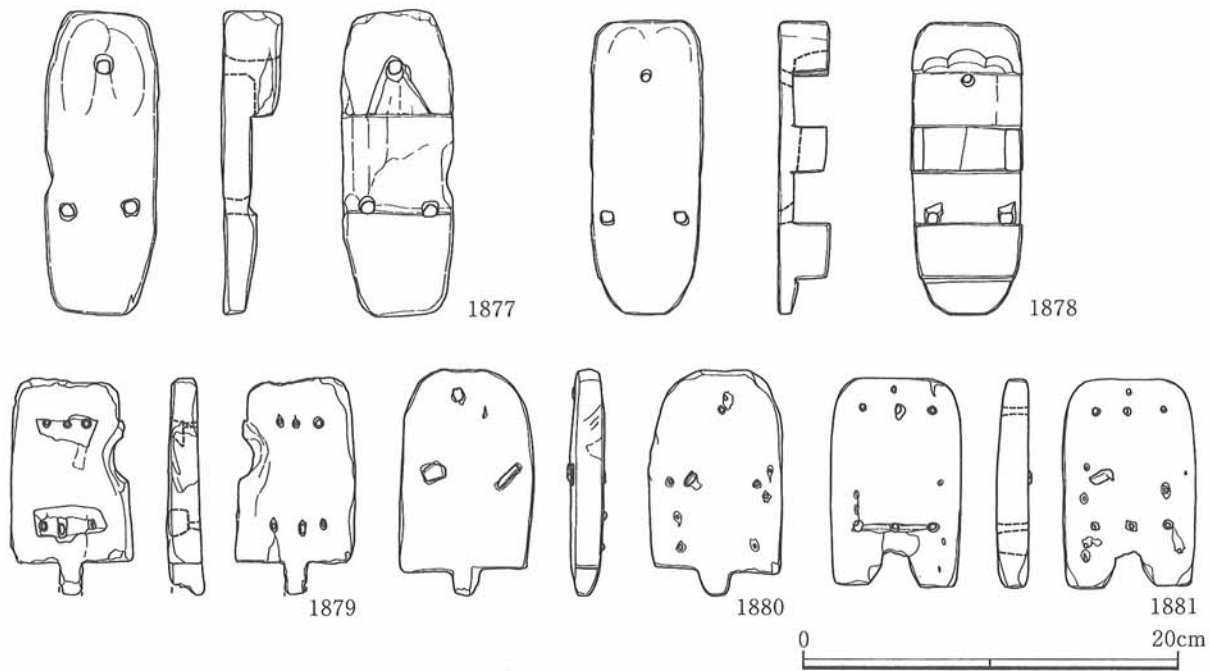
第200図 2地区出土木製品(1/3)

1882は人形頭部で顔面を欠損している。植毛のための溝が後頭部にめぐる。1884の加工木材には一部に焼けて炭化した部分がある。

1886～1899は漆椀。1986、1889、1890、1891は一文字腰椀。1887、1892、1893、1894、1895は腰丸椀。1888は壺椀か。1891は高台内に赤漆で文字が記してある。1894は内面に内容物が付着した痕跡がある。1899は蒔絵で円文を施す。1900は箒。柄部は欠損しているが、シュロとみられる繊維を麻紐で



第201図 1-SK277出土木製品①(1/4)



第202図 1-SK277出土木製品②(1/4)

束ねている。シュロ箆は座敷箆とみられる。なお図化はせず写真のみ掲載した。

SK293 (第204～206図 図版153～155)

最も大型の廃棄土坑で278点の木製品が出土した。SK277とは隣り合う敷地に位置し、ほぼ同時期である。出土する木製品の種類も似通う傾向にある。

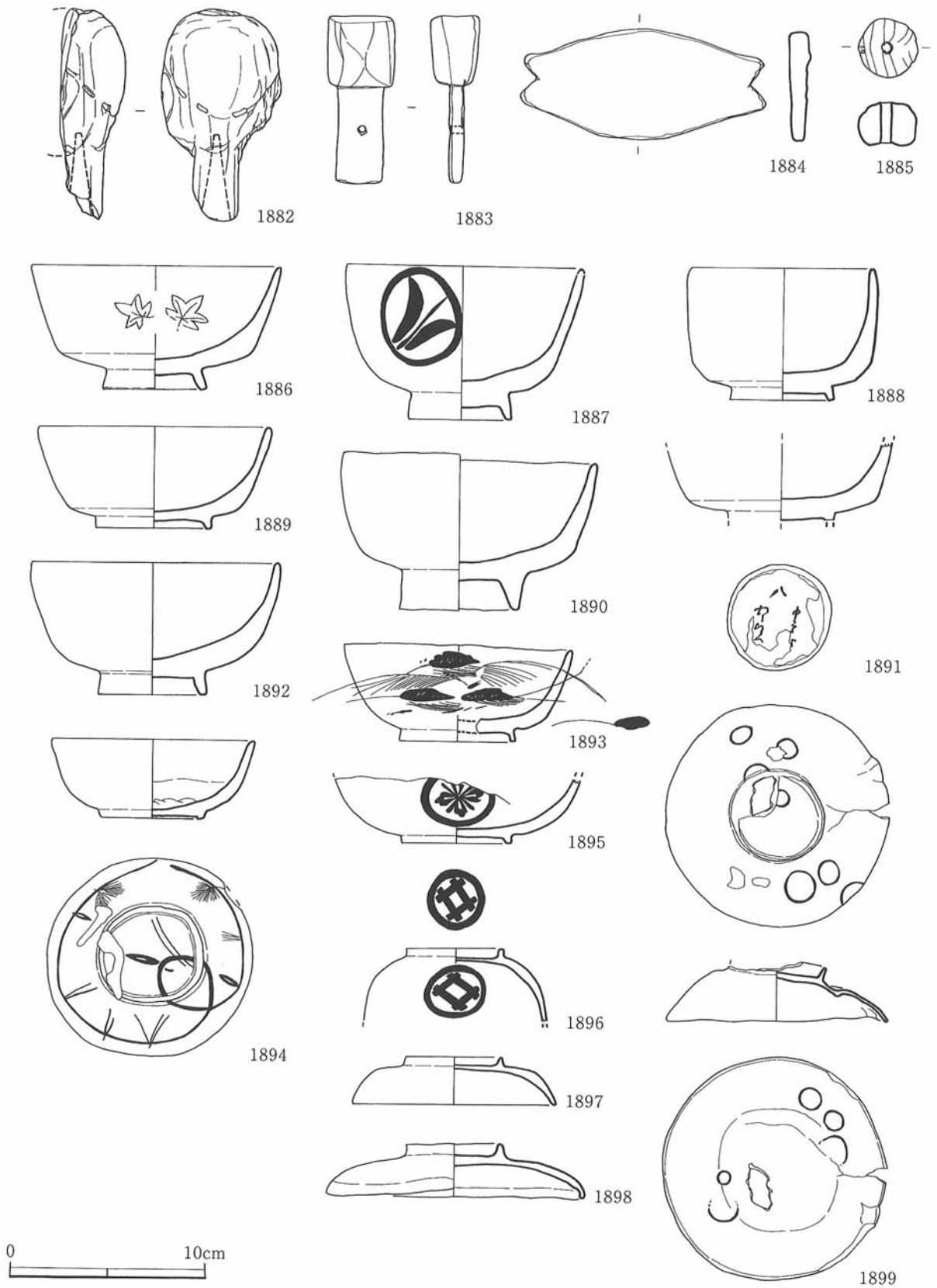
1901～1904は削り下駄。1905、1906は陰卯の差歯下駄で、歯は欠損している。両者とも黒漆および漆下地が残存していた。ヒノキを使用し作りも丁寧である。1907、1908は小型の削り下駄で、セットであった可能性がある。子供用のものであろう。1909、1910は形状から中折れ下駄の一部とみられるが、他例に比べ大きく厚手である。1911～1913は露卯の差歯下駄。前歯に比べ後歯が短く、摩滅が激しいのが特徴である。

1914は竹製の掛け花生け。底板および壁掛けの穴の一部が欠損している。1915～1917は栓。1918は刃物の柄であろう。1919は長方形の板材に穿孔があり、片面に「玉」の字が彫られている。1920、1921は一本を削り抜いてつくられた舟形木製品。1920は中央に浅い抉りがあり帆柱の存在を表現している。1921は船尾に櫓を装着するとみられる削り込みが認められる。1922、1923は曲物などの板材で、木釘やそれを打ち込む穴がある。1924は樽又は桶の把手。1925～1928は大・中・小の筥。1926、1927は柄の先端に孔があいている。1929～1932は箸とみられる。18～21cmと長さに差がある。

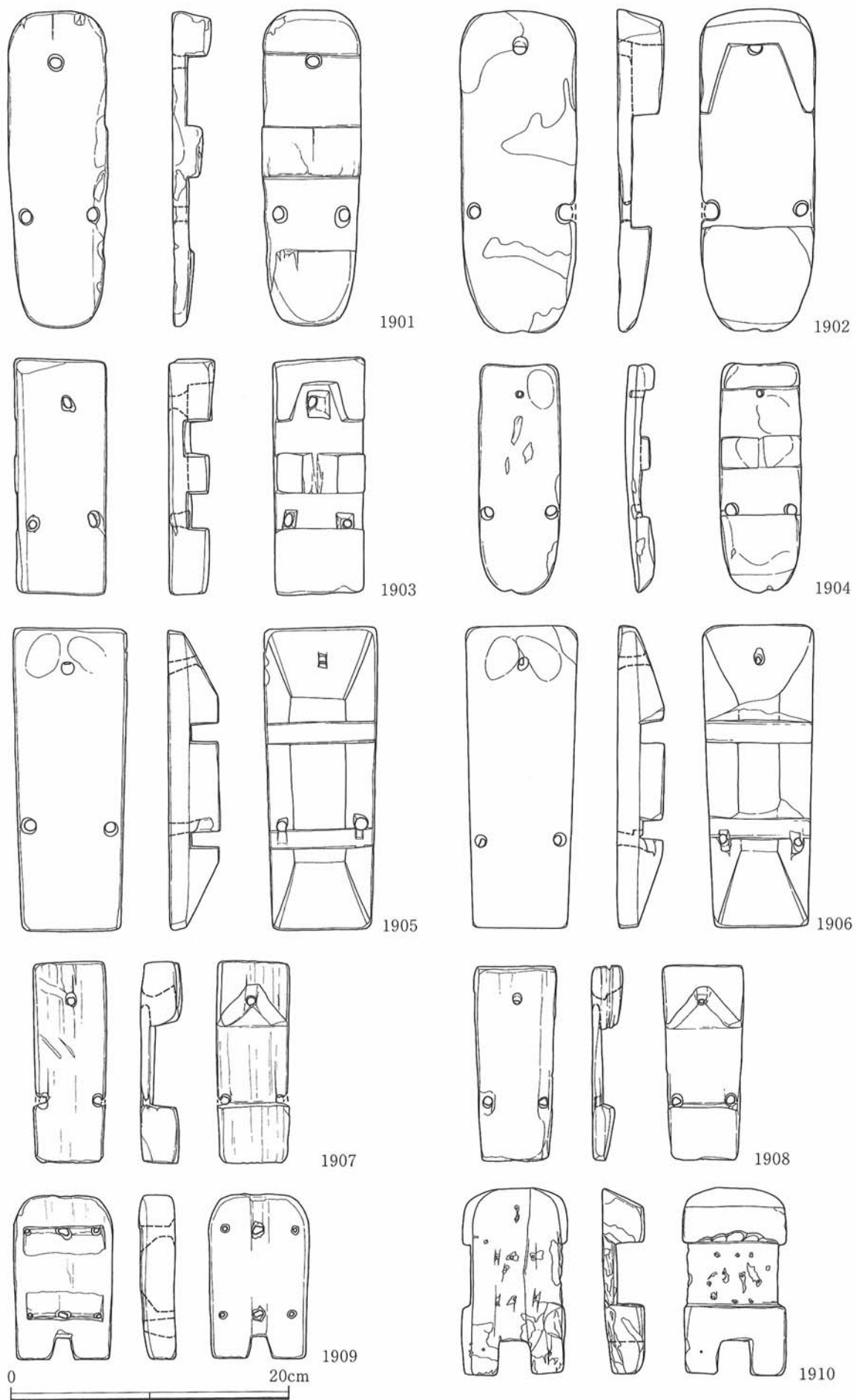
1933～1943は漆椀。1933は一文字腰椀か。1934、1935、1942、1943は腰丸椀。1933は外面に鶴、亀の蒔絵を施し、高台内に赤漆で文字が記してある。また1939はつまみ内に釘書きで記号が書かれてある。1936～1938は平椀。

SK532 (第207～209図 図版156、157)

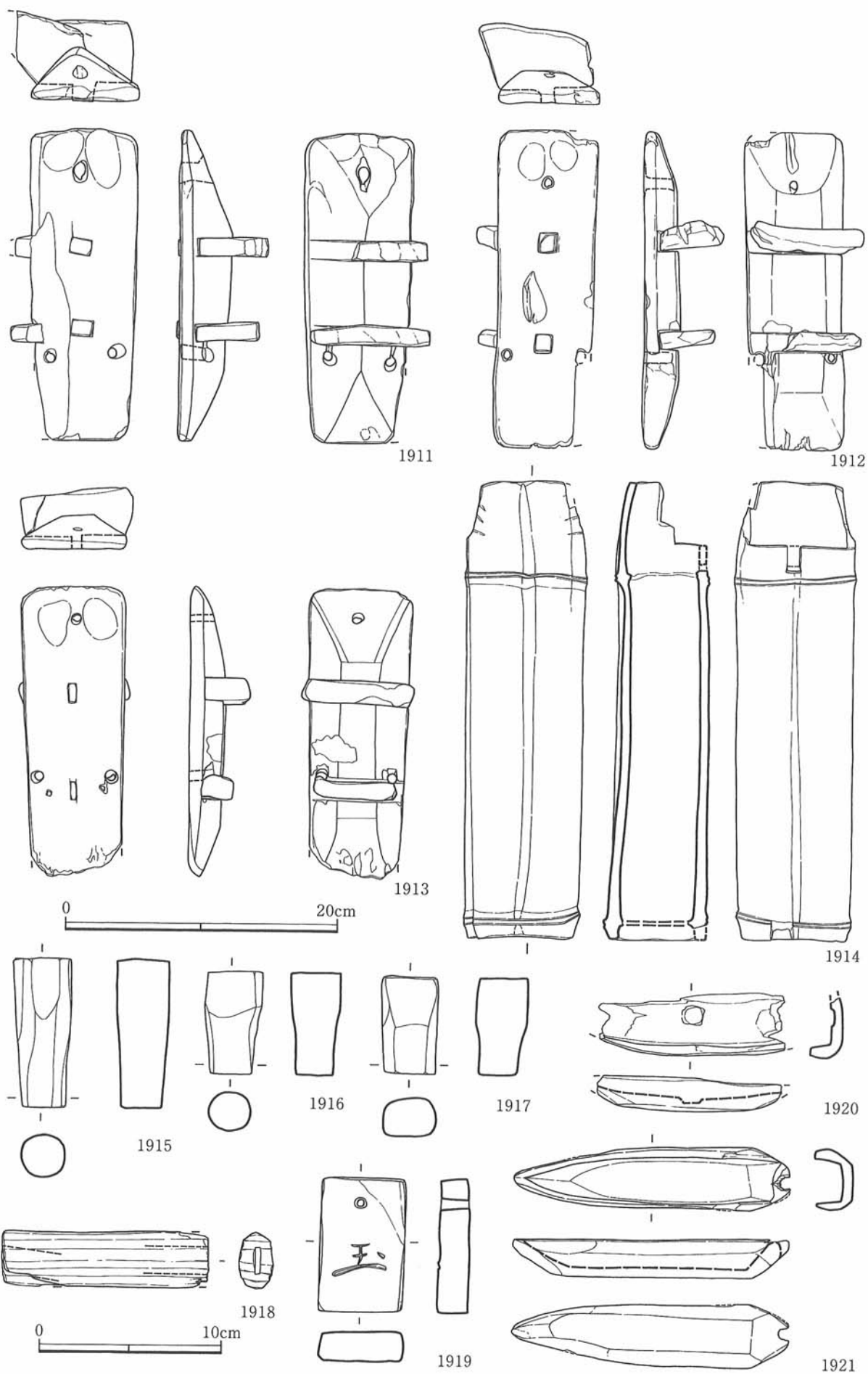
出土した木製品は408点である。1944、1945は削り下駄。1946～1948は露卯の差歯下駄。1948は先端部が梯形で、このような形状の下駄は今回の調査では他に例がない。1949は無眼下駄で鉄釘が残り、



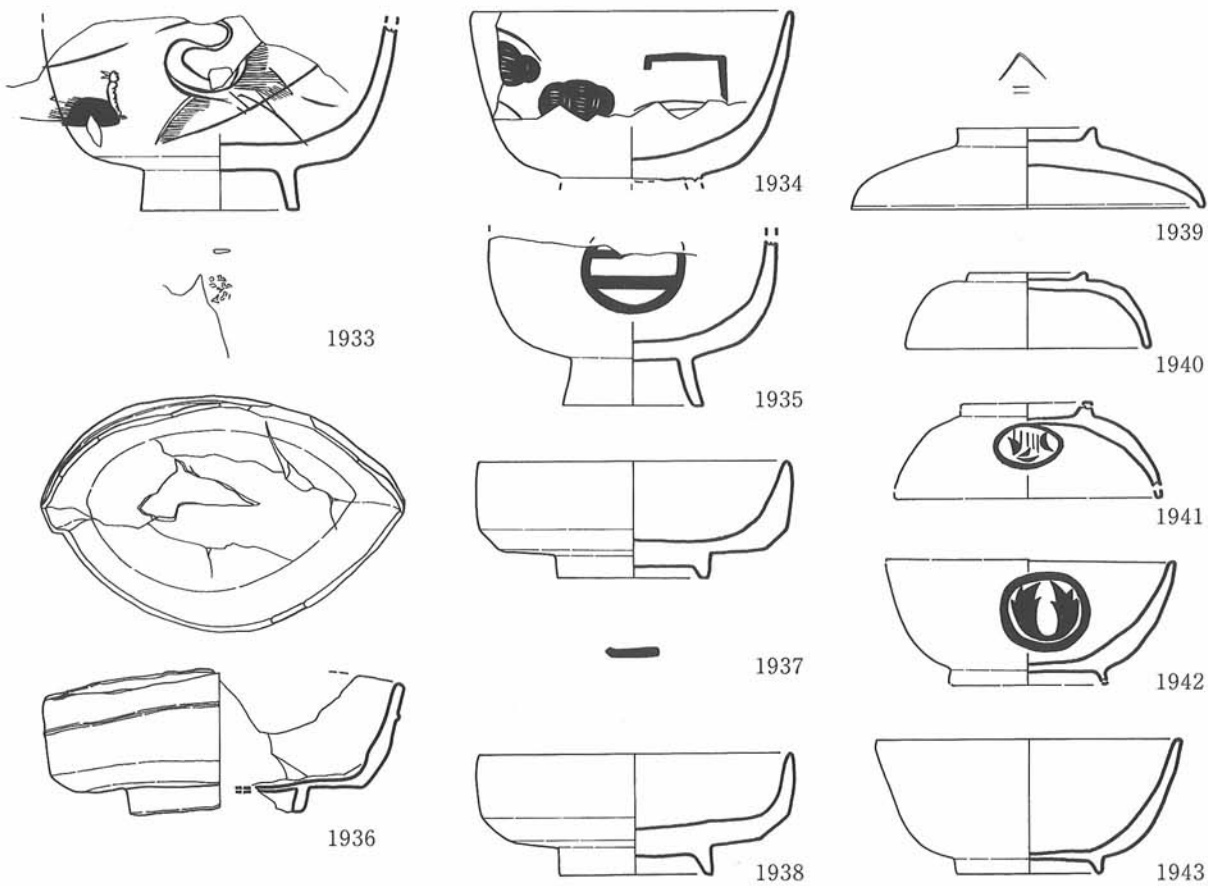
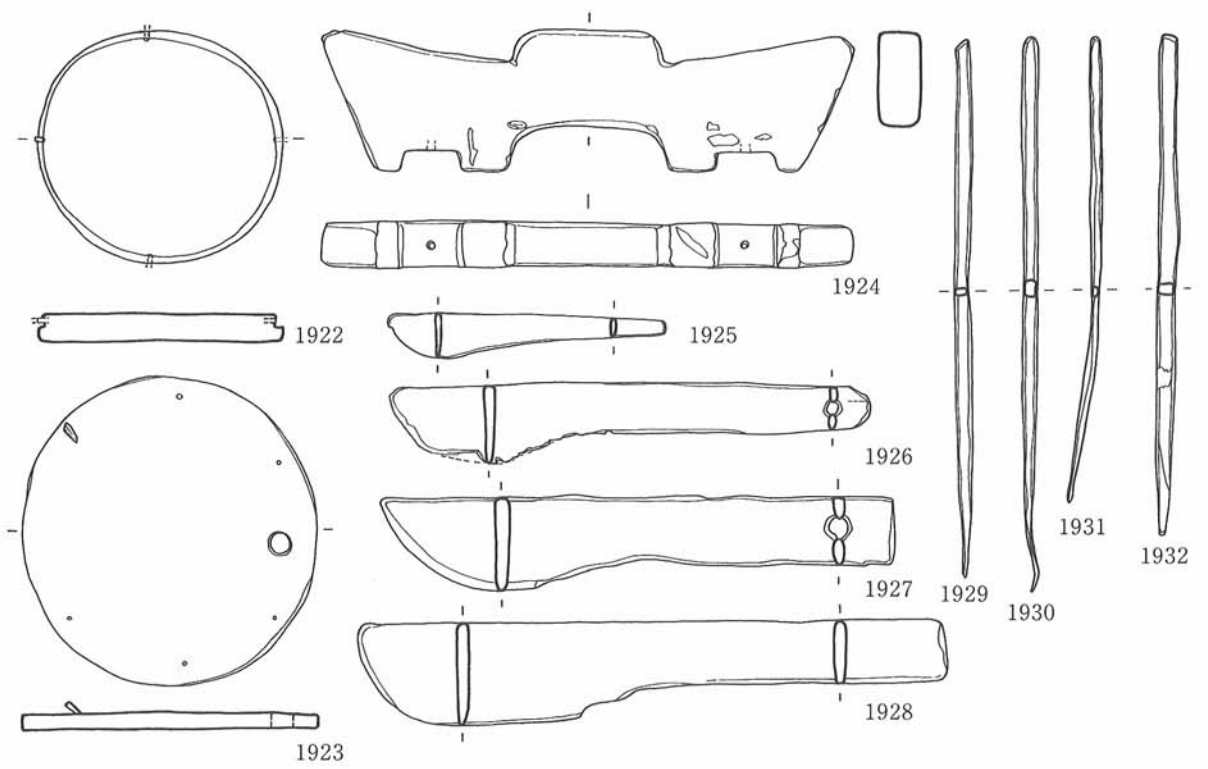
第203図 1-SK277出土木製品③(1/3)



第204図 1-SK293出土木製品①(1/4)



第205图 1-SK293出土木製品②(1/4、1/3)



第206图 1-SK293出土木製品③(1/3)

台部中央に墨書の痕跡が認められる。1950は小型の刳り下駄。1951は連歯下駄。後端に横鼻緒の痕跡があることから、切断して新たに横鼻緒を穿ち、使用したものと見られる。1952は差歯下駄の歯。露卯。歯の接地面には屋外を歩いたことを物語るように砂礫を噛んでいる。差歯下駄は歯の交換ができることから、多くの歯が廃棄土坑から出土する。また台部と歯の樹種が異なる場合があり、歯の修復交換を示す資料でもある。1953～1957は中折れ下駄とみられるが、1957は他に比して薄手である。

1958は2枚の板材を木釘で接いで円板としている。中央には焼き印の痕跡がある。1959は円板状の部材。段を削りだしてそこに接合用の木釘がある。1960～1966は箸状の木製品。1961は上端を斜めに削っている。1963は端部を尖らせるため、箸とは区別されるかもしれない。1965、1966は32cmと長く、菜箸の可能性もある。1967は曲物の円板材。孔があいているので天井板か。木釘が6カ所に認められる。1969は円板材に樹皮が差し込まれている。1968、1974は柄杓。1970は小型の円板状の加工木材。1975、1976は槌の子で鼓状をしている。1971～1973は栓。断面が円形と方形がある。1977は加工木材。1978は人形頭部で、顔面、後頭部を欠損している。耳が表現されている。

1979、1980は漆椀蓋。1979は金地に赤で梅を、1980は銀発色蒔絵で鶴、亀、松の文様を描く。

SK550 (第209図)

1981は小型の人形頭部。顔面の表現は摩滅剝離して不明。1982は腰丸の漆椀。

SK555 (第210～213図 図版158～160)

出土した木製品は108点。SK532とSK555は前後関係はあるがほぼ同時期の廃棄土坑である。

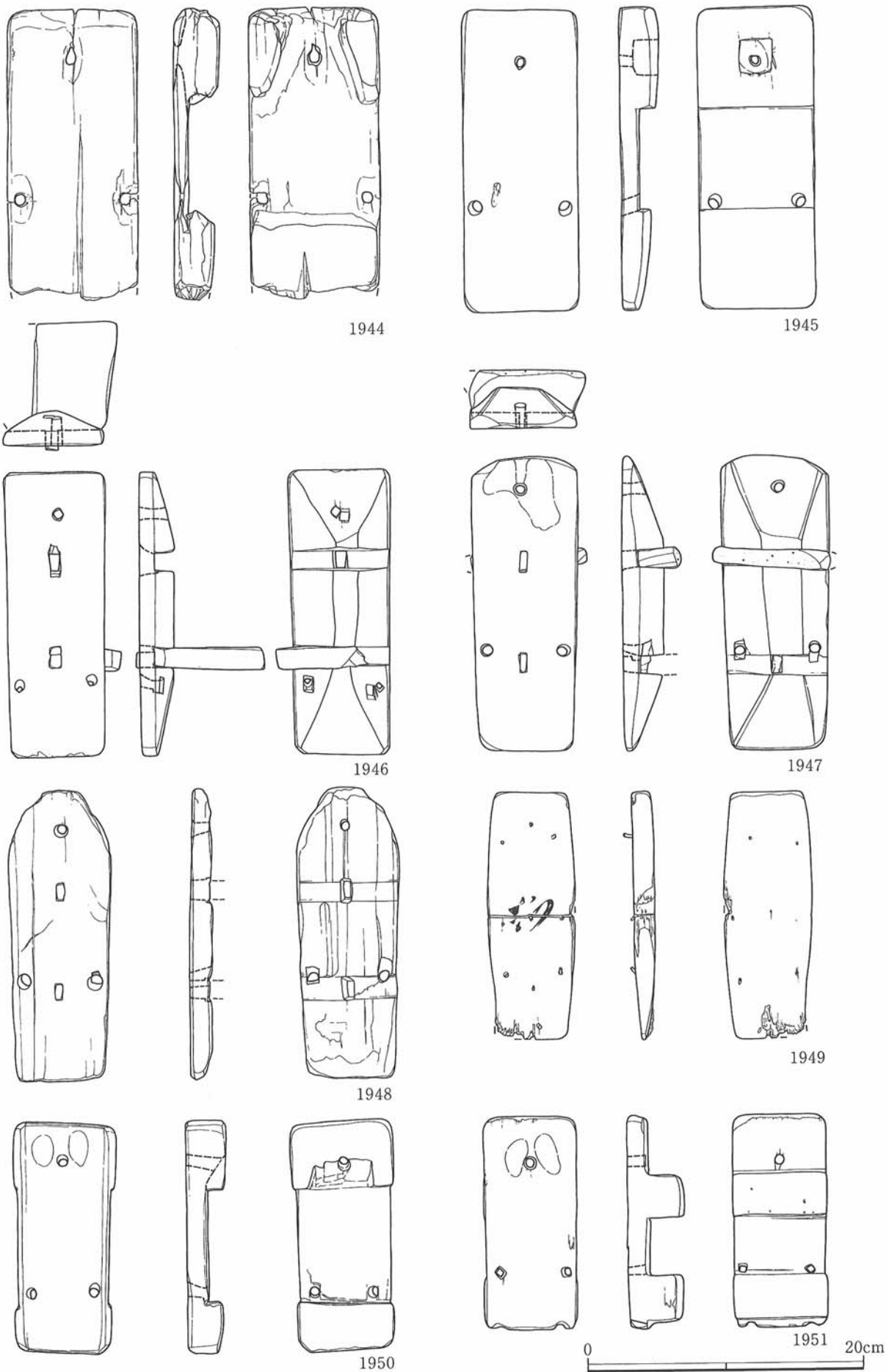
1983～1986は連歯下駄。1987、1988は無眼下駄で上部に表を装着するための釘痕がある。両者は形態や釘の配置が同じことから、一式であった可能性が高い。歯は使用で摩滅が著しい。1989は小型の刳り下駄。子供用か。1990はほぞが3列である露卯の差歯。ほぞが3列であるのは今回の調査では非常に少ない。1991～1998は露卯の差歯下駄。1991は後歯の前にある横鼻緒を木片で充填し、後歯の後の位置に新たに横鼻緒を穿っている。いずれも使用による歯の摩滅や前壺まわりに指痕のくぼみが認められる。1999、2000は陰卯の差歯下駄。歯を除いて黒漆や漆下地が残る。2001は基部が平坦で凹部がないが、他の形状や大きさが他の中折れ下駄に似る。2002は中折れ下駄。

2003は円板状の板材。接合面に木釘の痕跡が2カ所あり、表面に焼き印が認められる。2004～2006は篋。2005は両刃であるが、他は片刃である。2007は曲物の板。2008は刷毛。漆が付着していることから漆塗り用の刷毛とみられる。2009、2012は栓。2010は厚手の把手。2011は鉄製金具に竹筒を装着したもので、先端は壁などに掛けられるように曲がっている。竹筒の先端は炭の付着や炭化していることから、灯明具のひとつであろう。2013は径6.3cmの環状の身部に把手がついたもので、紐通しの孔があいている。用途については不明。2014は加工部材。2015は刃物の柄。2016は柄杓の部品。ふたつある孔のうち下位の孔は木片を詰めている。2017は櫛。

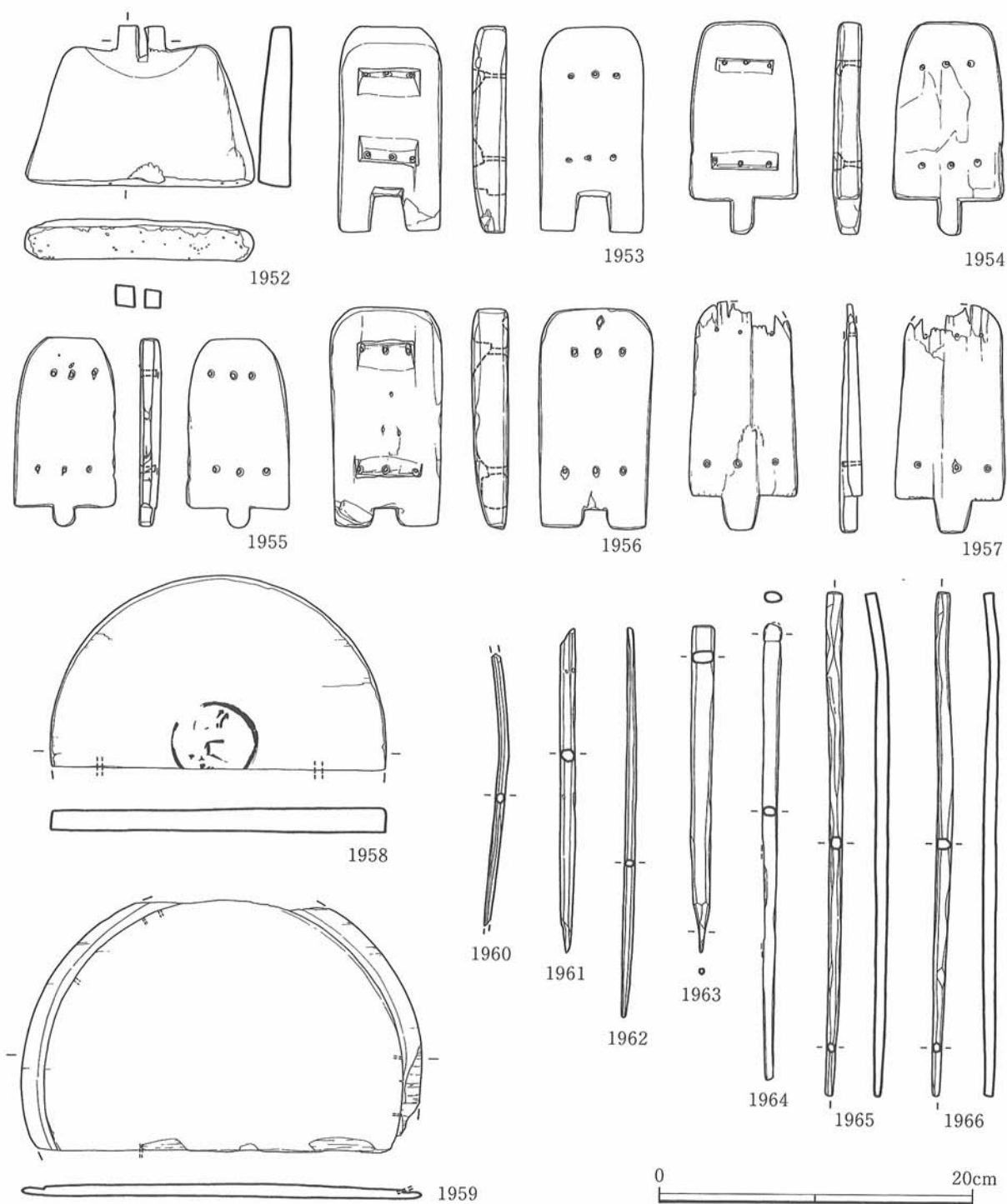
2018～2023は漆椀。2018は腰丸椀。2019～2021は一文字腰椀。2018は銀発色の蒔絵で文様を描く。2019も銀発色の蒔絵文様で杉と草を描く。2020は見込中央に穿孔があり、他に転用されたとみられる。2021は口縁部端、2022は口縁部とつまみ部端が赤漆で他は内外黒漆。

SK549 (第214図 図版160)

2024は四角の削板に縁を四方に木釘で組み合わせたもので、折敷の可能性もある。一辺29.2～



第207图 1-SK532出土木製品①(1/4)



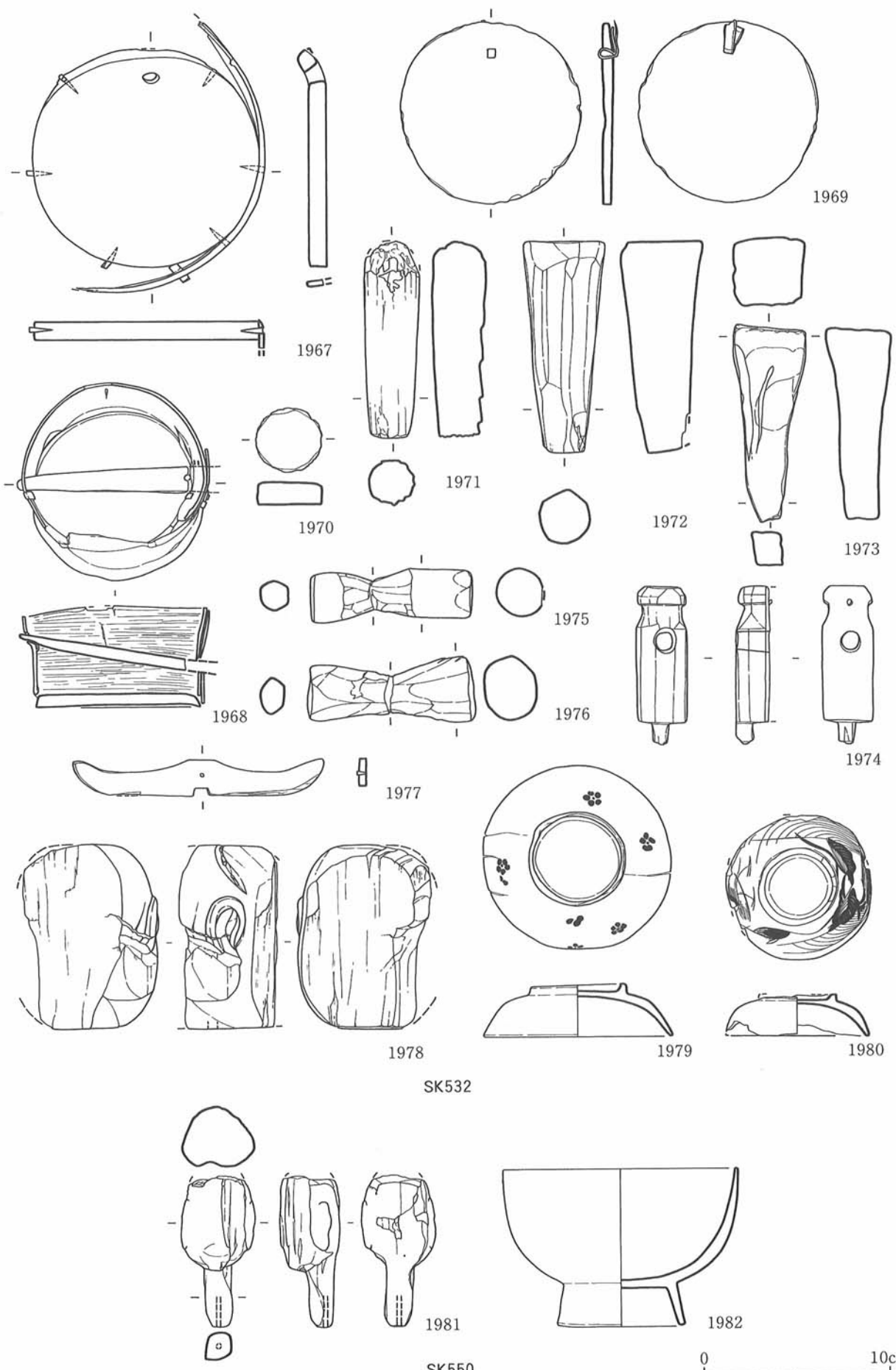
第208図 1-SK532出土木製品②(1/4)

29.4cm、高さ2.9cm。

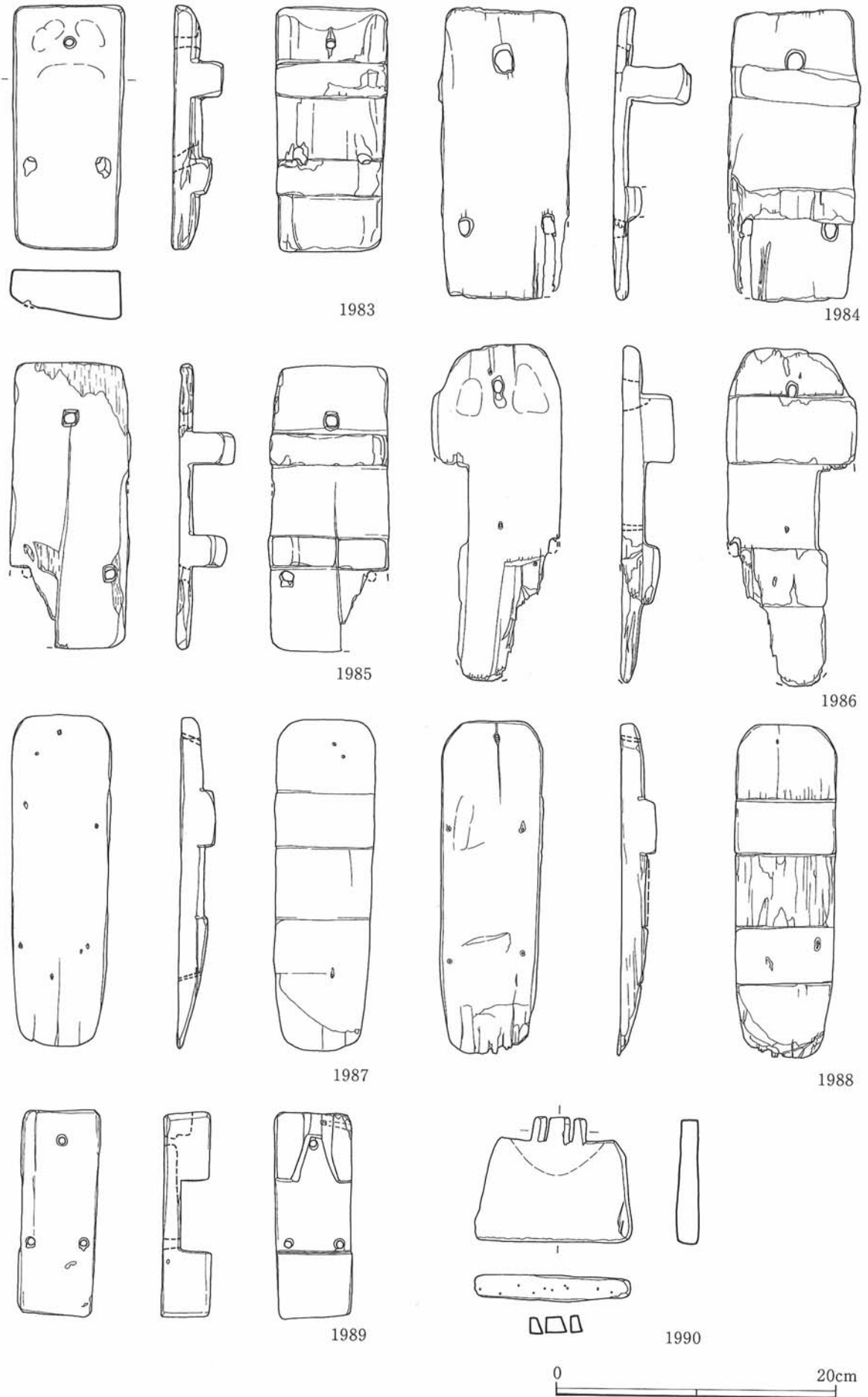
2 地区出土の木製品 (第200図 図版155)

出土点数は35点で、いずれも土坑出土ではなく、町屋の堀側に堆積した17世紀後半から18世紀にかけてのシルト質細砂層から出土したものである。

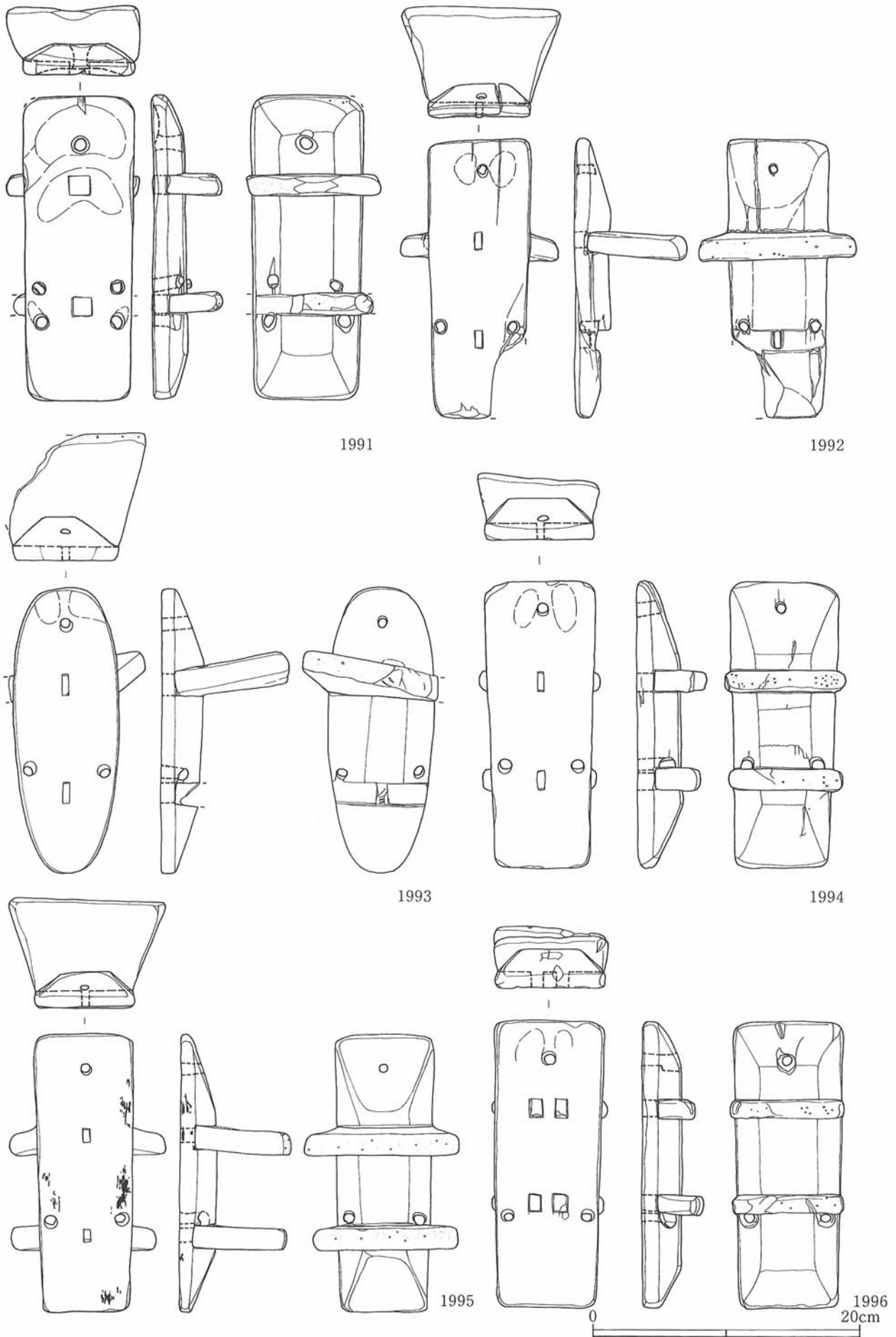
1867は人形頭部。丁寧なつくりで頭髪を植え込む孔はない。基部の底面に浅い小孔がある。1868は舟形木製品とみられる破片。1869は櫛で、歯より基部が厚い。



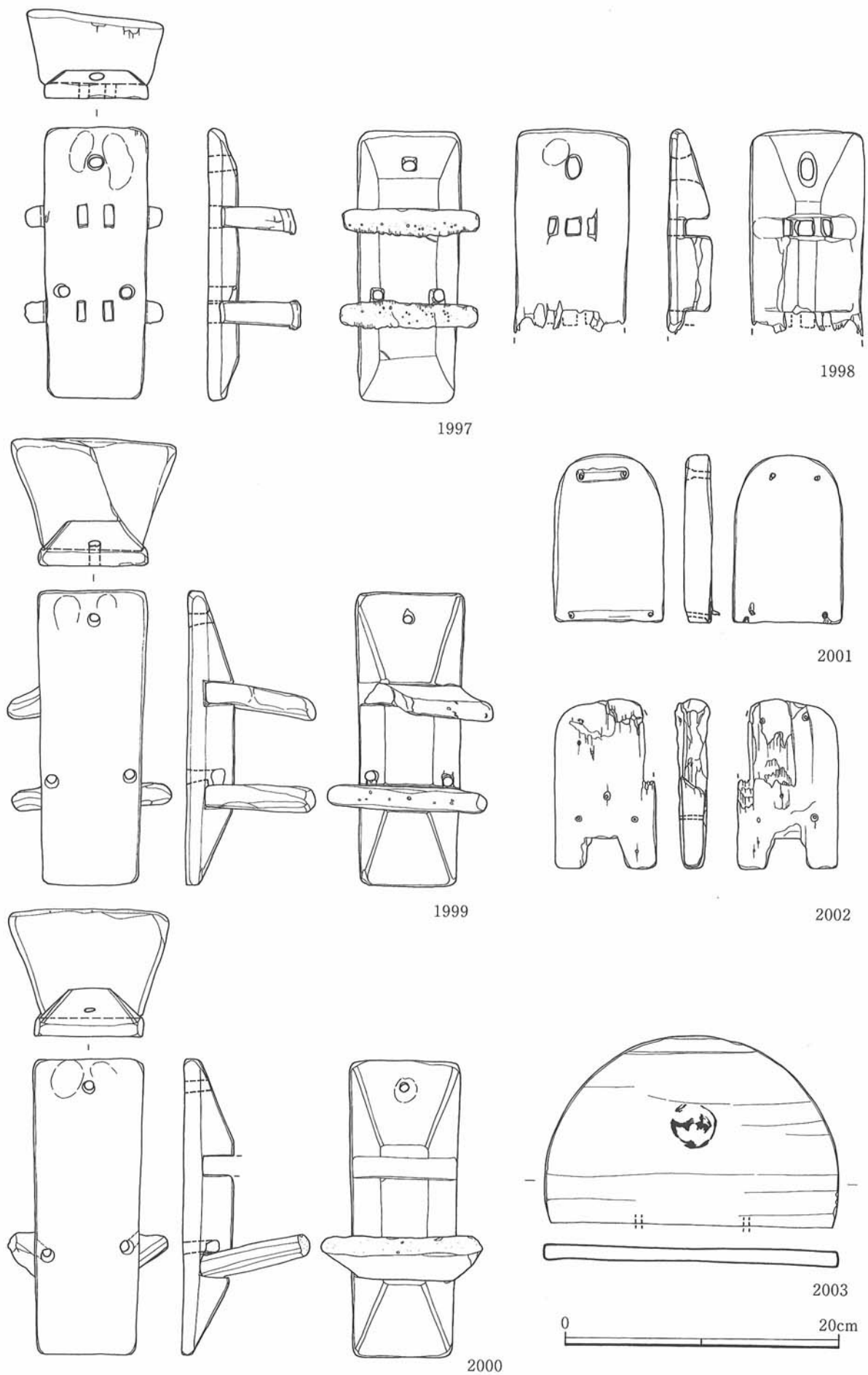
第209图 1-SK532③·SK550出土木製品(1/3)



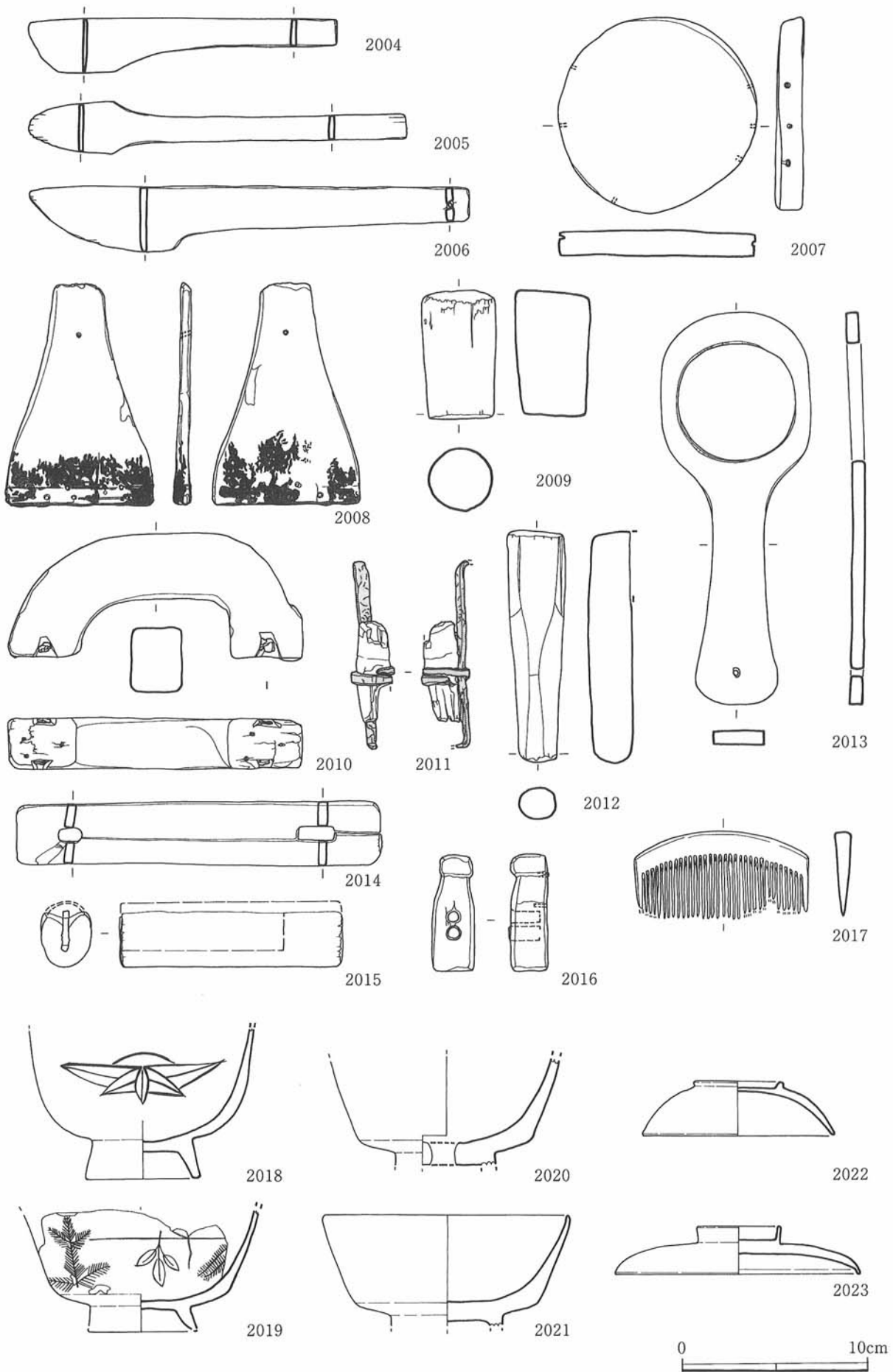
第210図 1-SK555出土木製品①(1/4)



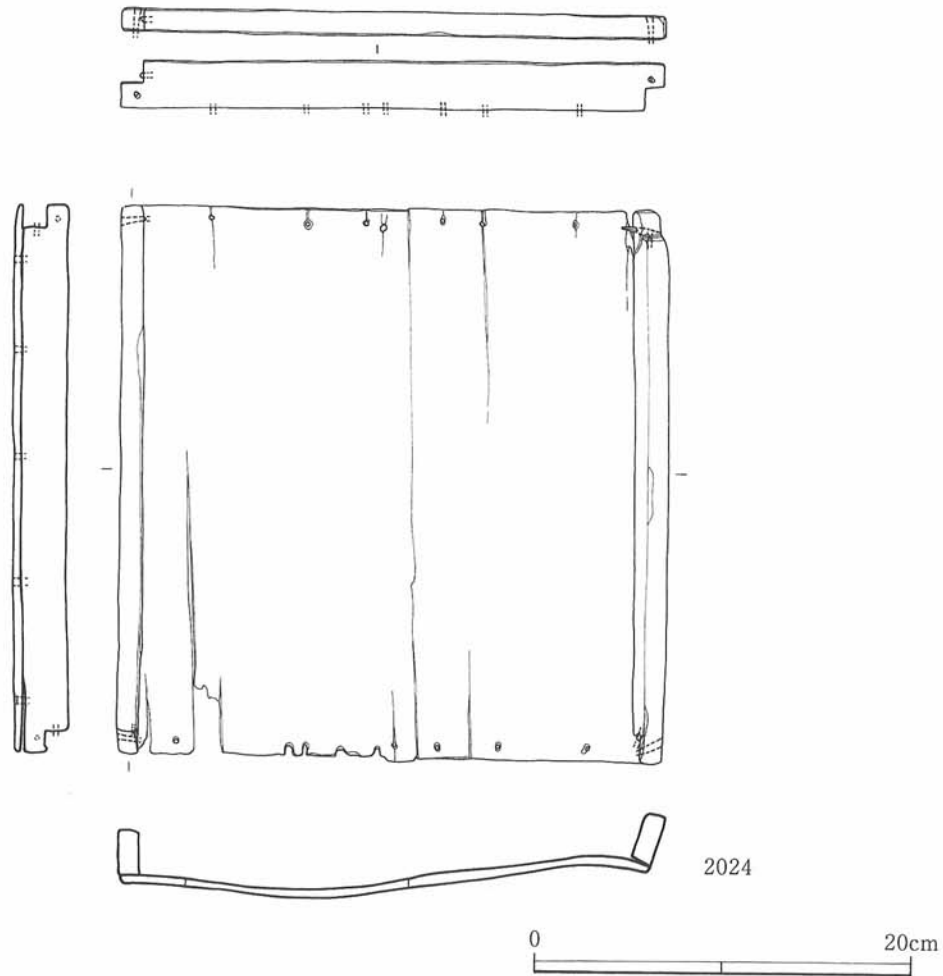
第211图 1-SK555出土木製品②(1/4)



第212図 1-SK555出土木製品③(1/4)



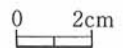
第213图 1-SK555出土木製品④(1/3)



第214図 1-SK549出土木製品(1/4)

3 地区出土の木製品 (第215図 図版160)

3 地区からは土坑出土の木製品はなく、2 地区と同様、堀側への堆積層などから210点が出土した。このうち2025は3-C区の石垣7より東側で検出された焼土層から出土した木製品である。全体的に炭化しているが、形態から算盤玉と判断したい。



第215図 3 地区
出土木製品
(1/2)

第9表 下駄一覧

単位：cm *：残存値

遺物番号	押印番号	図版番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅(歯含む)	幅(台部)	高さ(前歯)	高さ(中歯)	高さ(後歯)	台部厚さ	樹種	備考
1802	195	147	1-D	SK80	下駄(一木・連歯)	19.6	8.8-8.3	8.1	4.7		3.7	1.0-0.8		植物繊維付着
1803	195	147	1-D	SK80	下駄(一木・割り)	22.9	9.2-8.0	8.6-8.1	4.1	3.3	2.5	1.5-1.3		漆下地の痕跡あり
1804	195	147	1-D	SK80	下駄(一木・連歯)	18.9	8.4-8.3	7.6	4.5		3.4	1.0-0.8		植物繊維付着
1805	195	147	1-D	SK80	下駄(一木・連歯)	23.5	8.2		2.0		1.6	1.2		右足用か かかと側に沈線で文様
1806	195		1-D	SK80	下駄(一木・割り)	22.4	8.0-4.8		2.7	2.3	1.4	1.2		右足用か
1837	197	148	1-D	SK92	下駄(一木・割り)	22.5	8.8	8.6	3.2		2.1	1.4		
1838	197		1-D	SK92	下駄(一木・割りか)	22.4	*8.5				3.2	1.8-1.3		
1839	197		1-D	SK92	下駄(一木・割り)	21.2	8.4-6.4	8.0-7.7	2.6	2.4	2.0	1.2-1.1		
1840	197	148	1-D	SK92	下駄(一木・連歯)	21.2	8.7-8.6	8.5-8.2	3.1		2.9	1.3-1.1		
1841	197	149	1-D	SK92	下駄(差歯・露卯)	16.5	7.6-7.2	5.7	5.5		5.5	2.2		植物繊維付着
1842	197	148	1-D	SK92	下駄(差歯・露卯)	21.1		7.5-6.6				2.8		漆塗 差歯無し
1843	197	148	1-D	SK92	下駄(無歯)	21.0		7.7-6.7				1.2		目釘8箇所 無歯下駄の表台か
1844	197	149	1-D	SK92	下駄(無歯)	20.9	7.4-7.2		1.5		1.3	1.2-1.1	アスナロ属	
1845	198	149	1-D	SK92	下駄(一木・連歯)	13.9	6.4-6.3	5.7-5.3	3.4		3.2	1.0-0.8		子供用

単位：cm *：残存値

遺物番号	拝固番号	団坂番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅(歯含む)	幅(台部)	高さ(前歯)	高さ(中歯)	高さ(後歯)	台部厚さ	樹種	備考
1848	198	149	1-D	SK92	下駄(中折れ)	12.4		5.9				1.2		漆塗の痕跡
1849	198	149	1-D	SK92	下駄(中折れ)	13.9		7.3				1.7	アスナロ属	
1850	198	149	1-D	SK92	下駄(中折れ)	12.0		5.9				1.3		下地痕跡あり 黒漆塗
1851	198	149	1-D	SK92	下駄(中折れ)	12.0		6.9				1.6~1.2	アスナロ属	
1870	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	22.8	8.7~7.5		3.0		2.0	1.1	スギ	
1871	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	24.6	7.9		2.5	1.9	1.4	1.2~1.1	ヒノキ属	
1872	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・連歯)	19.8	9.5~9.2	9.0~8.7	3.7		3.1	1.2	スギ	
1873	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	24.0	8.3~6.5	8.2~7.6	3.1	2.5	1.4	1.3~0.9	カツラ	漆塗の痕跡
1874	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	21.1	7.3~5.9		4.1	4.1	4.3	1.6		
1875	201	151	1-K	SK277	下駄(一木・連歯)	21.9	7.8	7.5~6.8	欠	1.9	2.6	1.3	アスナロ属	釘あり 右足用か
1876	201	151	1-K	SK277	下駄(差歯・陰卯)	16.5	9.9	7.5~6.7	6.7		6.9	3.1	本体ヒノキ・歯カツラ	台部は漆塗、歯は不明 右足用
1877	202	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	16.1	5.9		3.1		1.7	1.6	アスナロ属	子供用
1878	202	151	1-K	SK277	下駄(一木・側り)	14.5	5.8		2.7	2.5	2.7	0.8	チシャノキ属	子供用
1879	202		1-K	SK277	下駄(中折れ)	11.4		6.3~5.6				1.4~1.8		
1880	202	152	1-K	SK277	下駄(中折れ)	11.9		7.0				1.8	アスナロ属	釘あり
1881	202	152	1-K	SK277	下駄(中折れ)	11.1		7.0				1.7~1.1	アスナロ属	釘あり
1901	204	153	1-J	SK293	下駄(一木・側り)	22.5	7.1		2.8	2.2	1.4	1.1	チシャノキ属	
1902	204	153	1-J	SK293	下駄(一木・側り)	23.0	8.3		3.4		2.4	1.0	クロベ	
1903	204	153	1-J	SK293	下駄(一木・側り)	16.9	6.6~6.4		3.3	2.9	2.9	1.6~1.4	マツ属(二葉松類)	下地の痕跡あり
1904	204	153	1-J	SK293	下駄(一木・側り)	16.2	5.8		1.9	1.7	1.7	0.6~0.4	マツ属(二葉松類)	
1905	204	153	1-J	SK293	下駄(差歯・陰卯)	21.4		8.1~7.2				3.6	ヒノキ属	漆塗の痕跡あり
1906	204	153	1-J	SK293	下駄(差歯・陰卯)	21.6		8.0~6.8				3.4	ヒノキ属	下地の痕跡あり 右足用
1907	204	153	1-J	SK293	下駄(一木・側り)	14.4	5.2~4.9		2.9		2.7	1.0~0.8		子供用
1908	204		1-J	SK293	下駄(一木・側り)	13.9	5.9~4.8		2.2		1.6	0.7		子供用
1909	204	154	1-J	SK293	下駄(中折れ)	11.7		7.1				2.5	ヒノキ属	
1910	204	154	1-J	SK293	下駄(中折れ)	13.3		7.5				1.1	サクラ属	釘あり
1911	205	154	1-J	SK293	下駄(差歯・露卯)	22.7	9.1	7.9	6.4		5.9	3.8	モクレン属	下地の痕跡あり
1912	205	154	1-J	SK293	下駄(差歯・露卯)	23.2	8.7	7.3	5.9		5.3	2.5	本体クリ・歯シキミ	漆塗の痕跡
1913	205	154	1-J	SK293	下駄(差歯・露卯)	21.1	8.2	7.6~6.7	4.5		3.3	2.6	本体ヒノキ・歯カツラ	前歯に台部への装着痕あり 他の歯を転用か 釘あり
1944	207	156	1-Y	SK532	下駄(一木・側り)	*20.9	9.4		3.4		3.0	1.0	ヒノキ属	
1945	207	156	1-Y	SK532	下駄(一木・側り)	21.8	8.4		2.8		2.2	1.2	スギ	
1946	207	156	1-Y	SK532	下駄(差歯・露卯)	20.6	*8.1	7.3~6.7	欠		9.0	2.5	モミ属	
1947	207		1-Y	SK532	下駄(差歯・露卯)	21.3	*8.5	7.8~6.9	3.3		欠	3.0		下地痕あり
1948	207	156	1-Y	SK532	下駄(差歯・露卯)	21.1	7.0		欠		欠	*1.6	ヒノキ属	
1949	207	156	1-Y	SK532	下駄(無眼)	17.9	6.4					1.5	アスナロ属	目釘10カ所 墨書有り
1950	207	156	1-Y	SK532	下駄(一木・側り)	16.8	7.4	6.6	2.9		2.7	1.6		
1951	207	156	1-Y	SK532	下駄(一木・連歯)	15.4	6.6		4.0		3.8	1.3	ヒノキ	切断して子供用の下駄に転用
1952	208		1-Y	SK532	下駄(露卯)の歯									二又の柄 台部の圧痕残る
1953	208	156	1-Y	SK532	下駄(中折れ)	13.2		6.6				2.2	アスナロ属	
1954	208	157	1-Y	SK532	下駄(中折れ)	13.5		6.9				1.5	アスナロ属	
1955	208	157	1-Y	SK532	下駄(中折れ)	12.0		6.5				1.2~0.5	ヒノキ属	
1956	208	156	1-Y	SK532	下駄(中折れ)	14.0		7.1				2.1	ヒノキ属	
1957	208	157	1-Y	SK532	下駄(中折れ)	*14.5		6.5~6.1				0.9~0.6	スギ	
1983	210	158	1-Z	SK555	下駄(一木・連歯)	17.3	7.9~7.3		3.5		2.7	1.8	ヒノキ属	左足用か
1984	210		1-Z	SK555	下駄(一木・連歯)	20.7	9.2	9.1	5.3		*2.0	1.0		
1985	210	158	1-Z	SK555	下駄(一木・連歯)	20.3	8.5	8.4	4.0		3.5	0.9	サカキ	
1986	210		1-Z	SK555	下駄(一木・連歯)	24.0	9.2~*6.0	*6.5	3.2		2.8	1.6~1.3		右足用か
1987	210	158	1-Z	SK555	下駄(無眼)	23.6	7.0~5.5		2.5		2.6	1.7	アスナロ属	目釘8カ所
1988	210	158	1-Z	SK555	下駄(無眼)	23.6	7.0		2.7		2.1	1.7	ヒノキ属	目釘5カ所
1989	210	158	1-Z	SK555	下駄(一木・側り)	14.6	5.5		3.2		3.4	1.2	ヒノキ属	子供用
1990	210		1-Z	SK555	下駄(露卯)の歯									3又の柄 台部の圧痕残る
1991	211	158	1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	22.7	9.9	8.4~7.5	5.2		5.2	2.3	本体ヒノキ・歯モミ属	左足用
1992	211		1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	20.8	11.8	7.6	8.4		欠	2.7		漆塗の痕跡 露卯差歯を陰卯差歯に換えた可能性あり
1993	211		1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	21.2	*10.2	8.0	9.6		欠	3.2		漆塗 右足用
1994	211	158	1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	21.4	9.0~8.5	8.1~7.1	5.3		4.7	3.2	本体ヒノキ・歯カツラ	下地の痕あり
1995	211	158	1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	20.7	11.7	7.4~6.5	8.4		8.1	2.8	本体ヒノキ・歯カツラ	漆片残る
1996	211	159	1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	21.3	8.5	7.9	3.9		4.6	2.9	本体アスナロ属・歯トリネコ属	
1997	212	159	1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	19.7	10.1~10.0	7.35	6.8		7.2	2.2	アスナロ属	
1998	212		1-Z	SK555	下駄(差歯・露卯)	*10.45		8.3	欠		欠	3.2		柄穴数3
1999	212	159	1-Z	SK555	下駄(差歯・陰卯)	21.3	11.7	8.0~7.0	9.4		9.4	3.4	本体ヒノキ・歯カツラ	下地の痕あり
2000	212		1-Z	SK555	下駄(差歯・陰卯)	21.5	11.7	8.0~7.2	欠		9.3	3.7		漆塗り 右足用
2001	212	159	1-Z	SK555	下駄(中折れか)	12.3		8.0				2.0	ヒノキ属	
2002	212	159	1-Z	SK555	下駄(中折れ)	12.3		7.4				2.1	ヒノキ属	

第10表 漆椀一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	木製品	口径	器高	底径	つまみ径	樹種	備考
1827	196		1-D	SK80	漆椀蓋	6.1	2.6		4.2		外黒 内赤 丸紋赤三カ所「七宝崩しに井筒」
1828	196	148	1-D	SK80	漆椀蓋	10.3	3.6		5.6		外赤黒 内赤 家紋三カ所「五枚笹」か 口縁部にくぼみ高台に孔 転用か
1829	196	148	1-D	SK80	漆椀蓋	(10.5)	3.3		5.0		外赤黒 内赤 丸紋黒
1830	196	148	1-D	SK80	漆椀蓋				5.6		外黒 内赤 丸紋黒「片喰」
1831	196		1-D	SK80	漆椀蓋				6.1		外黒 内赤 丸紋黄色(発色は白色)「橋」か
1832	196	148	1-D	SK80	漆椀蓋	10.6	3.6		5.0		外赤黒 内赤 「一」紋赤
1833	196	147	1-D	SK80	漆椀			6.5		トチノキ	外黒 内赤 外面の絵赤 孔のある竹材を通す
1834	196		1-D	SK80	漆椀	(13.0)	4.3	(5.8)			外黒 内赤 丸紋赤「木瓜」か
1835	196		1-D	SK80	漆椀	(13.0)		(6.4)			外黒 内黒
1836	196	148	1-D	SK80	漆椀		*5.3	(6.4)			外赤 内赤
1862	199	150	1-D	SK92	漆椀蓋	(12.0)	2.7		4.3		外赤黒 内赤 外面の絵赤「松・鶴・亀」
1863	199	150	1-D	SK92	漆椀					トチノキ	外赤黒 内赤 丸紋黄色(白色に発色)「遠い鷹の羽」
1864	199	150	1-D	SK92	漆椀	13.3	(4.4)	6.1			外赤黒 内赤黒 内面に墨?付着
1865	199	150	1-D	SK92	漆椀蓋	9.7	2.7		4.7		外黒 内赤 外面の絵赤「杉」内面に墨か漆の刷毛痕か
1866	199	150	1-D	SK92	漆椀		*8.0	5.6			外赤黒 内赤 絵赤
1886	203	153	1-K	SK277	漆椀	(12.8)	6.3	(5.4)		ケヤキ	外黒 内黒 外面の絵赤「楓」
1887	203	152	1-K	SK277	漆椀	(12.2)	7.9	5.0		トチノキ	外黒 内赤 丸紋赤
1888	203		1-K	SK277	漆椀	(11.4)	6.7	5.4			外赤黒 内赤黒
1889	203		1-K	SK277	漆椀	12.0	5.2	6.0			外赤黒 内赤
1890	203	152	1-K	SK277	漆椀	13.0	8.0	6.2		トチノキ	外赤 内赤 口縁端黒漆
1891	203	152	1-K	SK277	漆椀			5.4		モクレン属	外黒 内赤 高台内に赤漆による文字
1892	203		1-K	SK277	漆椀	12.7	6.8	5.6			外黒 内赤 高台内、口縁端に黒漆
1893	203	153	1-K	SK277	漆椀	11.7	4.9	6.0		トチノキ	外黒 内赤 外面の絵赤「松」
1894	203	152	1-K	SK277	漆椀	10.4	4.0	5.2		トチノキ	外黒 内赤 外面の絵赤「松・杉」内容物付着の痕跡
1895	203	153	1-K	SK277	漆椀		*3.2	(5.6)		トチノキ	外赤 内赤 丸紋黒「三木花角」か 三カ所
1896	203		1-K	SK277	漆椀蓋				5.0		外赤黒 内赤 丸紋黄色「隅立て井筒」
1897	203		1-K	SK277	漆椀蓋	(10.4)	2.5		5.0		外赤黒 内赤黒
1898	203	152	1-K	SK277	漆椀蓋	13.2	2.8		5.0	トチノキ	外赤 内赤 口縁端、つまみ上端部に黒漆
1899	203	152	1-K	SK277	漆椀蓋	11.4			(5.0)	ケヤキ	外黒 内黒 外面の蒔絵「円文」(金襴粉)
1933	206	155	1-J	SK293	漆椀		*7.3	(6.4)		トチノキ	外黒 内赤 外面蒔絵「鶴・亀」高台内赤漆による文字(不明瞭)
1934	206		1-J	SK293	漆椀	(12.8)					外黒 内赤 外面の絵赤「松」
1935	206		1-J	SK293	漆椀			(5.6)			外黒 内赤 丸紋赤「二つ引き」
1936	206	155	1-J	SK293	漆椀		5.1			トチノキ	外黒 内赤 高台内赤漆による文字
1937	206		1-J	SK293	漆椀	(12.4)	4.6	6.0			外黒 内黒 赤文「一」
1938	206	155	1-J	SK293	漆椀	(12.6)	5.8	6.2		ケヤキ	外黒 内黒
1939	206		1-J	SK293	漆椀蓋	(14.0)	3.2		5.5		外赤 内赤 つまみ内に釘書き文
1940	206		1-J	SK293	漆椀蓋	9.5	3.0		4.8		外赤黒 内赤黒
1941	206		1-J	SK293	漆椀蓋				(5.2)		外黒 内赤 丸紋黄色「抱き沢瀉」
1942	206	155	1-J	SK293	漆椀	(13.8)	4.8	(6.4)		カツラ	外黒 内赤 丸紋赤「抱きみょうが」か
1943	206		1-J	SK293	漆椀	(10.2)	5.3	5.8			外黒 内赤
1979	209	157	1-Y	SK532	漆椀蓋	(10.2)	2.8		5.2	カツラ	外黒 内赤 外面の絵赤・金(金地に赤)「梅」
1980	209	157	1-Y	SK532	漆椀蓋	(7.7)	2.3		(4.2)	トチノキ	外黒 内赤 蒔絵銀「松・鶴・亀」
1982	209		1-Y	SK550	漆椀	(12.6)	8.5	6.9			外黒 内黒
2018	213		1-Z	SK555	漆椀	*12.1	*8.0	(6.2)			外黒 内黒 蒔絵銀三カ所
2019	213	160	1-Z	SK555	漆椀		*6.5	*5.9		ケヤキ	外赤黒 内赤黒 蒔絵銀「杉・草」
2020	213	160	1-Z	SK555	漆椀		*5.7			サカキ	外赤 内赤 底部に孔あり
2021	213	160	1-Z	SK555	漆椀	(13.4)	*6.0			カツラ	外黒 内黒 口縁端部赤
2022	213	160	1-Z	SK555	漆椀蓋	(10.4)	3.0		4.9	トチノキ	外黒 内黒 つまみ部端と口縁端赤
2023	213	160	1-Z	SK555	漆椀蓋	13.5	2.6		(4.6)	ニレ属	外黒 内黒

第11表 その他の木製品一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	編年番号	図版番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅	厚さ	樹種	備考
1807	195		1-D	SK80	加工木材	16.4	8.8(最大)	8.5(最大)		ほぞ部分幅5.8-6.1 厚さ2.8-3.1
1808	195	147	1-D	SK80	盤(一木)	25.4	3.2	9.7	ケヤキ	
1809	195		1-D	SK80	桶の底板	19.3-19.2(径)		1.1-0.9		半円形の2枚の板を木釘で接合
1810	195		1-D	SK80	加工木材	35.8	7.9	1.4-1.2		穴径(長)7.2(短)1.7 釘穴3カ所
1811	195		1-D	SK80	加工木材	14.7	9.0	本体1.9 蓋込部1.2		
1812	196		1-D	SK80	曲物の底板	10.0-9.2(径)		1.0		木釘痕4カ所
1813	196	147	1-D	SK80	鐙	8.2-8.0		0.6	アスナロ属	孔径2.8-1.5
1814	196		1-D	SK80	栓	6.5	上3.7-3.0F2.1-1.9			
1815	196		1-D	SK80	栓	3.9	上2.8-2.7F2.0			
1816	196		1-D	SK80	加工木材	2.8(径)	孔径0.5	1.6		
1817	196		1-D	SK80	加工木材	3.9-3.7(径)	孔径0.2	0.4		
1818	196		1-D	SK80	加工木材	5.0-4.8(径)	孔径1.4-1.3	1.2-1.1		
1819	196	147	1-D	SK80	箸	19.1	0.6	0.5		
1820	196	147	1-D	SK80	箸	19.5	0.7	0.5		
1821	196		1-D	SK80	刷毛	12.2				
1822	196	147	1-D	SK80	刷毛	11.5	身*8.8 柄7.8-4.4	7.8-6.2	アスナロ属	
1823	196		1-D	SK80	櫛	*4.5	5.0	0.9		漆塗か
1824	196		1-D	SK80	加工木材	8.1	3.3	0.6-0.4		
1825	196		1-D	SK80	加工木材	6.9-6.8(径)	孔径0.5-0.4	1.0		
1826	196	147	1-D	SK80	和傘部材	5.4	5.3	(内径)2.2	タケ重属	ろくろ
1846	198		1-D	SK92	把手	28.2	4.6	1.2		
1847	198	150	1-D	SK92	羽子板	*18.4	身7.6(最大) 柄1.4	身1.2-0.4 柄0.7		柄一部欠損・下地の痕跡あり
1852	198		1-D	SK92	曲物の板	13.2(径)	孔径0.8	1.0		木釘痕7カ所・全面に下地の痕跡あり
1853	198		1-D	SK92	加工木材	20.5	7.0	2.8-2.6		
1854	198		1-D	SK92	加工木材	*37.6	2.3	2.3		
1855	198	150	1-D	SK92	加工木材		6.1(最大)	1.5-0.8	アスナロ属	
1856	199	149	1-D	SK92	柄	14.8	3.3	0.9		全体に紋皮を貼る?
1857	199	150	1-D	SK92	鐙	8.2(径)	孔径3.0-1.0	0.7		
1858	199		1-D	SK92	加工木材	11.5	3.7	2.3~*1.3		
1859	199	149	1-D	SK92	櫛	9.1	4.3	0.7		下地の痕跡あり
1860	199	150	1-D	SK92	符祺駒	3.1	2.5	0.7-0.6		文字は不明
1861	199		1-D	SK92	加工木材	21.9	1.9-1.1	1.0-1.2		
1867	200	155	2-B	3面整地層	人形頭部	10.9	5.7	5.4-3.9(柄長)		
1868	200	155	2-X	シルト層	舟形		2.7	1.3(高さ)	スギ	
1869	200	155	2-G	シルト層	櫛	8.9	4.3	0.9	イスノキ	
1882	203	152	1-K	SK277	人形頭部	*10.8	*6.1	4.0~*1.9(柄長)	ヒノキ属	
1883	203		1-K	SK277	加工木材	8.6(身3.6 柄5.0)	身3.4 柄2.4	身2.3 柄0.7		
1884	203	152	1-K	SK277	加工木材	12.5	5.6	1.1	ヒノキ属	
1885	203		1-K	SK277	加工木材	3.0-3.1(径)	0.5-0.6(孔径)	2.1		
1900		152	1-K	SK277	シュロボウキ	*27.0	20.0	1.7	シュロ	
1914	205	154	1-J	SK293	竹製掛花生	33.5	8.8-8.4	7.5-6.3	タケ	
1915	205	155	1-J	SK293	栓	8.1	上3.1-2.8F2.3		ヒノキ属	
1916	205	155	1-J	SK293	栓	5.6	上3.0-2.7F2.2-2		ヒノキ属	
1917	205	155	1-J	SK293	栓	5.4	上3.0-2.6F2.8-2.1		ヒノキ属	
1918	205	155	1-J	SK293	柄	11.3	3.1	1.9	スギ	
1919	205	154	1-J	SK293	木札	7.4	4.6	1.7	モクレン属	「玉」の刻書
1920	205	155	1-J	SK293	舟形			1.9(高さ)	スギ	
1921	205	155	1-J	SK293	舟形	15.1	3.3	2.0		
1922	206		1-J	SK293	曲物の底板	9.8-9.2(径)		1.1		木釘痕4カ所
1923	206		1-J	SK293	曲物	12.2-11.7(径)	0.9(孔径)	0.7-0.5		木釘痕6カ所
1924	206	154	1-J	SK293	把手	21.1	3.8	1.7	ヒノキ属	
1925	206	154	1-J	SK293	篋	11.0	1.7-0.8	0.2	ヒノキ属	
1926	206	154	1-J	SK293	篋	19.0	3.1-1.9	0.5	ヒノキ属	
1927	206	154	1-J	SK293	篋	20.3	3.8-2.7	0.5	ヒノキ属	下地の痕跡あり
1928	206	154	1-J	SK293	篋	23.2	4.0-2.5	0.5-0.3	ヒノキ属	
1929	206	154	1-J	SK293	箸	21.3	0.6	0.4	クロベ	
1930	206	154	1-J	SK293	箸	21.9	0.7	0.7	クロベ	
1931	206	154	1-J	SK293	箸	18.4	0.5	0.3	クロベ	
1932	206	154	1-J	SK293	箸	19.7	0.9	0.6	クロベ	
1958	208	157	1-Y	SK532	円板	21.3(径)		1.5-1.2	スギ	焼き印有り・木釘残る

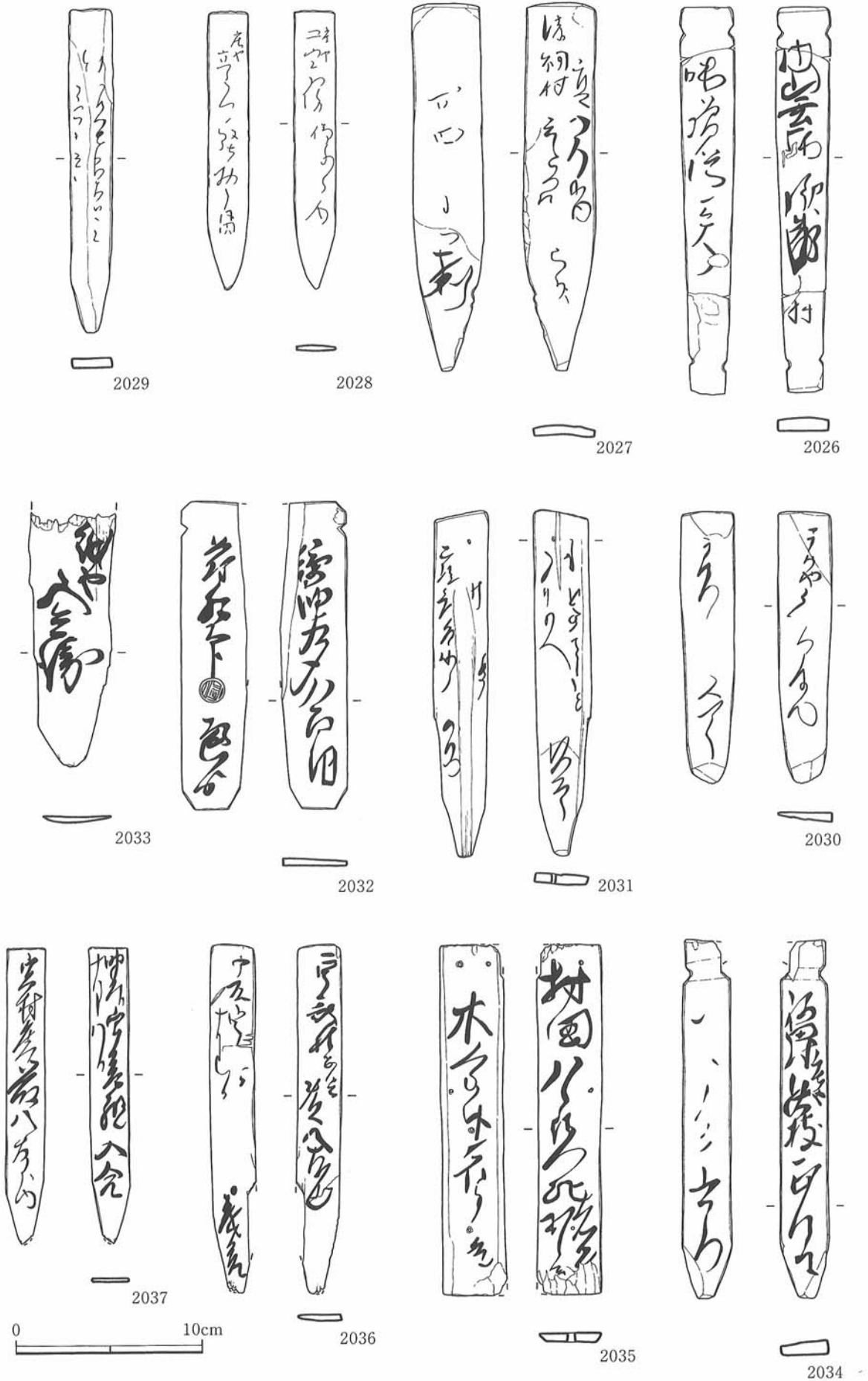
単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	採掘番号	図版番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅	厚さ	樹種	備考
1959	208		1-Y	SK532	円板	25.9(径)	0.8			下地の痕跡あり・木釘あり
1960	208		1-Y	SK532	箸	*17.4	0.6	0.6		
1961	208		1-Y	SK532	箸	20.7	0.9	0.7		
1962	208		1-Y	SK532	箸	24.9	0.6	0.4		
1963	208		1-Y	SK532	加工木片	20.9	1.4	0.9		
1964	208		1-Y	SK532	箸	29.1	1.1~0.5	0.7		
1965	208	157	1-Y	SK532	箸箸	32.1	1.0	0.8	ヒノキ属	
1966	208	157	1-Y	SK532	箸箸	32.1	0.9	0.8	ヒノキ属	
1967	209		1-Y	SK532	曲物	(12.6)(側板込み)		1.0(板の部分のみ)		木釘6カ所 漆の下地痕あり 樹皮残る
1968	209	157	1-Y	SK532	柄杓	10.0(径)		5.3(高さ)	ヒノキ属	
1969	209		1-Y	SK532	加工木材	9.7(径)		0.6~0.4		
1970	209		1-Y	SK532	曲物	3.6~3.5(径)		1.2		
1971	209		1-Y	SK532	栓	10.6	上3.0下2.2			
1972	209	157	1-Y	SK532	栓	11.4	上4.4下2.2		スギ	
1973	209		1-Y	SK532	栓	10.7	上3.9下1.6			
1974	209	157	1-Y	SK532	柄杓	8.5	2.8	*1.8	ヒノキ属	全体を漆塗り、一部ホゾ穴などが漆なし
1975	209	157	1-Y	SK532	樋の子	8.7	2.6~1.6		ツバキ属	
1976	209	157	1-Y	SK532	樋の子	9.1	3.4~1.9	2.8~1.3	ツバキ属	
1977	209		1-Y	SK532	加工木材	13.6	2.0	0.5		木釘あり
1978	209	157	1-Y	SK532	人形頭部	10.0	*7.4		ヒノキ属	
1981	209		1-Y	SK550	人形頭部	*8.1	4.0	3.1(柄長)1.3(柄幅)		
2003	212	159	1-Z	SK555	円板	21.3(径)		1.1	スギ	焼き印有り・木釘残る
2004	213		1-Z	SK555	篋	16.6	3.9~1.4	0.3~0.1		
2005	213	159	1-Z	SK555	篋	20.3	2.6~1.3	0.3	ヒノキ属	
2006	213	159	1-Z	SK555	篋	23.6	3.6~1.8	0.6~0.4	ヒノキ属	
2007	213		1-Z	SK555	曲物の底板	10.4(径)		1.4		黒漆の痕跡あり・目釘穴が左右に3カ所ずつ
2008	213	160	1-Z	SK555	刷毛	12.0	7.9	0.7~0.5	ヒノキ属	漆付着
2009	213		1-Z	SK555	栓	6.9	上4.0~3.7下3.5~3.4			
2010	213	160	1-Z	SK555	把手	15.8	3.5	2.8	ヒノキ属	漆の痕跡有り・板樹皮残る
2011	213	159	1-Z	SK555	灯明具か		2.6		タケ重属	鉄製品を装着 被熱痕
2012	213	160	1-Z	SK555	栓	12.5	上3.1~*2.1 下2.0~1.8			
2013	213	160	1-Z	SK555	加工木材	21.1	身8.0 柄4.4~2.8	0.8	ヒノキ属	孔径6.3
2014	213		1-Z	SK555	加工木材	19.7	3.5~3.2	0.6		
2015	213		1-Z	SK555	柄(刃物類)	11.9	*2.9	2.7		
2016	213	159	1-Z	SK555	柄杓	6.3	2.3	2.0	ヒノキ属	
2017	213	160	1-Z	SK555	櫛	9.4	4.7	0.9	イスノキ	
2024	214	160	1-Y	SK549	折敷	縦横29.2×29.4	高さ2.9	厚さ(底木)0.5(側木)1.2	ヒノキ属	側面1面欠
2025	214	160	3-C	焼土層	算盤玉	径1.7		0.8		熱により炭化

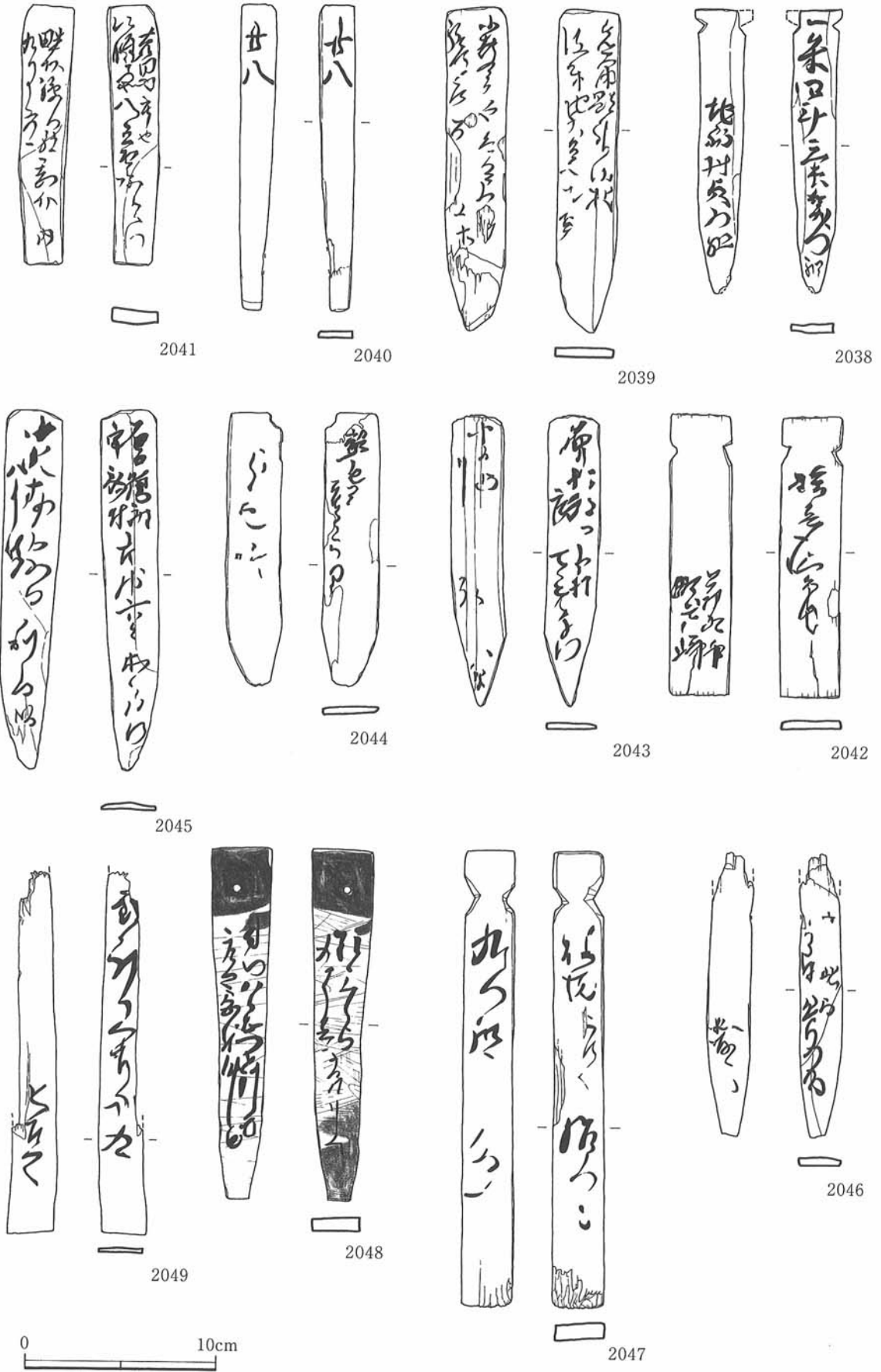
墨書木製品 (第216~219図 図版161~c164)

墨書が確認された木製品は93点である。このうちのほとんどが荷札木簡とみられるものである。また形態的には荷札であるが墨書が確認されていない木製品は64点あり、それらを含めると木簡は157点となる。これらのうち「長方形の材の一端を尖らせたもの」である051型式(木簡学会の分類)が157点中46点と最も多い。また遺構別では1-SK277、1-SK293、1-SK532からの出土数が多く、それぞれ24点、30点、24点確認されている。

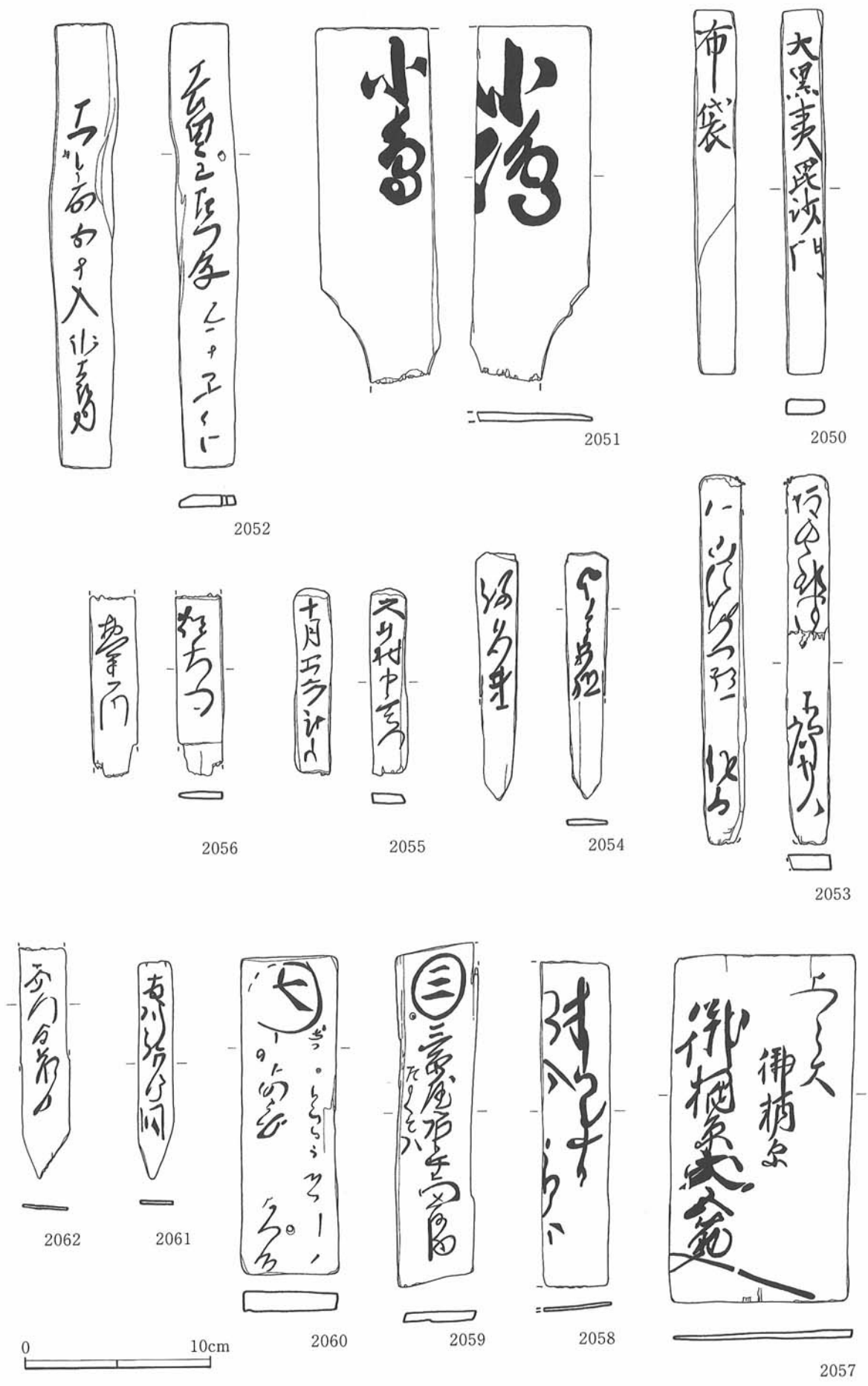
荷札には、商品名、数量、送り主、送り先などが記載されており、当時の物流を考える上で興味深い。荷札以外では、2051のように羽子板状の薄い板材のものや、2057は箱蓋に内容品を記した箱書きとみられる製品がある。また2050は「大黒夷毘沙門天」「布袋」の文字から、信仰にかかわる木札であろう。2063は渦巻き状の表現がされた記号または絵とみられる墨痕が認められた。



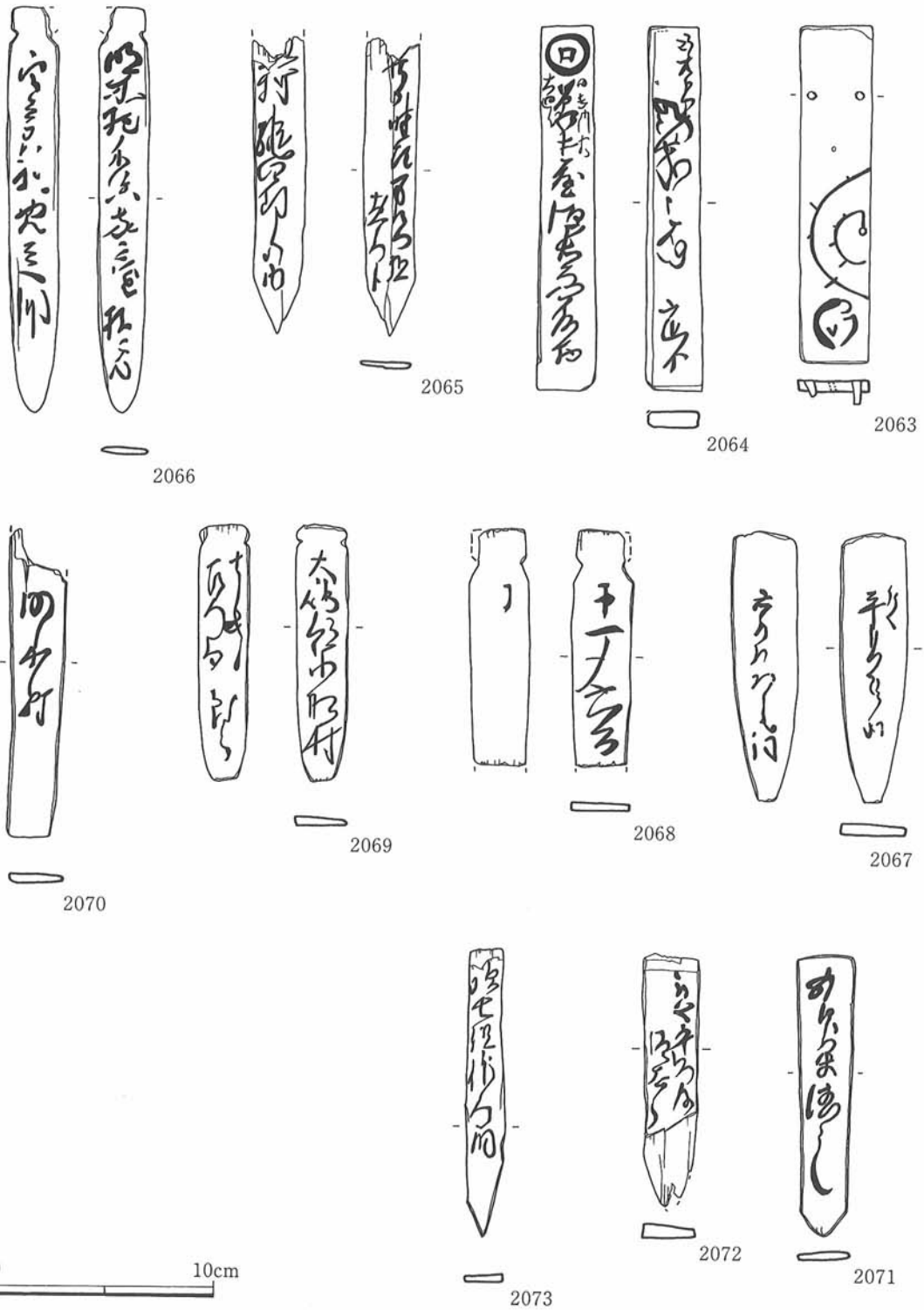
第216図 墨書木製品①(1/3)



第217図 墨書木製品②(1/3)



第218図 墨書木製品③(1/3)



第219図 墨書木製品④(1/3)

第12表 墨書木製品一覧

単位：cm ()：復元値 *：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅	厚さ	樹種	墨書	備考
2026	216	161	1-D	SK80	荷札	20.5	2.8	0.7		・「内山玄拾椽藩口孫右エ門」 ・「味増梅巻つ」	031型式・両面とも削り痕あり
2027	216	161	1-D	SK80	荷札	19.5	3.7	0.5		・「庄や八右衛存門/与左エ内/後畑村市郎左衛門組」 ・「□□(部カ)四□衛門才判」	051型式・表面粗い削り
2028	216	161	1-D	SK92	荷札	14.8	2.1	0.3		・「庄や/野口清左エ門存之内」 ・「庄や/立石経助右エ門存内」	051型式
2029	216	161	1-D	SK80	荷札	17.2	2.3	0.5		「□左エ門才判大□/□」	051型式
2030	216	161	1-D	SK92	荷札	14.4	2.9	0.5	スギ	・「庄や/□右エ門存内」 ・「庄や/□(新カ)二郎」	051型式・穿孔1カ所あり
2031	216	161	1-D	SK80	荷札	18.4	0.8~2.9	0.6	ツガ属	・「□五月□/太郎/□同人」 ・「□□/□□□」	051型式・穿孔1カ所あり
2032	216	161	1-J	SK293	荷札	16.4	3.4	0.4~0.3		・「鯨油九ノ(貫)八百目」 ・「苜於(又は相)印(焼印)通より」	032型式
2033	216	161	1-J	SK293	木簡	*13.5	4.6	0.3	ヒノキ属	紙や/五兵衛	059型式
2034	216	161	1-J	SK293	荷札	19.1	2.6	0.8~0.5	スギ	・「福田村/庄や/秋枝正右エ門殿」 ・「□□六右エ門」	033型式
2035	216	161	1-J	SK293	荷札	18.6	3.3	0.5	モミ属	・「村岡八左エ門□/□/□」 ・「本□」	011型式・穿孔5カ所あり
2036	216	161	1-J	SK293	荷札	18.6	2.4	0.4~0.2	ヒノキ属	・「宇部村庄や/藤口左衛門」 ・「宇□□/□□/十月八日」	051型式
2037	216	161	1-J	SK293	荷札	15.7	2.0	0.2	ヒノキ属	・「畔頭宇兵太郎入会/十月八日」 ・「宇田村庄や藤八太郎内」	051型式
2038	217	162	1-J	SK293	荷札	14.5	2.3	0.5	スギ	・「一米四斗三升喜右エ門組」 ・「地福村貞右エ門組」	033型式
2039	217	162	1-J	SK293	荷札	16.5	3.1	0.5	クロベ	・「先大津神田村/波(原カ)□」 ・「小都合庄屋□□/給領庄屋□□」	051型式
2040	217	162	1-J	SK293	木簡	15.6	1.9	0.4	ヒノキ属	・「廿八」 ・「廿八」	051型式
2041	217	162	1-J	SK293	荷札	13.2	2.6	0.8~0.4	ヒノキ属	・「吉田村庄屋/藤原八兵衛存□(内カ)」 ・「畔頭孫右エ門組基介内/九月六日」	011型式
2042	217	162	1-J	SK293	荷札	14.4	3.2	0.5	スギ	・「巻ノ(貫)三百目」 ・「□□/□□」	032型式
2043	217	162	1-J	SK293	荷札	14.9	2.7	0.4~0.2	ヒノキ属	・「厚狭郡字(部)村/庄屋七兵衛存内」 ・「□□/□□□」	051型式
2044	217	162	1-J	SK293	荷札	13.9	2.9	0.4	モミ属	・「熊毛郡/庄屋□□」 ・「□□」	051型式・漆付着
2045	217	162	1-J	SK293	荷札	18.4	2.8	0.4	ヒノキ属	・「厚狭郡/市カ)瀬六兵衛存内/宇部村」 ・「国政(カ)勘右エ門与(組)/利右エ門内(カ)/八月晦日」	051型式
2046	217	162	1-J	SK293	荷札	14.5	2.2	0.5	ヒノキ属	・「□(より)/□左エ門殿」 ・「□存」	059型式
2047	217	162	1-K	SK277	荷札	23.3	2.6	1.0~0.8	スギ	・「福田庄屋治右エ門□」 ・「九郎右エ門組□」	032型式

単位：cm ()：復元値 *：残存値

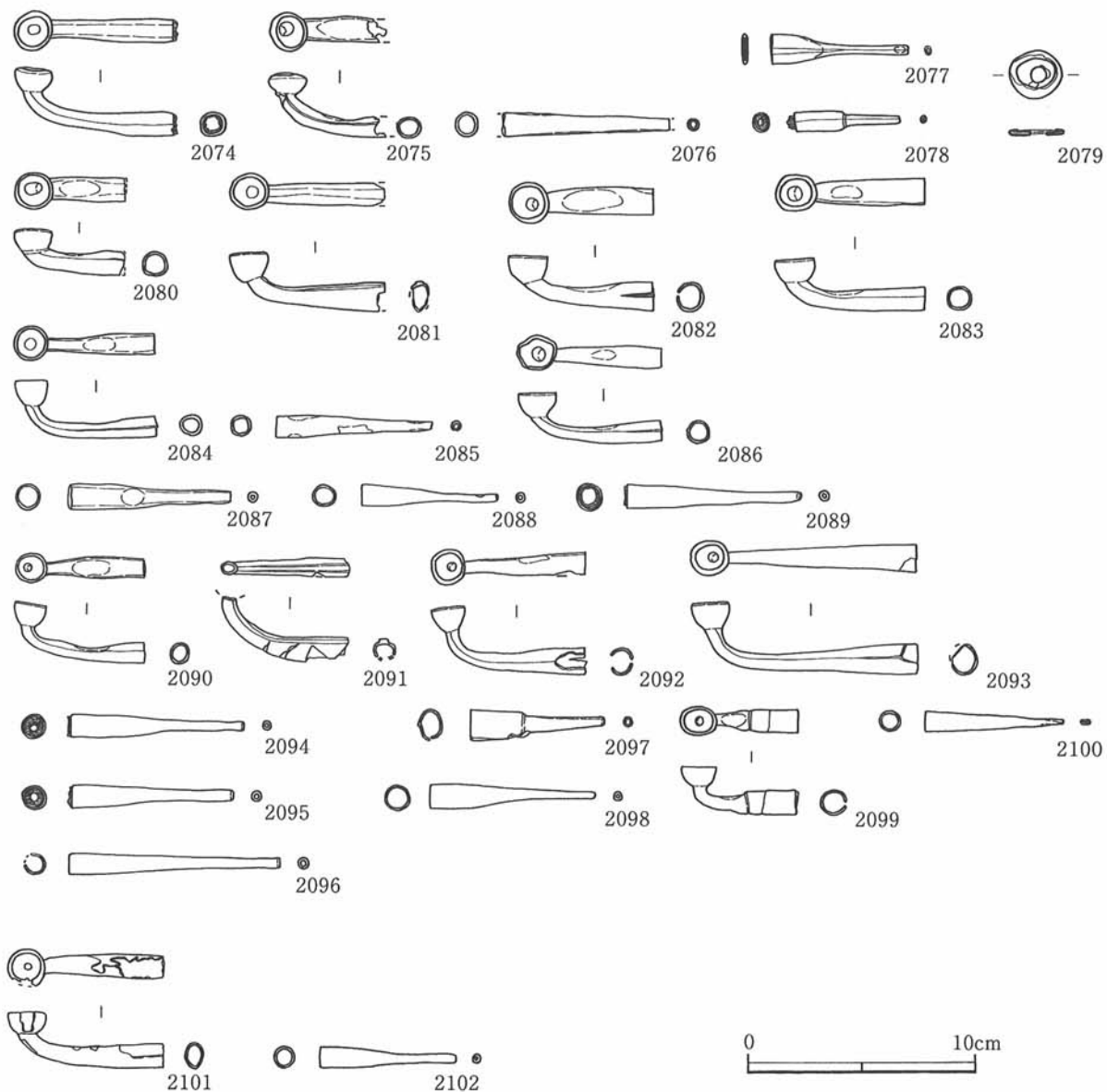
遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	木製品	長さ	幅	厚さ	樹種	墨書	備考
2048	217	162	1-K	SK277	荷札	18.0	3.1-1.2	0.8-0.6	ヒノキ	・「桂三郎右エ門/□□/九月一六日」 ・「(周)田八郎右エ門才判内/庄屋安村助兵衛」	015型式・漆下地か
2049	217	162	1-K	SK277	荷札	18.5	2.3	0.4-0.2	ヒノキ	・「武斗□□」 ・「大(カ)庄屋」	019型式
2050	218	163	1-Y	SK532	木簡	19.3	2.2	0.9	ヒノキ属	・「大黒夷毘沙門」 ・「布袋」	011型式
2051	218	163	1-Y	SK532	木簡 (羽子板状)	*18.9	*6.1	0.5-0.2	ヒノキ属	・「小嶋」 ・「小島」	041型式・羽子板か
2052	218	163	1-Y	SK532	荷札	23.6	3.4-2.7	0.7	モミ属	・「吉田三左エ門殿□□□□」 ・「□□五十入□□」	011型式
2053	218	163	1-Y	SK532	荷札	19.7	*2.3	0.8-0.7	スギ	・「□□郡□□庄屋小川十右エ門」 ・「□□作右エ門」	011型式
2054	218	163	1-Y	SK532	荷札	13.1	2.2	0.4	アスナロ属	・「与□□組」 ・「弥左エ門□」	051型式
2055	218	163	1-Y	SK532	荷札	*10.0	1.9	0.6	アスナロ属	・「大井村与三エ門□」 ・「十月廿六日□」	081型式
2056	218	163	1-Y	SK532	荷札	*9.7	2.5	0.5-0.2	アスナロ属	・「権右エ門」 ・「惣□□」	081型式
2057	218	163	1-Y	SK532	荷札	18.4	9.6	0.4-0.2	ヒノキ属	・「上々大/御柄糸/御柄糸犬(大カ)五筋入」	011型式
2058	218	163	1-Y	SK532		17.4	*3.7	0.2	クロベ	・「す巳(み)十ヲ/□□」	081型式
2059	218	163	1-Y	SK532	荷札	18.2	4.4	0.6	モミ属	・「(三)三原屋市左エ門荷物」	011型式・穿孔1カ所あり
2060	218	163	1-Y	SK532		17.0	6.0	1.1	ヒノキ属	・「(大)□□□□/□□□□」	011型式・穿孔2カ所あり
2061	218	163	1-Y	SK532	荷札	11.6	2.0	0.3	アスナロ属	・「両川弘左エ門□」	051型式
2062	218	163	1-Y	SK532		*12.3	2.4	0.1	クロベ	・「嘉門(より)藤右エ門」	051型式
2063	219	164	1-Y	SK532	木簡	15.2	3.2	0.5	クロベ	・「(記号)」	015型式・木釘3カ所
2064	219	164	1-Z	SK555	荷札	16.5	2.6-2.3	0.7	アスナロ属	・「□□□□衛(より)」 ・「(口)長門□/若左屋澤右エ門荷物/大廻り」	011型式
2065	219	164	1-Z	SK555	荷札	*13.5	2.4	0.3	ヒノキ	・「廿日畔頭万左エ門組/惣右エ門(より)」 ・「村縄四郎存内」	059型式
2066	219	164	1-Z	SK555	荷札	18.3	2.2	0.3	アスナロ属	・「(明木村□□)内」 ・「(宇□□)忠兵へ用」	033型式
2067	219	164	1-Z	SK555	荷札	12.2	3.0	0.5	スギ	・「庄屋/平左エ門存内」 ・「大左エ門」	051型式
2068	219	164	1-Z	SK555	荷札	*10.8	2.7	0.4-0.3	ヒノキ属	・「(十一ノ)六左エ門」 ・「□□」	039型式
2069	219	164	1-Z	SK555	荷札	11.7	2.3	0.4-0.2	ヒノキ属	・「(大島郡小松村)」 ・「(十月晦日/□□)左エ門号」	033型式
2070	219	164	1-Z	SK555	荷札	*14.0	2.5-1.9	0.5-0.3	ヒノキ属	・「明木村」	019型式
2071	219	164	1-Z	SK555	荷札	12.8	2.3	0.4	ヒノキ属	・「五左エ門殿へ徳兵へ」	051型式
2072	219	164	1-Z	SK555	荷札	*11.4	2.6	0.7	アスナロ属	・「庄屋市左エ門存/□□」	059型式
2073	219	164	1-Z	SK555	荷札	13.1	1.7	0.3	ヒノキ属	・「□□七組神右エ門調」	051型式

(4) 金属製品

煙管 (第220図 図版165)

4年間の調査で煙管は1,850点出土した。このうち建物部分またはその周囲の整地層中からの出土が最も多く、町屋の中心時期(2・3面)である18世紀のものが大半である。形態的には火皿補強帯、火皿冠、雁首・吸口に肩を持つなどの特徴を示す江戸初期のタイプから、幕末までの煙管までほぼ江戸時代全体にわたっての煙管が出土している。雁首、吸口の肩部に格子状や螺旋状に線刻を有するものや、雁首に「本大佛」と彫ってあるもの、鱗を持つものなど装飾を施す煙管がある。今回はこれらのうち土坑等の遺構から出土した29点について報告する。

取りあげた煙管は初期の火皿補強帯を有するものはなく、雁首・火皿に肩を有するタイプは2078、2097、2099である。2091は背に鱗を持つタイプであるが、他は18世紀以降に通例な煙管であるといえる。その中で1地区SK80出土の2077~2079、SK293の2085、SK532の2089は、表面に金色の光沢が



第220図 煙管(1/3)

あることから、金メッキを施した煙管と当初は考えた。しかしながら同様な煙管の成分分析の結果、真鍮製であることが判明した。そのためこれらの煙管も真鍮製である可能性が高い。今後表面観察による材質等の判断には注意が必要であろう。

その他の金属製品（第221～223図 図版166～168）

出土した金属製品は、真鍮をはじめとする銅合金(2103～2135)と、鉄製品(2139～2144)がある。2103～2108はつり針状金具。灯火具の吊り金具などに使用されたとみられる。2109、2110は小柄。鉄製刃部が一部残存している。柄部に陽出文による装飾は認められない。2111はなすびの形をし、裏側に釘状の突起がつく金具。2112は鉞。上部に金メッキの痕跡が残る。2113～2116は灯火具。2114は中央に突起を持つことから燭台の一部とみられる。他は1本の銅線を曲げて作っており、リング状の基部から灯芯支えがのびている。2117は締め金具。2118は飾り金具。表面に彫金による装飾と金メッキが施されている。2119は銅線をリング状にまるめたもの。2120は簪。先端は折れ曲がり厚さは0.1cmと扁平である。2121～2124は火箸である。2122、2123はセット。2本を結ぶ鉄環を装着する基部の形状が、2121、2124はくびれや沈線があるのに対し、2122、2123はリング状になっている。2125は方形の小容器。2126は鉞。身部と接続させる孔があいている。

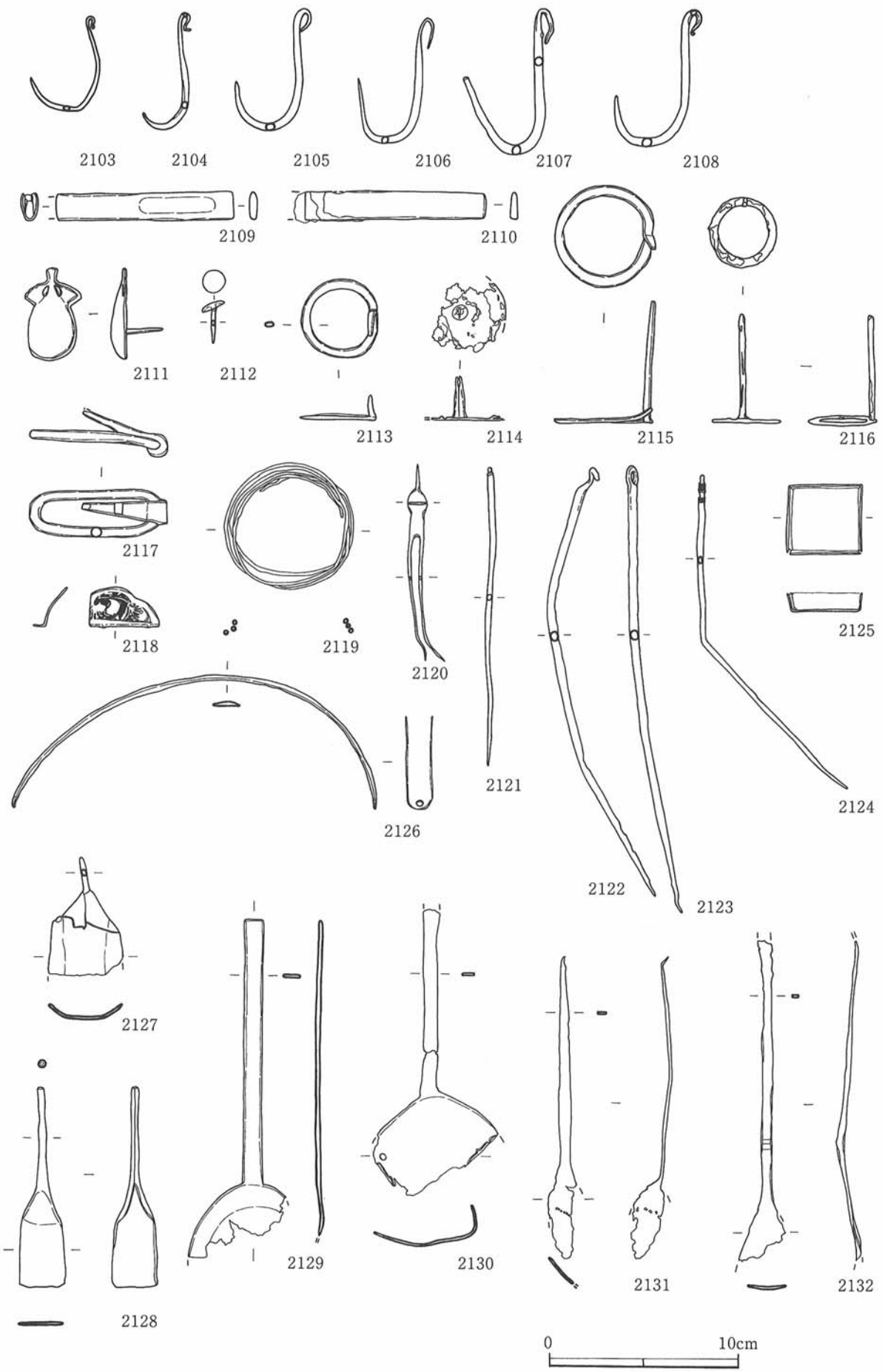
2127、2128は小型の匙。2129～2132は杓子。2133は杓子で孔があいている。2134は筒形容器の蓋。外面に突帯状の短い圈線がめぐる。銅質は良好。2135はおろし金。表面のおろし目のほうが目が細かく、背面のそのほうが粗く突起が長い。2136～2138は金網で写真を掲載した(図版167)。

2139は鉞。2140は錠前。鍵穴は錆化によって不明確になっている。2141はかすがい形の火打ち金。柄装着部の片方が欠損し、刃部の中央が使用のためかわずかにくぼむ。2142はクマデ。3本の刃先の内1本の先端が欠損。柄に装着する環状の金具が残っていた。2143は鎌の刃部で、茎部のまわりには柄の木質が残存する。2140は庖丁。先端部を欠損する。

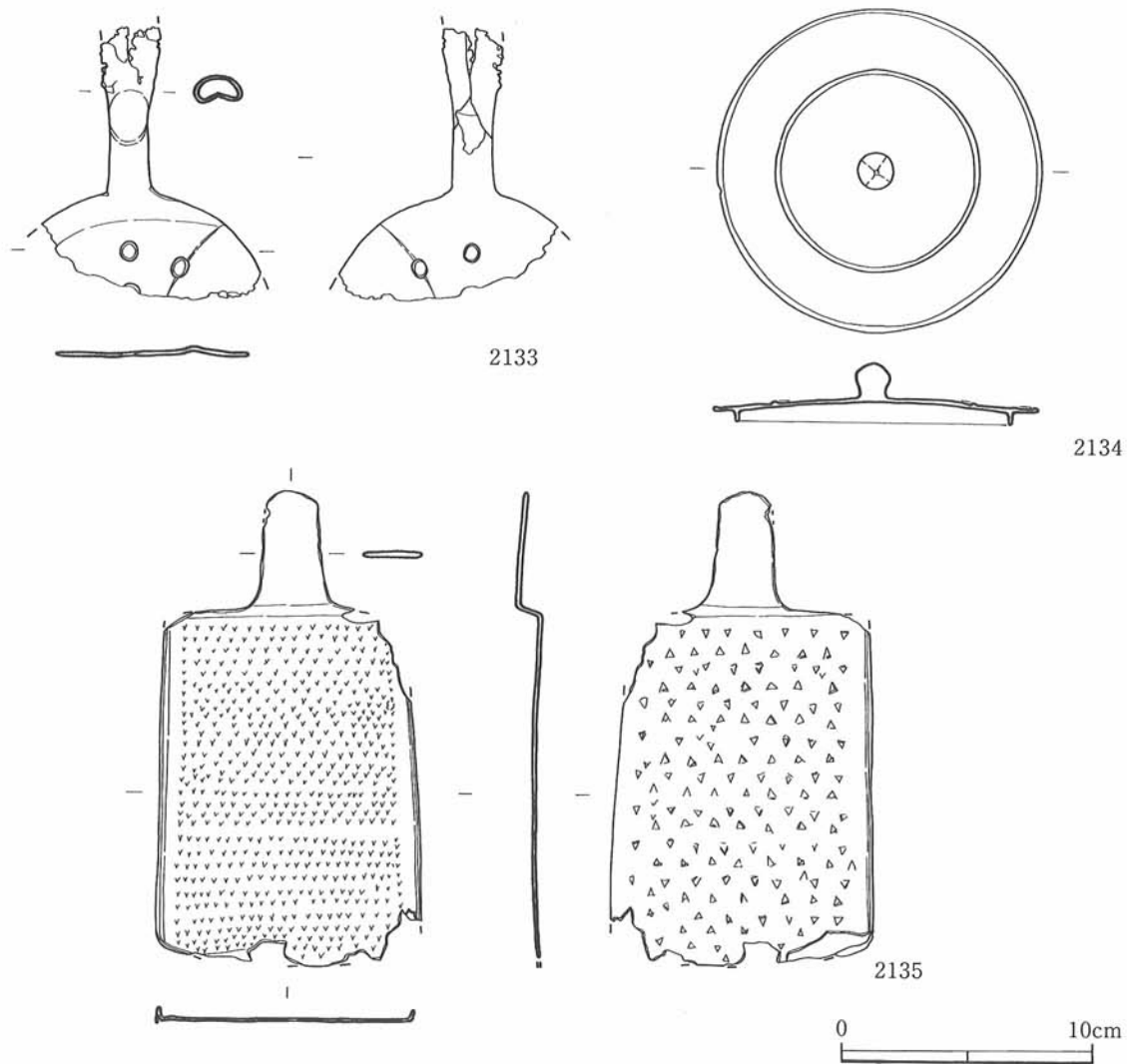
第13表 煙管一覧

単位：cm *：残存値

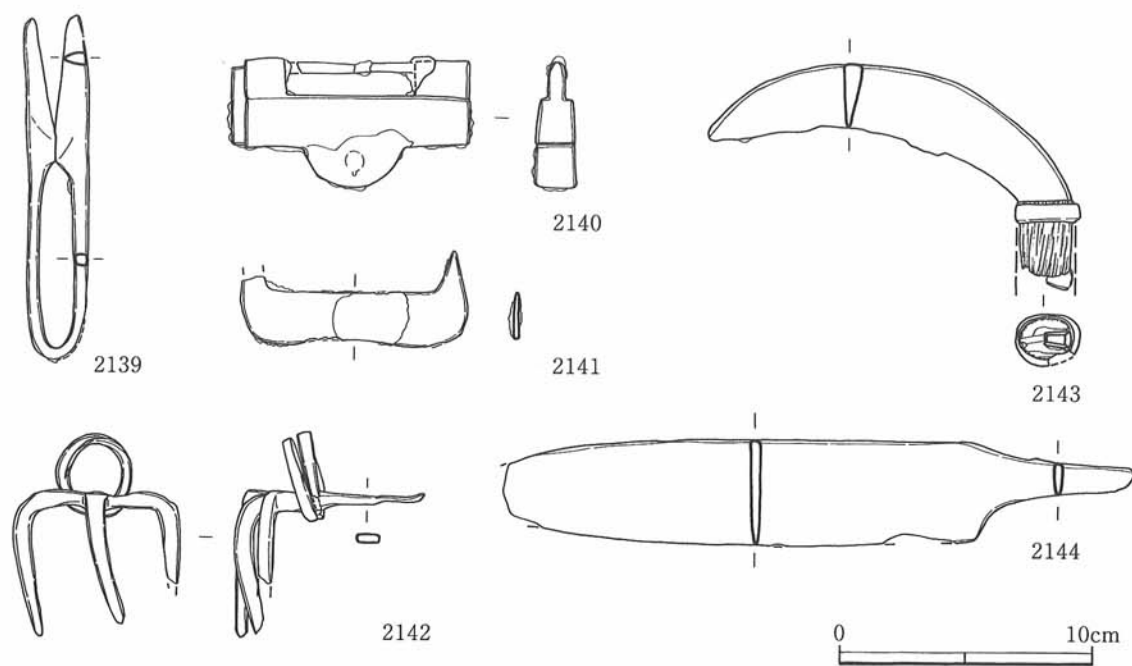
遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	出土地点	鉄・銅製品	器種	長さ	高さ	火皿径	小口径	吸口径	備考
2074	220	165	1-D	SK92	銅製品	キセル 雁首	*7.0	2.9	1.6	1.0		
2075	220	165	1-D	SK92	銅製品	キセル 雁首	*5.1	2.7	1.6	0.9		
2076	220	165	1-D	SK92	銅製品	キセル 吸口	*7.2			1.0	0.5	
2077	220	165	1-D	SK80	銅製品	キセル 吸口	5.9			1.3	0.3	
2078	220	165	1-D	SK80	銅製品	キセル 吸口	4.9			0.8	0.3	
2079	220	165	1-D	SK80	銅製品	キセル 火皿	2.2	2.0(幅)	0.2(厚さ)			
2080	220	165	1-H	SK136	銅製品	キセル 雁首	4.8	1.9	1.6	0.8		
2081	220	165	1-L	SK281	銅製品	キセル 雁首	6.7	2.5	1.7	1.1		
2082	220	165	1-L	SK297	銅製品	キセル 雁首	6.2	2.2	1.7	1.1		
2083	220	165	1-K	SK306	銅製品	キセル 雁首	6.4	2.3	1.7	1.0		
2084	220	165	1-J	SK293	銅製品	キセル 雁首	6.0	2.5	1.4	1.1		
2085	220	165	1-J	SK293	銅製品	キセル 吸口	6.7			0.8	0.3	
2086	220	165	1-J	SK293	銅製品	キセル 雁首	6.2	2.2	1.7	1.1		
2087	220	165	1-F	SK149	銅製品	キセル 吸口	7.0			1.1	0.4	
2088	220	165	1-L	SX314	銅製品	キセル 吸口	5.9			0.9	0.4	
2089	220	165	1-Z	SK532	銅製品	キセル 吸口	7.4			1.0	0.5	
2090	220	165	2-F	SX46	銅製品	キセル 雁首	5.6	2.6	1.3	9.5		
2091	220	165	2-F	SX46	銅製品	キセル 雁首	*5.4					ひれ付き
2092	220	165	2-A	SK79	銅製品	キセル 雁首	6.7	2.9	1.5	1.0		
2093	220	165	2-D	SK72	銅製品	キセル 雁首	9.7	3.1	1.2	1.1		
2094	220	165	2-F	SX46	銅製品	キセル 吸口	7.4			1.0	0.4	羅字残存
2095	220	165	2-F	SX46	銅製品	キセル 吸口	6.9			1.0	0.4	羅字残存
2096	220	165	2-F	SX46	銅製品	キセル 吸口	9.1			0.8	0.5	
2097	220	165	2-A	SK79	銅製品	キセル 吸口	5.8			1.3	0.4	
2098	220	165	2-A	SK79	銅製品	キセル 吸口	7.1			1.0	0.3	
2099	220	165	2-D	SE53	銅製品	キセル 雁首	5.0	2.0	1.5	0.8		
2100	220	165	2-D	SE53	銅製品	キセル 吸口	6.0			0.8	0.4	
2101	220	165	3-A	SX96	銅製品	キセル 雁首	6.7	2.5	1.6	1.0		
2102	220	165	3-B	かまど84	銅製品	キセル 吸口	5.9			0.9	0.4	



第221图 金属製品①(1/3)



第222図 金属製品②(1/3)



第223図 金属製品③(1/3)

第14表 金属製品一覧

単位：cm *：残存値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	出土地点	鉄・銅製品	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
2103	221	166	1-M	SK217	銅製品	釣針状金具	5.1	3.8	0.3	
2104	221	166	1-L	SK303	銅製品	釣針状金具	6.2	2.5	0.3	
2105	221	166	1-X	SK534	銅製品	釣針状金具	6.5	4.1	0.4	
2106	221	166	1-Z	SK532	銅製品	釣針状金具	6.6	4.0	0.4	
2107	221	166	1-F	SK104	銅製品	釣針状金具	7.8	4.8	0.5	
2108	221	166	1-J	SK293	銅製品	釣針状金具	7.3	4.7	0.5	
2109	221	166	1-D	SK92	銅製品	小柄	9.6(柄のみ)	1.5	4.7	
2110	221	166	1-K	SK306	銅製品	小柄	9.7	1.5	0.4	
2111	221	166	1-K	SK306	銅製品	金具	4.9	3.0	2.9	
2112	221	166	3-H	SK127	銅製品	鋳				金メッキ
2113	221	166	1-H	SK112	銅製品	灯芯押え	4.0(径)	1.3	0.2	
2114	221	166	2-H	SX47	銅製品	燭台か	*5.0(径)		2.3(高さ)	
2115	221	166	1-L	SK281	銅製品	灯芯押え	4.8(径)	6.6		
2116	221	166	1-J	SK282	銅製品	灯芯押え	5.7(高さ)	3.7(基部径)		
2117	221	166	1-F	SK140	鉄製品	締め金具	7.4	2.6	2.5	
2118	221	166	3-H	SK126	銅製品	飾り金具				孔 金メッキ
2119	221	166	1-J	SK293	銅製品	銅線	6.9(径)			
2120	221	166	1-K	SK298	銅製品	管	10.5	2.1	0.05~0.1	
2121	221	166	1-北端	3面以下	銅製品	火箸	15.9		0.3	
2122	221	166	1-F	SK140	銅製品	火箸	23.8		0.4	
2123	221	166	1-F	SK140	銅製品	火箸				
2124	221	166	1-D	SK92	銅製品	火箸	16.7		0.3	
2125	221	166	1-F	SK102	銅製品	容器	3.7	4.1	1.0	
2126	221	166	2-H	SX47	銅製品	鉸	19.5	1.3	0.2	
2127	221	167	1-F	SK139	銅製品	匙	6.4	4.0	0.05	
2128	221	167	1-J	SK259	銅製品	匙	10.7	2.5(身)0.35(柄)	0.1	
2129	221	167	2-F	SX46	銅製品	杓子	*18.1	*5.2(身)1.0(柄)	0.02(身)0.2(柄)	
2130	221	167	2-D	SK72	銅製品	杓子	*15.4	6.5~0.8	0.1	
2131	221	167	1-G	SK142	銅製品	杓子	*16.2	0.1~*1.25	0.05~0.15	
2132	221	167	1-D	SK92	銅製品	杓子	*17.15	*0.4~2.0	0.1~0.5	
2133	222	167	1-H	SK152	銅製品	杓子	*10.6	1.6~*7.6	0.1~0.9	
2134	222	167	2-F	SX46	銅製品	蓋	10.95(口径)	12.9(器径)	1.6(高さ)	
2135	222	167	1-C	SK109	銅製品	おろし金	*18.8	10.5(身)2.4(柄)	0.5(身)0.2(柄)	
2136		167	1-K	SK306	銅製品	金網	24.0	23.8		
2137		167	1-Z	SK532	銅製品	網				
2138		167	1-K	SK277	銅製品	網の一部	9.5	8.5		
2139	223	168	1-J	SK293	鉄製品	鋏	13.7	2.4(刃)2.4(握り部)	5.8(刃部長さ)	
2140	223	168	1-K	SK277	鉄製品	鋏前	9.5	5.1	1.7	
2141	223	168	2-C	埋甕80	鉄製品	火打金	9.0	3.9	0.28	
2142	223	168	1-F	SK149	鉄製品	クマデ	7.8	6.5		
2143	223	168	1-Z	SK532	鉄製品	鎌	8.9	14.9(刃)2.0(柄)	2.6(柄部径)	
2144	223	168	1-F	SK149	鉄製品	包丁	*25.0	4.0(刃)1.2(茎)	0.3(刃)0.4(茎)	

出土銭 (第224図 図版169、170)

1～3地区の調査では4,000点を超える銭貨が出土した。これらを分類したのが第224図出土銭グラフと第15表である。ここでは永井久美男編『日本出土銭総覧 1996年版』(兵庫埋蔵銭調査会 1996。)を基にし、寛永通宝を「1期古寛永」、「2期新寛永(文銭)」、「3期新寛永」の3つに分類し、寛永通宝ではあるが遺存状態が悪いため3期の分類が難しいものを「不明寛永」、寛永通宝以外の出土銭を「鉄銭」、「雁首銭」、判読が困難であるものを「不明銭」とした。またこれら以外の渡来銭、模倣銭、無文銭、金・銀貨などを「その他」とした。

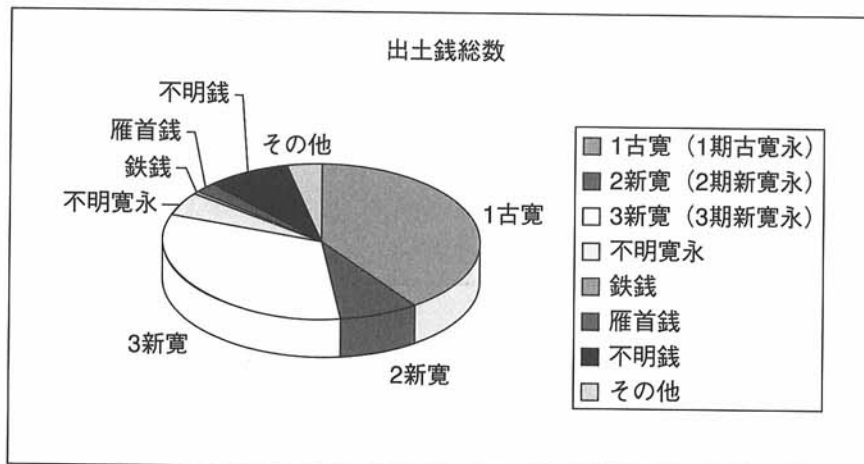
これによると、出土銭のうち寛永通宝が占める割合は全体の84%であり、このうち1期古寛永が40%、2期新寛永が8%、3期新寛永が32%となる。

これらの出土銭は、敷地のうち建物が立地していた部分またはその周辺から出土したものがほとんどである。逆に敷地の掘側、つまり外庭にあたる部分や、土坑からの出土数は極めて少ない。また、1面から2・3面の中で突出した出土数であった遺構面はなく、それぞれの面の整地層から検出される。なお4面はトレンチ調査が中心で調査範囲が狭いため、出土点数も少なくなる。

出土状態として、土器陶磁器に納められたものはなく、また紙や袋、木製容器などの有機質は残存しないため明らかでないが、その痕跡を示す資料は検出されていない。最も多い例は建物部分の整地層を面的に薄くはぎ取るように掘り下げていく中で、1、2点の出土から、一箇所ですべて出土する。なおまとめて出土する場合に銭縲状態のものはないとみられる。

地区別にみると第16表のとおりである。このうち2地区は1～3地区の中で調査面積が700㎡と最も狭い地区でありながら、1,500点を超える銭貨が出土し、面積当たりの出土枚数が高いことで注目される。2地区が北の惣門通りに面する地区であり、そこに立地した建物やそこに住む階級層や職種が反映していると考えられる。さらに敷地別の出土数を比較すると、1-X・Y区、2-A区、2-C区、3-A区が多く、これらの敷地は他に比べ間口が広く、礎石など建物基礎もしっかりしているということが指摘できる。対して長屋状の建物が想定できる1-F～L区、3-J～M区は出土数が少ない。これからすれば出土枚数の多寡はその場所に住む人々の経済状態を反映するものかもしれない。

寛永通宝以外のその他の貨幣一覧が第17表である。その中で注目されるのが、豆板銀である。豆板銀については成分分析結果とともに資料紹介を行ったが^{1) 2)}、それに加えて新たに資料整理中に1点発見されたことから、1～3地区では合計14点となる。さらに平成11年度の5地区調査を含めると、萩城



第224図 出土銭グラフ

第15表 出土銭総数

	1古寛	2新寛	3新寛	不明寛	鉄 銭	雁 首	不明銭	その他	小 計
1地区	582	140	411	34	6	33	107	56	1369
2地区	673	126	455	67	8	24	141	50	1544
3地区	430	69	501	59	12	54	125	50	1300
合 計	1685 (40%)	335 (8%)	1367 (32%)	160 (4%)	26 (1%)	111 (3%)	373 (9%)	156 (4%)	4213 (100%)

第16表 地区別出土銭総数

地区	区	平成9	平成10	平成11	小計	地区	区	平成10	地区	平成12	小計
1	北端区			26	26	2	A	155	3	A	184
	X			58	58		B	73		B	138
	Y			196	196		C	183		C	118
	Z			148	148		D	77		D	60
	A	5		42	47		E	109		E	85
	B	24			24		F	131		F	128
	C	120			120		G	127		G	212
	D	65			65		H	70		H	88
	E	51			51		I	86		I	55
	F	104			104					J	43
	G	71			71					K	56
	H	47	1		48					L	41
	J			52	52					M	20
	K			23	23						
	L			20	20						
	M			20	20						
N			17	17							
不明	139	88	52	279	不明	533	不明他	72			
小計		626	221	522	1369	小計	1544	小計		1300	
合計							4213				

第17表 「その他」の出土銭一覧

貨 幣	1地区	2地区	3地区	合計
開元通宝	2			2
開元通宝 (背上月)			1	1
熙寧元宝	4	3	1	8
熙寧元宝?	1			1
政和通宝	1	2	1	4
祥符通宝 (模鑄銭含む)	1	1	7	9
祥符通宝「背上月」	1			1
祥符〇宝?	1	1		2
〇符通宝		1		1
祥符元宝			6	6
紹聖元宝	1	1	2	4
紹〇元宝		1		1
宝永通宝	2			2
元豊通宝	7	4	3	14
元豊通宝?	1		1	2
元符通宝	2			2
元〇通宝	2			2
元祐通宝?		1		1
元祐通宝	4	1	1	6
天聖元宝	1		1	2
永樂通宝	5	5	1	11
至道元宝	1			1
嘉祐元宝	1			1
嘉祐通宝		1		1
紹豊元宝		1		1
天禧通宝	1	3		4
皇宋通宝	3	9		12
洪武通宝	2	3	8	13
洪武通宝 (加治木銭)	1			1
淳化元宝		1		1
康熙通宝		1	1	2
康熙通宝 (背面同か河)		1		1
康熙通宝 (背福)			1	1
康熙通宝 (背東・)	1			1
正隆元宝	1			1
至和通宝	1			1
太平通宝	1		1	2
治平元宝			1	1
治平〇宝			1	1
咸平元宝			1	1
豆板銀	2	2	10	14
〇〇通宝		1		1
〇〇元宝		2	1	3
不明中国銭	2	3		5
無文銭?	3	1		4
合 計	56	50	50	156

第18表 遺構別出土銭一覧

地区	区別	出土場所	1古寛	2新寛	3新寛	不明寛	鉄銭	雁首	不明銭	その他	小計	備考
1	B	SK117	1		1						2	
1	C	SK109	1								1	
1	C	SK111							1	1	2	宝永通宝
1	D	SK80			3						3	
1	D	SK92	4	3	7				2		16	
1	D	SK48	2		2						4	
1	D	SK46	1						1		2	
1	F	SK140	1		1			2			4	
1	F	SK89							1		1	無文銭?
1	F	SK94							2		2	
1	F	SK139	2	2	2					1	7	永楽通宝
1	G	SK31	1		3						4	
1	G	SK142	1		2						3	
1	H	SK152		1							1	
1	A	SK5			2					1	3	無文銭?
1	G	SK28			2						2	
1	F	SK149			1						1	
1	J	SK282		1	3				1		5	
1	J	SK293	4		4				4	1	13	洪武通宝(加治木銭)
1	M	SK217			1						1	
1	M	SK220			1						1	
1	N	SK250	1	1							2	
1	L	SK254	2								2	
1	K	SK257						1			1	
1	J	SK276							3		3	
1	K	SK280			1				3		4	
1	L	SK281	2		1				1		4	
1	L	SK290			2						2	
1	J	SK295			1				1		2	
1	K	SK298			1						1	
1	L	SK299						1	1		2	
1	L	SK303			1	1			2		4	
1	K	SK306			3	2					5	
1	Z	SK516					2		1		3	
1	Z	SK520			1						1	
1	A	SK521								1	1	元豊通宝
1	Z	SK532	2	1	1				2		6	
1	Y	SK534	1						1		2	
1	Z	SK556			1				2		3	
1	G	埋甕124		1	6				10		17	
1	D	埋甕3				1					1	
1	Z	かまど510	1								1	
1	L	SX314		1		1					2	
1	北端	整地層他	6	1	11		1	2	2	2	25	正隆元宝 永楽通宝
2	D	SK72	1								1	
2	D	SK70		1		1					2	
2	F	SX46	13	2	11	2		1	3	1	33	政和通宝
2	C~D	SK21	1		2						3	
2	C~D	SK23	1		1				1		3	
2	H	SK26	1		2						3	
2	H	SX47	2								2	
2	A	SK79	10								10	
3	A	SK91	1								1	
3	B	埋甕46				1					1	
3	B	かまど84								1	1	治平〇宝
3	A	かまど83	1								1	
3	B	SK129	1								1	
3	C	SK122	1								1	
3	G	SK131	5		13		3		2		23	不明銭、鉄銭
3	H	埋甕114			2	5					7	
3	H	SK124	2		1			2			5	
3	E	SK136						1			1	
3	B	SK92									1	
合	計		73	15	97	14	6	10	47	14	276	祥符通宝3 祥符元宝2

跡（外堀地区）全体として平成12年度末の段階で16点が確認されたこととなる。いずれも遺構外出土であるため、詳細は次報告にゆずるが、極印や銀含有量から慶長または正徳期の豆板銀が8点と多い。

これらの出土銭の性格として、家屋廃棄時の「忘れ物」として判断するには出土点数が多すぎると思われる。そこで出土状態や出土場所から建築儀礼にともなう地鎮や棟上時の散銭の可能性をかつて指摘したが³⁾、調査の中でそれを具体的に裏付ける資料は今のところ出土していない。ただ近世上棟銭に対する考古学的アプローチも行われつつあり⁴⁾、今後建築儀礼だけでなく日常生活の習俗の中での銭貨の役割や使用等も含めた検討が必要であり、萩城下町内における調査区の様相と、他の町屋との比較が重要になってくると考える。

出土銭のうち本報告では土坑などの遺構出土資料について概要を報告する。土坑等の出土一覧は第18表のとおりである。また土坑出土銭の写真を掲載する（図版169、170）。出土数は276点であり、総数の約7%を占めるに過ぎない。先に述べたとおり整地層を中心とした出土点数が多いことをよく示していよう。

遺構出土の中で注目される資料として、まず1地区SK111出土の宝永通宝があげられる。宝永通宝は十文銭とも呼ばれ、宝永5年（1708）に鑄造されたが、翌6年（1709）に通用が廃止された。そのため宝永通宝の出土はその遺構の実年代の決定に重要な資料となり、SK111は陶磁器の年代観とあわせて18世紀前半の可能性が高いとみられる。

次に1地区SK293から出土した洪武通宝は、背面に「治」の文字が鑄出されたもので、銅質もあまり良くない。これは背文から「加治木銭」と呼ばれるもので、島津氏が大隅国始良郡加治木村で鑄造したとされる貨幣である。鑄造時期は慶長20年（1615）以前の可能性が高いとされるが、SK293の時期が18世紀前半を主体とする時期であることから、加治木銭が直接的に遺構の時期をあらわすものではないであろう。調査では17世紀前半の陶磁器が18世紀の廃棄土坑から出土する例があり、古い時期の遺物が混入した可能性がある。いずれにしても全国的に出土例が少なく実態が明らかでない加治木銭に新たな資料を加えることができたといえる。

また1地区埋甕124の底部から17点、3地区埋甕114から7点が出土した。埋甕124では銹化が著しく、うち10点が判別不能であるが、他は2期新寛永（文銭）が1点、3期新寛永が6点である。埋甕114は3期新寛永が2点、判別不能な寛永通宝が5点である。他の埋甕からはほとんど出土していないことから単なる埋甕内への落とし物ともとれるが、他遺跡の出土例とともに習俗事例も含めて検討する必要がある。

注 1) 谷口哲一「萩城跡（外堀地区）出土の豆板銀」『陶墳』第13号 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター2000。

2) 谷口哲一「萩城跡（外堀地区）出土の豆板銀 一平成12年度の調査から一」『出土銭貨』第15号 出土銭貨研究会 2001。

3) 1) に同じ

4) 野澤則幸「名古屋城二の丸御殿跡出土の銭貨について」『名古屋市見晴台考古資料館研究紀要』第2号 2000。

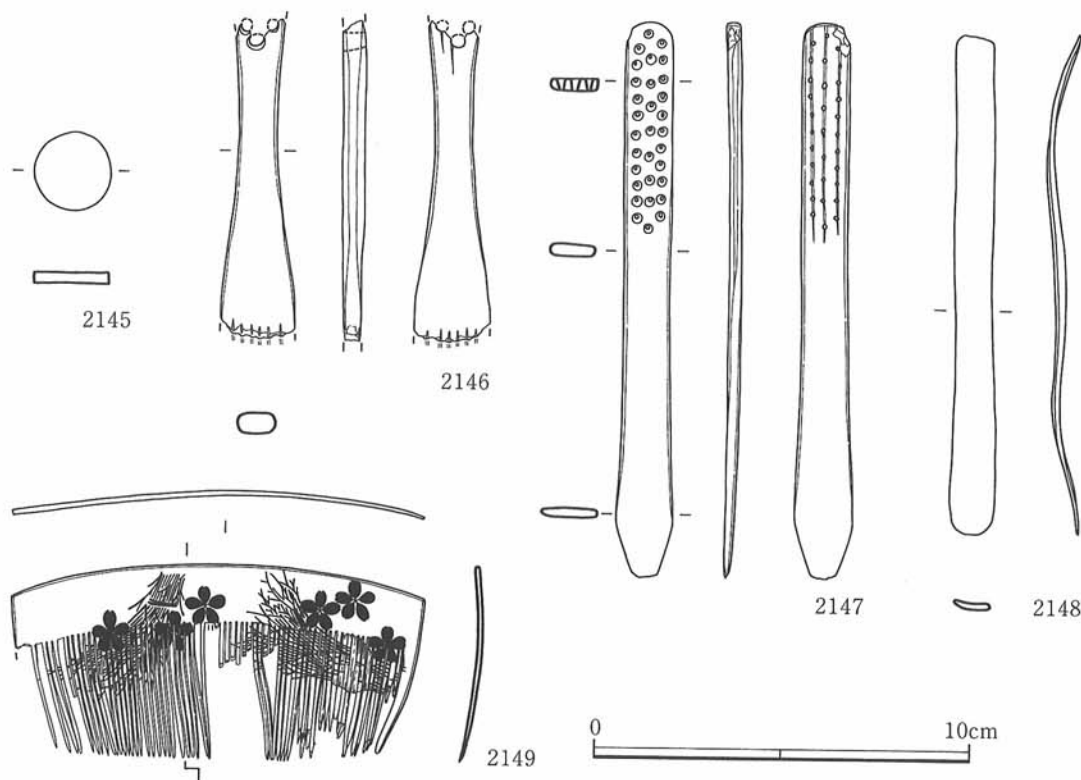
(5) 骨角製品 (第225図 図版168)

調査によって44点の骨角製品が出土した。このうち1地区17点、2地区21点、3地区6点である。製品としては櫛、簪、櫛刷毛、双六の駒、棹秤の棹、物差し、釦など多岐にわたり、その多くは建物整地層や堆積層中出土のものである。なお骨角製品に関連するものとして貝製の碁石も出土しているが、点数は少なく表面が剝離して残存状況は良くない。

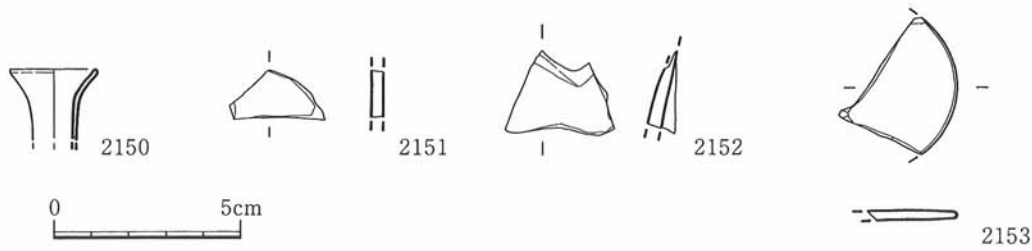
骨角製品の材料は、べっこう製である2点を除いて他は牛、馬などの獣骨とみられる。2地区ではこの骨角製品の材料とみられるヒト、ウマ、ウシ、ニホンジカの切断痕のある角や四肢骨などが出土している。敷地内の一カ所にまとまった出土ではないが、2地区からの出土点数が多いことは、骨角製品の製造にかかわる職種の人々がいたことの現れであろう。そのなかで人骨もその製品の材料としてあったことが注目される。おそらく獣骨として材料の一部に混入したものでであろう(付編 松下孝幸「山口県萩市萩城跡(外堀地区)出土の近世人骨」参照)。

以下出土骨角製品のうち、土坑出土の5点について報告する。

2145は2地区SK79出土の双六の駒とみられる。完形で径2.0cm、厚さ0.3cm。表裏とも装飾はない。2146は1地区SK92出土の櫛刷毛。上端と下端の歯を欠損し、中央部がくびれる。残存長8.5cm、最大幅2.0cm、厚さ0.4~0.6cm。2147は1地区SK303出土の櫛刷毛。歯ブラシ状を呈し先端部は尖らず丸みをもつ。完形で全長14.7cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm。2148は櫛の汚れをおとす植物繊維をブラシ状に装着する頭部と、フォーク状の櫛歯の形態から17世紀後半に、2147は下端がとがり全体的に歯ブラシの形態に似ることから18世紀に比定される。2148は1地区SK139出土。べっこう製。完形で全長13.3cm、幅1.0~1.2cm、厚さ0.1~0.2cmで、上端下端が内側に反っている。形態から眉作り道具の芯入に似る。



第225図 骨角製品(1/2)



第226図 ガラス製品(1/2)

2149は3地区SK136出土の櫛。べっこう製で、長さ11.0cm、幅5.2、厚み0.1cm。全体がわずかに内湾し薄手であるため、挿櫛とみられる。両面に金蒔絵を施し、残存状況は良好である。

(6) ガラス製品(第226図 図版168)

調査では10点のガラス製品が出土し、その内訳は1地区5点、2地区3点、3地区2点で、各地区とも町屋の中心時期である2・3面に所属する遺構及び整地層から出土した。このうち土坑内出土の4点について報告する。なおガラス製品の成分分析はパリノ・サーヴェイ株式会社によるものである。

2150は2地区SK79出土の小瓶とみられる口縁部片である。黄橙色で径2.4cm。鉛珪酸塩ガラスとみられる。SK79の時期は17世紀後半であることから今回の調査では最も古いガラス製品となる。2151から2153は1地区SK92出土。SK92は18世紀代の廃棄土坑である。2151、2152はいずれも破片であるためどのような器形であったのは不明である。2151は緑色透明色で厚さ3mm。2152は無色透明で、厚さ2.5～4mmである。2153は眼鏡のレンズとみられる破片で、無色透明。中央の厚さ2.3mm、端部の厚さ1.8mm。以上の3点はアルカリ珪酸塩ガラスとみられる。

第19表 骨角製品一覧

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
2145	225	168	2-A	SK79	骨角製品	双六の駒	器径2.0		0.3	
2146	225	168	1-D	SK92	骨角製品	櫛刷毛	残存長8.5	1.0～2.0	0.4～0.6	化粧道具
2147	225	168	1-L	SK303	骨角製品	櫛刷毛	14.7	1.3	0.4	化粧道具
2148	225	168	1-F	SK139	骨角製品	芯入	13.3	1.0～1.2	0.1～0.2	べっこう製 化粧道具
2149	225	168	3-E	SK136	骨角製品	櫛	11.0	5.2	0.1	べっこう製 両面に金蒔絵

第20表 ガラス製品一覧

()は復元値

遺物番号	挿図番号	図版番号	地区	遺構	種別	器種	法量	色調	備考
2150	226	168	2-A	SK79	ガラス製品	瓶	口径(2.4)cm	黄橙色	鉛珪酸塩ガラス
2151	226	168	1-D	SK92	ガラス製品	容器片	厚 3mm	緑色透明	アルカリ珪酸塩ガラス
2152	226	168	1-D	SK92	ガラス製品	容器片	厚 2.5～4mm	無色透明	アルカリ珪酸塩ガラス
2153	226	168	1-D	SK92	ガラス製品	レンズ(眼鏡用?)	厚 2.3～1.8mm	無色透明	アルカリ珪酸塩ガラス

(7) 自然遺物

出土した動物遺存体のうち300点以上の骨や鱗について骨同定を実施し、第21表のとおりさまざまな動物が検出された。中には解体痕が認められる試料もあり、町屋における動物利用の一端がうかがえるものである。詳細なデータについては次報告に譲るが、ここでは注目される点についていくつか触れたい。なお骨同定はパリノ・サーヴェイ株式会社によるものである。

1-H区からは鯨骨の肋骨や脊椎骨がまとまって出土した。ここでの骨は同定試料として取り上げていないため詳しいクジラの種類は不明であるが、他区ではゴンドウクジラの歯や骨が出土している。山口県の日本海側は、江戸時代から捕鯨が盛んであり、萩の海岸にも寄鯨があったとされる。切断痕が残る試料もあり、当地区内で鯨の解体が行われたことを示すものであろう。なお鯨に関連する資料として、2032の荷札木簡には「鯨油」「通」の文字が認められる。「^{かよ}通」とは現在の長門市通のことで、江戸時代捕鯨基地として栄えた漁村である。

ST114はイヌの埋葬遺構であり、ここからはほぼ完全なイヌの骨格が出土した。同定によればイヌは老齢の雄イヌであり、足には骨折痕が認められた。近世の動物埋葬の良好な資料であろう。

魚骨のうち最も多く出土したのがタイである。さらにタイのなかではマダイが多く、全長50cm程度の個体を中心であったと見られる。またマダイ以外で出土例の多いクロダイは全く出土していない。と

ころで調査では焼塩壺が600個体以上出土している。焼塩壺の塩は高級食卓塩として用いられ、宴会などで焼いたタイに振りかけて食したと考えられている。マダイの骨の多さと焼塩壺の出土量には相関関係が指摘できるのではないだろうか。

今回の試料で注目されるのが、「骨角製品」の頁で述べたとおり、骨を骨角製品の材料にしたとみられるニホンジカ、ウシの角、ウマ、ウシの四肢骨が出土したことである。このうちウシの角は角鞘の加工に使用された可能性がある。またウマ、ウシの四肢骨は、骨角製品の材料となる骨体を取るため切断した、残りの骨端部分が出土した。さらに注目されるのがヒトの大腿骨の出土で、これにも骨端除去の切断痕があることが明らかになった（付編参照）。これらはいずれも骨角製品製作のための廃材とみられ、大阪市住友銅吹所跡調査において櫛払製作工程の「骨端除去工程」段階に相当するものである。これらはいずれも2地区の整地層から出土していることから、当地区の町屋で骨角製品の製作が行われた可能性が高いとみられる。以上のことから、萩城下町に住む人々の職種とその材料の入手方法などを考える上で興味深い試料である。

参考文献 『住友銅吹所跡発掘調査報告』財団法人大阪市文化財協会 1998。

第21表 動物の個体数・破片数

分類群	MNI	NISP
ツノザメ類	5	5
サメ類	2	6
スズキ	1	2
マダイ	14	60
タイ科	-	26
ブリ	1	1
ブリ?	-	2
マグロ類*	2	4
ベラ類	2	4
フサカサゴ類	-	3
カレイ/ヒラメ類	1	2
フグ類	2	20
ウミガメ類	1	2
イシガメ	1	1
スッポン	1	1
キジ科*	3	4
サギ科?	1	1
タカ類	1	2
ツル類	1	1
ハクチョウ属	1	1
カモ科	2	4
ガン族	1	1
ミズナギドリ類	1	1
鳥類	-	3
ノウサギ	1	3
ホンドモモンガ	1	1
ニホンザル	1	1
イルカ類	1	1
クジラ類*	2	7
ツキノワグマ	1	2
ネコ	1	2
イヌ	3	14
カワウソ	2	7
ウマ	1	2
ウシ	4	15
ニホンジカ	3	39
イノシシ属	3	26

MNI：最少個体数 NISP：破片数
*サイズの違いによる

IV ま と め

1～3地区の調査によって町屋に関わる遺構や膨大な量の遺物が出土し、これらは萩城下町の形成と発展を物語るものとして良好な資料である。調査は約半分が終了し、今後南片河町の調査が本格化することで、さらに多様な町屋構造が明らかになるとみられる。そこで今回の調査成果を踏まえ、今後の調査に係わる問題点を指摘することでまとめとしたい。

(1) 遺構について

各地区で検出された遺構面をまとめると、大きく3期に分けることができる。これに文献資料による20間から8間へと推移する外堀の歴史¹⁾を加味しながら町屋の形成過程をみていく。

まず1期は外堀掘削後から初期町屋が形成された時期とみられるもので、1、3地区の4面、2地区の3面がこれにあたる。時期は17世紀前半～17世紀後半頃とみられる。

当初の外堀は慶安5年絵図(第227図)に記されているように、「堀幅二十間、深さ一丈五尺」であった。調査ではこの20間幅となる外堀東端ラインを示す遺構は、砂層で原状を留めにくいことや建物、石垣構築によって掘削されているなどで、定かでない。そこで断面観察によって検出された外堀傾斜面をそのまま上方へ延長すると、その上端は現道路の路肩、側溝より西へ約1～2mの範囲に収まる。また10年度調査による現道トレンチによって、江戸時代の側溝とおぼしき溝状遺構も検出されたが、この範囲では外堀の東端ラインは検出されていない。これらより、現道路側溝からやや西側によったところに東端ラインがあるとみられる。北端ラインは10年度調査で検出された。これによると直線的な傾斜面で、石垣、石列など法面崩落を防ぐ施設は見あたらない。なお表面に薄く橙色粘土を貼ることがわかり、地山となる砂層を掘削した後表面に粘土を貼る工法を取ると見られる。北端ラインの位置は、それを西に延長すると、堀内に残存する土塁の北端にあたる。慶安5年絵図でも両者の北端ラインは同一線上にならび絵図の描写と一致する。そのため外堀と堀内土塁は原状を残していると見て良いだろう。また北の惣門以北では、惣門通りに沿って外反する外堀の平面プランがみてとれるので、惣門通りは土橋であったと判断される。

外堀内の町屋形成時期は、外堀内へ最初に堆積した埋土と初期町屋に伴う遺物から判断されるが、それを明瞭に示す資料として、2地区の外堀掘削まもなく堆積したとみられる第2焼土層がある。これに包含される遺物は17世紀前半～中頃が中心であることから、少なくとも後半には堆積したことが指摘できる。また3地区では初期町屋に伴う遺物の時期が17世紀前半から後半までであることから、確実に外堀東端全体に町屋が築かれていたのは17世紀後半であると考えられる。これは天和元、2年絵図の描写と矛盾しない。なお文献では元和8年には町屋の存在を示す記述があるが、ここまで遡る確実な資料を発見するには至っていない。またこの時の建物は「懸作り」といわれる堀幅を著しく狭めない建築工法とされている。これに関連する礎石(1-F、G区)も検出されたが、敷地がどこまで堀側に広がっていたかについては、今後の調査で検討すべき問題である。

2期は初期町屋の確立から発展する時期で、1、3地区の2・3面、2地区の2面と3面の一部がこれにあたる。時期は17世紀後半または末から18世紀中頃とみられる。

この時期は初期町屋の敷地幅を踏襲し、それを堀側に延長するものと、いくつかの敷地を統合して新たな敷地を形成する場合がある。さらにそれまでは傾斜面の上に低い石垣や石列を作りそこへ建物

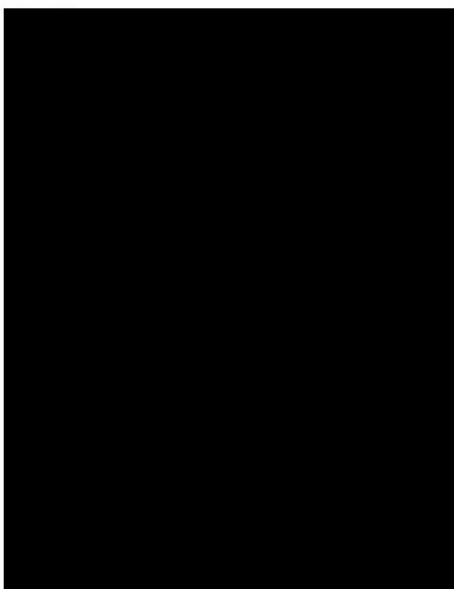
を建てていたのに対して、この面では、南北に石垣を逆「コ」の字状に築き、そこに客土し前代の遺構を埋める。構築した石垣は建物の基礎となり、天端石上に建物が建築され、敷地堀側への降り口の石段が付設される例が多い。敷地の奥行きは建物の占める範囲の拡大に伴い堀側へ拡張されていった。敷地を統合する例として1-F~J区のように長屋状の建物が作られる場合があり、個人住宅とあわせて集合住宅が造られる時期でもある。また石垣構築に焼土が整地土や裏込め土として利用される。これは1期の後半、17世紀後半にも見られたことであるが、この時期のものは2地区の第1焼土層や3地区石垣7裏込め焼土層など各区で認められる。

文献では1739年に堀幅8間となる石垣を構築したとあり、その時の状況を物語るのが寛保2年~延享4年絵図(第227図)である。なお8間石垣部分については調査区外のため、規模や検出された遺構との関連性など不明な点が多い。いずれにしても8間石垣構築は町屋にとっては大きな改変を伴う外堀整備事業であったことはいうまでもない。ところが、惣門周辺における町屋の解体及び桁形への増築といったような大きな改変は、遺構からは認められない。基本的には前代の町屋敷構造を引き継ぎながら、1地区のように長屋建物を立てた以外は、建物部分を嵩上げするなど各敷地ごとの改変で終わる場合が多く、町全体におよぶものではないことが指摘できる。となれば8間石垣とは、高い石垣を築き堀の浚渫土で前代の町屋施設を埋めてその上に新たな町屋を築くといった大規模なものではなく、それまで堀と敷地の境が曖昧であったものを8間のラインで統一して、石垣を築くことで町屋と外堀の境を明確にするものであったとみることもできるであろう。このことはいずれ8間石垣の調査が進み、両者の資料の比較検討によって明らかなものとなるであろう。

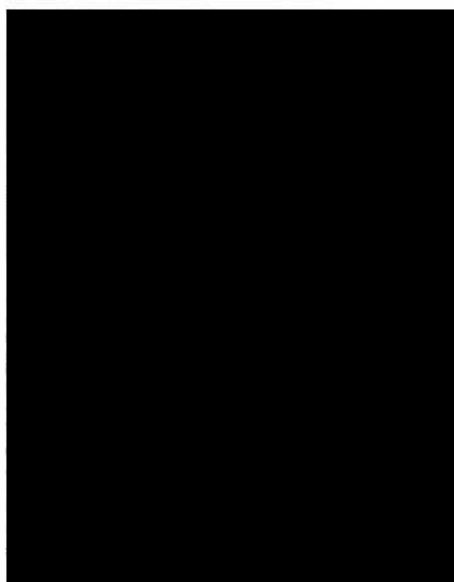
文献に記述のあるいわゆる堀幅14間については、8間石垣のように町屋全体を外堀と区分するような明確な遺構は検出されなかったことから、14間ラインに石垣などの施設はなかったと思われる。14間が部分的な堀幅の表現であったか、または家屋が立ち並ぶ景観を見て残った堀幅を表現



慶安5年絵図(部分 山口県文書館蔵)



天和元、2年絵図(部分 羽仁家蔵)



寛保2年~延享4年絵図(部分 萩市郷土博物館蔵)

第227図 絵図に見る外堀の変遷

したかなどを視野に入れて調査を進める必要がある。

なおこの時期には1地区で大型廃棄土坑が集中している。8間石垣構築の相前後する時期の遺構であることから、日常のゴミ穴に加えて一部の町屋解体に伴う廃棄土坑の可能性はある。

3期は1、2地区の1面、3地区の1・2面にあたるもので、18世紀後半～19世紀前半、幕末までとみられる。間口幅は前代の敷地範囲と基本的に変化はないが、1地区にみられるように低位の堀側敷地に客土し、生活面の嵩上げをおこなっている部分がある。このときの整地は道路部分に近い高さまで行うものもあれば、前代の高低差のある敷地のままのところもある。

明治以降は、明治中頃の土地利用図によると畑地としてあった区画が多い。藩庁が山口に移転したことによる人口の減少に伴い北片河町、南片河町も人の移動があったことがうかがえる。調査前の道路と同じ高さまで客土して建物を構築するのは現代になってであろう。

今回の調査区は北片河町から南片河町の一部が対象地であった。両者の町境は絵図から推定して3-F区とみられることから、今回の調査ではほぼ北片河町全体を調査したこととなった。この間検出された敷地数は少なくとも36である。これをまとめたのが第22表で、第228図には遺構から想定される町割を図化した。なおこの敷地数は2・3面の時期、つまり17世紀末～18

世紀中頃にかけて検出された敷地のうち、敷地の可能性が高い区画のみを示し、1-F～G、H～J区のように長屋状の建物も1つの敷地としている。これからすると間口幅は最小で4.0m、最大で長屋と見られる1-H～J区の20.7mで、1軒の敷地としては1-Y・Z区の13.9mが最大である。さらに表では1間を六尺五寸²⁾(197cm、約2.0mとして換算)として間口幅を示した。最も多い敷地幅は約3間の13軒で、2間半が5軒、2間が4軒、4間が5軒と続く。

ところで「宝暦元年(1751)萩大絵図」別冊文書によると萩城下各町の規模が記されており、これによると北片河町は、町の長さ149間、本軒26軒、店借35軒で合計61軒の家屋があり、蔵が3か所あったとされる³⁾。絵図から見た北片河町の範囲を現在の町割りに合わせ、その距離を測定したところ南北約298mであった。これを先の町の長さ149間で割ると、1間は約2mとなることから、敷地幅もこの距離単位を使用していたとみられる。検出された敷地は36軒と文献より少ないが、長屋状建物内の区画が不明であることや、現道路部分、萩市調査地区、惣門通りの両脇地区の未検出部分を加えると61軒に近い数字になるとみられる。

ではこの町にどのような人々が住んでいたのでしょうか。天和元、2年絵図(第227図)で唯一敷地主が明らかな2-A・B区の「品川玄良」宅跡は、調査によって敷地跡が推定されており、そこから出土する遺物は、他の町屋に比較して上手のものが多くことが指摘されている。これ以外は現在の

第22表 敷地間口一覧

地区	区	間口 (m)	間口 (間)
1	A	6.2	3.1
	B	5.9	3.0
	C	6.1	3.1
	D	6.3	3.2
	E	9.8	4.9
	F	16.1	8.1
	G		
	H	20.7	10.4
	I		
	J		
	K	6.1	3.1
	L	5.8	2.9
	M	7.8	3.9
	N	4.1	2.1
O	5.4	2.7	
X	-	-	
Y	13.9	7.0	
Z			
2	A	-	-
	B	8.5	4.3
	C	?	?
	D	13.2	6.6
	E	4.3	2.2
	F	4.0	2.0
	G	6.0	3.0
	H	5.0	2.5
	I	-	-
3	A	8.1	4.1
	B	8.0	4.0
	C	6.0	3.0
	D	5.8	2.9
	E	6.1	3.1
	F	5.9	3.0
	G南半	6.0	3.0
	G北半	4.9	2.5
	H	4.9	2.5
	I	5.0	2.5
	J	6.1	3.1
	K	7.9	4.0
	L南半	8.1	4.1
L北半	4.2	2.1	
M	5.1	2.6	

※1間≒2mとする

ところ詳しい町絵図や文献資料がないため人名や職種は不明である。それに対して調査では遺構遺物から次のような町屋の性格が指摘できよう。

- ・ 1-F～I 区の廃棄土坑から多く出土するスラグ、鞆羽口、坩堝から、金属加工にかかわる職種が推定される。坩堝は小型のもので、中には金または銀とみられる金属細粒が付着していたことから、細工物職人の存在が考えられる。

- ・ 2 地区からまとまって出土した加工骨片は「自然遺物」の頁で述べたように骨角製品製作にかかる廃材であることから、骨角製品にかかわる職種の存在が指摘される。

- ・ 3 地区からは蔵とみられる建物基礎とそれが帰属する大型の敷地が検出されたことから、上級商人の宅地とみられる。

- ・ 廃棄土坑から出土した荷札木簡からは、当地区に防長内からさまざまな物資が集積されたことがみとれる。荷札を出土した土坑が位置する敷地にそれらの物資を取り扱った商人がいたかについては定かでないが、荷札の数から活発な商業活動の場であったことが予想される。

- ・ 胞衣埋納遺構が集中して検出されるところと、まったく出土しない敷地があり、特に 3 地区の出土は特徴的である。胞衣埋納などの習俗は本来その地域で共通に執り行うものであるから、胞衣埋納遺構が出土しないところは子供がいなかったか、または家族が生活する場とは異なる出店や作業場といった家屋を想定することができよう。

最後に焼土層について述べる。調査では火災処理土とみられる焼土層として 2 地区の第 1、2 焼土層、3 地区の焼土層が検出された。第 2 焼土層が 17 世紀中頃、第 1 焼土層と 3 地区焼土層は 17 世紀後半から 18 世紀にかけての年代が与えられることから、それに相当する近隣の大火は寛文 3 年（1663）毛利隠岐屋敷、延宝 6 年（1678）宍道氏宅を火元とする火災が推定される。2 地区第 2 焼土層は包含する遺物に織部、志野など上手があり一般町屋とは様相が異なることから、これらの火災に伴う処理土の可能性もある。また 3 地区の焼土層は町屋の火災痕跡が認められ、その処理土を石垣構築の裏込めに利用している。延宝 6 年の大火は堀内から外堀外まで延焼しており、これに伴う火災の可能性があらう。この他の焼土層として石垣基底面に薄く堆積するものや、整地土に客土しているものもある。このようにみても火災の残滓処理が契機となって新たな石垣構築や宅地化が進んだことがみとれる。これらの焼土層は部分的に検出されたものではあるが、外堀内の町屋形成に大きく関与していることを示すものとして重要である。

以上推論を重ねたところもあるが、4 年間調査を担当した者として現時点で考えられる外堀と町屋の諸問題を提示し、今後の調査課題としたい。

（2）遺物について

調査では遺物収納コンテナに約 1,000 箱以上の膨大な近世遺物が出土した。このうち今回の報告で掲載したのは土坑出土遺物を中心としたもので、時期的には 17 世紀から 18 世紀後半にあたる。土坑以外の遺物、すなわち焼土層、整地層に関連する遺物については次報告に掲載予定であるので、ここでは掲載遺物を中心に特徴や問題点を指摘し、今後の調査や遺物の検討資料の一つとしたい。

出土した陶磁器は、肥前、萩、須佐唐津、京信楽、美濃瀬戸、備前、上野高取、輸入陶磁器からなる。今回の土坑出土遺物では、肥前陶磁、萩、須佐唐津陶器が多くを占め、他産地は少ない。さらに



円形アミかけ部分は井戸
赤…町割推定線

第228図 町割推定図(1/1,000)

18世紀後半以降からは他の消費地と同様瀬戸美濃が増加する傾向にあるが、地元の萩、須佐唐津の陶器の占める割合を大きく交代させるには至っていない。つまり江戸時代を通じて地元産の陶器が生活雑器の陶器の多くを占めていたことが、萩城下町の特徴である。今後17世紀代の焼土層の調査が進めば、江戸時代を通じた陶磁器組成の分析によって中国地方における日本海側の代表的な消費地例として良好な資料になるといえよう。

萩焼⁴⁾と須佐唐津⁵⁾の製品について触れる。両者は防長の代表的な陶器であり、茶陶として知られた萩焼は全国にも知られ、18世紀後半頃からは江戸などの消費地でも散見されるようになる。また須佐唐津の製品は特に播鉢が日本海の物資流通ルートによって、北陸などで出土が確認されている。これらはいずれも窯の調査がなされているが、消費地における動向は地元の防長よりも他地域での状況が明らかになりつつあった。今回の調査では地元消費地として多くの出土例が確認されたことにより、共伴する肥前陶磁の年代観と照合することによって萩、須佐唐津製品の時期決定が可能になると考える。

土坑出土資料では萩焼のうち藁灰釉碗がほとんどを占める。初期萩焼の特徴である貝目痕のある碗、皿は出土例が少ないことから、これらは土坑の時期よりも古いと考える。窯詰め技法として胎土目の製品がみられるが、そのうち皿、鉢には輪状の痕跡が残る目跡がある。これは粗砂を含む胎土でつくられた熟餅とよばれる窯道具の痕跡で、中央を指で押さえてくぼませることにより、接地面の痕跡が輪状になるものである。本文中では輪状の胎土目痕と表現している。ところで出土遺物のうち刷毛目装飾を施す碗、皿のうち肥前、現川の製品とは異なる刷毛目を有する一群がある。その中(98、426、1427、1556、1657などの皿)には輪状の胎土目痕を有するものがあることから、これらは萩焼の製品と推定される。窯出土資料にも胎土が橙色または褐色で白化粧ののち刷毛で掃くように施す刷毛目装飾の猪口、皿が少量あることから、遺跡出土の刷毛目碗、皿の中には萩焼製品が含まれる可能性があり、今後注意が必要である。また調査では町屋でありながら三足ハマ、トチン、匣鉢、土型などの窯道具が出土する。松本や深川から製品とともに持ち込まれたとも考えられるが、萩市中でもその詳細が不明な窯もあり、その存在を間接的に示しているものかもしれない。これらのことは萩焼が藁灰釉、土灰釉の碗、皿のみでなく、多様な器種構成であったことの一端を示すもので、さらなる萩焼の再検討が必要となろう。

須佐唐津の製品は基本的には灰釉(黄釉)を施す軟質な陶器で、窯詰めは胎土目積みやハマを使用する。播鉢は口縁を肥厚させ鉄釉をかけたもので胎土は軟質である。消費地としてはまとまった出土であるが、萩焼と類似する点もあり、今後窯跡資料を含め、製品の特徴を明らかにすることで、萩焼との区別化が望まれる。

また土師器の皿、焙烙、甕など土師質雑器が大量に出土した。このうち焙烙は関西系の焙烙とともに中世の特徴を残す把手付きの焙烙が出土し、在地産とみられる。またこの在地産焙烙を胞衣埋納容器として使用する習俗も明らかになった。

このような多くの出土遺物のうち、肥前、京信楽、備前、瀬戸美濃など他産地の陶磁器は萩城下町への物流の流れを示し、萩をはじめとする在地産の陶器、土器は防長の近世窯業に新たな視点を与える資料となるだろう。

この他注目すべき遺物は多いが、それらをすべて網羅することはできないので、特徴的な遺物につ

いて取り上げたい。

播鉢はその多くが先に述べた須佐唐津の製品であるが、他に唐津、上野高取、備前、堺の製品が認められる。その中で「長上」の刻印のある堺播鉢⁶⁾(609)は注目される資料である。18世紀前半～中頃のものであり、日本海側における堺播鉢の流通とその販路を考える上で良好な資料であろう。

荷札木簡は、商品名や人名、地名、日付が記され、当時の流通を知る上で重要な資料である。そのなかで、地名と人名が『地下上申』で確認できた荷札について以下に報告する。

2041の「吉田村」は現下関市吉田で、「庄屋篠原八兵衛」は『地下上申』の「厚狭郡吉田村肥田村石高境目書」の頁に「厚狭郡吉田村御蔵入庄や 篠原八兵衛」と記載される人物である。年号より享保13年(1728)ごろの人物と推定される。また2048の「周田八郎右衛門才判内」は熊毛宰判の代官とみられる人物で、『山口県近世史研究要覧』によれば就任期間は享保9年(1724)2月1日から翌10年(1725)2月9日であることが明らかとなった。これよりこの荷札は1724～1725年の限定された年代が与えられる。なお「才判」は宰判のことで、代官が支配する行政区域のことである。「才判」の文字が認められるのは先の2048以外に2027、2029があり、いずれも「才判」の前には名前が記されている。宰判名は享保以前は人名を付し、以後は地名をつける⁹⁾とされるので、2027、2028は18世紀前半とみられる。2047の「福田」は現阿武郡阿武町福田と厚狭郡山陽町福田の2通りが考えられるが、「庄屋 治右エ門」の名は「厚狭郡福田村石高境目書」福田村長府御領の頁に同名の庄屋がみられる。同一人物とすると「福田」は厚狭郡山陽町福田であり、文書の年号は享保13年(1728)となる。荷札の年代もこのころとみることができる。以上から、これらの荷札の年代は18世紀前半とみられ、出土した1-SK277、SK293の年代および出土陶磁器の時期決定に良好な資料となった。

以上のように調査によって明らかになった点もあるが、未だ不明な点や新たに解明すべき問題も多い。南片河町の調査が進むことによって、さらなる町屋の様相や特色ある出土遺物など資料が増加すると思われる。これらの問題点は今後の調査と出土遺物の詳しい検討によって十分に解明されていくものと考えられる。

注 1) 樋口尚樹「I 萩城跡外堀文献調査報告」『萩城跡外堀調査報告書』萩市教育委員会 1988。

2) 1)の文献でも、「蔵入再検申付候条々」(『山口県資料 近世編法制上』)より1間を6尺5寸としている。

3) 『山口県の地名』平凡社 1980。

4) 山口県教育委員会『萩焼古窯』1990。

5) 山口県教育委員会『須佐唐津窯』1983。

6) 嶋谷和彦「堺播鉢の生産と流布」『考古学ジャーナル』409 1996。

7) 『防長地下上申』第3巻 山口県地方史学会 1979。

8) 『熊毛町史』熊毛町 1992。

9) 山口県教育庁文化財保護課 吉積久年氏から御教示を得た。

10) 7)に同じ

版 圖



1-A~I区
(北から)



1-A~I区



1-A～I区 全景（北から）



1-E～H区（北西から）



1 地区 1 面 (北から)



1-F 区 1 面



排水溝60 (西から)



1-A・B 区 2・3 面 (西から)



1-C 区 2・3 面 (西から)



1-D 区 2・3 面 (西から)



1-B～D 区 2・3 面 (南から)



1-B 区 2・3 面 (南から)



1-C区 3面礎石群と石段（西から）



石垣43（南から）



1-C区 2面石列56（西から）



1-C区 石垣40（南から）



石垣28（北西から）



石垣28（西から）



1-H区 礎石160（西から）



1-G区 石垣52（西から）



集石107 (西から)



石列159 (北西から)



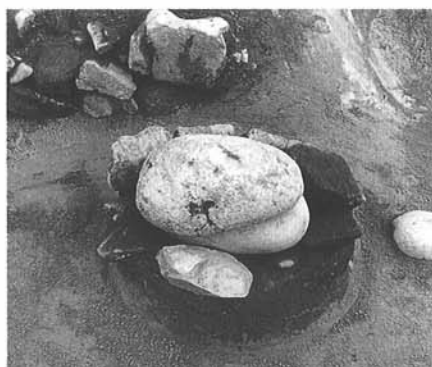
石垣130 東半 (北から)



石垣130 西半 (北から)



1-H・I区 4面石列 (北から)



1-F区
4面礎石



1-G区 4面石列 (西から)



1-F・G区
礎石列 (南から)



SK111 (西から)



SK68 (西から)



SK149 (西から)



SK149 土層断面 (東から)



SK49 (西から)



SK109・111 (南から)



SK123 (西から)



SK128・139 (西から)



SK92 (西から)



SK80 (西から)



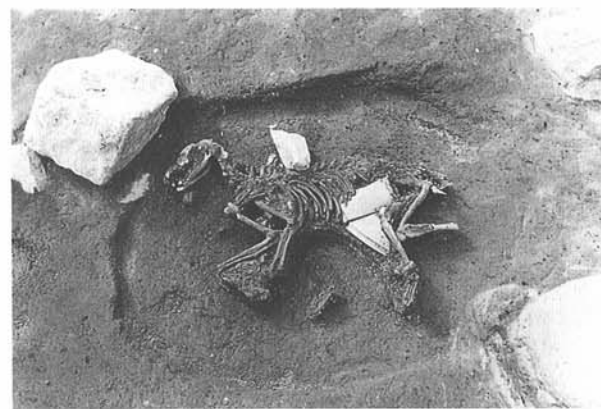
SK80 木製品出土状況 (北から)



SK80 木製品出土状況 (西から)



1-C区 礎石群とST114 (西から)



ST114 (北から)



1-H区 鯨骨出土状況 (東から)



1-H区 鯨骨出土状況 (東から)



埋甕 3 (西から)



埋甕82 (東から)



埋甕98 (北から)



埋甕96 (西から)



埋甕15 (西から)



埋甕110 (東から)



埋甕 8 (西から)



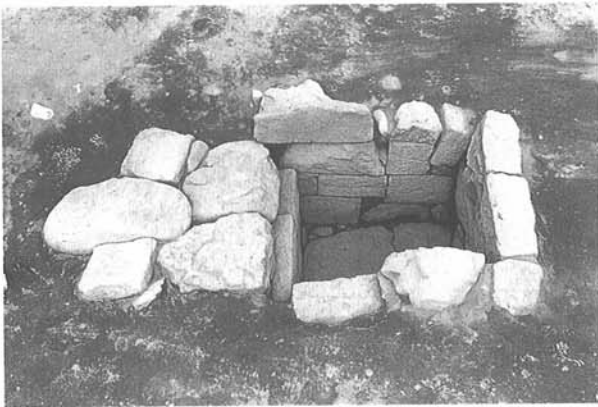
埋甕124 (東から)



埋甕79 (南から)



埋甕12 (西から)



SF16 (西から)



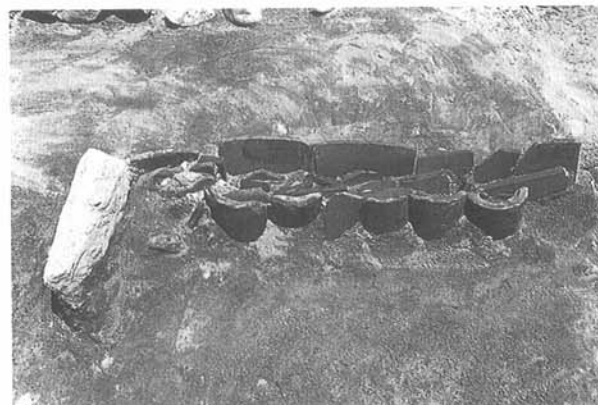
SF103 (西から)



SF42 (東から)



SF69 (北から)



瓦列54 (西から)



瓦溜61 (東から)



SE18 (西から)



SE18 (西から)



SE18 底面 (西から)



SE38 (北から)



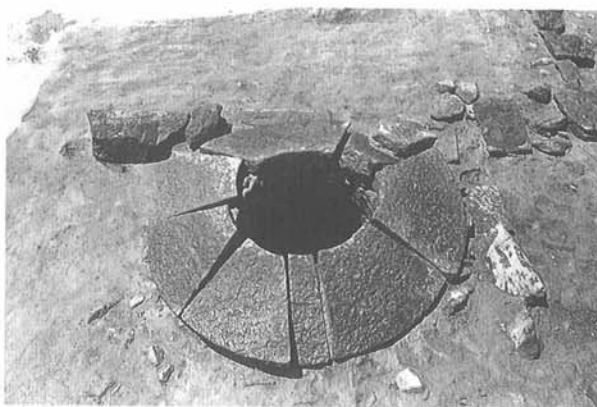
SE23 (西から)



SE19 (西から)



SE24 (南から)



SE25 (北から)



1-J～Q区
(西から)



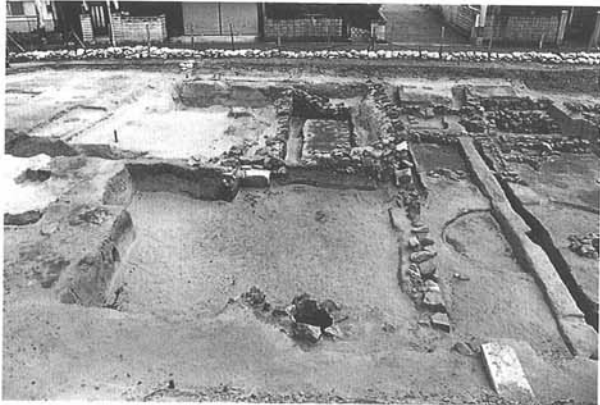
1-J～Q区 全景 (南から)



1-J~L区 2・3面 (西から)



1-L~N区 2・3面 (西から)



1-M~O区 2・3面 (西から)



1-J~Q区 2・3面 (南西から)



1-K区 石垣52 (西から)



石垣305 (南西から)



SK293 (北西から)



石列307 (北西から)



SX292 (西から)



SX292 瓦積状況 (南から)



SX314 (西から)



1-N区 石垣305・309 (南西から)



1-J~L区 4面遺構 (南から)



1-J・K区 4面遺構 (北西から)



1-M区 石垣327 (西から)



1-L区 石垣328 (西から)



SF253 (南から)



SF273 (西から)



SF304 (西から)



SK278 (西から)



1-J・K区 2面 (西から)



SK277 (南から)



SK281 (西から)



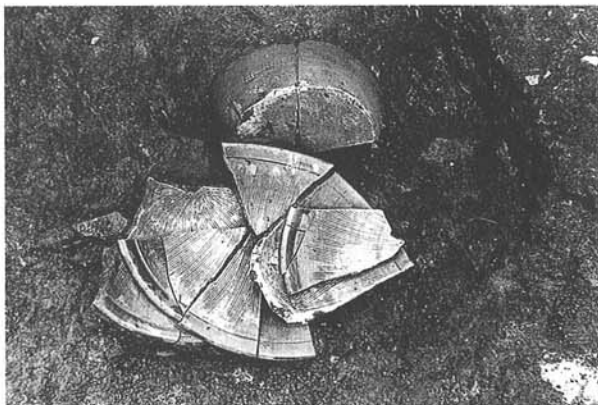
SK306 (西から)



SK280 (北から)



SK278・296、SX292 (北東から)



SK293 遺物出土状況① (北から)



SK293 遺物出土状況② (西から)



SE200 (西から)



SE201 (東から)



SE202 (西から)



SE203 (南から)



SE204 (西から)



SE205 (西から)



SE229 (西から)



SE209 (東から)



埋甕205 (西から)



埋甕210 (北から)



埋甕206 (東から)



埋甕248 (西から)



埋甕252 (北から)



埋甕208 (南から)



埋甕320 (東から)



埋鉢224 (西から)



1-0区 外堀傾斜面 (東から)



1-0区 外堀傾斜面 (北西から)



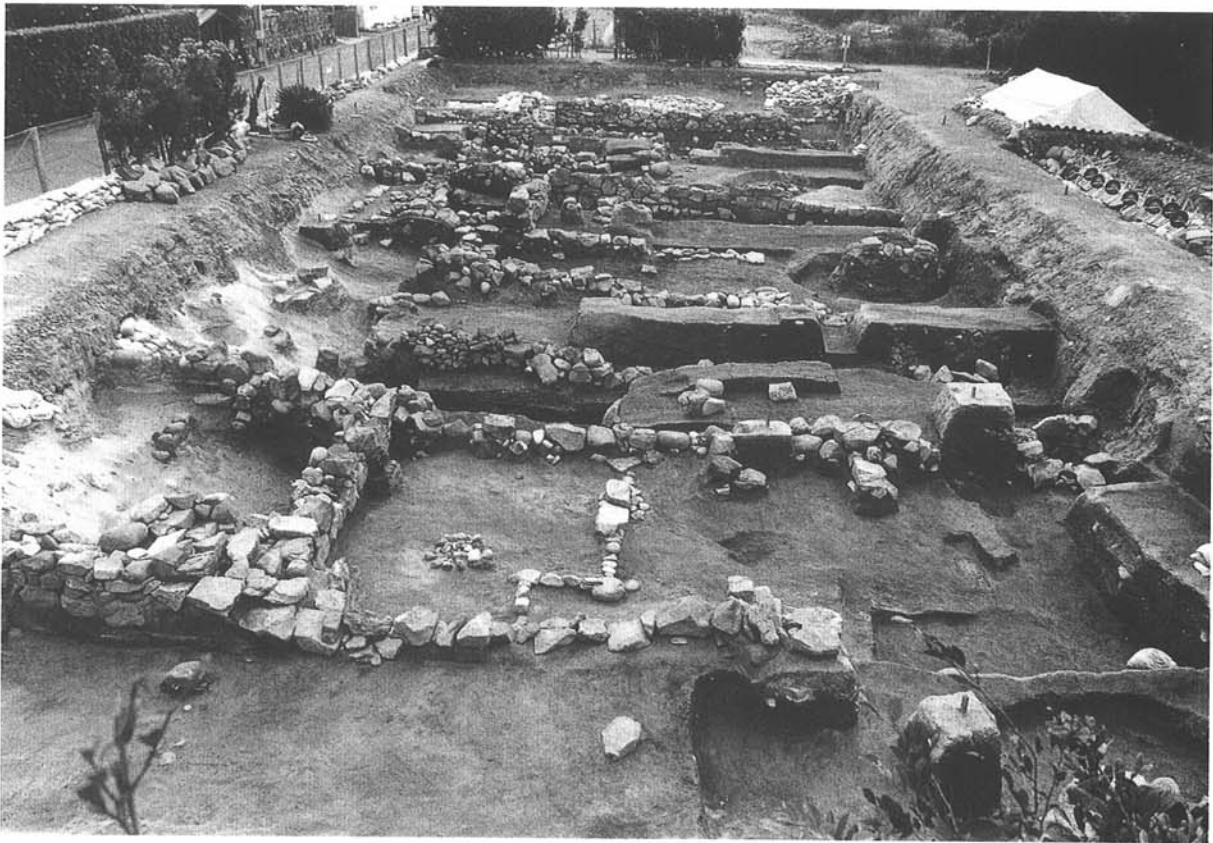
現道トレンチ土層断面 (北から)



現道トレンチ土層断面 (南から)



2 地区全景
(南西から)



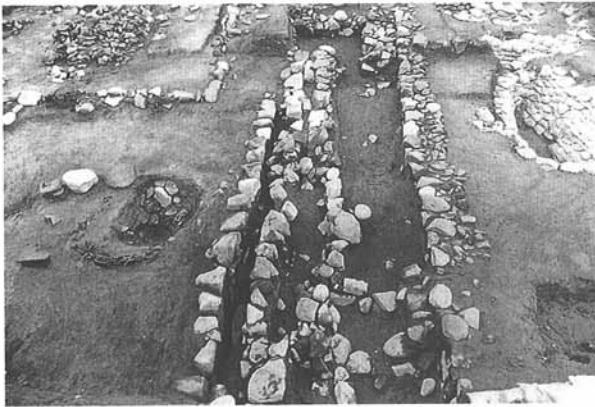
2 地区全景 (北から)



2 地区 1 面 (南から)



2-C 1 面集石遺構 (西から)



2-A・B 区 1 面排水溝14 (西から)



2-H・I 区 2 面 (西から)



2-F・G 区 2 面 (西から)



2-C・D 区 2 面 (西から)



2-E・F 区 2 面 (西から)



2-A～C 区 2 面 (西から)



SX46 (西から)



SX47 (南西から)



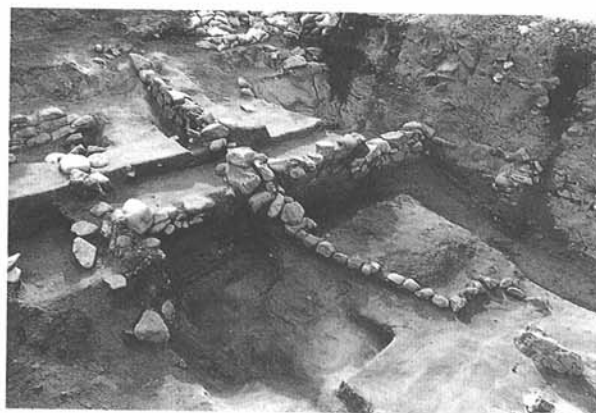
2-A区 石垣13 (北から)



2-A区 3面 (東から)



2-A・B区 3面 (北から)



2-A・B区 (北東から)



かまど67 (東から)



かまど67 (東から)



2-A~D区 3面 (北西から)



2-A・B区 3面 (西から)



2-C区 3面 (西から)



石垣58・65、SK79 (西から)



石垣66・63 (北から)



石垣66・63 (東から)



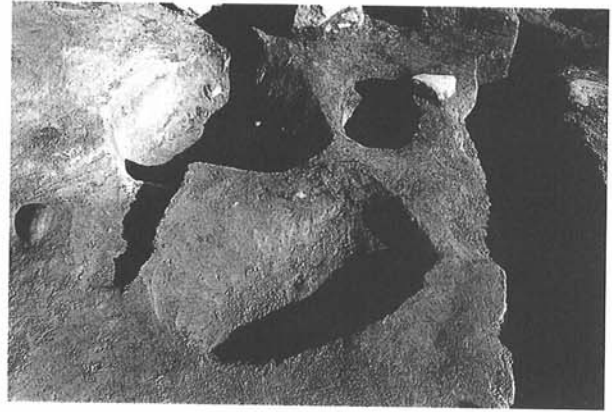
SK79 (北から)



2-B区 第1焼土層下 織部向付 (西から)



SK25 (西から)



SK70・72・73 (西から)



2-B区 トレンチ土層断面 (南から)



2-A区 焼土層堆積状況 (北から)



2-F区 焼土層堆積状況 (南から)



2-G区 焼土層堆積状況 (南から)



2-H区 焼土層堆積状況 (北から)



2-I区 焼土層堆積状況 (北から)



SE 1 (南から)



SE 6 (西から)



SE 4 (北東から)



SE 57 (西から)



SE 53 (北から)



SE 53 底面



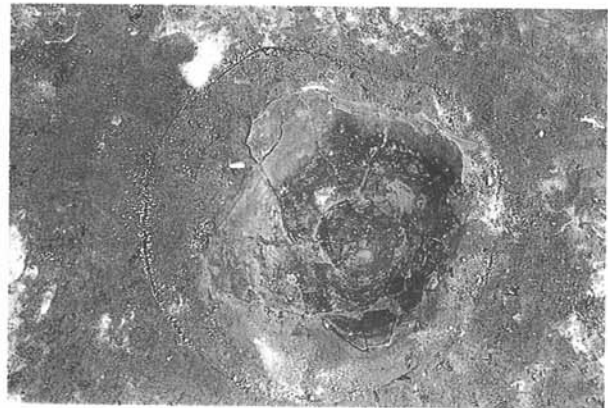
SE 76 (西から)



SE 81 (西から)



埋甕80 (西から)



埋甕40 (西から)



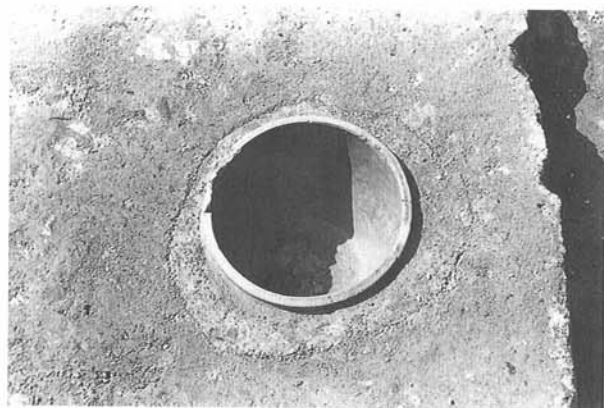
埋甕16 (西から)



埋甕5 (西から)



埋甕3 (東から)



埋甕48 (北から)



埋甕12 (北から)



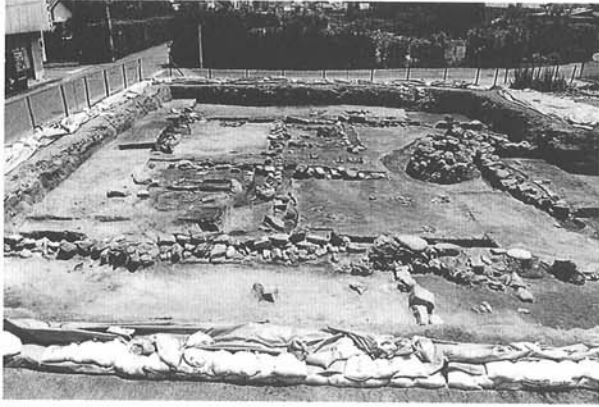
胞衣埋納遺構2 (南から)



1-X~A区 (北から)



1-X~A区 (南から)



1-X~A区 1面 (北から)



1面石列505 (北から)



1-Z・A区 2面 (西から)



1-Y~A区 2面 (西から)



1-Z・A区 2~3面 (西から)



1-X~A区 2面 (北から)



1-Z・A区 3面 (西から)



1-X~Z区 4面 (西から)



石垣507と外堀傾斜面（北から）



1-X区 外堀傾斜面（北から）



1-X・Y区（北から）



石垣507（西から）



石垣500 東半（北から）



1-X区 石段（西から）



1-A区 石垣535・石段536（西から）



1-A区 石垣535・石段536（北から）



かまど510～512 (西から)



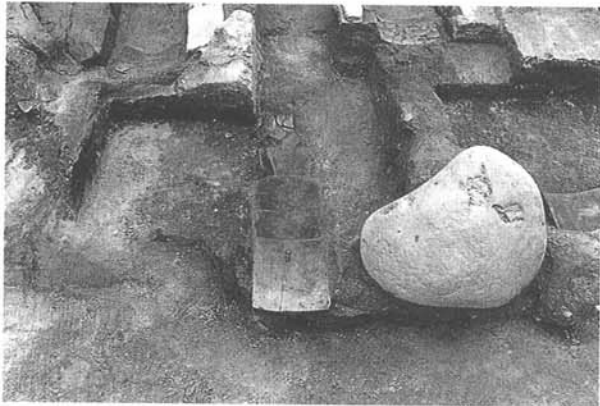
かまど510～512・517・518 (西から)



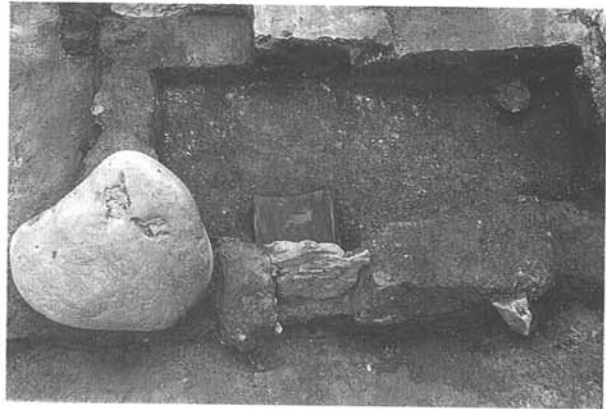
かまど510 (西から)



かまど511・512 (西から)



かまど517 (西から)



かまど518 (西から)



SK521 (西から)



SK516 (西から)



SK544 (東から)



SK549 (西から)



SK532 (東から)



SK556 (北から)



SK555 (西から)



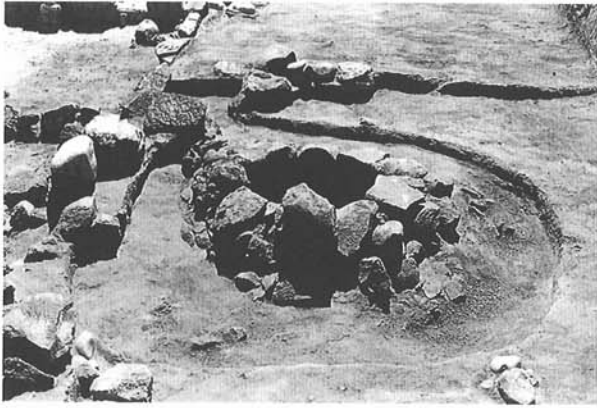
SK555 木製品出土状況



1-A 区 石製播鉢出土状況 (北から)



埋甕514 (西から)



SE504 1面 (西から)



SE504 (北から)



SE502・503 (西から)



SE501 (東から)



埋甕522 (東から)



埋甕515 (東から)



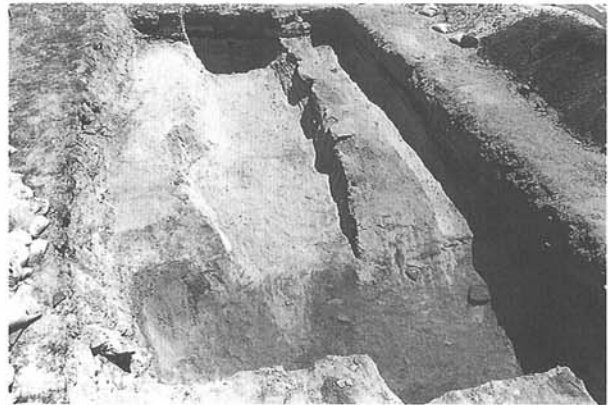
調査前 (南から)



1・2面 (北から)



3面 (北から)



3面下 (北から)



SK402 (東から)



埋甕404 (西から)



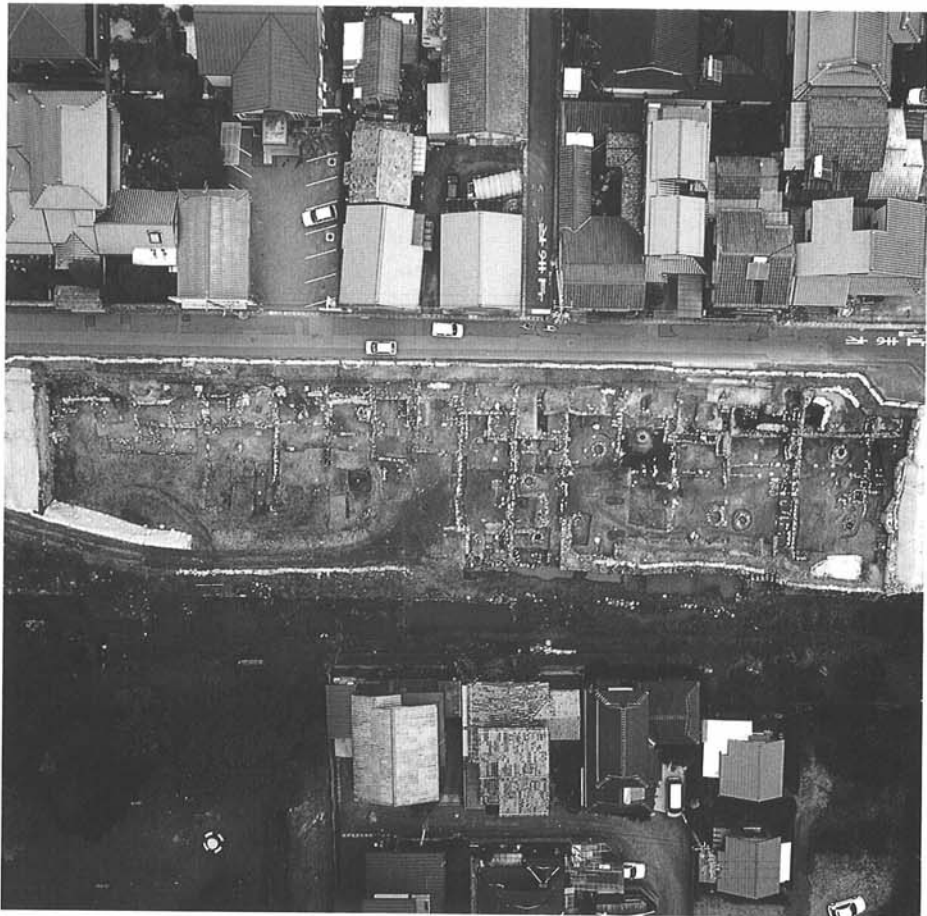
SK401 (東から)



調査後 (北西から)



3 地区全景
(南から)



3 地区全景



3-D・E区 1～2面（石垣15・23）（北東から）



3-A～E区 2面（南から）



3-A～E区
3面以下（西から）



3-A～L区 3面以下全景（北西から）



石垣15東半・石段（北から）



3-A区 2面（西から）



3-F区 2面（西から）



建物基礎154（南東から）



建物基礎155（北東から）



建物基礎156（南東から）



3-A区 3面（南西から）



3-B区 3面（南西から）



3-D区 3面と焼土層の広がり（西から）



石垣7（3-A区）（南西から）



石垣7（3-B区）（南西から）



石垣60（南から）



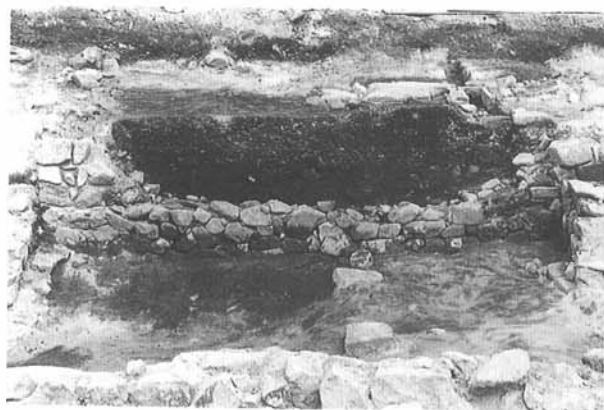
石垣65（北から）



石垣148（北から）



石垣7と石段（3-B区）（北西から）



3-B区 石垣7以東焼土層堆積状況（西から）



3-B区 石垣7裏込焼土層堆積状況(南から)



3-C区 石垣7直下炭化部材出土状況(西から)



石垣41・54(南西から)



3-B区 3面以下(西から)



石垣166・167(西から)



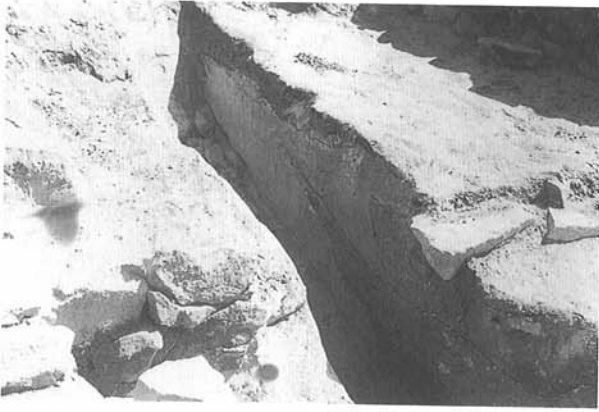
石垣164・165(西から)



石列141(北西から)



石垣147(北から)



3-A 区 外堀傾斜面 (北西から)



石垣55北半 (西から)



3-G 区 2面 (西から)



石垣59 (南西から)



3-I 区 2~3面 (西から)



3-K 区 3面以下 (西から)



石垣142 (南西から)



石垣143 (西から)



SK136 (西から)



SK131 (西から)



SK91 (西から)



SK92と瓦囲い (北から)



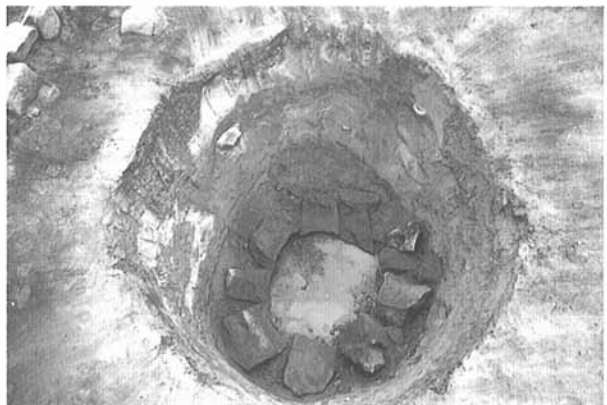
SX96 (北から)



SX138 (西から)



SX149 (北から)



SE163 (SK131下部) (西から)



SE 6 (東から)



SE45 (南西から)



SE29 (北から)



SE36 (北から)



SE62 (南西から)



SE107 (北から)



SE122 埋土堆積状況 (北から)



SE122 (西から)



埋甕 1 (西から)



埋甕22 (西から)



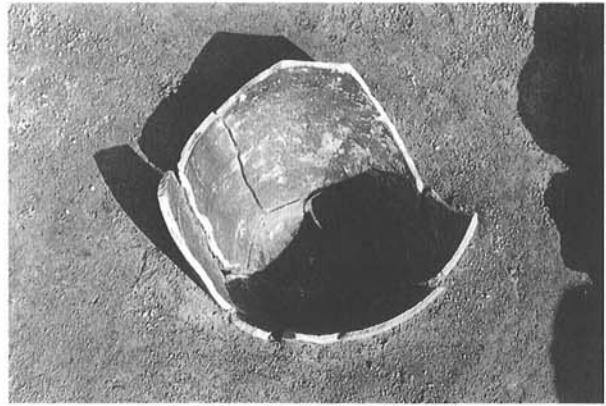
埋甕32 (北から)



埋甕40 (西から)



埋甕46 (右)・47 (左) (北から)



埋甕97 (南から)



埋甕103 (南から)



埋甕108 (北から)



埋甕117 (北から)



埋甕134 (西から)



SX160 (木枠) (西から)



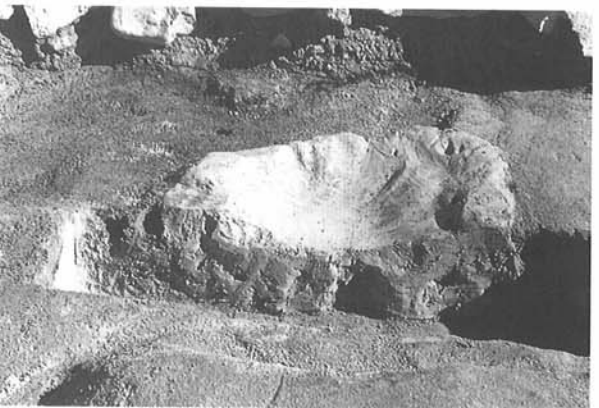
SX161 (木桶) (東から)



SX162 (木桶) (南から)



SX93 (西から)



SX157 (粘土土坑) (西から)



SX42 (西から)



胞衣埋納遺構 3 (北から)



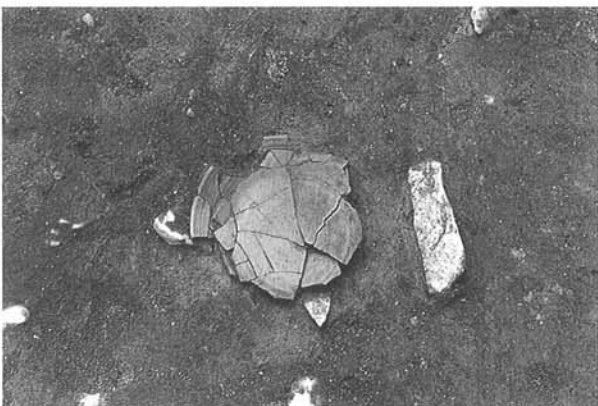
胞衣埋納遺構26 (北東から)



胞衣埋納遺構34 (北から)



胞衣埋納遺構48 (西)



胞衣埋納遺構50 (北から)



胞衣埋納遺構51 (西から)



胞衣埋納遺構52 (北から)



胞衣埋納遺構58 (南から)



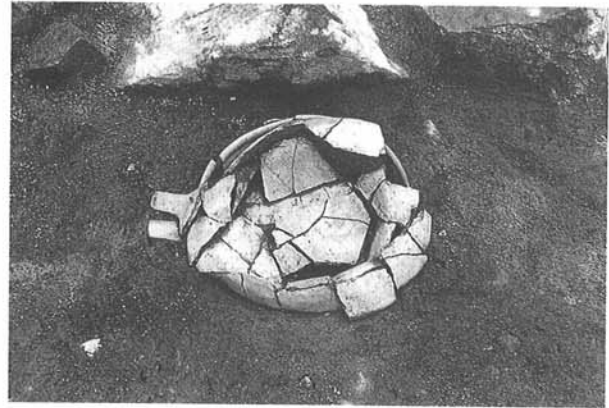
胞衣埋納遺構85 (南から)



胞衣埋納遺構95 (南から)



胞衣埋納遺構115 (西から)



胞衣埋納遺構118 (西から)



胞衣埋納遺構119・120 (西から)



胞衣埋納遺構121 (西から)



胞衣埋納遺構118・119・120・121 (西から)



胞衣埋納遺構120下部 (西から)



かまど33 (西から)



かまど84 (西から)



かまど158 (東から)



かまど84・158 (東から)



かまど43 (南西から)



かまど67 (北から)



かまど71 (西から)



かまど72 (南から)



かまど43・44・67・72 (西から)



かまど64 (西から)



かまど73 (東から)



かまど81 (北から)



かまど83 (南から)



かまど81・83 (南から)



かまど100 (東から)



图版48



1-SK49 ②



1-SK80 ①



1-SK80 ②



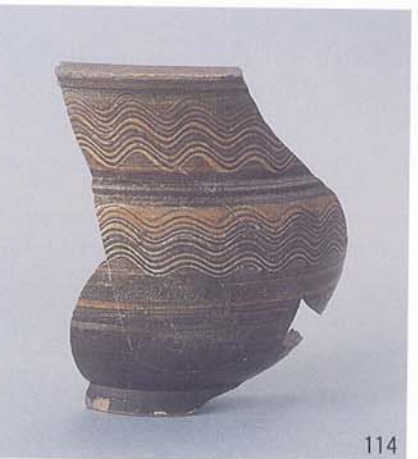
1-SK92 ①

图版50





图版52





图版54



SK92 ⑥



1-SK109 ①



图版56





196



210



212



197



211

SK109 ④



216



215



217



223



222



224



227



219



220



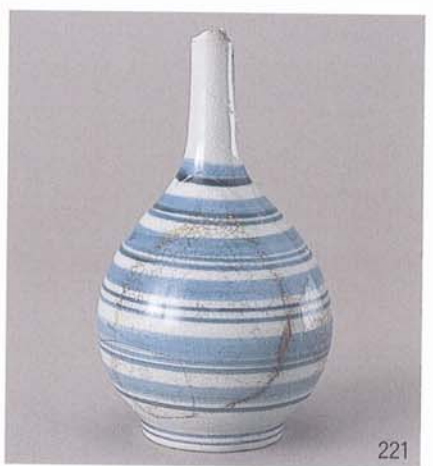
226



224

1-SK111 ①

图版58





248



245



247



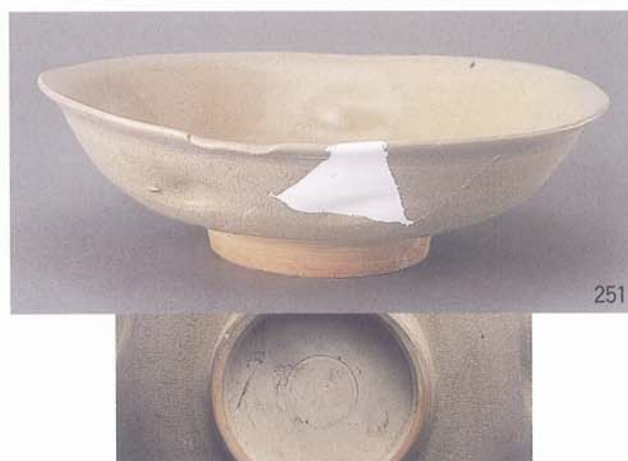
244



249



250



251



253



261



266



255



259



254



262



257



258



256



260

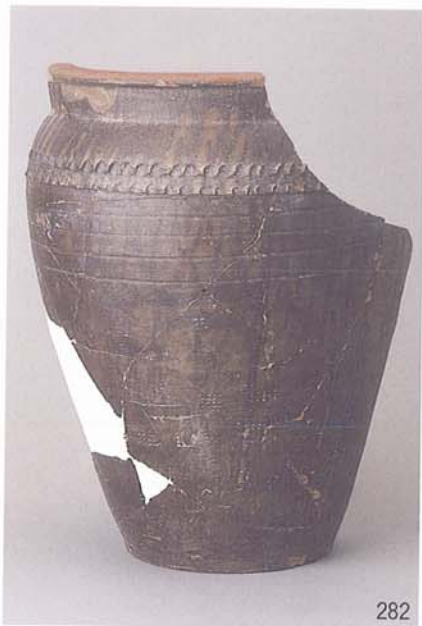


267

图版60



1-SK111 ④



1-SK128



图版62





図版64









図版68



458



461



460



459



464



466



465



462



467



463



469



468



473



471



470



476



475



474

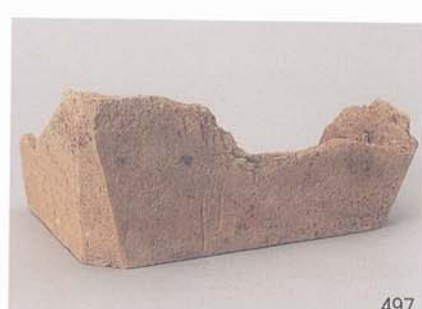


SK142 ③



1-SK143 ①

図版70



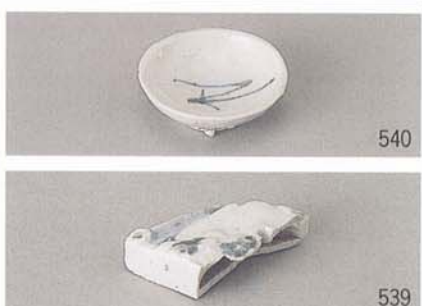
1-SK143 ②



1-SK145 ①

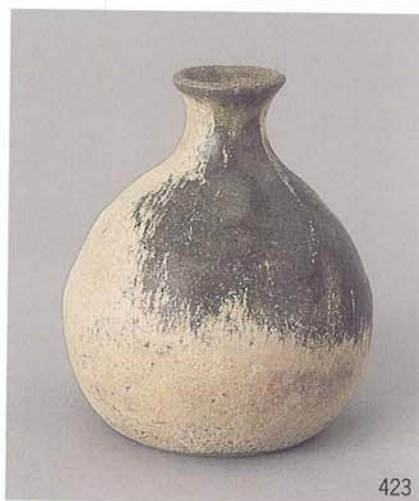


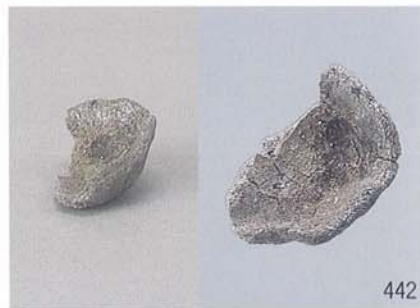
図版72





図版74





図版76



439



440

1-SK149 ③



528



529



531



530

SK68



568



569



570



574



575



572



573

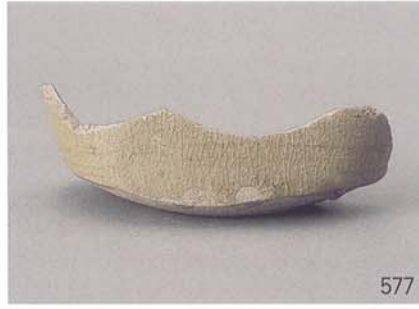


571

1-H区 鯨骨包含層 ①



576



577



578



579



580



581

1-H区 鯨骨包含層 ②



582



583



584



585



587



586



588



589



586



591



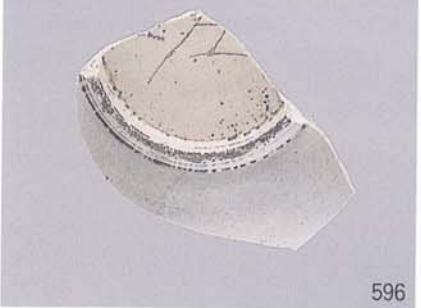
592



593

1-C区 石段整地層 ①

图版78





612



613



614



615

1-SX314



616



617



618



619



620



621



625



626



622



623



624

1-SK276 ①





图版82





1-SK276 ⑤



1-SK277 ①

图版84

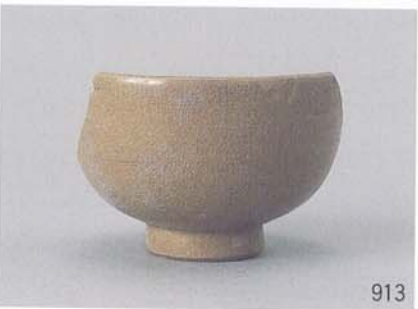
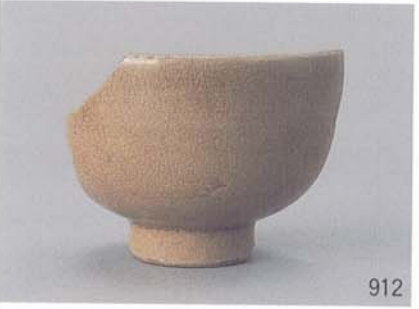






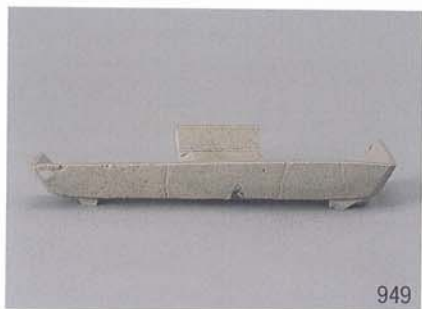


图版88





图版90



949



950



951



953



954



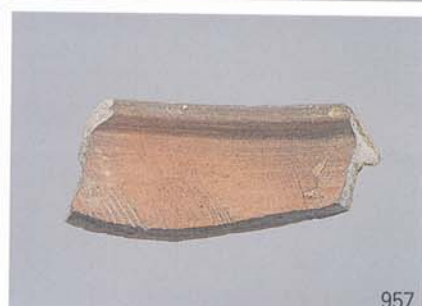
952



955



956



957



959



958



962



961



960



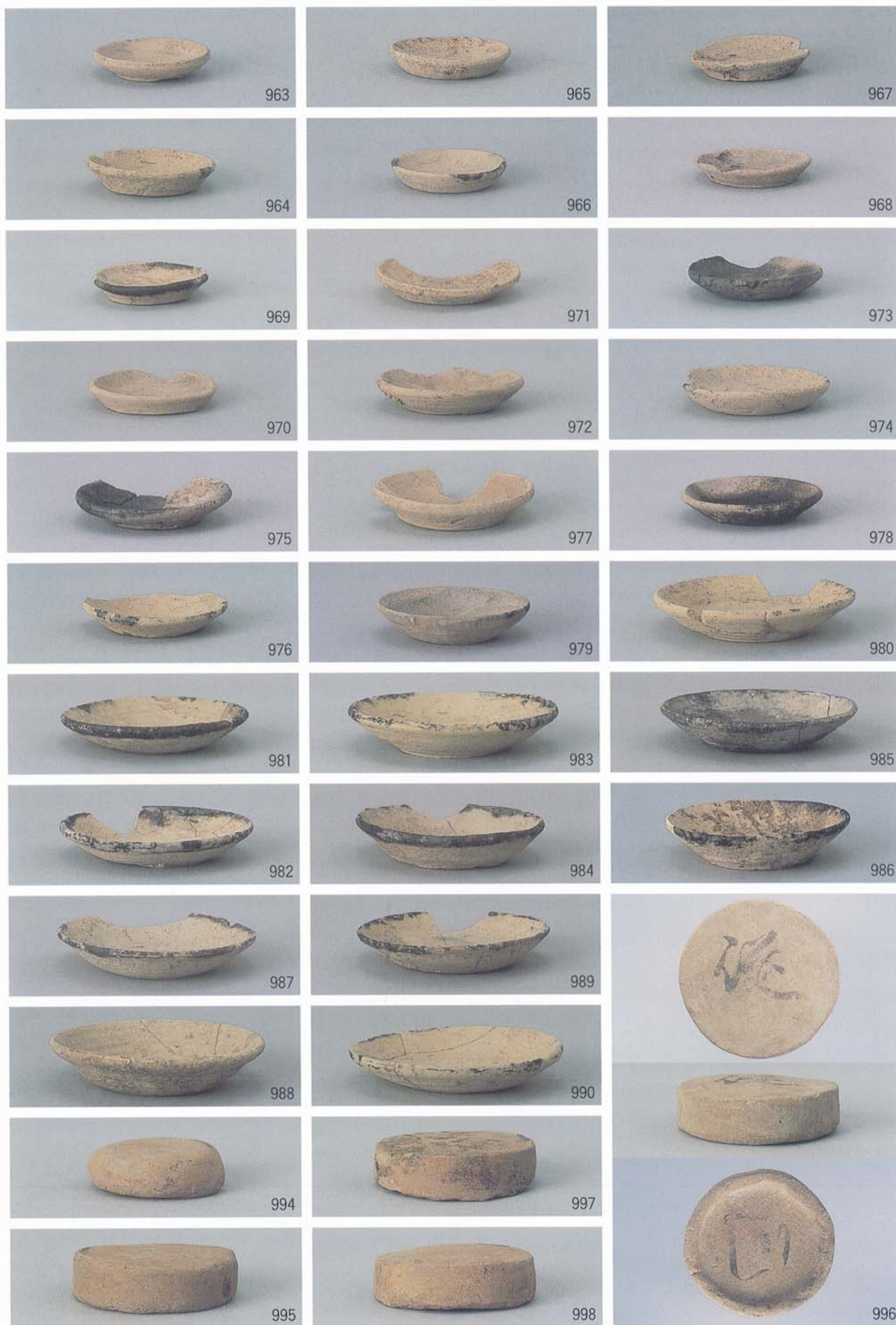
1001



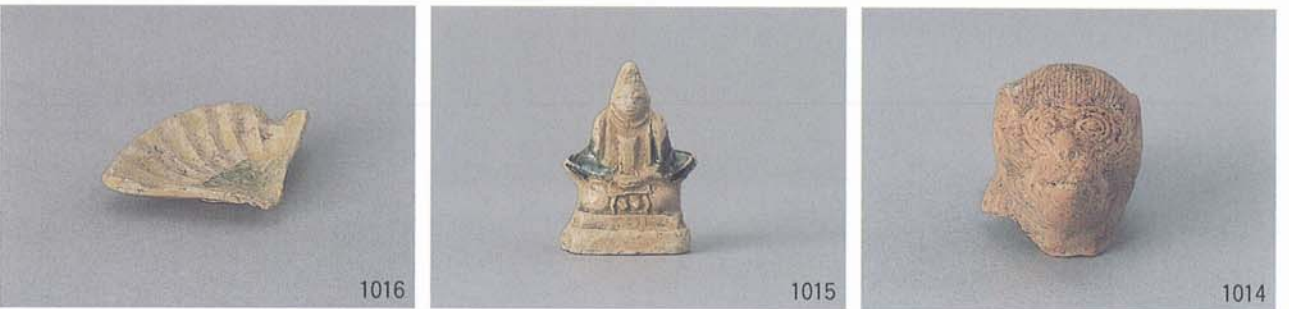
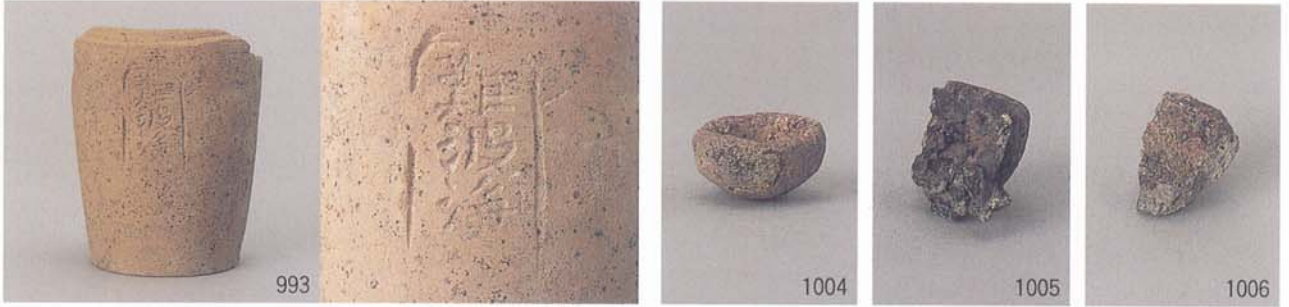
1003



1002

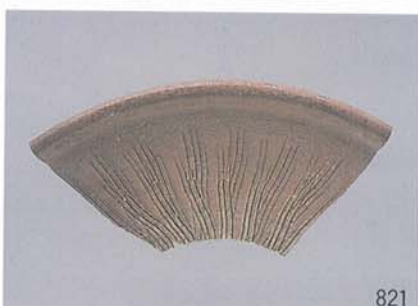


图版92





图版94





692



693



694



695



696



697



698



708



706



707



701



703



702



704



705



699



700







747



748

SK281 ③



1019



1018



1021



1023



1024



1026



1017



1020



1025



1028



1022

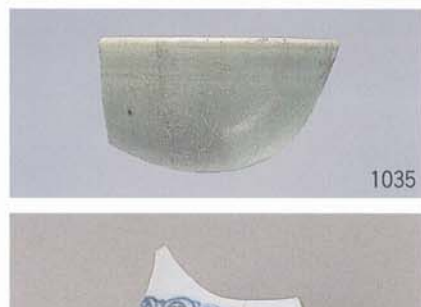


1027



1034

1-SK293 ①

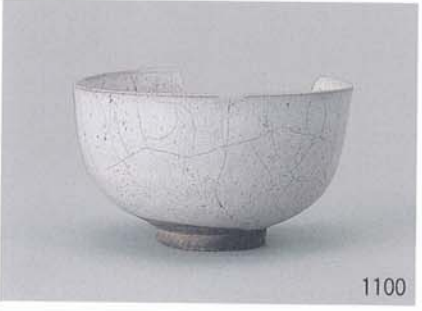


图版100



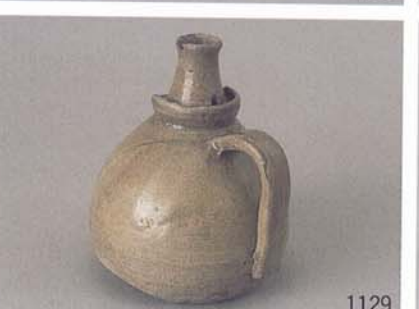
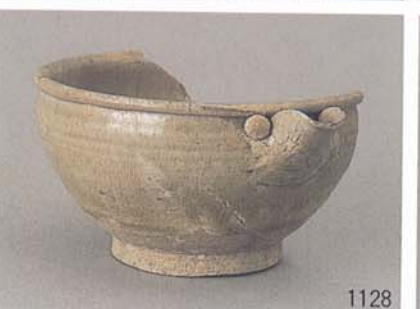


图版102



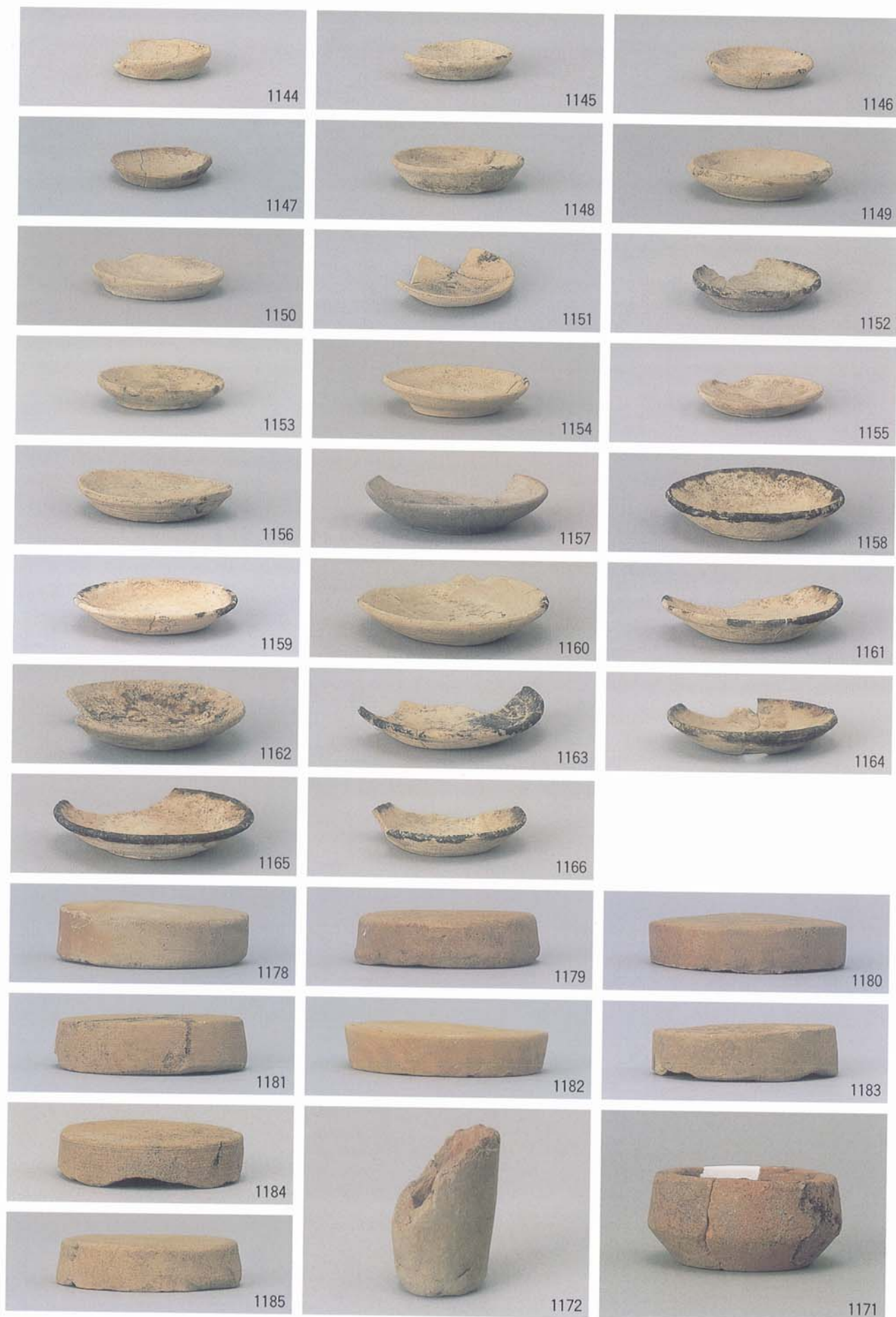


图版104





图版106





1173



1174



1175



1176



1177



1169



1170



1167



1168



1186



1187



1188



1189



1190



1192



1194



1195



1193

図版108





图版110





786



787

SK306 ③



1207



1211



1210



1212



1209



1213



1208



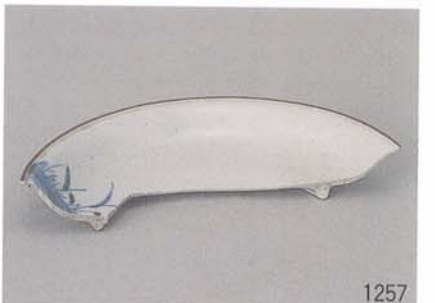
1206



1214

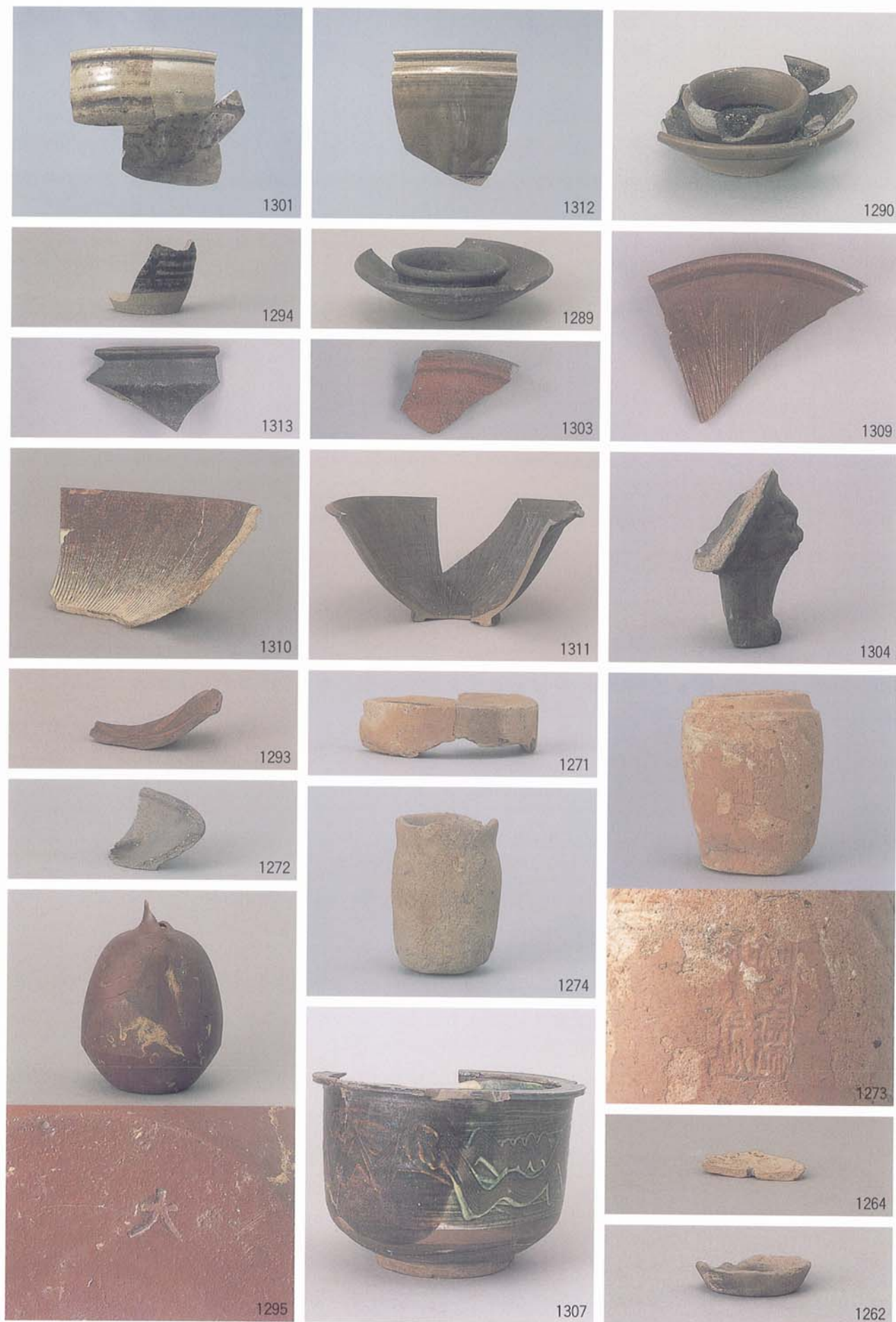
1-SX292

图版112



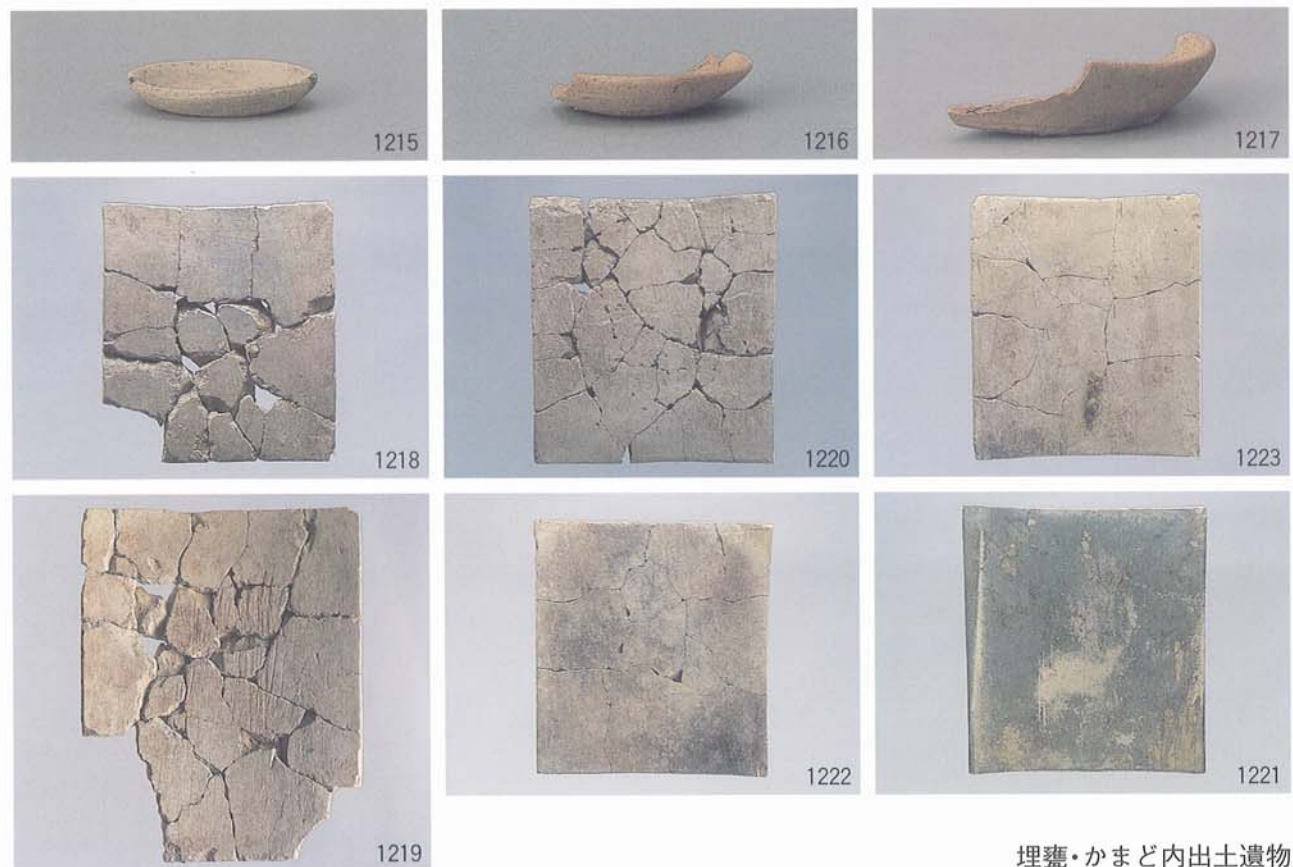


图版114





1-SK555 ④



埋甕・かまど内出土遺物

図版116



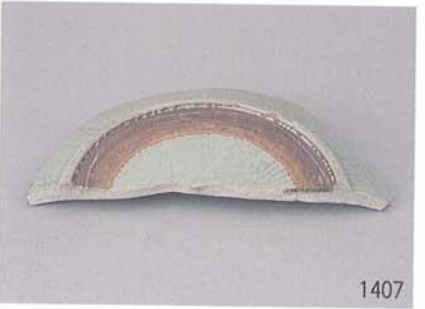


1-SK516 ②



1-SK532 ①

图版118





图版120



1437



1469



1466



1467



1468



1421



1427



1431



1432



1429



1473



1474



1472



1475



1471



1436



1438



1439



1443



1440



1441



1442



图版122





1333



1339



1346



1334



1336



1345



1335



1337



1342



1340



1338



1344



1347



1341



1343

1-SK534 ②



1349



1348



1351



1350



1355

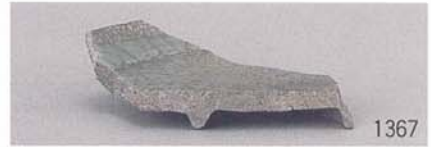


1358

1-SK556 ①

图版124





1-SK556 ③



1地区 北端区①

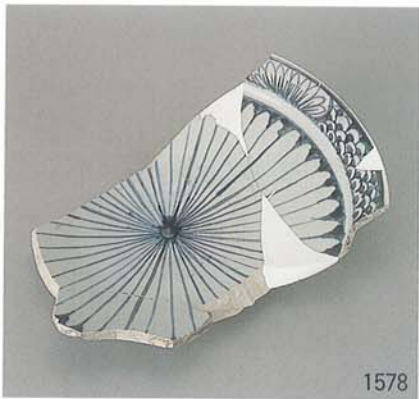




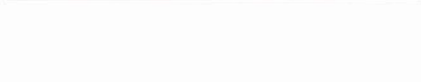
図版128



2-SK25

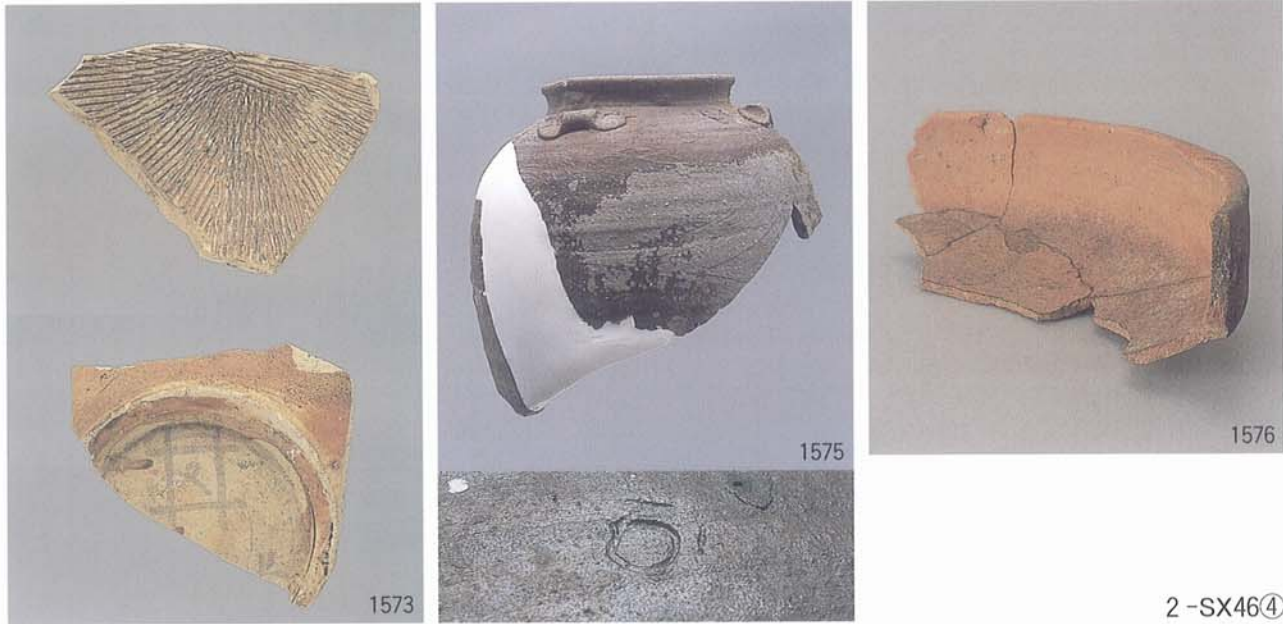


2-SX46 ①

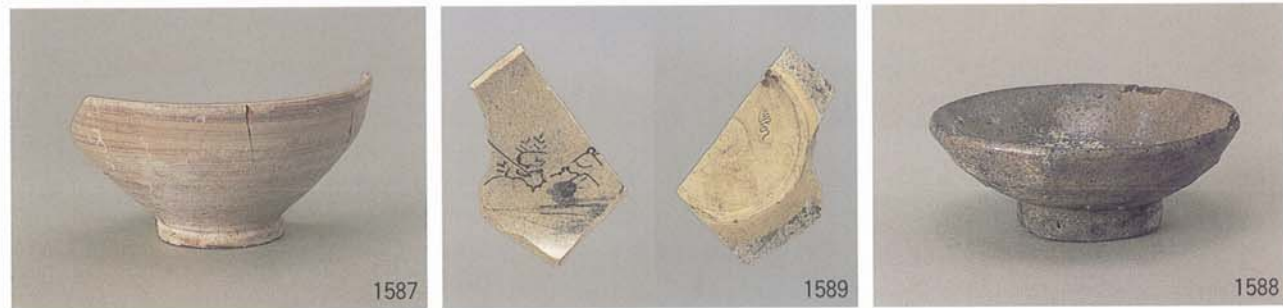


图版130





2-SX46④



2-SX47 ①

図版132



2-SX47 ②



2-SK72



图版134





图版136





3-SK136 ④



3-SX96 ①

図版138



1698



1701



1699



1705



1700



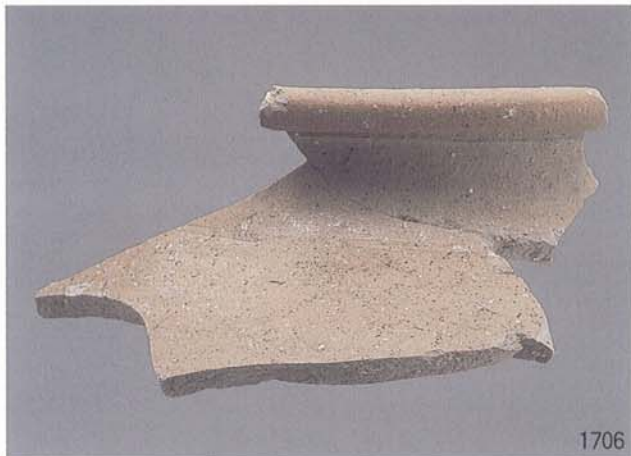
1704



1702



1703



1706

3-SX96 ②



1713



1711



1712



1714

3-かまど33



1707



1708

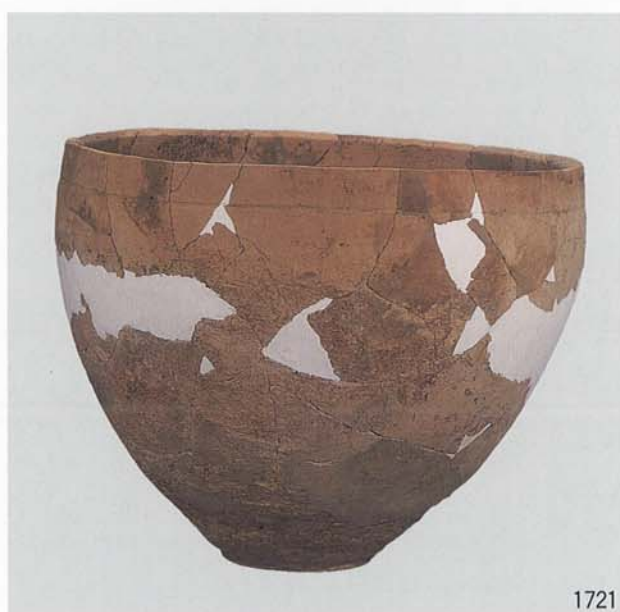


1709

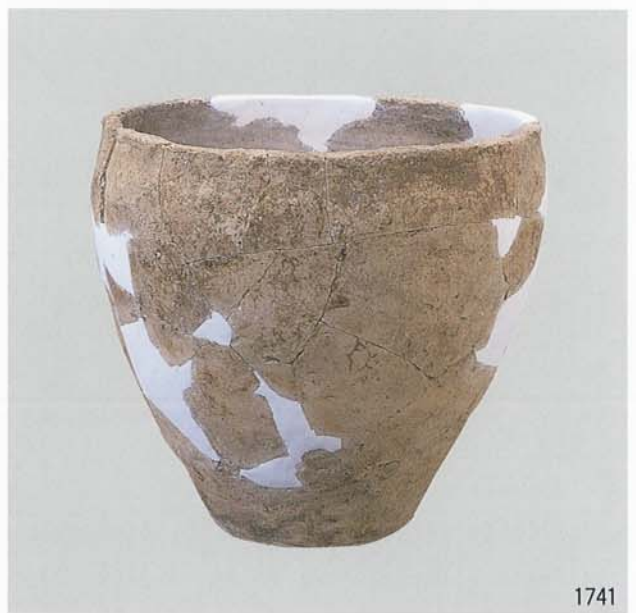
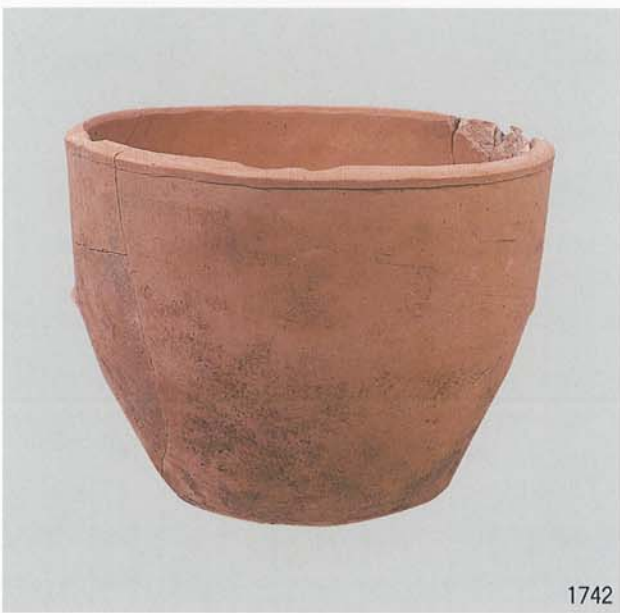
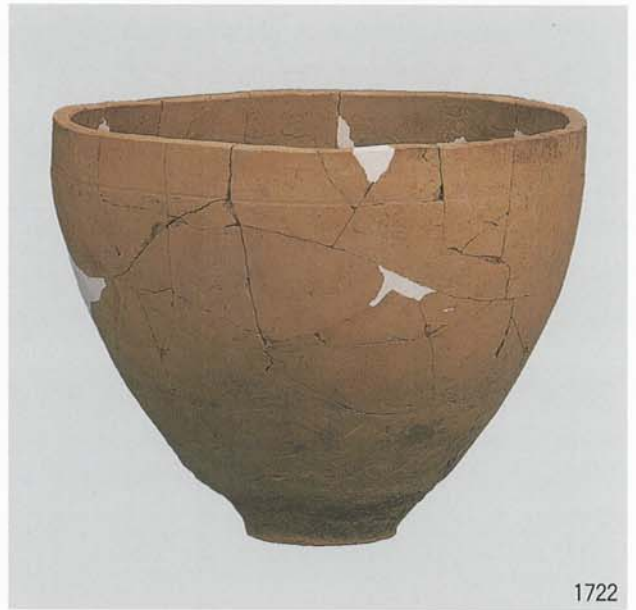


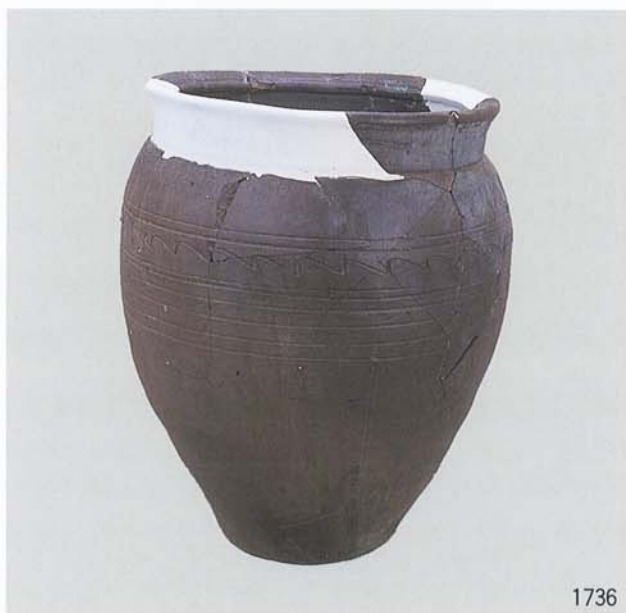
1710

3-かまど84



图版140





1736



1735



1720



1715

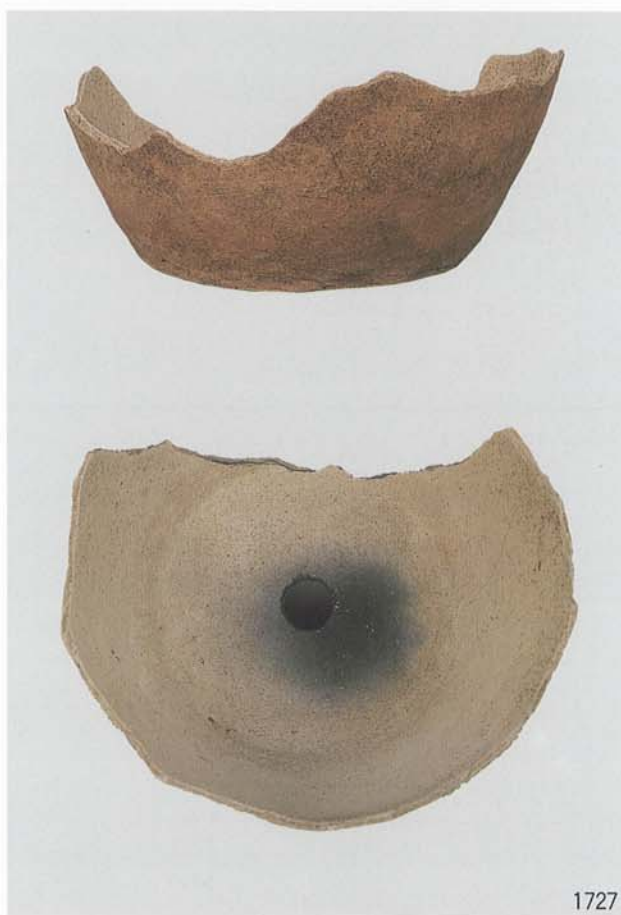


1729



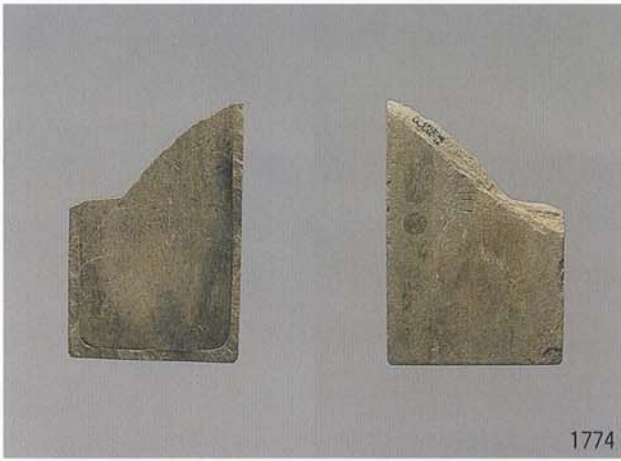
1730





図版144





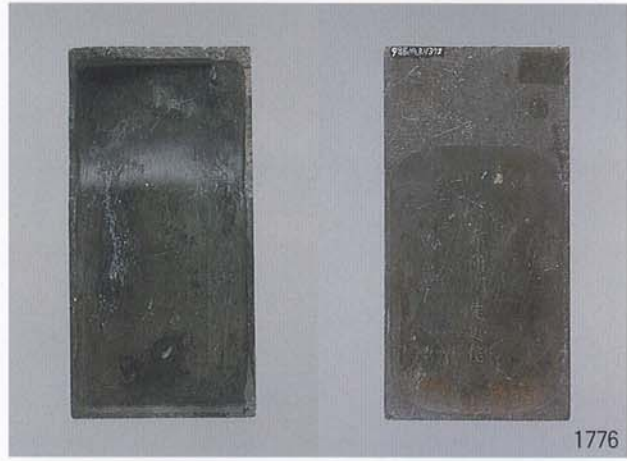
1774



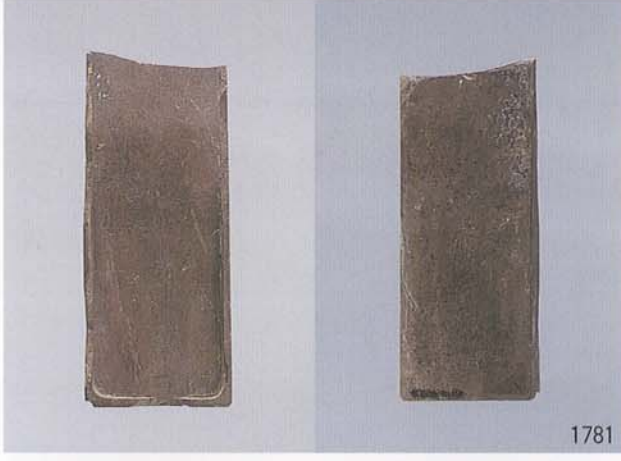
1775



1777



1776



1781



1779



1771



1780



1769



1773



1772



1770

図版146



1778



1782



1783



1790



1789



1788



1786



1787



1784



1791



1792



1785



1793



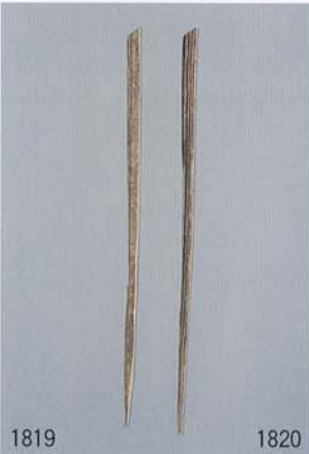
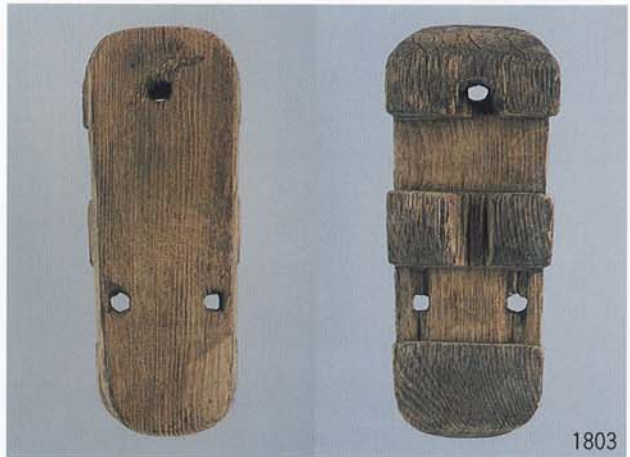
1795



1794



1796





1828



1829



1830



1832



1836

SK80



1837



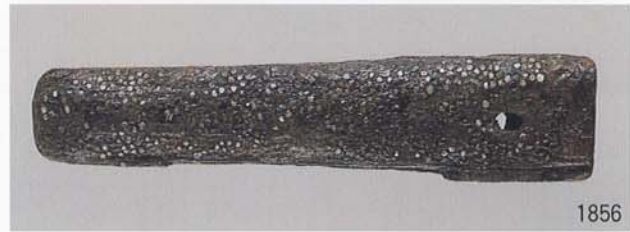
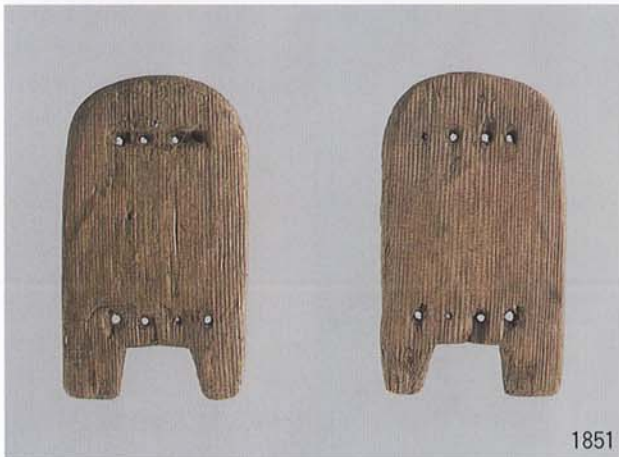
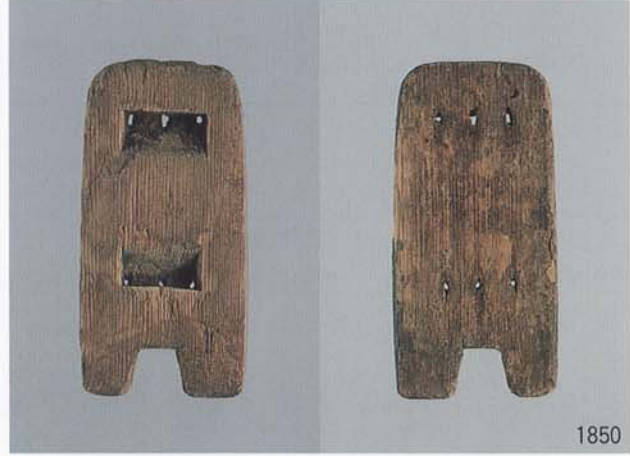
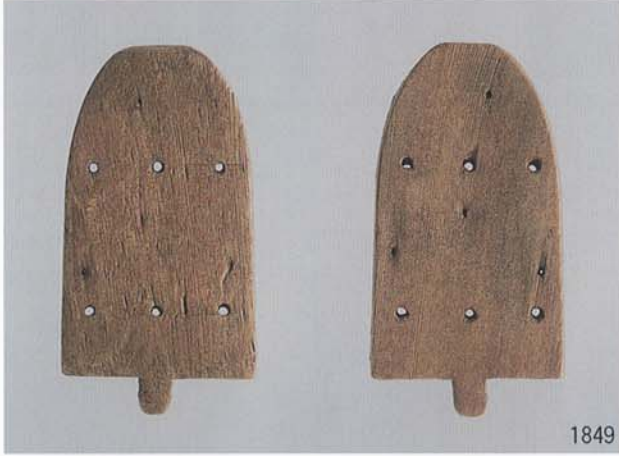
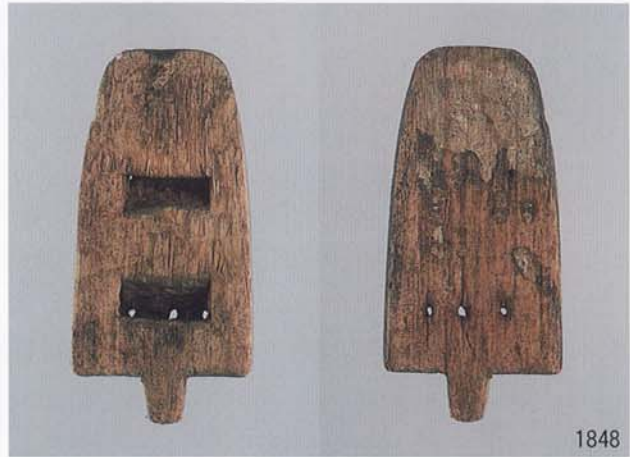
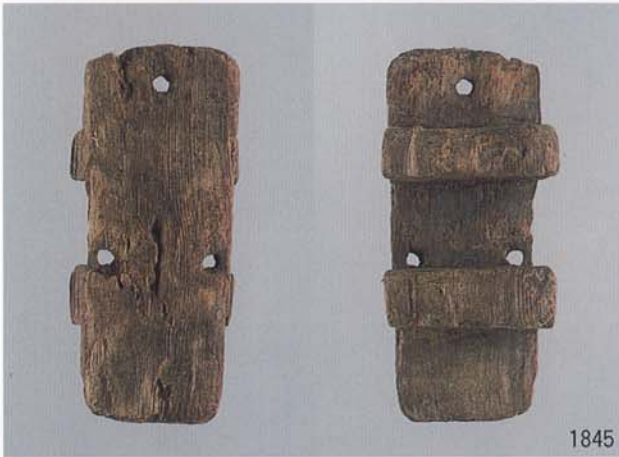
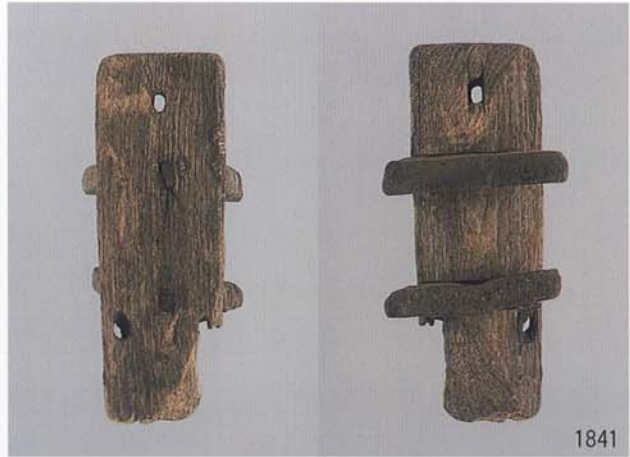
1840



1842



1843

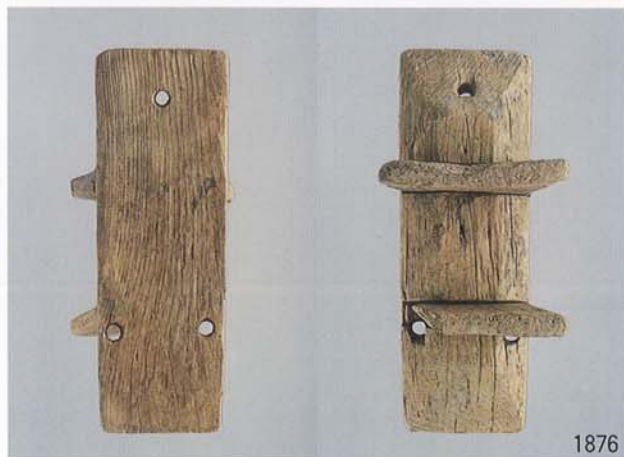
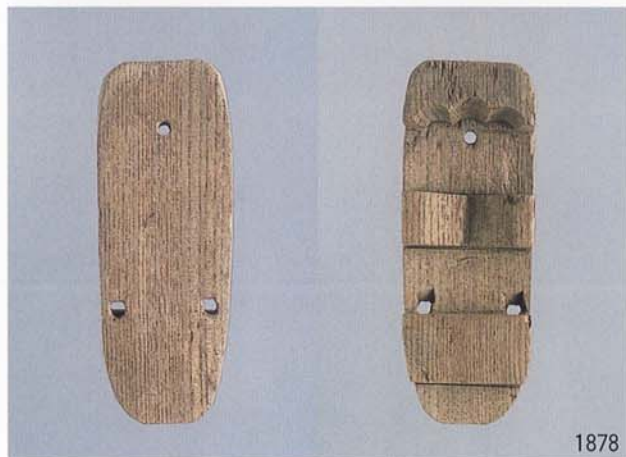
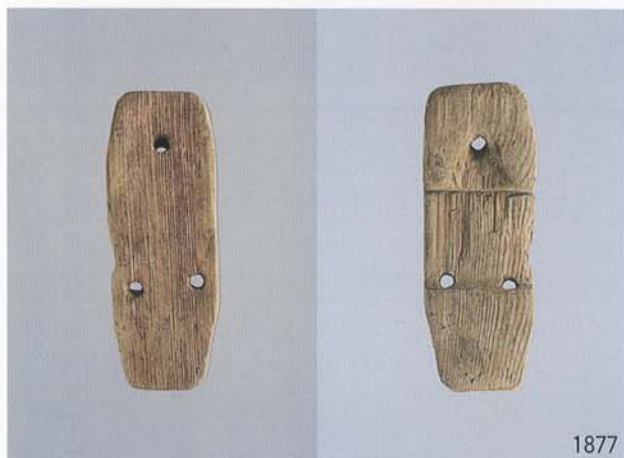
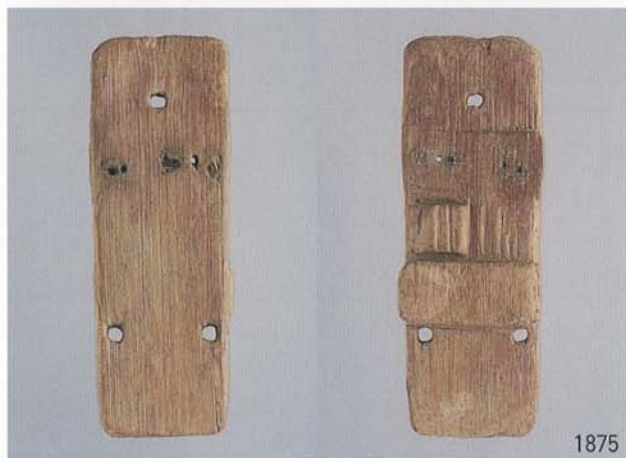
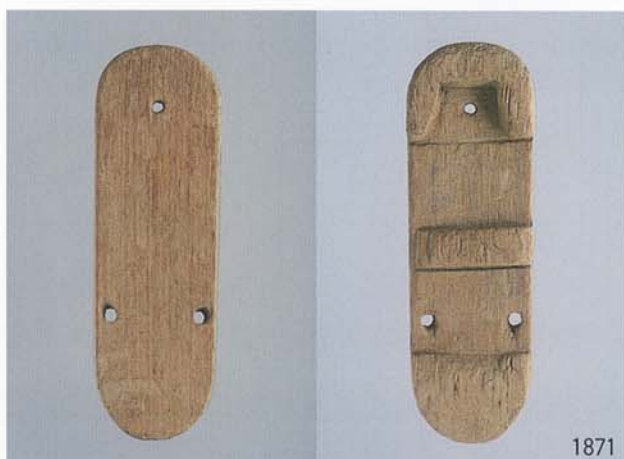


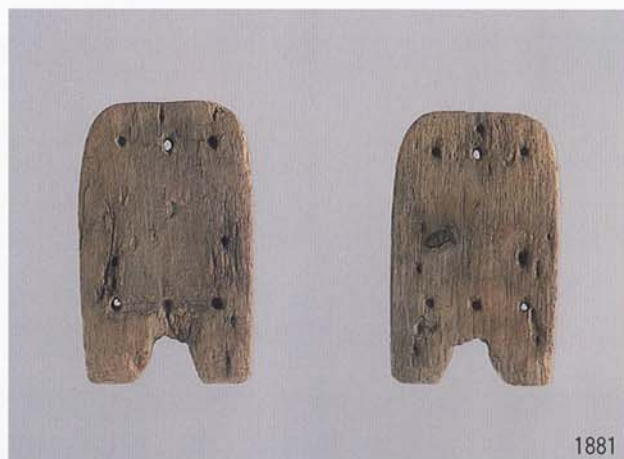
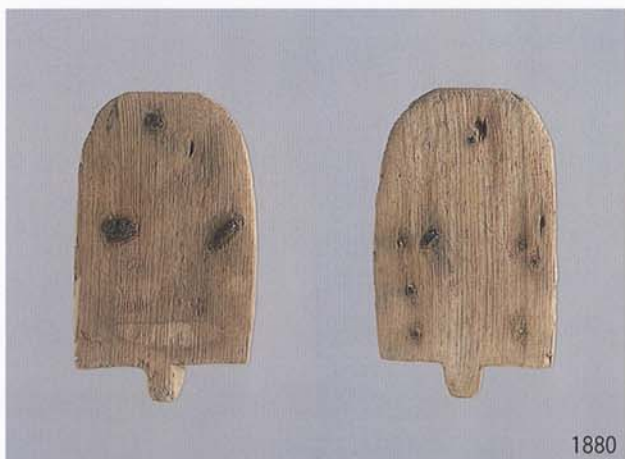
図版150



SK92

木製品 ④







1893

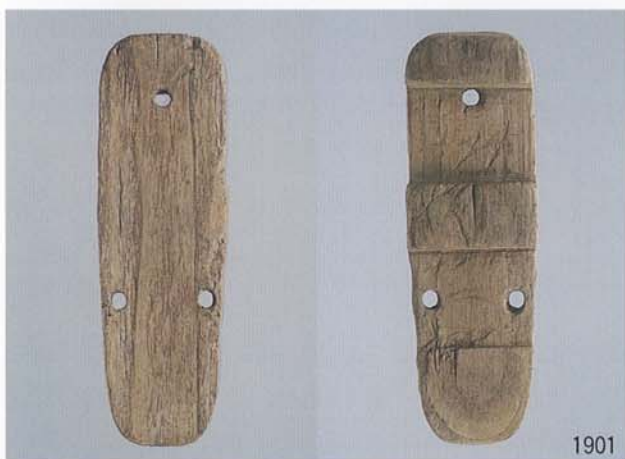


1886

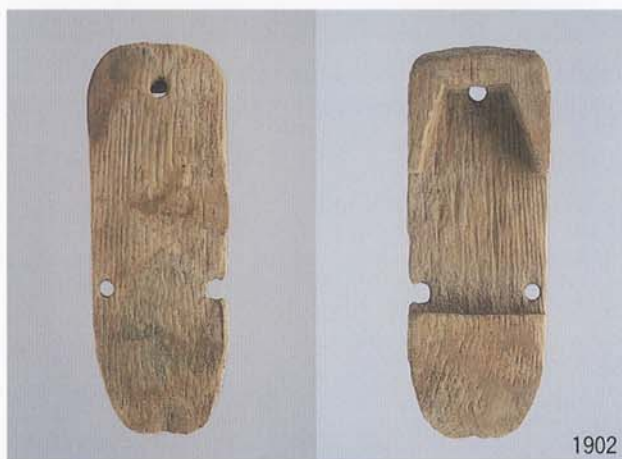


1895

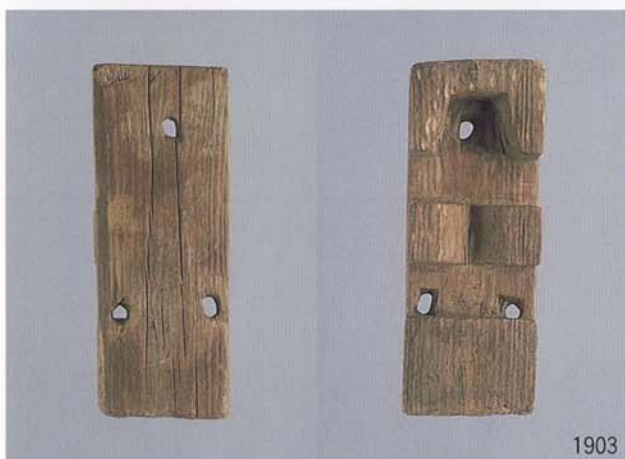
SK277



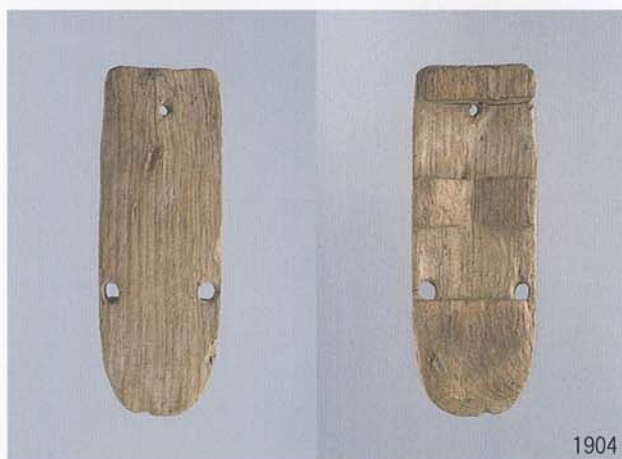
1901



1902



1903



1904

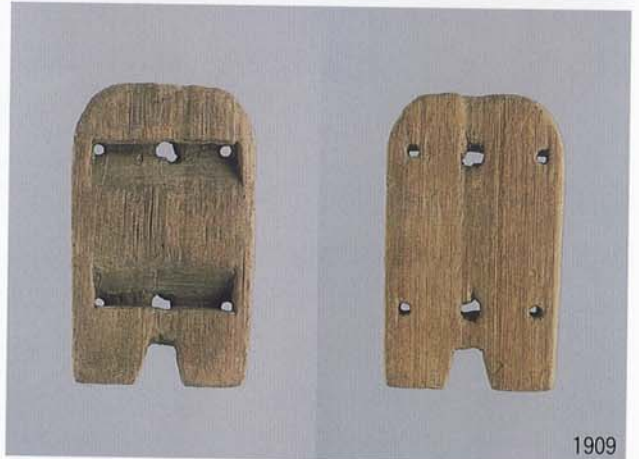
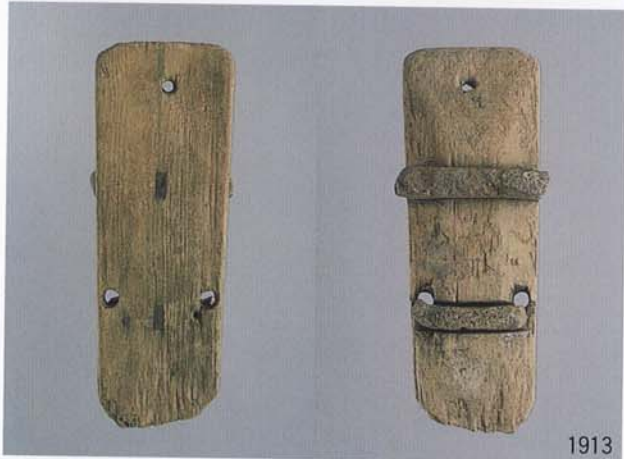
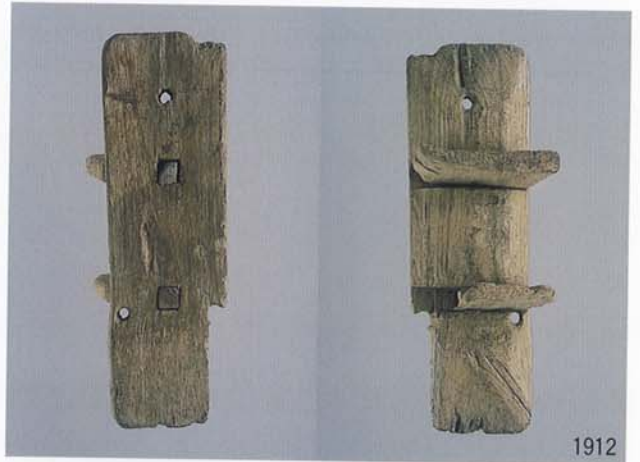


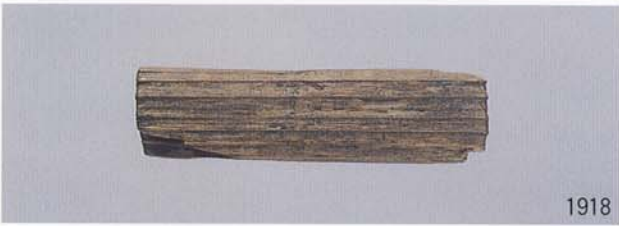
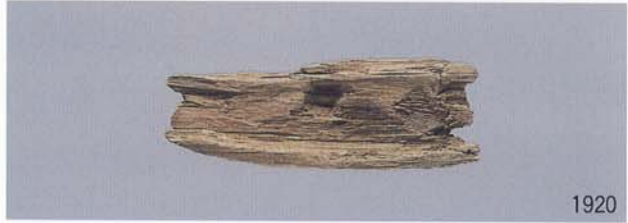
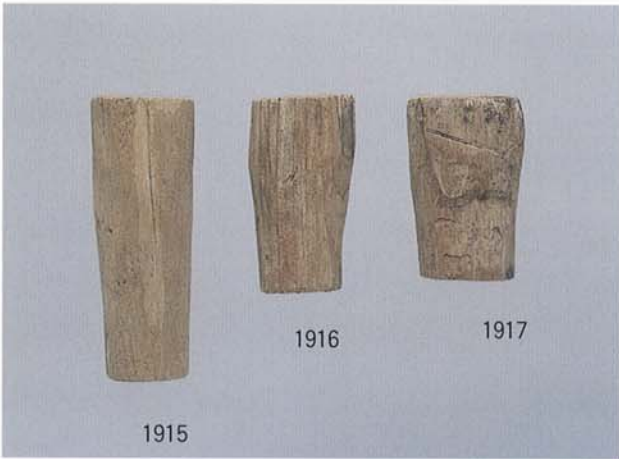
1905



1906

木製品 ⑦ SK293





1921

1920

1918

1933

1938

1942

1936

SK293

1867

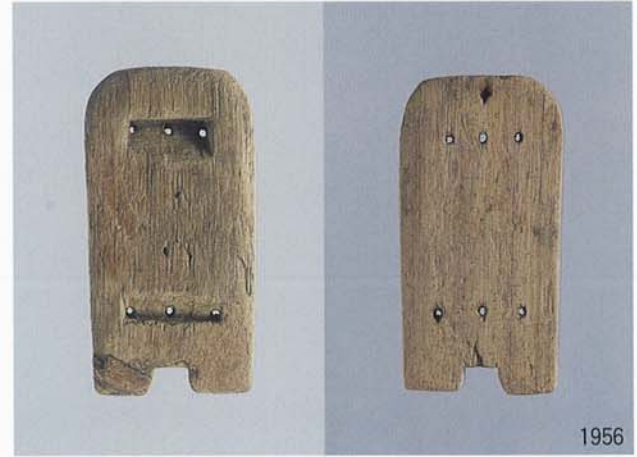
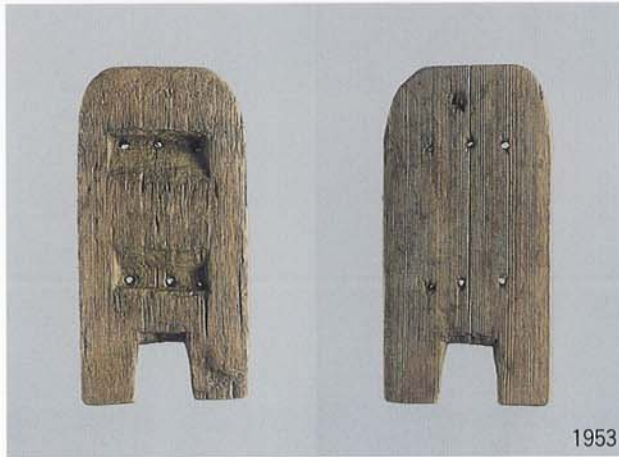
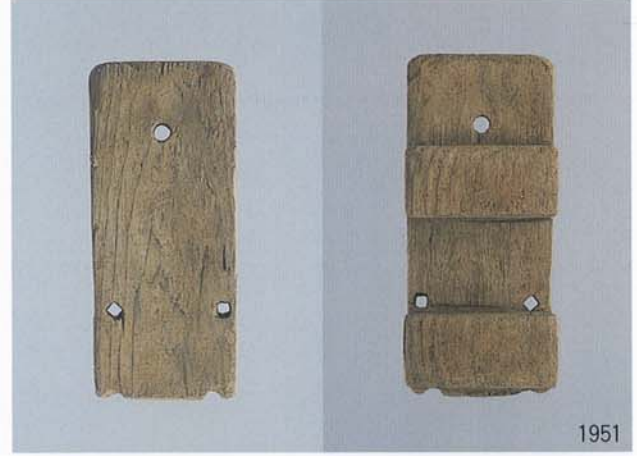
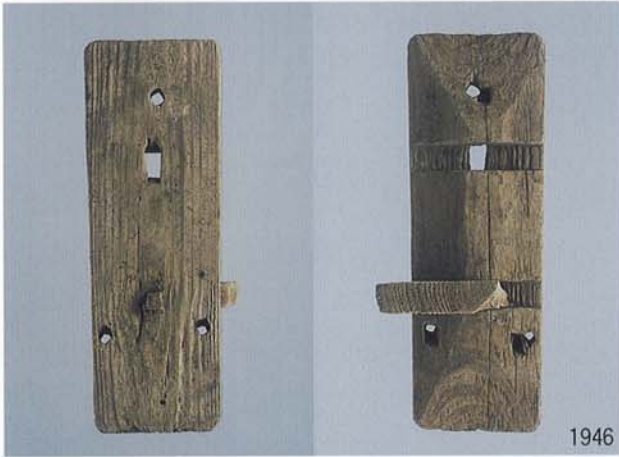
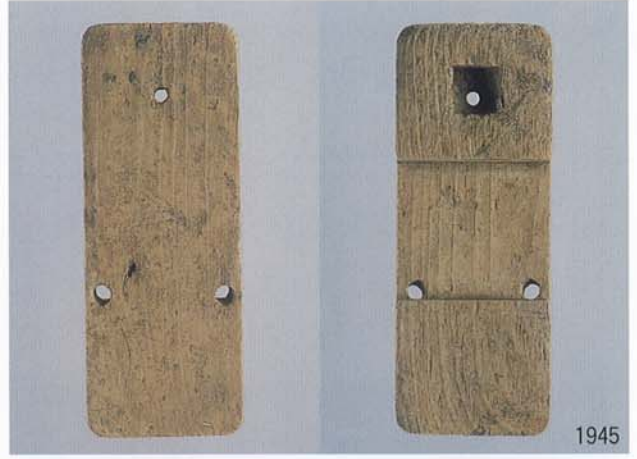
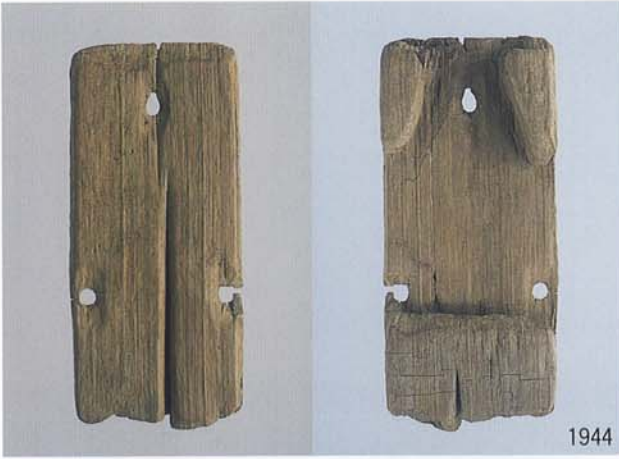
1868

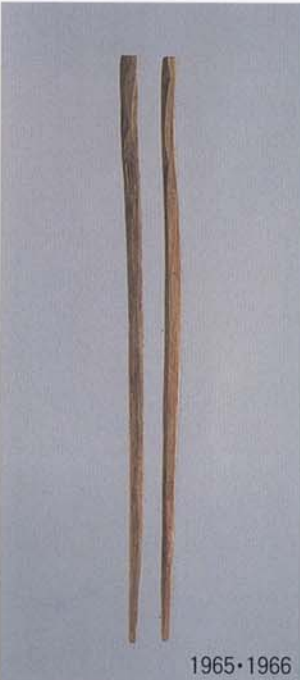
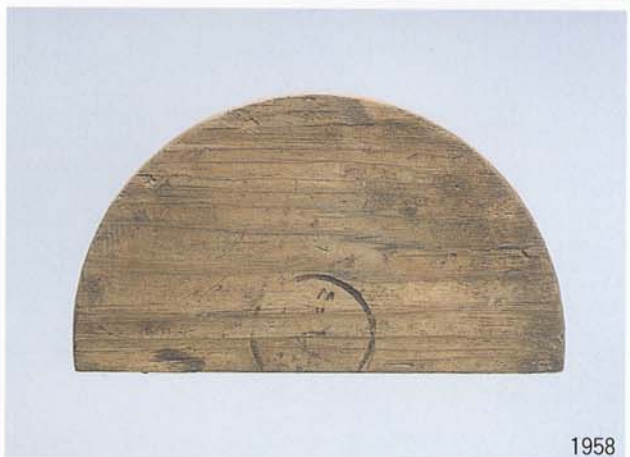
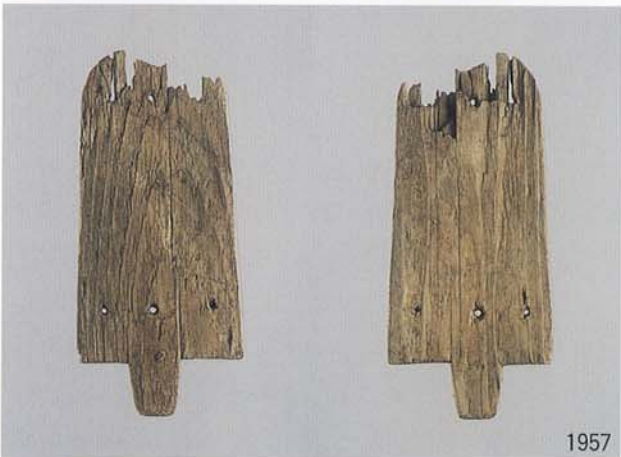
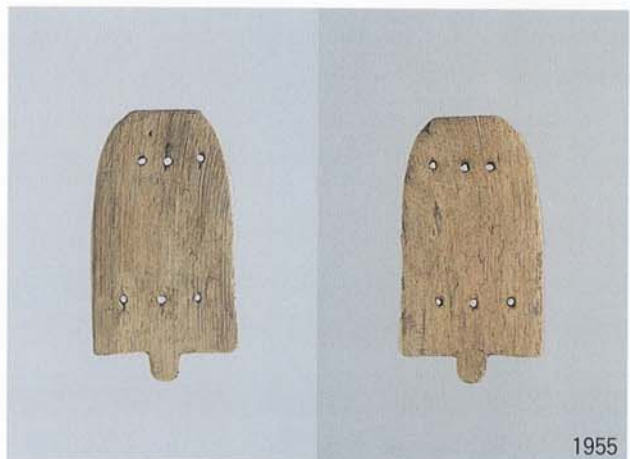
1869

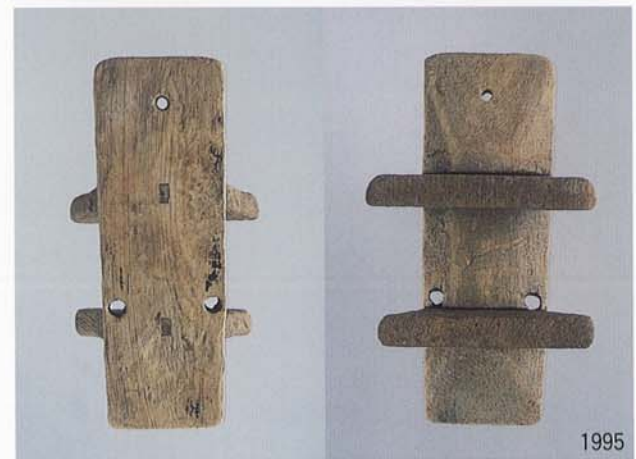
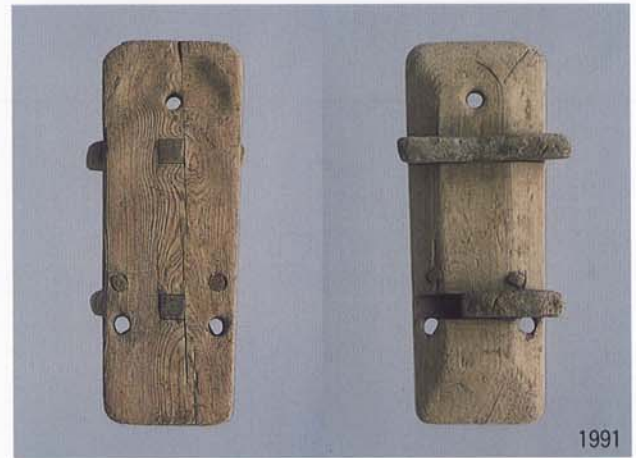
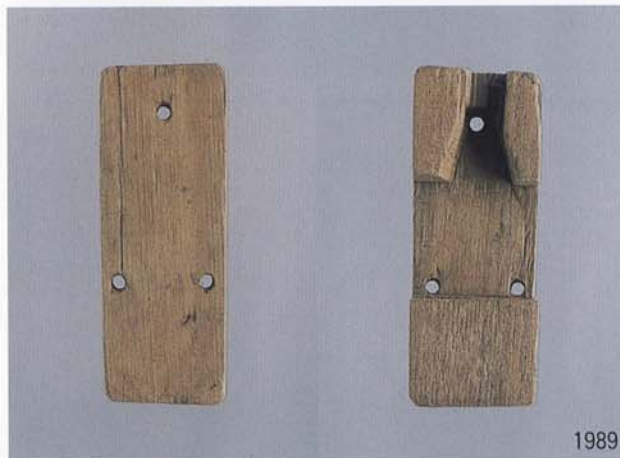
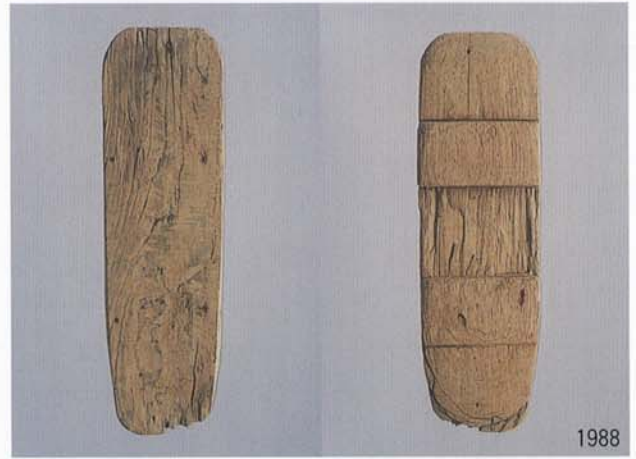
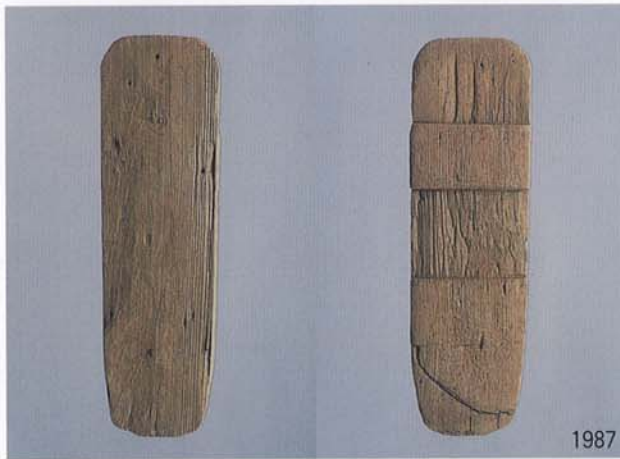
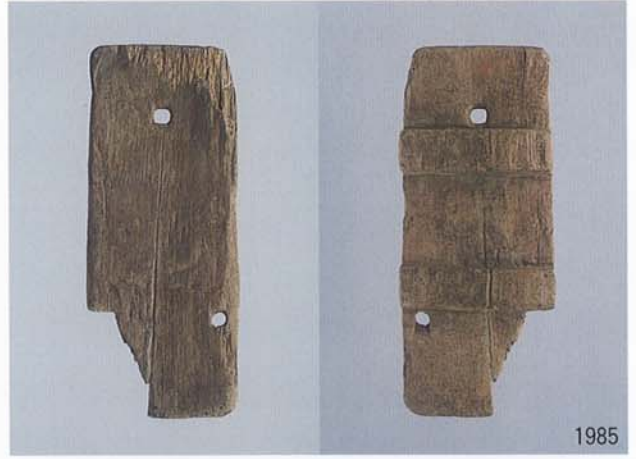
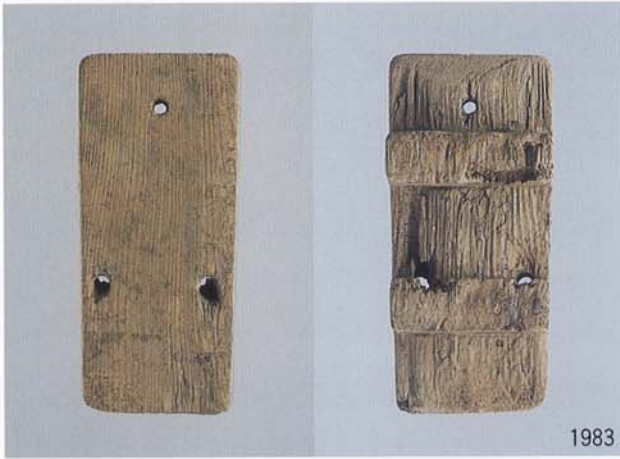
2 地区

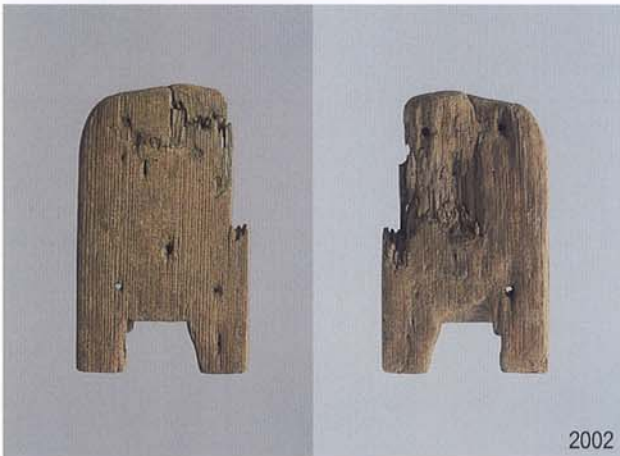
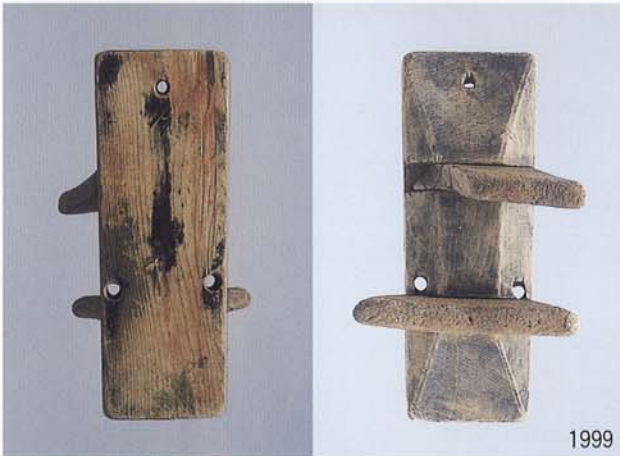
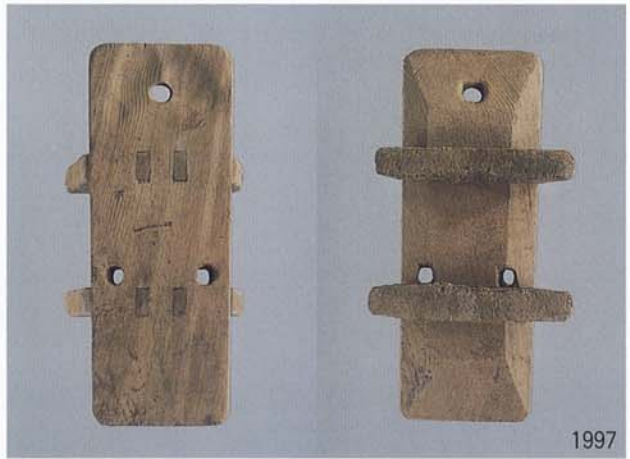
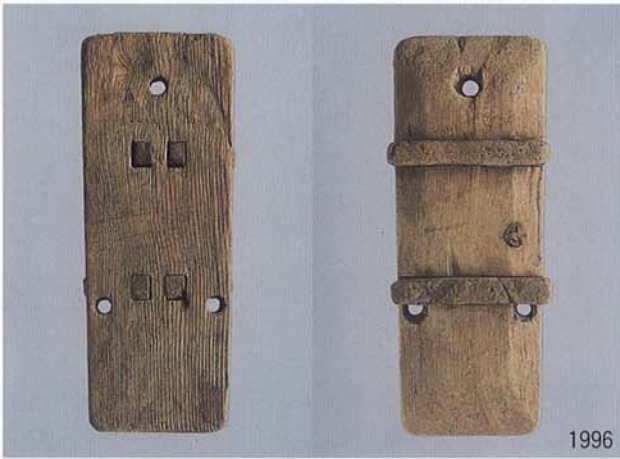
木製品 ⑨

図版156









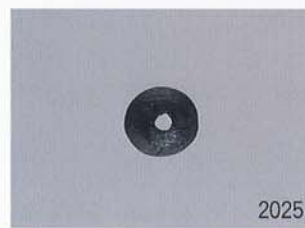
図版160



SK555



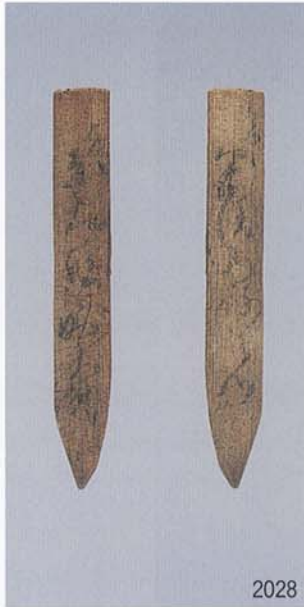
SK549



木製品 ⑭



2029



2028



2027



2026



2033



2032



2031



2030



2037



2036



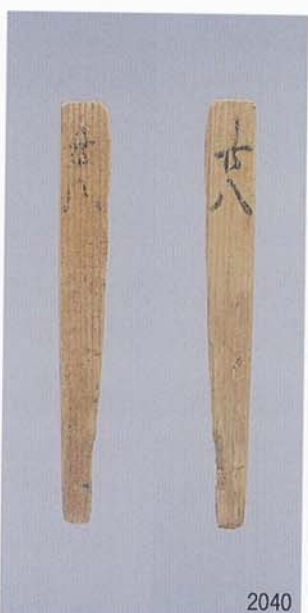
2035



2034



2041



2040



2039



2038



2045



2044



2043



2042



2049



2048



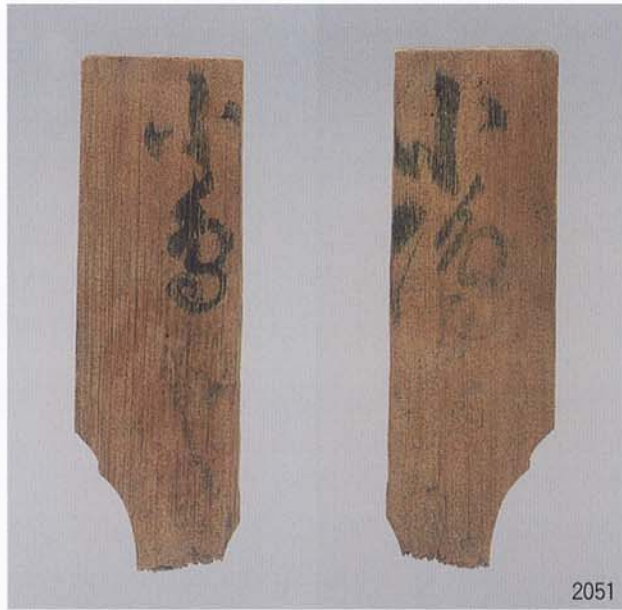
2047



2046



2052



2051



2050



2056



2055



2054



2053



2062



2061



2060



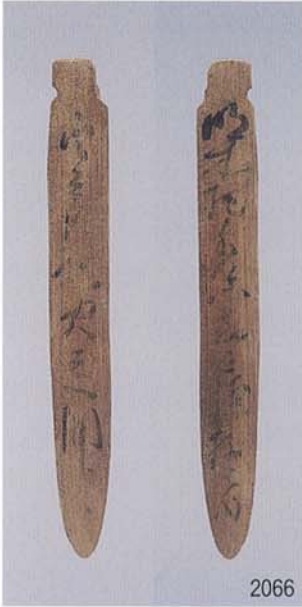
2059



2058



2057





図版166

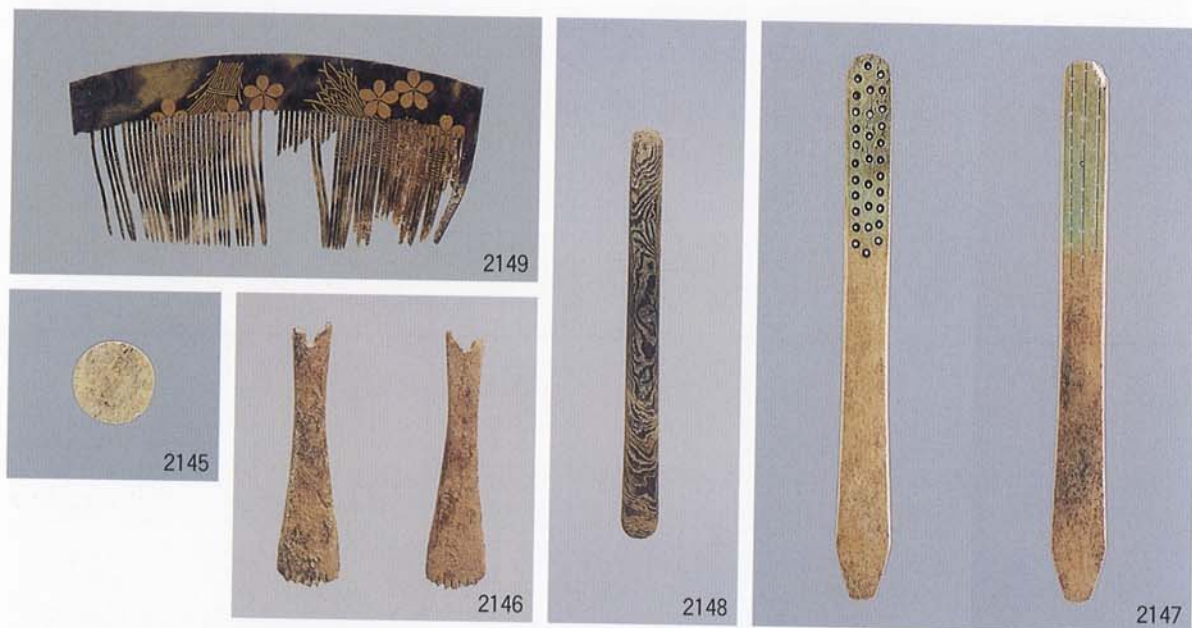




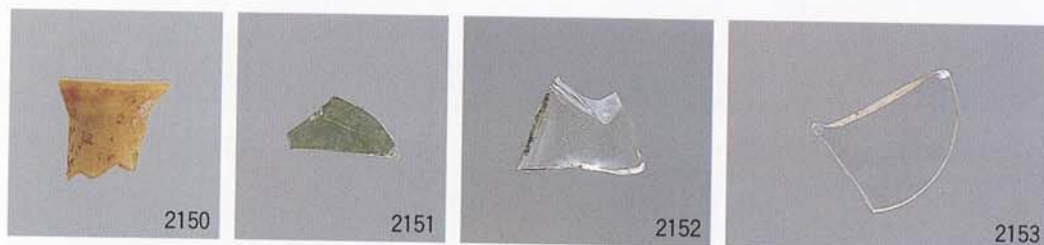
図版168



金属製品 ④



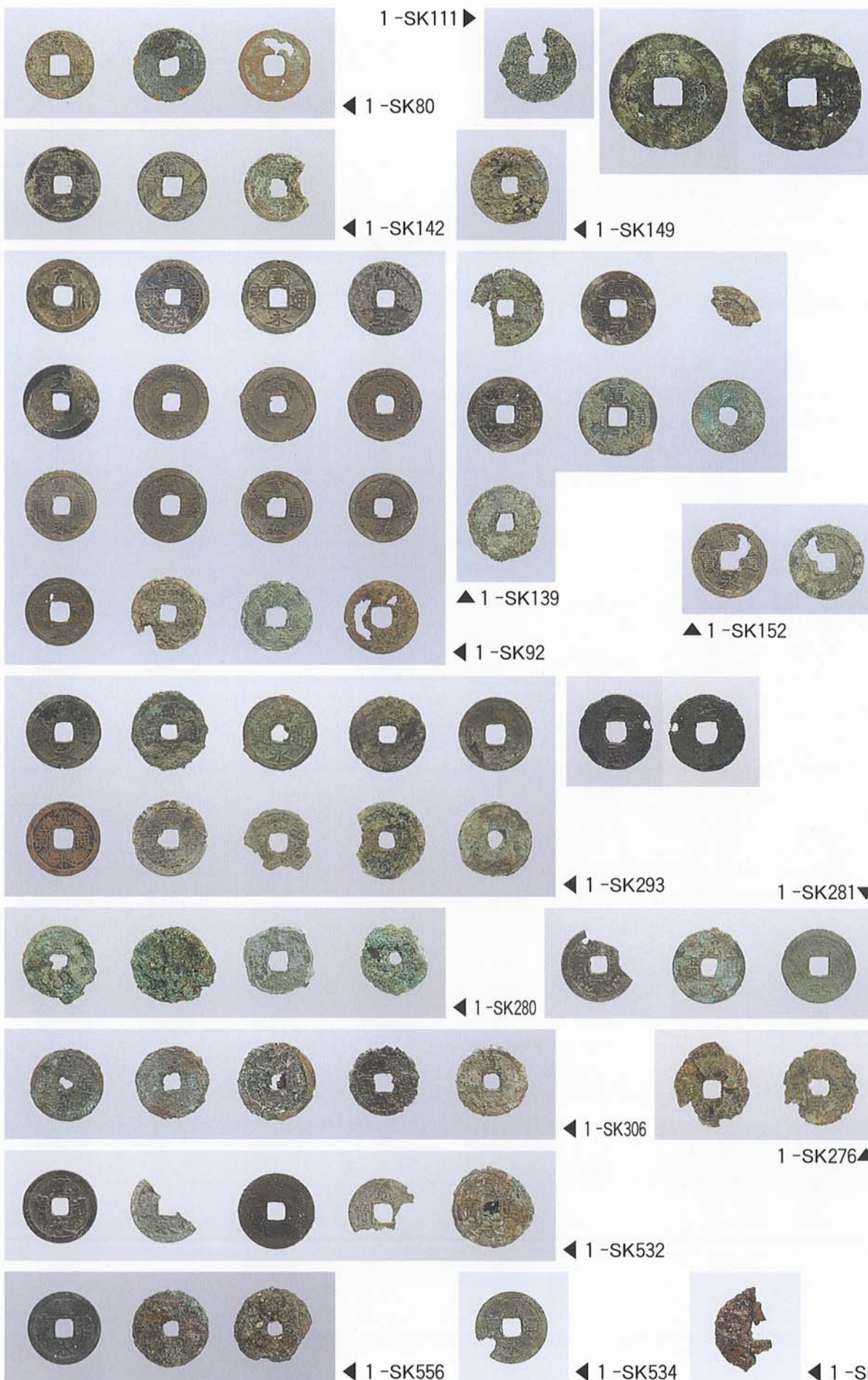
骨角製品



ガラス製品



基石



1-SK111▶

◀ 1-SK80

◀ 1-SK142

◀ 1-SK149

▲ 1-SK139

▲ 1-SK152

◀ 1-SK92

◀ 1-SK293

1-SK281▼

◀ 1-SK280

◀ 1-SK306

1-SK276▲

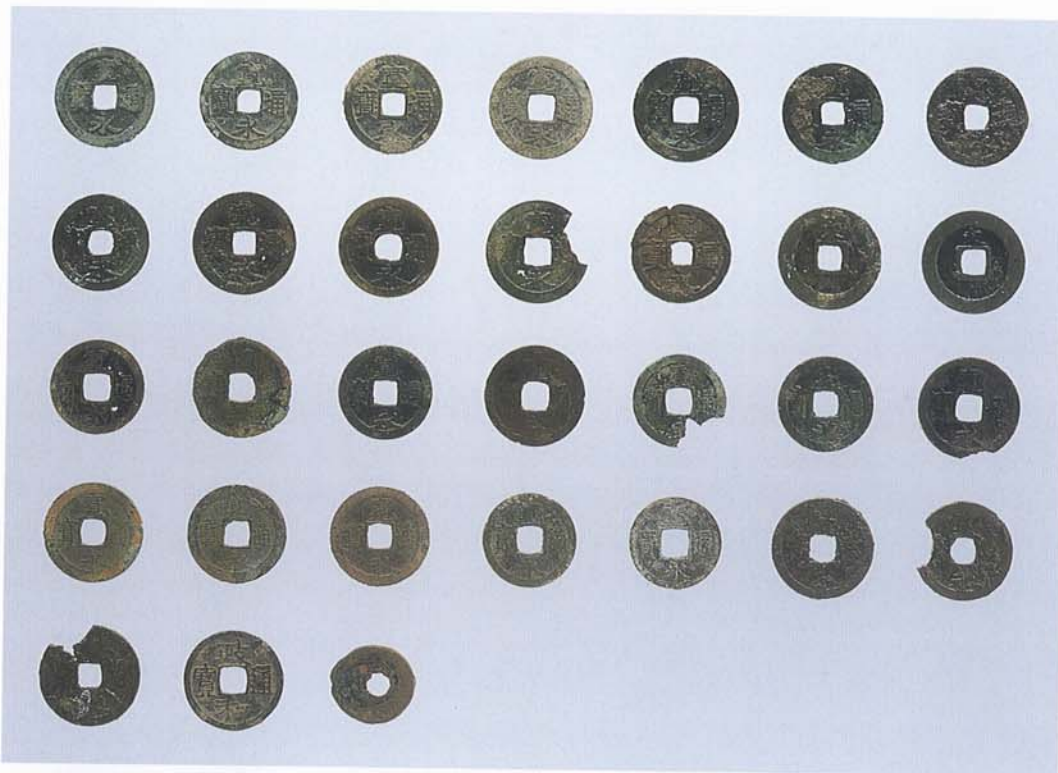
◀ 1-SK532

◀ 1-SK556

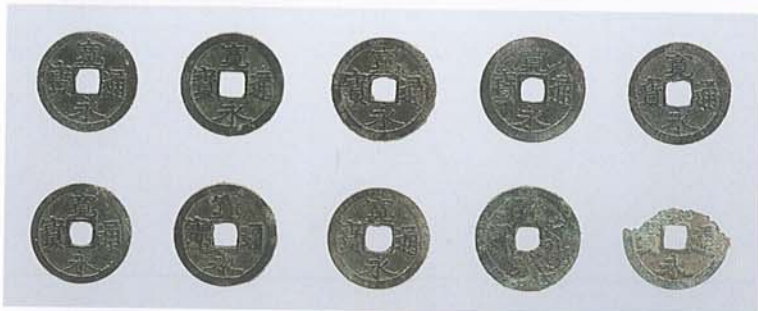
◀ 1-SK534

◀ 1-SK516

出土銭①



◀ 2-SX46



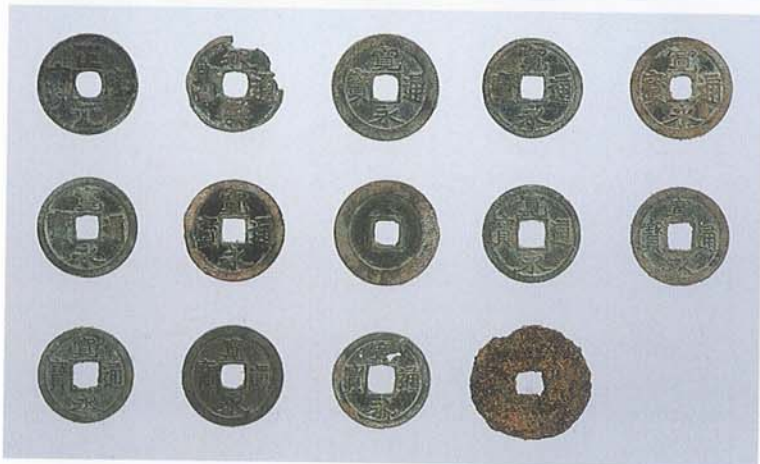
◀ 2-SK79



2-SX47▲



◀ 2-SK72



◀ 1 地区北端区



▲ 3-かまど84



◀ 3-SK136

報 告 書 抄 録

ふりがな	はぎじょうせき (そとほりちく) いち
書名	萩城跡 (外堀地区) I
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第27集
編著者名	谷口哲一 井川隆司 内富徳哉
編集機関	財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3番22号 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2002年3月27日 (平成14年3月27日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はぎじょうせき 萩城跡 そとほりちく (外堀地区)	はぎし 萩市 きたかたかわまち 北片河町 みなみかたかわまち 南片河町	35204		34°24'36"	131°23'40"	19970519~19980123	5,800	道路建設
				}	}	19980511~19990303		
				34°24'47"	131°23'43"	19990507~20000215		
						20000510~20010321		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
萩城跡 (外堀地区)	城下町 町屋	江戸	町屋敷地跡 礎石立ち建物 石垣・石列 多数 建物基礎 3 井戸 41 土坑 140 埋甕・埋鉢 66 かまど 23 胞衣埋納遺構 20 排水溝 8 石囲い遺構・石積み遺構 10 埋葬遺構 1 不明遺構 14 地下室 2	近世国産陶磁器 輸入陶磁器 土器(土師器、瓦質土器) 土製品 木製品 金属製品 石製品 銭貨 ガラス製品 骨角製品 自然遺物	萩城外堀を埋めて形成された町屋跡の調査

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第27集

萩城跡（外堀地区）Ⅰ

2002年3月

編集・発行 財団法人山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口市春日町3番22号

印刷 泉菊印刷株式会社